筑紫野市岡田土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査

岡田地区遺跡群Ⅱ

～Ⅰ区の調査～

筑紫野市文化財調査報告書

第 56 集

1998

筑紫野市教育委員会

岡田地区遺跡群Ⅱ

～Ⅰ区の調査～

官道周辺斜め写真（東方を望む）（一部）

序

東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野を持つ当市は、太古の昔より交通の要衝として栄えてまいりました。市の北部は「此府人物殷繁、天下之一都会也」と称された大宰府条坊の一部であったようで、今回の調査でみつかった官道はその大宰府から豊後（大分）方面に通じるルートであると考えられており、太宰府周辺域の古代史を知るうえでとても重要な成果となりました。この他の調査でも大宰府から米ノ山峠を抜け豊前方面に通じるルートの最初の駅で、万葉集で詠まれた蘆城駅家跡と推定されるものも発見されております。また江戸時代には、長崎街道・日田街道・薩摩街道が通り、筑前六宿に数えられる原田宿・山家宿がありました。山家宿は構口や郡屋土蔵など当時のものが残っており、シーボルトやケンペルなどもこの地を訪れております。

市域には各時代のさまざまな遺跡が静かに眠っています。それは長い間かかって蓄えられてきた先人たちの時代を生きた証しです。過去から連綿と続く人間の営みは、現代に生きる私たちもまたこれを受け継いでおり、この大地の上に、私たちの日々のくらしが営まれているのです。そしてこれは後世の子孫たちに語り伝えていくべき文化であると確信しております。それはさまざまな社会的な矛盾にまみれながら今日に生き、まもなく21世紀を迎えようとしている私たちにとって、地域社会や各々の人間性を見直していく上で確かな指針となっていくことでしょう。

しかしながら、8万数千余の人口を抱える本市における「開発」は加速度的に進み、市政の発展とひきかえに、数多くの遺跡が本来の姿を失っている現状があり、今後さらにその「保護」ならびに環境への「融和」を図っていかなければならないと考えております。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただきました方々、ご協力を賜りました地元岡田地区の住民の皆様方をはじめとする関係各位の方々に心よりお礼申し上げるとともに、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深めるご縁ともなれば幸いに存する次第でございます。

平成10年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕　正敏

例　言

1．本書は、筑紫野市教育委員会が平成6年度から9年度にかけて実施した「筑紫野市岡田土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、平成7年度に区画整理事業東側隣接地の調査を行っており既に報告済みであるため、本報告書は『岡田地区遺跡群Ⅱ』とした。

2．現地における発掘調査は、工事工程にあわせて30調査区に分割して行ったが、遺跡が広範囲にわたっている都合上、官道とそれに関連するものをⅠ区とし、その他のものをⅡ区とした（Fig.3）。本書は、このうちⅠ区の調査成果を掲載している。

3．発掘に係る主要な遺構実測は小鹿野亮が行い、渡邊和子の協力を得た。その他については、東亜建設技術㈱（〔現場代理人〕白水寿一）・大成ジオテック㈱（〔現場代理人〕山中英美）・国際航業㈱（〔現場代理人〕嶋田茂樹）に委託して写真測量を行った。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は小鹿野が行い、空中写真は㈲空中写真企画（壇睦夫）、遺物写真はフォトハウスOKA（岡紀久夫）に委託した。

5．本書に掲載した遺物実測ならびに挿図の浄書は㈲埋蔵文化財サポートシステム（〔実測〕福田京子・光石逸子・野田典子・堤圭子・丹生英里・本山千絵、〔浄書〕丹生英里・日置正香）に委託した。このうち、主要な土器・陶磁器類と鉄器については小鹿野が行い、石器については渡邊が行った。

6．本書に掲載した墨書土器の赤外線写真は、㈲埋蔵文化財サポートシステム（松尾直子）・フォトハウスOKA・小鹿野によりそれぞれ3回の撮影を行ったもののうち、最良のものを選んで使用した。

7．第Ⅳ章－1に掲載した土壌分析のうち、粒度測定は予備調査として小鹿野が行い、組成分析とX線回折分析は㈶九州環境管理協会（松岡信明・柳健太郎）に委託した。

8．第Ⅳ章－2の赤色顔料の分析は、別府大学文学部 本田光子氏に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。

9．遺物の復元および整理作業などについては、浅谷芳江・加藤美智子・加藤明子・北野正子・宗和代・田中紘子・高木保子・鶴浄美・松石かおる・松尾敦子・百田愛子・山内妙子が行った。

10．調査によって得られた資料および図版などは、筑紫野市教育委員会が保管している。

11．本書の編集ならびに執筆は、小鹿野が行った。なお、編集については渡邊との協議のもとに行った。

目　　次

本　　文

	頁
Ⅰ　調査に至る経過	1
Ⅱ　周辺の地理的・歴史的環境	3
Ⅲ　調査の概要	7
1 柵(SA)	9
2 掘立柱建物(SB)	11
3 竪穴住居(SC)	24
4 溝(SD)	42
5 井戸(SE)	73
6 道路(SF)	77
7 土坑(SK)	81
8 墓(ST)	127
9 性格不明遺構(SX)	134
10ピット(Pit)	139
11整地層など	145
Ⅳ　分析	147
1 SD120床面および官道の硬化土壌の分析について	147
2 土師器に付着した赤色物について	160
Ⅴ　まとめ	161
1 岡田周辺の官道について	161
2 波板状圧痕について	163
3 地割の設計について	166
4 墨書土器の文字について	172
5 岡田地区遺跡群を読む	182

挿　　図(Fig.)

Fig. 1	岡田地区遺跡群位置図(S1/50,000)	4
Fig. 2	岡田地区遺跡群周辺図(S1/25,000)	5
Fig. 3	岡田地区遺跡群調査区区分図 (S1/4,000)	8
Fig. 4	SA1・2実測図(S1/80)	9
Fig. 5	SA3～6実測図(S1/60)	10
Fig. 6	掘立柱建物の梁･桁の相関	11
Fig. 7	建床面積の頻度	11
Fig. 8	AブロックSB1～5	13
Fig. 9	SB1出土遺物(S2/3)	13
Fig.10	Aブロックロの字型配置建物(SB1～4)	【折込み】
Fig.11	AブロックSB6～9,20	14
Fig.12	BブロックSB10～14	15
Fig.13	BブロックSB15～19	16
Fig.14	CブロックSB22～27	17
Fig.15	CブロックSB28～33	18
Fig.16	DブロックSB34～39	19
Fig.17	DブロックSB40,41　EブロックSB45～49	20
Fig.18	その他SB42～44	21
Fig.19	SC1実測図(S1/60)	25
Fig.20	SC1カマド実測図(S1/20)	25
Fig.21	SC2実測図(S1/60)	26
Fig.22	SC2出土遺物(S1/3,2/3)	26
Fig.23	SC3実測図(S1/60)	27
Fig.24	SC3カマド実測図(S1/20)	28
Fig.25	SC3出土遺物(S1/3)	28
Fig.26	SC4実測図(S1/60)	29
Fig.27	SC4出土遺物(S1/3,2/3)	30
Fig.28	SC6実測図(S1/60)	31
Fig.29	SC7実測図(S1/60)	31
Fig.30	SC9実測図(S1/60)	32
Fig.31	SC9カマド実測図(S1/20)	33
Fig.32	SC9カマド左側土坑実測図(S1/30)	34
Fig.33	SC10実測図(S1/60)	35
Fig.34	SC12実測図(S1/60)	35
Fig.35	SC9出土遺物その1(S1/3)	36
Fig.36	SC9出土遺物その2(S1/3)	37
Fig.37	SC9出土遺物その3(S1/3)	38
Fig.38	SC14,15実測図(S1/60)	39
Fig.39	SC14出土遺物その1(S1/3)	40
Fig.40	SC14出土遺物その2(S1/3,2/3)	41
Fig.41	SD1土層図(B-B')(S1/40)	42
Fig.42	SD1土層図(C-C',D-D',E-E')(S1/30)	43
Fig.43	SD1出土遺物その1(S1/3)	44
Fig.44	SD1出土遺物その2(S1/3)	45
Fig.45	SD1出土遺物その3(S2/3)	46
Fig.46	SD4土層図(F-F')(S1/20)	47
Fig.47	SD4出土遺物(S1/3,2/3)	48

		頁
Fig.48	SD5出土遺物(S1/3)	49
Fig.49	SD3,6,7,9,22,23,33出土遺物(S1/3,2/3,1/1)	50
Fig.50	SD47出土遺物(S1/3)	52
Fig.51	SD50土層図(H-H')(S1/40)	53
Fig.52	SD50土層図(G-G')(S1/60)	【折込み】
Fig.53	SD50出土遺物その1(S1/3)	56
Fig.54	SD50出土遺物その2(S1/3)	57
Fig.55	SD50出土遺物その3(S1/3,2/3)	58
Fig.56	SD50出土遺物その4(S1/3,2/3)	59
Fig.57	SD50出土遺物その5(S1/6)	60
Fig.58	SD51土層図(I-I')(S1/60)	61
Fig.59	SD71土層図(J-J',K-K')(S1/30)	62
Fig.60	SD65,66,70,72,83,88,89,97,121,138出土遺物(S1/3,2/3,1/1)	64
Fig.61	SD118出土遺物(S2/3)	65
Fig.62	SD120土層図(L-L')(S1/40)	66
Fig.63	SD120出土遺物その1(S1/3)	68
Fig.64	SD120出土遺物その2(S1/3)	69
Fig.65	SD120出土遺物その3(S1/4,1/3,2/3)	70
Fig.66	SD120出土遺物その4(S1/4)	71
Fig.67	SD147出土遺物(S2/3)	72
Fig.68	SE1,2出土遺物(S1/3,2/3)	73
Fig.69	SE1,2実測図(S1/40)	74
Fig.70	SE3,4実測図(S1/60)	75
Fig.71	SE4出土遺物(S1/3)	76
Fig.72	官道調査区東側土層図(A-A')(S1/40)	【折込み】
Fig.73	官道調査区西側土層図(M-M')(S1/40)	【折込み】
Fig.74	波板状圧痕４土層図(S1/30)	78
Fig.75	波板状圧痕1,2実測図(S1/60)	79
Fig.76	波板状圧痕3,4実測図(1/40,1/80)	80
Fig.77	SK4,5実測図(S1/80)	81
Fig.78	SK4出土遺物その1(S1/3)	82
Fig.79	SK4出土遺物その2(S1/3)	83
Fig.80	SK5出土遺物その1(S1/3)	85
Fig.81	SK5出土遺物その2(S1/3)	86
Fig.82	SK6実測図(S1/80)	86
Fig.83	SK6出土遺物(S1/3)	87
Fig.84	SK9,13,14実測図(S1/60)	88
Fig.85	SK9出土遺物(S1/3)	89
Fig.86	SK13出土遺物(S1/3,2/3)	90
Fig.87	SK14出土遺物(S1/3)	91
Fig.88	SK16実測図(S1/80)	92
Fig.89	SK16出土遺物(S1/3)	94
Fig.90	SK17,18,20,24,32,55,56実測図(S1/60)	95
Fig.91	SK28実測図(S1/60)	96
Fig.92	SK28出土遺物(S1/3)	97
Fig.93	SK40実測図(S1/60)	98
Fig.94	SK40出土遺物(S1/3,2/3)	98
Fig.95	SK44,48～50,53,54実測図(S1/60)	99
Fig.96	SK44,50,53出土遺物(S1/3,2/3)	101
Fig.97	SK59～62,67実測図(S1/40,1/60)	104
Fig.98	SK46,59～62出土遺物(S1/3,2/3,1/1)	105
Fig.99	SK68,70～74実測図(S1/60)	108
Fig.100	SK68,70～74出土遺物(S1/3,2/3)	109
Fig.101	SK75,76,79,80,82,94,95,103実測図(S1/60, 1/30)	112
Fig.102	SK75,76,79,80,82,95,103出土遺物(S1/3,2/3)	113
Fig.103	SK99実測図(S1/60)	114
Fig.104	SK99出土遺物(S1/3)	114
Fig.105	SK104,109,117出土遺物(S1/3)	115
Fig.106	SK104,105,108,109,115,117,123実測図(S1/60)	116
Fig.107	SK124～127実測図(S1/60)	117
Fig.108	SK115,123,124,126出土遺物(S1/3,2/3)	119
Fig.109	SK126出土遺物(S1/3)	120
Fig.110	SK132,133,137,148,150,230,231,245実測図(S1/60,１/80)	121
Fig.111	SK133,137,148出土遺物(S1/3)	123
Fig.112	SK113,144実測図(S1/60)	124
Fig.113	SK113,144出土遺物(S1/3,2/3)	125
Fig.114	ST1,2出土遺物(S1/3)	127
Fig.115	ST1,2実測図(S1/20)	128
Fig.116	ST2出土遺物(S2/3)	130
Fig.117	ST3実測図(S1/20)	131
Fig.118	ST5出土遺物(S1/3)	131
Fig.119	ST3出土遺物(S1/3,2/3)	132
Fig.120	ST4～6実測図(S1/20)	133
Fig.121	SX1実測図(S1/80)	134

頁
Fig.122　SX2実測図(S1/80)　135
Fig.123　SX3,4,10実測図(S1/40)　136
Fig.124　SX4,5出土遺物(S1/3,2/3)　137
Fig.125　SX11実測図(S1/40)　137
Fig.126　SX5～9実測図(S1/40)　138
Fig.127　Pit出土遺物その1(S1/3)　140
Fig.128　Pit出土遺物その2(S1/3,2/3)　142
Fig.129　Pit出土遺物その3(S2/3)　144
Fig.130　Pit出土遺物その4(S1/1)　144
Fig.131　SD50第2層(整地層)出土遺物(S1/3,2/3)　145
Fig.132　官道検出面表採遺物(S1/3)　146
Fig.133　拡張区西側段落ち出土遺物(S1/2)　146
Fig.134　SD120床面土壌採取トレンチ位置図　147
Fig.135　SD120床面採取土壌粒度測定結果　148
Fig.136　SD120床面採取土壌組成分析結果　149
Fig.137　波板状圧痕4付近土壌採取トレンチ位置図　153
Fig.138　X線回折強度相関その1　157
Fig.139　X線回折強度相関その2　158
Fig.140　X線回折強度相関その3　159
Fig.141　官道の調査範囲と推定路線　162
Fig.142　地割模式図　167
Fig.143　岡田周辺景観概念図(S1/2,000)
Fig.144　岡田地区現況測量図(平成4年)(S1/2,000)　168
Fig.145　墨書土器出土遺構概念図　177

付図

付図1　遺構配置図(全体図)(S1/500)
付図2　遺構配置図その1(S1/200)
付図3　遺構配置図その2(S1/200)
付図4　遺構配置図その3(S1/200)
付図5　遺構配置図その4(S1/200)
付図6　遺構配置図その5(S1/200)
付図7　遺構配置図その6(拡張区)(S1/200)

頁

表(Tab.)

Tab.1　掘立柱建物座標値一覧表1　21
Tab.2　掘立柱建物座標値一覧表2　22
Tab.3　掘立柱建物座標値一覧表3　23
Tab.4　その他の土坑計測表　126
Tab.5　ＳＴ2から出土した釘の計測表　129
Tab.6　ＳＴ3から出土した釘の計測表　131
Tab.7　地山組成分析結果　153
Tab.8　検出遺構任意の点座標値1　170
Tab.9　検出遺構任意の点座標値2　171
Tab.10　墨書文字分類表1(S1/1)　174
Tab.11　墨書文字分類表2(S1/1)　175
Tab.12　墨書土器一覧表1　179
Tab.13　墨書土器一覧表2　180
Tab.14　墨書土器一覧表3　181

図版(PL.)

PL.1　官道の斜め写真(東方を望む)(一部)　【巻頭カラー】
PL.2　岡田周辺航空写真(撮影：大成ジオテック)平成8年10月【カラー】
PL.3　白磁合子・褐釉水注(SK28)　【カラー】
PL.4　掘立柱建物(SB)群
PL.5,6　竪穴住居(SC)
PL.7　SD1
PL.8　SD1,4,5
PL.9　SD50
PL.10　SD120
PL.11　井戸(SE)
PL.12　官道の地業痕跡
PL.13,14　土坑(SK)
PL.15　墓(ST)
PL.16　性格不明遺構(SX)
PL.17～40　遺物写真(1)～(24)
PL.41　石製品写真
PL.42～44　鉄製品写真(1)～(3)
PL.45～49　墨書文字写真(1)～(5)

凡　　例

1．本書で使用される遺構の略号は、柵をSA・掘立柱建物をSB・竪穴住居をSC・溝をSD・井戸をSE・道路をSF・土坑をSK・墓をST・性格不明遺構をSX・ピットをPitとし、各遺構ごとに1から番号を付した。

2．遺物の番号については、1から690番までの通し番号をアラビア数字で表記した。挿図(Fig.)と図版(PL.)の遺物番号は同一である。また、墨書土器の番号については、墨書土器一覧表(Tab.12～14)の番号を丸数字で表記した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。

3．本書で使用する面積は、全てプラニメーターによる5回計測の平均値である。

4．本書に使用した方位は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。従って図中の方位は特に注記のない限り座標北(G.N.)を示している。なお本遺跡の場合は、官道に対して地割が斜行している都合上、掘立柱建物や地割など本文の説明で用いる方位については、実際の方位に近い方位でよぶことにした。

5．巻末に掲載される参考史料は、『古事類苑』封禄部の「傔仗」に関する該当記事を参考にして作成したものである。このうちの各史料の番号は、各行の冒頭に通し番号で付した。本書中で使用される文献No.はこの番号を示している。また、それ以外の関連史料については、次の文献を参考にして検索し追加した。

星野聰・村尾義和編『続日本紀総索引』高科書店　1993年
亀田隆之・中西康裕・安田政彦編『令義解総索引』高科書店　1991年
米田雄介編『類聚三代格総索引』高科書店　1991年
阿部猛編『日本古代官職辞典』高科書店　1995年

6．本書に掲載される遺物の説明に際しては、次の文献を参考にした。

土師器・須恵器など

柳田康雄「土師器の編年　1九州」『古墳時代の研究』6　雄山閣出版　1991年
橋口達也「似非土師須恵器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ生産と流通の考古学』1989年
太宰府市教育委員会「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』1983年
〃　　　　「遺物各説」『宮の本遺跡Ⅱ』太宰府市の文化財第10集　1992年
山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集　1990年
中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　1992年
中島恒次郎「都へ行った土器」『古文化談叢』第28集　1992年

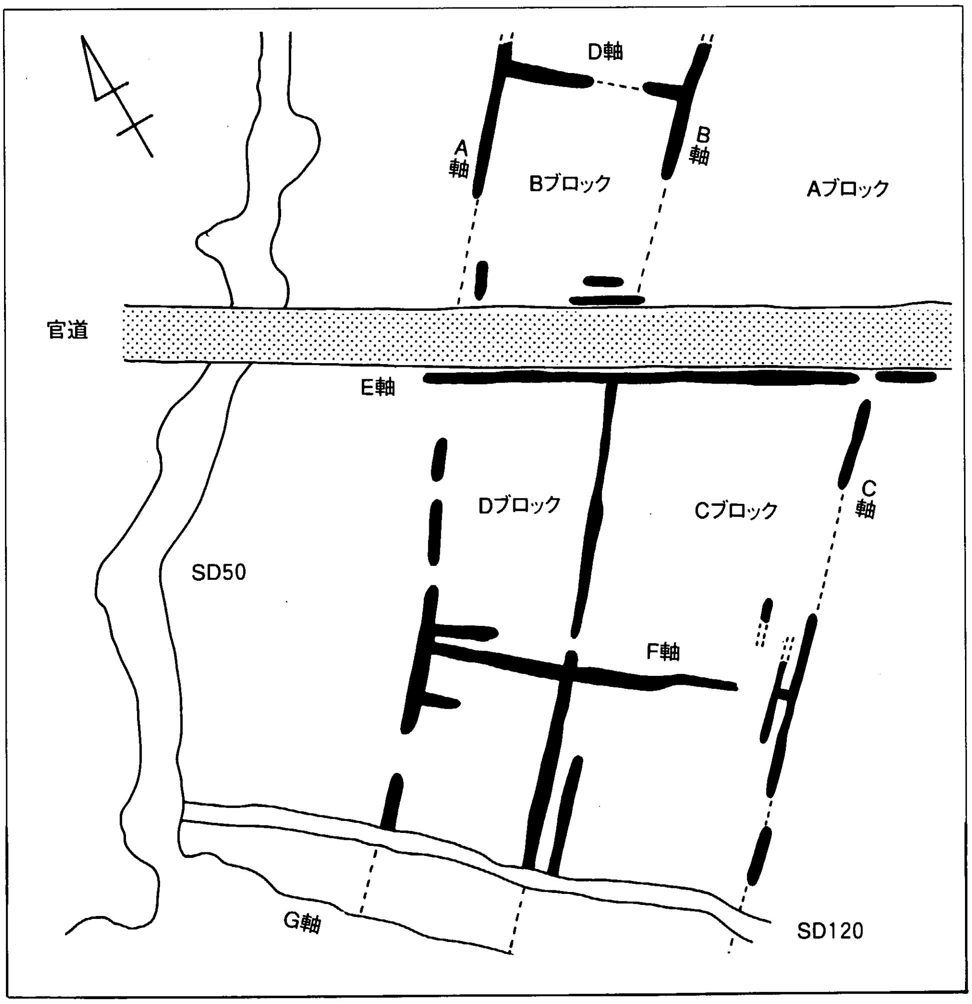
陶磁器

太宰府市教育委員会「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』1983年

7．本書中で示す土層や遺物の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帳(Revised Standard Soil Coler Charts)』を基準とした。

8．今回の調査では、掘立柱建物群のエリアは、柵列群によって明確に分割されて検出されている。このため本書における同時代の遺構の説明は、混乱を避けるためにそのブロックごとに行うこととした。

それぞれは、次のとおりの名称を用いている。



Ⅰ　調査に至る経過

福岡都市圏の南部に位置する筑紫野市は、博多の奥座敷である温泉街や近隣市町村を商圏域とする商店街を形成し、周辺の森林田園地帯と共存した閑静な街として推移してきた。しかし、昭和40年代以降のモータリゼーションの進展と交通網の整備と相まって福岡市のベットタウンとしての脚光をあび、近年では小郡・筑紫野ニュータウン建設のような大規模開発がいたるところで展開され、急速に住宅都市として変貌しつつある。

交通至便な当地区もやがては市街化の波が押し寄せてくることが予測されており、岡田土地区画整理事業計画（施行面積39.6ha）の具体化へ向けて、平成4年5月に設立準備委員会が発足した。これに伴い、同年10月9日付けで筑紫野市区画整理課から筑紫野市教育委員会に対して、筑紫野市岡田土地区画整理事業施行に伴う埋蔵文化財の有無についての照会があった。

市教育委員会が現地を踏査したところ、区画整理事業地には埋蔵文化財が包蔵されている可能性が想定されたため、確認調査を行う必要がある旨の回答を行った。その後、平成6年1月に土地区画整理組合の設立が認可され、事業地内に所在すると考えられる埋蔵文化財の保存についての具体的な協議に入るとともに、その所在ならびに範囲を確認するために確認調査を実施した。確認調査は同年3月から5月にかけて未承諾地を除く47ヶ所にトレンチを設定して行った。この結果、奈良時代～中世にかけての遺跡が事業地の広範囲(17.1ha)にわたって確認された。これを受けて土地区画整理組合・関係各課との協議を進めた結果、公園および緑地帯（4.4ha）を除く範囲については、記録保存のための発掘調査に早期着手することで合意に達した。同年4月11日に「岡田土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査委託契約書」ならびに「岡田土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査協定書」を締結し、発掘調査を開始することとなった。

ところが、平成6年10月にJR筑豊本線沿いの調査に入ったところ、岡田地区を北西から南東方向に直進する2条の溝が検出され、これが官道の側溝であるということが判明した。確認調査のときから数条の溝が並行して走っていることは確認されていたので予測はしていたものの、検出された官道が既存集落を横切って走っていたことや事業地内に未承諾地が点在していたことなどの悪条件が重なってしまったため、その後の発掘調査に大きな影響を及ぼすこととなった。このことを受けて、調査期間ならびに費用の問題についての再考を余儀なくされ、再三に渡り協議を行った。市教育委員会としては遺跡範囲については全面調査が必要であることと未承諾地に係る発掘調査の早期着手を前提として協議を進めた。この結果、工事工程との調整を充分に図り期間短縮に努めること、また未承諾地・存地住宅については随時確認調査を実施していくことで理事会の了承を得た。

現地における発掘調査は、平成6年7月5日から平成9年6月30日までの3ヶ年実施し、同年7月から平成10年2月までの8ヶ月間を報告書作成に充てた。発掘調査実施面積は11.8haである。現地換地の宅地については、地権者のご理解をいただき確認調査を随時行うことができたので、事業地内の埋蔵文化財の保存措置はすべて完了することができた。また、今回の調査でみつかった官道は豊後方面へのルートと考えられており、検出事例としては初見であったことなどから、平成6年12月26日に新聞発表を、さらに翌年1月8日には地元を中心に現場説明会を行った。新年早々にも関わらず約250人もの方々のご参集を得ることができた。

なお、調査に係る組織は次に示すとおりである。

（筑紫野市岡田土地区画整理組合）

（理事会）

総　括	理事長	平城　章	
	副理事長	岡島　勝實	
総　務	理　事	久保　徳松	
	〃	岡島　章	
	〃	菅原　滋	
換地補償	〃	富永　義春	
	〃	波賀　典紀	
	〃	杉山　正夫	
工　事	〃	岡島和志生	
	〃	波賀　仁司	（平成6年度～平成7.6.12）
	〃	南嶋　久義	（平成7.6.13～）
	〃	岡部隆太郎	

（事務局）

	局　長	吉田　稔
	次　長	鬼木　正巳
総　務		中川　勝雄
		蒲原　泰子
換地補償（平成6年度～平成9年9月）		早川　清輝
工　事（平成6年度～平成7年度）		桜木　立美
（平成8年度～平成9年度）		松本　信一

（筑紫野市教育委員会）

総　括	教育長	永渕　正敏
	教育部長	永田　晋一
	社会教育課長	岡部　隆充
庶　務	文化財担当係長（～平成7年度）	森実　秀美
	課長補佐兼文化財担当係長（平成8年度～）	古賀　幸信
	臨時職員	中富貴代美
	臨時職員	柴田　数子
	技　師	小鹿野　亮
担　当	技　師	小鹿野　亮
	技師補（平成7年4月～10月）	吉田　高穂
発掘調査	技　師	小鹿野　亮
	技　師（平成6～8年度応援）	渡邊　和子
整　理	技　師	小鹿野　亮

調査ならびに整理中には多くの方々からご指導を賜った。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

平野邦雄(横浜市立博物館長)，木下良（古代交通研究会会長），山中敏史（奈良国立文化財研究所），日野尚志（佐賀大学），本田光子（別府大学），金田章裕（京都大学），柴田博子（宮崎産業経営大学），高橋美久二（滋賀県立大学），木本雅康（長崎外国語短期大学），石松好雄・柳田康雄・橋口達也（福岡県教育庁文化課），馬田弘稔（福岡県教育庁北九州教育事務所），赤司善彦・杉原敏之（九州歴史資料館），狭川真一・中島恒次郎・山村信榮・井上信正・高橋学（太宰府市教育委員会），松川博一（財団法人 古都大宰府保存協会），石井扶美子（夜須町教育委員会），岡部裕俊・瓜生秀文（前原市教育委員会），小澤太郎（久留米市教育委員会），棚田昭仁（豊前市教育委員会），谷澤仁（佐賀県大和町教育委員会），渡部徹也（鹿児島県指宿市教育委員会），佐藤敏幸（宮城県矢本町教育委員会），前島秀張（静岡県埋蔵文化財調査研究所），佐口節司（静岡県磐田市教育委員会），冨田尚弘（滋賀県竜王町教育委員会）

この他、県文化課ならびに県内各市町村文化財担当の先輩諸氏に多大なるご指導をいただいた。

Ⅱ　周辺の地理的・歴史的環境

筑紫野市は福岡市から南東15kmに位置しており、面積は87.63㎢と広大で、その形は蝶が羽を広げた形にたとえられる。市域には国道3号線・JR鹿児島本線・九州縦貫自動車道・西鉄大牟田線といった南北九州を結ぶ基幹動脈が縦走し、また国道386号線・JR筑豊本線が市域の中央部より分岐するなど交通の要衝としての役割を担っている。

周辺の地形は、東から三郡山塊、西から背振山塊が迫り、その間を有明海に注ぐ筑後川の支流である宝満川や博多湾に注ぐ御笠川の支流である鷺田川などの河川により狭長な平野が形成される。この狭長な平野部北側の太宰府市には大宰府政庁が設置され、筑紫野市北部にかけて条坊制が敷かれたと考えられている。政庁の背後には大野城、博多湾側には水城、有明海側には基肄城が築かれている。かつて「遠の朝廷」と呼ばれたこの地域は、その地勢から九州北部沿岸部と内陸部とを結ぶもっとも平坦なルートであった。奈良時代には大宰府から放射状に官道が整備され、九州の各地域からのアクセスが可能であった。近年では、前田遺跡(註1)・大宰府条坊跡第99次調査(註2)（水城西門ルート）や筑後国府周辺の西海道、吉野ヶ里遺跡周辺の西海道肥前ルートなどをはじめとして各地で検出事例が増加している。また、江戸時代には長崎街道や日田街道・薩摩街道が通り、その街道筋には筑前六宿として原田宿・山家宿が整備されている。

岡田地区は筑紫野市の中心市街地から南東約4.5kmの夜須町との境に位置し、古代では御笠郡に属している。この付近は、東方の宮地岳（338.9m）から延びる丘陵と西方の永岡～常松付近より延びる舌状台地が最も狭まったところに立地し、宝満川は永岡付近で山口川と合流したのちに、その南方を迂回するように大きくその流れを変えている。岡田地区の南側の宝満川流域には沖積作用による低地が広がり、所々に島状の自然堤防を形成しており、現況での比高差は約1～2mである。また、周辺の常松～諸田付近には、所によっては2m以上にわたって砂礫層と青灰色シルトおよび泥炭土が互層をなし後背湿地となっている状況で(註3)、河川が氾濫を繰り返しその蛇行によって形成された地形であることが推察できる。また北側についてもほぼ同じ状況で、所々に落ち込み状の窪みがみられ、低湿地が広がっていたことが想定される。このことは、宝満川周辺の小字名に「川」に関連するものが多いことからも容易に推察できるのである。

宝満川流域には数々の遺跡が所在している。その東岸の宮地岳西側には弥生時代の阿志岐シメノグチ遺跡(註4)、さらに平野部まで下ると弥生時代後期から古墳時代の遺構や奈良時代の掘立柱建物が検出されている御笠地区遺跡がある。御笠地区遺跡の場合は、圃場整備事業に伴う部分的な調査であったためデータが限定されるが、A地区の調査においては8世紀中頃から後半にかけての掘立柱建物9棟が検出されている。このうちの一棟は孫廂付きの大型建物で、検出地点のホノケ(註5)が「カワゴデン」であることなどからも官衙的な施設であると考えられている(註6)。

南側には、最近では峰古野遺跡で5世紀代のものと考えられる竪穴系横口式石室を持つ円墳が調査されている(註7)。今回の調査でも5世紀後半を中心とする古墳時代の集落跡が確認されているし、また岡田地区遺跡群の北縁に所在する日焼遺跡(註8)でも同時代の竪穴住居跡が検出されており、その相関関係の解明が今後の課題である。

これに対して宝満川西岸は侵食によって細かく開折された舌状台地が八ツ手状に展開され、弥生時代中期を中心とした甕棺墓群である永岡遺跡(註9)、谷を隔てた南側には弥生時代中期初頭から

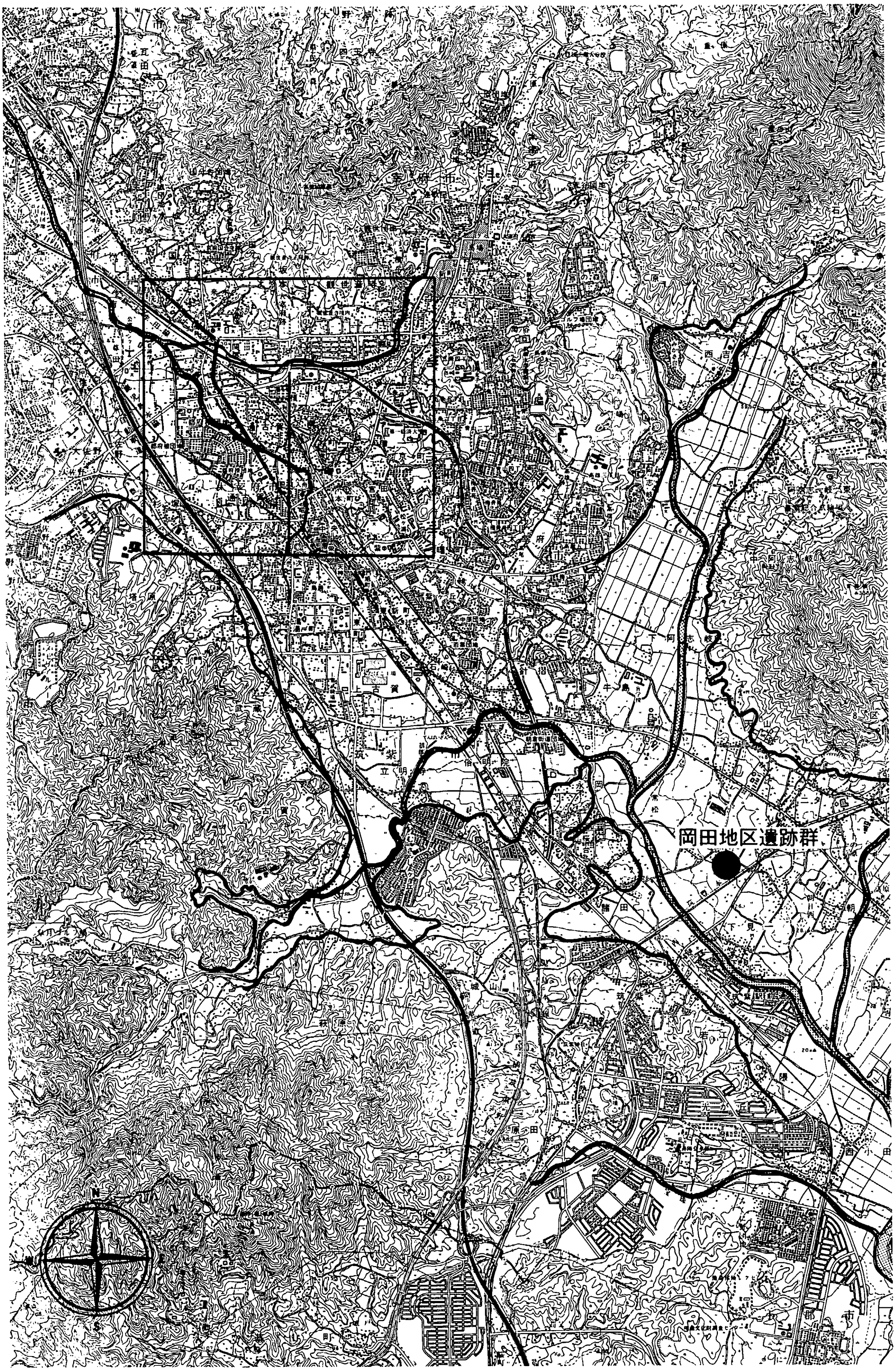


Fig. 1　岡田地区遺跡群位置図(S1/50,000)

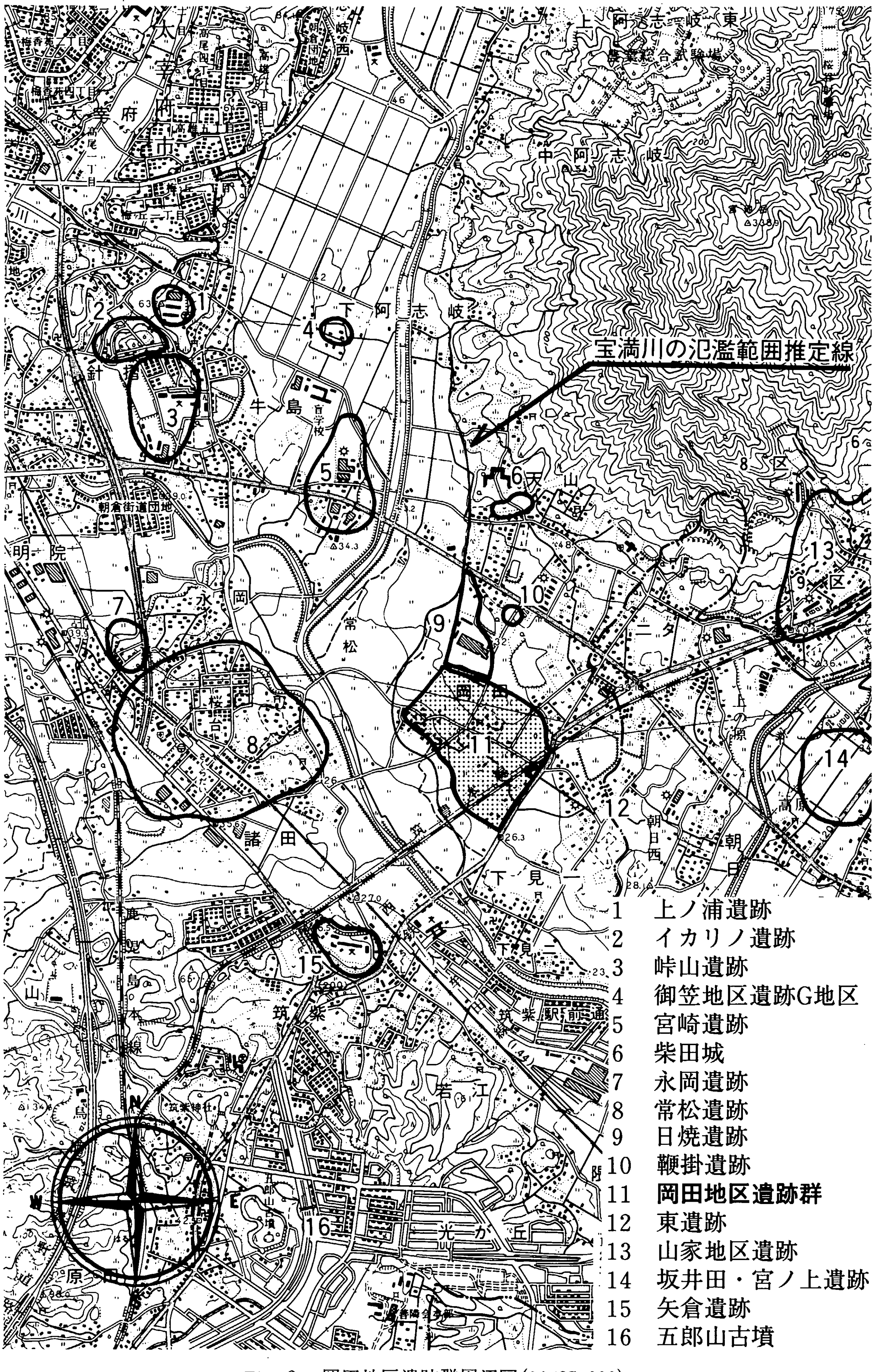


Fig. 2　岡田地区遺跡群周辺図(S1/25,000)

前半にかけての竪穴住居跡・甕棺墓・大溝や中世の土坑が検出された常松遺跡(註10) が所在している。この溝は、台地を横断し隣接した台地にも連続していたことが確認されている。さらにその南側には筑紫氏の館跡と推定される矢倉遺跡(註11) がある。詳細については不明な点が多いものの、北方の平野を望む要地に所在しており、付近の11～12世紀における主要な拠点として考えられている。

岡田付近は、古代では隣郡である夜須郡との郡境付近に位置すると考えられているが(註12) 、本遺跡からさらに宝満川を下ると筑後国御原郡に至る。近年では、大刀洗町に所在する下高橋上野・馬屋元遺跡(註13) の調査をはじめとして、古代の御原郡内の再検討が活気を帯びてきており、郡内の官衙・寺院・集落の実態の解明に注目が寄せられている。これらの周辺域の華々しい状況とは対照的に、岡田地区遺跡群が所在する付近については今まで遺跡の状況が不明確な地域であった。しかし北西に大宰府、南東に筑後国を望み、大宰府から南東方向への要地であること、また交通事情においても陸路・水路ともに条件を兼ね備えていることなどをふまえると、本遺跡はまさに格好の立地にあるものといえよう。

註1　太宰府市史編集委員会『太宰府市史』1992年
註2　筑紫野市教育委員会『大宰府条坊跡第99次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第52集　1997年
註3　筑紫野市教育委員会1994～1997年実施の確認調査データ（岡田・常松・諸田・天山周辺）による。
註4　筑紫野市教育委員会『阿志岐シメノグチ遺跡（阿志岐古墳群A群3号墳)』筑紫野市文化財調査報告書第１集　1972年
註5　筑紫野市教育委員会『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集　1986年
「ホノケ」とは、小字のなかの一区画をさす呼び名で、地元で伝承されてきた土地の俗称である。
註6　註5文献に同じ。「蘆城駅家」関連の官衙が想定されている。蘆城駅家は、「令義解」や「延喜式」には見えず、「万葉集」に納められた神亀・天平年間の9首の歌によってのみ、その存在を確認できる。ただし、この調査では遺跡の性格を決定できる資料が得られていないため、現段階では不明な点が多い。
註7　筑紫野市教育委員会1997年発掘調査。未報告。渡邊和子の教示による。
註8　筑紫野市教育委員会『日焼遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第20集　1989年
註9　福岡県教育委員会『永岡遺跡』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集　1970年
福岡県教育委員会『永岡甕棺遺跡』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4・5集　1976・1977年
筑紫野市教育委員会『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第6集　1981年
筑紫野市教育委員会『永岡遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第26集　1990年
註10　賀川光夫ほか『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』別府大学文学部史学科考古学研究報告書1　1970年
筑紫野市教育委員会『常松遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第55集　1997年
註11　筑紫野市教育委員会『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第8集　1982年
註12　日野尚志氏ご教示。
註13　福岡県教育委員会『下高橋馬屋元遺跡』福岡県文化財調査報告書第129集　1997年
大刀洗町教育委員会『下高橋上野遺跡Ⅰ』大刀洗町文化財調査報告書第5集　1993年
大刀洗町教育委員会『下高橋上野遺跡Ⅱ』大刀洗町文化財調査報告書第10集　1996年

参考文献

井尻正二・新堀友行『新版地学入門』築地書館　1976年
農林水産省九州農業試験場編『あるいてみる九州の土壌～土壌調査の方法と利用～』編者に同じ　1982年

Ⅲ　調査の概要

当初の発掘調査計画では、すでに平成5年度に行われていた確認調査結果をふまえて、遺跡の所在が確認された17.1haの範囲について、工事が優先的に行われる箇所から調査を進める予定であった。ところが、事業地東側で官道と掘立柱建物が数棟検出されたことで、それまでのデータの見直しを行う必要性が生じた。これは明らかに確認調査のミスであった。

試掘データの再検討を行ったところ、官道は事業地の中心をまっすぐに貫いている状況が確認され、遺跡の性格上、とくにその沿線付近については極力面的な調査を行うように計画の見直しを行った。しかし、事業はすでに部分的に実施されており、この段階での計画の変更は不可能なのは明白であった。このため、やむを得ず調査区を工事工区に従って30調査区に分割して発掘調査を実施することとした。

また、調査で生じた排土処理や塵埃対策については、岡田土地区画整理組合のご好意を受けた。記して謝意を表します。

層位の状況

第Ⅱ章ですでに述べたように、本遺跡は宝満川沿いのフラットな自然堤防上に立地しており、砂礫層がベースとなっている。周辺の後背湿地では水生堆積による青灰色シルトとの互層をなしており、かなり乱れた状態である。遺跡の所在する自然堤防の付近は、砂礫層の上に淡黄褐色粘質土が堆積して安定面を形成し、小高い丘状になっている。

この淡黄褐色粘質土（遺構検出面）は耕作土直下にあり、縄文時代から中世の遺構の多くはこの面から切り込まれている。耕作土は薄い所では10～20㎝、厚い所でも50㎝程度で一皮はがすと遺構が確認できる状況であったため、かなりの削平を受けているものと考えられる。岡田地区は全事業地の約77%が農地で占められており、調査範囲の大部分がこのような状況であった。淡黄褐色粘質土上には、茶褐色粘質土が部分的に残っている箇所があり、本来的にはこの層がのっていたものと推測される。

また、近世以降については、耕作土中に遺物は含まれるものの確実な面としては確認されていない。

検出された遺構の概要

今回の調査でⅠ区から検出された遺構は、柵（SA）6列・掘立柱建物（SB）48棟・竪穴住居（SC）12軒・溝（SD）241条・井戸（SE）4基・道路（SF）1筋・土坑（SK）241基・木棺墓（ST）6基・性格不明遺構およびその他（SX）12・ピット（Pit）3202である。

これらの時期は概ね5世紀後半から11世紀後半に至るまでのものである。これらは、①弥生時代前期中頃、②5世紀後半～末、③8世紀中頃～9世紀初頭（一部9世紀中頃）、④11世紀後半～12世紀代の4期に分けられ、それぞれの時間的な連続性はみられない。

また、周辺域の地形の状況から、遺跡の広がりについては、東側が国道200号線付近まで続くことを除けば、今回発掘調査された範囲にほぼ限定されるものと考えられる。

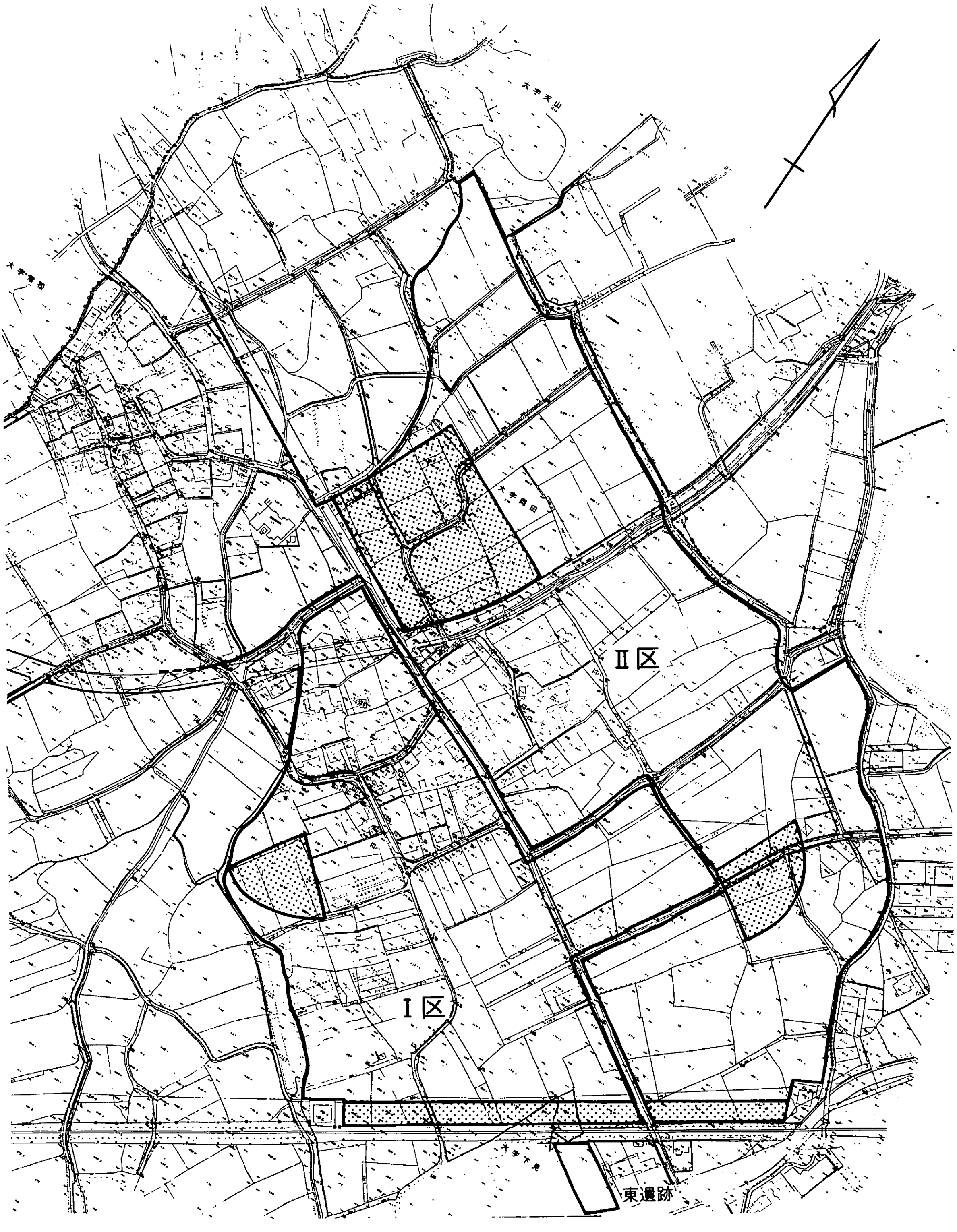


Fig. 3　岡田地区遺跡群調査区区分図(S1/4,000)

※網かけ部分は、公園・緑地帯などによる現状保存の区域

1 柵（SA）（Fig.4・5）

SA 1 (Fig.4)

調査区西方に位置する。SB42の東梁に主軸方向がほぼ一致しておりN－33°52′－Eである。削平により不明確であるが、北方に延長すると官道の主軸にほぼ直交しており、この付近までは延びていたものと推測される。

ピットの形状は円形を呈し、直径30～50cm、深さは30～50cmを測る。

SA 2 (Fig.4)

SA 1の西側にほぼ並行するもので、主軸方向はN－31°46′－Eである。ピットの形状は円形を呈し、直径20～40cm、深さは20～40cmを測る。SA 1とともに時期は不明である。

SA 3 (Fig.5)

SB25の南側で検出された。主軸方向はN－52°13′－Wである。ピットの形状は円形を呈し、直径30～40cm、深さは15～45cmを測る。

SA 4・5 (Fig.5)

SB22の周囲を囲む柵である。主軸方向はSA 4がN－54°2′－Wで、SA 5はN－38°40′－Eである。ピットの形状は円形を呈し、直径15～40cm、深さは15～25cmを測る。また、SA 5は、杭の径が15cm程度とのものを使用していると考えられる。

SA 6 (Fig.5)

主軸方向はN－44°40′－Eであり、奈良時代の地割C軸と一致するものである。ピットの形状は円形を呈する。遺りが悪く、直径25～40cm、深さは15～35cmを測る。杭の径は、10cm程度のものと考えられる。

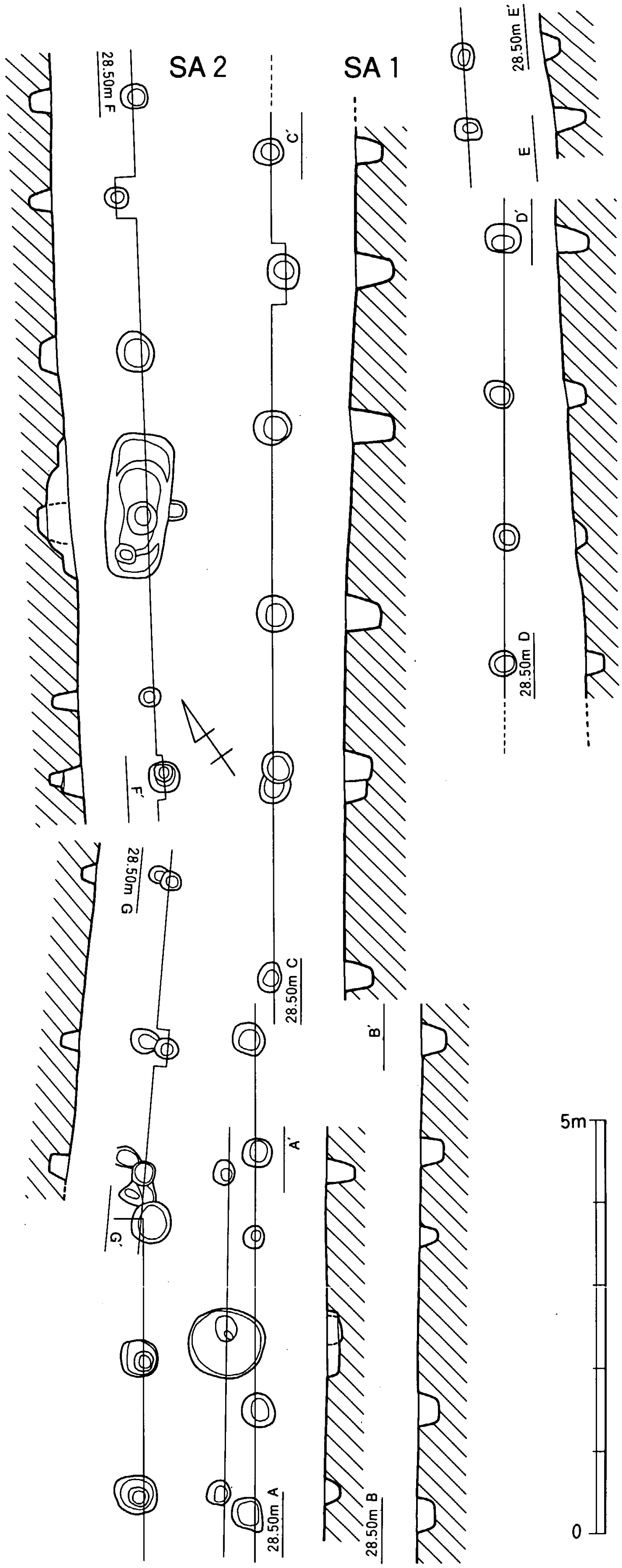


Fig. 4　SA1・2実測図(S1/80)

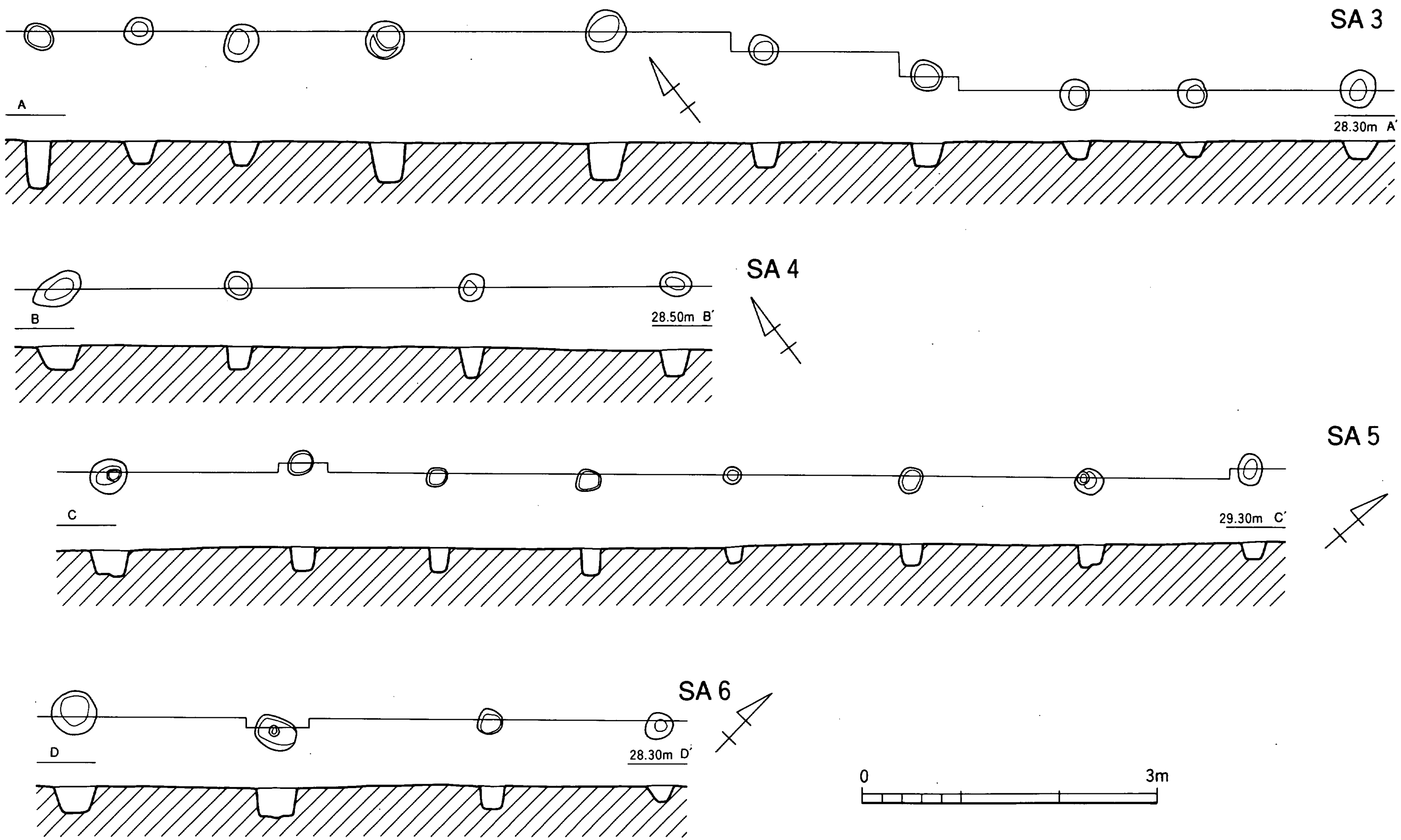


Fig. 5　SA3～6実測図(S1/60)

2 掘立柱建物（SB）（Fig.6〜15, PL.4, Tab.1〜3）

今回の調査では、掘立柱建物は合計48棟が確認された。これらは、時期的にはSB 1 〜43（A〜D,その他）とSB44〜49（E）の二つに分けられるものと考えられる。前者については、官道や地割を決定している柵列群などとの関連性から推測すると、概ね 8 世紀中頃から9世紀初頭に、また後者は、老松神社周辺の計画線と一致することやSE 2 の時期などから14世紀頃に位置づけられる。このうち前者のグループについては、柵列群によってブロックが設定され、そのブロックに強い規制を受けて建物群が形成されている状況がうかがえる。しかし、建て替えがほとんどみられないことや、遺物が少なかったことなどから、それぞれのブロック内での建物の変遷については不明な点が多い。このためここでは、個別の説明とブロック内での特記事項のみを記すことに留めた。

全体的な傾向

本遺跡の掘立柱建物は、その一つ一つは小型のものが多く集落的な様相を示している。それらの梁と桁の長さの相関関係をみてみると、その大きさには大きく分けて 2 つのグループが確認でき（Fig. 6）、やや弱い正相関を示すものの、傾きが緩やかであることを確認できた。

この場合、梁の長さは3〜5m付近でほぼ横ばいであるから、建物の大きさは、桁の長短で決定されていることが分かる。

また、建床面積別にその出現頻度の傾向を見てみた（Fig. 7）。

これによると、35㎡以下の小型建物が全体の89%を占めていることと面積的には3つのグループに分かれることが確認できる。この結果をブロックごとに図上にプロットしてみると、ブロック単位でそれぞれに配置される建物の大きさの傾向に差異があることが確認できる。これは、それぞれの性格の違いを示すものと考えられる。

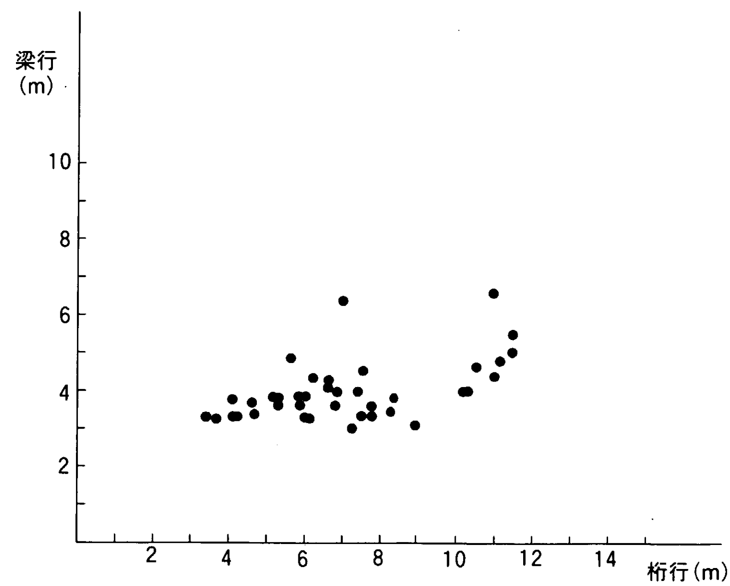


Fig. 6　掘立柱建物の梁･桁の相関

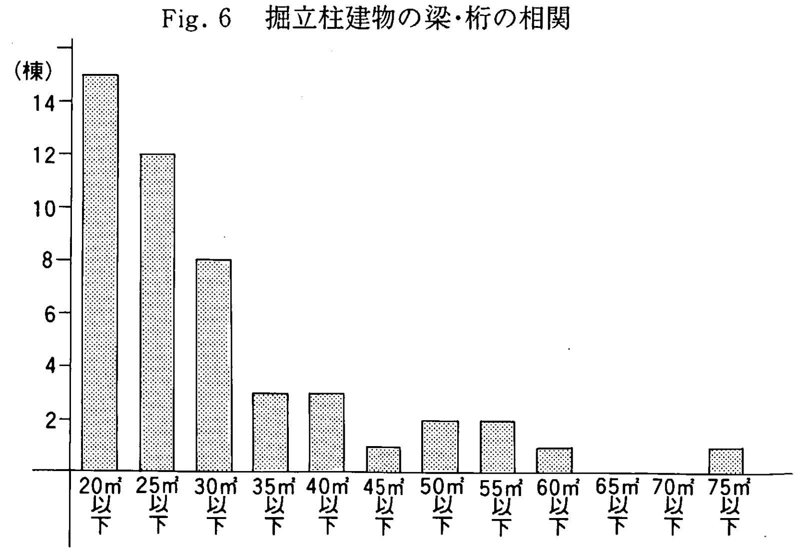


Fig. 7　建床面積の頻度

ブロックごとの特性

Aブロック

ブロックの面積は、5,695.8＋α㎡を測る。他のブロックの2倍＋αの面積を占めており、また、規模的にも大きな建物が多いことから、ハイクラスな領域として考えられる。中央付近にロの字配置建物（SB１～４）、その西側エリアにSB７～９の総柱建物を配置しており、さらにSB５と９が対称的な位置関係にある。SB５の東側は遺跡が続くものと考えられるので、このブロックは大きく3つのエリアに分れている。このうち西の2つのエリアには、官道の北側側溝（SD１）に橋（SX１・２）が架けられていたものと推測されるので、このブロックは、官道に対して開かれたブロックであることが分かる。

Bブロック

このブロックの場合は、柵列群による地割と建物の関係がとくに深く、ブロックの北側と西側に開けている出入り口の付近は、空閑地となっている。これは、建物の配置が周辺からの導線に強く影響を受けていたことを示すものであり、これらの性格を知るうえで興味深い。

また、主軸の方向と位置関係から推測すると、SB10・11・16～19は同時期のものである可能性が高い。SB13からSB14に立て替えられていることを考えれば、SB14も含めても良いかもしれない。ブロックの面積は、2,275.5㎡を測る。古代の1反を1,166.4㎡程度に想定した場合に、約２反に相当する面積である。このことについては、今回は紙面の都合もあるので、報告のみに留め、後日、別の機会に検討することにする。

Cブロック

ここの建物は、2×3間を基本とし全体的に35㎡以下の小型のものが主体となっている。地割の軸に対する配置を行っているものと考えられるが、位置関係はあまりまとまりが感じられない。ただし、このブロックの北側には柵列群B軸の若干途切れる所があり、この付近を空閑地として取り巻くように配置されている。

また、このブロックでは、官道の主軸方向に一致する建物がみられないのが特徴である。

Dブロック

このブロックでは、SB34・35・40・41のような建床面積が50㎡前後の（本遺跡では）中型クラスの建物が比較的多い。配置の状況をみると、主屋1＋東脇屋1＋西脇屋2という基本的な構成をとっていることが確認でき、時期の問題はあるにしてもBブロックと似た状況がうかがえる。これらの建物配置の状況は、本遺跡の基本的なパターンである可能性が高い。

また、Cブロックと同じく、官道の主軸方向に一致する建物がみられない。このことは官道北側のA・Bブロックにはみられない現象であり、興味を引かれる。官道南側のC・Dブロックは、柵列群E軸が目隠し塀のような位置にあり、官道北側とは完全に遮断された状況が影響しているのかもしれない。

Eブロック

このブロックの一群は、14世紀頃に位置づけられる建物である。これらは、中世以降に形成される老松神社周辺の地割と一致していることから、A～D群のものと切り離して考えられるものである。神社付近には在地系の居館のような施設が想定されており、これに関係が深いものと推測される。

Aブロックの掘立柱建物(SB 1 ～ 9 ,20) (Fig.8～11・PL.4)

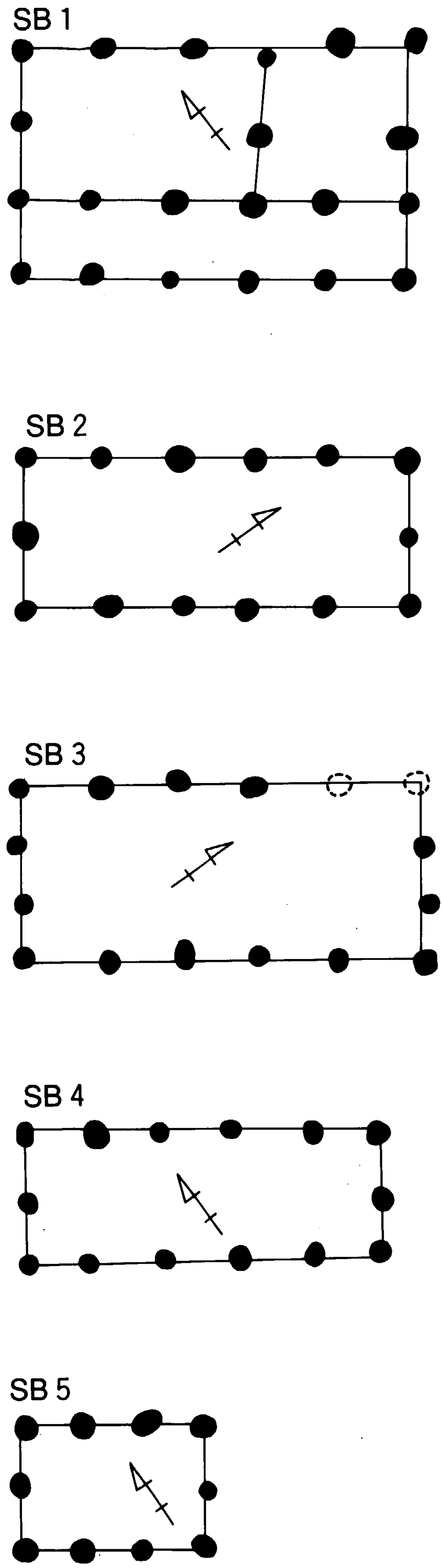


Fig. 8　AブロックSB1～5

SB 1　南面に廂をもつ建物で、総面積74.78m^2（身舎面積49.4m^2）の本遺跡で最大の建物である。Aグループの主屋に相当し、間仕切りをもっている。主軸方位はN－51°40′－Wを採る。間数は2×5間で、梁行4.4m・桁行11.0m、廂部分は2.2mを測る。掘り方の形状は、円形で径50～65cm・深さ40cm、柱痕の径は15cmを測る。

遺物は4点（Fig. 9）で、掘り方内の埋土から出土した。いずれも摩滅しており、状態は悪い。

SB 2　SB 1 からみて東脇屋に相当する建物である。建床面積48.60m^2を測り、主軸方位はN－35°29′－Eである。間数は2×5間で、梁行4.4m・桁行11.0mである。掘り方は円形で、径50～70cm・深さ50cm、柱痕の径は15cmを測る。この建物は、当初からSB 1 ・ 2 と同時に建てられたというよりは、これらの後に計画線を意識して増棟されたものと推測される。

SB 3　SB 1 からみて西脇屋に相当する建物である。建床面積49.40m^2を測り、主軸方位はN－33° 0 ′－Eである。これと左右対称に配置されるSB 2 とは、梁行5.5m・桁行11.5mと平面上はほぼ同等のものであるが、こちらは梁行が3間であり、構造上の違いがうかがえる。また両者は、梁行の柱筋が概ね通っており、距離は60尺である。掘り方は円形で、径50～60cm・深さ50cmである。

SB 4　SB 1 からみて前屋に相当する建物である。建床面積39.18m^2を測る。主軸方位はN－56°47′－Wを採り、間数は2×5間で、梁行6.6m・桁行11.0mである。掘り方は円形で、径約55cm・深さ約55cm、柱痕の径は15cmを測る。SB 1 ～ 3 と一連のものと考えられるが、この建物のみは官道を意識して建てられている。

SB 5　Aブロックの東側の端に位置する。2×3間の小型の建物で、身舎面積は19.64m^2である。柱間寸法は、およそ6尺を基本としていると考えられる。この建物の周囲には、遺構が極めて少なくなっており、機能を推定し得なかった。

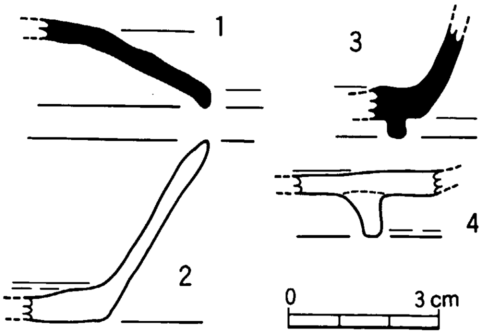


Fig. 9　SB1出土遺物(S2/3)

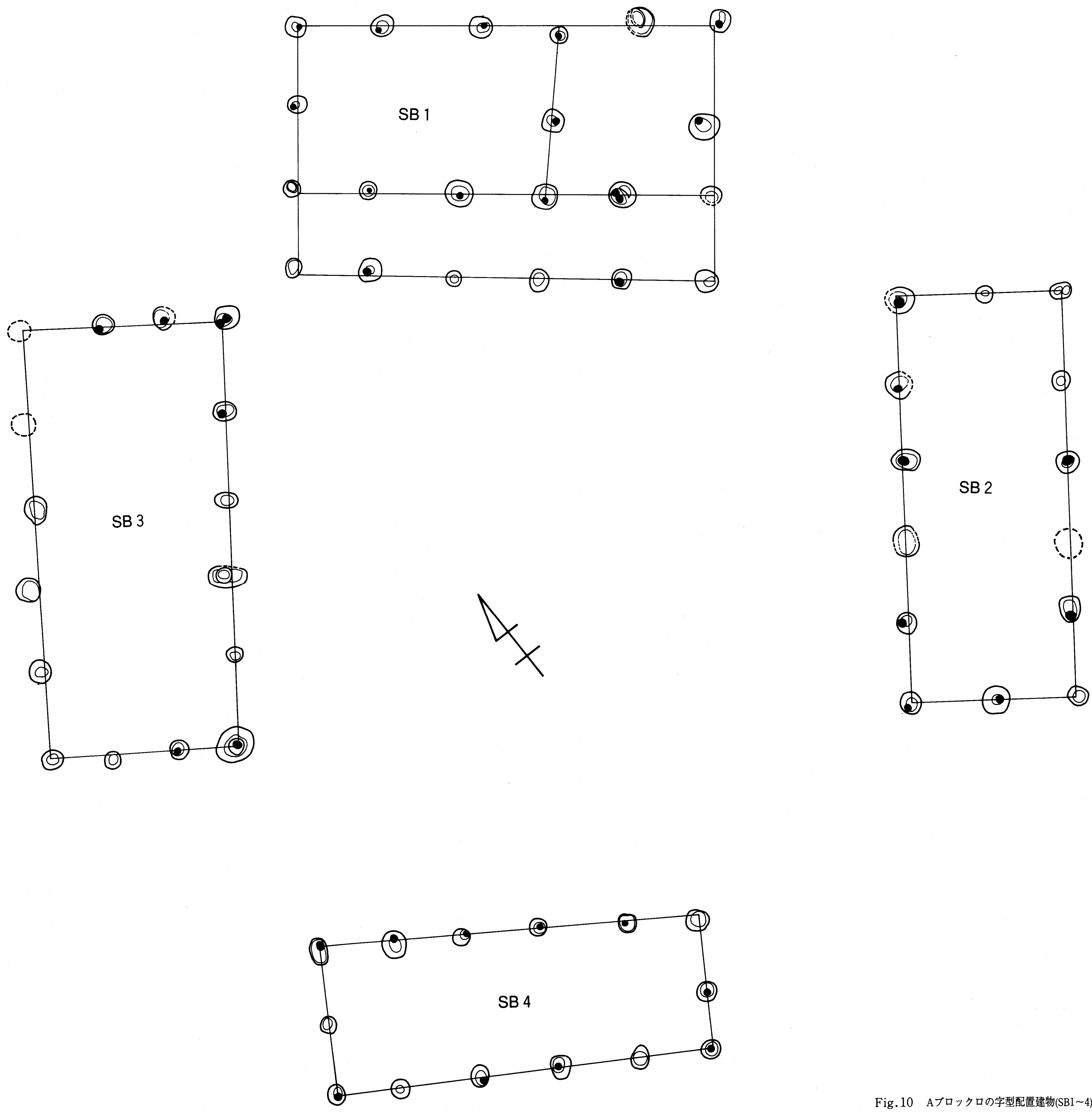


Fig.10　Aブロックロの字型配置建物(SB1～4)

SB 6　Aブロックの西の端に位置し西面に廂をもつ2×3間の建物で、主軸方向はN－26°53′－Eを採る。この建物は、軸が地割に一致していない。総面積35.58㎡（身舎面積27.58㎡）で、梁行3.5m・桁行8.1mを測る。掘り方は円形で、径60～65cm・深さ50cm、柱痕の径は20cmである。

SB 7　3×3間の総柱建物である。建床面積28.78㎡、掘り方は円形で、径40cm・深さ20cmの比較的小型のものである。

SB 8　2×2間の総柱建物である。建床面積13.75㎡、掘り方は円形で、径30cm・深さ30cmの小型のものである。

SB 9　3×3間の総柱建物で、明らかに柵列群B軸の途切れるところを意識して建てられている。建床面積43.78㎡。掘り方は円形で、径50～55cm・深さ50cm、柱痕の径は15cmである。

SB20　Aブロックの西の端に位置する2×3間の建物である。主軸方位はN－36°40′－Eで、柵列群B軸と西側の桁の軸とが一致している。建床面積19.19㎡、梁行3.3m・桁行6.0mを測る。

掘り方は円形で、径50～55cm・深さ50～60cm、柱痕の径は10～15cmである。

また、この建物とSB 6については、A・Bブロックの境に当たる柵列群B軸の途切れた部分を塞いでしまう位置にあるため、時期的にややずれる可能性が高い。

＊ロの字型配置の建物（SB 1 ～ 4）　本遺跡のなかで主体的位置にある建物群である（Fig.10【折り込み】)。これらは、互いに対面するどうし（SB 1 と 4 ・SB 2 と 3）の梁の柱筋のみを通して配置されている。中央の広場は60尺四方の面積を占める。また、SB 1 の桁行の中軸線は、SB 2 と 3 の中心線から 6 尺ほど西に偏っており、このため、南に向かって開けた設計になっている。

これらは当初、SB 1 ～ 3 のみで「コの字型」と考えていたが、SB 4 まで含めたそれぞれの掘り方の埋土が、黄褐色粘質土塊が混じった暗茶褐色粘質土で同一のものであったため、同時併存した時期を想定し、「ロの字型」と判断した。

また、遺物が少ないため時期の同定は難しいが、概ね8世紀の後半代に当たるものと推測される。

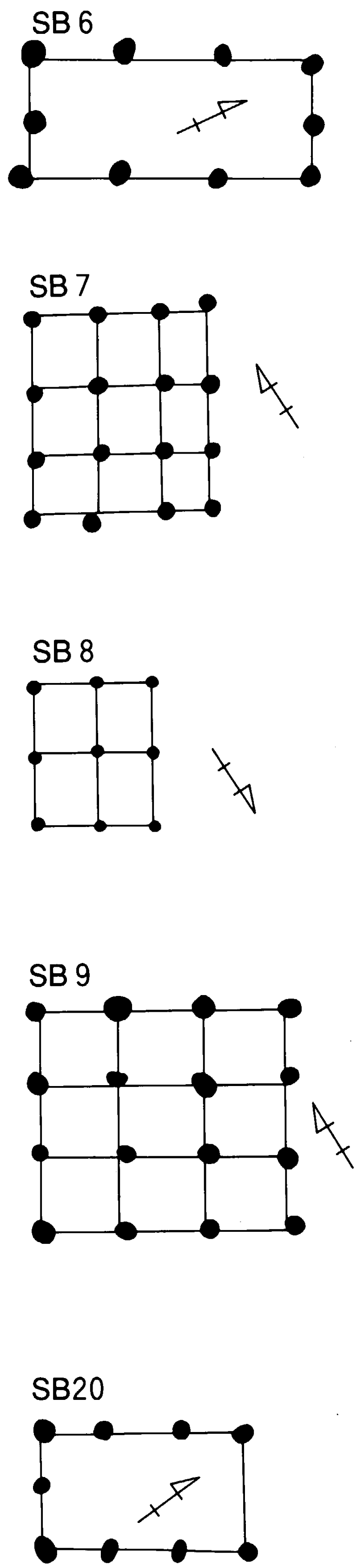


Fig.11　AブロックSB6～9,20

Bブロックの掘立柱建物（SB10～19）(Fig.12,13・PL.4)

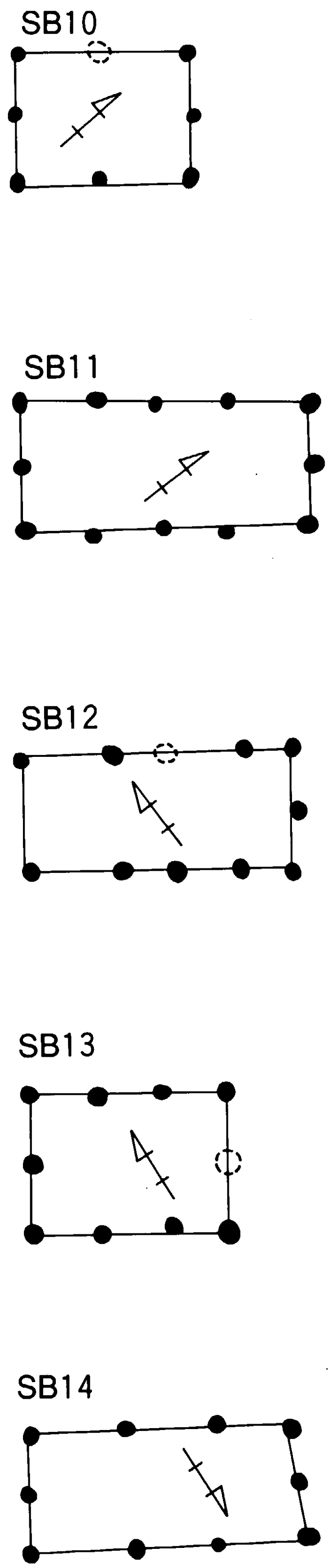


Fig.12　BブロックSB10～14

SB10　ブロックの東の端に位置する2×2間の小型建物である。主軸方向はN－39°48′－Eを採り、柵列群B軸に並行している。建床面積17.15㎡で、梁行3.4m・桁行4.7mを測る。掘り方は円形で、径40cm・深さ40cm、柱痕は確認されていない。

SB11　ブロックの中ほどに位置する2×4間の建物である。主軸方向はN－38°46′－Eである。また、主軸に差があるものの、配置的にはSB19に対応するものと考えられる。建床面積26.60㎡で、梁行3.6m・桁行7.8mを測る。掘り方は円形で、径40～50cm・深さ40cm、柱痕の径は20cmである。

SB12　SB11のすぐ南側に位置する2×5間の建物である。主軸方向はN－56°45′－Eを採っており、官道の主軸を意識している。建床面積23.53㎡で、梁行3.0m・桁行7.3mを測る。掘り方は円形で、径40～50cm・深さ40～50cmである。柱痕は確認されていない。

SB13　Bブロックの官道沿いに位置している2×3間の建物である。主軸方向はN－59°35′－Wを採る。建床面積は20.46㎡で、梁行3.9m・桁行5.4mを測る。掘り方は円形で、径45～50cm・深さ30～35cmである。この建物とSB15の東梁の軸は柱筋を通しており、さらにそれらの距離は41尺で柵列群A軸の途切れた部分の長さとほぼ一致している。このエリアは、遺構量が非常に少なく空閑地となっており、建物の配置に際して柵列群からの制約を受けていたことを示すものである。

SB14　Bブロックの官道沿いに位置している2×3間の建物である。建床面積23.65㎡で、梁行3.4m・桁行7.5mである。掘り方は円形で、径40cm・深さ40～50cm程度である。主軸方向はN－60°21′－Wを採っており、官道の主軸とほぼ同じである。この建物以外は、すべてブロックの中ほどから北側に集中的に配置されていることからも、官道に関係の深いことを示している。また、SD45との切り合い関係から、SB13の後に建て替えられたものであることが確認できる。SB13との規模は、面積的にはあまり変わっていない。

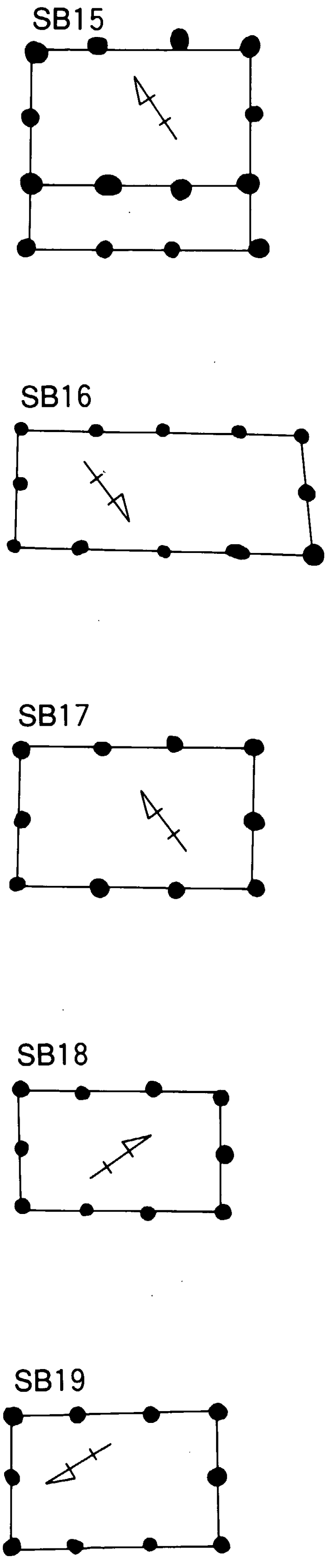


Fig.13　BブロックSB15～19

SB15　ブロックの中央付近に位置し、南面に廂をもった２×３間の建物である。主軸方向はN－59°12′－Wを採る。総面積35.78m^2（身舎面積25.32m^2）で、梁行4.2m・桁行6.6mを測る。掘り方は円形で、径60cm・深さ40cm、柱痕の径は15cm程である。建物の位置や掘り方の径・尺度などにSB１との近似性が見出される点は興味深い。

SB16　SB17と平行して並ぶ２×４間の建物である。2棟の建物は西梁の柱筋を揃えている。また、この建物の南桁とSB10の南梁とは柱筋が通っている。主軸方向はN－52°11′－Wを採り、柵列群の軸と一致している。建床面積は29.02m^2で、梁行3.5m・桁行8.3mを測る。掘り方は円形で、径50cm・深さ60～80cm、柱痕は確認されていない。

SB17　SB16の北側に位置する2×3間の建物である。主軸方向はN－52°48′－Wを採り、柵列群の軸に並行している。この建物の南桁とSB10の北梁とは柱筋が通っている。建床面積27.75m^2で、梁行4.0m・桁行6.8mを測る。掘り方は円形で、径40cm・深さ30～40cm、柱痕は確認されていない。また、この建物の南桁とSB10の北梁とは柱筋が通っており、計画的な配置がなされている。両者の間は空閑地となっている。

SB18　SB16・17の西側に位置する２×３間の小型建物である。主軸方向はN－38°49′－Eを採り、柵列群A軸に並行している。建床面積は20.32m^2で、梁行3.6m・桁行5.9mを測る。掘り方は円形で、径約30cm・深さ40～45cm、柱痕は確認されていない。

また、この付近は遺構の残り具合が悪く、かなりひどい削平を受けているものと考えられる。地形的には、A・Bブロックの建物の範囲は、官道の道路面より一段高かったものと推定される。

SB19　SB18の南側に位置する２×３間の小型建物である。主軸方向はN－32°37′－Eを採る。地割とはやや軸を異にするものの、掘り方の埋土が、黄褐色粘質土塊混じりの茶褐色粘質土で同一であったことなどから、SB11やSB18などに対応する一連のものと考えられる。建床面積は23.65m^2で、梁行3.9m・桁行6.0mを測る。掘り方は円形で、径40～45cm・深さ30～40cm、柱痕は確認されていない。

Cブロックの掘立柱建物(SB22～32)(Fig.14,15・PL.4)

SB22　ブロックのほぼ中央付近に位置する2×3間の小型建物である。SA4・5に囲まれている。主軸方向はN－53°58′－Wを採り、地割に一致する。建床面積25.80m²で、梁行3.6m・桁行6.9mを測る。掘り方は円形で、径40～45cm・深さ約40cm、柱痕は確認されていない。この建物の西梁とSB31の東梁の柱筋が一致している。

SB23　調査区の東の端に位置する2×4間の建物である。主軸方向はN－29°29′－Eを採る。Cブロックの中でこの建物だけが主軸方向を異にしており、他の建物と位置的な関係がみられないことから、時期が違うものと考えられる。至近距離にはSC11・12があるので、むしろこちらに関連するものなのかもしれない。建床面積は27.32m²で、梁行3.4m・桁行7.8mを測る。掘り方は円形で、径40～50cm・深さ30～40cmである。

SB24　SC11のすぐ西側に位置する2×3間の総柱建物である。主軸方向はN－40°18′－Eを採っており、地割とはやや軸が異なっているもののSC11との同時併存は少々考えにくく、むしろSB25・26の一連のものと考えたほうが自然かもしれない。建床面積は27.06m²で、梁行4.4m・桁行6.2mを測る。掘り方は円形で、径50～60cm・深さ40～50cmである。

SB25　調査区の東端に位置する2×5間の建物である。SB26と南梁の柱筋を揃えて、主軸方向はN－42°45′－Eを採っている。建床面積は27.62m²で、梁行3.0m・桁行9.0mを測る。掘り方は円形で、径50～65cm・深さ40～45cmである。

SB26　調査区の東端にSB25と並列して位置する2×4間の建物である。これらは同時併存していた可能性が高く、Bブロックのsb16・17の位置関係とも類似している。このことは、Cブロックにも、場に対する一定の規制が働いていたことを示すものと考えられる。建床面積は30.08m²で、梁行4.0m・桁行7.4mである。掘り方は円形で、径約60cm・深さ40～50cm程度である。主軸方向はN－46°5′－Eを採っており、地割の軸に一致している。

SB27　柵列群C軸と東梁を通している2×2間の小型の建物である。建床面積は11.82m²で、一辺が3.4m四方である。掘り方は円形で、径約約40cm・深さ30～40cm程度である。主軸方向はN－38°39′－Eを採る。

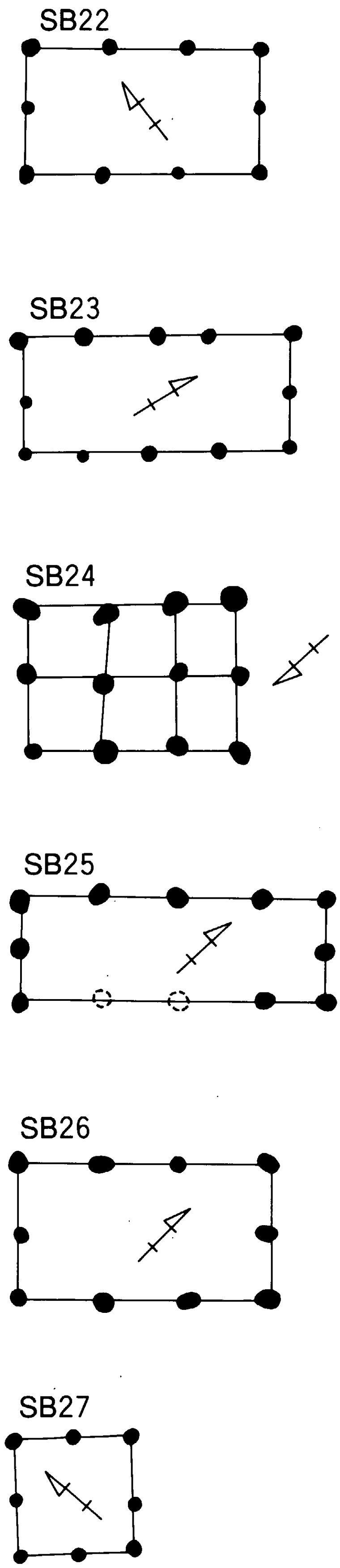


Fig.14　CブロックSB22～27

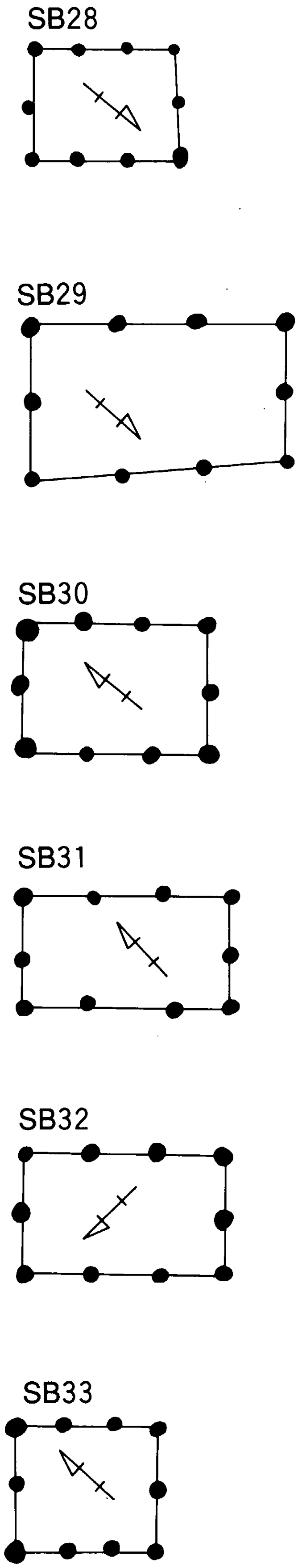


Fig.15　CブロックSB28～33

SB28　SB27と同位置に建てられている2×3間の小型建物である。切り合い関係がみられないため、時期の区別ができなかった。またその西側に位置するSB29・30とは、関連性が深いものと考えられる。主軸方向はN－45°0′－Eを採り、地割に一致している。建床面積14.48㎡で、梁行3.3m・桁行4.3mを測る。掘り方は円形で、径40～45cm・深さ約30～40cmを測る。柱痕は確認されていない。

SB29　ブロックほぼ中央付近のSB27・28の西側に位置する2×4間の建物である。主軸方向はN－46°38′－Wを採る。建床面積は33.04㎡で、梁行4.5m・桁行7.5mを測る。掘り方は円形で、径約45cm・深さ30～40cmである。

SB30　SB29と同位置にある2×4間の小型建物である。SB29を切っており、SB29からSB30に立て替えられたことが確認できる。主軸方向はN－41°54′－Wを採っており、地割とは軸が一致している。建床面積は21.04㎡で、梁行3.9m・桁行5.3mを測る。掘り方は円形で、径約50cm・深さ40～50cmである。

SB31　ブロックの北側に位置する2×3間の小型建物である。主軸方向はN－48°22′－Wを採っており、この建物の西梁とSB32の中軸線とはほぼ一致しているものの、他の建物とは軸がやや異なる。しかし、付近のSB32・33と一連のものである可能性も考えられる。建床面積は20.46㎡で、梁行3.3m・桁行6.1mを測る。掘り方は円形で、径約40cm・深さ40～45cmである。

SB32　SB31の南に位置する2×3間の小型建物である。主軸方向はN－57°50′－Eを採っており、SB25～30・33と軸が一致していることから、これらの関連性は深いものと考えられる。建床面積は21.58㎡で、梁行3.6m・桁行5.9mである。掘り方は円形で、径約50cm・深さ40～50cm程度である。柱痕の径は、10～15cm程である。

SB33　Cブロックの最西端に位置する2×3間の小型の建物である。建床面積は15.86㎡で、梁行3.8m・桁行4.2mである。掘り方は円形で、径約約50cm・深さ40～45cm程度である。主軸方向はN－45°0′－Wを採り、官道の軸とは一致していない。

　また、Cブロックについては、この建物から西～南側にかけては空閑地となっており、遺構の密度も相対的に少いことは特徴的である。他のブロックに対して、建物によるエリアが未分化の状態であり、建物の明確な機能差があまり感じられない。

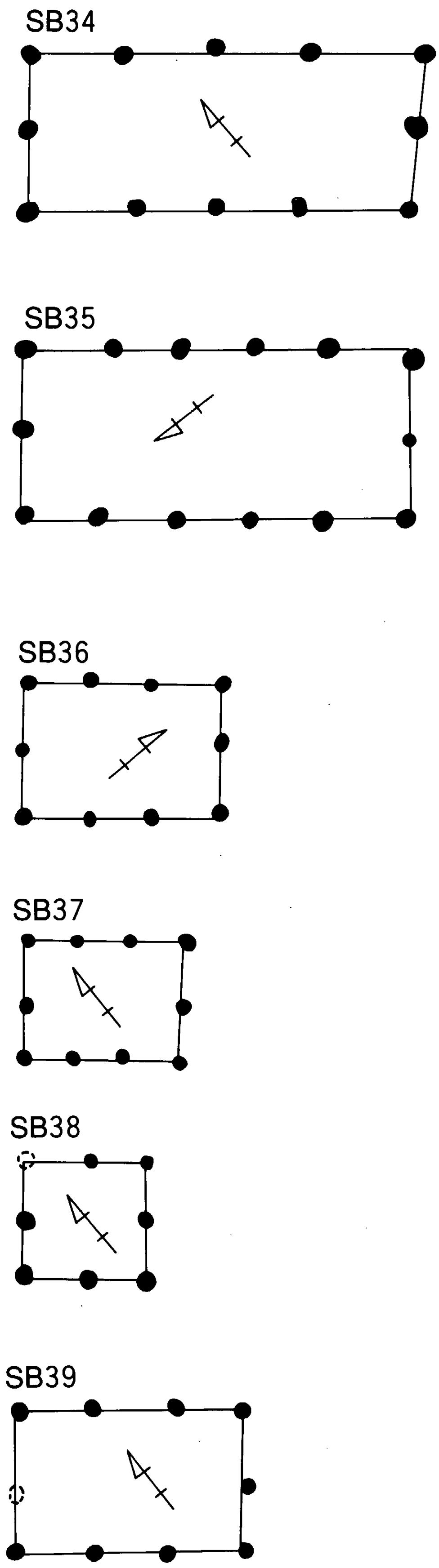


Fig.16　DブロックSB34～39

Dブロックの掘立柱建物（SB34～41）（Fig.16,17）

SB34　ブロックの北端付近の官道近くに位置する2×5間の中型建物である。主軸方向はN－51°2′－Wを採り、地割の軸と一致する。建床面積53.46㎡で、梁行4.8m・桁行11.1mを測る。東梁のピットがやや斜めに配置されており、ゆがんだ長方形になっている。掘り方は円形で、径約60cm・深さ40～50cm、柱痕は15cmである。この建物とSB35・40は規模的にほぼ同等であり、計画的に配置されているものと推測される。

SB35　ブロックの東の端に位置する2×5間の中型建物である。主軸方向はN－37°4′－Eを採る。SB36と同位置に建てられているが、切り合いが無く遺物が出土していないことから、前後関係は不明である。建床面積は56.87㎡で、梁行5.0m・桁行11.4mを測り、規模的にはSB36のほぼ2倍の大きさになっている。掘り方は円形で、径約50cm・深さ30～40cmである。

SB36　SB35と同位置にある2×3間の小型建物である。主軸方向はN－39°26′－Eを採る。

建床面積は22.91㎡で、梁行3.9m・桁行5.9mを測る。掘り方は円形で、径30～35cm・深さ30cm前後である。

SB37　ブロックのほぼ中央に位置する2×3間の建物である。SB40の北梁との柱筋を揃えて、主軸方向はN－53°37′－Wを採っている。建床面積は16.43㎡で、梁行3.6m・桁行4.6mを測る。掘り方は円形で、径30～35cm・深さ30～45cmである。

SB38　SB37の南側に並列して位置する2×2間の小型建物である。建床面積は12.34㎡で、梁行3.2m・桁行3.6mである。掘り方は円形で、径40～50cm・深さ40～50cm程度である。主軸方向はN－37°52′－Eを採っており、地割の軸に一致している。

SB39　SB37の南側に並列して位置する2×3間の建物である。この平行配置は、B・Cブロックでも確認できる。建床面積は28.71㎡で、一辺が3.4m四方である。掘り方は円形で、梁行4.3m・桁行6.7mである。掘り方は、径約40cm・深さ30～40cmである。主軸方向はN－53°8′－Wを採る。

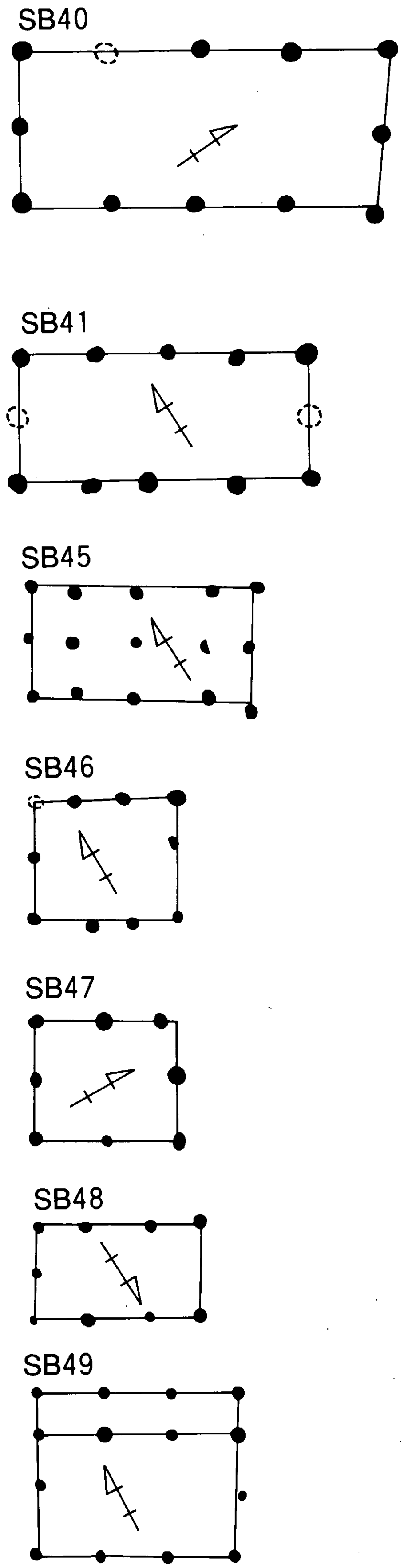


Fig.17　DブロックSB40,41
EブロックSB45〜49

SB40　ブロックの西端付近に位置する２×５間の中型建物である。柵列群A軸と一致しており、主軸方向はN－34°17′－Eを採る。この建物とSB36の北梁どうしが柱筋を合わせている。建床面積50.80㎡で、梁行4.6m・桁行10.6mを測る。また、南梁のピットがやや斜めにゆがんで配置されており、SB34と相似形を呈する。掘り方は、径50cm・深さ40〜50cm、柱痕は15cmである。

SB41　SB40の南の2（？）×5間の建物である。ピットに欠落が生じているが、梁1間では構造上の問題があり、調査に掘り残してしまったものと考えられる。主軸方向はN－30°30′－Eを採り、SB40とは軸を異にする。建床面積は33.21㎡で、梁行3.8m・桁行8.4mを測る。掘り方は、径約50cm・深さ30〜40cmである。

Eブロックの掘立柱建物（SB45〜49）(Fig.17)

SB45　ブロックの東にある2×4間の建物である。主軸方向はN－59°56′－Wを採る。建床面積は22.10㎡で、梁行3.4m・桁行6.6mを測る。掘り方は円形で、径30〜45cm・深さ30cm前後である。

SB46　2×3間の建物である。主軸方向はN－67°10′－Wを採っている。建床面積は15.10㎡で、梁行3.5m・桁行4.3mを測る。掘り方は円形で、径約40cm・深さ約30cmである。

SB47　SB48とL字に配列される2×2間の小型建物である。全体的にはFブロックの建物は、偏L字型の配置を採っていることが分かる。建床面積は15.10㎡、梁行3.6m・桁行4.2mでSB46と同等である。掘り方は、径30〜50cm・深さ約30cm程度である。主軸方向はN－31°26′－Eを採る。

SB48　SB49の東側に横向きに並列して配置される2×3間の建物である。総面積は21.50㎡(身舎面積13.70㎡)で、梁行2.7m・桁行4.9m。掘り方は、径約40cm・深さ30cmである。主軸方向はN－63°26′－Wを採る。

SB49　2×3間の北側に廂がつく建物である。建床面積は28.60㎡で、梁行4.9m・桁行5.9mを測る。掘り方は、径約40〜45cm・深さ約30cmである。主軸方向はN－63°26′－Wを採る。

その他の掘立柱建物（SB42〜44）（Fig.18）

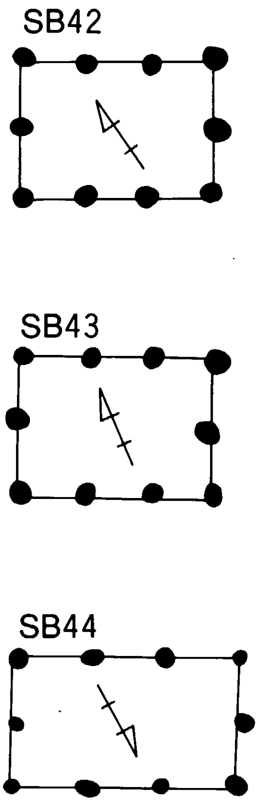


Fig.18　その他SB42〜44

SB42〜44は、時期的には官道周辺域のものと概ね同時期であると考えられるが、単体で存在したいたのでブロック名は付さなかった。

SB42　SD50の西側に単体で所在する2×3間の建物である。主軸方向はN−33°23′−Eを採り、官道の主軸にほぼ直交している。SB43を切っており、立て替えられている。建床面積は20.60m²で、梁行3.7m・桁行5.1mを測る。掘り方は、径約60〜75cm・深さ約40cm、柱痕は確認できなかった。

SB43　SB42と同位置にある2×3間の建物である。建床面積は18.60m²で、梁行3.7m・桁行5.1mを測る。掘り方は、径約60〜75cm・深さ約40cmであり、SB42と同等の規模である。主軸方向はN−25°24′−Eを採る。

SB44　本遺跡の最西端に位置する2×3間の建物である。建床面積は11.30m²で、梁行3.6m・桁行6・0mを測る。掘り方は、径約30〜60cm・深さ40cmである。柱痕は確認されていない。主軸方向はN−60°23′−Eを採っているが、周辺に関連のあるとみられる遺構はない。耕作による撹乱が多く、状態はあまり良くない。ただし、この周辺の遺構からは中世の遺物が多いので、この時期のものである可能性もある。ここではとりあえず、その他の範疇に含めることとした。

なお、今回の報告では、掘立柱建物の位置関係のデータは紙面と作業時間の都合もあり掲載することができなかった。以下、それらの座標値を1棟につき4点（建物の四隅）ピックアップしたので参照されたい。データに付された1〜4の番号は、配置図（付図）の天に向かって左上から時計周りで任意に振ったものである。また、データの抽出方法については、本書p.166に示している。

点　名	X　軸	Y　軸
SB 1 - 1	51976.8	−40922.8
SB 1 - 2	51970.0	−40914.2
SB 1 - 3	51964.0	−40918.5
SB 1 - 4	51971.6	−40926.9
SB 2 - 1	51961.1	−40914.9
SB 2 - 2	51958.5	−40911.2
SB 2 - 3	51949.6	−40917.6
SB 2 - 4	51952.1	−40921.3
SB 3 - 1	51974.8	−40934.0
SB 3 - 2	51976.8	−40929.5
SB 3 - 3	51971.8	−40936.0
SB 3 - 4	51962.2	−40940.3
SB 4 - 1	51965.1	−40937.6
SB 4 - 2	51956.8	−40929.2
SB 4 - 3	51951.3	−40931.2
SB 4 - 4	51948.1	−40939.8

点　名	X　軸	Y　軸
SB 5 - 1	51953.3	−40996.1
SB 5 - 2	51945.0	−40991.9
SB 5 - 3	51942.1	−40993.9
SB 5 - 4	51939.1	−40998.2
SB 6 - 1	51941.9	−40971.3
SB 6 - 2	51977.6	−40967.6
SB 6 - 3	51975.7	−40971.1
SB 6 - 4	51968.4	−40975.0
SB 7 - 1	51969.0	−40946.5
SB 7 - 2	51966.6	−40942.2
SB 7 - 3	51961.7	−40945.3
SB 7 - 4	51964.3	−40949.5
SB 8 - 1	51973.0	−40959.1
SB 8 - 2	51971.2	−40956.3
SB 8 - 3	51967.8	−40958.3
SB 8 - 4	51969.4	−40961.2

Tab.1　掘立柱建物座標値一覧表１

点　名	X　軸	Y　軸
SB 9 - 1	51983.1	−40954.2
SB 9 - 2	51979.6	−40948.2
SB 9 - 3	51974.1	−40951.3
SB 9 - 4	51977.6	−40957.4
SB10- 1	51996.4	−40964.5
SB10- 2	51994.3	−40961.9
SB10- 3	51990.7	−40964.9
SB10- 4	51992.8	−40967.5
SB11- 1	51998.4	−40976.6
SB11- 2	51996.2	−40973.8
SB11- 3	51990.3	−40978.7
SB11- 4	51992.3	−40981.5
SB12- 1	51989.0	−40983.0
SB12- 2	51985.0	−40976.9
SB12- 3	51982.5	−40978.6
SB12- 4	51986.4	−40984.6
SB13- 1	51984.5	−40995.5
SB13- 2	51981.8	−40990.9
SB13- 3	51978.5	−40992.9
SB13- 4	51981.3	−40997.4
SB14- 1	51985.5	−40995.9
SB14- 2	51981.8	−40989.4
SB14- 3	51978.9	−40991.2
SB14- 4	51982.5	−40997.4
SB15- 1	52000.4	−40986.4
SB15- 2	51997.3	−40981.2
SB15- 3	51992.2	−40984.3
SB15- 4	51995.8	−40989.8
SB16- 1	52009.4	−40983.6
SB16- 2	52004.2	−40976.9
SB16- 3	52001.5	−40979.0
SB16- 4	52006.6	−40985.5
SB17- 1	52003.6	−40980.5
SB17- 2	52009.5	−40975.1
SB17- 3	52006.2	−40977.5
SB17- 4	52000.6	−40982.9
SB18- 1	52015.8	−40986.1
SB18- 2	52013.9	−40983.4
SB18- 3	52009.3	−40987.0
SB18- 4	52011.2	−40989.8
SB19- 1	52007.8	−40991.1
SB19- 2	52005.7	−40987.7
SB19- 3	52000.7	−40991.0
SB19- 4	52002.8	−40994.3

点　名	X　軸	Y　軸
SB20- 1	51983.3	−40965.9
SB20- 2	51981.5	−40963.2
SB20- 3	51976.7	−40966.7
SB20- 4	51978.6	−40969.4
SB22- 1	51913.2	−40988.5
SB22- 2	51909.2	−40983.0
SB22- 3	51906.2	−40985.2
SB22- 4	51910.3	−40990.7
SB23- 1	51910.8	−40947.0
SB23- 2	51909.1	−40944.0
SB23- 3	51902.2	−40947.9
SB23- 4	51903.9	−40950.9
SB24- 1	51909.8	−40963.6
SB24- 2	51907.1	−40960.3
SB24- 3	51902.5	−40963.3
SB24- 4	51905.2	−40967.5
SB25- 1	51901.9	−40968.5
SB25- 2	51899.9	−40966.3
SB25- 3	51893.5	−40972.3
SB25- 4	51895.3	−40974.6
SB26- 1	51904.5	−40973.3
SB26- 2	51901.9	−40970.3
SB26- 3	51896.6	−40975.6
SB26- 4	51899.3	−40978.7
SB27- 1	51914.2	−40973.2
SB27- 2	51911.8	−40970.9
SB27- 3	51909.6	−40973.5
SB27- 4	51912.0	−40975.7
SB28- 1	51914.4	−40974.6
SB28- 2	51911.4	−40971.6
SB28- 3	51909.1	−40973.9
SB28- 4	51912.2	−40976.8
SB29- 1	51922.9	−40982.3
SB29- 2	51917.8	−40976.9
SB29- 3	51914.6	−40980.3
SB29- 4	51920.2	−40985.3
SB30- 1	51921.1	−40981.3
SB30- 2	51917.2	−40977.8
SB30- 3	51914.6	−40980.7
SB30- 4	51918.6	−40984.2
SB31- 1	51937.1	−40977.0
SB31- 2	51933.1	−4092.58
SB31- 3	51930.8	−40974.7
SB31- 4	51934.8	−40979.2

Tab. 2　掘立柱建物座標値一覧表 2

点　名	X　軸	Y　軸
SB32-1	51933.4	−40983.2
SB32-2	51930.9	−40980.7
SB32-3	51927.9	−40984.8
SB32-4	51929.5	−40989.4
SB33-1	51941.2	−40984.2
SB33-2	51938.3	−40981.3
SB33-3	51935.6	−40984.1
SB33-4	51938.8	−40986.8
SB34-1	51961.5	−41024.9
SB34-2	51954.3	−41016.0
SB34-3	51951.0	−41019.3
SB34-4	51957.8	−41028.1
SB35-1	51945.0	−41013.5
SB35-2	51942.1	−41009.3
SB35-3	51933.0	−41016.5
SB35-4	51936.0	−41020.3
SB36-1	51940.9	−41017.1
SB36-2	51938.3	−41014.1
SB36-3	51934.9	−41017.8
SB36-4	51936.4	−41020.8
SB37-1	51948.6	−41028.1
SB37-2	51945.8	−41024.3
SB37-3	51943.0	−41026.9
SB37-4	51945.9	−41030.3
SB38-1	51944.5	−41029.8
SB38-2	51941.8	−41027.1
SB38-3	51939.3	−41029.3
SB38-4	51941.8	−41031.9
SB39-1	51943.3	−41031.9
SB39-2	51939.4	−41026.7
SB39-3	51936.0	−41029.2
SB39-4	51940.0	−41034.3
SB40-1	51954.1	−41035.3
SB40-2	51951.1	−41031.3
SB40-3	51942.8	−41037.6
SB40-4	51945.3	−41041.3
SB41-1	51940.3	−41043.9
SB41-2	51938.4	−41040.5
SB41-3	51931.1	−41044.7
SB41-4	51933.0	−41048.2

点　名	X　軸	Y　軸
SB42-1	51979.6	−41127.3
SB42-2	51977.5	−41124.2
SB42-3	51973.4	−41127.1
SB42-4	51975.2	−41130.2
SB43-1	51979.6	−41128.1
SB43-2	51978.0	−41124.9
SB43-3	51973.4	−41127.1
SB43-4	51975.6	−41130.0
SB44-1	51976.1	−41151.9
SB44-2	51973.2	−41146.8
SB44-3	51970.3	−41148.3
SB44-4	51973.1	−41153.5
SB45-1	52034.8	−40062.0
SB45-2	52031.5	−40056.3
SB45-3	52028.5	−40058.2
SB45-4	52031.9	−40063.7
SB46-1	52041.2	−40059.6
SB46-2	52039.6	−40055.8
SB46-3	52036.5	−40057.6
SB46-4	52038.5	−40061.3
SB47-1	52051.1	−40056.9
SB47-2	52049.2	−40053.8
SB47-3	52045.7	−40056.0
SB47-4	52047.5	−40059.1
SB48-1	52058.0	−40060.3
SB48-2	52055.8	−40055.9
SB48-3	52053.3	−40057.3
SB48-4	52055.5	−40061.7
SB49-1	52064.0	−40067.5
SB49-2	52061.3	−40062.1
SB49-3	52057.0	−40064.3
SB49-4	52059.6	−40069.6
SX1-1	51941.2	−40935.3
SX1-2	51938.3	−40930.3
SX1-3	51936.1	−40932.0
SX1-4	51938.9	−40936.6
SX2-1	51959.6	−40967.5
SX2-2	51957.6	−40963.3
SX2-3	51956.0	−40963.9
SX2-4	51958.2	−40968.1

Tab. 3　掘立柱建物座標値一覧表 3

3 竪穴住居（SC）（Fig.19～40・PL.5,6）

本遺跡で検出された竪穴住居は、合計15軒である。官道施工時またはその後の削平をかなりひどく受けているものと考えられ、その大部分の遺りが悪く壁の立ち上がりは５～10㎝程度である。時期的には概ね5世紀後半代に比定されるものであり、周辺域にこの時代の集落が営まれていたことが推測されるが、なかには破壊により消滅してしまっているものもあると考えられる。

SC 1 (Fig.19・PL.5)　官道沿いに位置し、SD 4（官道南側側溝）とSD51に切られている。官道周辺の削平により壁の立ち上がりは10㎝程度と遺りが悪いが、壁溝が確認されている。プランはやや不整な形状を有し、3.6m×4.2m（建床面積14.86+αm²）を測る。主柱穴は4本で、柱間寸法は約1.8mほどである。柱径は概ね10～15㎝程度と推測される。カマドはコーナーに設置されているが、遺りが悪く、袖部がかろうじて確認できる程度である。

SC 2 (Fig.21・PL.5)　官道南側の調査区東端に位置している。埋土は茶褐色砂質土ベースであったが、埋土中には焼土粒が多く見受けられており、炭化材が検出されたことから、焼失住居であると推測される。

炭化材は中央付近から放射状に散在した状況であった。また床面の中央付近は淡黄褐色土が2～5㎝の厚さで硬化していたが、貼床かどうかは不明確である。プランは隅丸長方形で、5.8m×4.0m（建床面積29.14m²）を測る。主柱穴は4本で、柱間寸法は長軸が約3.6m、短軸が約3.0mである。カマドは確認されていない。

SC 2 出土遺物(Fig.22・PL.17)

土師器

ミニチュア土器（5～8）　すべて口径3.9～4.5㎝・器高2.0～2.3㎝の小形のものである。にぶい黄橙色（10YR6/4）～橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には微砂粒・雲母が含まれる。

石製品

紡錘車（9）　本来は台形状を呈するものと推測されるが、下半分を欠失している。径4.3㎝・残存高0.9㎝である。滑石を素材としており、周縁にはケズリ痕跡がそのまま残っている。穿孔は一方からのみ行われる。

SC 3 (Fig.23・PL.5)　官道南側の調査区東端に位置している。SC 2と並存しており、規模的にも同等のものである。プランはややゆがんだ方形を呈し、一辺が約5.0m四方、建床面積が23.64m²を測る。カマドは北側に設置されており、主柱穴は4本である。柱間寸法は南北軸が約2.0m、東西軸が約2.5mで、深さ0.4mほどのピットが穿たれている。ピットの大きさは、西よりのものの方がやや大きめである。さらに、カマド右隅を除くコーナー3ヶ所に径60㎝ほどのピット状の窪みが配されている。これは住居の構築に関係するものと推測され、SC 9にも同様の状況が見出せる。詳細については不明。

また、カマドに対したコーナーの床面には、幅40㎝・深さ5～10㎝ほどのL字状の溝が検出されているが、機能については不明である。

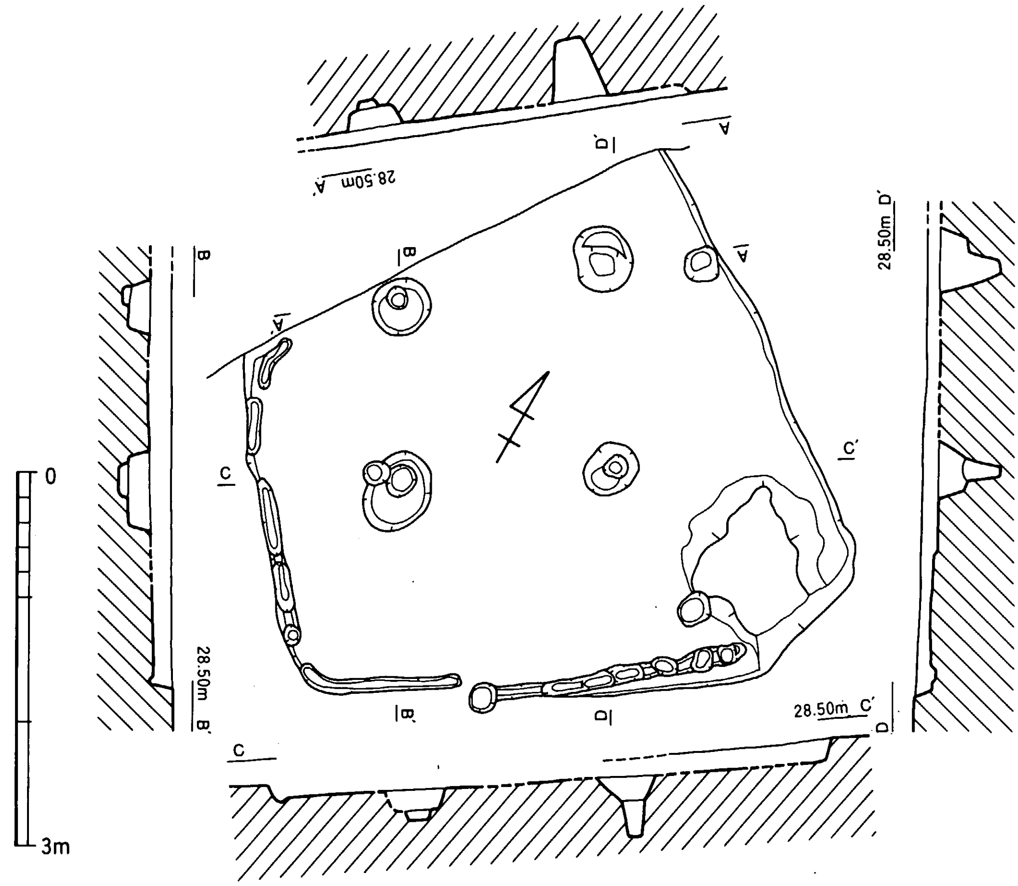
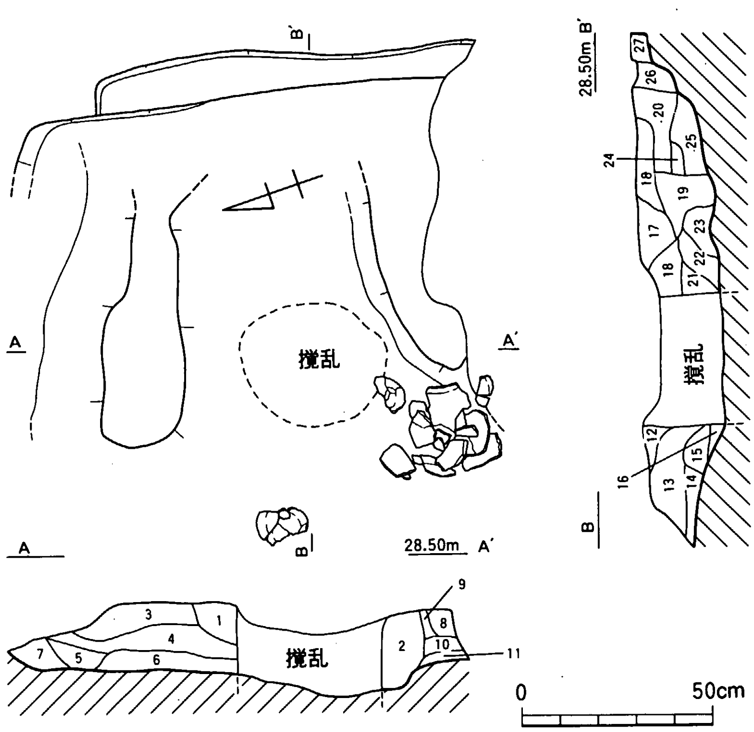


Fig.19　SC1実測図(S1/60)



1　暗褐色土(10YR 3/3)+焼土塊の混合土(天井部の崩落土)
2　にぶい赤褐色土(2YR 5/3)焼土、炭化物多く含む
3　にぶい黄褐色土(10YR 5/3)焼土粒、地山塊多く含む
4　黒褐色粘質土(10YR 3/2)地山粒わずかに含む
5　暗褐色粘質土(10YR 3/3)地山粒わずかに含む
6　褐色土(10YR 4/4)地山塊含む、袖の基底面
7　にぶい黄橙色粘質土(10YR 6/3)
8　褐色土(10YR 4/4)
9　灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり悪い
10　暗褐色粘質土(10YR 3/4)
11　褐色土(10YR 4/4)
12　黒褐色土(10YR 3/1)しまり悪い
13　灰黄褐色砂質土(10YR 4/2)焼土、地山粒多く含む
14　黒褐色粘質土(10YR 2/2)
15　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
16　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
17　褐色粘質土(10YR 4/4)地山塊わずかに含む
18　黒褐色粘質土(10YR 2/3)
19　黒褐色粘質土(10YR 2/2)焼土・地山塊含み軟質(支脚の抜き痕か)
20　褐色粘質土(10YR 4/4)しまり悪い
21　褐色粘質土(10YR 4/4)焼土粒含む
22　褐色粘質土(10YR 4/4)
23　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)黒色土粒わずかに含む
24　灰黄褐色土(10YR 4/2)地山塊含む
25　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)黒色土粒わずかに含む
26　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)黒色土粒わずかに含む
27　黄褐色粘質土(10YR 5/6)地山

Fig.20　SC1カマド実測図(S1/20)

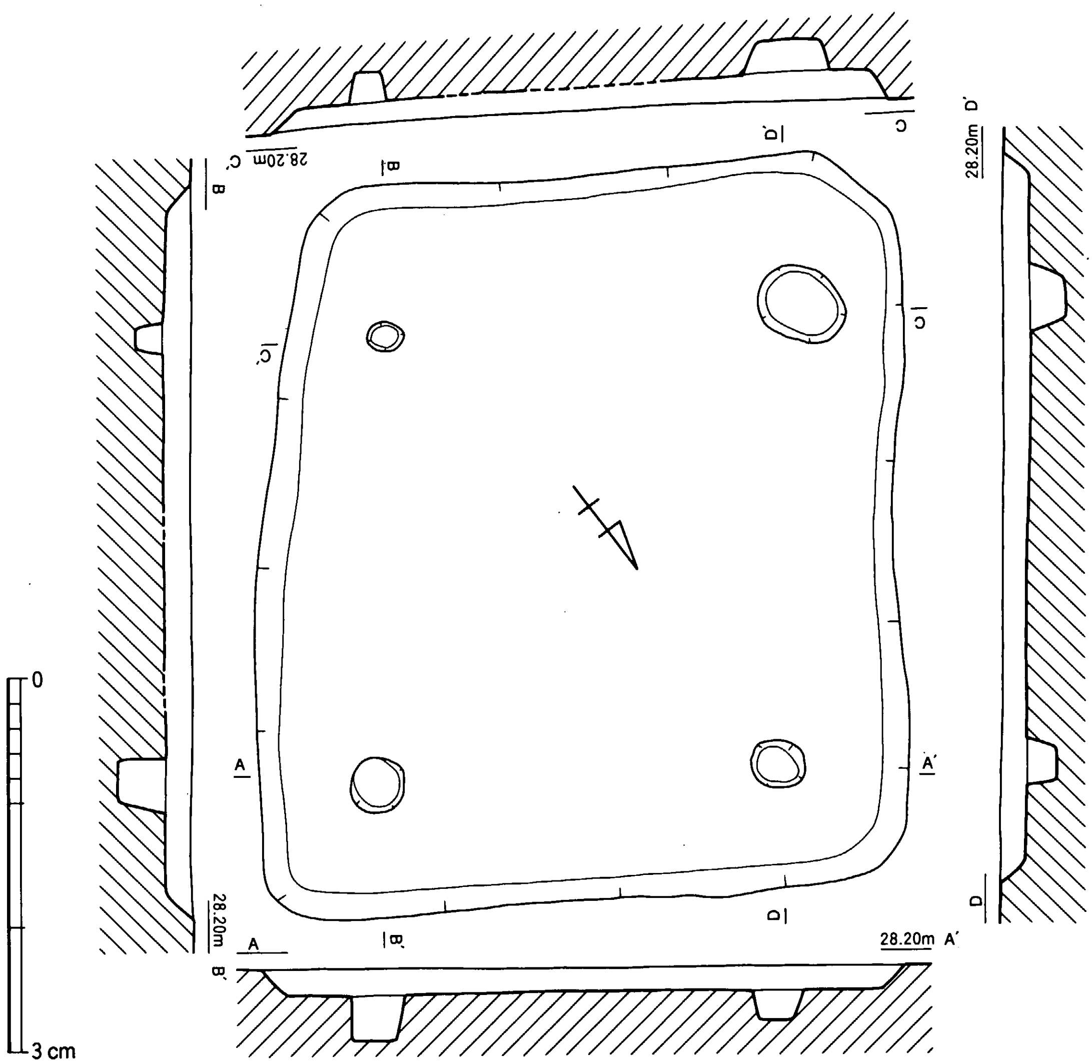


Fig.21　SC2実測図(S1/60)

SC 3 出土遺物(Fig.25・PL.17)

土師器

坏（11）　丸みを帯びた形状を有し、口縁部はやや内湾する。復元口径12.0cm・器高6.15cmを測る。明赤褐色（5YR5/8）を呈し、焼きは良い。胎土には1mmほどの砂粒がわずかに含まれている。口縁部～内面にかけてはナデ、体部外面から底部にかけてはケズリを行い、その後に内外面に丁寧な手持ちヘラミガキによる最終調整を行っている。

鉢（17）　ボールのような丸みをもった形態で、口径20.35cm・器高11.7cmである。体部内面は横方向のヘラケズリ、外面は縦

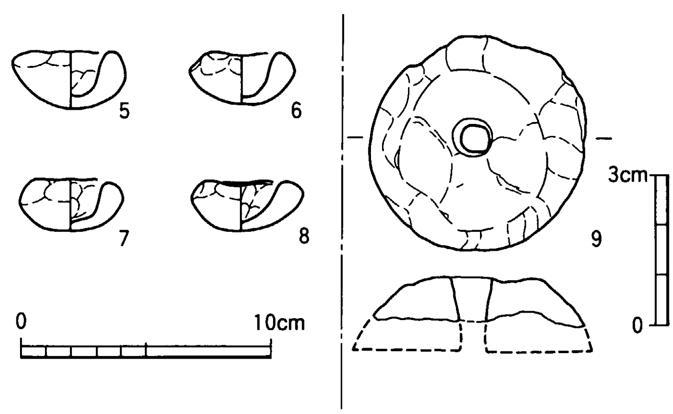


Fig.22　SC2出土遺物(S1/3,2/3)

方向のハケメ（底部のみ不定方向)、口縁部はヨコナデを施す。器表は赤色（10R5/6）～明赤褐色（5YR5/6）を呈し、赤みが強い。内外面ともに部分的に黒斑がみられる。

甕（15）　胴部に張りをもち丸い形態を呈する小甕である。器表がかなり荒れており、焼成もあまい。明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、復元口径14.85cm・胴部最大径16.8cm・器高17.8cm。

ミニチュア土器（12・13・14・16）　12～14については法量が小さすぎるため、ミニチュア土器の範疇で分類した。12は鉢を模したものと考えられ、丸みを帯びて器肉が比較的厚い。口径9.4cm・器高7.6cmを測り、外面はハケメの後にナデ、指頭？によるナデが施される。にぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には0.5～1mmの砂粒・雲母が含まれている。

13は長胴形の甕の形態に近いものと推測される。復元口径11.0cm・残存高7.8cmを測り、にぶい褐色（7.5YR5/4）～にぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。調整は、胴部内面が横方向のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデである。外面については磨滅のため不明瞭である。

14は壺の形態を有するものである。胴部には張りがあり、口縁部は短く直立させている。口径7.75cm・胴部最大径10.05cm・器高10.1cmを測り、にぶい橙色（7.5Yr5/4）～灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には1mmほどの砂粒と雲母が含まれる。

16はカマドからの出土である。口径5.0cm・器高2.0cmを測る。にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には微砂粒および雲母を含む。

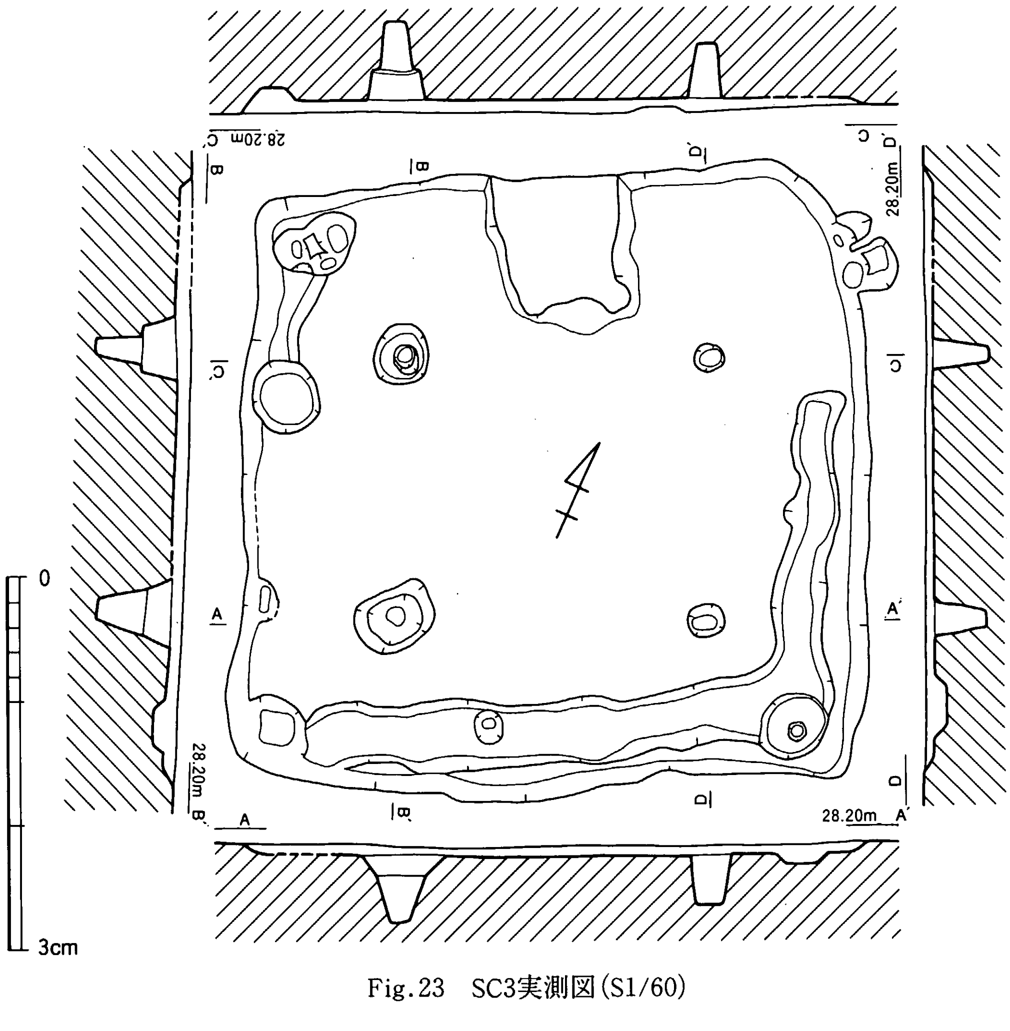


Fig.23　SC3実測図（S1/60）

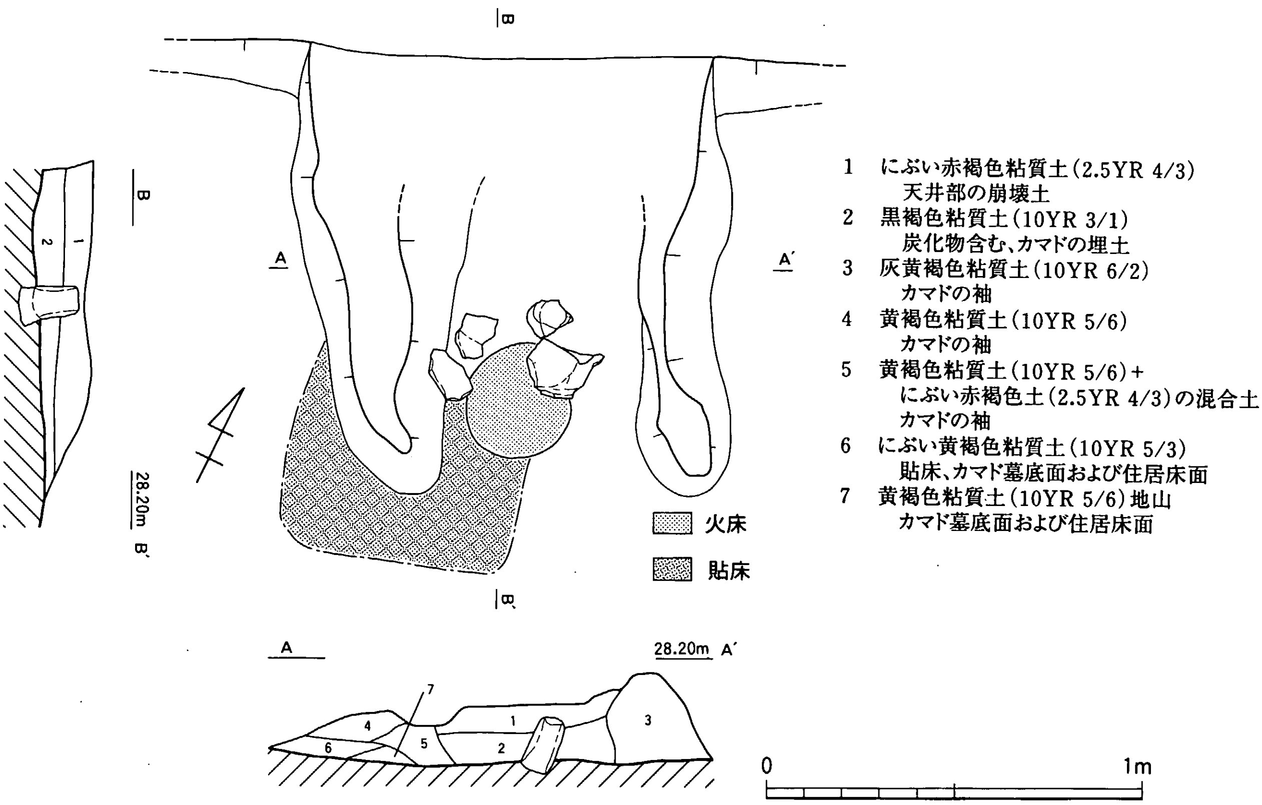


Fig.24 SC3カマド実測図(S1/20)

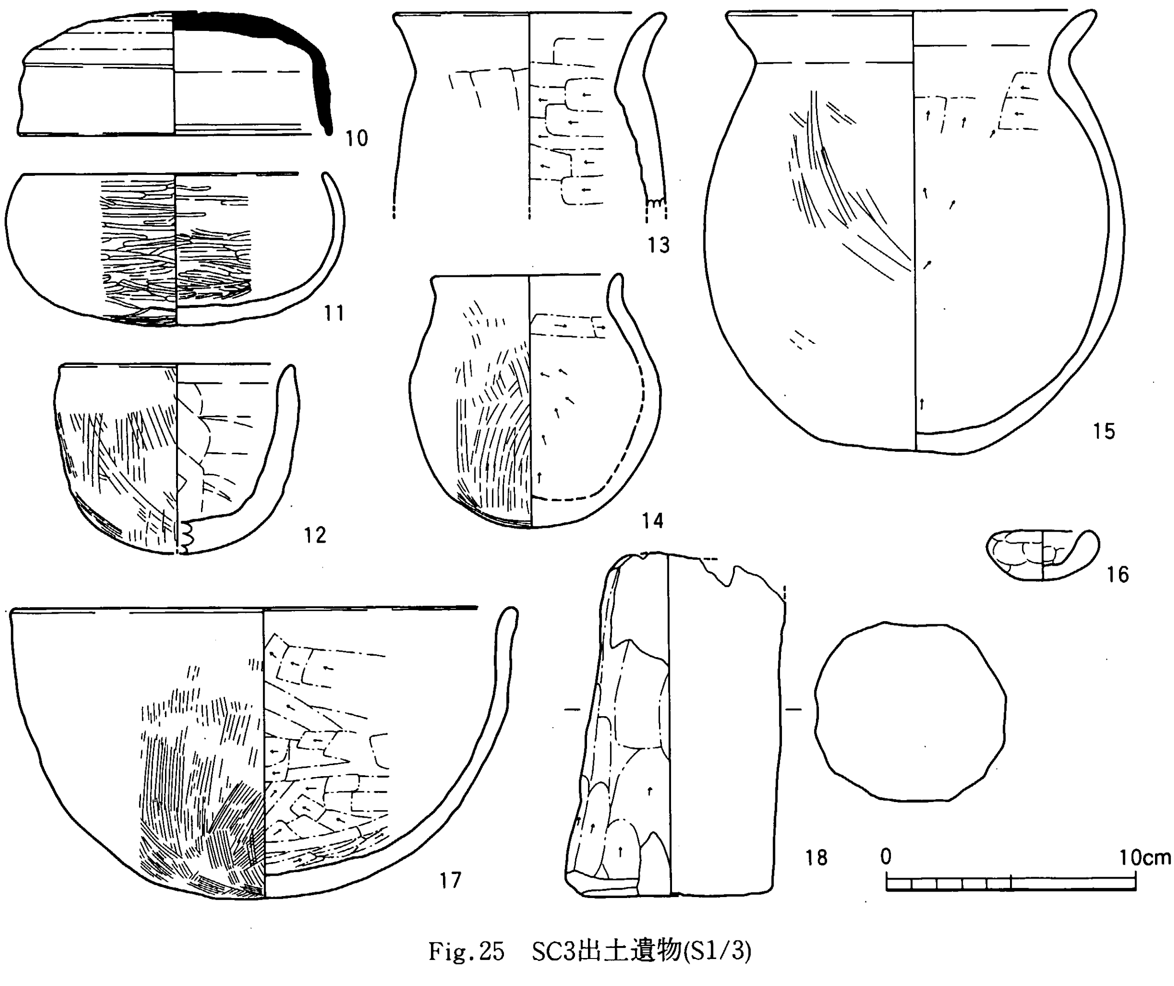


Fig.25 SC3出土遺物(S1/3)

土製品

支脚(18)　カマドに伴う支脚である。頂部の一部を欠失する。残存長13.85cm・底径8.3cmを測り、ケズリの後に丁寧にナデを施し仕上げている。浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈し、胎土には0.5～1mmほどの砂粒がわずかに含まれている。

須恵器

蓋（10）　口径12.6cm・器高5.0cmを測る。灰黄色（2.5Y6/2）を呈し、天井部の内外面に煤が付着する。焼きはややあまく、胎土には1～3mmほどの砂粒が含まれる。口径12.6cm・器高5.0cmを測る。

SC 4 (Fig.26・PL.5,6)　調査区南西のSD50東側で検出された。西側にはやや中心軸からずれてカマドが設置されているが、上層からの撹乱もあって状況が把握できなかった。また北側と南側の周縁には壁溝が検出されており、径10cm・深さ5～10cm程度の小ピットがランダムに並んでいる状況である。掘り方のプランは一部破壊されているものの方形を呈し、一辺5.2m四方で建床面積は29.64㎡である。主柱穴は4本で、柱間寸法は2.2m前後を測る。

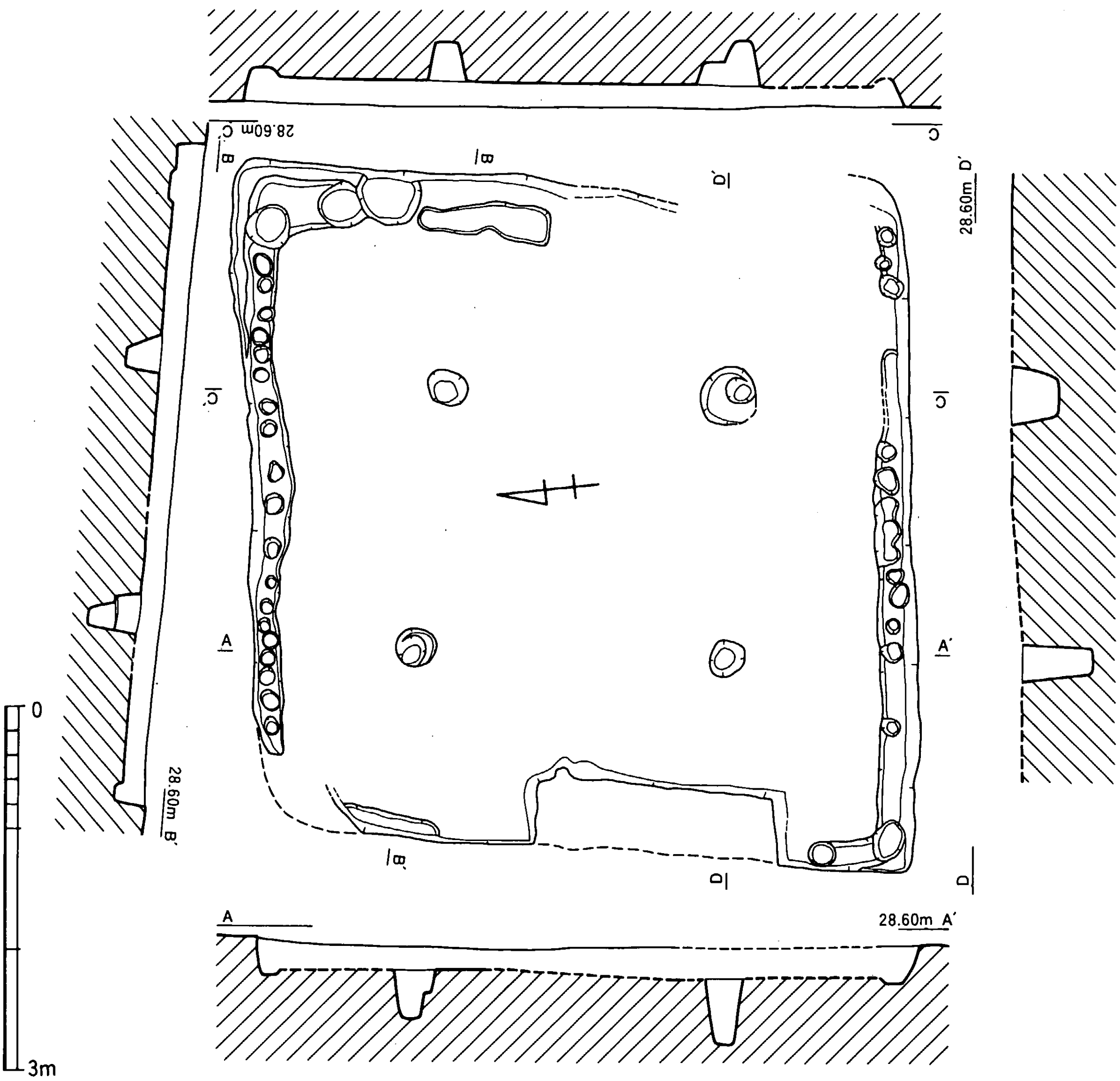


Fig.26　SC4実測図(S1/60)

SC 4 出土遺物(Fig.27・PL.17)

土師器

甕（21） 復元口径10.4cm・胴部最大径13.8cm・器高14.3cmを測る小甕である。外面は不定方向のハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には0.2～2mmほどの砂粒・細かい金雲母が含まれる。

甑(20) 復元口径16.05cm・底部孔径1.9cm・器高12.3cmの小形のものである。器肉は比較的厚い。にぶい橙色（7.5YR7/4）～明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には0.5mmほどの砂粒が含まれる。内面はヘラケズリ、外面はナデによる調整が施される。

須恵器

蓋（19） 復元口径14.1cm・器高4.9cmを測る。天井部と体部の境目は、若干の稜が残るものの丸みを帯びており不明瞭である。端部には沈線状に窪んだ状態である。天井部は平坦でヘラケズリ、その他はナデを施す。灰白色（10Y7/1）を呈し、胎土は砂粒がわずかに含まれるが精良である。

石製品

紡錘車（22） 径4.15～4.3cm・厚さ1.5cm・重さ36.7gを測る。台形状を呈し、裾部はやや丸みをもつ。素材は滑石で、穿孔は二方向から行われ、面取りおよび研磨は非常に丁寧である。

SC 6 (Fig.28) SC 4 から南に約8.0mの付近に位置している。方形、主柱穴は4本であると推測されるが、削平と撹乱が著しく遺存状況はかなり悪い。一辺の大きさはおよそ4.0m前後と考えられる。

SC 7 (Fig.29) SC 4 ・ 6 からSD50を挟んだ西の反対側で検出された。SD180に切られている。遺物が出土していないため、時期については不明確である。掘り方のプランはゆがんだ方形で、4本の主柱穴はやや南よりにずれて配されている。約4.0m四方で、建床面積は16.68㎡である。削平が著しく遺存状況が悪いため、カマドは確認できなかったが、南よりの柱間に被熱？により若干硬化した箇所が確認されており、ここに設置されていた可能性も考えられる。柱間寸法は、南北軸が1.8～2.0m、東西軸が3.0mを測り、径は40cm程度のピットである。

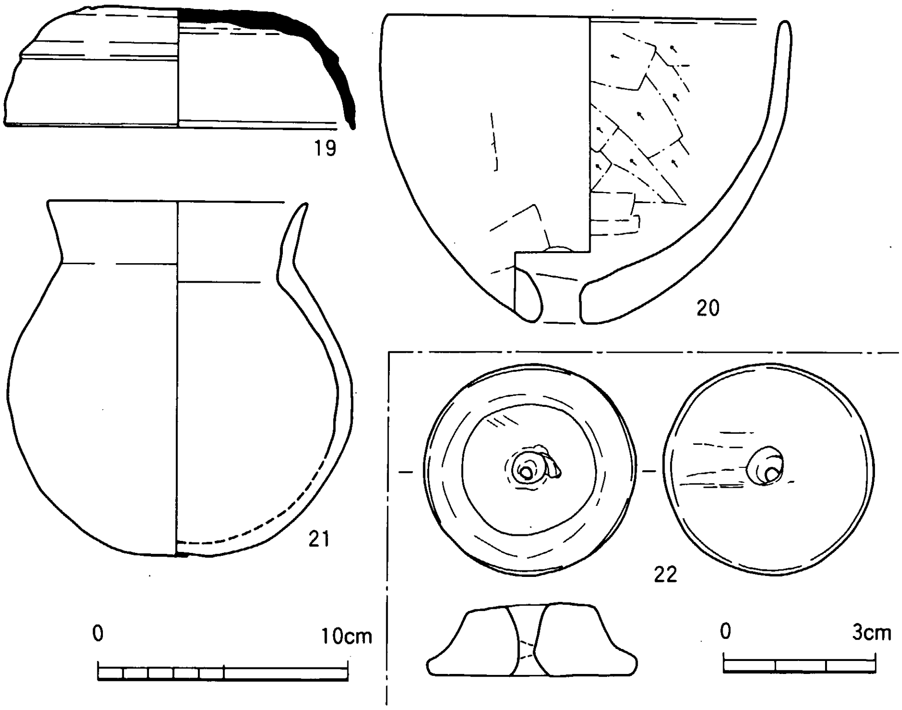


Fig.27　SC4出土遺物(S1/3,2/3)

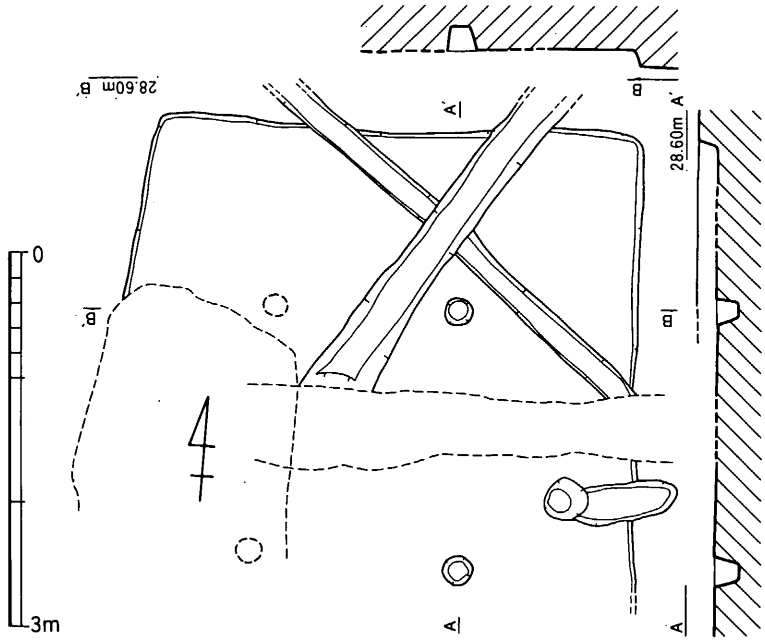


Fig.28　SC6実測図(S1/60)

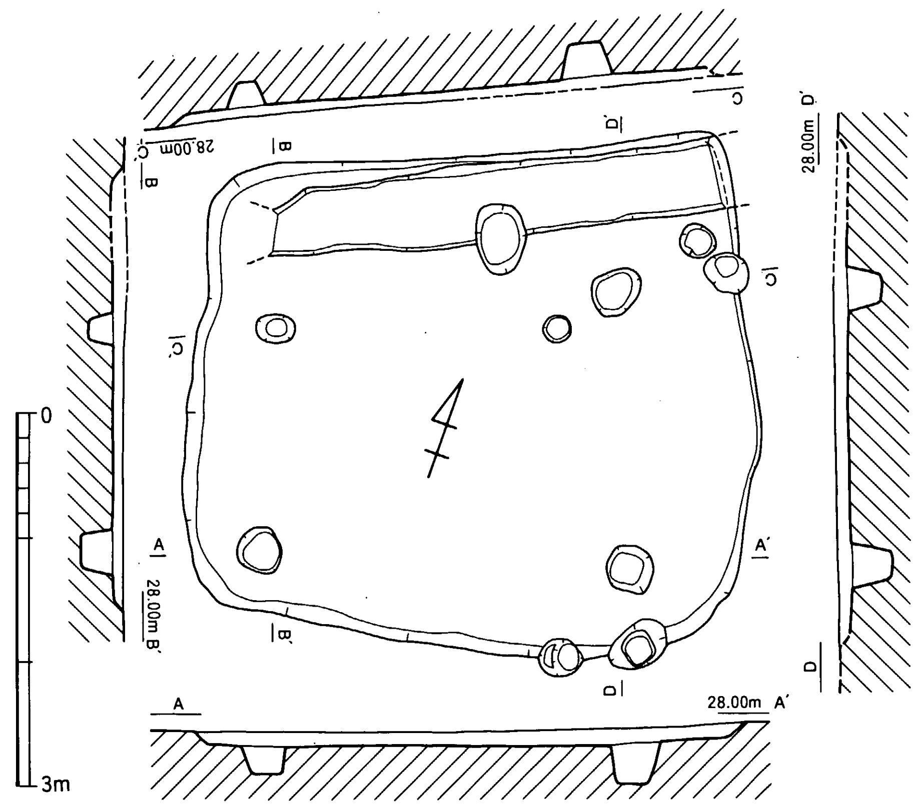


Fig.29　SC7実測図(S1/60)

SC 9（Fig.30・PL.6） 調査区東南端で検出された。プランは約5.0m四方の整った方形で、建床面積は24.52㎡である。カマドは北西面に設置されており、壁外への張り出しはみられない。床の周縁には壁溝が巡り、径5cm・深さ5～10cmのピットがランダムに並んでいる。また、住居の各コーナーには、深さ40cm程度の不整な円形の土坑が掘られている。これは住居の埋土を除去した時点で検出されたもので、あくまで住居の構築に伴ったものと考えられる。この手の住居は、本遺跡では他にはSC 3 にみられるのみである。主柱穴は4本で、柱間寸法は南北軸が2.0～2.3m、東西軸が3.0mを測る。

遺物は土師器の蓋・坏が多く、カマドの右袖付近（Fig.31）とカマド左側のコーナー付近（Fig.32）にまとまって出土しており、住居の廃絶に伴う一括資料であると考えられる。後者については土坑に伴うものではなく、住居に伴うものと考えられる。これらについては、土器の遺存状況も良く、廃棄されたというよりは放置した（された？）といった感じを受ける。

SC 9 出土遺物（Fig.35～37・PL.17～19）

土師器

蓋（23～32） やや丸みを帯びつつも平坦な形状の天井部を有し、口縁部はハの字状に外反して延びている。体部から口縁部にかけては、ストレートにのびるもの（23～27・32）と緩やかに屈曲しながら開くもの（28～31）に分かれている。法量は、口径12.95～14.0cm・器高4.4～5.1cmの範囲に納まる。

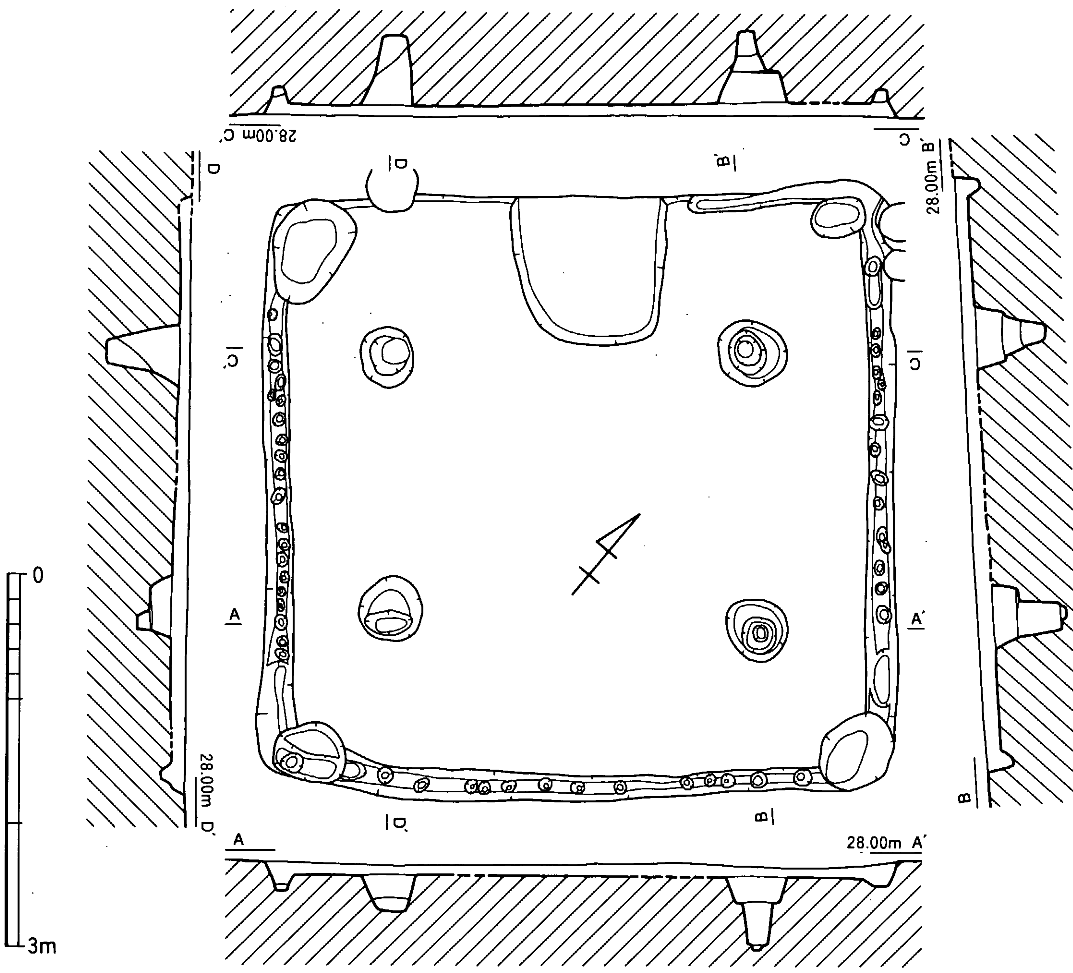


Fig.30　SC9実測図（S1/60）

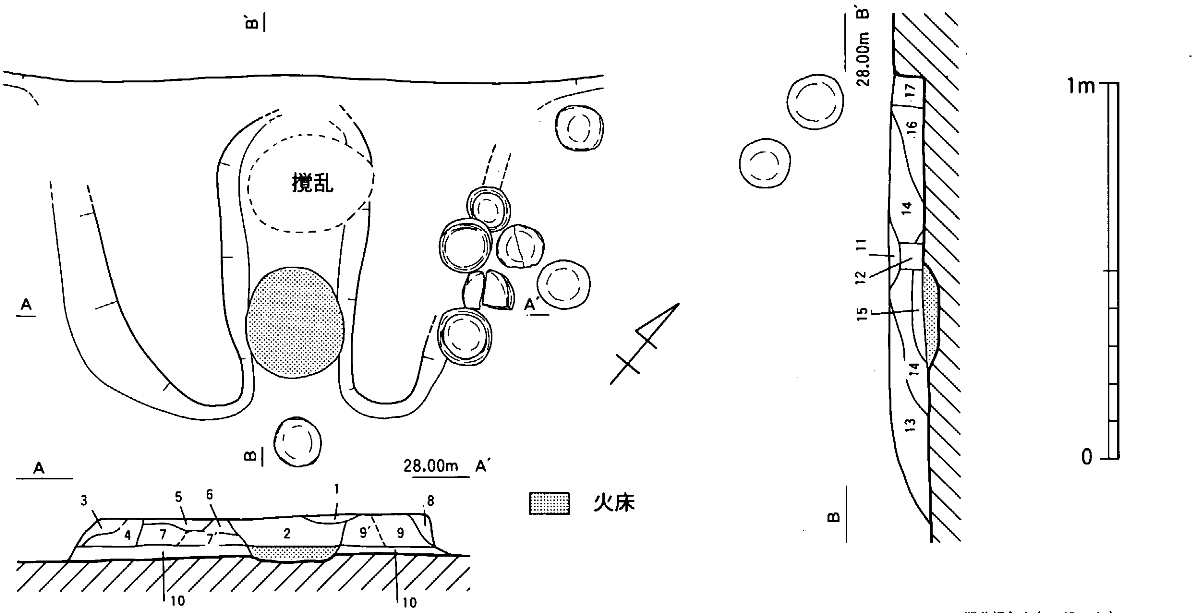
調整技法については、手持ちヘラミガキが行われるもの（23～28・30・31）が主体であるが、なかにはナデのみが施されるもの（29・32）もある。ヘラミガキは、天井部の内外面には不定方向、体部の内外面には横方向に行われており、非常に細かい。この場合、坏などの器種も含めて黒色処理がなされているケースが多く、SD50で出土している資料とも類似している点である。色調は、褐色のものもあるが基本的には橙色（7.5YR6/6）～明赤褐色（5YR5/8）のものが多い。

胎土は0.5～1mmの砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれており、焼きは良い。また、30の天井部外面には「×」のヘラ記号が確認できる。

坏（33～54）　①須恵器の坏を模倣したもの（33～51）19点、②丸い形態をもつもの（52～54）3点の2つに分類される。

①については、口径11.0～12.0cm・器高4.3～5.4cmの範囲である。調整は、底部の内外面は不定方向で、それ以外はすべて横方向の丁寧な手持ちヘラミガキがなされており、このうち38・39・44・45については、蓋にみられたような黒色塗装を施しているものである。胎土は非常に精良で、焼成も良い。この一連の土器群は、橋口達也氏のいう「擬須恵土師器」と同一の範疇で考えられ、本遺跡ではSD50から多く出土しているものであるが、SD50と比べると黒色塗装が施されているものが少ない。

②については、54のみ口縁部が内湾せずに直立して立ち上がっていることを除けば、ほぼ同様のものである。口径11.8～12.7cm・器高5.2～6.1cmの範囲で、橙色（7.5YR6/6）～灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。体部から底部の外面は主に横方向のケズリ、内面はナデの後に手持ちヘラミガキ、口縁部はヨコナデによる最終調整が行われている。ただし53・54については、磨滅により不明瞭である。また52は、内面のみ黒色塗装がなされている。胎土には金雲母が多



1　暗褐色砂質土（10YR3／3）
　住居の埋土
2　にぶい赤褐色粘質土（2.5YR4／3）
　天井部の崩壊土
3　褐色粘質土（10YR4／4）
4　褐色粘質土（10YR4／4）
　黄褐色土塊多く含む
5　にぶい黄褐色粘質土（10YR4／3）
6　にぶい赤褐色土（2.5YR5／3）
7　にぶい黄橙色硬質土（10YR7／2）
7′　灰白色硬質土（10YR7／1）
8　明黄褐色硬質土（10YR6／6）
9　褐色粘質土（10YR4／4）
9′　灰黄褐色硬質土（10YR6／2）
10　褐色粘質土（10YR4／4）
　カマドの基底面、貼床
11　暗褐色砂質土（10YR3／3）
　住居の埋土
12　黒褐色粘質土（10YR2／2）
　支脚の抜き痕か
13　暗褐色粘質土（10YR3／3）
　住居の埋土、小礫を含む
14　明黄褐色土（10YR6／6）+
　暗褐色土（10YR4／4）の混合土
15　にぶい赤褐色土（2.5YR5／3）
16　黒褐色土（10YR2／3）
17　黒色土（10YR1.7／1）
　炭化物、焼土粒、砂粒を多く含む

Fig.31　SC9カマド実測図（S1/20）

量に含まれる特徴がある。

壺（55・59）

55は底部のみ残存する。底径5.0cm・残存高7.0cmである。にぶい赤褐色(2.5YR5/4)～灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には0.2～2mmの砂粒が含まれる。調整は、外面はナデ、内面はケズリがみられる。

59は体部下半を欠失する。口径15.0cm・胴部最大径17.5cm・残存高12.35cmである。橙色（5YR6/6）～灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、内面がやや黒ずんでいる。胴部内面は不定方向のヘラケズリ、外面はハケメの後にナデ消している。口縁部内面は横方向のハケメが施される。

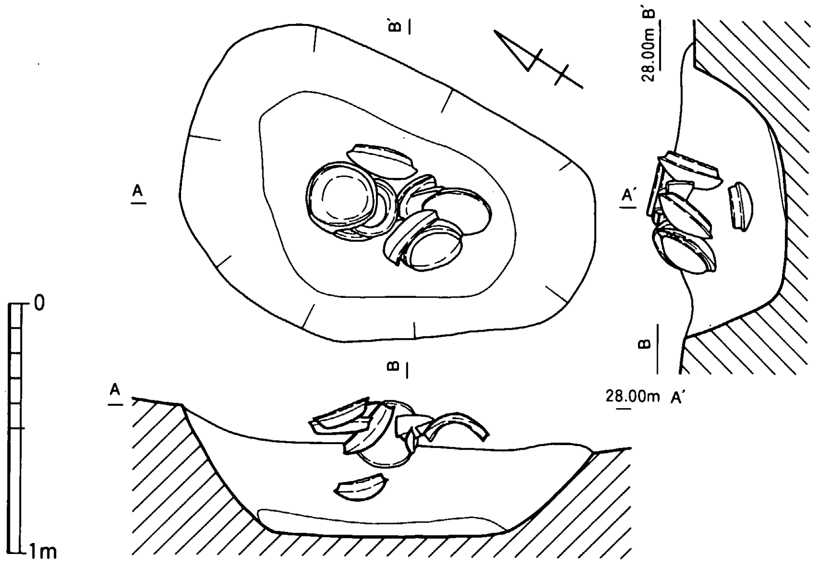


Fig.32　SC9カマド左側土坑実測図(S1/30)

甕（56・58・60）　56は復元口径15.0cm・胴部最大径20.6cm・残存高13.0cmを測り、胴部下半を欠失する。やや小形のものである。口縁部はナデ、胴部内面は不定方向のケズリ、外面の胴部上半は縦方向のハケメ、下半はケズリによる調整が施されている。色調は、橙色（5YR6/6）～にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には1～2mmの砂粒が含まれる。

58は長胴形を呈し、復元口径18.4cm・胴部最大径25.2cm・残存高32.0cmを測る。胴部内面はケズリ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデ。また胴部外面にはタタキの痕跡がわずかに確認できる。にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には1～2mmの砂粒が含まれる。

60は胴部に強い張りをもつもので、復元口径20.3cm・胴部最大径33.6cm・器高30.05cm。全体的にゆがみが大きい。明赤褐色（2.5YR5/6）～にぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、外面には煤が付着している。外面は縦方向のハケメの後にナデ、内面はケズリによる調整を施す。

甑（57）　復元口径27.0cm・底部孔径8.75cm・器高28.2cmを測る。把手は両方とも欠失している。明褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土には1～3mmの砂粒が含まれる。

SC10(Fig.33・PL.6)　調査区東南端に位置し、SC9に切られている。形状はSC9と同一でほぼ方形を呈し、SC9はSC10が建て替えられたものと推測できる。遺存状況は非常に悪く、壁の立ち上がりは5cm程度しか残っていない。規模は約4.0m四方で、建床面積は17.54㎡を測る。主柱穴は4本で、柱間寸法は2.0m前後である。カマドはSC9と同じく北西面に設置されている。壁外への張り出しはみられないが、そのほとんどが削平されており状況は不明確である。

SC12(Fig.34)　調査区の東南端に位置し、SC9・10と一連のものと推測できる。SD66に切られており、また撹乱による破壊がひどく遺存状況は悪い。プランは方形を呈するものと考えられ、規模は5.0m×4.0+αmである。主柱穴は4本であると推測される。

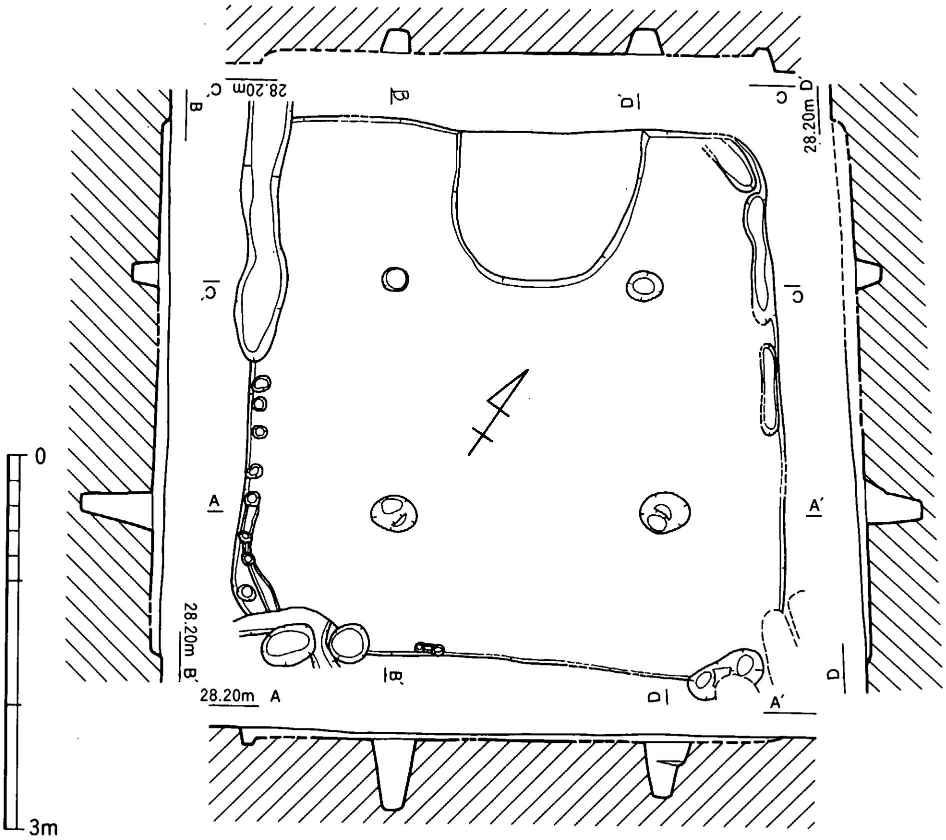


Fig.33　SC10実測図(S1/60)

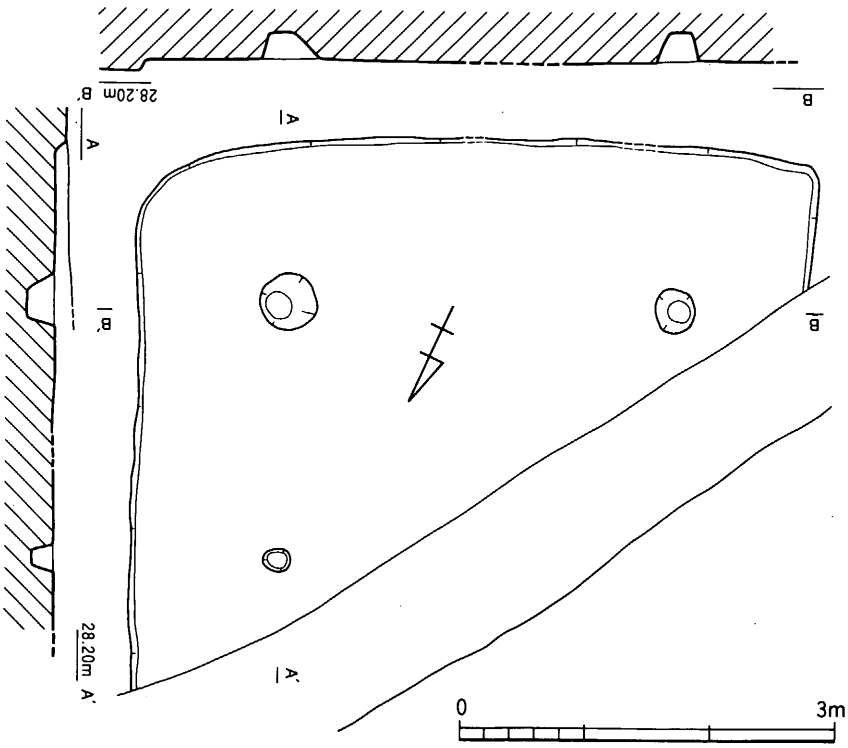


Fig.34　SC12実測図(S1/60)

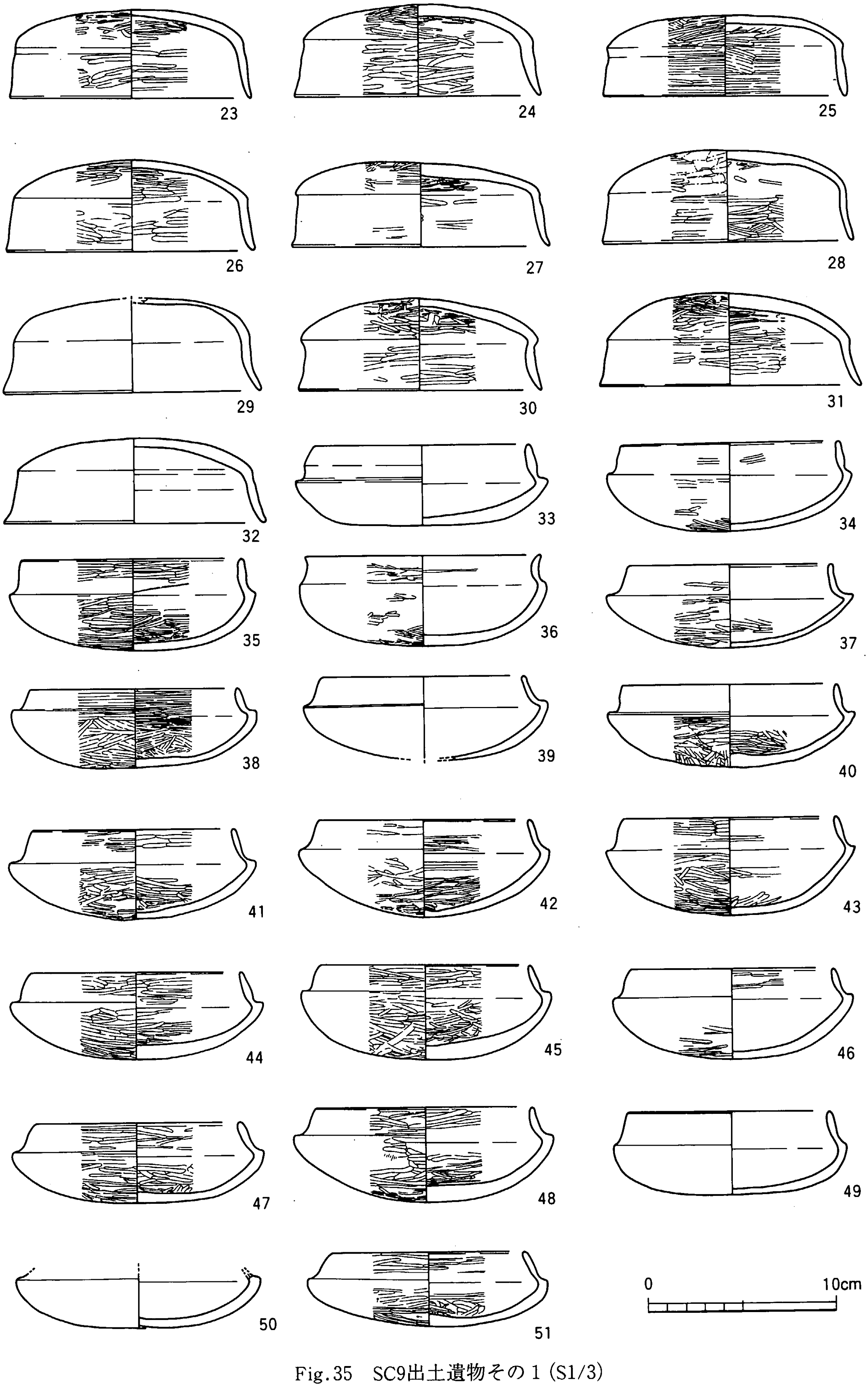


Fig.35　SC9出土遺物その１(S1/3)

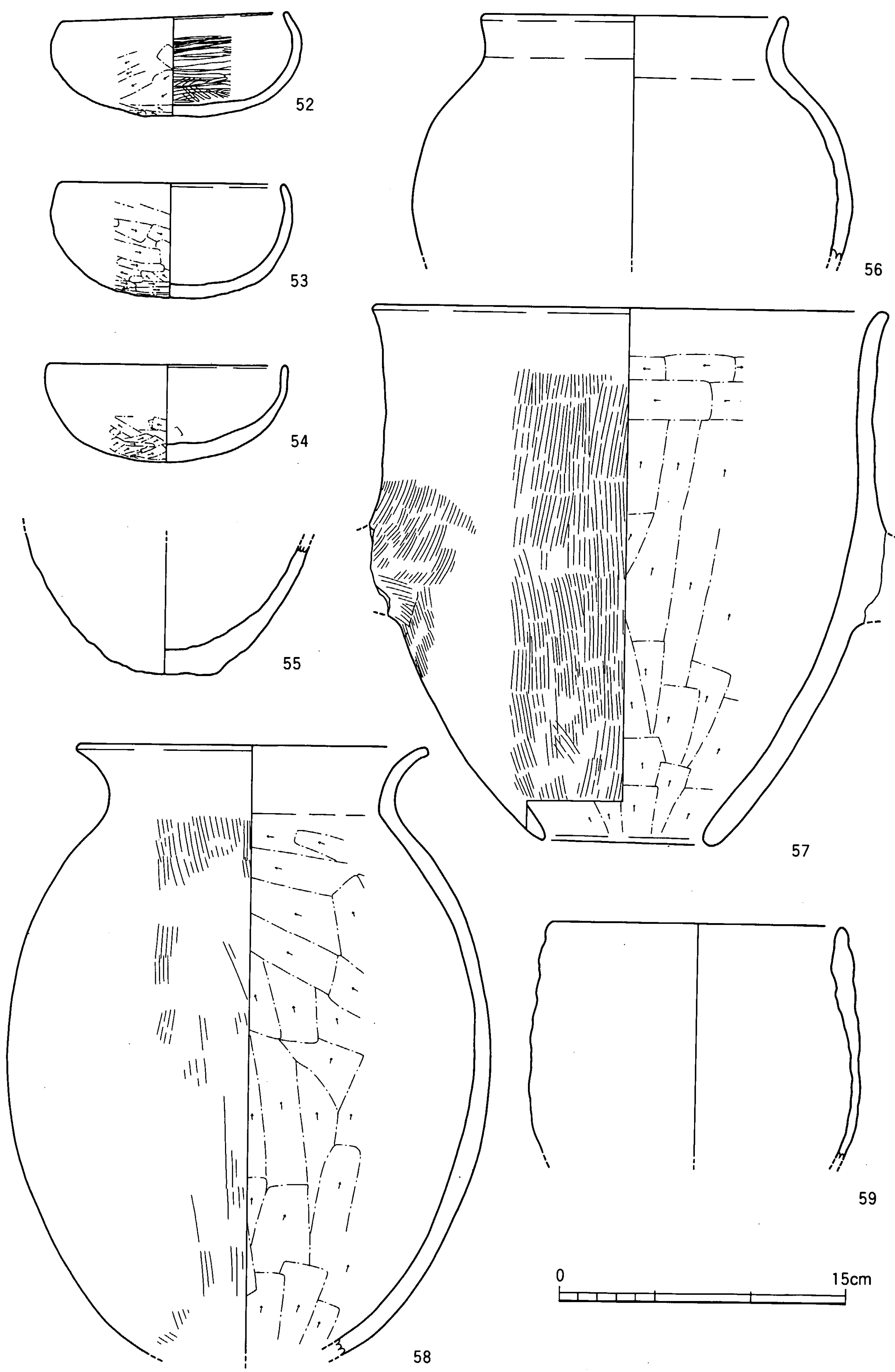


Fig.36　SC9出土遺物その２(S1/3)

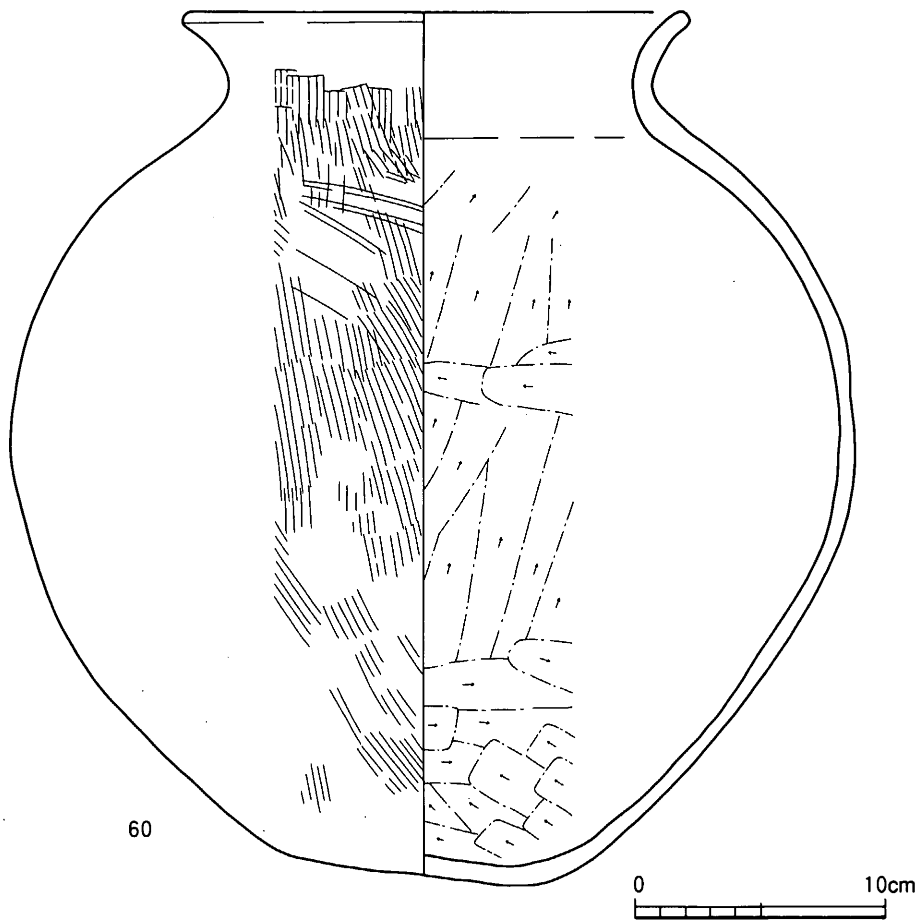


Fig.37 SC9出土遺物その3 (S1/3)

SC14(Fig.38) 調査区西端の官道路面付近で検出された。SC13・15と切り合い関係があり、新旧は（古）SC15→SC14→SC13（新）となる。プランは方形で、3.5～4.0m四方の規模をもつものと推測できる。建床面積は19.29＋α㎡。住居の1/3ほどを防空壕に破壊されているが、主柱穴は4本であると考えられる。柱間寸法は、南北軸が2.7m、東西軸が2.0mである。

SC14出土遺物(Fig.39,40・PL.19,20)

土師器

坏（61～65・71） 丸みを帯びた形態を有し、口縁部付近でやや内湾するものである。65のみは端部がやや外方に開いており、黒色塗装がなされるものである。法量は、口径12.0～13.0cm・器高5.0～5.5cmの範囲を示している。調整は、63・64については磨滅が著しいため不明確であるが、その他のものは内外面ともに手持ちヘラミガキによる最終調整が行われている。焼成は全体的に良く、明赤褐色（7.5YR5/6）～橙色（10YR6/4）を呈する。胎土は微砂粒・雲母・赤褐色粒がわずかに含まれる場合があるが、概ね精良である。

甑（66・67・73） 法量こそに違いがあるものの、形状はほぼ同一のものである。直線的に外方に延びる胴部を有し、口縁端部を弱く外反させる。66が口径29.75cm・復元底径6.8cm・器高30.75cmで把手は欠失、67が口径32.65cm・復元底径9.0cm・器高28.9cm、73が口径cm・底径cm・器高cmを測る。73は底部を欠失しているため不明確であるが、66・67は単孔である。

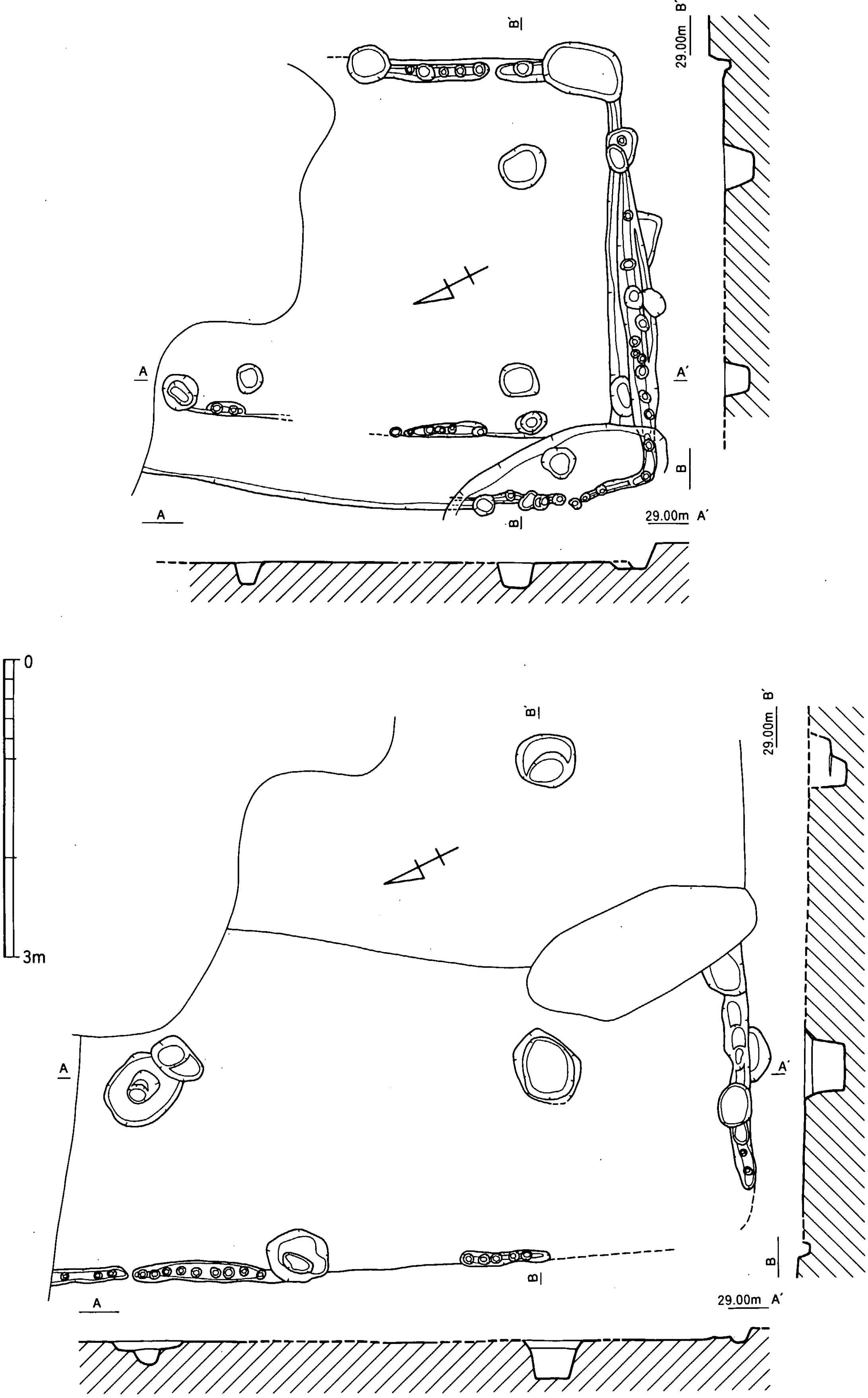


Fig.38　SC14,15実測図(S1/60)

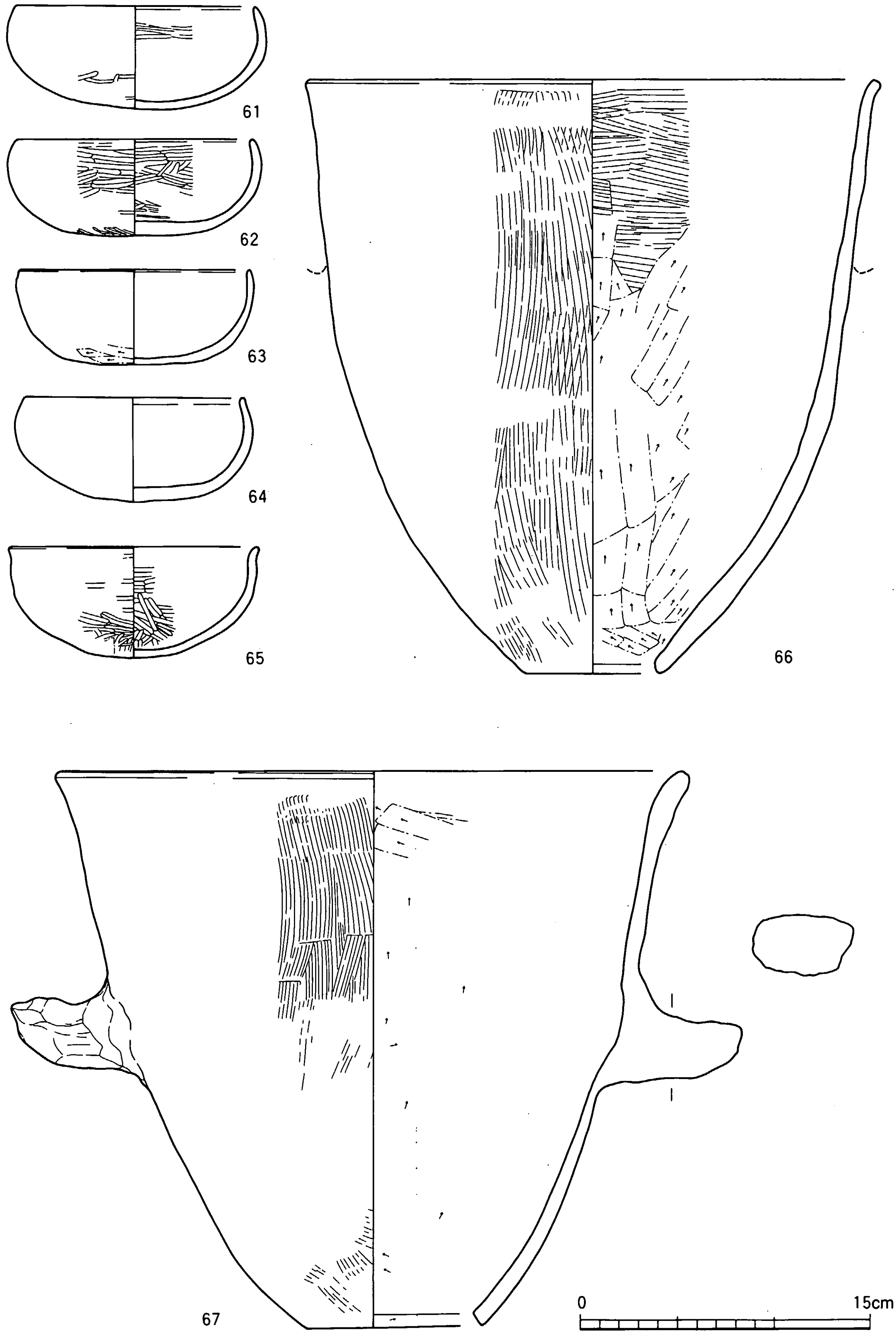


Fig.39　SC14出土遺物その１(S1/3)

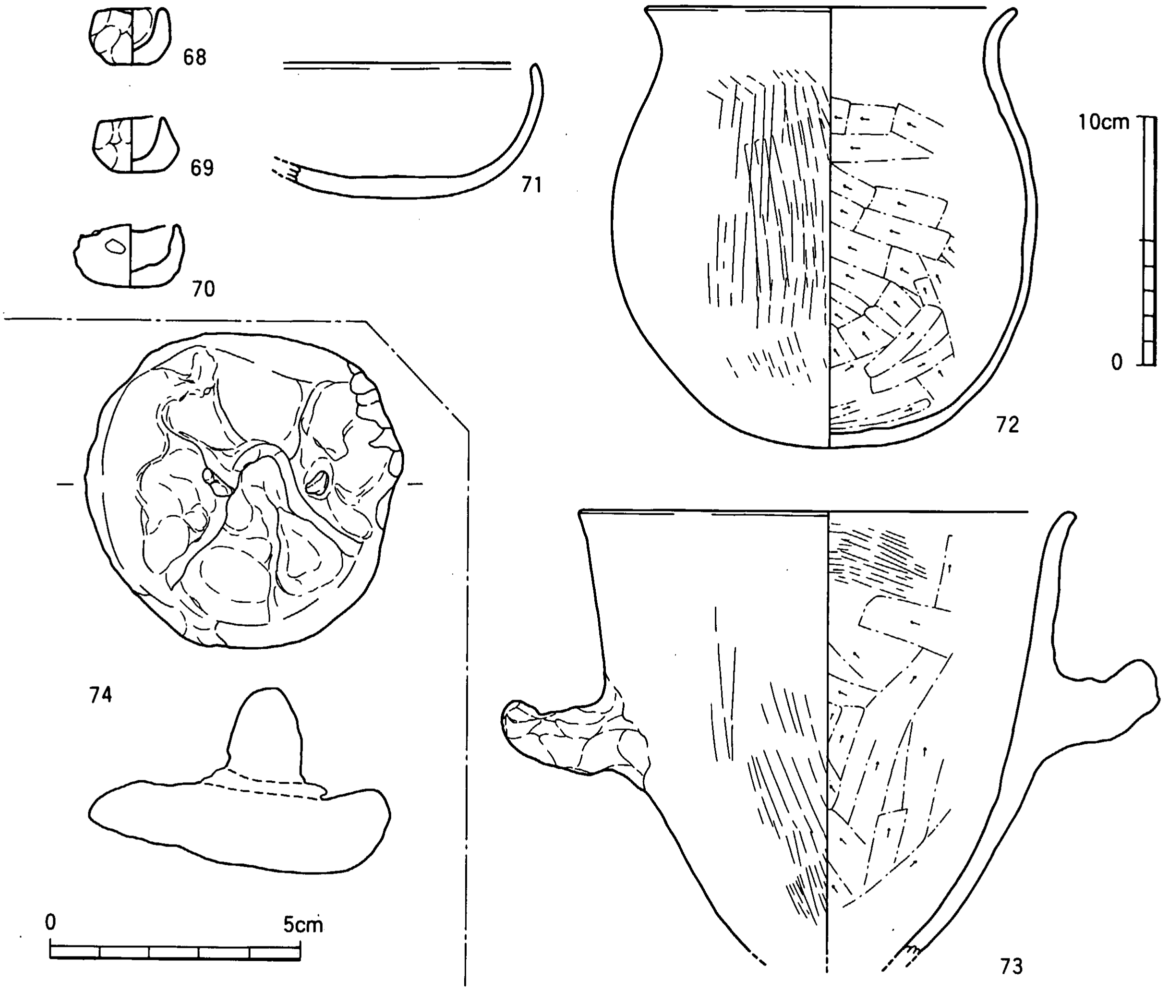


Fig.40　SC14出土遺物その２（S1/3,2/3）

甕（72）　丸みをもち張りのある胴部で、器肉は薄手の小甕である。胴部内面はヘラケズリ、外面は縦方向のハケメで下半はその後にナデ、口縁付近はヨコナデが施される。口径15.0cm・胴部最大径17.55cm・器高17.6cmを測り、明赤褐色（5YR5/8）～にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。胎土には1mmほどの砂粒が含まれる。

ミニチュア土器（68～70）　にぶい黄橙色（10YR6/3）～明黄褐色（10YR7/6）を呈し、胎土には微砂粒・雲母細片が含まれている。造りは非常に雑である。

土製鏡（74）　径約6.2cmを測り、やや大きめのものである。指頭により紐を引き出しているが、雑な造りでゆがみが大きい。鏡面にも凹凸がみられる。穿孔は一方からのみ。

SC15(Fig.38)　削平により大部分が破壊されているが、主柱穴の大きさ・距離・一辺の規模を考えると、本遺跡で最大の竪穴住居であると推測される。一辺の長さは7.0＋αｍで、主柱穴の掘り方も径60cmを測る。壁についてはそのほとんどが削られており、壁溝のみがかろうじて検出された。カマドの位置は不明確であるが、壁の西面付近には被熱？による硬化土が確認されており、カマドの被熱部分の残骸である可能性が考えられる。

4 溝（SD）（Fig.41～67・PL. 7 ～10）

SD 1 （Fig.41,42・PL.7,8） 官道の北側側溝に当たる溝である。主軸はN－58°36′－Wの方向である。上幅は約2m程度、下幅は約0.5～1m、深さ約１mの大きさを原則とし、約360mに渡って直進している。ただし、深さについては最深部では1.5m程の所も確認される。形状は二段掘りを呈しており、場合によっては段がテラス状になっている箇所もある。また、溝の幅員が場所によって部分的に広くなっている箇所がAブロックに2ヶ所、Bブロックに1ヶ所確認されており、こういった場所にSX 1 やSX 2 のような橋状の設備が設けられている。

溝の上場の肩やテラス部分には、径15～20cm・深さ20～30cmで逆円錐状を呈する杭を打ち込んだような不規則に連続するPitが部分的に確認されている。これは、建物区周辺や軟弱な地盤の付近に多く検出されており、不規則に4～6mスパンで並んでいることから、土留め補強工事などの痕跡である可能性も想定される。溝の床面レベルについては、標高28.00m前後を測り、その差は±20cmの範囲で西に向かって傾斜している。土層の堆積状況はレンズ状の純堆積を示しており、水成堆積を示すような状況は確認されていないことや床面はフラットではなく所々に土坑状のくぼみがみられることなどから、側溝の排水機能は、水路的なものというよりは、むしろ自然浄化を狙ったものである可能性も考えられる。また、遺物は溝の中位以上から出土する傾向が高く、大部分が溝の最終埋没の段階で廃棄されているものと考えられる。

SD 1 出土遺物（Fig.43～45・PL.20,21）

土師器

坏（75～78・83・97・98・101） 101以外はすべて坏ｄである。このうち77･78･83･97･98･101には底部外面に墨書が施される。83が「○」・101が「大」と確認できるが、その他の判読は不明。体部と底部の境付近をヘラケズリの後に、体部内外面に丁寧な回転ヘラミガキを行っている。法量は、75が口径13.6cm･底径8.2cm･器高2.7cm、76が口径13.8cm･底径7.1cm･器高3.2cm、77が口径13.6cm･底径6.7cm･器高3.35cm、78が口径13.6cm･底径7.6cm･器高2.9cmである。色調は、2.5YR5/8～5/6で明赤褐色を呈する。

皿（80） 体部と底部の境は明瞭で、ストレートに立ち上がる坏ａである。全体の1/3が残存する。口径19.6cm･底径15.6cm･器高1.85cmで、色調は橙色（5YR6/6）、胎土は微砂粒と金雲母を多く含む。

椀（91･109） 91が口径17.75cm･高台径9.4cm･器高6.35cm、109が口径22.9cm･高台径11.6cm･器高9.7cmを測る椀cである。高台部は

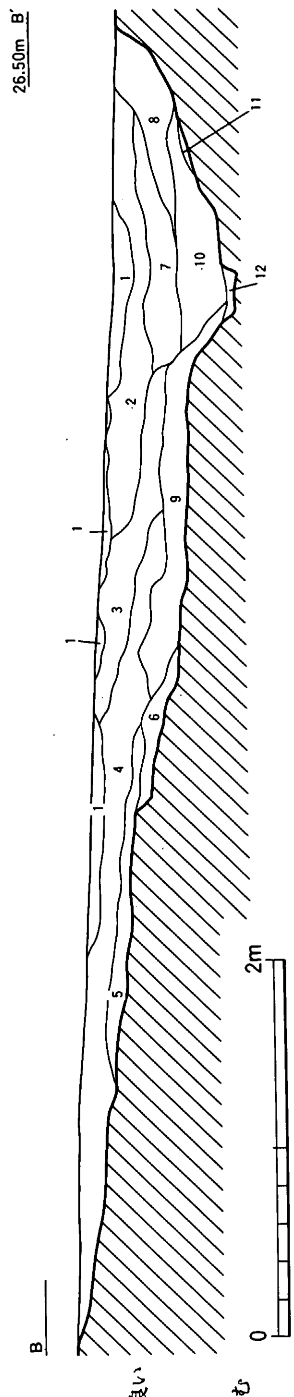
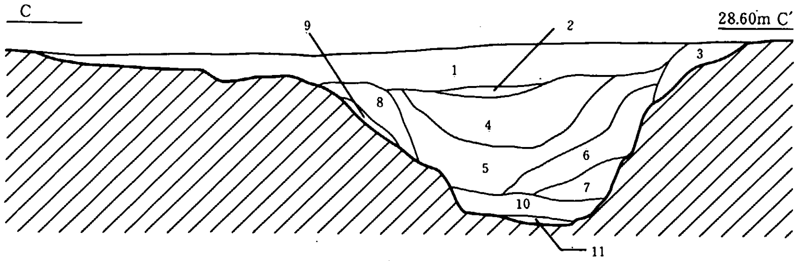
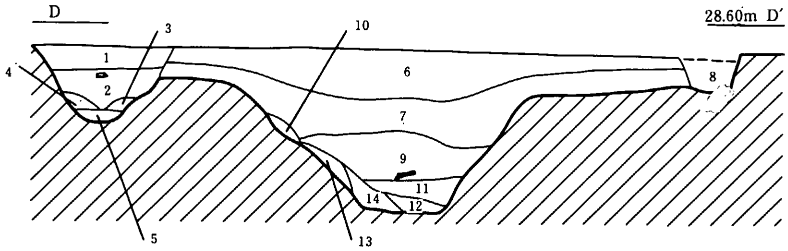


Fig.41　SD1土層図(B-B')(S1/40)

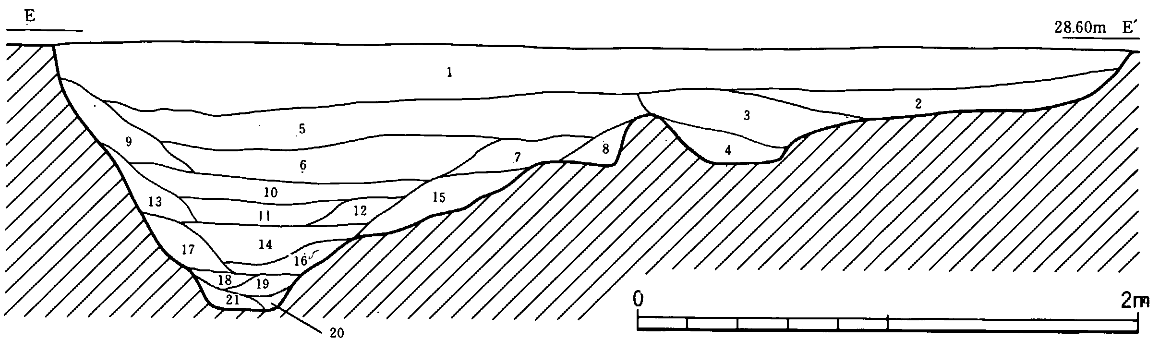
1　暗褐色土(10YR 3/4)
2　黒褐色土(10YR 2/3)
3　黒色粘質土(10YR 1.7/1)
4　黒色土(10YR 1.7/1)黄褐色土粒少し含む
5　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)キメが細かく､しまり良い
6　褐色土(10YR 4/4)炭化物を非常に多く含む
7　褐色砂質土(10YR 4/4)
8　暗褐色砂質土(10YR 3/3)
9　黒色粘質土(10YR 2/1)しまり良い､粗砂を多く含む
10　黒褐色砂質土(10YR 2/2)
11　にぶい黄褐色粗砂(10YR 4/3)
12　にぶい黄褐色粗砂(10YR 4/3)



1 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
2 にぶい黄褐色粘質土(10YR 5/4)
3 黒褐色土(10YR 2/3)
黄褐色土粒多く含む
4 黒色粘質土(2.5Y 2/1)
5 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
黄褐色土粒、焼土粒わずかに含む
6 黒褐色粘質土(10YR 3/1)
7 黒色粘質土(10YR 2/1)+
黄褐色粘質土(10YR 5/8)の混合土
8 黒色粘質土(10YR 2/1)+
黄褐色粘質土(10YR 5/8)の混合土
9 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
10 黒色粘質土(2.5Y 2/1)ベース
黄褐色土粒、粗砂含む
11 褐灰色粗砂(10YR 4/1)



1 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)
2 にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3)
3 暗灰オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)
4層と似る
4 暗灰オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)
黄褐色土粒わずかに含む
5 暗褐色土(10YR 3/3)
土器片多く含む、しまり悪い
6 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
7 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
微粒砂を多く含む
8 褐色粘質土(10YR 4/4)
9 黒褐色砂質土(10YR 2/2)
土器片多く含む
10 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
11 黒褐色粘質土(10YR 2/3)
12 褐灰色粗砂(10YR 4/1)
13 褐灰色粘質土(10YR 4/1)
14 黒色粘質土(10YR 2/1)



1 褐色土(10YR 4/4)
2 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
3 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
4 黄褐色土(10YR 5/8)ベース
黒色土粒わずかに含む
5 暗褐色砂質土(10YR 3/3)
6 褐灰色粗砂(10YR 4/1)ベース
黒色土粒、微粒砂を含む
7 褐色砂質土(10YR 4/6)
8 褐色土(10YR 4/4)
黄褐色土粒含む
9 褐色土(10YR 4/4)
しまり悪い
10 褐灰色粘質土(10YR 4/1)
11 暗褐色土(10YR 3/3)
12層よりやや砂質つよい
12 暗褐色土(10YR 3/3)
13 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)
黄褐色土粒含む
14 灰黄褐色粗砂(10YR 5/2)
15 褐色砂質土(10YR 4/4)+粗砂+黄褐色土粒
の混合土、しまり良く硬質
16 黒褐色粘質土(10YR 2/3)
17 褐色砂質土(10YR 4/4)
黄褐色土粒含む
18 灰黄褐色微粒砂(10YR 5/2)
19 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2)
20 褐色砂質土(10YR 4/4)
しまり良く硬質、小礫を多く含む
21 暗褐色砂質土(10YR 3/3)

Fig.42 SD1土層図(C-C′,D-D′,E-E′)(S1/30)

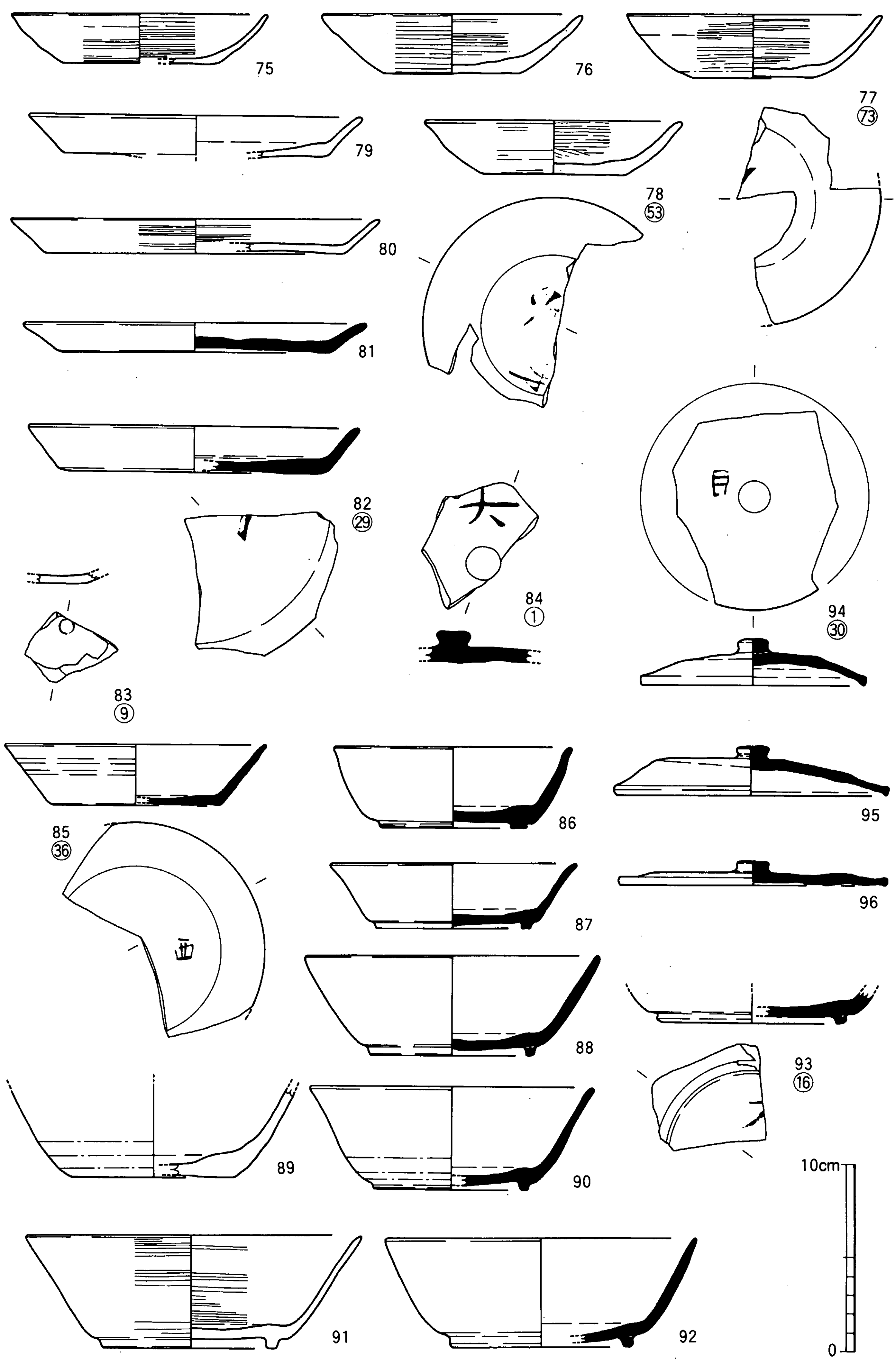


Fig.43　SD1出土遺物その1（S1/3）

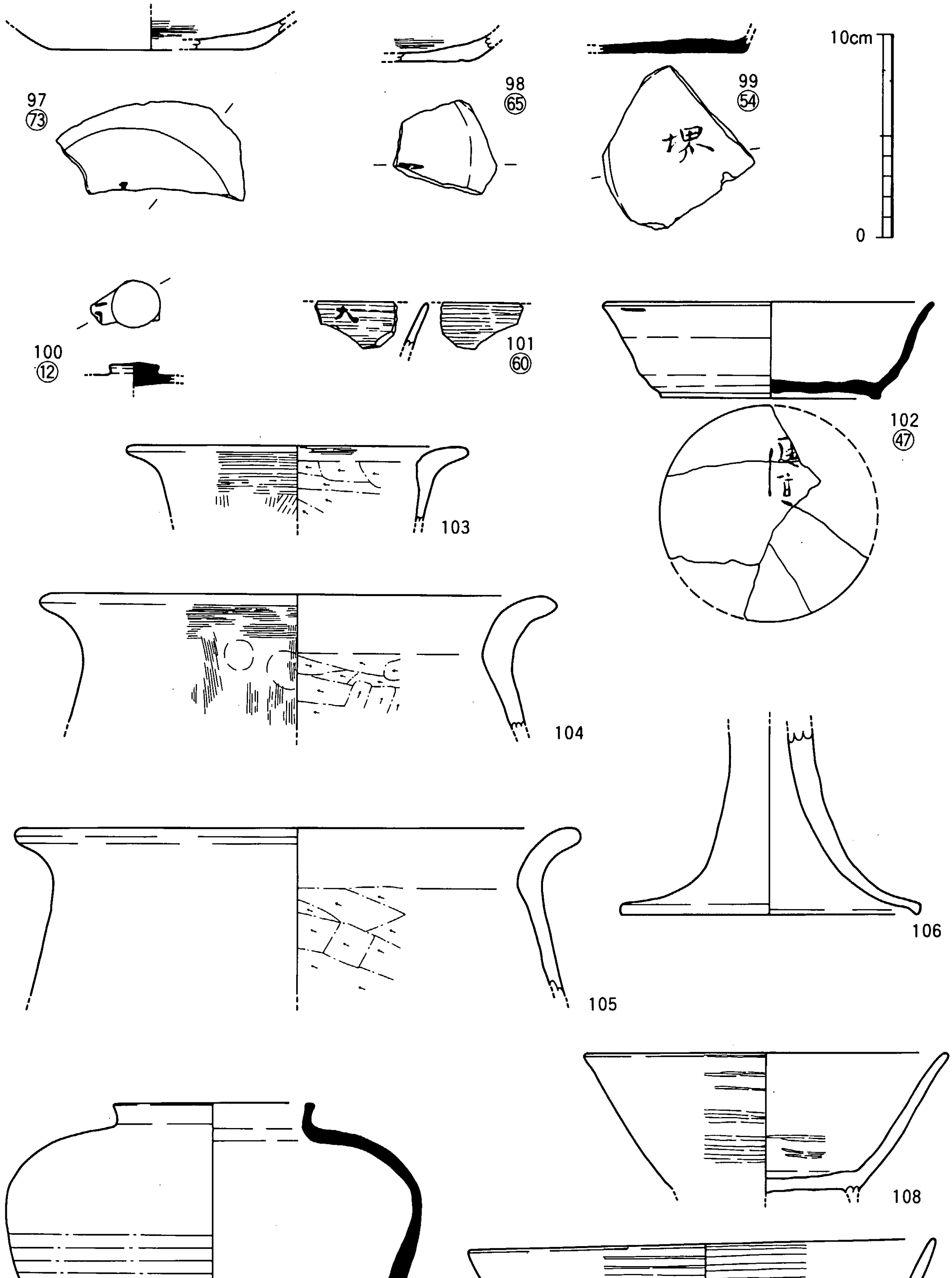


Fig.44　SD1出土遺物その２(S1/3)

垂直に貼り付けられ、端部は平坦をなす。体部はストレートに立ち上がる。色は橙色（5YR6/8)、胎土は1mm程度の砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれる。1/2が欠損。調整は、内外面ともに回転ヘラミガキ。

鉢（89） 底部のみ残存する。底径8.6cm・残存高4.8cmを測る。黄橙色(7.5YR7/8)を呈し、胎土に1～2mmの砂粒・雲母細片・赤褐色粒を含む。

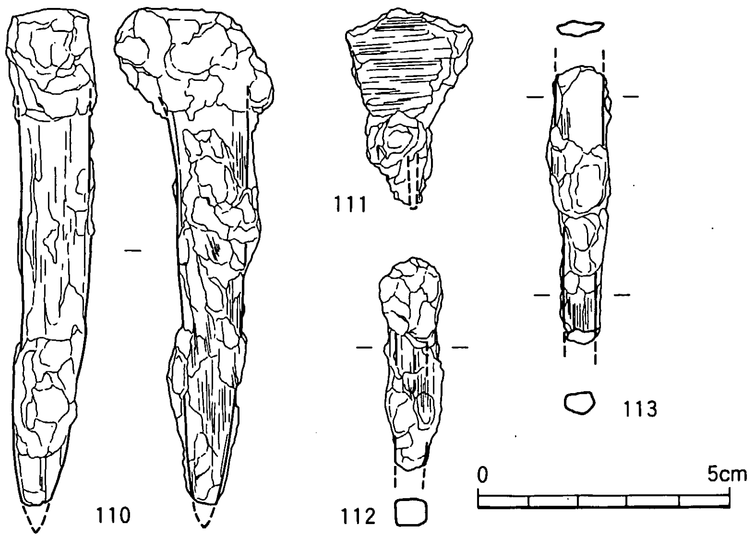


Fig.45　SD1出土遺物その3（S2/3）

甕（103～105）　103は小甕aである。胴部には張りがなく、口縁部は明瞭な屈曲部をつくって強く外反する。口径16.8cmを測る。内面の稜線以下は横方向のヘラケズリを施す。外面には、2次的被熱により煤が付着している。104・105は甕aで、胴部は小甕に比べて張りがあるものである。両者とも1/3～2/3を欠損している。調整は磨滅により不明瞭だが、いずれも口縁部にヨコナデ、内面に横方向のヘラケズリ、胴部には縦方向のハケメを施す。

高坏（106）　高い脚部をもつタイプの高坏である。坏部は欠損している。裾部径は14.35cmを測り、端部は内側にやや屈折する形状を呈する。色は橙色（5YR7/8）で、調整はローリングを受けており磨滅が著しく、不明である。

須恵器

坏（85～87・102）　無高台の坏a（85）と短い高台を有する坏c（86・87・102）である。85は、口径13.8cm・底径9.0cm・器高3.25cmで、体部はストレートに延びている。色調は灰色(5Y5/1)、胎土には0.5～1mmの砂粒が含まれる。底部外面に「西」と墨書がなされている。

86は口径12.6cm・高台径7.8cm・器高4.3cm。器壁はやや厚めで丸みを帯びた体部をもち、低く潰れた高台を貼付する。胎土には微砂粒を多く含み、色は灰色（7.5Y5/1）である。

87はやや外方にゆるやかに開く体部を有するもので、口径13.0cm・高台径8.1cm・器高3.5cmを測る。色調は明青灰色（5PB4/1）を呈し、胎土は1mmほどの砂粒がわずかに含まれる程度で精良である。また、93は破片であり詳細は不明。高台径10.1cm・残存高1.7cmである。高台内に「大」と墨書がなされている。102は口径16.0cm・高台径10.6cm・器高4.6cmで、高台内に「遠■(家カ)」と墨書されている。

椀（88・90・92）　90は口径15.0cm・高台径8.2cm・器高5.45cmで、直線的な体部をもち、他のものと比べてシャープな感を受ける。88と92はやや丸みを帯びているもので、88が口径15.5cm・高台径8.6cm・器高5.3cm、92が口径16.5cm・高台径9.7cm・器高5.8cmを測る。色調は灰色（N5）～灰オリーブ色（5Y5/2）で、胎土には砂粒が非常に多く含まれている。

皿（79・81・82・99）　すべて皿aである。79が口径19.6cm・底径14.0cm・器高2.3cm、81が口径18.2cm・底径14.6cm・器高1.6cm、82が口径17.6cm・底径14.4cm・器高2.5cmを測る。色調は7.5Y

7/1～8/1の灰白色である。胎土は、微砂粒および雲母を多く含む。また99は、破片であるため詳細は不明であるが、底部外面の中央に「堺」の文字が墨書される。

蓋（84・94～96・100） すべてが低い偏平のボタン状の撮みをもつ蓋ｃ3である。天井部は96のみが平端なもので、94・95は丸みをおびるタイプである。端部は、やや丸みをもった三角形のを呈する。84は「大」・94は「月ヵ」・100は「酒ヵ」の墨書が確認できる。

壺(107) 短頸壺である。高台は低く、内側にやや広がっている。口径9.9cm・胴部最大径20.30cm・高台径9.0cm・器高15.6cmを測り、胎土は精良。

鉄器

楔（110） 全長9.8cm・幅1.5～1.8cm。鏨とも考えられるが、長さが短すぎるため楔と判断した。

釘（111・112） 両者とも半分以上を欠失しており、遺りが悪い。111は残存長4.0cm・径0.2cm、112・残存長4.3cm・径0.6cmを測る。また、111には木質が2.0cmほど残存しており、木目に直交して打ち込まれていたことが分かる。

鉄鏃（113） 片刃鏃と考えられる。残存長5.6cm・身幅1.0cm・背幅0.5cmを測る。関部はなく茎部から刃部にかけてストレートに延びるものと考えられる。鏃身部・茎部をともに欠失する。詳細は不明。

SD 2 SD 1に平行して延びる幅1.0m・深さ0.2mの浅い溝である。遺物がなかったので、時期は不明である。SD 3に切られている。

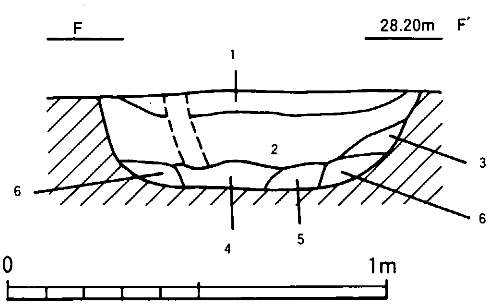
SD 3 SD 2に同じく、SD 1に平行して延びる溝である。幅1.4m・深さ0.3mを測り、途中で途切れながらも97mに渡って検出された。遺物が少なく、時期は確定できなかったが、埋土は暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色粘質土塊を含むもので官道関連の遺構の状況と近似しているため、関連性が推測できる。ちなみに南側のSD 4との距離がほぼ6mであり、官道の縮小に伴った溝である可能性も考えられる。

SD 3 出土遺物

須恵器

坏or皿（131） 小片であるため、詳細は不明である。灰白色（2.5Y7/1）で、微砂粒を少し含む。見込みには墨書が確認できるが、判読はできなかった。

SD 4（Fig.46・PL. 8） 官道の南側側溝に当たる溝で、SD 1に対応するものと考えられる。主軸方



1 黒褐色土（10YR 2/2）焼土粒わずかに含む
2 黒褐色粘質土（10YR 2/2）
3 暗褐色土（10YR 3/4）焼土粒わずかに含む
4 黒色粘質土（10YR 2/1）
5 褐色土（10YR 4/4）
6 暗褐色砂質土（10YR 2/2）人為的なものか

Fig.46 SD4土層図（F-F'）（S1/20）

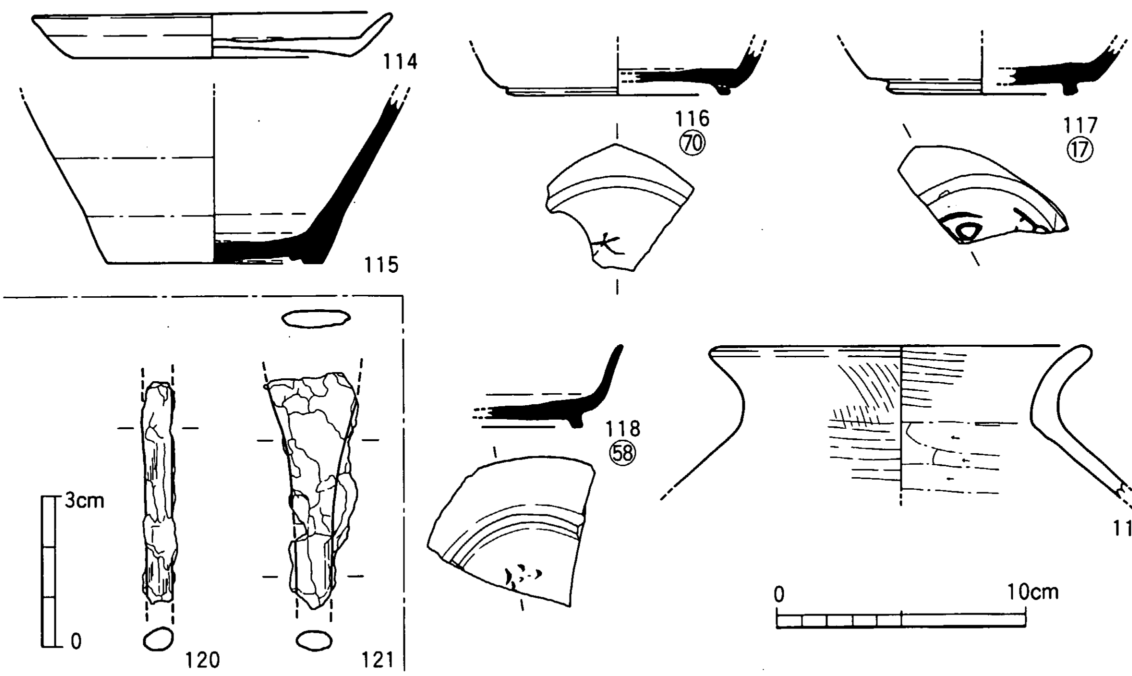


Fig.47　SD4出土遺物(S1/3,2/3)

向はN－58°5′－Wを採る。上幅は0.8～1m程度、深さは0.25～0.3mの大きさを原則となる。形状は逆台形状で、床面はフラットで、標高27.60～28.10mの範囲で東から西に向かって傾斜している。

また、この溝については、下層の堆積がステップ状になる箇所が確認されており、これが自然堆積ではなく人為的な埋め土であると推測されることから、溝中に側板が埋置されていた可能性が考えられる。ただし、土層からは木質などの痕跡は確認できなかったので、ここではあくまで可能性として留めておく。

SD 4 出土遺物（Fig.47・PL.21,42）

土師器

皿（114）　口径14.4cm・底径11.1cm・器高1.8cmを測る。色調は浅黄色（2.5Y7/3）で、胎土は精良である。板状圧痕が残る。

甕（119）　胴部以下を欠失する。口径15.3cm・残存高6.3cmである。胴部は小甕に比べて張りがあるもので、口縁部は明瞭な屈曲部をつくって強く外反する。内面の稜線以下は横方向のヘラケズリ、外面の口縁部～屈曲部は縦方向のハケメを施す。色調は橙色（7.5YR6/8）で、胎土には1～3㎜の砂粒・雲母細片・赤褐色粒を含む。

須恵器

坏（116～118）　短い高台を有する坏cである。いずれも破片であり、ローリングを受けている。3点とも高台内に墨書があり、116は「大」・118は「官ヵ」と確認できる。117は判読不能。

壺（115）　陶器の破片で、外面に釉が少し残る。その形状から壺の底部と推測される。底径は8.7cm・残存高6.65cmを測り、底部は、高台状に削り出す。胎土は精良である。

鉄器

鉄鏃（120・121）　120は鏃の茎部のみで鏃身部は欠失する。残存長4.5cm・径0.55cmを測る。121は圭頭のものである。両端とも欠失し、残存長4.7cm・鏃身部幅1.8cm茎部幅0.4～0.7cmを測る。

関部がなく茎部から鏃身部にかけてストレートに延びるタイプのものである。

SD 5　SD 4の南側に位置し、やや蛇行しながらも官道にほぼ平行して延びている。上幅は約2.4m程度、下幅は約1.7m、深さ約0.5mを測り、形状はゆがんだ逆台形状を呈し、床面はほぼフラットである。溝は砂礫層まで切り込んでおり、土層の堆積状況はレンズ状の純堆積である。官道の下限が不明確であるので、道に伴うものかどうかは不明な点が多い。ちなみにこの溝の付近は、現在の小字境に当たっている。

SD 5出土遺物（Fig.48・PL.21）

白磁

椀（135・136）　135はⅣ類－1・aに当たるものである。玉縁口縁を呈し、見込みに沈線が1条巡る。胎土は灰白色（7.5Y7/1）で0.5mm程の黒色粒をわずかに含む。釉薬ののりは良く、体部下半が露胎となる。また、所々に貫入がみられる。高台は極低く逆台形状に削り出しているが、ケズリの痕跡が残っており、造りは非常に雑である。口径17.2cm・高台径7.25cm・器高6.7cmを測る。136は口縁部がくの字状に外反し端部が平坦で、高い高台部を有するもので、Ⅴ類－4・aに当たる。釉薬は、高台脇まで流れており、貫入がみられる。また高台内は、削りが粗くやや鍼状を呈する。

瓦器

椀（137）　口径17.15cm・高台径6.5cm・器高6.0cmを測る。丸い形態を有し、断面台形の低い高台が貼付される。色調は黄灰色（2.5Y6/1）で、胎土は微砂粒を少し含む。調整は内外ともにヘラミガキがわずかに確認されるが、磨滅により不明瞭である。焼きはあまい。

土製品

支脚（138）　残存長8.3cm・径2.0～3.7cmを測る。下端を欠失する。断面は台形状を呈し、四隅の角はきれいに面取りを施している。

滑石製石鍋（139）　被熱により底部が若干破損しているものの完形品での出土は珍しい。器壁は厚く、鍔部は短い台形状を呈する。内外面ともにケズリは丁寧である。口径22.5cm・底径

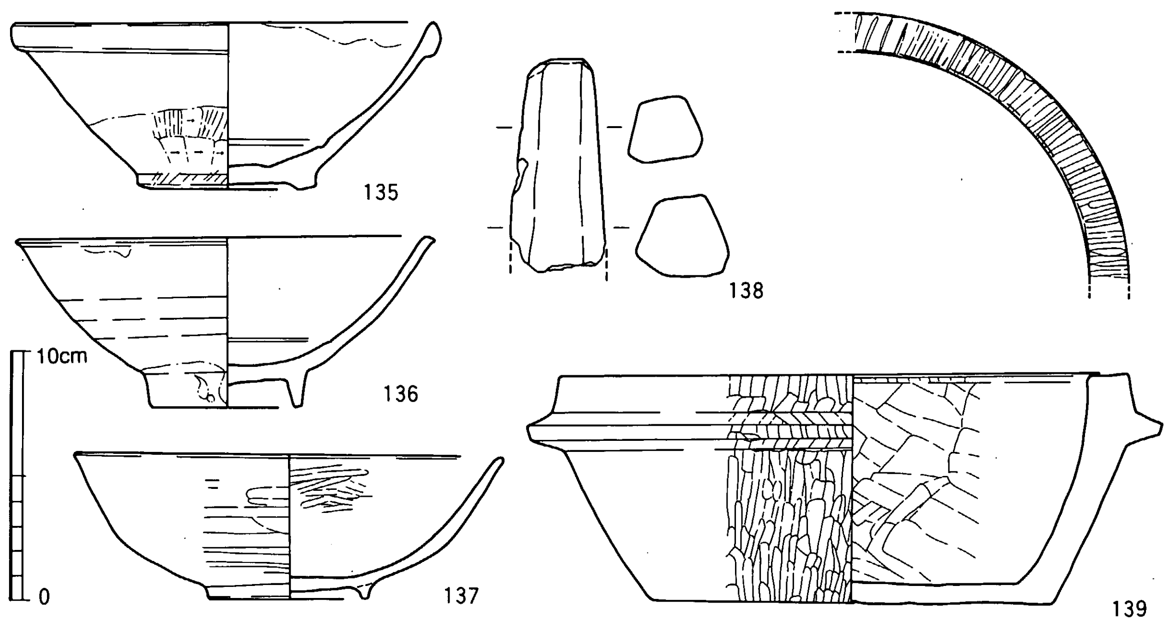


Fig.48　SD5出土遺物(S1/3)

16.0cm・器高9.4cm・鍔径25.25cmを測る。

SD 6　SD 4を切る溝状の遺構である。上幅は約0.5～2m程度、下幅は約0.3m、深さ約0.3mを測り、形状は逆台形状を呈する。床面は一定ではない。その機能については不明。

SD 6 出土遺物（Fig.49・PL.21,42)

土師器

坏（122)　口径14.0cm・高台径9.8cm・器高4.1cmの坏cである。色調は橙色（2.5YR7/8）で、胎土には1～3mmの砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれる。調整は、体部の内外面にヘラミガキが施されている。

須恵器

坏（123～126)　126は坏ａで、123～125は坏cである。両者とも、体部がストレートに立ち上がるもので、123はやや開きぎみになる。後者の高台は逆台形の短い高台が貼付される。123・124には「α記号」、126には「傔」と墨書がなされている。このうち124については、高台内のほぼ全面を硯として転用している。法量は、123が口径14.0cm・高台径7.3cm・器高3.6cm、124が口径13.3cm・高台径7.85cm・器高4.4cm、125が口径16.4cm・高台径9.4cm・器高5.2cm、126が口径16.0cm・残存高4.9cmを測る。

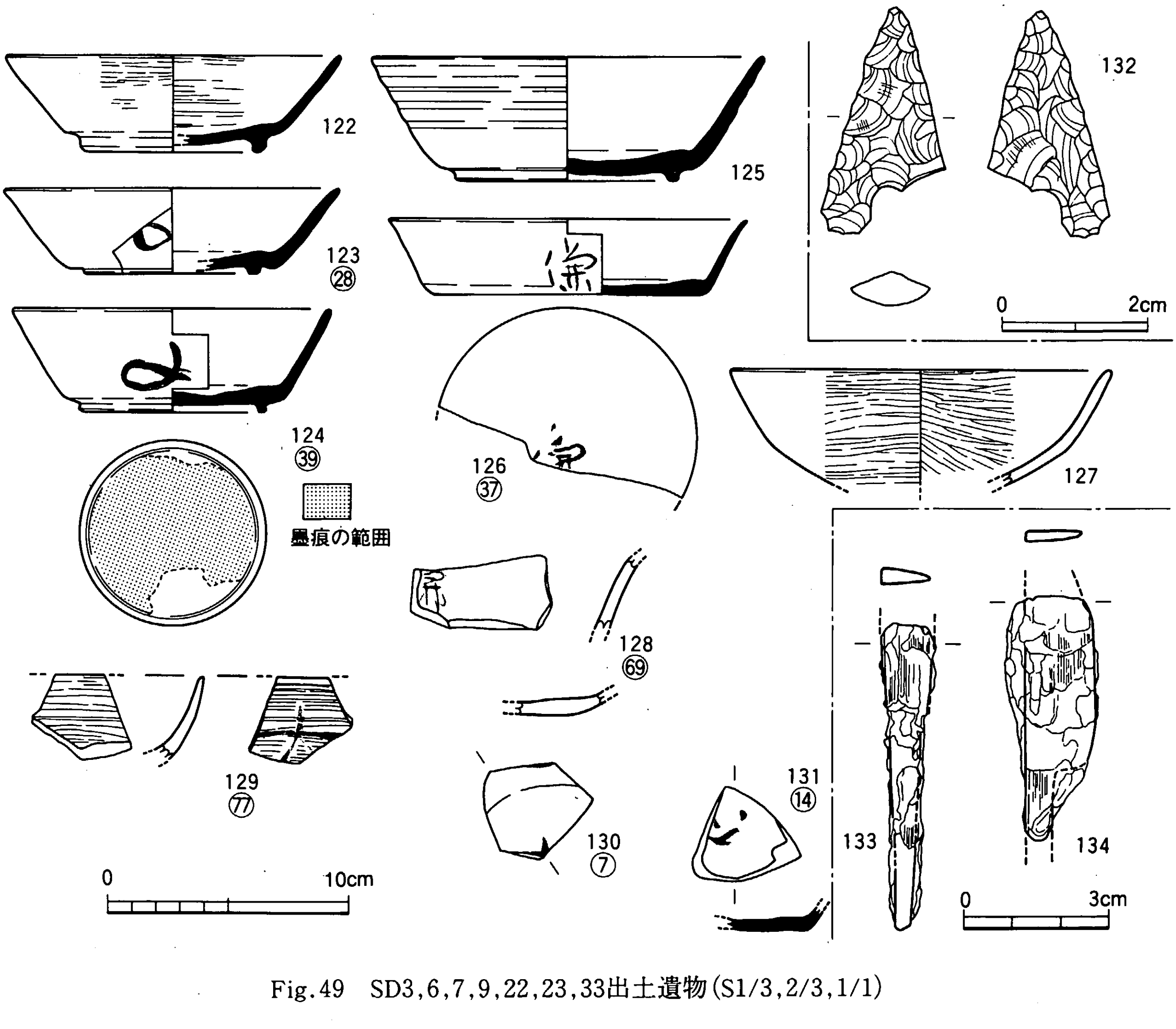


Fig.49　SD3,6,7,9,22,23,33出土遺物(S1/3,2/3,1/1)

鉄器

鉄鏃（133）　片刃鏃である。鏃身部は欠損。残存長6.5㎝・身幅1.0㎝・背幅0.3㎝を測る。錆により不明確であるが、箆被はなく、関もかろうじて段が残っている程度であり、状況は悪い。

SD 7　SD 5を切る溝状遺構である。上幅は約0.5～2m程度、下幅は約0.5m、深さ約0.2mを測り、形状は逆台形状を呈する。床面は一定ではなく、不規則である。その機能については不明。

SD 7 出土遺物（Fig.49・PL.49）

土師器

坏（128）　破片であるので不確実であるが、坏の体部として扱った。色は橙色（5YR6/6）で、胎土は0.5～1㎜程度の砂粒を含んでいる。また、内面に正位で「傔」の文字が墨書されている。

SD 9　調査区の東端に位置する。断面逆台形で、幅約30㎝・深さ10～15㎝を測り、L字状に曲がっている。埋土は砂質土ベースに黄褐色粘質土塊を多く含むものである。土器が出土していないため不明確であるが、どちらかといえば近世以降の新しい溝と考えることができる。SD10・13・14・20～24・31などはこれと同じ範疇で考えられるものである。

SD 9 出土遺物（Fig.49・PL.42）

鉄器

鉄鏃（134）　片刃鏃と考えられる。鋒部と茎部を欠失しており、また錆により状態は悪い。残存長5.2㎝・身幅1.2㎝・背幅0.2㎝を測る。後世に混入されたものと考えられる。

SD22・23・33　断面逆台形で、幅10～15㎝・深さ5～10㎝の浅い溝である。SD 9で述べたように、新しい時期のものである。

SD22出土遺物（Fig.49）

瓦器

椀（127）　高台以下を欠失する。復元口径16.0㎝・残存高4.9㎝で、調整は手持ちのヘラミガキを施す。色調は褐灰色（10YR　4/1）で、胎土に微砂粒を多く含む。後世に混入したものであると考えられる。

SD23出土遺物（Fig.49）

土師器

坏（129・130）　坏dの破片である。ともに細片であり、詳細については不明。色調は橙色（5YR6/6）で、胎土に0.5㎜以下の微細粒と雲母を含む。また、それぞれに墨書が確認されており、129は「大」、130は「大ヵ」と判読できる。

SD33出土遺物（Fig.49）

石器

石鏃（132）　二等辺三角形の形態を呈す。サヌカイトを素材とし、両面に加工を施している。抉入部は浅い。一方の脚部は欠損。表面に加工を施し、主要剥離面を残していない。パティナが進んでいる。

SD47 官道に関連するすべての溝（SD 1・3・4・5・48・49）に切られる。やや蛇行しながらも、N－19°25′－Eの方向に主軸を採っている。総延長144mにおよんでだらだらと延びている。機能は不明である。

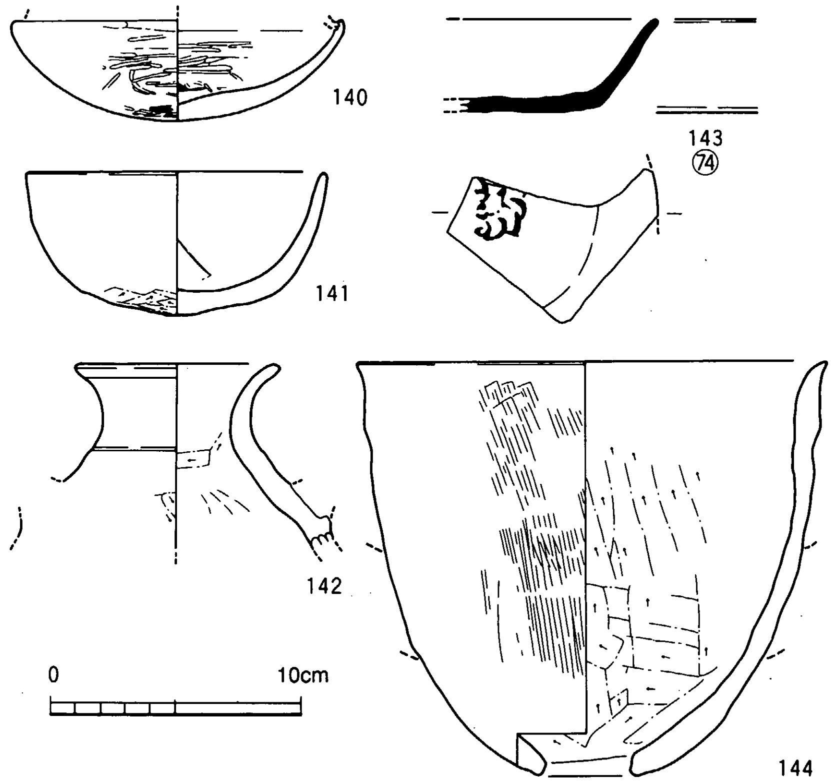


Fig.50 SD47出土遺物（S1/3）

SD47出土遺物（Fig.50・PL.21）

土師器

坏（140・141） 140は、最大径13.4cm・残存高4.1cmを測る。体部は緩やかに開く形状を呈し、内外面ともに不定方向の手持ちヘラミガキを施している。

141は、口径12.1cm・器高5.8cmを測り、やや直立気味に立ち上がるもので、基本的には丸い形状を呈する。全体的に器壁がやや厚めで、調整は内面と体部外面にナデを施し、底部外面には不定方向のヘラケズリが残る。色調は橙色（7.5YR7/6）で、胎土に0.5～1mmの砂粒がわずかに含まれている。

提瓶（142） 体部の上半のみの残存で、口径8.2cm・残存高10.15cmである。色は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には1mm程の砂粒を多く含む。また、体部の膨らみが不明確であるため、図上では反転復元を行わなかった。

甑（144） 口縁から体部下半の1/2弱と把手部を欠く。復元口径18.95cm・器高16.7cm・底部の孔径3.5cmを測る。口縁部はやや外反しながら先端部を尖らせている。色調は橙色（5YR6/6）で、胎土に1～3mmほどの砂粒を多く含む。

須恵器

坏（143） 坏ａの破片である。体部は直線的に延びるもので、調整はヨコナデ。器高は3.75cmを測る。底部外面に摩訶不思議な墨書がなされており、戯画である可能性も想像できるが、今のところは判読できていない。色は灰色（7.5Y5/1）で、胎土は1mm程度の砂粒をわずかに含んでいる。焼きはあまい。

SD50（Fig.51,52,PL.９） やや蛇行しながらも主軸方位をN－40°10′－Eに採る大溝である。上幅は約5.6～14.0m程度、下幅は約2.6～9.0m、深さ約1～2mを原則としている。形状は途中にテラスをもった二段掘りを呈している。調査区南側の段落ち付近まで延びており、最深部では2.0m以上の深さの所もある。北側の延長については未調査であり不明確ではあるものの、その方向から現在の道路の下を延びてH調査区のSD１に続くものと推測される。また、溝の幅が場所によって部分

的に広くなっているところが数ヶ所に点在している。このような部分は浅く平坦になり、取水場であった可能性も推測できる。このような箇所の床面ではミニチュア土器がまとまって出土しており、水場の祭祀が行われたとも考えられる。ただし現段階では不明な点が多い。

土層は、水成堆積を示しており、暗茶褐色～黒褐色の泥炭土と砂礫層や微粒砂（アズ）層が互層をなしている。床面レベルについては標高27.0～26.2mで比高差0.8mを測る。また、この溝と官道とが交差するH－H'の土層によると（Fig.51)、暗黄褐色粘質土塊まじりの暗茶褐色土（図中の第2層）で締められた状況が確認されており、この付近は、溝の埋没の後もかなり脆弱な状態であったものと推測される。遺物は最下層付近からまとまって出土する傾向が高い。

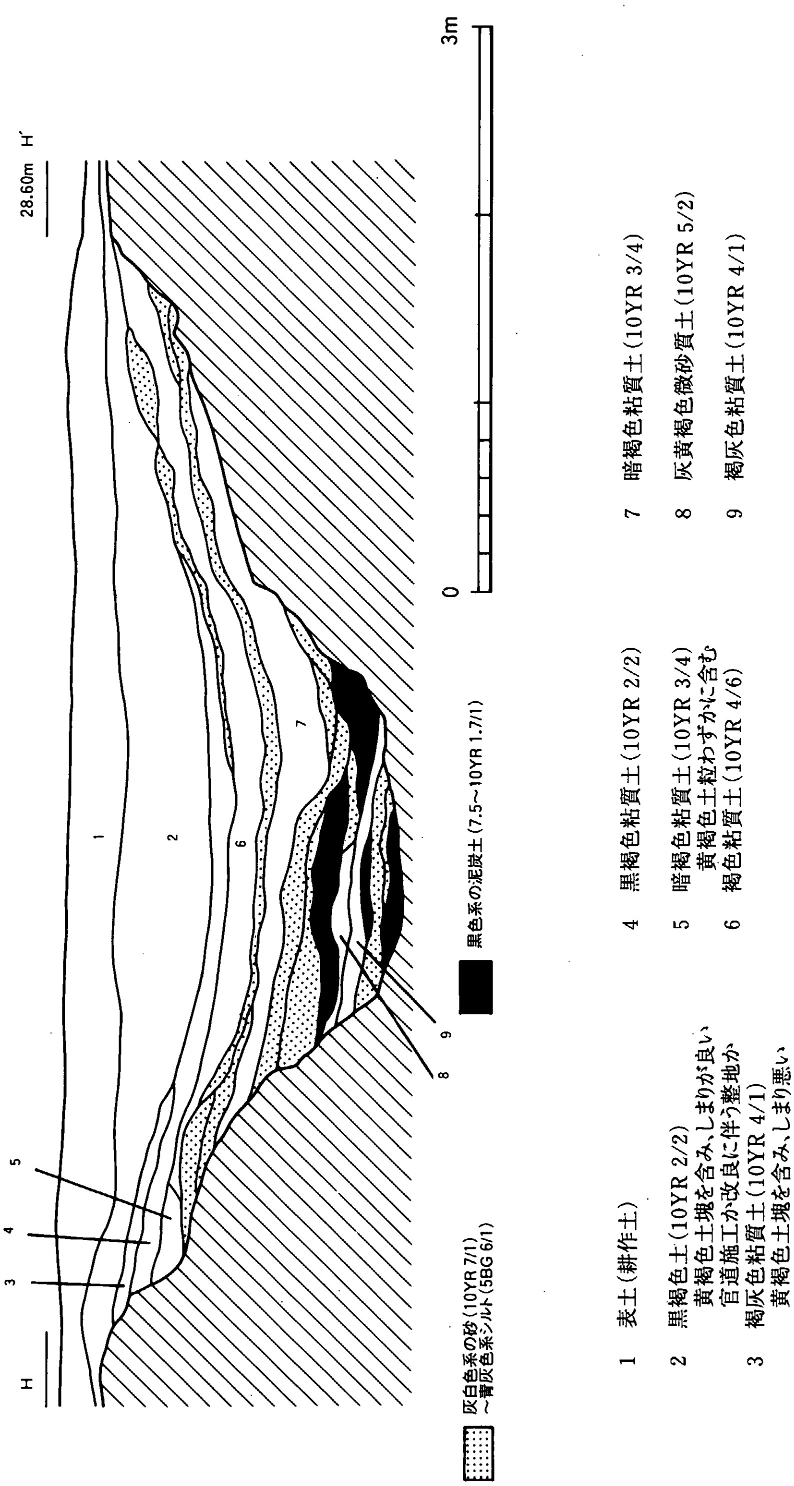
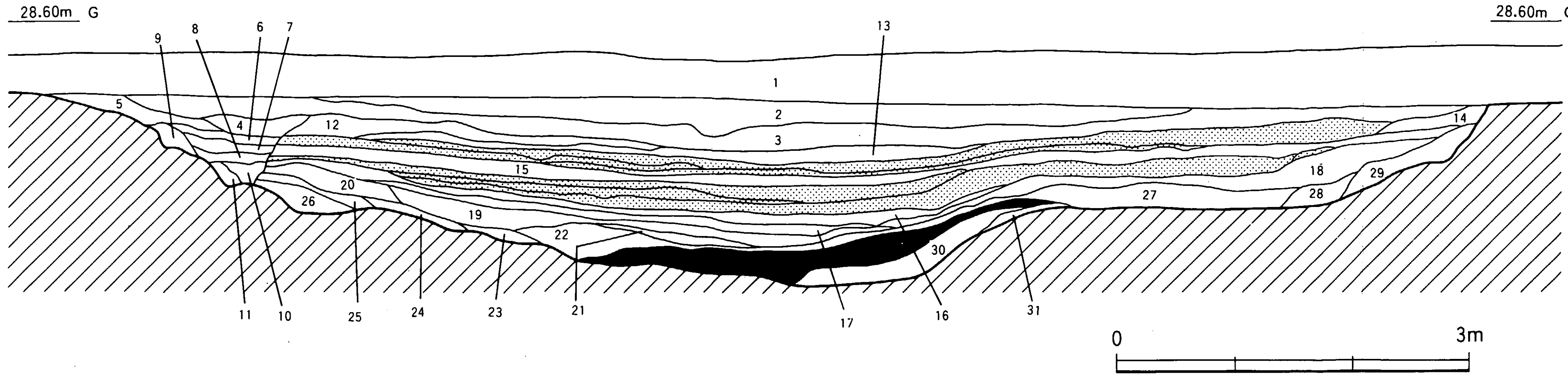


Fig.51 SD50土層図（H-H'）（S1/40）



1　表土（耕作土）
2　暗褐色砂質土（10YR 3/4）
3　暗褐色砂質土（10YR 3/3）
　２層より暗い、黄褐色土粒わずかに含む
4　にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/3）
　砂質強く、黄褐色土粒多く含む
5　褐色粘質土（10YR 4/4）
6　暗褐色砂質土（10YR 3/4）
　黄褐色土粒多く含む
7　褐色砂質土（10YR 4/4）
　砂質がつよい
8　暗褐色粘質土（10YR 3/4）
9　黒褐色土（10YR 2/3）
　黄褐色土粒わずかに含む
10　褐灰色粘質土（10YR 4/1）
　明褐色土粒多く含む
11　黒褐色粘質土（10YR 2/2）
12　暗褐色粘質土（10YR 3/4）
　明褐色土粒わずかに含む
13　黒褐色土（10YR 2/3）
　黄褐色土粒・焼土粒わずかに含む
14　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
15　灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）
16　黒褐色粘質土（10YR 2/3）
17　褐色粘質土（10YR 4/4）
　炭化物をわずかに含む
18　黒褐色粘質土（10YR 2/3）
　弾力性に富み、キメが細かい
19　黒色粘質土（10YR 1.7/1）
20　黒褐色粘質土（10YR 2/3）
　しまり良く、キメが細かい
21　褐灰色砂質土（10YR 4/1）
22　黒褐色粘質土（10YR 2/3）
　しまり良く、キメが細かい
23　褐灰色粘質土（10YR 4/1）
　鉄分の沈着痕がみられる。黄褐色土粒少し含む
24　黒褐色粘質土（10YR 2/3）
25　黄褐色粘質土（10YR 5/6）
26　黄褐色粘質土（10YR 5/6）+褐色砂質土との混合土
　黄褐色土が液状に混じる
27　暗褐色微砂質土（10YR 3/3）
　鉄分の沈着痕がみられる。遺物を多く含む
28　褐灰色粘質土（10YR 4/1）
　黄褐色土粒、焼土塊、炭化物多く含む
29　暗褐色砂質土（10YR 3/3）
　黄褐色土粒、焼土塊、炭化物多く含む
30　褐灰色微粘質土（10YR 4/1）
　鉄分の沈着痕がみられる。下方には層状に粗砂が堆積する
31　褐色砂質土（10YR 4/4）ベース
　黄褐色土塊含む

灰白色系の砂（10YR7／1）～青灰色系シルト（5BG6／1）

黒色系の泥炭土（7.5～10YR1.7／1）

Fig.52　ＳD50土層図（G-G'）（S1/60）

SD50出土遺物（Fig.53〜57,PL.21〜27）

弥生土器

甕（245）　板付Ⅱ式の甕で、体部下半以下を欠失する。口径25.0㎝・残存高14.0㎝で、にぶい黄褐色（10YR7/4）を呈する。1〜2㎜程度の砂粒を多く含み、焼成は普通。

土師器

蓋（145〜152）　口縁部はハの字状に外反して延びている。体部から口縁部にかけては、ストレートにのびるもの（145〜147・149・150）と緩やかに開くもの（148・151・152）に分かれている。天井部はやや丸みを帯びつつも平坦な形状を基本とするが、149のように丸いものもある。

調整技法については、ナデのみによるもの（145・146）と細かくヘラミガキが行われるもの（147〜152）とがある。とくに後者は、天井部の内外面には不定方向、体部の内外面には横方向のヘラミガキが詳細に行われている。この場合、他の器種も含めて黒色処理がなされているケースが多い。ここでは、148・149がそれに当たる。それぞれの法量は、145が口径13.2㎝・器高4.6㎝、146が口径13.05㎝・器高4.75㎝、147が口径13.95㎝・器高5.0㎝、148が口径12.5㎝・器高4.5㎝、149が口径13.0㎝・器高4.5㎝、150が口径13.2㎝・器高4.9㎝、151が口径12.8㎝・器高5.1㎝、152が口径13.2㎝・器高4.25㎝である。色調は、褐色のものもあるが基本的には橙色（7.5YR6/6）で、胎土は精良なもので、0.5〜1㎜の砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれている。

坏（155〜162）　①須恵器の坏を模倣したもの（155〜162）8点、②丸い形態を有し口縁部が「くの字状」に緩やかに外反するもの（163〜172）10点、③丸い形態をもち口縁部がやや内傾しているもの（173〜201）29点、の大きく3つに分類される。

①については、器高が高く丸い形態のもの（155〜160）と器高が低く底部が平たいもの（161・162）とにさらに分けられる。このうち156〜158については、蓋にみられたような黒色処理を施し、内外面ともにヘラミガキを施している。これらは、底部の内外面は不定方向で、それ以外はすべて横方向のヘラミガキがなされている。法量は、155〜160は口径10.0〜12.0㎝・器高5.0〜6.0㎝で、161･162は口径10.0〜11.0㎝・器高4.5㎝前後の数値を示す。胎土は精良で、0.5〜1㎜の砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれている。

②についても①と同様で、丸形態のもの（163〜165・170・171）と器高が低く底部がやや平い　もの（166〜169・172）とに細分される。このうちの後者については、内外面ともに黒色処理を施しているもの(167〜169)がみられる。法量は、163〜165･170･171は口径11.0〜12.0㎝・器高6.0〜6.5㎝で、166〜169･172は口径12.0〜13.0㎝・器高5.0〜5.5㎝を測る。調整は、166と170がケズリの後にナデを行う。その他については、磨滅の著しいものを除けば、外面のみかあるいは内外面ともにヘラミガキが施されている。また、171には底部外面に「×」のヘラ記号が確認できる。

③については器形にばらつきがあり法量は一律でないが、調整のうえでは、ケズリの後ナデが施されているもの（177・179・181〜183・185〜188・190・195・198）と精緻なミガキが施されているもの（173〜176・178・180・184・189・191・193・196・197・199・200）とに分けられる。蓋や①・②の場合は、その大半のものがミガキによる調整がなされていたのに対して、この場合は、1：2ほどの傾向を示している。また、201については、内面にナデ、体部外面に横方向のハケメ、底部外面には不定方向のハケメを施していることが確認できる。胎土はす

べて精良で、0.5～1㎜の砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれている。これらのうち、黒色処理を行っているものは175・176・185・198・201である。

これらの一連の土器群に多く含まれている黒色処理を施している土器は、橋口達也氏のいう「擬須恵土師器」に当たるものである。この土器は、筑紫野市野黒坂遺跡の34号住居跡から出土しているものに類似点が見出せる。ただし、本遺跡の場合は、器表のほぼ全面に精緻なヘラミガキが施されているものが多い点が特徴的である。これと共通する土器は、管見の限りでは夜須町の砥上上林遺跡や梶原遺跡で出土していることが確認されるが、その実態については不明確な点が多く、今回は報告のみに留めることにする。

ミニチュア土器（202～223・230）　大形のもの（202～208・230）と小形のもの（209～223）の2つに分けられる。これらは溝の幅が広くなっている箇所から集中的に出土しており、水場の祭祀に関わる可能性が高い。

高坏（224～229）　口縁部の形状や法量の点で差異があるが、大きくは短脚のもの（244・245・228・229？）と長脚のもの（226・227）とがある。調整は、224と229は磨滅が著しいため調整は確認できなかったが、その他のものについては、すべて精緻なヘラミガキが施されている。色調は、すべて橙色（5YR6/8）である。

壺（231・232・237・238・240・241）　231・232は長頸壺である。232のほうがやや器壁が厚いが、これらは形状的には近似している。231は口径9.3㎝・胴部最大径14.0㎝・器高18.15㎝を測り、色調は鈍い黄褐色（10YR7/4）、胎土には細かい砂粒を少し含んでいる。232は胴部最大径12.10㎝・残存高10.05㎝を測り、色調は橙色（5YR6/8）、胎土には細かい砂粒と赤褐色粒が含まれている。調整については両者ともに、内面はナデ、外面にはヘラミガキが施される。
また、それ以外のものについては、丸底を有し口縁部がストレートに直立ないしは外反する直口壺に似るもの(237・240・241)と口縁部と体部との屈曲が強く外反して立ち上がるもの(238)である。

237は口径9.2㎝・胴部最大径11.05㎝・器高12.1㎝で、黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。磨滅により、調整は不明である。240は口径9.0㎝・胴部最大径13.6㎝・器高12.8㎝で、色は橙色（5YR7/6）である。調整は口縁部内面と体部外面にヘラミガキが施されるのが特徴である。241は240よりもやや大ぶりで、胴部最大径15.8㎝・器高15.4㎝。胎土には角閃石が含まれる。238は口縁部ににぶい稜線がみられ、あたかも二重口縁壺を模したような感じを受けるものである。口径10.9㎝・胴部最大径13.2㎝・器高10.7㎝を測り、色は明赤橙色（2.5YR5/6）で、部分的に赤彩？のようなものが確認できる。

甕（234～236・239・242～244・247～257）　小形のもの(234～236・239)、中形のもの(242～244)と大形のもの（247～257）に分けられる。大形品については胴部上半に最大径があり丸みを帯びているもの（247・248・250・251・254）と胴部中央～下半に最大径があり長胴形を呈するもの（249・253・255・256・257）がある。ただし、これらは法量や形態にかなりばらつきがある。

小形のものは、口径10.0㎝前後・胴部最大径10.0㎝前後・器高9.0㎝前後にほぼ該当するものである。中形のものについては、242は口径13.35㎝・胴部最大径17.4㎝・器高20.3㎝を測り、明赤褐色（5YR5/8）である。ゆがみがひどい。243は口径13.3㎝・胴部最大径14.80㎝・器高

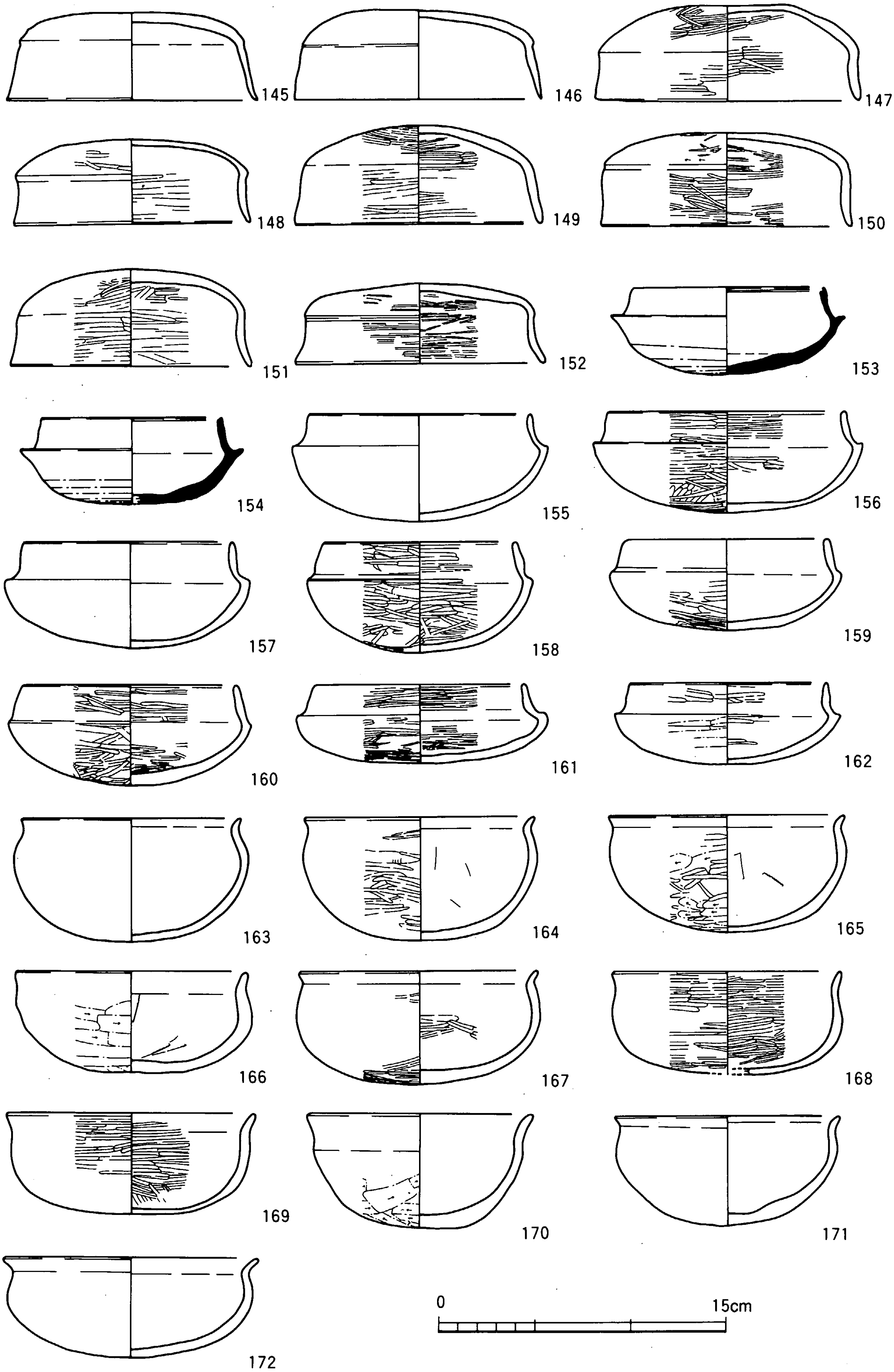


Fig.53　SD50出土遺物その1(S1/3)

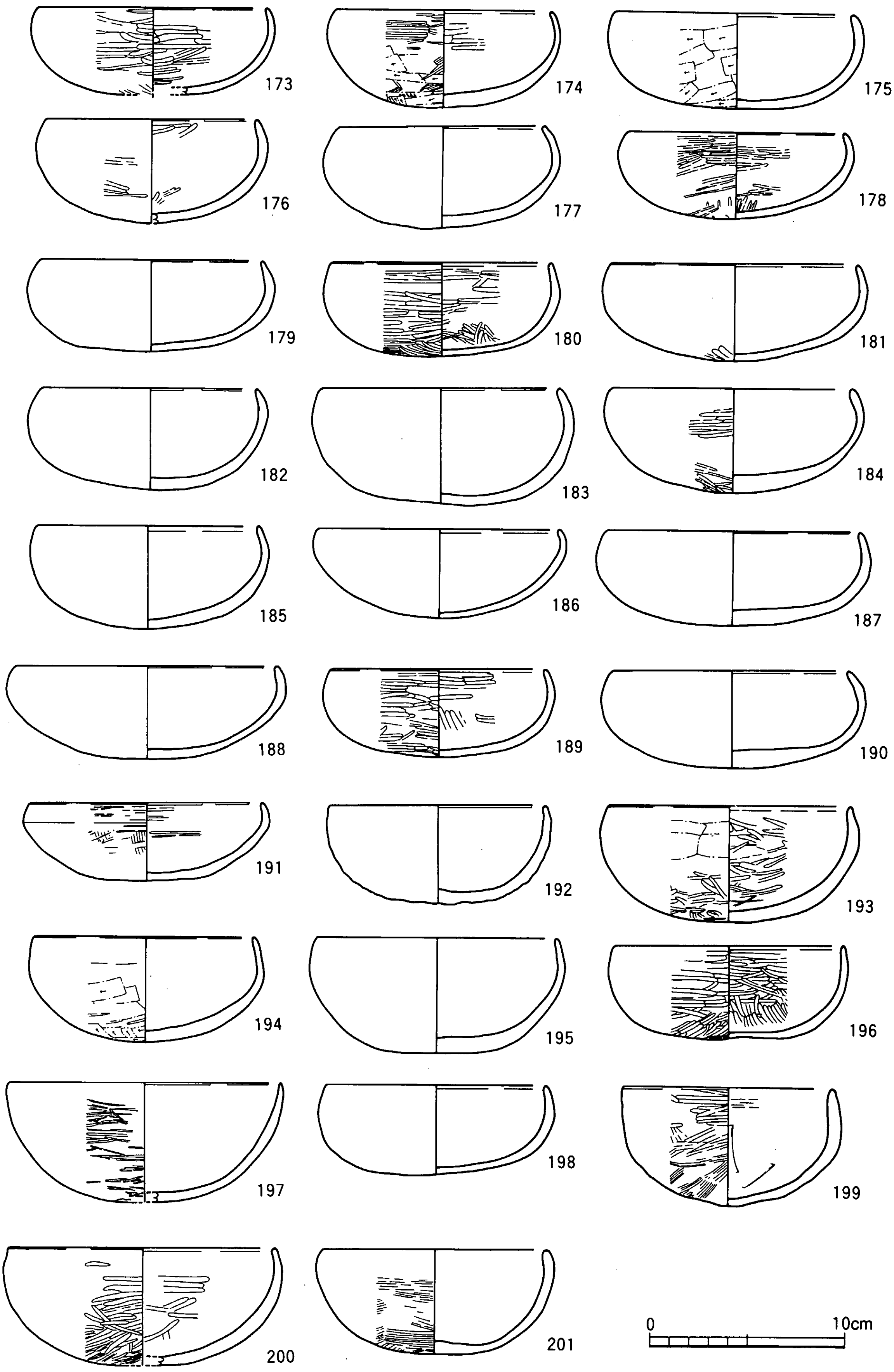


Fig.54　SD50出土遺物その2(S1/3)

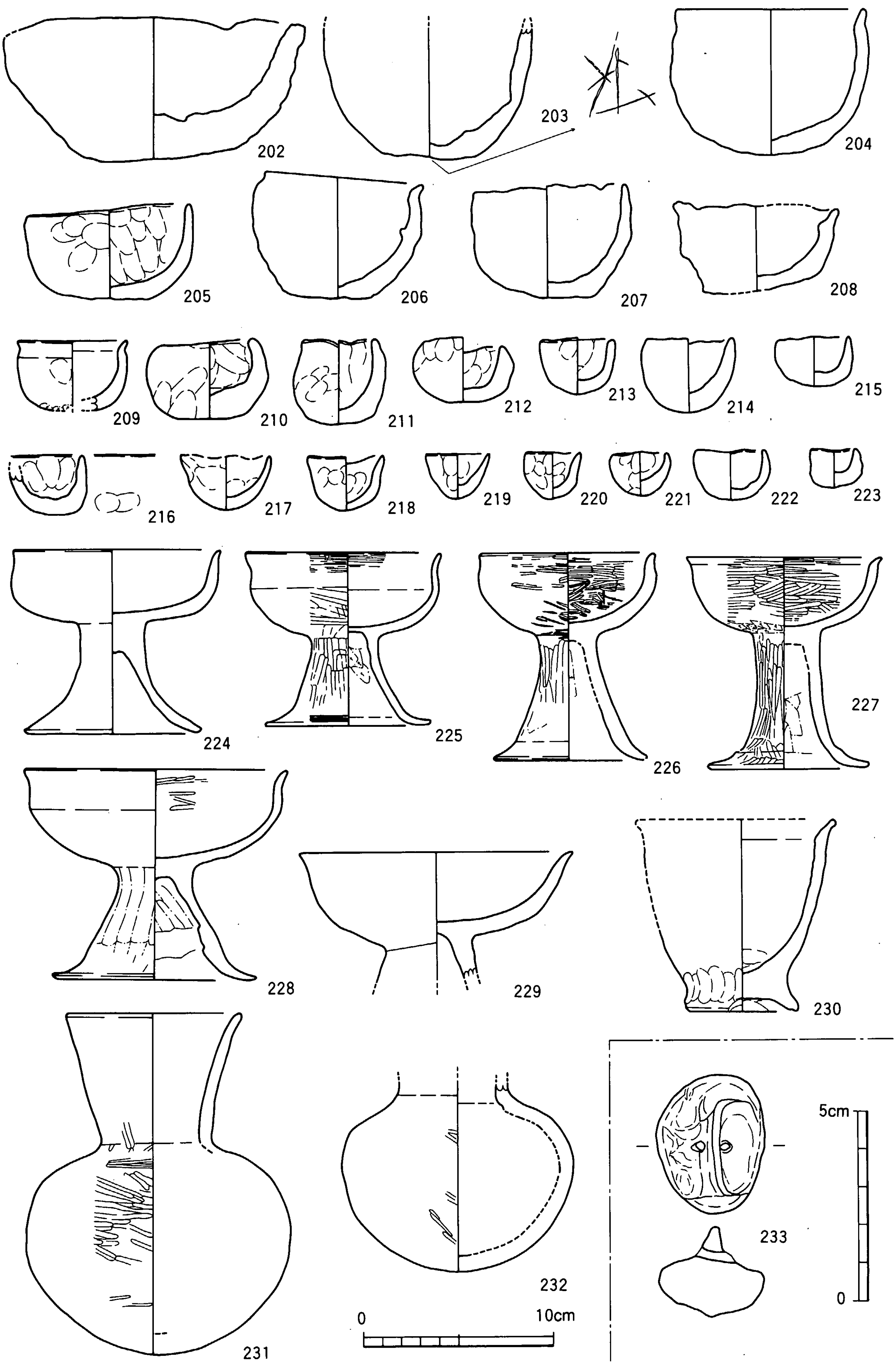


Fig.55　SD50出土遺物その3(S1/3,2/3)

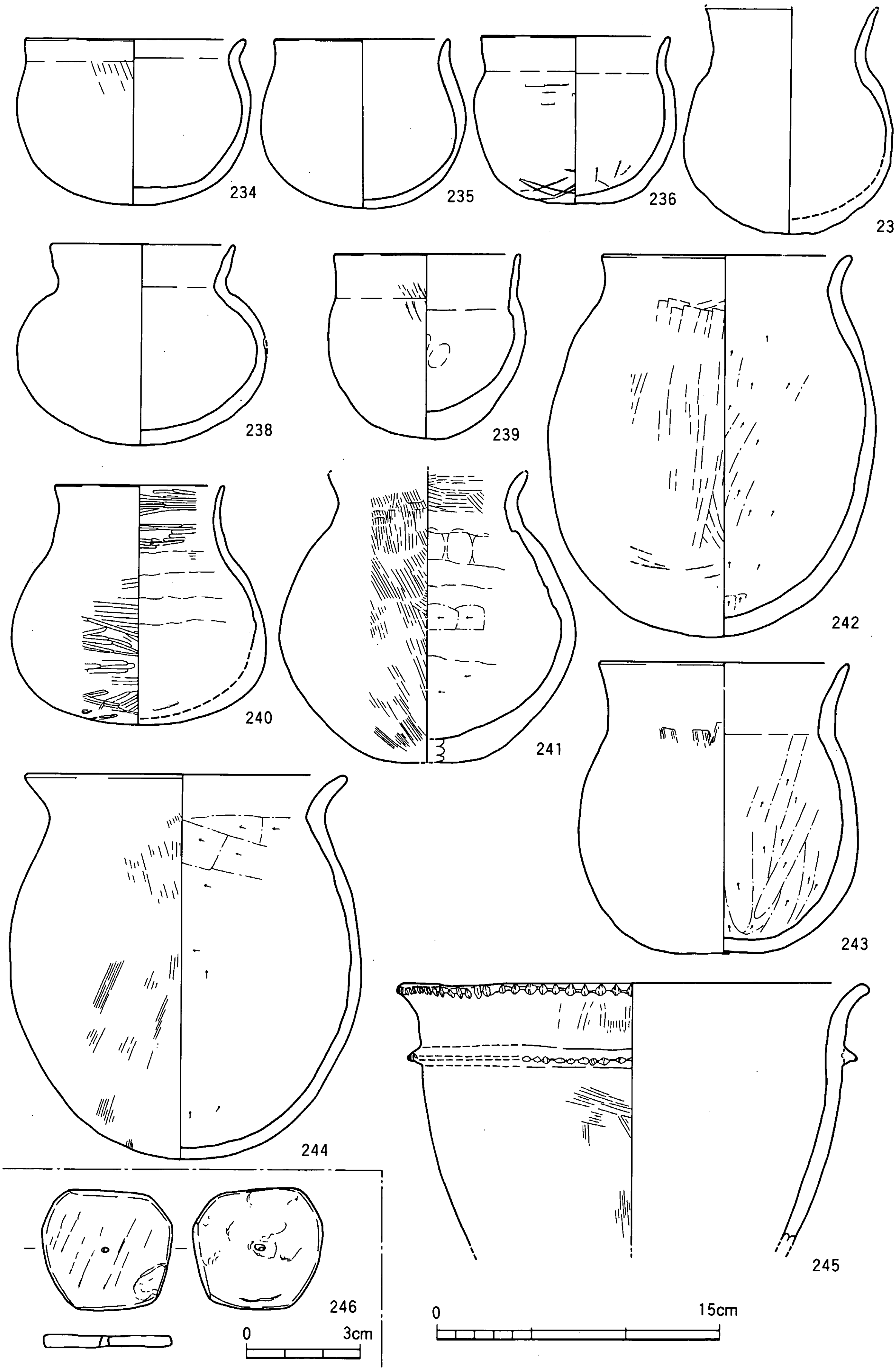


Fig.56　SD50出土遺物その4(S1/3,2/3)

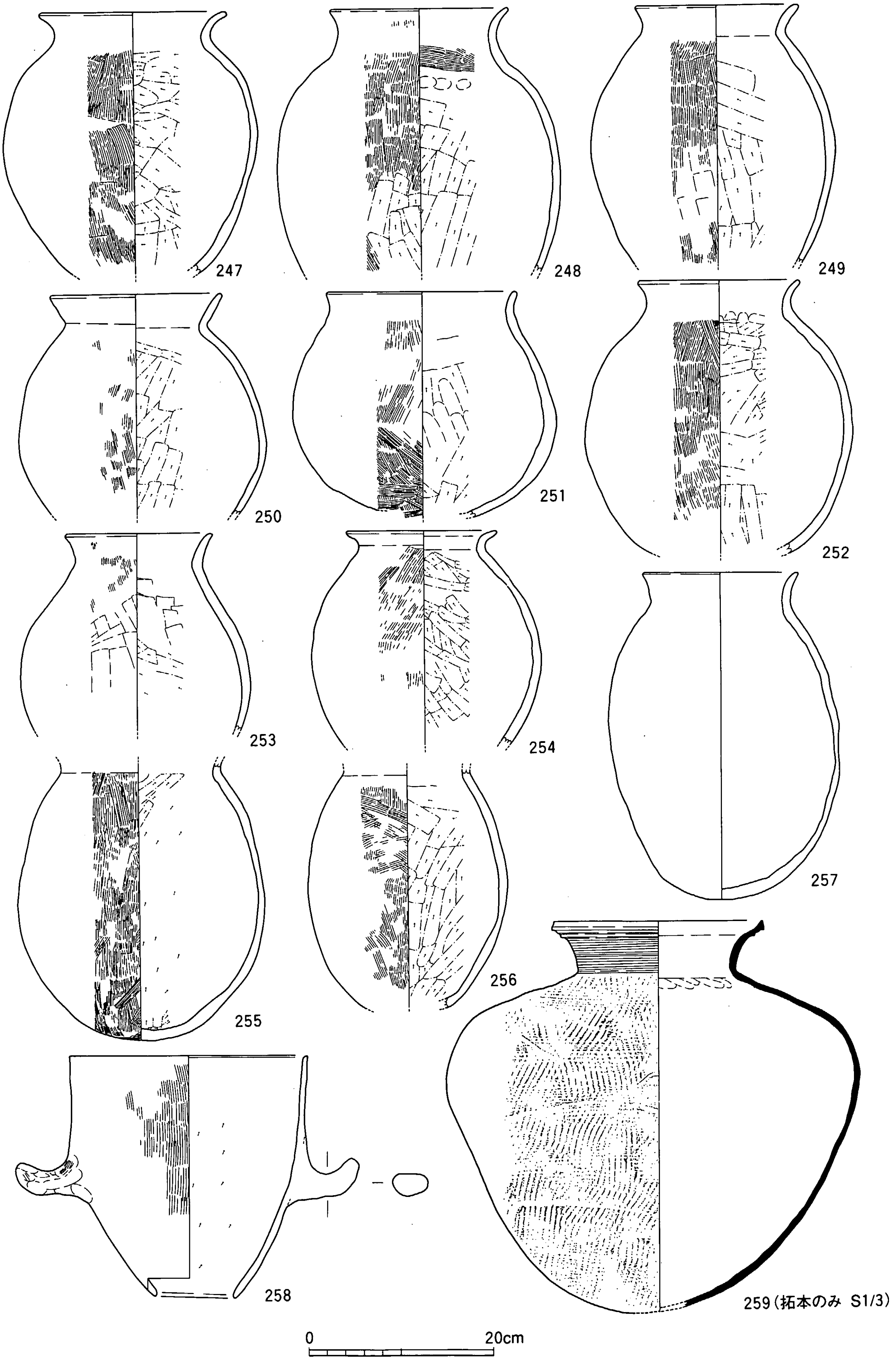


Fig.57　SD50出土遺物その5(S1/6)

15.5cmである。調整は胴部内面が縦方向のヘラケズリで、他はヨコナデである。胴部外面は磨滅により不明。244は口径17.15cm・胴部最大径18.6cm・器高20.45cm、胴部と口縁部との境は明瞭で、内側に稜がある。

甑（258）　口径25.85cm・器高26.45cmを測り、色は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には0.5～2mmほどの砂粒・雲母が含まれる。底部の孔径は8.6cmである。

須恵器

坏（153・154）　口縁部の立ち上がりが短めで、わずかに内傾する。口縁端部には、明瞭な段を有し、底部は丸みを帯び、やや小形のものである。小田編年のⅡ期に相当する。153は口径10.0cm・受部径12.2cm・器高4.6cmで、胎土には1mm程の砂粒を含む。ロクロは右回転。154は口径9.5cm・受部径11.8cm・器高4.5cmで、胎土に0.3～0.7mmの砂粒と雲母が少量含まれる。ロクロは左回転。色調は両者とも灰色（N5）である。焼成は普通。

甕（259）　口径23.0cm・胴部最大径44.60cm・器高42.6cmを測る大甕で、底部を欠失している。胎土は精良で、砂粒をわずかに含んでいる。色調は、灰色(N5）である。口縁部は頸部から外側に向かって大きく開いており、口縁端部は上方に拡張した三角形の形状を呈する。調整は頸部～口縁部がヨコナデ、胴部外面は格子状タタキ、内面は青海波の当て具痕をナデ消している。

土製品

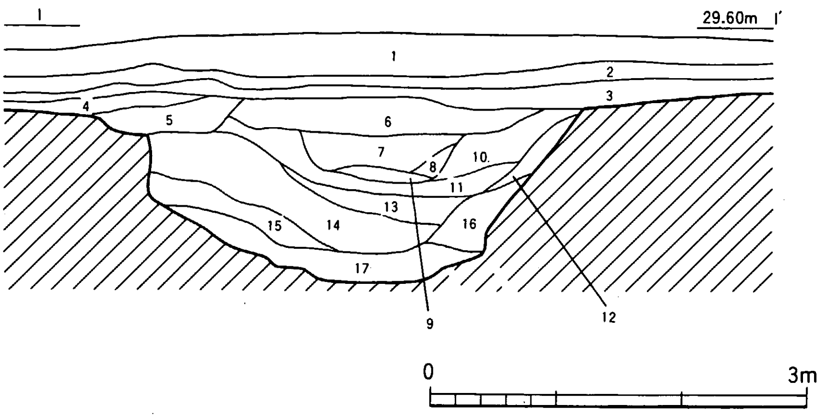
土製鏡（233）　楕円形を呈し、比較的厚みのあるものである。鏡面には凹凸があり紐も軽くつまんだ程度で、かなり雑な造りである。紐孔は、片側から穿孔されている。

石器

有孔円盤（246）　薄手の滑石を素材とする。面取り後の研磨は丁寧になされるが、やや角を残している。また、表面の調整は丁寧になされているが、裏面はやや雑になっている。孔は一方からのみ穿たれている。

SD51（Fig.58）　SD１・4・５を切り、それらに直交して延びる溝で、床面はほぼフラット。立ち上がりは、東側の肩が直なのに対して、西側の肩は直線的で緩やかである。主軸方向はN－27°11′－Eを採り、周辺の地割やE区の掘立柱建物（SB45～49）とも一致していることなどを考えれば、中世以降の所産であるといえる。また、埋土中からは水成堆積による状況が確認されなかった。

SD65　SD５に沿った短い溝である。上幅は約0.6m、下幅は約0.5m、深さ約0.1mを測る。床面はフラットで、形状は逆台形状を呈する。



1　表土(耕作土)
2　黒褐色粘質土(10YR 2/3)
3　褐灰色砂質土(10YR 4/1)
4　暗褐色粘質土(10YR 3/4)
5　褐灰色粘質土(10YR 5/1)
6　にぶい黄褐色微粒砂(10YR 5/4)
7　黒褐色砂質土(10YR 2/2)
8　混合土
9　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
10　オリーブ褐色粘質土(2.5Y 4/4)
11　灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)
12　混合土
13　混合土
14　褐色粘質土(10YR 4/4)
15　混合土
16　黒褐色粘質土(10YR 2/3)
17　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)

Fig.58　SD51土層図(I-I′)(S1/60)

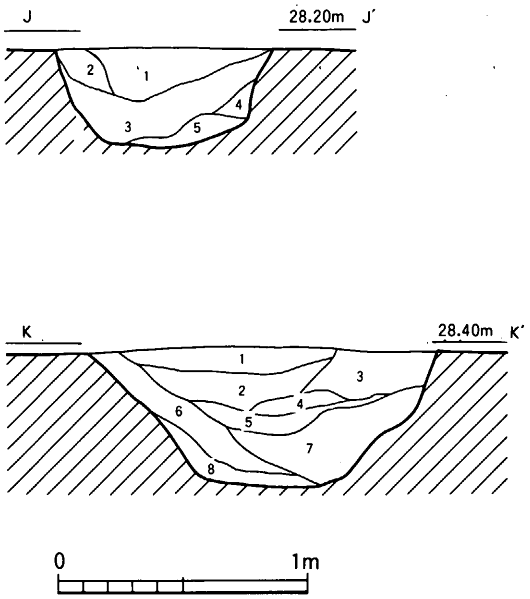
SD65出土遺物（Fig.60）

鉄器

釘（262）　半分以上を欠失しており、遺りが悪い。残存長2.7cm・径0.5cmを測る。

不明鉄器（263）　中心の稜から、くの字状に折れ曲がる。残存長1.9cm・幅4.4cm・厚さ0.3cmを測る。何かの先端部のようにもみえるが、性格は不明である。

SD66・70・71・72・113　上幅は約1.5m、下幅は約1.0m、深さ約0.8mを測る。床面はフラットで、形状は逆台形状を呈する。だらだらと延び軸は一定ではないが、雰囲気的にはこれらの溝は一連のものと推測できる。これらの溝の軸は老松神社周辺に残っている地割と概ね一致している。また、柵列群を切っていることから、少なくとも中世以降に形成された土地区画に関係の深い溝であると考えられる。



J－J′
1　暗褐色砂質土(10YR 3/3)微粒砂多く含む
2　褐色土(10YR 4/4)黒色土粒わずかに含む
3　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
4　黒褐色粘質土(10YR 3/1)
5　黒色粘質土(10YR 2/1)黄褐色土粒、炭化物、焼土粒多く含む

K－K′
1　暗褐色土(10YR 3/3)やや砂質つよく、焼土粒を含む
2　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
3　褐色砂質土(10YR 4/4)黄褐色土塊含む
4　灰黄褐色土(10YR 4/3)
5　灰黄褐色土(10YR 4/3)キメが細かく、やわらかい
6　黒褐色土(10YR 2/3)
7　褐色粘質土(10YR 4/4)焼土粒少し含む
8　黒褐色砂質土(10YR 2/3)

Fig.59　SD71土層図(J-J',K-K')(S1/30)

SD66出土遺物（Fig.60・PL.42）

鉄器

刀子（267）　残存長4.3cm・身幅1.5cmである。鋒のみで、身のほとんどを欠失しており、詳細は不明である。

SD70出土遺物（Fig.60・PL.27）

土師器

皿（260）　糸きりの小皿aである。復元口径9.5cm・復元底径7.6cm・器高1.4cmを測る。色は橙色（7.5YR7/4）、胎土には少量の砂粒・赤褐色粒・雲母が含まれる。

SD72出土遺物（Fig.60・PL.27）

土師器

坏（261）　口径11.7cm・底径5.4cm・器高3.05cmを測る。にぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土に微砂粒および金雲母を含む。焼成はややあまい。底部は糸きりである。

SD83　SD71に切られる。上幅は約1.6m、下幅は約1.5m、深さ約0.2mを測る。床面はフラットで、形状は逆台形状を呈する。機能は不明。

SD83出土遺物（Fig.60・PL.27）

土師質土器

鍋（274）　口径43.0㎝・推定底径22.0㎝程度・残存高17.0㎝を測る。底部は欠失しているが、やや丸みを帯びていると考えられる。体部は直線的に外方にのび口縁部付近でくの字状に外反する。内面には横方向のハケメ、外面はユビオサエの後にナデている。また外面には煤が付着している。

SD88　調査区西方のSD50が屈曲する付近にSD87と並行して延びる溝である。時期・機能ともに不明である。

SD88出土遺物（Fig.60・PL.41,42）

石器

石鏃（273）　広義の剥片鏃で、一方の脚部は欠損。黒曜石の剥片を素材とし、形態的には二等辺三角形を呈する。素材の剥片の打面側を脚部に使用し、抉入部は浅い。表面に加工を施し、主要剥離面を残していない。

砥石（266）　長さ6.9㎝・幅3.2～3.5㎝である。石材は細粒砂岩で、砥面には4面すべてを用いている。部分的に赤変したところが見受けられ、被熱しているものと推測される。

鉄器

釘（268～270）　すべて頭部と先端部を欠失しており、遺りが悪い。268は残存長2.5㎝・径0.5㎝、269は残存長2.3㎝・径0.35㎝、270は残存長3.7㎝・長径0.6㎝・短径0.3㎝を測る。断面形は268・269が方形に近く、270が長方形を呈している。

SD89　SD50の東側肩に沿って短く延びる溝で、上幅は約0.4m、下幅は約0.2m、深さ約0.2mを測る。床面は規則的な凹凸がみられ、形状は逆台形状を呈する。機能については不明確な点が多い。

SD89出土遺物（Fig.60・PL.42）

鉄器

鉄鏃（271）　片刃鏃である。鏃身部と茎端部をともに欠いており、遺りが悪い。残存長2.65㎝・径0.35～0.5㎝を測る。

SD97・121　両者ともに上幅は約0.3m、下幅は約0.1m、深さ約0.1mを測り、非常に短い。床面はフラットで、形状は逆台形状を呈する。機能は不明であるが、恐らくは耕作に伴うものと考えられる。

SD97出土遺物（Fig.60・PL.42）

鉄器

釘（264）　頭部と先端部を欠失しており、遺りが悪い。残存長5.2㎝・径0.6㎝を測る。断面は方形である。

SD121出土遺物（Fig.60・PL.42）

鉄器

釘（265）　先端部のみを欠く。残存長3.1cm・幅0.3cmを測る。断面は方形である。

SD138　調査区西端の段落ち付近の溝である。本来は東西に伸びていたものと推測されるが、ひどい削平を受けており、深い土坑状の箇所のみが残ったものである。上幅は約1.2m程度、下幅は約0.8m、深さ約0.3mを測る。床面はフラットで、形状は逆台形状を呈する。

SD138出土遺物（Fig.60・PL.27）

土製品

土錘（272）　長さ3.7cm・径1.2cm・孔径0.4cm・重さ4.3gを測る。土師器的な焼きのもので、色調は橙色（7.5YR6/8）である。ローリングにより磨滅が著しい。

SD118　調査区東南隅の段落ち付近に延びる溝である。上幅は約0.7m、下幅は約0.6m、深さ約

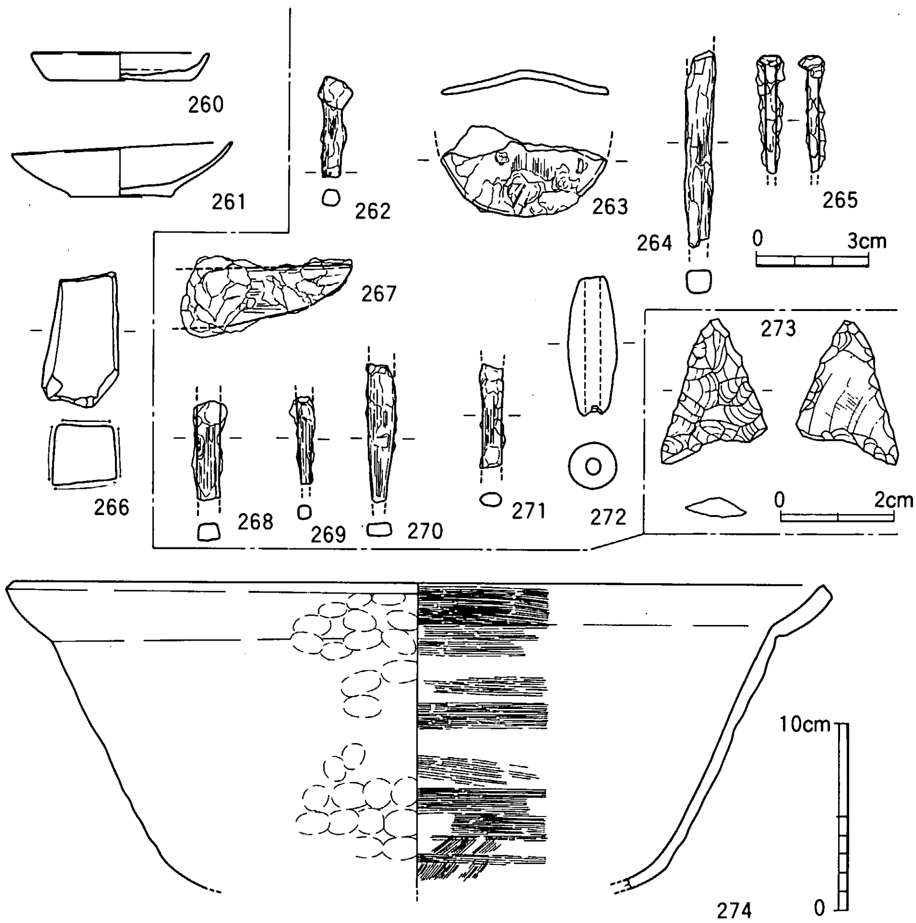


Fig.60　SD65,66,70,72,83,88,89,97,121,138出土遺物(S1/3,2/3,1/1)

0.1mを測る。床面は凹凸がみられ、形状は逆台形状を呈する。埋土は明るい茶褐色粘質土を主体とし、部分的に真砂が混入している。時期を示す遺物が確認できていないが、近世以降の新しい時期の所産であると推定される。

SD118出土遺物（Fig.61・PL.42）

銅製品

鎺（275）　長さ3.4cm・幅2.8cm・厚さ1.3cmを測る。右側面に丸みをもっているので鞘尻とも考えたが、刀身の納まる部分の孔が貫通し、ソケット状になっていることから、ここでは一応、鎺として扱っておく。孔の形状は、鎬に相当する稜が見られることから、鎬造りの刀に用いられていたものと考えられる。青銅製で、所々に緑青がふいている。時期は不明である。ちなみに鎺とは、刀身の鞘中におけるがたつきを防止する刀装金具である。

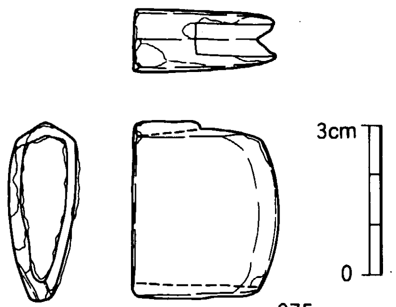


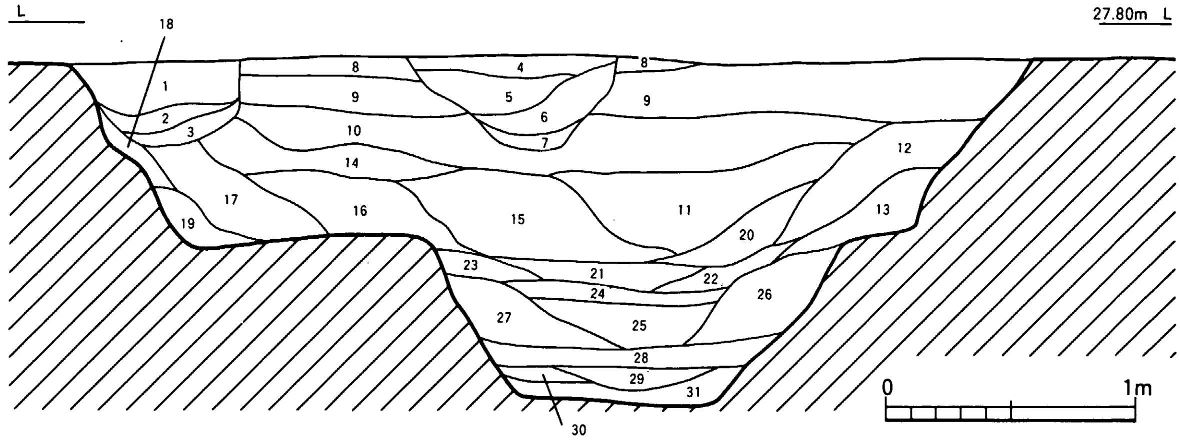
Fig.61　SD118出土遺物(S2/3)

SD120（Fig.62・PL.10）　本調査区南側の段落ちに並行して約180mに渡って検出された溝である。主軸方向は調査区の東端でやや曲がってしまうものの、概ねN－45°33′－Wを示しており、実質的な南の境界的な位置にある溝である。本遺跡の地割の方向に一致していることや溝の床面全域に硬化土が敷かれたような状況が確認されていること（本書第Ⅳ章を参照）などから、他の溝とは異なった特殊な溝であることがうかがえ、とくに後者については、床面を硬化させることを目的として意識的な工事が施工されたことが分析によって確認されている。

上幅は3.5～4m、下幅は1m弱、深さ1.3～1.5mの大きさを基本とし、形状は二段掘りを呈している。両側にテラスを有しており、北側テラスは幅約1m・南側テラスは幅約0.3mである。両者ともレベルは一致しており、北側の方に広いステップがある格好になる。溝の床面レベルについては、東端で標高26.70m、西端で標高26.90mであり、±20cmの範囲で西に向かって緩やかに傾斜している。

土層の堆積状況はレンズ状の純堆積で、水成堆積を示すような状況は確認されていない。全体的には粘質土系の土壌が充填している状況で、微粒砂・シルト系の土壌や泥炭土などは確認されていない。また、テラスの高さに相当する第21～23層のついては、暗褐色土系の非常に締まった硬質土壌で構成されていることから、溝の時期は大きく分けて二段階に分かれているものと考えられる。

遺物については、287のみが最下層からの出土で、それ以外のものについては溝の中位以上からの出土である。



1 褐灰色微粒砂(10YR 5/1)

2 黄褐色粘質土(10YR 5/6)

3 暗褐色土(10YR 3/3)

4 褐灰色微粒砂(10YR 5/1)

5 暗褐色土(10YR 3/3)+
灰白色砂との混合土

6 褐色土(10YR 4/4)

7 暗褐色砂質土(10YR 3/3)

8 褐灰色土(10YR 4/1)

9 暗褐色土(10YR 3/4)

10 黒褐色粘質土(10YR 2/3)
土器片多く含む

11 黒色粘質土(2.5Y 2/1)

12 黒褐色土(10YR 3/2)

13 明黒色土(2.5Y 2/1~3/1)
砂礫多く含む

14 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)

15 黒褐色粘質土(10YR 2/2)

16 暗褐色粘質土(10YR 3/3)

17 黒色粘質土(10YR 2/1)

18 褐色土(10YR 4/4)
砂粒を多く含む

19 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)

20 黒褐色土(10YR 2/2)

21 黒褐色土(10YR 2/2)
砂礫多く含み、非常に硬く締まる

22 黒色土(2.5Y 2/1)
しまりが良い

23 暗褐色粘質土(10YR 3/3)
しまりが良い

24 褐灰色粘質土(10YR 4/1)
砂粒を多く含む

25 明黒色粘質土(2.5Y 2/1~3/1)
キメが細かく、不純物少ない

26 黒褐色土(10YR 3/1)

27 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
小礫、炭化物粒含む

28 にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)

29 褐灰色粗砂(10YR 6/1)
礫多く含み、非常に硬質

30 浅黄色微粒砂(2.5Y 7/3)
非常に硬質で、しまり良い

31 灰黄色粗砂(2.5Y 7/2)

Fig.62 SD120土層図(L-L')(S1/40)

SD120出土遺物（Fig.63～66・PL.27～30,42,48,49）

須恵器

蓋（276～286）　276は口径15.3cm・器高2.05cmを測る。かえりが口縁端部よりも内側にあるもので、焼成はあまい。278は、擬宝珠の雰囲気をやや残した低いボタン状の撮みをもち、口縁端部が三角形に肥厚しているもので、口径14.2cm・器高2.2cm・撮み径2.65cmを測り、色調は灰色（N6～N4）、胎土は精良である。法量に差異はあるものの、279・280・282・285もほぼ同様のものである。

281は短頸壺とのセットになる壺蓋aである。口径14.55cm・器高4.0cm・撮み径2.7cm、色調は灰黄色（2.5Y6/2）で、胎土には1～3mmの砂粒および雲母を少量含む。撮みは、低く偏平なボタン状を呈する。

その他のものについては、形状・法量にかなりのばらつきがみられる。277は、口径16.0cm・器高2.1cmで、低い偏平なボタン状の撮みをもつ。撮み径は2.6cm。天井部はほぼ平坦であるが、端部は三角形で下方に強く肥厚している。色は青灰色（5B5/1）。283・284は、平たい形状のもので、284が口径16.0cm・器高1.5cmである。283は破片であるため、法量は不明。灰色（N5～N6）で、胎土は精良である。また、286は天井部内面に墨書が施されているが、判読は不明。

坏（287～303・306）　坏は306を除けば、すべて坏cである。高台は逆台形の短いものを基本とし、屈曲部付近か0.5mm程内側に貼付される。これらは、口径15cm以下・器高4.0～4.5cmの小形のもの（287～298・306？）と口径15cm以上・器高5.0～6.0cmの大ぶりなもの（299～302・306）とに分けられる。小形のものは287と289を除き、体部が直線的に延びるもの（291～297）とやや丸みをもちながら開き気味に外反するもの（288・290・298）とに細分される。

287は、口径10.6cm・高台径8.4cm・器高5.0cmで、低く端部を外方にはねる高台部をもち、体部は丸い形状を呈するものである。焼成はあまく、大きくゆがんでいる。胎土には1mm程度の白色砂粒が多く含まれている。289は、口径13.1cm・高台径9.6cm・器高4.6cmである。体部に稜を有し、高台は外方に向かって張り出している。また破片ではあるが、303は高台内に「倢」と判読できる墨書が確認できる。

皿（304・305）　304は口径18.3cm・器高2.2cm、305は口径17.0cm・器高2.35cmを測る。2点とも調整はヘラ切り後にナデ、その他はヨコナデを施している。色は灰色（N5）で、胎土には0.5～1.5mmの砂粒が多く含まれている。

瓶（308）　提瓶の口縁部～頸部の破片である。口径7.0cm・残存高5.1cmである。焼成はあまい。磨滅により、状態は悪い。

壺（310・312・322）　310・312は長頸壺（壺b）、322は短頸壺（壺c）である。310は、胴部の屈曲部以上を欠失する。高台径11.4cm・残存高7.6cmで、器壁はやや厚めである。オリーブ灰色（2.5GY5/1）を呈し、焼成は普通。312は、頸部～口縁部を欠失する。胴部最大径20.9cm・高台径10.2cm・残存高11.4cmを測る。灰色（N6）を呈し、調整は体部中央以下がケズリ、それ以外はヨコナデである。両者ともに、胎土は精良である。

また322は、口縁部から体部にかけて1/3ほどを欠失する。口径13.45cm・胴部最大径20.0cm・高台径10.75cm・器高15.05cmを測るが、全体的にゆがみがある。把手は2ヶ所。色調は灰色（5Y4/1）である。また281の壺蓋bとは、セットにならなかった。

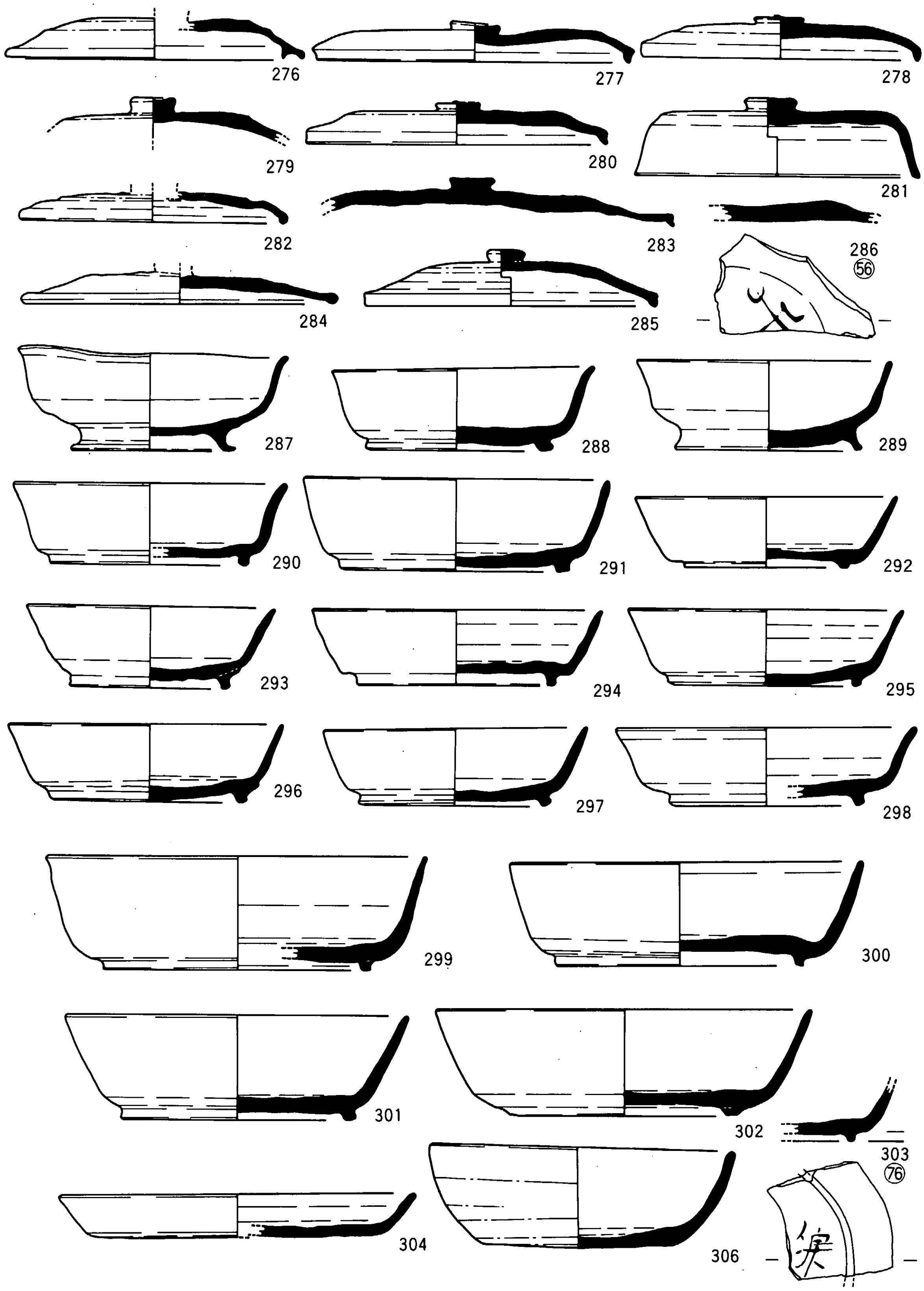


Fig.63　SD120出土遺物その1(S1/3)

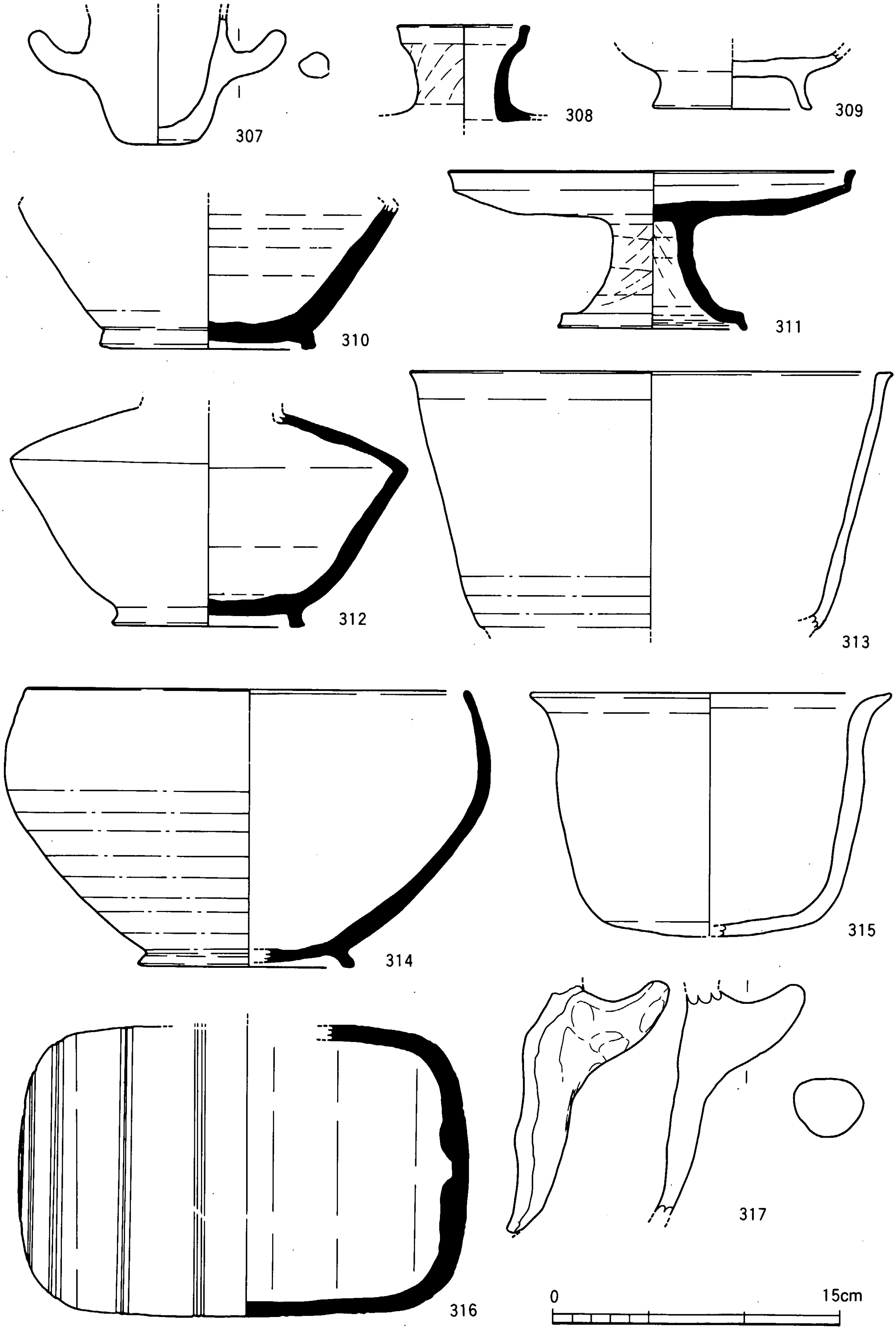


Fig.64　SD120出土遺物その2(S1/3)

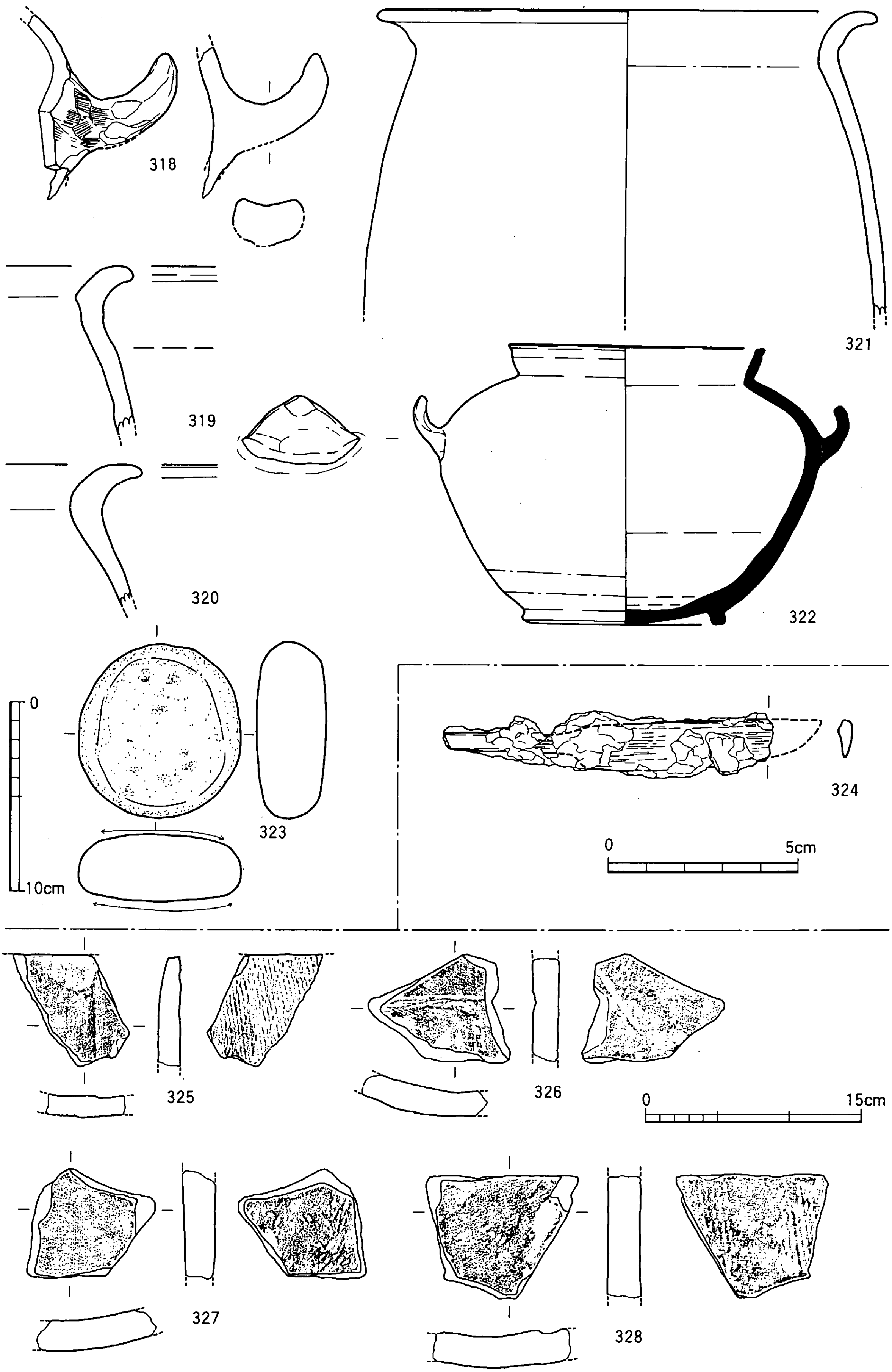


Fig.65　SD120出土遺物その3(S1/4,1/3,2/3)

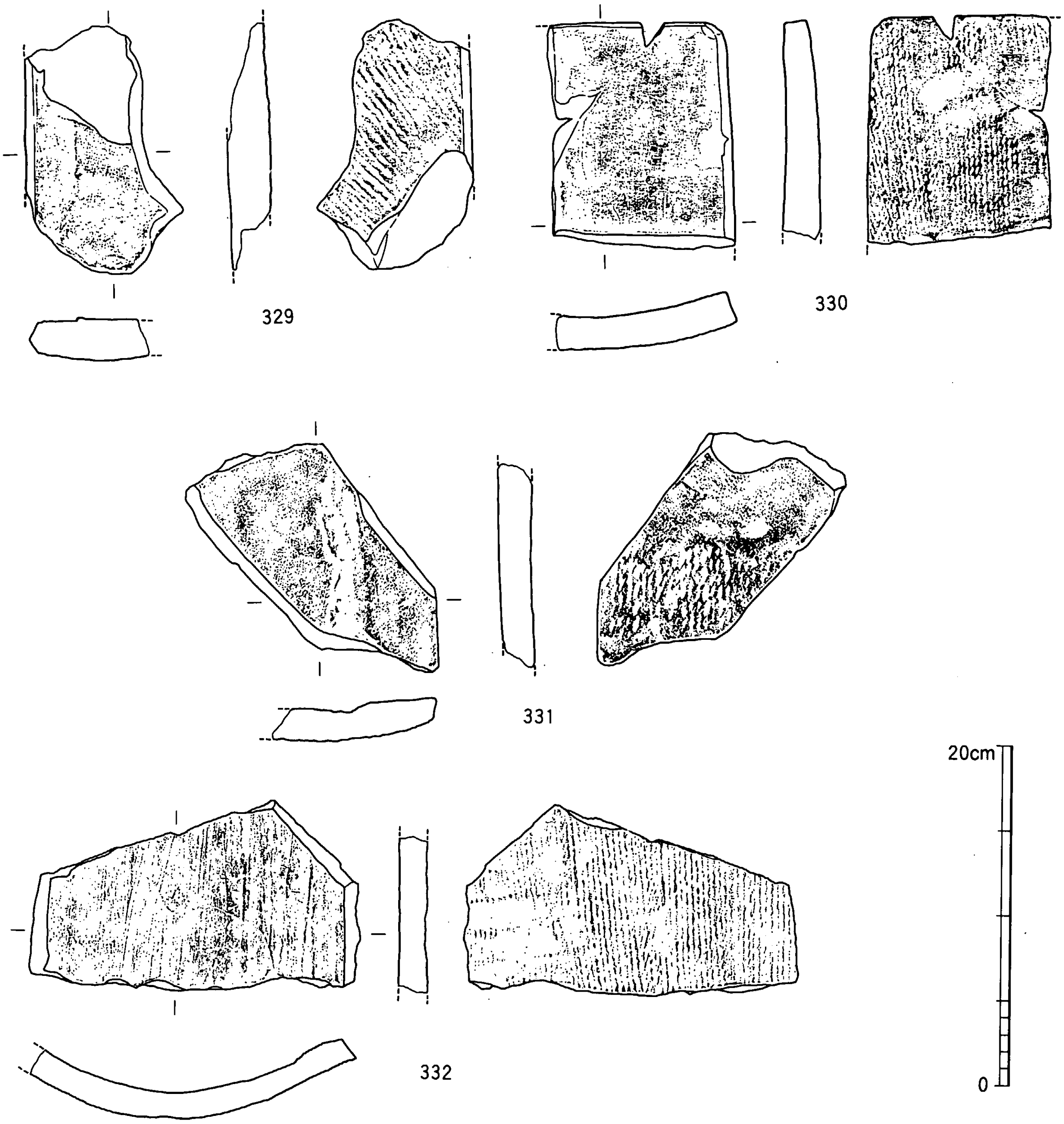


Fig.66　SD120出土遺物その4(S1/4)

高坏（311）　高坏は1点のみの出土である。坏部は浅い皿状で、口縁部がくの字状に折れ曲がり、脚部は短脚で、裾端部はくの字状に折れて逆三角形を呈する高坏b1である。

鉢（313・314）　313は、体部が直線的にやや外方に開きながら延びる鉢bである。口径25.4cm・残存高13.6cmである。底部は欠損。オリーブ灰色（2.5GY6/1）を呈し、胎土は精良である。314は、口縁部が緩やかに内傾し、外方に短く延びる高台を有する鉢である。口径23.3cm・高台径11.4cm・器高14.5cmを測り、灰白色（N7）である。

䍃（316）　樽型䍃である。調査区東端の埋土上層から出土。体部長22.8cm・残存高15.0cmを測る。1/2ほどしか残っていないので、復元して図示した。色調は灰色（N4）で、胎土は精良。

土師器

椀(309)　高台径8.4cm・残存高3.1cmを測り、断面の細長い高台を有する。粗雑なナデ調整を行っている。灰色（N5）を呈し、1mm程度の砂粒が含まれる。

甕（307・315・317〜321）　307は把手がつく小甕である。ミニチュア土器のように極小で、残存高7.0cmである。明黄褐色（10YR7/6）で、内面には指頭圧痕がみられる。315は口径18.4cm・底径11.3cm・器高13.0cmの小甕である。口縁部はやや尖り気味に外反しているが、内面の稜はみられない。焼成は良好で、明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には少量の雲母が含まれている。317・318は甕か甑の把手、319・320は甕の破片である。321は、口径26.2cm・残存高16.4cmで、胴部下半以下を欠失する。橙色（5YR6/8）を呈し、1〜2mm程の砂粒・雲母および赤褐色粒が胎土に含まれる。調整は、内面にはわずかにケズリが確認できるが、磨滅により不明である。

石器

磨石（323）　凝灰岩を素材としているもので、使用頻度は低い。形状は不整な円形で、径8.5〜9.0cm・厚さ3.5cmを測る。使用痕は両面にあり、表面の所々に敲打痕がみられる。このことから、磨石と敲石の機能を合わせもつものと推測できる。

鉄器

刀子（324）　推定長10.0cm（刀身部5.5cm＋α・茎部3.0cm）・身幅1.3cm・背幅0.25cm・茎部径0.5cmを測る。鋒の部分を欠失している。

瓦（325〜332）　すべて平瓦である。325・329・330・332は須恵器的な焼きのもので、内面に布目痕、外面に縄目タタキが残る。このうち330と332は、布目を丁寧にナデ消している。色調は、灰色（N3）〜明オリーブ灰色（2.5G7/1）である。なお330・332の側面は一面で、329の側面は二面で面取りが行われている。

326〜328・331は土師器的な焼きのものである。内面に布目痕、外面に縄目タタキが残っているが、全体的に磨滅が著しい。色調は灰白色（10YR8/2）であり、胎土には微砂粒が多く含まれる。ローリングをかなり受けており、磨滅が著しい。

SD147　調査区西端のSB44の南側に位置する溝である。周辺は大きく削平を受けているものと推測され、遺りは悪い。幅1.8m・深さ0.3mを測り、形状は浅い逆蒲鉾状を呈する。床面はほぼフラットである。埋土の状況から推測すると、比較的新しい時期のものと考えられる。

SD147出土遺物（Fig.67・PL.42）

鉄器

小刀(333)　全長16.0cm(刀身部11.0＋αcm・茎部6.0cm)・身幅3.2cm・背幅0.3cm・茎部最大径1.15cmを測る平造りのものである。茎部に対して刀身部が短いことや身幅が広いことなどから、武器ではなく包丁のようなものも想定できるが、現段階では不明確な点も多く、小刀の範疇に含めた。

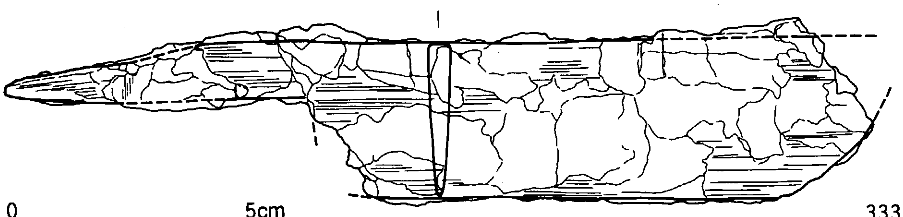


Fig.67　SD147出土遺物(S2/3)

5 井戸（SE）（Fig.68〜71・PL.11）

今回の調査で検出された井戸は合計4基である。本遺跡の場合は、それほど深い掘削を行わないのが特徴で、深さ3m前後である。これは、湧水位が比較的高かったことを示しており、周辺の地形生成に起因しているものと推測される。

また今回は、遺構の形状や遺物の出土状況・埋土の状況などを踏まえ、確実なもののみを井戸として認識している。

SE 1 （Fig.69・PL.11） Dブロックに位置している。掘り方の形状は略隅丸方形で、辺2.3m×2.2m・深さ2.5mを測る。断面形は砲弾形を呈している。中位以下は斜めに掘り込まれ、検出面から中位付近までは垂直に立ちあがる。壁土は中位付近でシルト化し、床面付近では砂礫層に達している。この中位付近の裏込め土には径5〜10cmほどの礫が敷き詰められており、裏込め土の軟弱化による使用時の崩壊防止と井側の補強の目的であったものと推測される。礫敷きは、中央に向かってわずかに窪んだ状態で検出されているが、これは井側が抜かれた後に沈下したものと考えられる。この礫敷きはほぼ円形に配されていることから、井側は直径約1mほどの曲物（桶？）積みであった可能性が想定できる。

また井側の設置位置がやや北寄りで、対する南側には礫敷きが長方形に広く配されていることから、ここが取水場所であった可能性も想定できる。

遺物が少ないため時期が不確実であるが、掘立柱建物や柵列群などとの位置関係から、これらとほぼ同時期のものと推測される。

SE 1 出土遺物（Fig.68・PL.42）

鉄器

鉄鏃（334） 鋒と茎部を欠失する片刃鏃である。残存長3.6cm・重ね幅0.3cm・身幅1.0cm・茎部径0.55cmを測る。

刀子（335） 刀身部のほとんどを欠失し、残存長6.2cm・重ね幅0.5cm・身幅1.2cmを測る。柄間部の木質がわずかに残っている。

SE 2 （Fig.69・PL.11） Eブロックに位置しており、このブロックの掘立柱建物に伴うものと考えられる。掘り方の形状は不整な隅丸方形を呈し、辺1.6m×1.8m・深さ1.6mを測る。最深部は砂礫層まで掘り込まれている。断面は数ヶ所に段を有するものの概ね逆台形状で、床面のみが直径0.6mほどの円形の掘り込みが見られる。このことから、井筒には曲物を用い、その上部の井側は

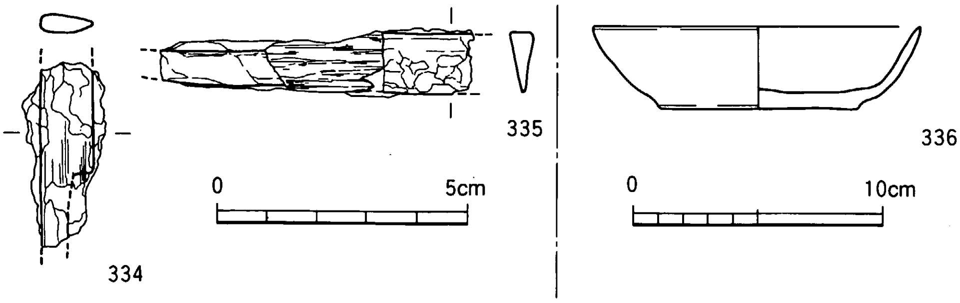


Fig.68　SE1,2出土遺物(S1/3,2/3)

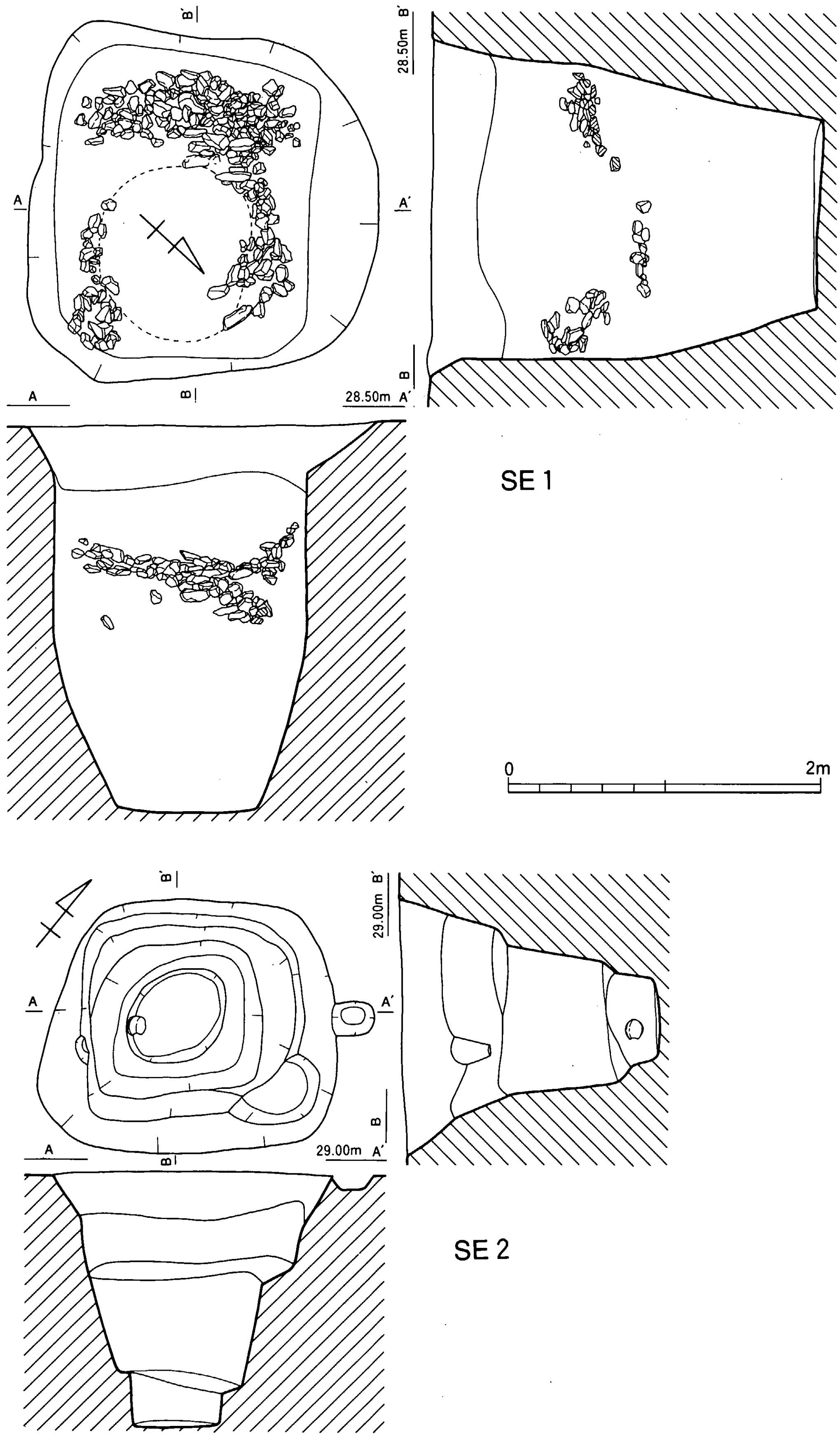


Fig.69　SE1,2実測図(S1/40)

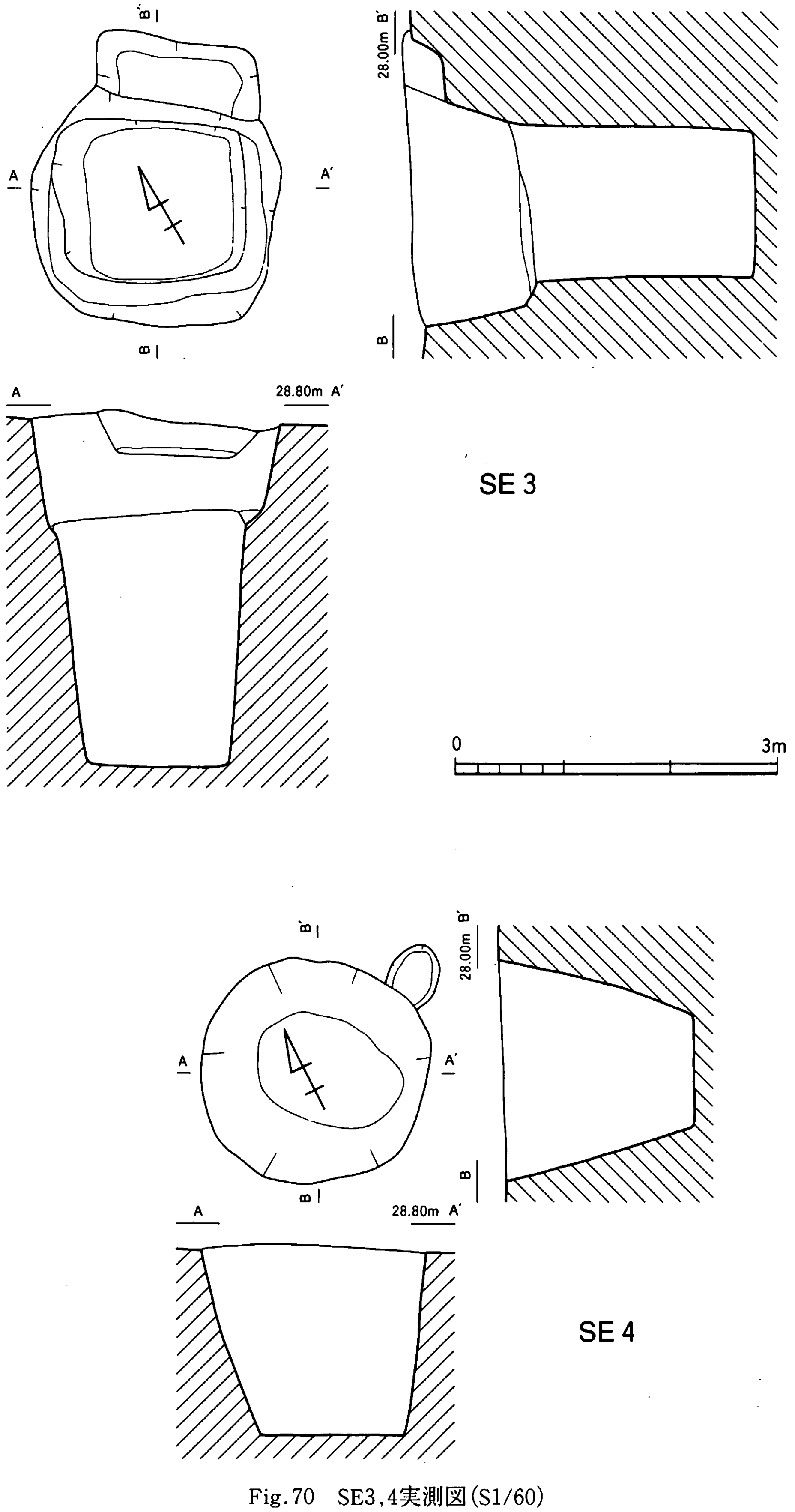


Fig.70　SE3,4実測図(S1/60)

方形の枠組みであった可能性が想定できる。

SE 2 出土遺物（Fig.68・PL.30）

土師器

坏（336） 底部と体部の屈曲部には明瞭な段を有し、体部はやや丸みをもちながら立ち上がる。底部は糸きりで、体部はナデによる調整が施される。焼成はややあまく、にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。胎土には微砂粒・赤褐色土・雲母・角閃石が含まれる。復元口径13.15cm・底径8.0cm・器高3.35cmを測る。

SE 3（Fig.70・PL.11） SD50西方の調査区の南西端付近に位置し、SB42・43に近接している。掘り方の形状は不整な円形で、径2.0～2.2m・深さ3.2mを測る。壁面は、途中に段がつくもののほぼ直立して立ち上がっており円筒形に近い形状を呈し、確実に砂礫層まで掘り抜かれている。本体の北側にはテラス状の張り出し部があり、その埋土の状況に本体との切り合い関係がなかったことから、井戸に付属する階段状のステップであると考えられる。

遺物は磨滅した小片のみの出土であったため図示しなかったが、床面付近から曲物の材と考えられるものが出土した。これは井筒として使われたものなのか、また埋没時に廃棄されたものなのかは不明である。

SE 4（Fig.70・PL.11） Aブロックの官道沿いに位置している。掘り方のプランはほぼ円形を呈し、直径約2.0m・深さ1.8mを測る。湧水により土層の確認ができなかったため不明確な点が多いが、浅いながらも確実に砂礫層まで掘り抜いており、井戸と認識した。この場所はSX 2・波板状圧痕1・2の至近距離で、官道からAブロックへの通路付近に当たる。官道北側のA・Bブロックで井戸の可能性が考えられるものはここ以外にはみられない。また、官道に接近して位置していることやAブロックのなかでも総柱建物のエリアに位置することなどは、非常に興味深い。

SE 4 出土遺物（Fig.71・PL.49）

須恵器

蓋（337） 床面近くの最下層から出土した。小片であり状況が不明確であるが、天井部に「大」と墨書がなされている。灰黄色（2.5Y7/2）～灰白色（2.5Y8/1）を呈し、胎土には微砂粒が含まれている。焼成はあまい。

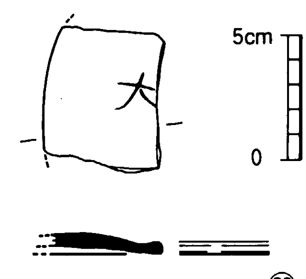


Fig.71 SE4出土遺物（S1/3）

6 道路（SF）（Fig.72～76・PL. 7 ～10, 12）

平行して延びているSD 1とSD 4に挟まれた空間は、後述する波板状圧痕を除いては同時期のものと考えられる遺構が存在していないこと、また事業地を約360mに渡って北西から南東方向に直進性を維持して検出されていることなどから、道路跡と考えられる。これは、溝と溝の芯心間の距離が9.2±0.2mを測ることなどから、駅路クラスの官道として間違いない。遺構の施工時期については、今のところは確実な決め手を欠いている。第Ⅲ章－11に示したように、官道とSD50がクロスする付近に行われた整地は8世紀後半代と推測される。この時期は掘立柱建物群や柵列群が設置される時期と一致しており、周辺の整備を行う際に一元的に行われたものと解釈されるので、即ち官道の施工当時の整地とは考えにくい。SD50は5世紀末から6世紀初頭頃にある程度は埋没していたものと推測されるが、この周辺はその後もかなり脆弱な状態が続いていたのであろう。

また下限については、官道に近接しているST 1の時期が11世紀後半～12世紀初頭に求められることから、この時期には確実に廃道になっていたものと考えられる。その後はSD 4（南側側溝）付近が土地の境界を示すのみとなり、現在まで存続していたものであろう。なお、側溝自体の埋没については8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられ、この時期を境に急速に縮小していったものと考えられる。時期は不明確であるがSD2・3などは官道に並走しており、この縮小に伴う溝である可能性もある。

土層の状況（Fig.72,73）

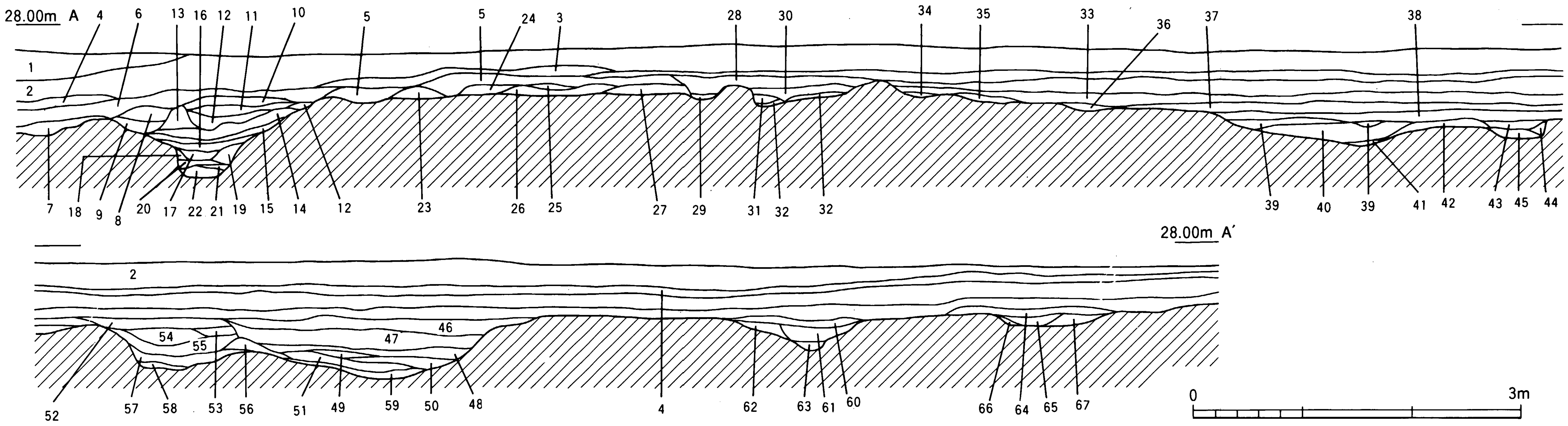
今回の調査では、検出面が耕作土直下で比較的浅かったことや分割して調査を行った関係で、官道の道路部分の土層は東西端の２ヶ所で確認したのみである。

東端については、G.L.から約30cm程度の深さで検出されており、かなり著しい削平を受けているものと考えられる。このため側溝の遺りの良さに対して、表面に露呈した路面部分については基底面を除いてはそのほとんどがカットされており、築造工法を復元するためのデータは皆無といってよい。29～32・41～45層については、茶褐色ないしは黒色系の土が比較的締まった状況で検出されており、時期が不明確であるものの道路の補修が行われた痕跡であると考えられる。また、39層のように小礫が含まれた黒色系粘質土については地山上に行われた整地の残骸であると推測できるが、施工当時のものかどうかは不明である。

また興味深いのは、官道の外側（建物ブロックの官道沿い）にも補修痕跡や波板状圧痕がみられる点である（60～67層）。時期的なものは別としても、道路の通行部分以外にも補修（補強）作業が実施されていることは、道路だけでなく周辺域の維持・管理が一元的に行われたことを示している。

西端については、平地からやや小高い丘に地形が変化した付近に位置している。丘を開折してややオープンカット気味になっているものと推測される。北側の山手の方は、完全にカットされており、窪んでいる部分が道路の範囲であると推測できる。

ここの場合も東端と同様に、道路の通行部分以外の周囲に付属する範囲の工事（修繕も含んで）を入念に行っている。特に南側については、淡黄褐色硬質土が貼られたような状態で検出されており、かなり強固に固められている。



1　客土(真砂)

2　表(耕作土)

3　黒褐色粘質土(10YR 3/2)

4　褐色土(10YR 4/6)
　耕作土への漸移層

5　黒褐色砂質土(10YR 3/2)
　砂質つよい

6　褐色砂質土(10YR 3/2)
　しまり良い

7　暗い灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)
　砂粒、黄褐色土塊含む

8　暗褐色土(10YR 3/4)

9　褐色土(10YR 4/4)
　黄褐色土粒少し含む

10　オリーブ黒砂質土(5YR 3/1)

11　にぶい黄色微粒砂(2.5YR 6/3)

12　黒褐色砂質土(10YR 2/3)
　土器細片多く含む

13　黒色粘質土(10YR 1.7/1)

14　にぶい黄褐色粘質土(10YR 5/3)

15　黒褐色砂質土(10YR 2/3)
　しまり悪く、1～2cmの礫多く含む

16　黒色粘質土(10YR 1.7/1)
　粘性つよく、炭化物粒含む

17　暗褐色土(10YR 3/3)
　砂粒、黄褐色土粒少し含む

18　黒褐色粘質土(10YR 2/2)
　黄褐色土塊、炭化物含む

19　褐色粘質土(10YR 3/3)
　黄褐色土塊、礫含む

20　褐灰色粘質土(10YR 4/1)
　黄褐色土塊、微粒砂少し含む

21　黒褐色土(10YR 2/3)

22　灰黄褐色砂礫(10YR 4/2)
　土器片、炭化物含む

23　褐灰色粘質土(10YR 4/1)

24　黒色砂質土(10YR 1.7/1)

25　黒色砂質土(10YR 1.7/1)
　小礫わずかに含む

26　にぶい黄褐色土(10YR 5/3)

27　黄褐色土(10YR 5/6)

28　褐色土(10YR 4/4)

29　にぶい黄褐色微粒砂(10YR 4/3)

30　黒褐色砂質土(10YR 2/3)

31　黒褐色砂質土(10YR 3/1)

32　褐灰色砂質土(10YR 4/1)

33　暗褐色土(10YR 3/3)

34　灰黄褐色砂礫(10YR 4/4)

35　褐色粘質土(10YR 4/4)

36　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
　黄褐色土粒、土器片わずかに含む

37　にぶい黄褐色砂質土

38　暗褐色粘質土(10YR 3/4)

39　灰黄褐色微粒砂(10YR 5/2)

40　灰黄褐色粘質土(10YR 5/2)
　しまり良く、弾性に富む

41　黒褐色粘質土(10YR 3/1)

42　黒褐色砂質土(10YR 3/1)

43　黒褐色粘質土(10YR 3/1)

44　暗褐色粘質土(10YR 3/3)

45　明褐色粘質土(2.5Y 6/6)

46　暗褐色粘質土(10YR 3/4)

47　暗褐色粘質土(10YR 3/3)ベース
　やや砂質が強い

48　黄褐色土(2.5Y 5/3)
　塊状を呈する

49　浅黄色微粒砂(2.5Y 7/3)

50　褐色粘質土(10YR 4/4)

51　黒褐色砂質土(10YR 2/2)

52　灰黄褐色砂質土(10YR 4/2)

53　褐色粘質土(10YR 4/4)

54　黒色粘質土(10YR 1.7/1)

55　暗褐色砂質土(10YR 3/3)

56　黄褐色土(10YR 5/6)

57　褐色粘質土(10YR 4/4)
　粘性強い

58　灰黄褐色微粒砂(10YR 6/2)

59　灰黄褐色微粒砂(10YR 6/2)

60　暗褐色粘質土(10YR 3/4)

61　オリーブ黒　粘質土(5Y 3/1)
　粘性強い

62　黒褐色砂質土(10YR 2/3)

63　黒色粘質土(10YR 1.7/1)

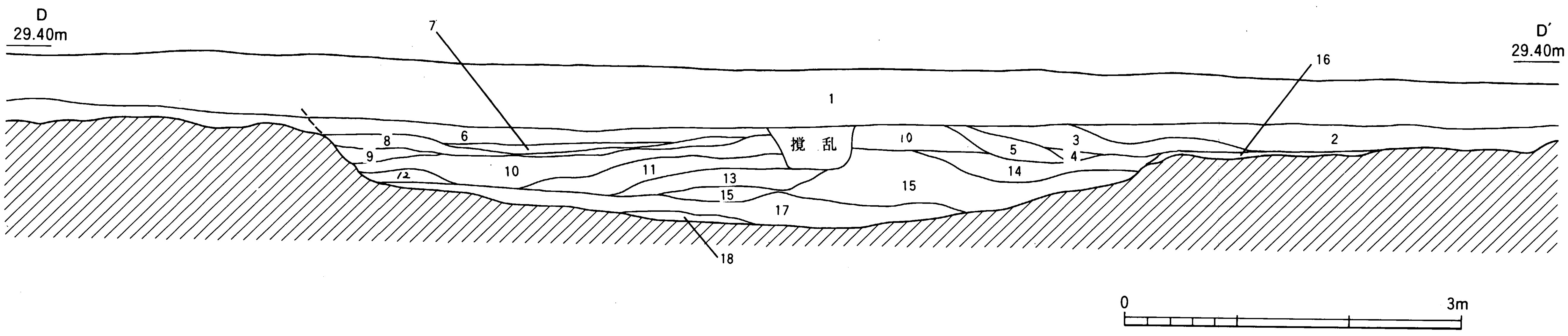
64　褐色粘質土(10YR 4/4)ベース
　砂粒をわずかに含む

65　褐灰色粘質土(10YR 4/1)

66　黒褐色粘質土(10YR 3/1)

67　黒褐色砂質土(10YR 3/1)
　やや砂質が強い

Fig.72　官道調査区東側土層図(A-A')(S1/40)



1 客土（現代の真砂）

2 灰白色砂質土（10YR 7/1）

3 灰黄褐色砂質土（10YR 7/1）

4 灰白色微粒砂（10YR 7/1）

5 にぶい黄褐色微粒砂（10YR 7/2）

6 暗褐色土（10YR 3/3）
旧表土の残骸

7 黒褐色粗砂（10YR 2/2）
非常に硬質、小礫多く含む

8 暗褐色砂質土（10YR 3/3）
非常に硬質、小礫多く含む

9 灰白色砂（10YR 7/1）
部分的にシルト化している

10 褐灰色砂（10YR 4/1）+灰オリーブ砂（5Y 4/2）の混合
鉄分の沈着痕が部分的にみられる

11 灰オリーブ砂（5Y 4/2）

12 明褐色粘質土（7.5YR 5/6）

13 灰黄褐色砂（10YR 5/2）
黄褐色土粒、粗砂をやや多く含む

14 灰白色砂（10YR 7/1）

15 灰黄褐色砂（10YR 5/2）

16 明黄褐色土（10YR 6/6）
しまり良く非常に硬質、官道沿いに施工された硬化層の残骸か

17 灰白色微粒砂（2.5Y 8/1）
やや黄色がかかっている

18 極暗赤褐色粘質土（5YR 2/3）

Fig.73 官道調査区西側土層図（M-M'）（S1/40）

6－1波板状圧痕（Fig.74～76・PL.12）

波板状圧痕1（Fig.75・PL.12） SX2付近の官道路面側に位置する。寸法は、長さ1.2～1.5m・幅0.15～0.2m・深さ5～10cmを測る。長さ約12～13mの範囲で検出されており、その並び方から大きく2つのグループに分けられる。また、西側のグループは圧痕の間隔が約0.5mであるのに対して、東側のグループでは0.1m程度とやや詰まり気味に並んでいる。圧痕は茶褐色土から切り込んでおり、埋土は茶褐色砂質土をベースとし黄褐色土粒と小礫・土器細片が含まれる。埋土を除去すると、淡黄褐色粘質土（地山）に至る。この状況は部分的にかなり多岐に渡っており、径5cm程度の何か棒状のもので突き固めたような箇所もあれば、しっかりと面的に固化している箇所もある。このときのいずれの場合にも、2～3cm程度の小礫がまかれたような状態でめり込んでいる。

波板状圧痕2（Fig.75・PL.12） 位置的な関係から、明らかに波板状圧痕1に対するようにSX2を挟んでいることが分かる。長さ約8mの範囲で比較的整った状態で検出されている。付近がやや削平を受けていることもあって小さなものもみられるが、寸法は長さ約1.2m・幅約0.2m・深さ5～10cm・圧痕の間隔0.5mを測る。埋土は波板状圧痕1と同様の状況である。ただし、圧痕下の状況は異なっており、小礫がまかれたような状況は確認されていない。波板状圧痕1と2の間のSD1には橋梁状の遺構と考えられるSX2が設けられており、またこの付近の北側には、Aブロックの総柱建物（SB7～9）のエリアになっていることから、官道とこのエリアの関係が深かったものと考えられる。

波板状圧痕3（Fig.76・PL.12） 官道がSD50付近の脆弱地を抜ける直前付近に位置している。長さ約5～6mの範囲で検出されている。圧痕の単位は、長さ0.7～0.9m・幅0.15～0.2m・深さ5～10cmを基本としているが、他のものと比べると規則性がなくランダムに並んでいる状況である。本来はSD50の直前まで続いていた可能性が高いが、削平が著しかったため確認はできていない。この状況が機能（工法？）差を示しているのかどうかは分からない。

波板状圧痕4（Fig.74,76・PL.12） 調査区西端の平地からやや小高い丘に変化する付近に位置している。長さ約7mの範囲で検出されており、圧痕の単位は長さ約1.0m弱・幅0.15～0.2m・深さ5～10cm・圧痕の間隔約0.1～0.2mを測る。撹乱などの影響により検出範囲は限定されている。圧痕下には、幅0.3m・深さ0.3cmで逆台形状を呈する直交する溝が、圧痕に切られて延びている。これは圧痕の範囲にのみ検出されており、既報告済みの東遺跡のものと類似している。機能について不明であるが、両者ともに地形が変化していく付近に位置していることなどから、排水などに関係があるのかもしれない。

※土層の説明は本書P.153に掲載。

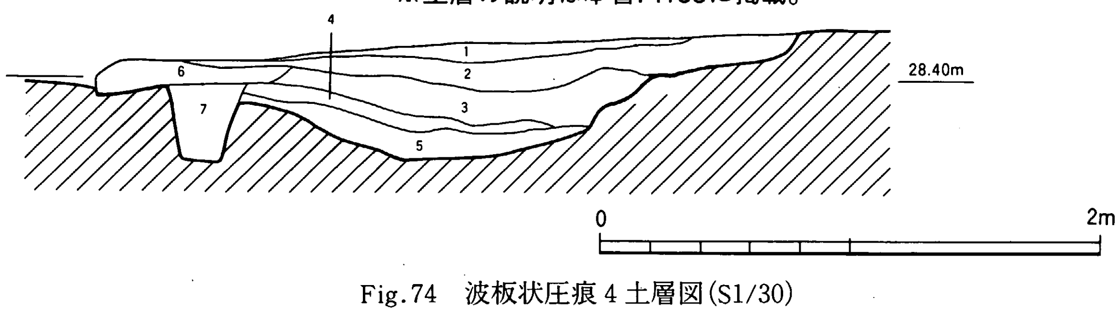


Fig.74　波板状圧痕4土層図(S1/30)

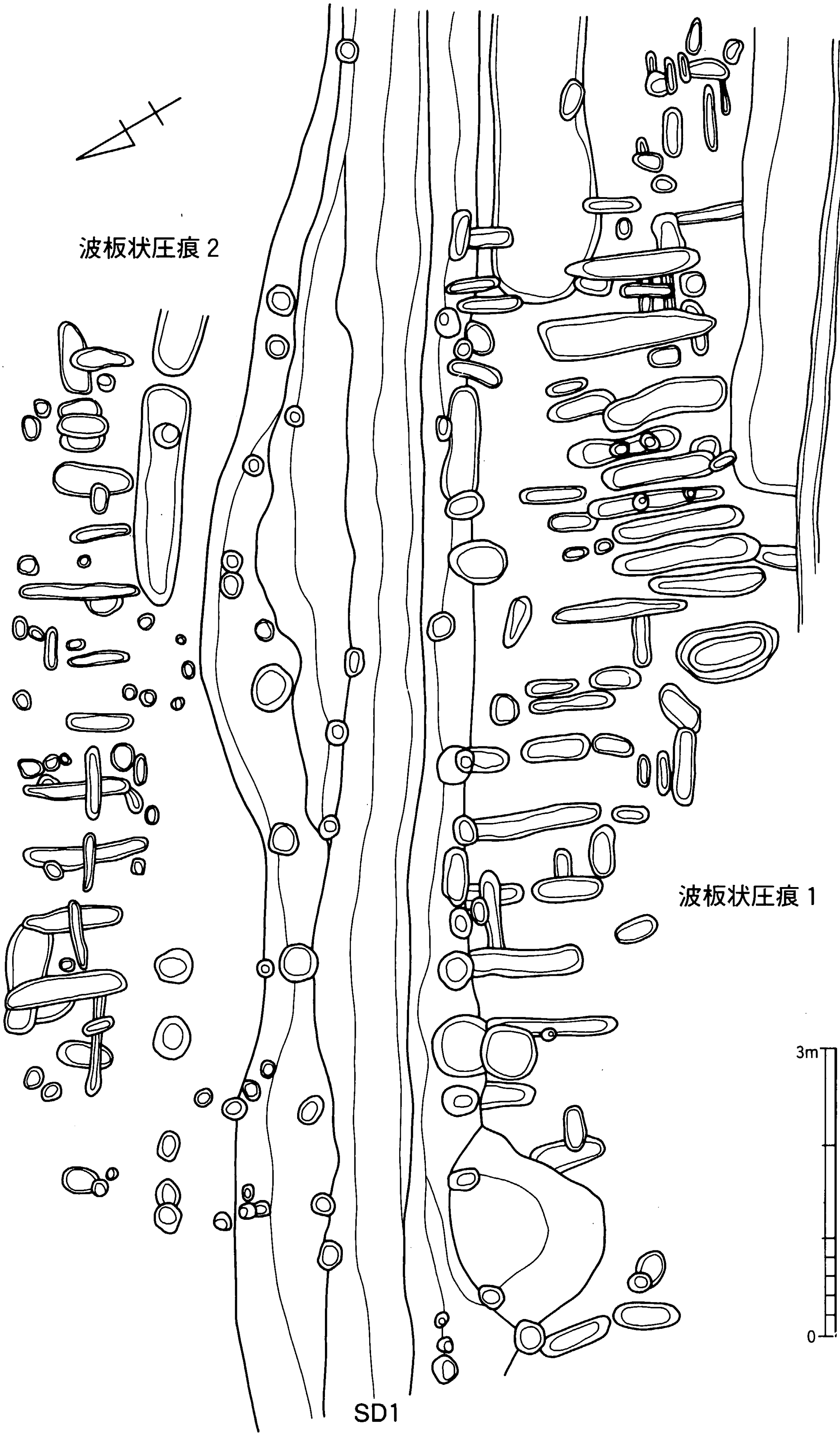


Fig.75　波板状圧痕1,2実測図(S1/60)

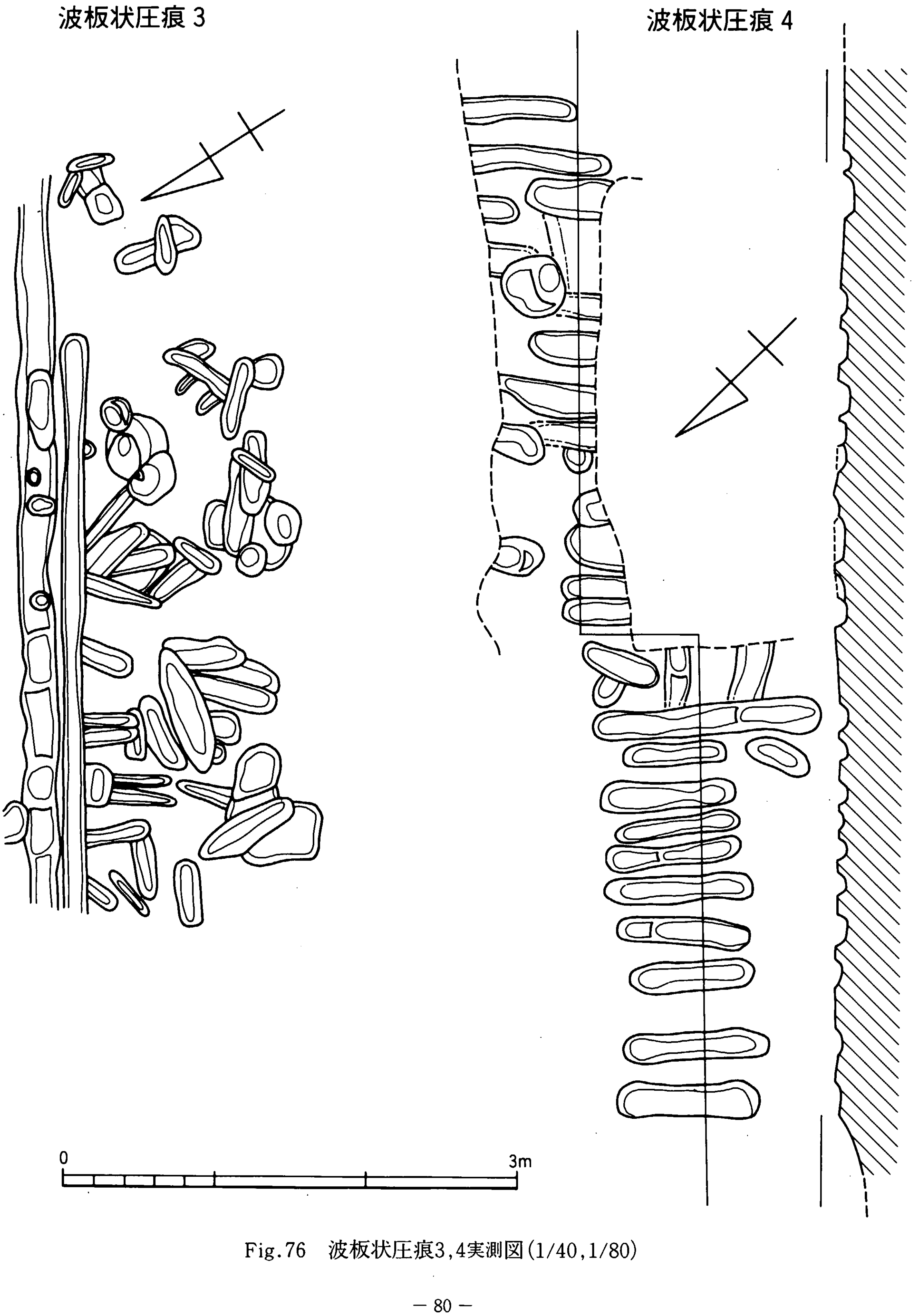


Fig.76　波板状圧痕3,4実測図(1/40,1/80)

7 土坑（SK）（Fig.77～113, PL.13, 14）

SK 4 （Fig.77）　SB 1 から1.5mほど西に位置しており、SD21に切られている。長径4.4m・短径2.7m・深さ約0.8mを測り、ややゆがんだ楕円形を呈する。壁はほぼ直立して立ち上がっており、床面はほぼフラットである。また、南側の隅には窪みがみられる。埋土は暗茶褐色粘質土＋黒色土の単純堆積で、人為的に埋められているものと考えられる。遺物は埋土中位～上位にまとまって出土する傾向が高い。

SK 4 出土遺物（Fig.78,79・PL.30,31,45～49）

土師器

蓋（338～340・343・344）　法量は、口径13.5～15.0cm・器高2.0～2.5cmの範囲で、平たく丸みを帯びた天井部を有する。撮みの形状は338が宝珠状、339が丸いボタン状、340が偏平な擬宝珠状、343が乳頭状、344が低いボタン状とさまざまである。かえりは、三角形の痕跡のみを残しほとんどみられなくなっている。色調は、すべて橙色（5YR6/8）の範囲で、胎土は微砂粒をわずかに含む程度で精良である。焼成は良好。調整は、340を除いては、撮み部とかえりにはナデ、それ以外の天井部内外面に細かいヘラミガキが施されている。

また346だけは、口径18.0cm・器高3.5cmを測り、やや大きめのものである。撮み脇には「α記号」の墨書がみられる。

坏（348～350・365～371・373～376）

348～350は丸い体部をもった坏aである。法量は口径13.0～14.0cm・器高2.1～2.5cmでほぼ同じである。調整は、底部外面はケズリの後にナデ、その他はナデを施しており、内面には指頭圧痕が残る。色はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、口縁付近には煤状の黒斑がみられる。

また、367は坏か皿の破片と考えられる。底部外面に「α記号」が墨書されている。

368～369は坏dである。368は口径18.3cm・底径9.7cm・器高3.8cmの大坏で、色調は橙色（5YR6/8）、胎土は精良で、焼きはよい。369は口径14.75cm・器高3.95cm、373は口径14.35cm・底径7.25cm・器高3.4cmを測り、色は橙色（2.5YR6/8）、胎土

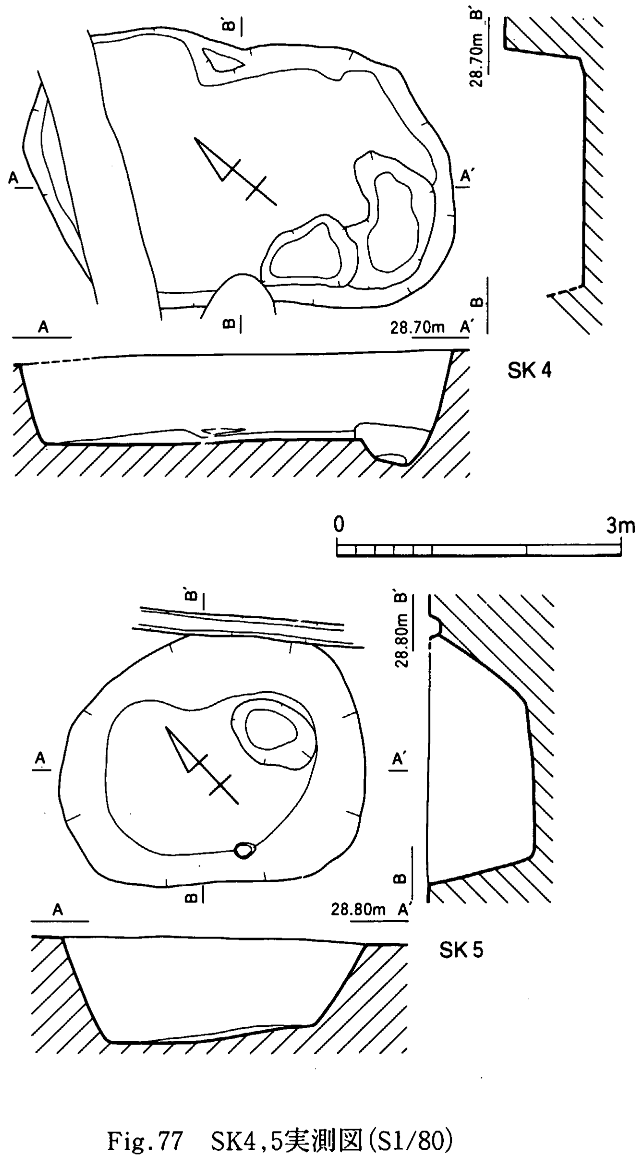


Fig.77　SK4,5実測図（S1/80）

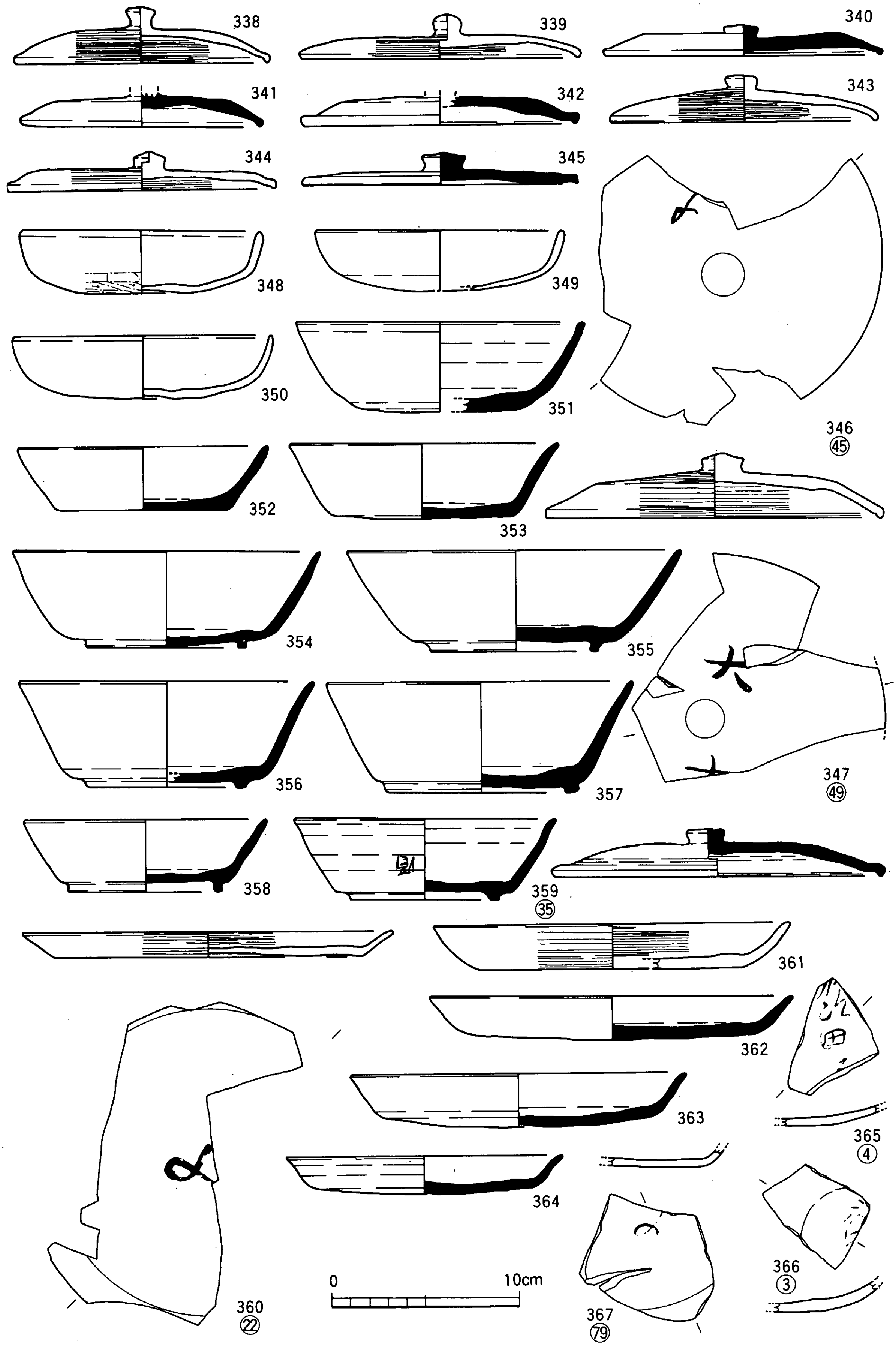


Fig.78　SK4出土遺物その1(S1/3)

は精良で焼きは良い。底部外面に「大」の墨書が確認できる。調整はすべて、底部外面にケズリ、その他にはヘラミガキが施されている。

また、365・366・370・371・374～376はこれの破片である。これらには、365に「■次田■」、366に「廳ヵ■」、374に「α記号ヵ？」、375に「大ヵ」、376に「α記号ヵ？」と墨書が確認できる。この他の370・371は判読不能であった。

皿（360・361） 360は口径19.8cm・底径16.4cm・器高1.4cmで、胎土に微砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれる。色は橙色（5YR1/6）で、内外面の部分的に赤彩が施される。また、底部外画に「α記号」の墨書がみられる。361は口径19.1cm・底径14.0cm・器高2.5cmである。明赤褐色（2.5YR5/8）を呈し、胎土は精良で焼きも良い。

須恵器

蓋（341・342・345・347・372） 口径13.0～15.0cm・器高1.5～2.0cmのものが3点、口径18.0cm・器高2.5cmのやや大ぶりなものが1点みられる。

341・342は、平坦な天井部をもち、かえりは三角形の痕跡のみを残しほとんどみられない。両者ともに撮みは欠失する。色調は灰色（N5）を呈し、胎土には1～2mmくらいの砂粒を含んでいる。345は、平坦な形状のもので、径2.35cmの擬宝珠状の撮みを有する。

347は、偏平なボタン状の撮みをもち、かえりは三角形の痕跡のみを残している。灰白色（5Y7/1）を呈し、0.5mm以下の砂粒が含まれている。また、撮みを挟んで上下2ヶ所に「大」が墨書されている。

372は破片資料である。天井部内面に墨書が施されるが、判読は不明。撮み形状はボタン状（径1.8cm）である。色調は青灰色（5B5/1）。

坏（351～359） 無高台の坏a（351～353）3点と、有高台の坏c（354～359）6点がみられる。

351は、やや丸みを帯びた体部をもち、復元口径15.4cm・底径9.9cm・器高4.8cmを測る。灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には微砂粒が含まれる。

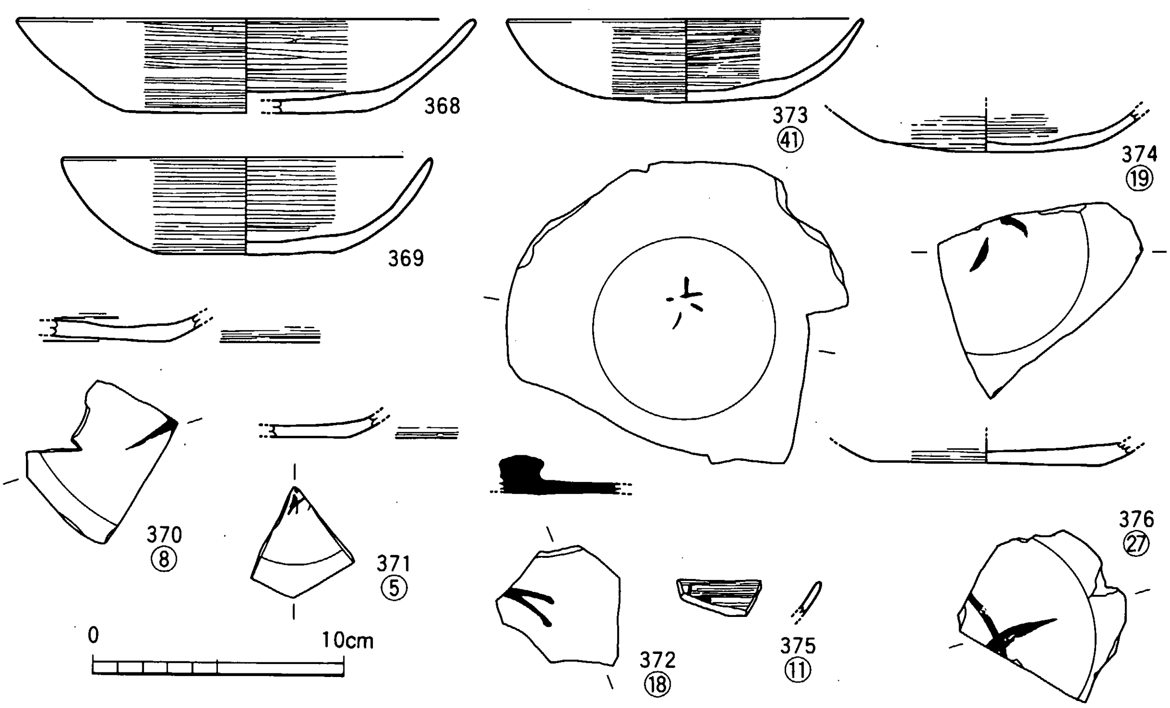


Fig.79 SK4出土遺物その2(S1/3)

352は、直線的に立ち上がる体部をもち、復元口径13.4cm・底径9.1cm・器高3.45cmである。色は青灰色（5PB5/1）。353は、体部がやや外方に開き気味に立ちあがるもので、口径14.4cm・底径9.75cm・器高4.1cmを測る。胎土に0.5～1mmほどの砂粒を多く含み、灰白色（2.5Y8/1）を呈する。焼きはあまい。

354は、やや丸い形態をもつもので、復元口径16.5cm・高台径8.6cm・器高5.15cmである。灰黄色（2.5Y7/2）で、部分的に黒っぽい箇所がみられる。焼きはあまい。

355～359は体部の形状や法量に若干の差異があるものの、ほぼ直線的に外方に開く体部をもち、屈曲部～0.5cmの付近に断面台形の短い高台が貼付される。355は、復元口径17.9cm・高台径9.0cm・器高5.45cmを測り、色調はオリーブ黒（7.5Y3/1）～灰黄色（2.5Y7/2）である。焼きはあまく、かなり磨滅している。

356・357は、口径16.0cm前後・高台径8.5～10cm・器高5.75～6.0cmで、やや器高が高い大坏c。胎土には1mmほどの砂粒が含まれ、焼きがあまく、灰黄色（2.5Y7/2）～灰色（7.5Y5/1）である。358・359は、口径13.0cm前後・高台径約8.0cm・器高4.0～4.5cmを測る中坏cである。このうち359には、体部外面に逆位で「酒」の異体字が墨書されている。

皿（362～364）　362は、口径19.45cm・底径15.15cm・器高2.25cmで、灰白色（7.5Y7/1）を呈し、胎土には微砂粒が多く含まれる。また、内面見込みに若干の煤が付着している。363は、底部にやや丸みがあり、口径18.0cm・底径14.4cm・器高2.85cmを測る。灰白色（7.5Y7/1）を呈する。364は、復元口径14.8cm・底径11.8cm・器高2.05cmで、灰色（7.5Y6/1）を呈する。調整は、底部ヘラキリ後にナデ、それ以外はナデを施しており、板状圧痕が確認できる。

SK 5（Fig.77・PL.13）　SB 1のすぐ北に位置しており、SD22・23に切られている。長径4.4m・短径2.7m・深さ約0.8mを測り、プランはほぼ円形に近く、床面はフラットである。
埋土は暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単純堆積で、短期間のうちに人為的に埋められている状況が考えられる。遺物は埋土下位～中位にまとまって出土する傾向が高い。

SK 5出土遺物（Fig.80,81・PL.31,32,49）

土師器

坏（377～379）　すべて坏dである。377は口径14.0cm・底径7.5cm・器高3.0cm、378は口径14.8cm・底径8.0cm・器高3.1cmを測り、胎土は精良で焼きはよい。色は橙色（5YR6/6～6/8）。調整はすべて、底部外面にケズリ、その他には細かなヘラミガキが施されている。379はその破片資料である。底部外面に墨書があるが、判読はできなかった。

また、387については器種が不明であるが、「倢」の墨書が確認できる。

皿（380）　口径18.0cm・底径14.4cm・器高2.1cmで、灰白色（7.5Y8/1）を呈する。胎土には細砂粒・雲母細片を含む。磨滅が著しい。

鉢（389）　口縁部が甕のような形状を呈する鉢である。口径28.55cm・器高11.25cm。胎土には1～6mmの砂粒および雲母が含まれ、橙色（5YR6/8）である。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面がハケメの後にナデ、内面がヘラケズリの後に一部にナデを施している。また、口縁部と底部の外面には部分的に黒斑や赤変しているところがみられる。

甕（388）　口縁部が強く湾曲しながら外方に開き、胴部との境目には明瞭な稜がある。口縁部

はナデ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はケズリによる調整が行われている。胴部下半を欠失し、口径28.8cm・残存高17.0cmを測る。色は橙色（5YR6/8）。胎土には多量の砂粒（1～3mm程度）と赤褐色粒・雲母細片が少し含まれる。

須恵器

蓋(386)　口径18.6cm・器高1.5cmで、撮みを欠失する。胎土には細砂粒および雲母細片が含まれ、焼きはあまい。

坏（381～384）　381は、やや丸みをもった底部を有し、体部と底部の境は明瞭で、直線的に立ち上がる。口径13.2cm・底径9.9cm・器高4.0cmを測り、灰白色（N4）を呈する。焼きはかなりあまい。

382は、復元口径13.0cm・底径9.9cm・器高3.55cm。383は382とほぼ同等であるが、底径が8.6cmとやや開いた体部を有する。両者ともに灰色（N5）で、胎土は精良である。

384は、短くつぶれた高台を有し、体部が緩やかに外反する坏cである。口径13.95cm・高台径7.9cm・器高4.0cmを測る。高台内には格子状の圧痕（一部平行の圧痕）が残っている。色は灰色（N5）で、0.3～1.5mmの砂粒が多く含む胎土である。

製塩土器（385）　復元口径13.4cm・器高7.2cmを測り、平たい円錐状を呈する製塩土器である。内面に布目痕が残る。外面にはナデが施され、指頭圧痕がみられる。にぶい黄橙色（10YR7/3）で、1～3mmの砂粒・雲母を含んでいる。

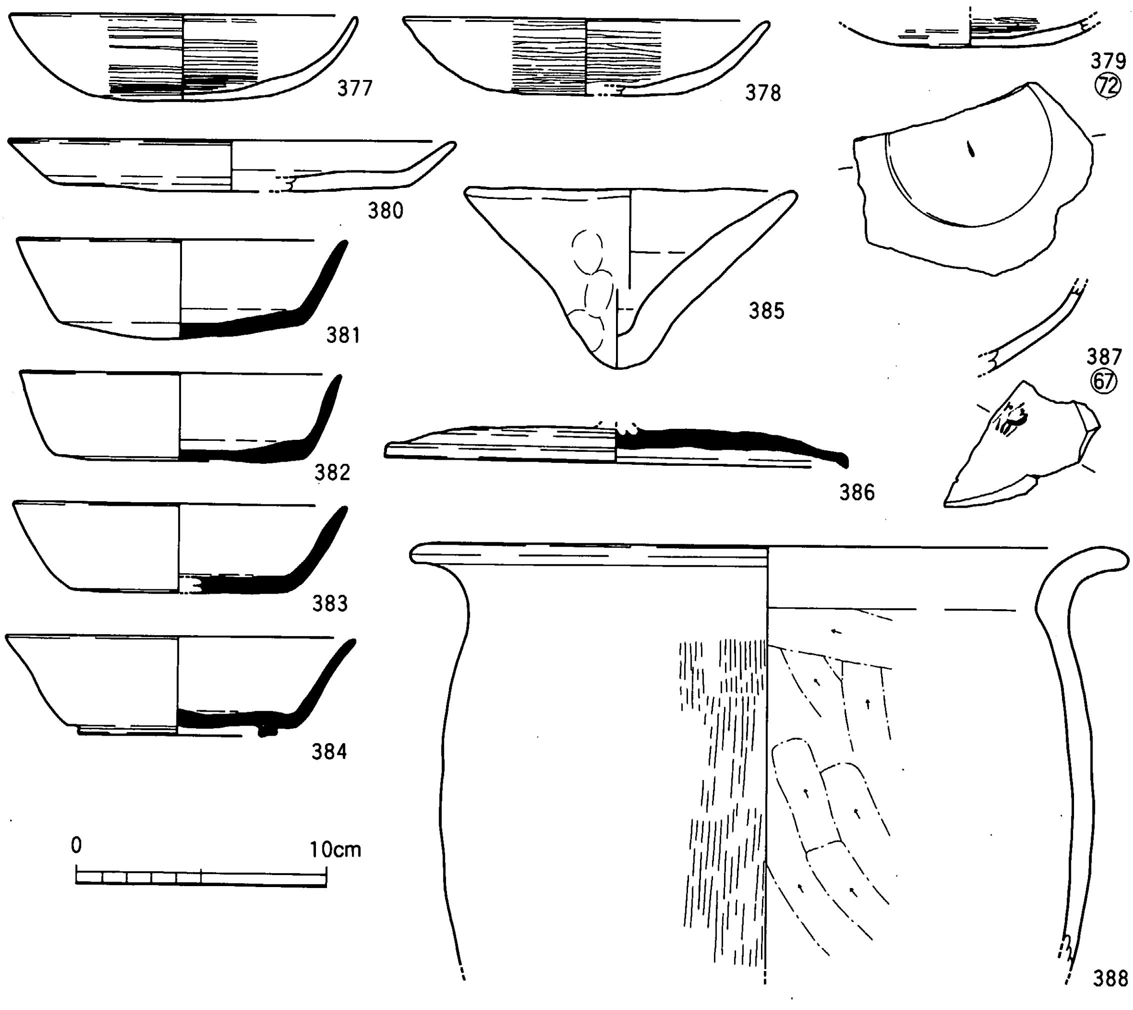


Fig.80　SK5出土遺物その1(S1/3)

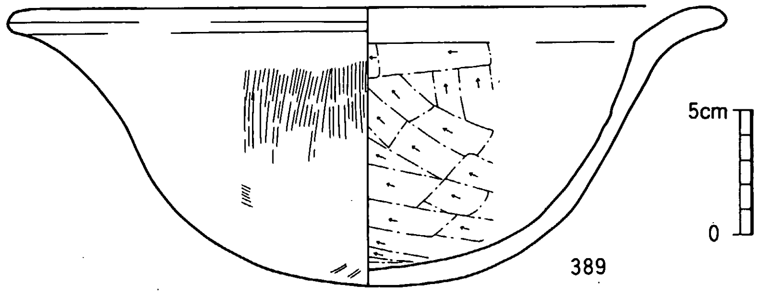


Fig.81　SK5出土遺物その2(S1/3)

SK 6 （Fig.82・PL.13）　SB 2 の西約3mのロの字型配置建物に囲まれた所に位置しており、SD31に切られている。長径3.4m・短径3.0m・深さ約1.6mを測り、プランはほぼ隅丸方形を呈する。床面はフラットである。埋土は暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単純堆積で、短期間のうちに人為的に埋められている状況が考えられる。これはSK 4 ・ 5 と同じような状況である。遺物は埋土下位～中位にまとまって出土する傾向が高く、このなかには墨書土器が多くみられる（「傔」が5点)。

SK 6 出土遺物（Fig.83・PL.32,45～48）

土師器

坏（398・403・405）　すべて坏dである。398は口径13.6cm・底径6.55cm・器高3.65cm、403は口径15.6cm・底径7.0cm・器高3.0cmを測る。これらは、器高に差異があるものの同じ範疇で考えた。胎土は精良（若干の雲母を含む）で焼きは概ね良好。色は橙色（5YR6/6～6/8)。調整はすべて、底部外面にケズリの後ナデ、その他には細かなヘラミガキが施されている。ただし、403に施されるヘラミガキは、他の資料と比べるとやや雑になっている。

405はその破片資料と推測されるが、器形が分からなかった。調整や色・胎土ともに坏 d に類似するものであるが、体部が急に立ち上がっている。

また、403と405は、底部外面に「傔」と墨書される。

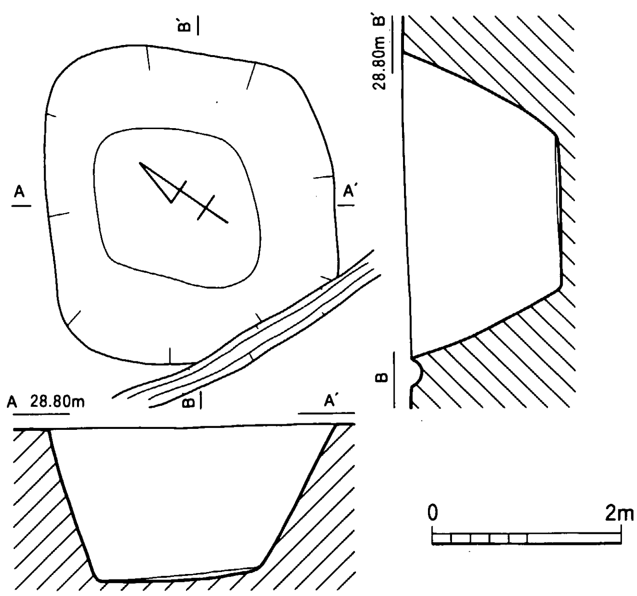


Fig.82　SK6実測図(S1/80)

皿（396・402）

これら2点は、共に破片である。396は口縁部内面に、402は体部と底部の屈曲部に「大」の墨書がなされている。

胎土には雲母が少量含まれている。焼きはよく、橙色（5YR 6/6）を呈する。内外面ともに回転ヘラミガキによる調整がなされている。

甕（404）

口径19.75cm・器高14.9cmの小甕 a である。胴部の1/4を欠失する。胴部は直線的で、口縁

部が強く外反し、屈曲部に明瞭な稜が残る。口縁部はヨコナデ、胴部の中位以上は縦方向のハケメ、下半は不定方向のハケメ、内面には部分的なヘラケズリが行われている。赤色（10R5/6）で、胎土には1～6㎜ほどの砂粒が多く含まれている。

須恵器

蓋（390～392）　390は、偏平な乳頭状の撮みを有しやや丸みを帯びた天井部のもので、口径12.8cm・器高2.7cm・撮み径2.2cmを測る。色は灰色（7.5Y6/1）で、精良な胎土である。
391は、口径15.8cm・器高1.6cmで低いボタン状の撮みを有する。撮み径は2.4cm。かえりは390と同じく逆三角形の痕跡のみを残している。392は、口径12.0cm・器高1.2cmで、平坦な形状を呈する。撮み脇に「傔」と墨書がなされている。撮みはボタン状である。色調・胎土は390に同じ。

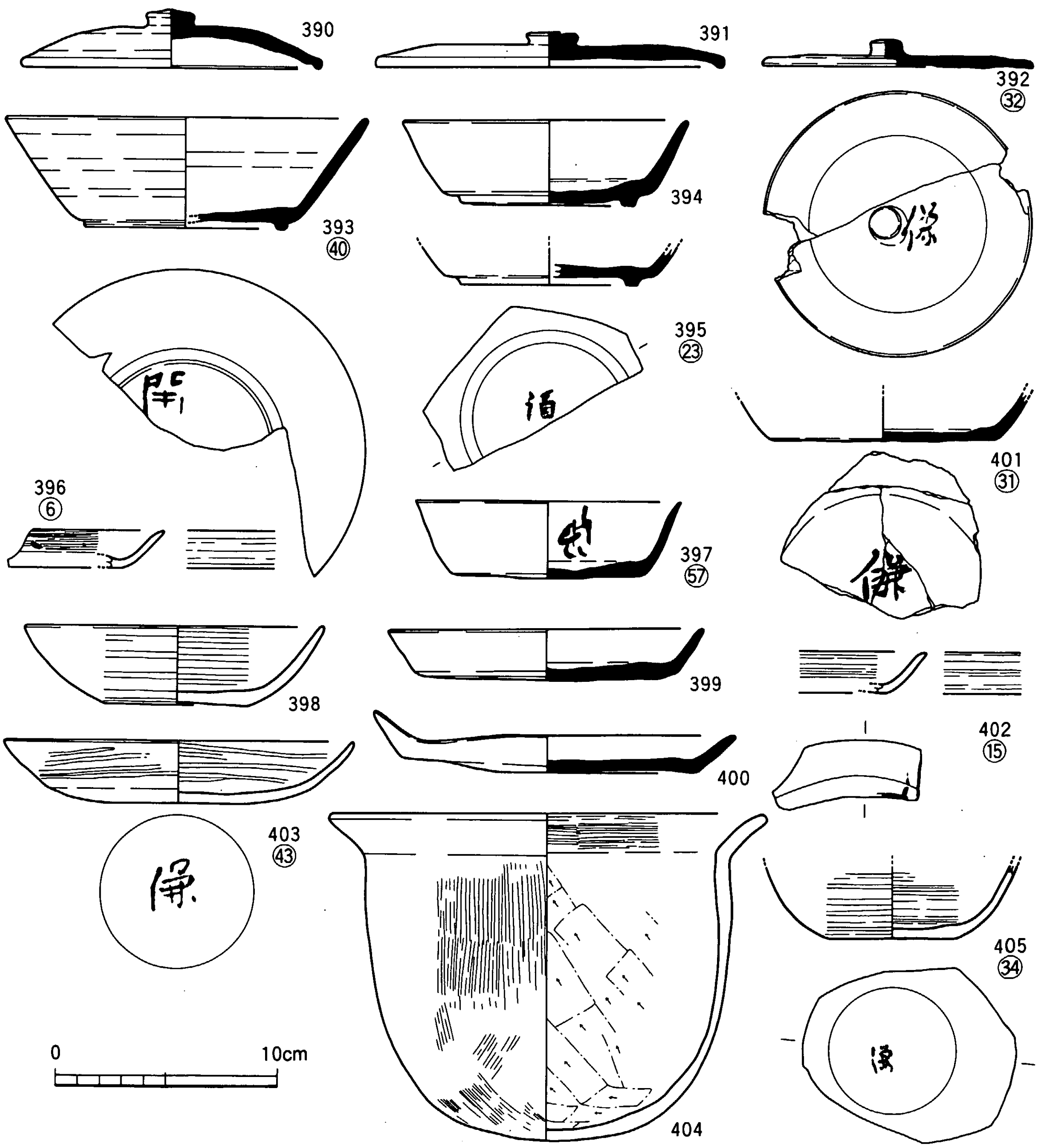


Fig.83　SK6出土遺物(S1/3)

坏（393～395・397・401）　5点のうちで4点に墨書が施されており、無高台の坏ａ（397・401）と有高台の坏ｃ（393～395）がある。法量に違いはあるものの、これらはすべて直線的な体部をもつものである。393は、口径16.4cm・高台径11.2cm・器高5.0cmを測り、胎土は精良。灰色（7.5Y6/1）を呈する。高台内に「門構え」のような墨書がみられるが、判読はできなかった。394は、口径12.9～13.2cm・高台径7.7～8.2cm・器高3.85cmを測り、かなりゆがみがみられる。胎土は概ね精良であるが、0.5～1mmほどの砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、灰色（N6）を呈する。また、395は器の半分ほどを欠失しているが、形態・法量の上では394とほぼ同等のものである。高台内に「酒」の異体字が墨書されている。

397は、体部と底部の境目がはっきりとした段をもち、端部はやや先細りぎみになっている。口径12.0cm・底径8.7cm・器高3.5cmを測り、体部内面に逆位で「傔」と墨書がなされる。胎土には微砂粒と角閃石が含まれており、焼成はあまく、色調は灰白色（5YR7/2）を呈する。また401は、破片資料であり詳細は不明であるが、ほぼ397と同様のものである。底部外面に「傔」の墨書がなされている。

皿（399・400）　399は、口径14.3cm・底径11.0cm・器高2.4cmを測る。底部外面はヘラキリの後にナデ、内面は不定方向のナデ、体部はヨコナデを施す。0.5～1mmの砂粒が含まれており、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。400は、焼成時のゆがみが著しい。口径16.35～17.0cm・底径13.5～13.6cm・器高2.8cmを測る。胎土は微砂粒が含まれるが概ね精良で、色調は灰色（7.5Y5/1）を呈する。

SK 9（Fig.84）　SD 1の調査区東側、SX 1の付近にそれらを切って位置している。長径2.3m・短径1.85m・深さ約0.75mを測り、不整な楕円形を呈する。床面はフラットである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で、短期間のうちに人為的に埋められている状況が想定される。遺物は埋土中位～上位にまとまって出土する傾向が高い。

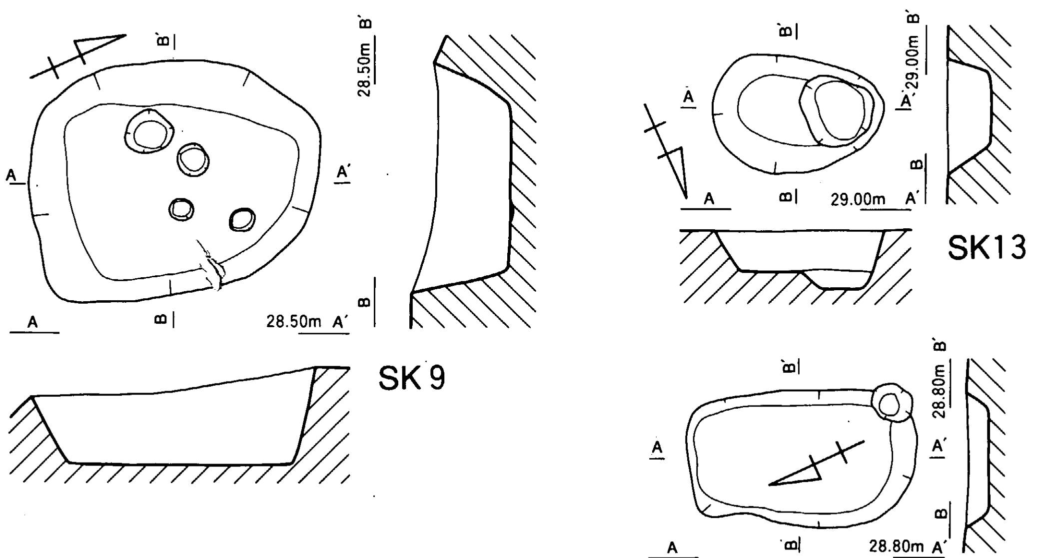


Fig.84　SK9,13,14実測図（S1/60）

SK 9 出土遺物（Fig.85・PL.32,33,48）

土師器

坏（406～422）　①体部がやや外反しながら開き、少し器高が高いもの（410・416）、②体部が直線的で体部と底部の境目がシャープなもの（407～409・411・413～415・417～422）、③体部は直線的で、体部と底部の境が若干丸みをもつもの（406・412）に分けられる。

①については、橙色（5YR6/8）～にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土に0.3～1㎜の砂粒・赤褐色粒が含まれる。底部には板状圧痕が残り、ケズリの後にナデを施す。法量は、410が口径12.9㎝・底径6.9㎝・器高3.85㎝、416が口径13.25㎝・底径6.75㎝・器高3.75㎝をそれぞれ測る。

②は、浅黄橙色（7.5YR8/4）～にぶい橙色（7.5YR7/4）で、胎土に0.3～1㎜の砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれているのが一般的である。焼きは普通であるが、ゆがんでいるものが多い。

底部には板状圧痕が残る。法量は、口径11.0～13.0㎝・底径6.5～8.0㎝・器高3.0～3.5㎝の範囲に納まる。また、419は底部中央に径約3.0㎝の孔が穿たれている。442は、底部外面に墨痕が確認できる。

③は、ケズリの後にナデによって仕上げられておりヘラミガキが伴わないが、底径と口径の差が大きく、内湾しながら丸みをもって立ち上がっていることから、坏dの範疇に考えられる。2点とも色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）で、胎土に細かい砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれている。底部には板状圧痕が残っている。

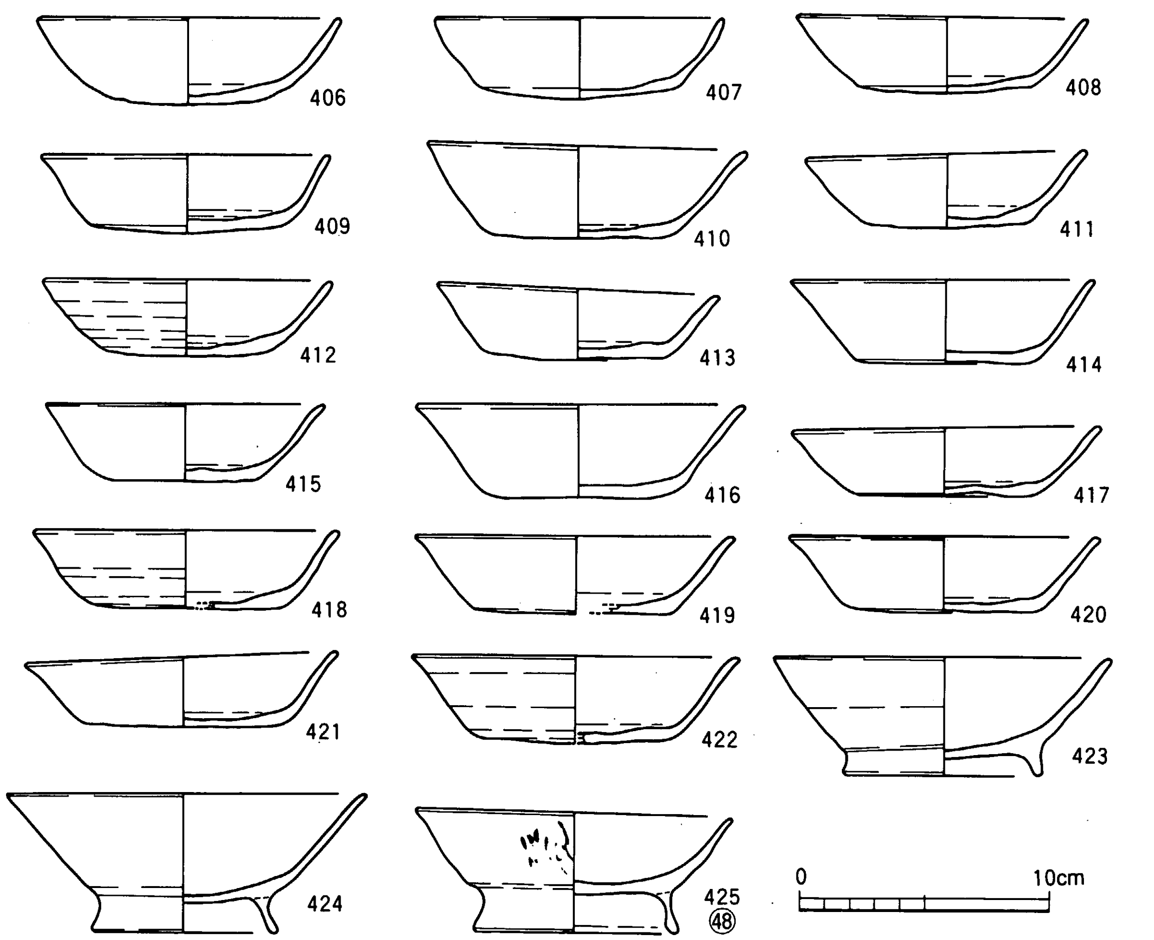


Fig.85　SK9出土遺物(S1/3)

椀（423～425）　すべて、直線的な形態を有するものである。

423は、口径13.5cm・高台径8.0cm・器高4.75cmを測り、にぶい黄橙色（10YR4/2）を呈する。断面長方形の縦長の高台をやや外方に向かって貼付する。調整は、体部下半におけるケズリを伴わず、ナデで仕上げられている。ミガキはみられない。胎土には雲母がわずかに含まれる。

425は、口径12.7cm・高台径8.25cm・器高5.0cmを測る。断面が細長い高台が貼付され、ナデによって仕上げられる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。また、体部外面に「長」の墨書が書かれている。

424は、口径14.5cm・高台径7.55cm・器高5.65cmで、やや器高が高く大ぶりなものである。425と同じく、断面が細長い高台が貼付され、ナデによって仕上げられる。底部内面がやや窪んでいるのが特徴的である。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）である。

SK13（Fig.84）　SB 9から約12mほど北側の空閑地に単独で位置している。長径1.3m・短径0.9m・深さ0.4～0.5mを測り、楕円形を呈している。床面はテラスをもち、一部がピット状に窪んでいる。機能は確認できていない。埋土は、暗茶褐色土＋黄褐色粘質土塊の混合土である。

SK13出土遺物（Fig.86・PL.33,45）

土師器

坏（427・428）　427は、復元口径14.1cm・底径8.9cm・器高2.75cmを測る。底部は糸きり、その他はナデを施す。浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、0.5～1mmの砂粒および金雲母を含む。

428は、小片であるため詳細は不明であるが、概ね奈良時代のものと推測できる。底部外面は未調整。明褐色（7.5YR5/8）を呈し、胎土には白色砂粒がわずかに含まれている。底部外面に「掾」の墨書が確認できる。

土製品

支脚（426）　上端の一部と下端を欠失する。残存長6.7cm・径2.9～3.2cmで、四面ともナデて仕上げられている。胎土には1～2mmの白色砂粒が多く含まれ、にぶい黄橙色（10YR7/2）を呈する。

SK14（Fig.84）　SK13から4mほどの付近に位置している。長径1.8m・短径1.0～1.1m・深さ約0.2mを測り、隅丸長方形を呈する。床面はフラットである。削平によりほとんどがカットされている。埋土は、茶褐色粘質土にやや砂が多めに混じるものである。

SK14出土遺物（Fig.87・PL.33,34）

土師器

皿（429～432）　糸きりの小皿aである。法量は429が口径9.2cm・底径8.0cm・器高1.05cm、430が口径8.9cm・底径7.2cm・器高1.3cm、431が口径8.65cm・底径6.9cm・器高1.3cm、432が口径9.6cm・底径8.5cm・器高1.4cm。ゆがみが大きく、焼きはあまい。橙色（5YR6/6）～灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土に微細粒および金雲母が含まれている。432は口縁内面に煤が付着している。

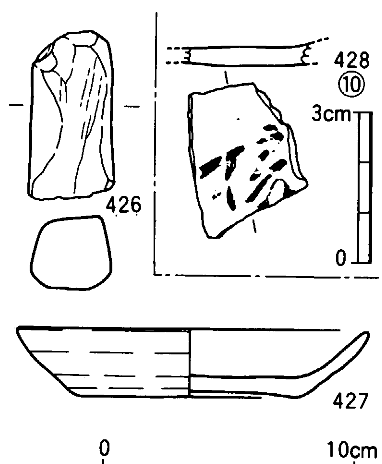


Fig.86　SK13出土遺物(S1/3,2/3)

坏（433～435） すべて糸きりの坏aである。全体的にゆがみが大きく、ローリングにより磨滅している。焼成はややあまく、軟質な焼き上がりである。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）～にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。0.5㎜ほどの砂粒および金雲母を含んでいる。

法量は、433が口径14.55㎝・底径10.1㎝・器高3.5㎝、434が口径14.5㎝・底径10.8㎝・器高2.95㎝、435が口径13.6㎝・底径9.7㎝・器高2.75㎝をそれぞれ測る。また、435は底部内外面に黒斑が確認できる。

ミニチュア土器（436～438） 436は、復元口径4.0㎝・器高2.4㎝。橙色（7.5YR7/6）を呈し、雲母細片を含む。437は、ほぼ完形で口径4.1㎝・器高2.8㎝を測る。浅黄橙色（7.5YR8/6）で、1～2㎜ほどの砂粒と雲母細片を含んでいる。438は、ほぼ完形で口径3.4㎝・器高2.7㎝を測る。色調は橙色（7.5YR6/8）～明黄褐色（10YR7/6）である。胎土は、1～2㎜ほどの砂粒と雲母細片を含む。

土師質土器

鍋（439） 底部は欠失しており、復元内径26.8㎝・復元外径32.0㎝・残存高13.75㎝である。丸みを帯びた体部を有し、口縁部を短くL字に折り返す。また、口縁端部には何かの圧痕状の凹凸がみられる。体部内面はヨコハケ、外面は不定方向のハケメ、他はナデによる調整が行われている。色調は、内面がにぶい黄褐色（10YR5/3）、外面が黒褐色（7.5YR3/2）～黒色（7.5YR7/1）を呈し、外面には煤が多量に付着している。器表面はかなり荒れている。胎土には1㎜以下の砂粒と雲母が多く含まれる。

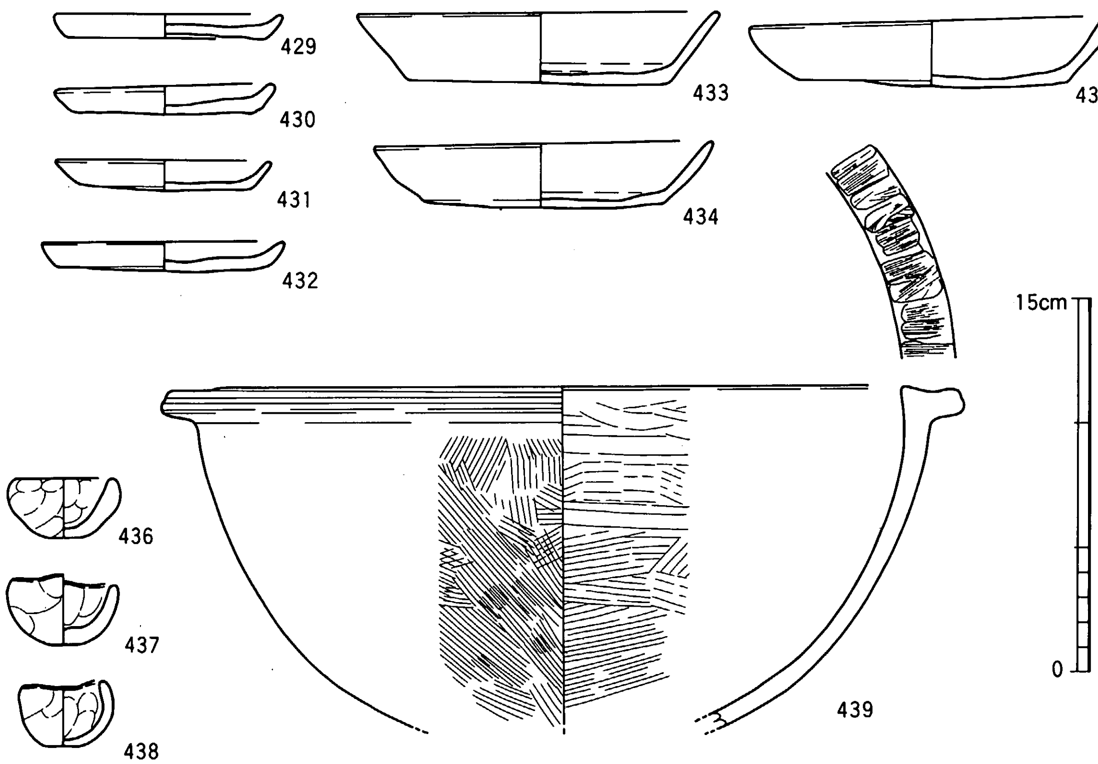


Fig.87　SK14出土遺物（S1/3）

SK16（Fig.88・PL.13）　SB９の東側約1mの付近に位置している。長径4.8m・短径4.2m・深さ約1.8mを測る。途中に段を有する2段掘り状を呈し、床面はフラット、プランはほぼ円形である。埋土は、暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単純堆積で、短期間のうちに人為的に埋められている状況が想定される。これはSK４・５・６と同じような状況である。遺物は埋土下位～中位にまとまって出土する傾向が高く、このなかには墨書土器が多くみられる（「大」が７点)。

SK16出土遺物（Fig.89・PL.34,45～48)

土師器

坏（440～442・448・452)　440・441は坏dである。胎土は精良（若干の雲母・金雲母を含む）で焼きは概ね良好。色は橙色（5YR6/6～6/8）～明赤褐色（5YR5/6）を呈する。調整はすべて、底部外面にケズリの後ナデ、その他には細かなヘラミガキが施されている。442は調整や色・胎土ともに坏dに類似するもので、その破片資料と推測される。外面に「大」と墨書がなされている。法量は、440が口径16.2cm・底径7.9cm・器高3.4cm、441が口径14.05cm・底径7.8cm・器高3.0cmである。また、440は体部外面に「大」と墨書される。

448は、底部にやや丸みをもった坏aで、底部と体部の境が明瞭ではない。復元口径13.1cm・底径8.6cm・器高3.85cmを測り、色は橙色（5YR6/6)、胎土には微砂粒および金雲母を含む。調整は、底部外面はヘラキリの後にナデ、その他はナデを施している。

452は、口径16.4cm・高台径8.6cm・器高5.4cmを測る。器壁がやや厚く、短い高台が貼付される。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともにヨコナデの後に回転ヘラミガキによる最終調整を施し

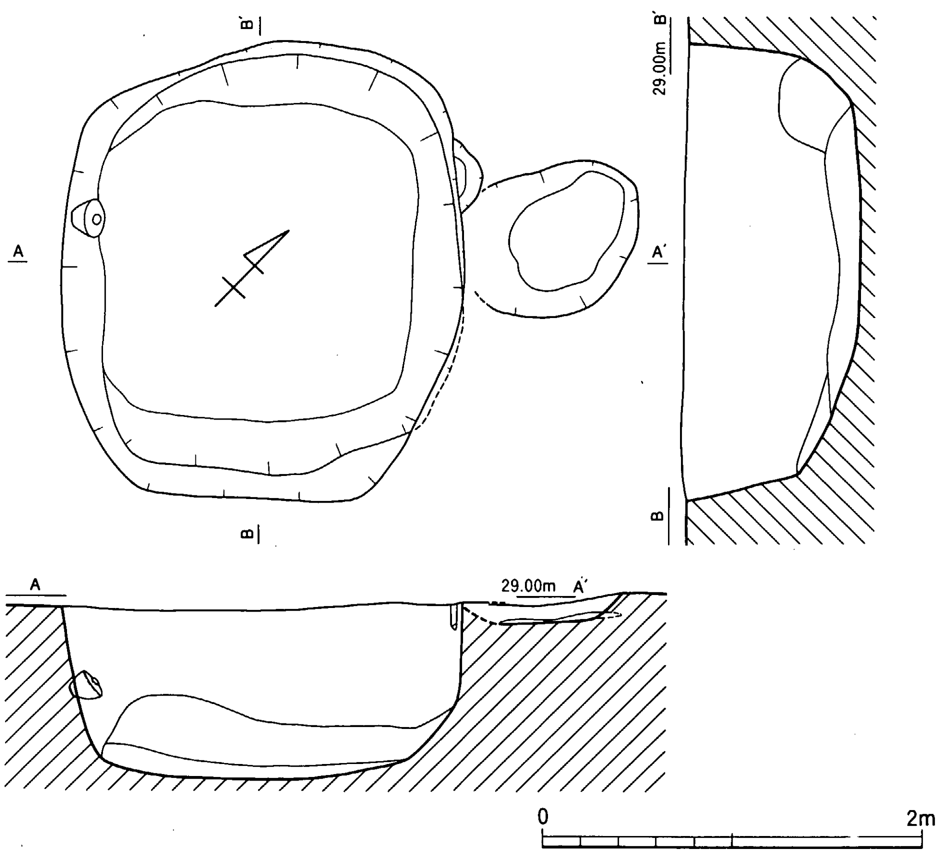


Fig.88　SK16実測図(S1/80)

ている。胎土には1mm以下の砂粒および金雲母が含まれ、明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

椀（443・453）　443は体部下半を欠失しており、復元口径18.0cm・残存高4.5～5.75cmである。残存部がまちまちであったので、図面上で復元している。色調は橙色（5YR6/8）で、胎土には1mm以下の砂粒・金雲母・赤褐色粒が含まれている。内外面ともに回転ヘラミガキによる最終調整を行っている。また、口縁部内面に「大」の墨書がみられる。

また453は、破片資料であるが、椀の高台部と推測した。高台径10.7cm・残存高1.5cmで、橙色（5YR6/6）を呈する。内面にヘラミガキの痕跡が確認できる。胎土には微砂粒・雲母が含まれる。

皿（444・445）　両者ともに小片であり、復元はできなかった。444は、残存高1.9cmを測り、色は橙色（5YR6/6）。調整は、体部がヨコナデ後に回転ヘラミガキ、底部外面はヘラケズリの後に部分的にヘラミガキが行われる。胎土には0.5mm以下の砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれる。445は、444と同様の状況である。両者とも底部外面に「大」と墨書がなされている。

甕（454・456・457）　454は口径16.1cm・器高14.0cmを測る小甕aである。胴部には張りがなく、口縁部の屈曲も短く弱い。色はにぶい黄橙色（10YR7/4）で、胎土には0.5～1mmの砂粒と金雲母が含まれている。

456・457は、屈曲部以下そのほとんどを欠失しており、残存状況が悪い。両者とも口径は28.0cm前後で、胴部にやや張りをもった形態を有しているものと推測される。色調は橙色（5YR6/6）～にぶい黄橙色（10YR7/4）の範囲で、胎土には1mm以下の砂粒・金雲母・角閃石・赤褐色粒が含まれている。調整は内面屈曲部以下がヘラケズリ、外面は縦方向のハケメが施されている。

須恵器

蓋（446）　低いボタン状の撮みを有し平坦な天井部のもので、復元口径12.4cm・器高2.65cm・撮み径2.65cmを測る。かえりは逆三角形の痕跡を残すのみである。色は灰色（N4）で、胎土には0.5～1.5mmほどの砂粒が含まれる。

坏（447・449・450・451）　447は坏a、その他は坏cである。447は、口縁～体部の2/5・底部の1/2を欠失している。復元口径12.5cm・復元底径8.1cm・器高3.2cmを測る。0.5～1mmの砂粒を含み、青灰色（5PB5/1）を呈する。また、口縁部～体部の一部には自然釉が付着している。

449は、ゆがみが大きく、高台も屈曲部から0.5mmほど内側に雑に貼付されており、にぶい感じを受ける。口径13.25cm・高台径7.45cm・器高3.9cmを測り、青灰色（5PB5/1）を呈する。

450は、緩やかに開く体部をもち、屈曲部付近に断面台形の高台を貼付する。体部外面には自然釉付着する。口径13.0cm・高台径6.65cm・器高3.95cmで、灰色（N5/1）～褐灰色（7.5YR5/1）を呈する。高台内には「大」と墨書がなされる。

451は、口径13.0cm・高台径7.85cm・器高3.8cmを測り、短い高台を屈曲部付近に貼付する。灰色（N6）を呈し、胎土は精良である。高台内には板状圧痕？がみられる。また、高台内には墨書が確認されるが、判読はできなかった。

壺（455）　長頸壺（壺b）で、頸部～口縁部・高台の一部は欠失する。胴部の屈曲部には沈線が巡り、胴部下半～高台内にかけては自然釉が付着している。胴部最大径18.8cm・復元高台径11.7cm・残存高13.85cmを測る。灰白色（2.5Y7/1）～黄灰色（2.5Y5/1）を呈し、胎土には1mm以下の砂粒がわずかに含まれる。

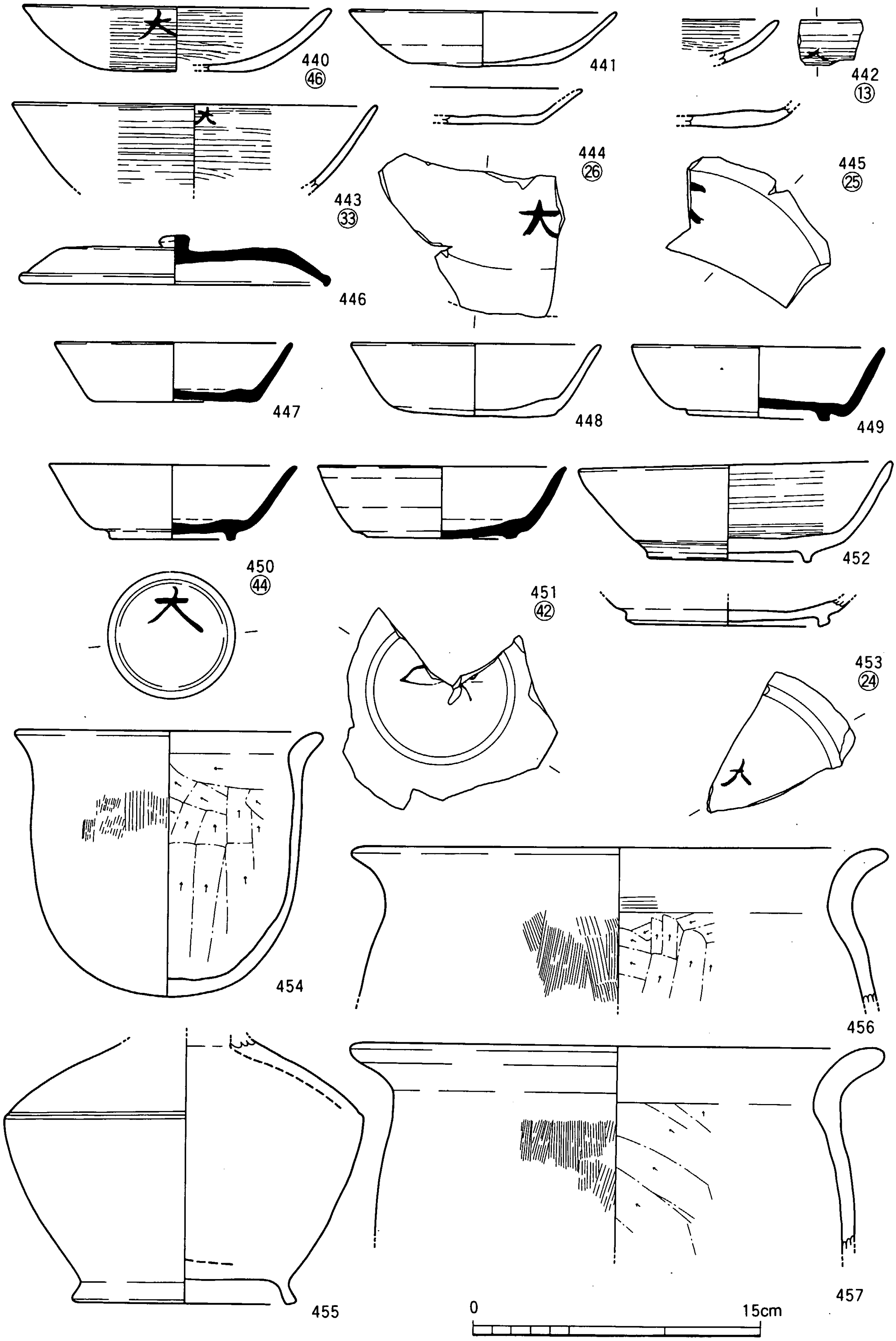


Fig.89　SK16出土遺物(S1/3)

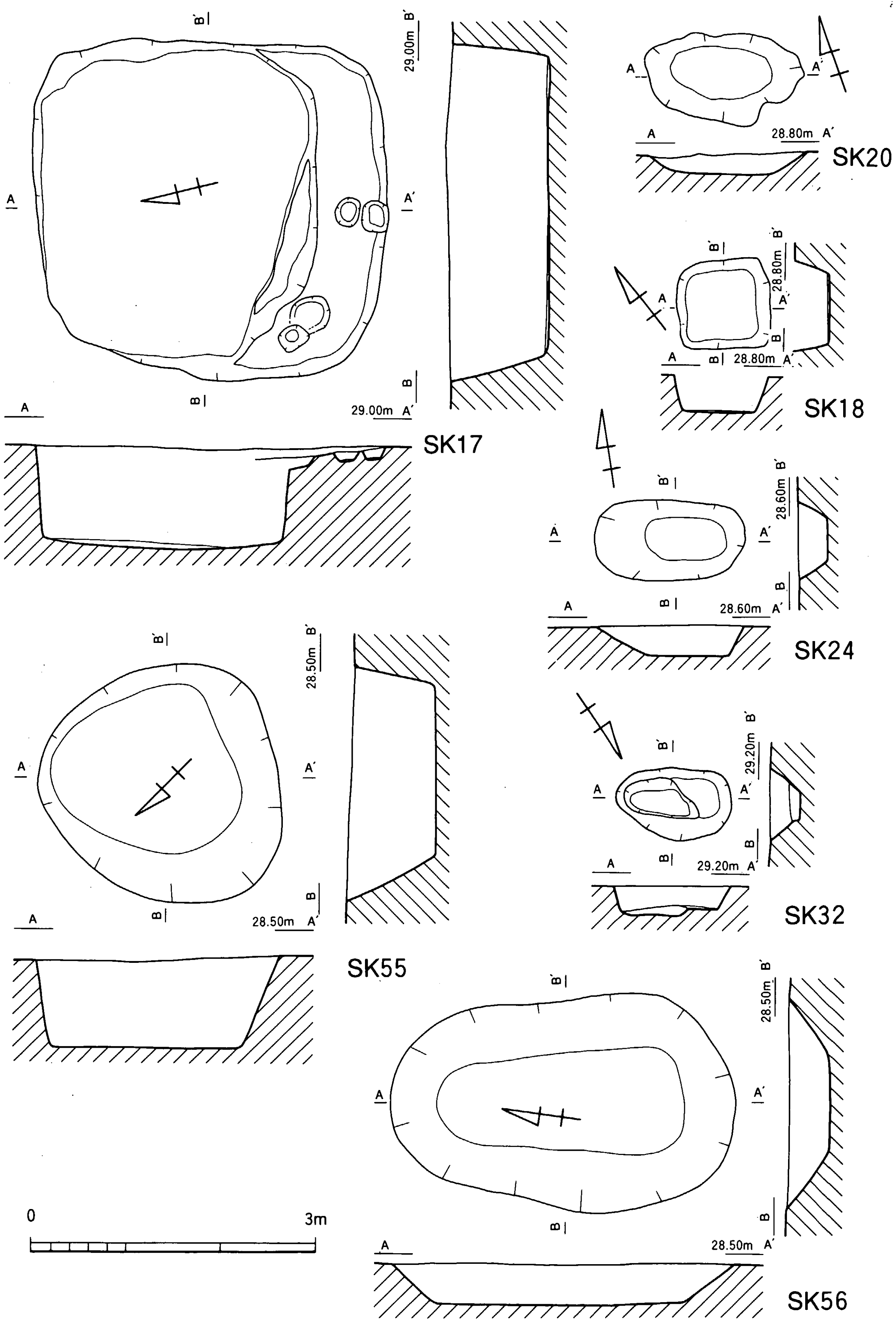


Fig.90　SK17,18,20,24,32,55,56 実測図(S1/60)

SK17（Fig.90）　SB７のすぐ西側に位置し、SB７を切っている。一辺約3.5m・深さ約1.0mで、プランは隅丸方形である。壁はほぼ直立して立ち上がり、床面はフラットである。埋土は、暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単一層である。遺構の床面は、地山の茶褐色土をくり貫いて、その下の明黄褐色（2.5Y6/8）土まで達している。遺物が確認されていないため、時期・機能は不明である。

SK18（Fig.90・PL.13）　SX５東１mに位置し、一辺が1.0m・深さ0.4mである。床面はフラットで、プラン隅丸方形である。埋土は、暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単一層である。遺物は確認されていないので詳細は不明であるが、その位置や向きなどからSX４・５に関係が深いものと推測される。

SK20（Fig.90）　SD39を切って、SE４の北付近に位置している。長径2.7m・短径1.5m・深さ約0.2mである。非常に浅く、その大部分が削平されているものと考えられる。床面はフラットで、プランは不整な楕円形である。SD39ともに遺物が確認されていないので詳細は不明である。

SK24（Fig.90）　SB１の北側、SD21の屈曲する付近に位置している。長径1.5m・短径0.8m・深さ約0.3mを測る。床面はフラット、プランは楕円形である。埋土は硬く締まった茶褐色砂質土ベースの土壌で、比較的新しい時期の所産であると推測される。遺物が未確認であるため、詳細は不明。

SK28（Fig.91・PL.13）
Bブロックの西側付近に位置している。SB16・17を切っており、9世紀以降の所産と推測される。径3.0m・深さ約1.8mを測る。床面はフラットで、プランはほぼ円形である。断面の形状は、逆台形状を呈している。埋土は、暗茶褐色粘質土ベース＋黒色土＋黄褐色粘質土塊と泥炭土が含まれており、井戸の可能性も考えられる。ただし、確証が得られていないため、ここでは一応、土坑として扱った。

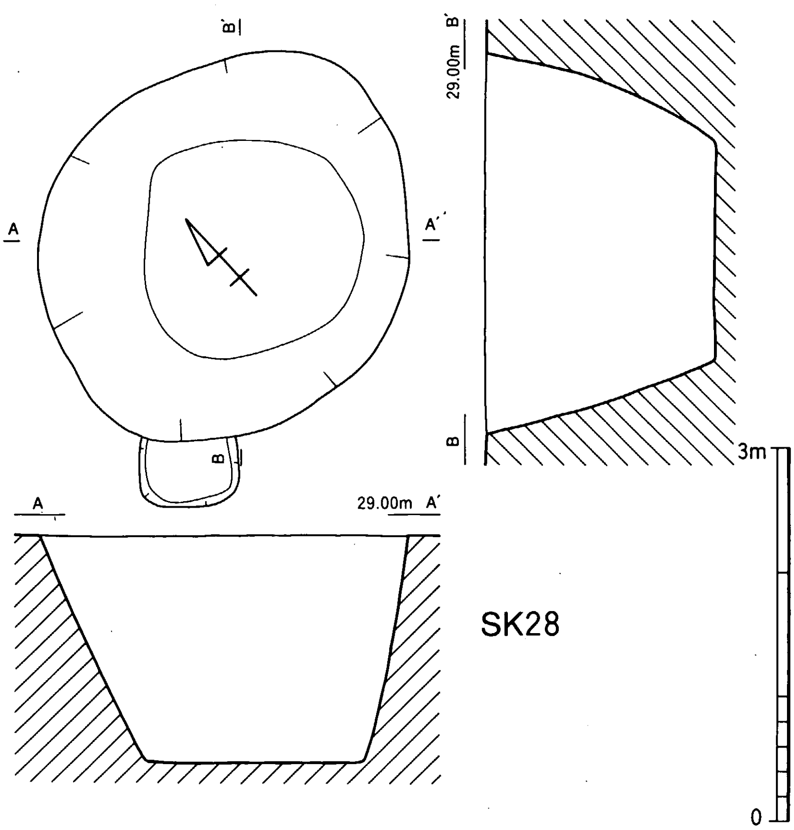


Fig.91　SK28実測図（S1/60）

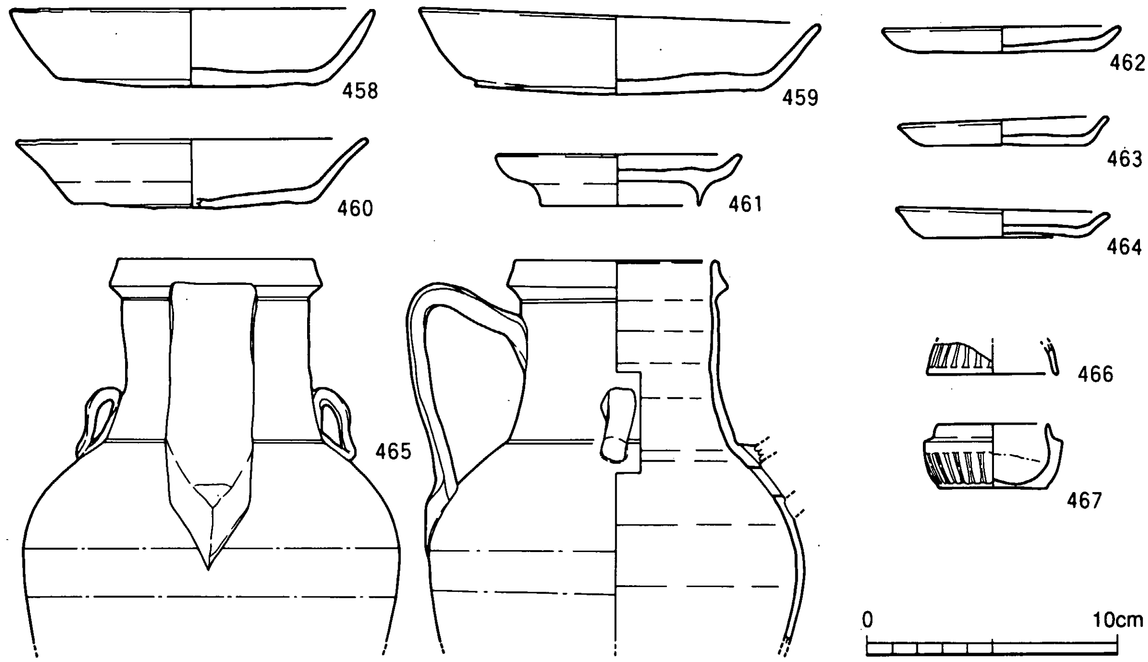


Fig.92　SK28出土遺物(S1/3)

SK28出土遺物（Fig.92・PL.3,34）

土師器

坏（458〜460）

すべて糸きり底の坏aである。458は口径14.65cm・底径10.85cm・器高3.15cm、459は口径16.1cm・底径11.9cm・器高3.5cm、460は口径14.15cm・底径9.4cm・cm・器高2.8cmを測る。458・459はほぼ同じ形状であるが、460は体部がやや外反しながら開くものである。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には雲母が多く含まれている。

皿（461〜464）　462〜463はともに糸きり皿である。法量は、口径8.6〜9.6cm・底径6.5〜7.1cm・器高1.15〜1.3cmを測る。色はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、雲母が多く含まれている。461も糸きり皿であるが、鋭く尖った逆三角形の高台を有するのが特徴である。底部には板状圧痕が残る。口径9.9cm・高台径6.4cm・器高2.1cmを測り、色は浅黄橙色（10YR8/3）である。

白磁

合子（466・467）　両者ともに破損が著しいが、セットになるものと考えられる。連弁文を型造りによって成形している。色調は、釉がリリーホワイト（3G9.0/1.0）、胎土がアイボリホワイト（5Y9.0/1.0）を呈する。釉はやや青みがかかり、底部は露胎となる。釉は内外面ともに、貫入がみられる。466は復元口径5.3cm・残存高1.25cm、467は復元口径4.5cm・復元底径4.4cmを測る。

褐釉陶器

水注（465）　太宰府のV類－1aに当たるものである。胴部下半分と注口部を欠失する。口縁部にややゆがみがみられるが、口径8.0〜8.2cm・残存高15.3cmを測る。口縁部は断面三角形に肥厚しており、頸部の下方でやや開き気味になっている。注口部と把手は対称に配置され、その位置から90°の所に縦長の耳がややゆがんで貼付される。釉は光沢のある明赤褐色（2.5YR5/6）で、所々に白濁がみられる。胎土は暗赤褐色（5YR3/4）を呈し、微砂粒がわずかに含まれる。

SK32（Fig.90） Bブロック外の北西隅に位置する。長径1.2m・短径0.7m・深さ約1.0mで、床面は二段になっている。プランは楕円形を呈する。遺物が確認されていないため、時期・機能は不明である。

SK55（Fig.90） SB27～30間の南に位置する土坑である。ゆがんだ円形を呈し、径約2.5m・深さ約0.8m。断面形は逆台形状で、床面はフラットである。埋土は、暗茶褐色粘質土＋黒色土＋黄褐色粘質土塊がまじる単一層である。遺物が確認されていないため、時期・機能は不明。

SK56（Fig.90）

SB29の南側に位置し、それを切っている。形状は楕円形で、長径3.6m・短径1.2m・深さ0.4mで、床面はフラットである。遺物は確認されていない。

SK40（Fig.93）

SD 4 がSD50とクロスする付近の南側に位置している。形状は不整な円形を呈し、テラスを有する。径約3.0m・深さ約0.5mで、床面はフラットである。この付近の地山は、茶褐色系の粘質土からやや青みのかかったシルトになっており、締まりが悪い状態である。埋土は、暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色粘質土塊がまじる単一層である。遺物がわずかしか確認されていないため、性格は不明であるが、時期的には至近距離にあるSC 1 などは関連性が考えられるのかもしれない。

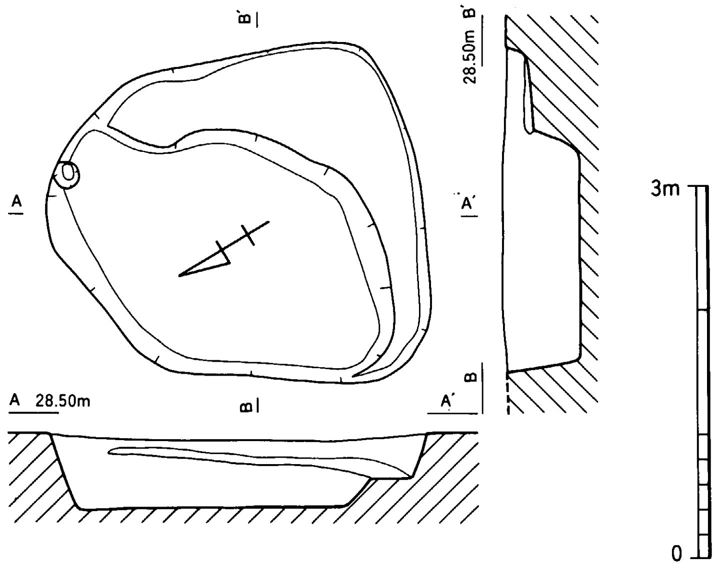


Fig.93 SK40実測図（S1/60）

SK28出土遺物（Fig.92・PL.34,42）

土師器

坏（468） 復元口径12.2㎝・復元底径7.0㎝・器高3.85㎝の破片である。底部はヘラキリ後未調整、その他はナデを施す。内面には部分的に赤彩？が確認できる。色調は、外面が橙色（5YR7/8）、内面が赤色（10R5/6）、胎土には微細粒・雲母を含んでいる。

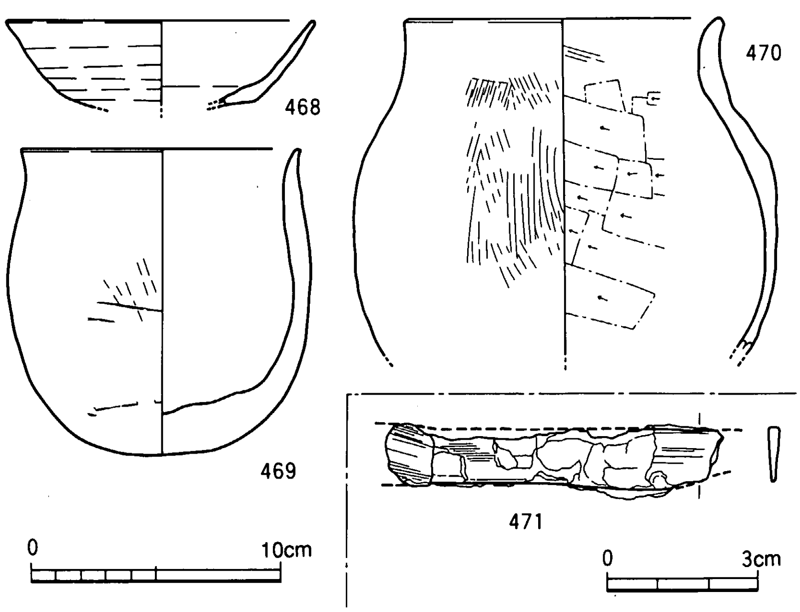


Fig.94 SK40出土遺物（S1/3,2/3）

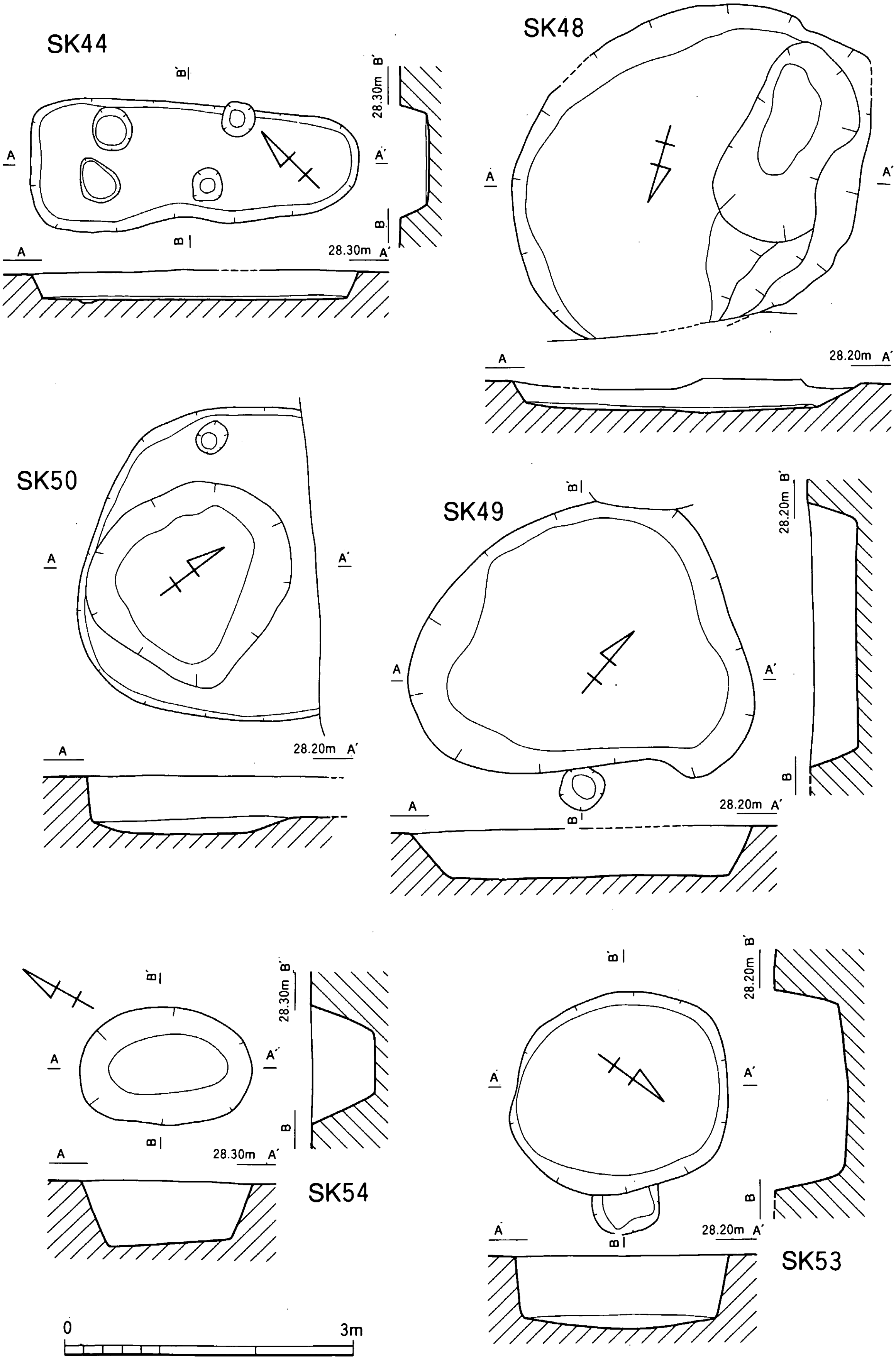


Fig.95　SK44,48～50,53,54実測図(S1/60)

甕（469・470）　両者ともに小形の甕である。469は器壁が比較的厚く、胴部は直線的で、口縁端部を尖り気味にする。口径11.0cm・胴部最大径12.4cm・器高12.1cmを測る。磨滅により調整は不明瞭である。470は、胴部に丸みをもち、口縁部が真っすぐ立ち上がる。胴部中位～底部を欠失し、口径12.8cm・胴部最大径16.95cm・残存高18.5cmを測る。体部外面はハケメの後にナデ、内面は横方向のヘラケズリを施す。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）である。

鉄器

刀子（471）　残存長5.7cm・身幅1.1cm・背幅0.5cmを測る。鋒部と茎部をともに欠失する。詳細は不明である。

SK44（Fig.95）　調査区東端のSD 5 南側に位置する。プランは長い楕円形を呈し、長径3.4m・短径1.1～1.4m・深さ0.3mで、床面はフラットである。遺構の遺りは非常に悪く、かなり削平を受けているものと推測される。

SK44出土遺物（Fig.96・PL.34,35）

土師器

椀（472）　丸みを帯びた体部を有し、やや外側に開く高脚の高台を貼付する。復元口径12.0cm・復元高台径7.6cm・器高6.1cmを測り、やや器壁は薄めである。口縁部外面には沈線もしくは工具痕のようなものがみられる。最終調整はナデによる仕上げが行われる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、0.5mmほどの赤褐色粒・雲母をわずかに含む。

土師質土器

鉢（476）　直線的に真っすぐ立ち上がる体部を有し、口縁部は細く短く外反する。底部は欠失するが、恐らく丸みを帯びているものと推測される。復元口径23.6cm・残存高11.9cm。胎土には1～3mmほどの砂粒・雲母細片・赤褐色土が含まれる。調整は、体部外面はハケメ？、口縁部はナデ、内面はハケメで接合痕が残る。底部は内面がナデで、外面はヘラケズリが施される。色調は黄橙色（7.5YR7/8）～にぶい橙色（7.5YR6/4）で、外面には煤が付着している。

SK48（Fig.95）　調査区東端に位置し、SC 2 に切られている。プランはほぼ円形を呈し、径約3.5m・深さ0.2～0.3mを測る。遺物は確認されていない。

SK49（Fig.95）　SK48に切られる土坑である。長径3.5m・短径2.7m・深さ約0.4mで、床面はフラットである。プランはゆがんだ円形を呈する。遺物は確認されていない。埋土は黒色土の単一層である。

SK50（Fig.95）　SK48と同じく、SC 2 に切られている。径2.4m＋α・深さ0.6mを測り、床面中央がやや窪んでいる。プランはほぼ円形と推測される。遺物は確認されていない。

SK50出土遺物（Fig.96・PL.34,35）

土師器

坏（474・475）　474は、体部中位に段があり、底部と体部の境目は明瞭である。調整は、底部はヘラキリの後に未調整、その他はナデを施す。復元口径11.6cm・復元底径6.2cm・器高3.7cm

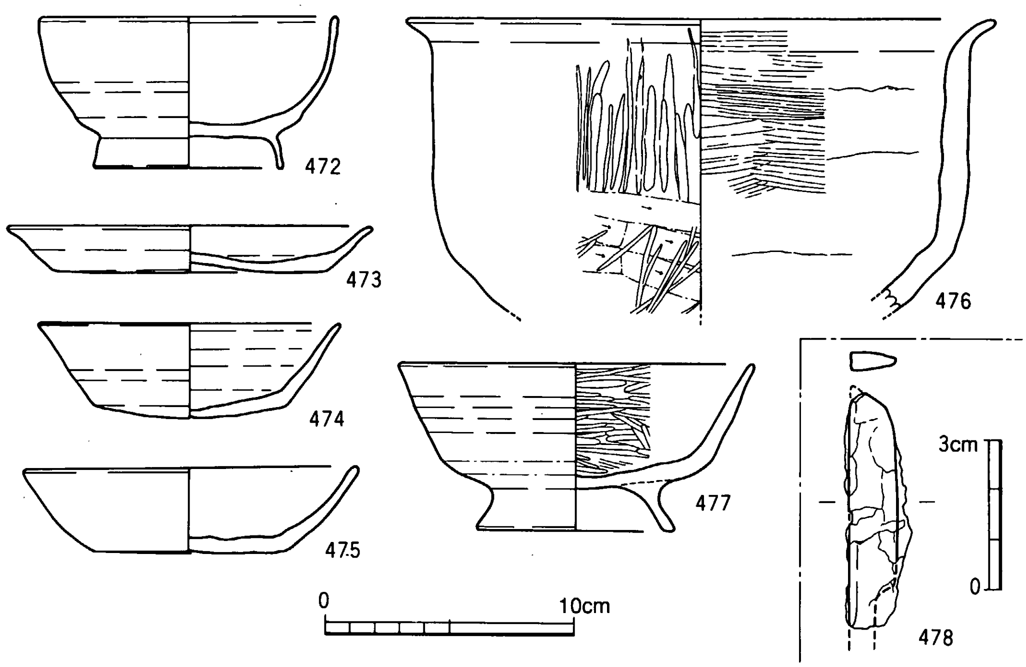


Fig.96　SK44,50,53出土遺物(S1/3,2/3)

を測る。475は、やや丸みを帯びたもので、復元口径12.0cm・復元底径6.2cm・器高3.25cmを測る。器面調整は、ナデによる最終調整を行っている。また、体部外面には赤彩？のようなものが確認できる。両者とも、外面は明赤褐色（5YR5/6）～橙色（2.5YR6/6）、内面は明赤褐色（5YR5/6）～浅黄橙色（10YR8/4）で、胎土には微砂粒と金雲母が含まれる。

皿（473）　復元口径14.6cm・復元底径11.0cm・器高1.9cmを測る。底部はヘラキリの後にナデを施し、板状圧痕が確認できる。胎土は微砂粒をわずかに含む程度で概ね精良、色調は橙色（5YR6/6）を呈する。

SK53（Fig.95）　SA 6を切って、SB22から約5mの付近に位置する。プランは円形で、径2.0～2.2m・深さ0.7～0.8mを測る。床面はフラットである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

SK53出土遺物（Fig.96・PL.35,42）

黒色土器

椀（477）　黒色土器A類。外側に開く高脚の高台を貼付し、外方へ直線的に立ちあがる形態を有する。復元口径14.4cm・高台径8.0cm・器高6.75cmを測り、やや器壁は厚めである。外面は回転ヘラケズリによる器面調整を行ったのちにナデ、内面は手持ちヘラミガキを丁寧に行う。器面の色調は、にぶい橙色（7.5YR7/4）で、胎土には1mmほどの砂粒および雲母を含む。

鉄器

鉄鏃（478）　先端部と茎部を欠失する。残存長cm・身幅1.0cm・背幅0.5cmを測る。埋土上層からの出土であり、混入されている可能性がある。

SK54（Fig.95）　SB27・28のすぐ南に位置する。長径1.8m・短径1.2m・深さ0.6～0.7mで、プランは楕円形。床面はフラットである。遺物は確認されていない。

SK59 (Fig.97)　SB22の北側に近接し、SK58を切っている。プランは長い楕円形を呈し、長径2.8m・短径1.0m・深さ0.4～0.5mを測る。床面はフラット。今のところ性格は不明である。

SK59出土遺物 (Fig.98)

土師器

坏 (481)　緩やかに外方に開く体部をもち、体部と底部の屈曲部付近にやや長めの高台が貼付される。復元口径12.7cm・高台径7.2cm・器高4.5cmで、灰白色（2.5Y8/2）を呈する。胎土には、再砂粒・雲母細片・赤褐色土が含まれる。ナデによる最終調整が行われている。

須恵器

蓋 (480)　下層付近からの出土である。天井部はやや丸みをもち、ヘラケズリを施す。天井部と体部の境の稜は短く鋭さをやや欠いている。復元口径12.3cm・器高5.2cmを測り、色調は灰色（N5）をなす。胎土は0.5mmほどの砂粒と雲母をわずかに含む程度で、ほぼ精良である。

SK60 (Fig.97)　SB29・30の西側に近接して位置する土坑である。プランはゆがんだ楕円形を呈し、長径2.4m・短径1.8m・深さ0.4～0.8mを測る。床面はピット状に二段になっている。埋土は暗茶褐色粘質土＋黒色土の単一層である。性格は今のところ不明確であるが、第Ⅳ章－2で分析を行った赤色物が付着した土師器はここから出土したものである。ただし、あまりに小片であったため、図示はしなかった。

SK60出土遺物 (Fig.98)

土師器

坏 (483・484)　いずれも小片であるため器種は不明確である。両者ともに底部外面に墨書がなされているが、判読はできなかった。色調は橙色（5YR7/8）～にぶい橙色（7.5YR7/4）の範囲で、胎土には微砂粒および雲母がわずかに含まれている。また器面には、わずかにミガキの痕跡が確認できる。

鉄器

釘 (479)　先端部を欠失する。錆が激しく不明確ではあるが、残存長3.2cm・径0.25～0.3cmを測る。断面は方形である。

石器

砥石 (482)　不整形な台形状の形態を有する。砥面は4面。素材には細粒砂岩を用いている。

SK61 (Fig.97)　Cブロックの官道沿いの空閑地に位置する。プランは隅丸方形を呈し、一辺の径1.4m・深さ0.5mである。床面の形状はフラットで、遺物は甕が1点のみである。性格は不明。

SK61出土遺物 (Fig.98・PL.35)

土師器

甕 (485)　底部を欠失する。口径27.0cm・胴部最大径26.0cm・残存高29.8cmを測る。胴部の張りは弱く、やや直線的である。調整は、胴部外面がハケメ、内面が縦方向のケズリの後にナデを施して仕上げる。橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には1～5mmの砂粒・雲母が含まれる。

SK62（Fig.97・PL.13）　柵列群C軸とF軸がクロスする付近に位置する。プランは偏楕円形で、二段掘りを呈する。長径2.5m・短径1.4m・深さ1.0mを測る。床面中央がやや窪んでいるが、床面はほぼフラットである。

SK62出土遺物（Fig.98・PL.35）

土師器

坏（487～489）　487と488は、体部中位に段がみられ、底部と体部の境は明瞭に屈曲しており、形状・法量ともに近似している。法量は口径12cm前後・底径7.0cm・器高3.7～3.8cmである。底部はヘラキリの後未調整で、その他はナデを施している。色調は橙色（5YR7/8）～明赤褐色（5YR5/6）とやや赤みが強い。487には赤彩？（赤色物）のような部分が確認できる。胎土には、微砂粒と雲母が含まれている。

489は、復元口径12.0cm・底径6.2cm・器高3.25cmを測る。底部外面はヘラキリの後にナデ、その他もナデによる最終調整を行っている。体部外面には赤彩？が確認できる。色調は橙色（7.5YR7/6～6/6）を基本とし、胎土には微砂粒・金雲母が含まれている。

黒色土器

坏（486）　内黒の黒色土器である。器壁はやや厚く、丸みをもった形状を呈しており、口縁端部は若干外方に屈曲している。内外面ともにやや粗雑な手持ちヘラミガキで仕上げられている。底部は平坦でケズリの後は未調整である。復元口径13.5cm・底径5.7cm・器高4.3cmを測り、色調は橙色（5YR6/8）、胎土には0.5～1mmほどの砂粒が多く含まれている。

SK67（Fig.97）　柵列群B軸とF軸のクロスする付近に位置する。削平が著しく非常に浅いが、床面中央のやや窪んだ所に5～10cmほどの礫がみられ、集石遺構と考えられる。埋土は、暗茶褐色粘質土ベースに黒色土がまじるもので、古代のものではないと推測される。プランはほぼ円形で、直径2.8～3.15m・残存する深さ0.1～0.2mである。遺物は確認されていないため、詳細は不明である。

SK68（Fig.99）　Dブロックに位置し、SD47を切っている。遺物がみられなかったので時期・性格ともに不明確だが、少なくとも古代のものではないと推測される。プランは隅丸長方形で、長径2.4m・短径1.8～1.9m・深さ約1.0mである。壁はほぼ直立して立ち上がり、床面はフラットである。

SK68出土遺物（Fig.100・PL.42）

鉄器

刀子（490）　中央付近で二つに折損しており、茎部を欠失しているものと推測される。残存長10.2cm（刀身部8.8cm・茎部残存長1.4cm）・身幅1.1cm・背幅0.2cmを測る。関がみられず、鋒は剣状にやや尖り気味の形状を呈する。

SK70（Fig.99・PL.13）　SK71～74と一群のものと考えられるものである。SK69に切られている。性格は不明確である。プランは楕円形で、長径2.3m・短径1.6m前後・深さ0.4mを測る。
床面はフラットである。

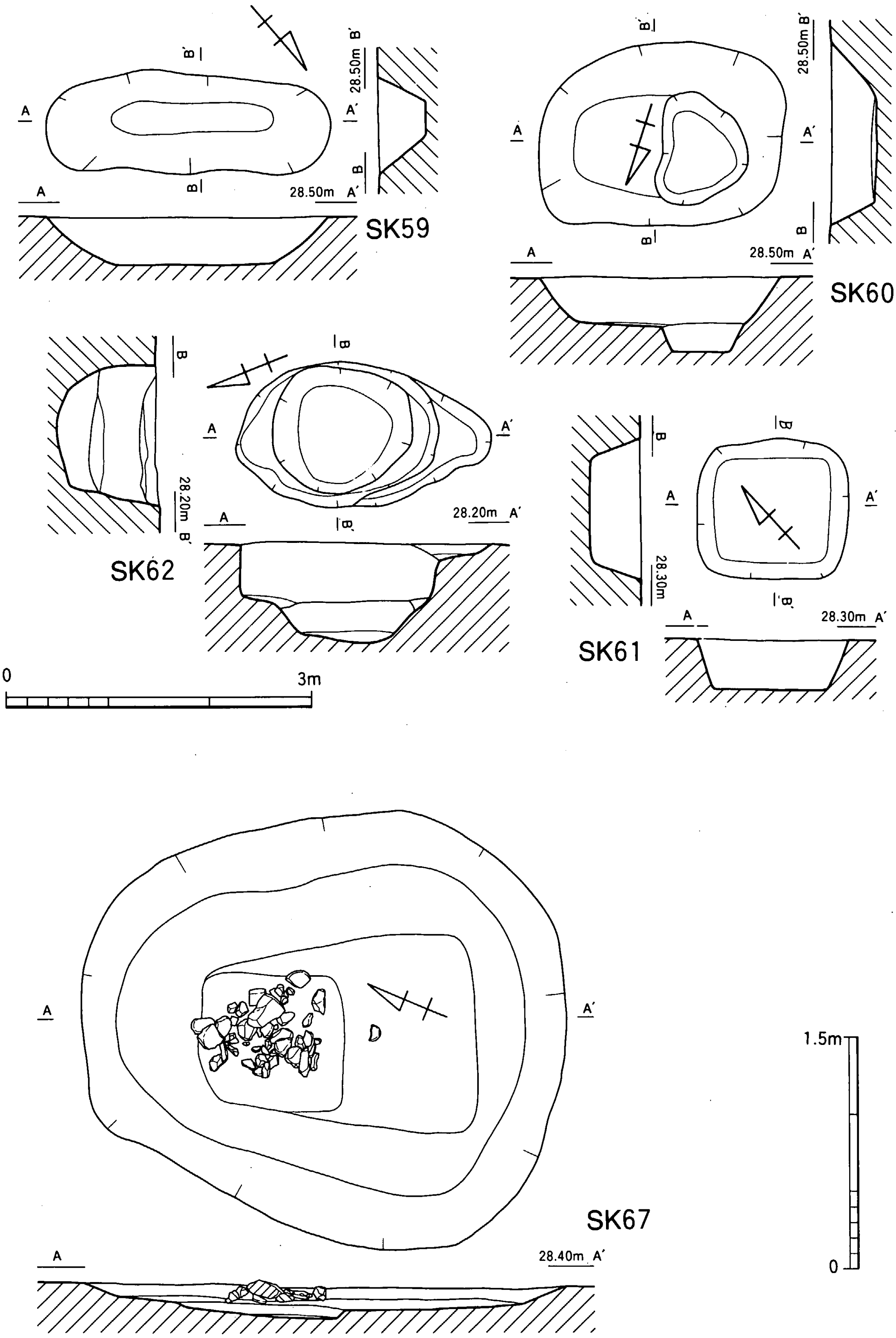


Fig.97　SK59～62,67実測図(S1/40,1/60)

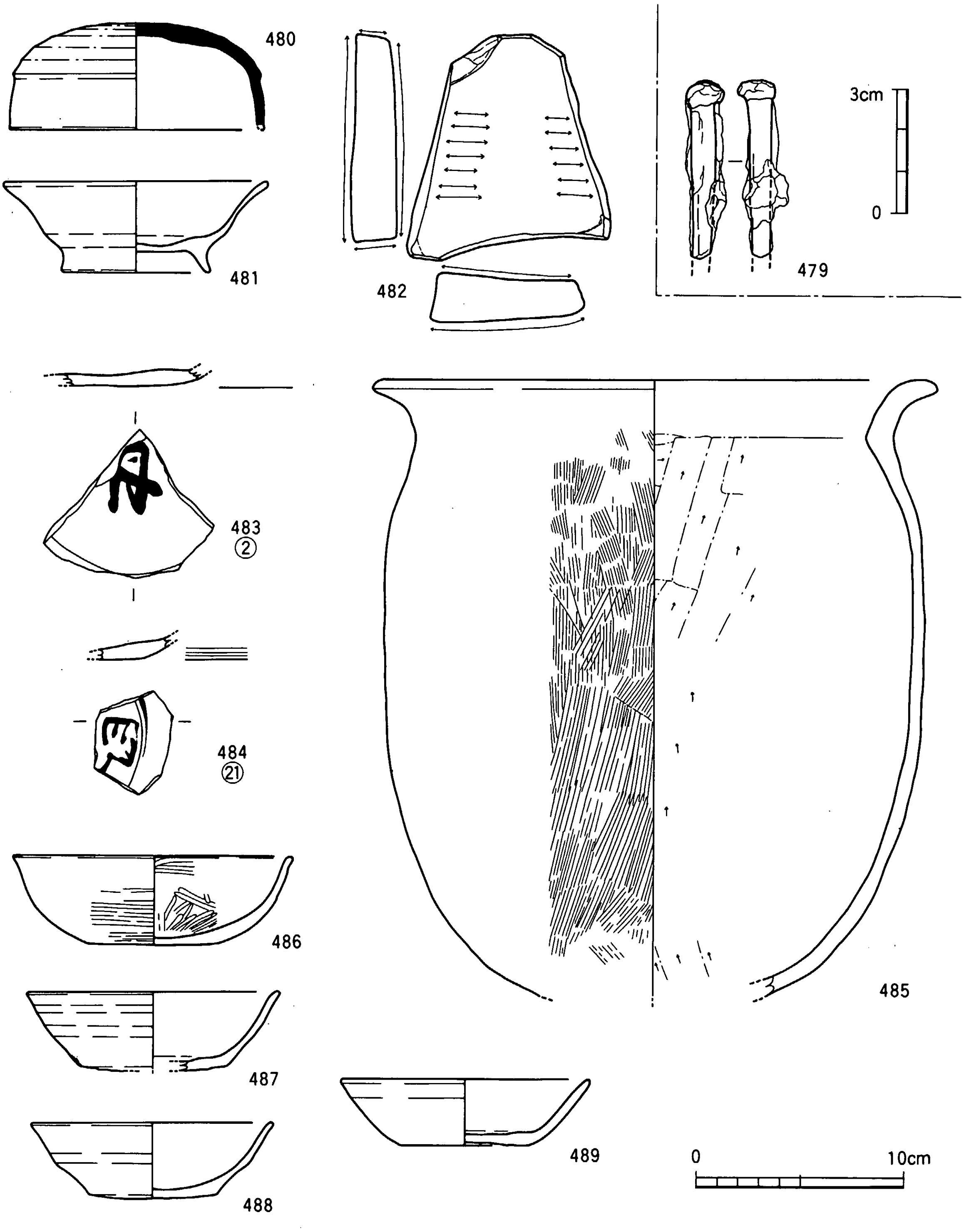


Fig.98　SK46,59～62出土遺物(S1/3,2/3,1/1)

SK70出土遺物（Fig.100・PL.35,48）

土師器

坏（491・492）　492は、復元口径13.5cm・復元底径8.2cm・器高3.6cmを測る。胎土は微砂粒と赤褐色粒をわずかに含むが精良、色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。底部はヘラキリの後にナデを施している。内面見込みに「×」のヘラ記号がみられる。

491は底部のみの破片資料であるが、概ね492と同様のものと考えられる。底部外面に墨書が書かれており、「人偏」の漢字と理解できる。本遺跡では人偏の漢字は「傔」しか確認されていないので、可能性としては充分考えられる。

須恵器

皿（493）　かなりゆがんだ形状を呈している。口径14.9～15.25cm・底径10.9～11.5cm・器高1.1～1.7cmで、底部はヘラキリの後にナデを施している。板状圧痕が確認できる。胎土には1mm以下の砂粒がわずかに含まれる程度で精良、色調は灰色（N6/1～5Y6/1）。また、体部外面に煤が付着している。

SK71～74（Fig.99・PL.14）　Dブロック東側、SE 1の横に位置する。お互いに切り合い関係があり、（古）SK71→SK72→SK73→SK74（新）となる。性格はいずれも不明確である。またそれぞれのプランは、トレンチを残して一度に掘削してしまったので、確認できていない。SK71が径1.6m前後・深さ0.5～0.8m（円形？）、SK72が径2.2～2.4m・深さ0.5m、SK73が径1.2m＋α・深さ0.4m、SK74が径1.1m・深さ0.5mである。

遺物をみる限りでは、8世紀末から9世紀にかけての資料が主体であり、極めて短期間にほぼ同一の場所に掘られた土坑と推測され、この場のもつ意味を推察するうえで興味深い。

SK71出土遺物（Fig.100・PL.35）

土師器

坏（494～496）　494のみはやや直線的な体部であるのに対して、495・496はやや丸みを帯びている。法量は3点ともほぼ同様で、口径13.2～14.0cm・底径8.0～9.0cm・器高3.7～4.1cmの範囲にある。色調は橙色（5YR7/6～7/8）を呈し、胎土には1mm以下の砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石などが含まれている。

SK72出土遺物（Fig.100・PL.35）

土師器

坏（497・499）　両者とも、底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がる。法量は、497が口径12.8cm・底径8.25cm・器高3.6cm、499が口径13.7cm・底径8.0cm・器高3.75cmを測る。橙色（7.5YR7/6）～にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈し、胎土には1mm以下の砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石などが含まれている。

須恵器

坏（498）　底部と体部の屈曲部に断面逆三角形の短い高台を貼付し、体部が外方に向かってストレートに延びる坏cである。口径12.2cm・高台径7.7cm・器高4.9cmで、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。胎土は精良である。また、高台内には「×」のヘラ記号がみられる。

SK73出土遺物（Fig.100・PL.35）

土師器

坏（500・501）　両者とも、底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がっており、同様のものである。口径14.0～14.4cm・底径8.9～9.2cm・器高3.8～4.2cmを測る。色調は橙色（5YR6/8）～黄橙色（10YR8/6）を呈し、胎土には1mm以下の砂粒・赤褐色粒などを含む。

黒色土器

椀（502）　内黒の黒色土器A類である。復元口径15.3cm・高台径7.0cm・器高5.7cmを測る。短い高台を付し、直線的で大きく外方に開く体部を有する。内面は手持ちヘラミガキ、体部外面はナデの後に回転ヘラミガキ、高台～高台内はナデによって仕上げられている。色調は明赤褐色（5YR5/6）で、胎土は微砂粒・雲母・赤褐色粒がわずかに含まれる。焼きは良好である。

SK74出土遺物（Fig.100・PL.35,36）

土師器

坏（503～511）　底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がっており、口径13.0～13.5cm・底径8.0～9.3cm・器高3.5～4.0cmの範囲を示す。506だけはやや底径が小さく器形は坏dに近似する（調整はナデ）。橙色（7.5Y7/6）～浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、胎土には1mm程度の砂粒と赤褐色粒が含まれる。すべて破片資料であり、復元して図示している。

甕（514）　直線的で張りの弱い胴部をもち、口縁部は短く弱く外反する。口径27.7cm・胴部最大径24.7cm・残存高22.2cmで、底部は欠失する。調整は、胴部はハケメその後に下半のみにナデを施す。内面は縦方向のケズリ（部分的にナデ）、口縁部はヨコナデである。屈曲部の外面には指頭圧痕が残る。色調は、外面が灰黄色（2.5Y7/2）、内面が褐灰色（7.5YR5/1）で、胎土には1～3mmの砂粒が含まれる。

須恵器

坏（512・513）　両者ともに、底部と体部の屈曲部に断面逆三角形の短い高台を貼付し、体部が外方に向かってストレートに延びる坏cである。口径13.0cm・高台径7.8cm・器高4.7～4.75cmで、灰色（5Y6/1）を呈する。胎土は精良である。また、512は高台内に、513は内面見込みに「×」のヘラ記号がみられる。

土製品

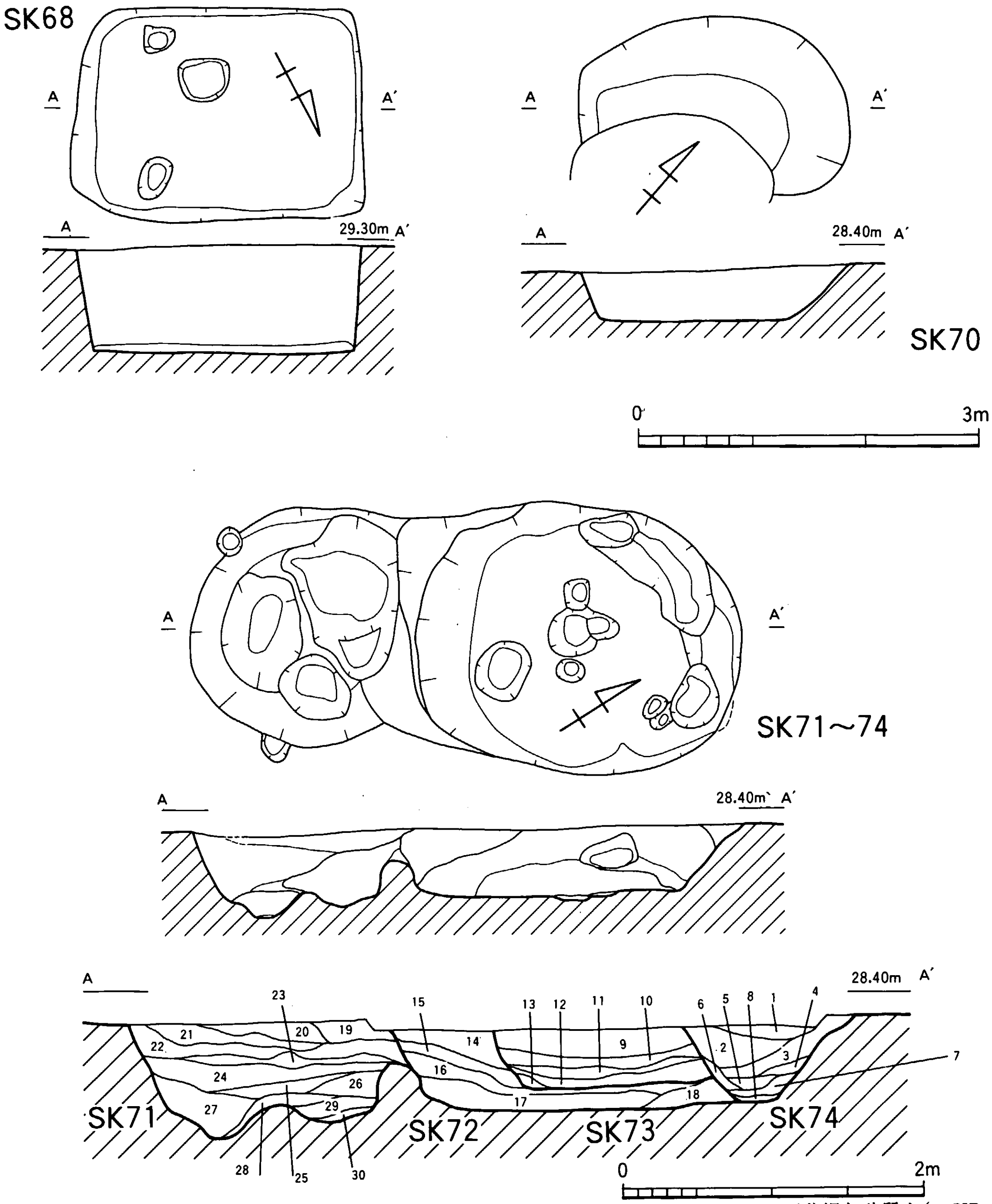
土錘（515）　須恵器的な焼きの土錘である。長さ4.2cm・径1.35cm・孔径0.45cm・重量5.2gである。

SK75（Fig.101・PL.14）　DブロックのSB35・36西側1.5mの付近に位置している。SD80を切る。プランはゆがんだ円形で、径2.3～2.4m・深さ0.9mを測る。床面はフラットである。時期的には建物群に伴うか、それに近い時期の所産であると推察できるが、その性格については不明確である。

SK75出土遺物（Fig.102・PL.36）

須恵器

坏（518）　底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がっており、口径14.4cm・底径9.4cm・器高5.7cmを測る。黄灰色（2.5Y6/1）を呈し、胎土には1mm程度の砂粒と雲母が含まれている。破片資料であり、復元して図示している。



1　黒褐色土(10YR 2/3)砂を少し含む
2　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
　黄褐色土粒、炭化物少し含む
3　黒色粘質土(10YR 1.7/1)
　キメ細かく、しまり良い
4　暗褐色粘質土(10YR 3/4)
5　黒褐色粘質土(10YR 2/2)
6　にぶい黄褐色粘質土(10YR 4/3)
　黄褐色土粒含む
7　黒褐色砂質土(10YR 2/2)
8　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
9　黒色土(10YR 2/1)
　わずかに砂礫を含む
10　灰黄褐色微粒砂(10YR 4/2)
11　にぶい黄褐色微粒砂(10YR 5/3)
　炭化物を含む
12　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
13　黒褐色土(10YR 3/1)
14　暗褐色土(10YR 3/3)
　灰白色砂、炭化物を含む
15　褐色微粘質土(10YR 4/4)
16　黒褐色粘質土(10YR2/3)
17　灰黄褐色粘質土(10YR 4/2)
　炭化物少し含む
18　褐色粘質土(10YR 4/4)
19　黒褐色粘質土(10YR 2/3)
20　にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3)
21　灰黄褐色砂質土(10YR 4/2)
　炭化物を含む
22　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
23　黒色粘質土(10YR 2/1)+黄褐色粘質土(10YR 5/6)
24　黒色土(10YR 1.7/1)
25　暗褐色粘質土(10YR 3/3)
　微粒砂を含む
26　黒褐色土(10YR 2/3)
　微粒砂、礫を含む
27　黒色粘質土(10YR 2/1)
28　黒色粘質土(10YR 2/1)
　粘性つよい
29　暗褐色土(10YR 3/3)
30　黒色土(10YR 1.7/1)

※土層図のみS1／30

Fig.99　SK68,70～74実測図(S1/60)

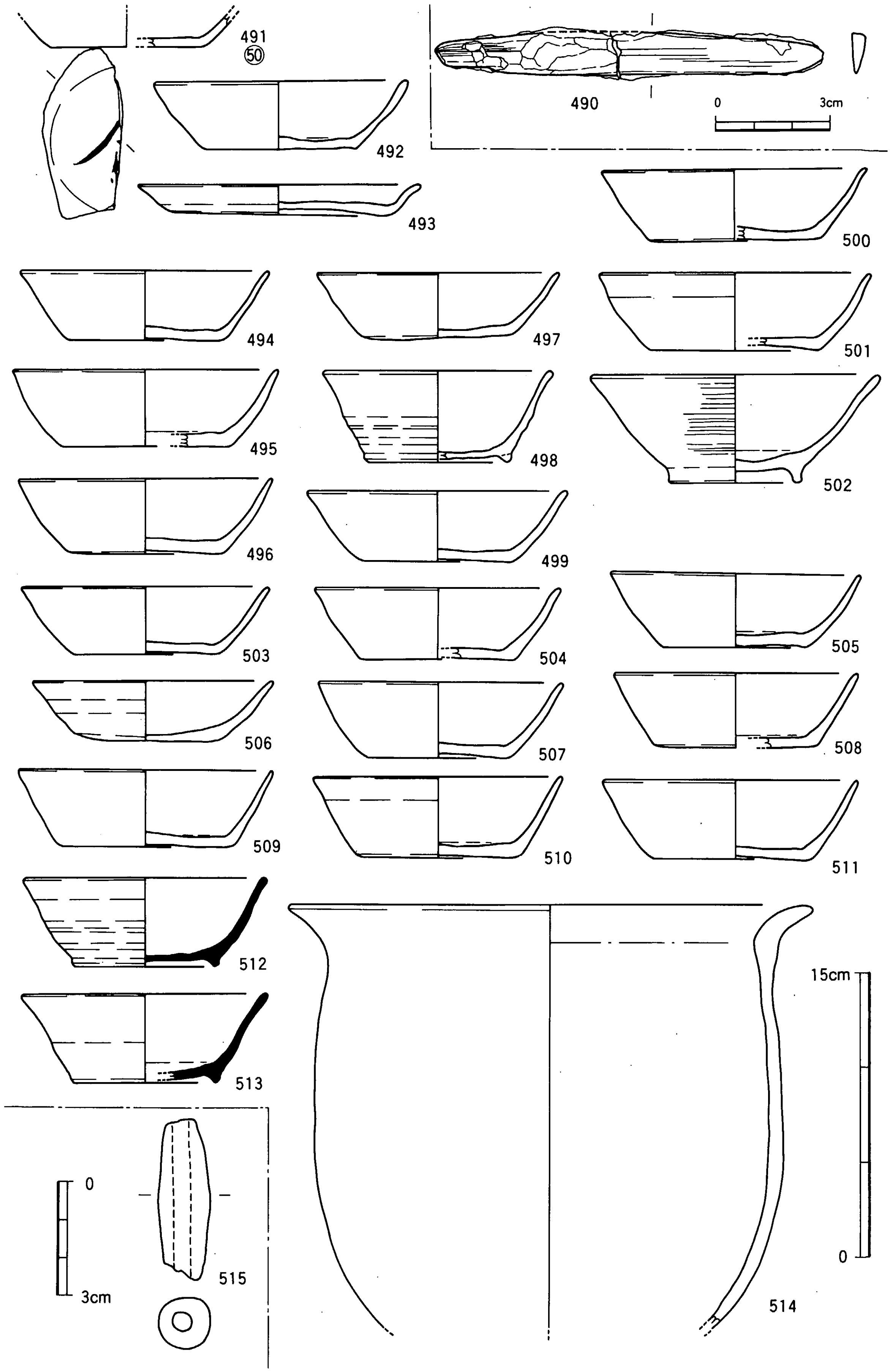


Fig.100　SK68,70～74出土遺物(S1/3,2/3)

土製品

土錘（517）　須恵器的な焼きのものである。長さ4.2cm・径1.25cm・孔径0.3～0.4cm・重量5.1gを測る。完形品である。

SK76（Fig.101）　Dブロック西端に位置し、SB40を切っている。プランは楕円～隅丸長方形で、長径2.2m・短径1.1m・深さ0.2mである。床面はフラットである。削平をかなり受けているものと推測され、非常に遺りが悪い。今のところは不明確な点が多いが、小刀の鋒が出土しており、墓である可能性もある。

SK76出土遺物（Fig.102・PL.42）

鉄器

小刀（516）　推定身幅2.7cm・重ね幅0.5cmを測る。刃物の鋒であり、その大きさからは小刀のものと判断した。

SK79（Fig.101）　Dブロックの南端に単独で位置する。プランは円形で、床面はフラット、径3.0m・深さ0.2mを測る。削平をかなり受けているものと推測され、非常に遺りが悪い。また埋土中には、径10～15cm大の礫が多くみられた。

SK79出土遺物（Fig.102・PL.36）

土師器

皿（519・520）　519は糸きり皿で、口径9.2cm・底径6.9cm・器高1.2cmである。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、微砂粒および雲母を含む。520は磨滅が著しく、ゆがみも大きい。調整は不明瞭である。淡黄色（2.5Y8/3）で、微砂粒をわずかに含む。両者ともに破片資料であり、復元して図示した。

瓦器

椀（522）　丸底の坏に、断面逆三角形の極めて短い高台を貼付している。復元口径16.15cm・高台径6.1cm・器高5.3cmを測る。調整は内外面ともに、やや粗雑な手持ちヘラミガキ、高台～高台内にはナデを施している。灰白色（5Y7/1）を呈し、胎土には0.5～5mm程度の砂粒を含む。

白磁

椀（521）　底部器肉は厚く、削り出しの浅い高台部を有する。体部下半はケズリを施し、露胎となす。内面には見込み周縁を沈線が巡っている。高台径6.7cm・残存高4.5cmを測り、胎土は灰白色（5Y8/2）、釉はオイスター色（5Y7.5/1.0）を呈する。

SK80（Fig.101）　Dブロックの南西コーナー（柵列群A軸の折れ点）付近に位置する。プランは隅丸方形で、床面はフラット、長径1.8m・短径1.5m・深さ0.4mを測る。今のところ、性格は不明確である。

SK80出土遺物（Fig.102・PL.36）

土師器

坏（526・528～534）　526・528～530は丸底を呈する坏である。体部には段を有し凹凸が多く、器形も大きくゆがんでいる。これらは法量に若干の差があるが、ほぼ一群のものと考えられる。なかでも526と529は形状が酷似している。口径15.0～17.0cm・器高3.5cmを測り、黄橙色

(10YR8/6) ～浅黄橙色 (10YR8/3) を呈する。全体的に磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、底部はヘラキリの後にナデ、その他にはナデを施しているものと推定される。底部には板状圧痕が残り、526と529の内面には、工具痕（ミガキ？）が残っている。

皿 (531～534)　すべて小皿aの破片資料である。534のみが糸きり。531は、復元口径9.3cm・器高1.4cm。浅黄橙色 (10YR8/4) を呈し、胎土は精良。底部はヘラキリ後に未調整で、板状圧痕が残る。532は、復元口径9.75cm・復元底径7.95cm・器高1.3cm。にぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈し、胎土には微砂粒と雲母が含まれている。533は、復元口径8.9cm・器高1.2cm。浅黄橙色 (10YR8/4) を呈し、赤褐色粒がわずかに含まれている。532・533については、底部調整はヘラキリ後にナデを施す。534は、復元口径8.4cm・器高1.1cmを測り、にぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。胎土には微砂粒・雲母・赤褐色粒が含まれる。

瓦器

椀 (527)　破片資料であったので、復元して図示した。丸底の坏に、断面逆台形の極めて短い高台を中心からずれて貼付している。復元口径17.6cm・復元高台径8.0cm・器高4.4cmを測る。調整は内外面ともに、割と密な手持ちヘラミガキ、高台～高台内にはナデが施しされる。黄灰色 (2.5Y6/1) を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密である。

SK82 (Fig.101)　Dブロックの西側外のSC４付近に位置する。プランは隅丸方形で、長径1.8m・短径1.4m・深さ0.2～0.3m、床面はフラットである。床面には径30cm程度のわずかな窪みが確認されているが、性格は不明である。

SK82出土遺物 (Fig.102・PL.36)

土師器

坏 (523)　体部と底部の境目に明瞭な段をもち、復元口径11.5cm・底径5.9cm・器高3.05cmを測る。底部は糸きりで、板状圧痕がみられる。橙色 (7.5Y6/8～7/6) を呈し、胎土には微砂粒および雲母がわずかに含まれる。

SK94 (Fig.101)　ＡブロックのSB８の東側に位置する。プランは隅丸方形で、長径1.7m・短径1.4m・深さ0.4m、床面はフラットである。性格は不明である。

SK95 (Fig.101)　Bブロックの南端の官道に近い付近に位置する。プランはやや楕円がかった隅丸長方形で、長径1.7m・短径0.7m・深さ0.6mを測る。床面はフラットである。

SK95出土遺物 (Fig.102・PL.37)

土師質土器

鍋 (535)　緩やかに丸みがある体部を有し、口縁部を水平に短く外反させる。おそらく丸底のものと推測される。ゆがみをもっており、復元口径45.6～51.6cm・残存高16.5cmの範囲である。にぶい黄橙色 (10YR6/3) を呈し、胎土にはわずかな雲母細片と1～3mmの砂粒を多量に含む。調整は内面にハケメ、外面にナデ、口縁付近はヨコナデ。外面には煤がかなり付着している。

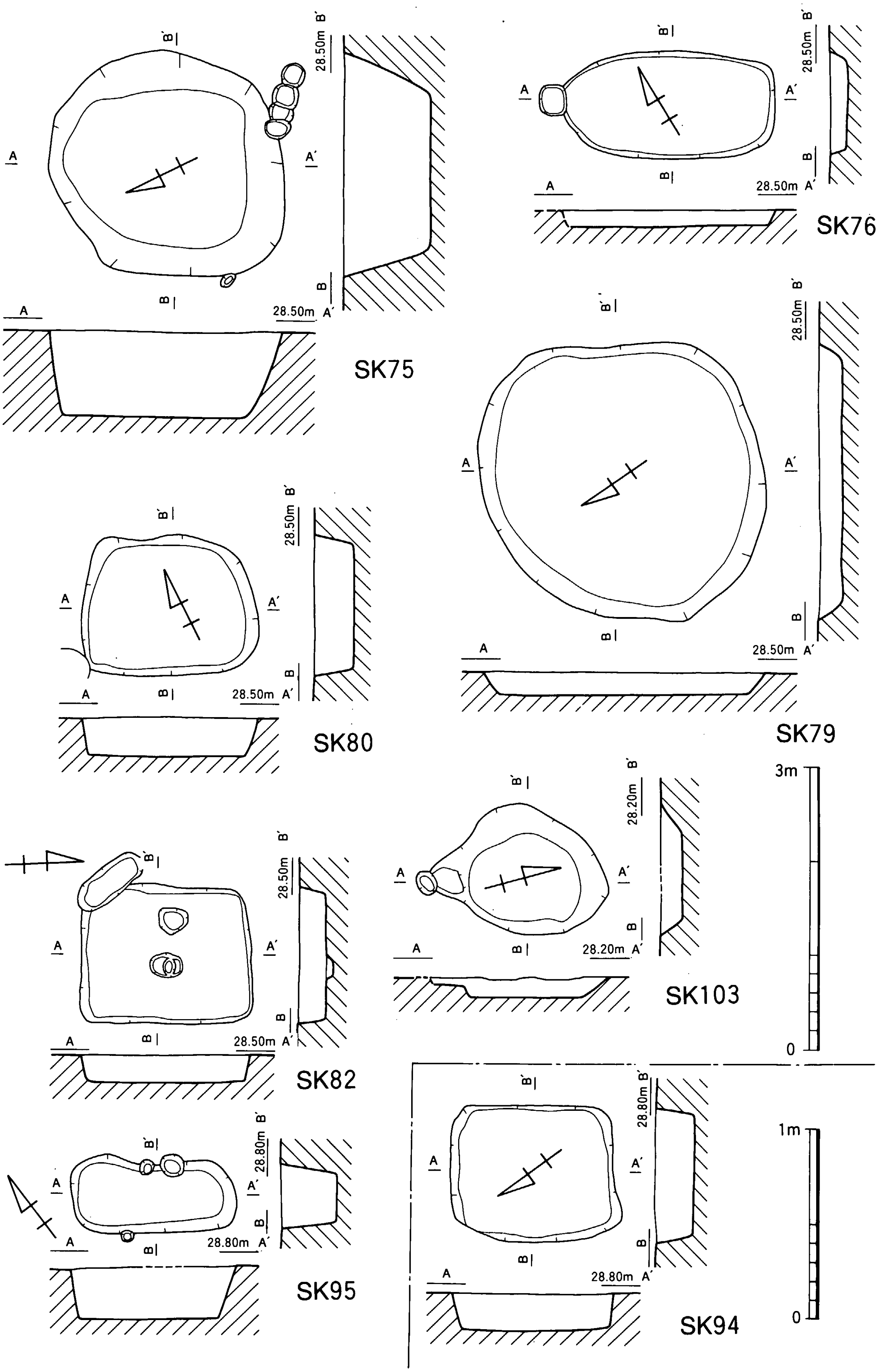


Fig.101　SK75,76,79,80,82,94,95,103 実測図(S1/60, 1/30)

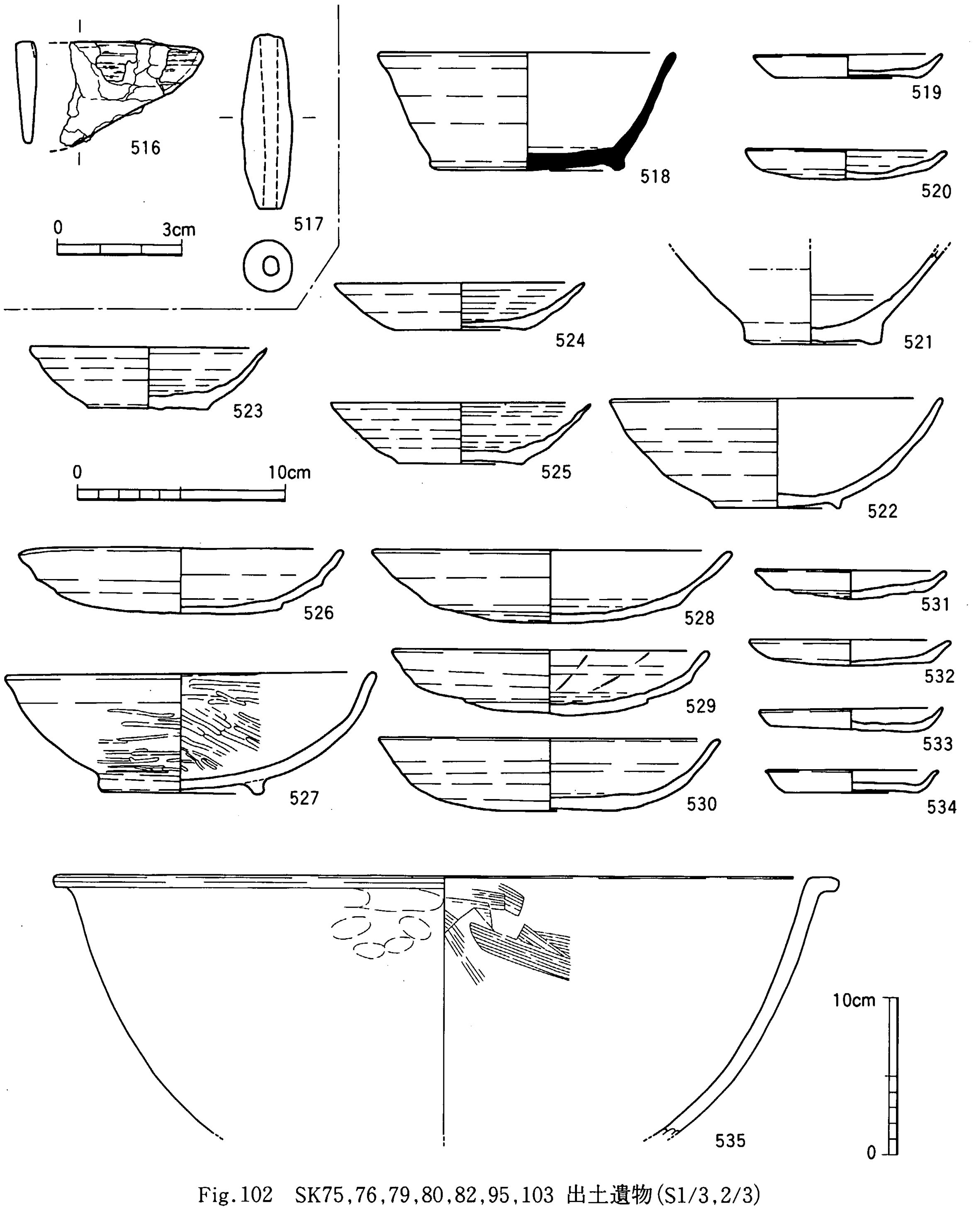


Fig.102　SK75,76,79,80,82,95,103 出土遺物(S1/3,2/3)

SK103 (Fig.101)　Cブロックの南端、ST 5 の近くに位置する。プランは不整な円形で、長径1.8m・短径1.3m・深さ0.2m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明である。

SK103出土遺物 (Fig.102・PL.36)

土師器

坏 (524・525)　両者とも破片である。体部と底部の境目に明瞭な段をもち、底部は糸きり。524が口径12.1cm・底径6.4cm・器高2.3cm、535が口径12.6cm・底径6.2cm・器高2.95cmである。胎土には微砂粒と赤褐色粒がわずかに含む。橙色 (7.5YR6/6) ～明黄褐色 (10YR7/6) を呈する。

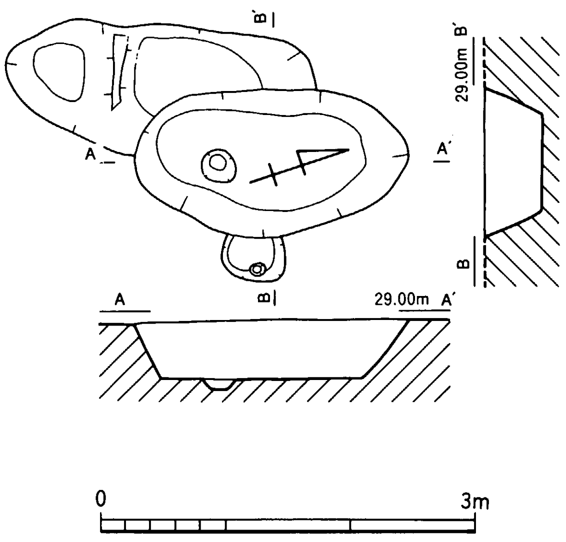


Fig.103　SK99実測図(S1/60)

SK99（Fig.103）

Bブロック北側の出入り口部付近に位置する。SK25を切っている。プランはゆがんだ楕円形で、長径2.2m・短径1.2m・深さ0.45m、床面はフラットである。床面には径25cmほどの浅いピットがみられるが、性格は不明である。

SK99出土遺物（Fig.104・PL.37）

土師器

坏（536～538・540）　536は、底部がやや丸みがあり、直線的に延びる体部が口縁付近でわずかに開く。口径14.4cm・器高4.2cmを測り、橙色（5YR6/8）を呈する。540は底部がやや平たくなっているが、雰囲気的には近いものと考えられる。

537･538は、法量に差がみられるが、体部と底部の境目に明瞭な段をもつものである。537が口径12.8cm・底径8.2cm・器高4.1cmで、橙色（5YR6/8）を呈する。538が口径13.5cm・底径7.75cm・器高3.45cmで、灰白色（7.5Y7/1）を呈する。両者とも、胎土には0.5～1.5mmほどの砂粒が含まれている。

須恵器

蓋（539）　復元口径13.7cm・器高1.65cmを測る。撮み部は欠失、1/4ほどしか残存していない。かえりは痕跡もみられず、端部は体部からストレートに延びる。灰白色（7.5Y7/1）を呈し、胎土は砂粒がわずかに含まれる程度で概ね精良。また、天井部内面の全体に墨痕が認められ、硯に転用されていたことが分かる。

緑釉陶器

皿（541）　残存高2.5cmを測る。小片のため、図上の傾きは不確実である。色調は胎土がアイボリーホワイト（5Y9.0/1.0）、釉が浅緑色（3G8.0/5.0）で、内外面に施釉される。胎土は精良である。ローリングをかなり受けており、遺存状況は悪い。

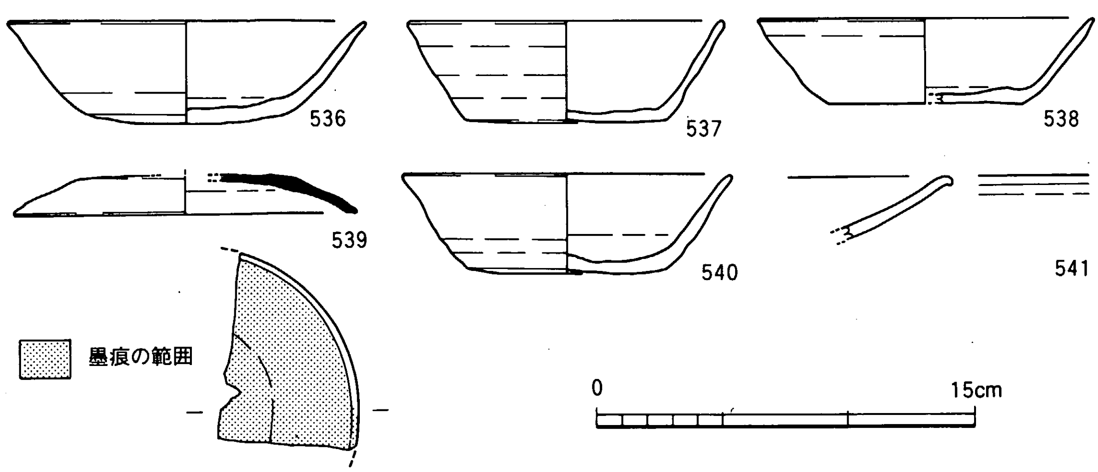


Fig.104　SK99出土遺物(S1/3)

SK104（Fig.106・PL.14）　Cブロックの南端、ST 5 の近くに位置する。プランは隅丸長方形で、長径2.7m・短径1.9～2.0m・深さ0.7～0.8mを測り、床面はフラットである。性格は不明である。

SK104出土遺物（Fig.105・PL.37）

土師器

坏（543）　全体的にゆがみが大きく、口径12.5cm・底径8.0cm・器高3.0cmである。底部は糸きりで、板状圧痕が残っている。橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土は精良。また、体部下位にはヘラの痕跡のような沈線状の窪みが巡っている。

皿（542）　糸きりの小皿aである。口径7.9cm・底径6.5cm・器高1.6cmを測り、橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には赤褐色粒と雲母細片がわずかに含まれるが概ね精良、焼成も良い。

SK105（Fig.106）　調査区南端のSD120と段落ちの間に位置している。プランはややゆがんだ楕円形で、長径2.24m・短径1.7m・深さ0.42m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明で、遺物は確認されていない。

SK108（Fig.106）　調査区南端に位置し、SD120に切られている。遺存状況が悪く、プランは不明確である。長径1.8m・短径1.3m・深さ0.2m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明で、遺物は確認されていない。

SK109（Fig.106）　Dブロックからやや南に外れた空閑地に位置する。プランはほぼ円形で、径1.8～2.1m・深さ0.3m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明である。

SK109出土遺物（Fig.105・PL.37）

弥生土器

甕（544）　板付Ⅱ式の甕で、体部下半から底部を欠失する。口縁部と口縁部下に刻み目突帯を貼付する。体部は直線的にやや急に外方に開いており、比較的浅いものと推測される。口径

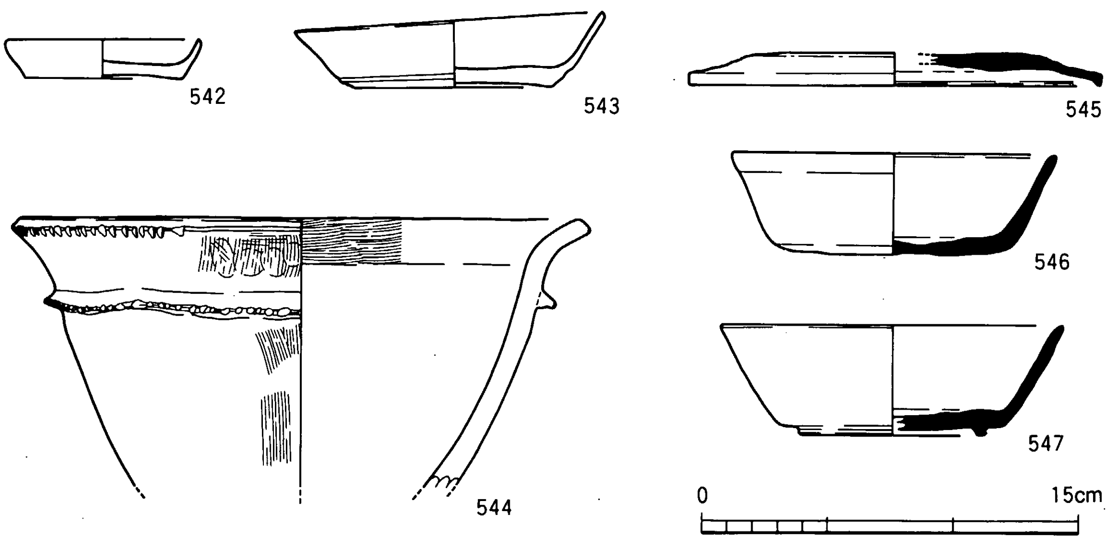


Fig.105　SK104,109,117出土遺物(S1/3)

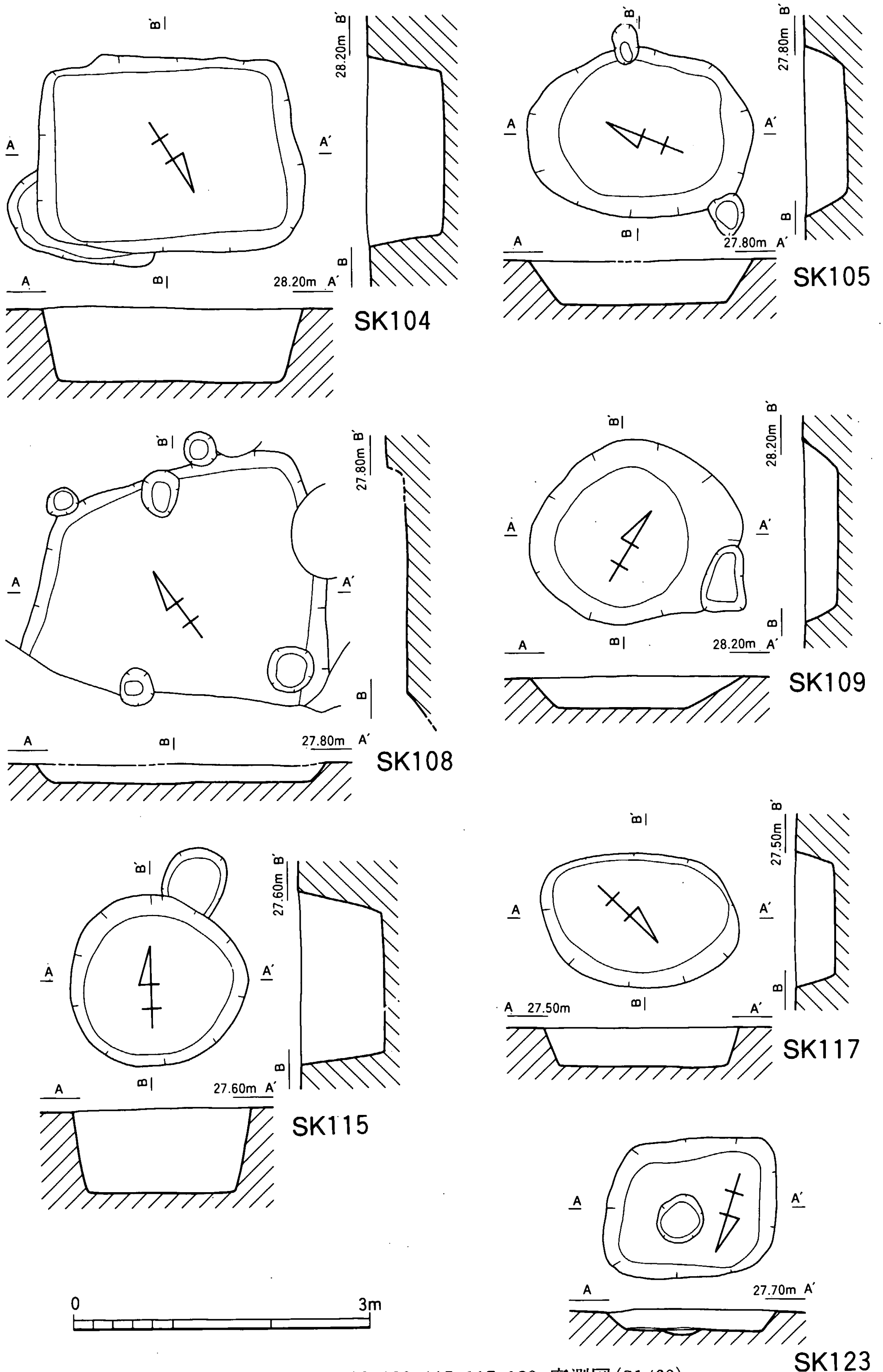


Fig.106　SK104,105,108,109,115,117,123 実測図(S1/60)

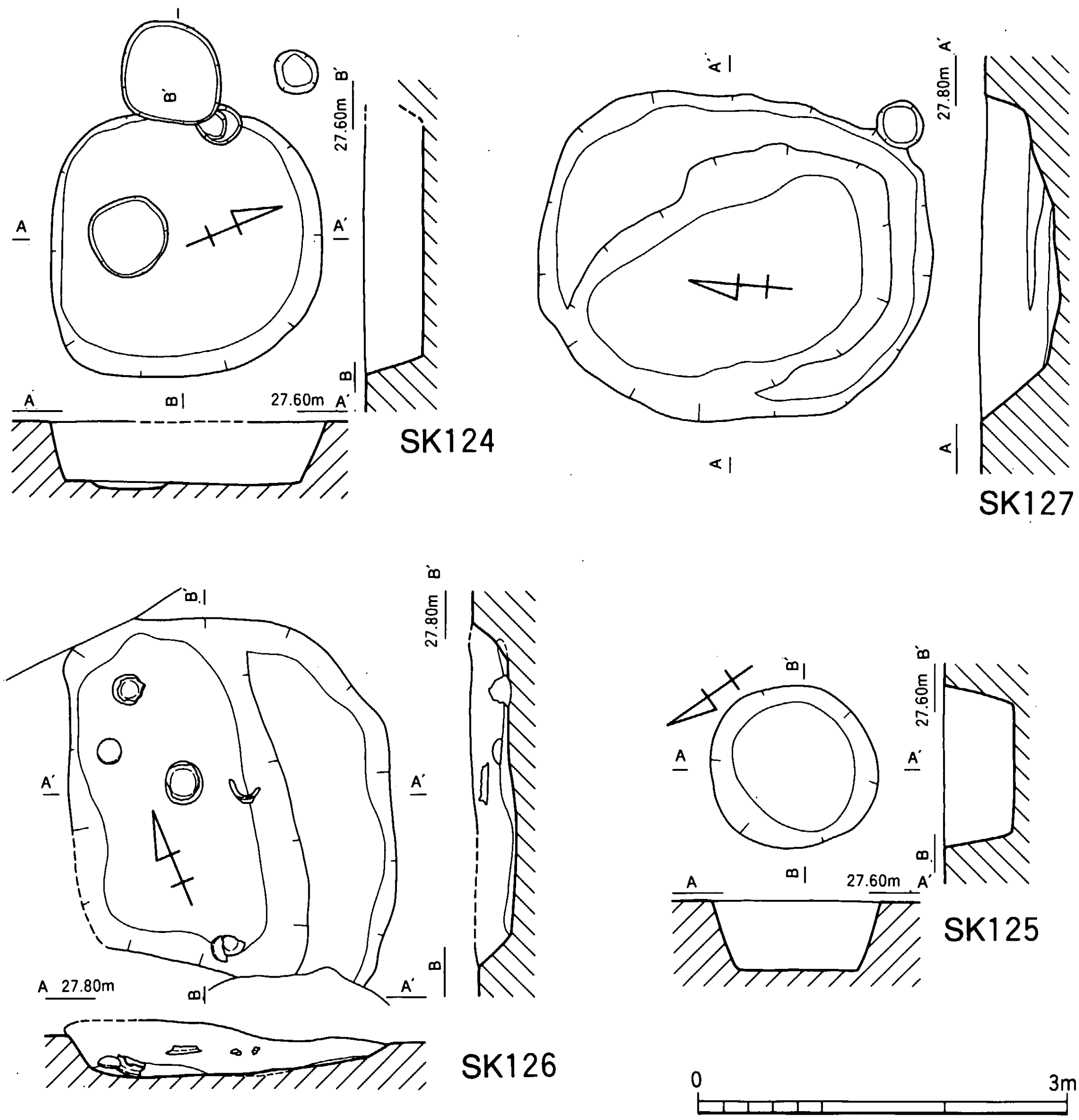


Fig.107　SK124～127実測図(S1/60)

23.1cm・残存高10.9cmで、にぶい黄褐色（10YR6/4）を呈する。胎土には1～2mmの砂粒と雲母細片が含まれる。調整は、胴部内面はナデ、外面には縦方向のハケメ、口縁内面には横方向のハケメ、外面には縦方向のハケメが施されている。

SK115（Fig.106）　調査区南西隅の段落ちのライン上に位置する。プランは円形で、径1.75m・深さ0.1m、床面はフラットである。時期・性格ともに不明であるが、埋土に真砂土の塊が多く、上層付近に染付が含まれており、比較的新しい時期の所産である可能性も考えられる。

SK115出土遺物（Fig.108・PL.42）

鉄器

釘（548・549）　548は先端部のみ残存する。残存長3.5cm・径0.35～0.4cmを測り、断面形はゆがんだ方形である。549は先端部・頭部ともに欠失しており、錆も多く、状況は不明確である。残存長3.5cm・径0.4cmを測る。

SK117（Fig.106） 調査区南西隅の段落ち付近に位置する。SK118を切っている。プランは不整な楕円形で、長径2.0m・短径1.3m・深さ0.4m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明である。

SK117出土遺物（Fig.105・PL.37）

須恵器

蓋（545） ゆがみがかなり大きく、撮み部は欠失する。復元口径16.5cm・残存高約2.1cmである。天井部外面には自然釉がみられ、色調は灰色（N5～N6）を呈する。胎土には1～2mmほどの砂粒が若干含まれているがほぼ精良で、焼成も良い。

坏（546・547） 546は復元口径13.0cm・復元底径7.7cm・器高4.1cmの坏aである。直線的な体部を有し、底部と体部の屈曲部はやや丸みをもっている。0.2～1mmの砂粒を含み、焼成はあまい。黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。

547は、直線的な体部を有し、屈曲部から0.7cmほどのところに短い高台が貼付される。高台は中心からかなりずれており、器自体もゆがみが大きい。復元口径13.7cm・復元高台径7.65～7.85cm・器高4.45cmを測る。灰色（7.5Y5/1～5Y6/1）を呈し、0.5～2mmの砂粒が含まれる。

SK123（Fig.106） 調査区南西隅の段落ちのライン上に位置し、単独で存在する。プランは隅丸方形で、長径1.64m・短径1.4m・深さ0.2m、床面はフラットである。床面には径25cmほどの浅いピットがみられるが、性格は不明である。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。

SK123出土遺物（Fig.108・PL.37）

土師器

甕（553） 口縁部のみで、胴部以下を欠失する。復元口径27.3cm・残存高8.2cmで、胴部はやや張りの弱いものと推測される。胴部外面には縦方向のハケメ、内面には横方向のケズリの後にナデ、口縁部はヨコナデによる調整を施している。また、口縁内面付近には赤彩？のような部分が確認できる。浅黄橙色（10YR8/4）～橙色（7.5YR6/8）を呈し、1～2mmほどの砂粒・角閃石・雲母細片・赤褐色土粒を含んでいる。

SK124（Fig.107） 調査区南西隅の段落ちのライン上に位置し、単独で存在する。プランは隅丸方形で、長径1.64m・短径1.4m・深さ0.2m、床面はフラットである。床面には径25cmほどの浅いピットがみられるが、性格は不明である。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。

SK124出土遺物（Fig.108・PL.37,42）

須恵器

甕？(554) 破片資料で1/3ほどしか残っていなかったので、復元して図示した。復元口径17.4cm・復元底径10.9cm・器高15.05～16.0cmを測る。底部は平底で、直線的に開く胴部を有し、口縁部で丸く折り返しており、把手が2ヶ所につくものと推測される。調整は胴部下半がケズリ、その他にはナデが施される。胎土には少量の砂粒と雲母が含まれる程度で精良、色調は灰色（N5/1）をなす。

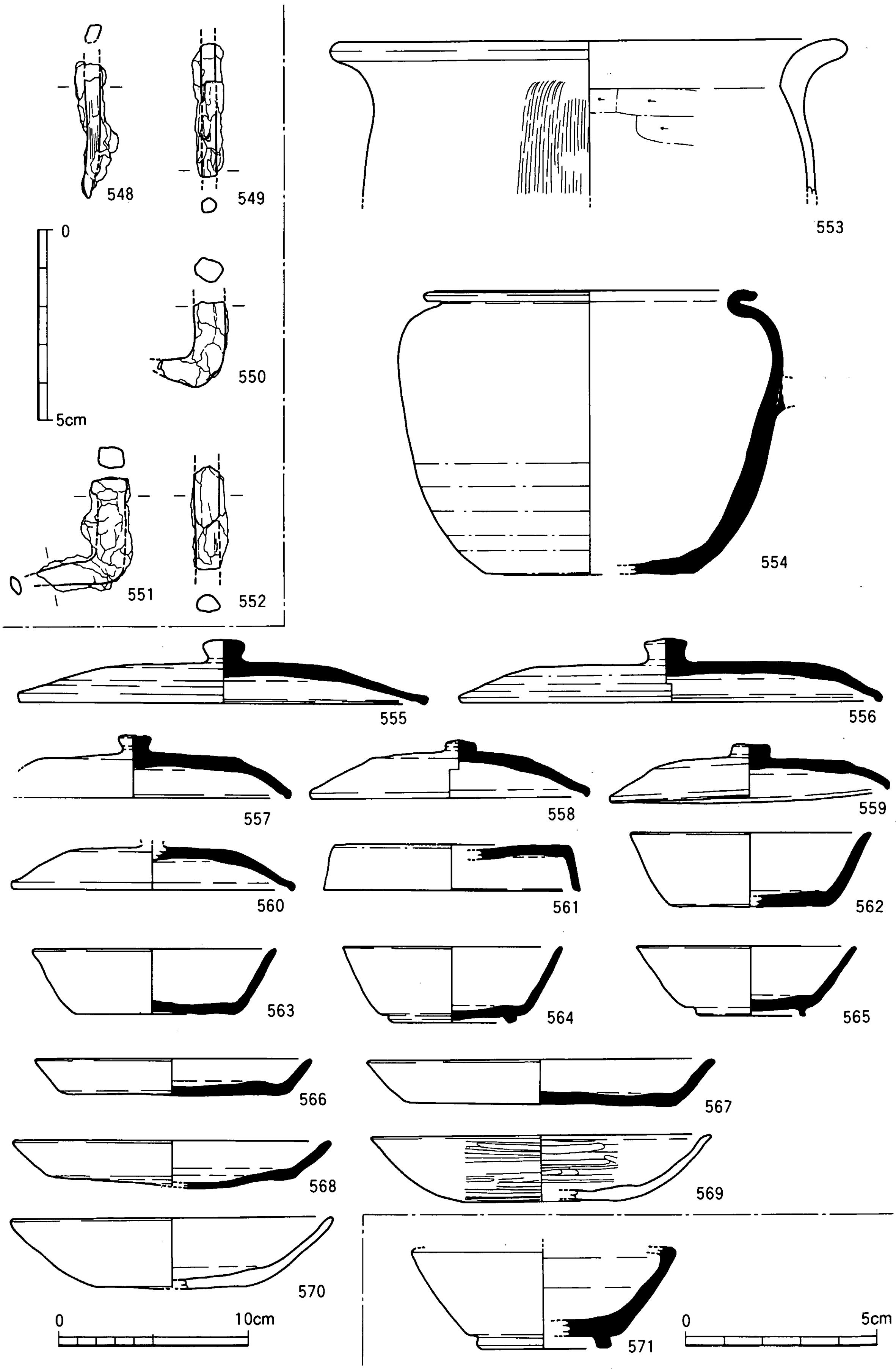


Fig.108　SK115,123,124,126出土遺物(S1/3,2/3)

鉄器

釘（550）

身の途中でL字状に折れ曲がった形状から、自在釘と推測される。先端部と頭部を欠失する。断面形はほぼ方形で、径0.5～0.7㎝を測る。

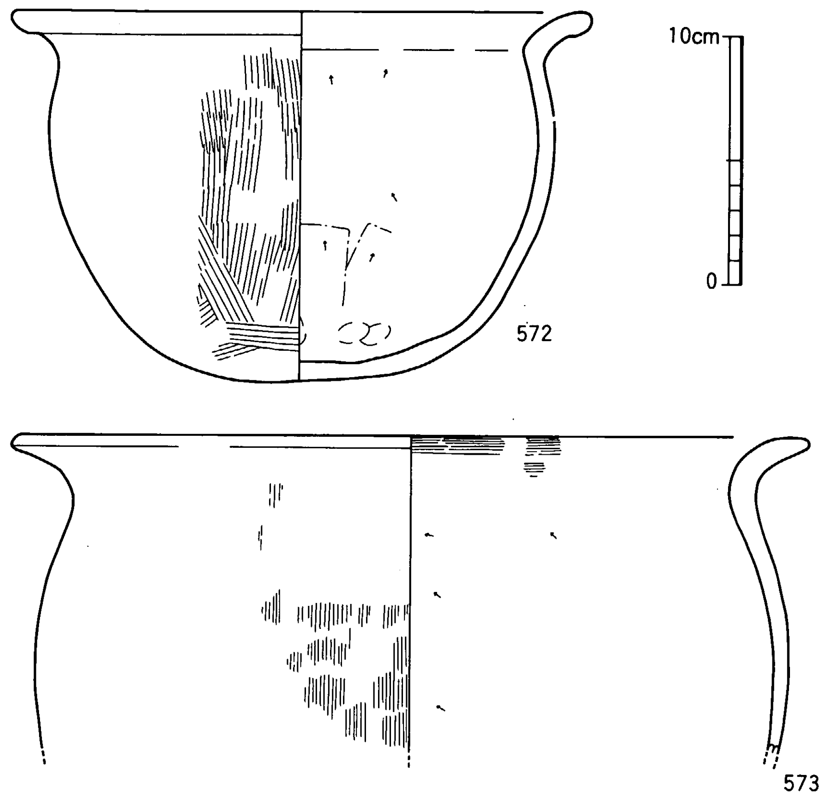


Fig.109　SK126出土遺物(S1/3)

SK126（Fig.107・PL.14）

調査区南西隅の段落ちのライン上に位置し、単独で存在する。プランは隅丸方形で、長径1.64m・短径1.4m・深さ0.2m、床面はフラットである。床面には径25㎝ほどの浅いピットがみられるが、性格は不明である。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。

SK126出土遺物（Fig.108,109・PL.37,38,42）

土師器

坏（569・570）　両者とも器形・法量ともにほぼ同等の坏dである。内面はナデの後に回転ヘラミガキ、外面はケズリの後に回転ヘラミガキによる最終調整を行っている（570はやや磨滅している）。復元口径17.7～18.0㎝・復元底径8.0～8.8㎝・器高3.5～3.7㎝を測り、橙色（5YR6/8）～明赤褐色（5YR5/8）を呈する。胎土には微砂粒・赤褐色粒・雲母がわずかに含まれるが、精良である。

甕（572・573）　572は底部～胴部にかけて丸みがをもち口縁部を弱く外反させる小甕である。胴部内面は縦方向のケズリ、外面は縦方向のハケメ、口縁部はヨコナデを施す。また、底部内面には指頭圧痕が残っている。色調は明赤褐色（5YR5/6）。胎土には0.5～2㎜の砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒が多く、質が悪い。

573は胴部下半を欠失する。口径31.7㎝・残存高12.6㎝を測る。調整は磨滅により不明瞭である。胎土には砂粒がわずかに含まれるが概ね精良で、橙色（7.5YR6/6）を呈する。

須恵器

蓋（555～561）　555・556は、口径21.4～22.0㎝・器高3.4㎝の大ぶりなものである。撮みは低いボタン状のもので、径2.2㎝を測る。胎土には0.5～1㎜の砂粒が含まれており、灰白色（2.5Y8/1～5Y8/2）を呈する。焼成はあまく、生焼けである。

557～560は、口径14.0～15.0㎝・器高3.0～3.1㎝の範囲にある。かえりは完全に退化して、端部に丸みのみを残している。撮みの形状はバラバラで、貼付位置がずれていたり、粗悪な品が

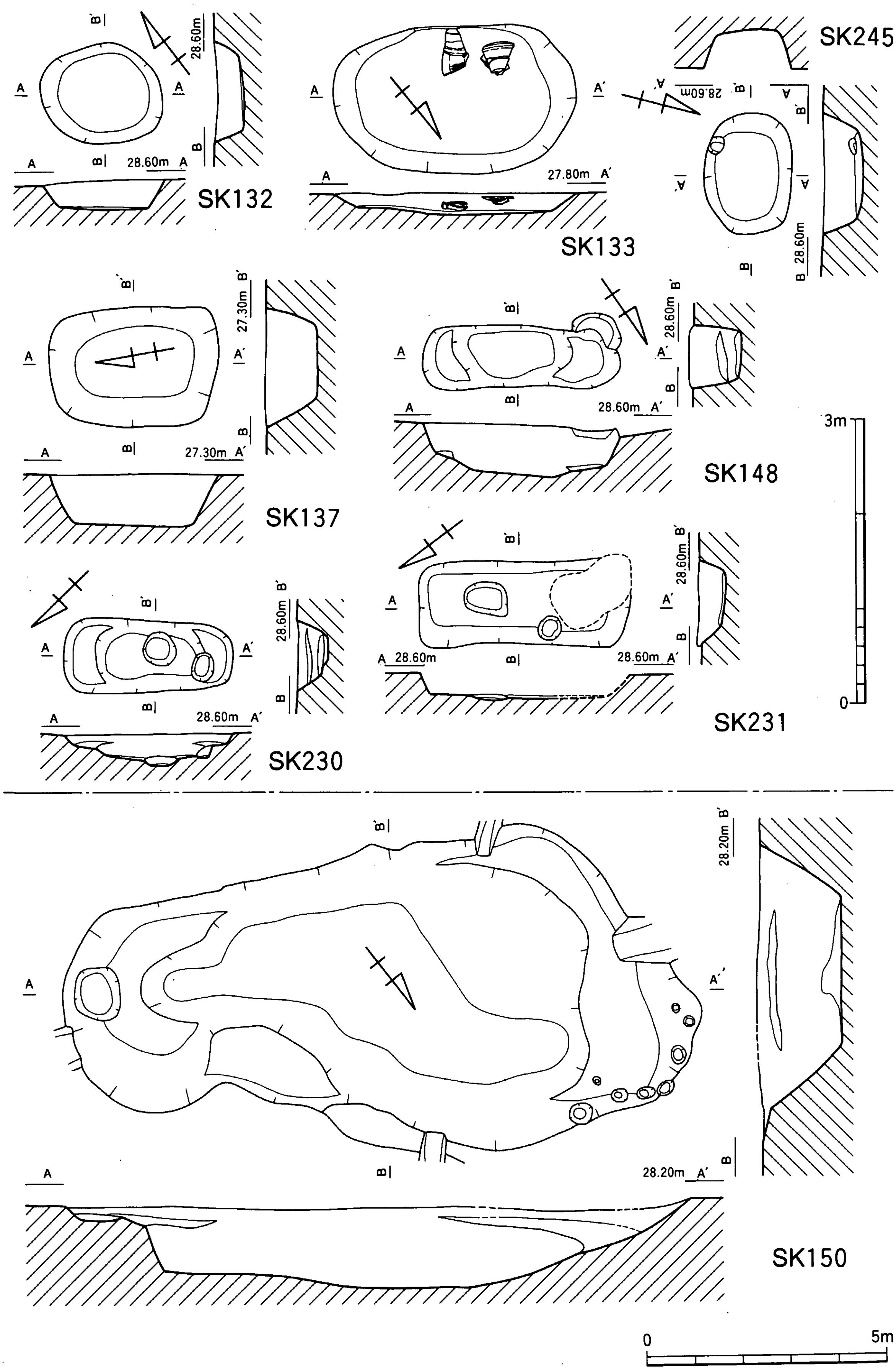


Fig.110　SK132,133,137,148,150,230,231,245 実測図(S1/60, 1 /80)

多い。胎土は微砂粒が含まれるものが多く、色調は灰色（N6/）～暗灰色（N3/）を呈する。ただし、559だけは黄灰色（2.5Y6/2）を呈し、生焼けである。

561は、壺蓋aである。復元口径13.6cm・器高2.4cmで、暗灰色（N3/）を呈する。胎土は微砂粒をわずかに含む程度で精良。

坏（562～565）　562・563は底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がる坏aである。562は口径12.7cm・底径8.5cm・器高3.9cmを測り、胎土には1～4mmの砂粒が多く含まれる。563は復元口径12.8cm・底径8.1cm・器高3.5cmを測る。灰色（N5/～4/）を呈し、胎土には0.5～2mm程度の砂粒が含まれている。

564・565は、屈曲部から2～4mmのところに低くゆがんだ高台を貼付する坏cである。564は復元口径11.6cm・高台径5.8cm・器高3.7cmを測り、青灰色（5B5/1）を呈する。565は復元口径11.6cm・復元高台径6.85cm・器高4.0cmを測り、オリーブ灰色（2.5GY5/1）を呈する。両者ともゆがみが大きく、また磨滅により調整が不明瞭である。

皿（566～568）　566が口径14.7cm・底径12.2cm・器高2.0cm、567が口径18.4cm・底径13.95cm・器高2.5cmを測る。両者ともに灰白色（5Y7/1）を呈し、焼きがあまく、生焼けである。胎土は微砂粒をわずかに含む程度で概ね精良。

568は、ゆがみが著しく、底部にやや丸みがみられる。口径16.8cm・底径13.0cm・器高2.5cmを測る。色調は、灰色（N4/）～暗赤灰色（5R4/1）で、胎土は精良である。

水滴（571）　破片であったので、復元して図示した。推定体部最大径7.0cm・復元高台径3.5cm・残存高2.7cmを測る。色調は外面が黒褐色（2.5Y3/1）、内面が灰色（N5/）を呈し、胎土は精良で極めて丁寧な造りをしている。器形は平瓶のようなものと推測できる。

鉄器

釘（551・552）　551は身の途中でL字状に折れ曲がった形状から、自在釘と推測される。先端部を欠失する。断面形はほぼ方形で、径0.6～0.7cmを測る。

SK132（Fig.110）　SD50の西方、調査区南西隅に位置し、単独で存在する。プランはほぼ円形で、径1.02～1.22m・深さ0.2m、床面はフラットである。床面には径15cmほどの浅いピットがみられるが、性格は不明である。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。

SK133（Fig.110・PL.14）　SD50の西方、調査区南西隅の段落ち付近に位置する。プランは楕円形で、長径2.5m・短径1.5m・深さ0.2m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明である。

SK133出土遺物（Fig.111・PL.38）

土師質土器

擂鉢（577）　片口の擂鉢の完形品である。器壁は厚く、にぶい感じを受ける。口径28.8cm・底径13.9cm・器高10.05cmを測る。全体的に磨滅しているが、底部にはナデ、体部外面にはハケメの後にナデ、口縁内面には横方向のハケメを施している。また、外面には指頭圧痕が残っている。内面の擂目は、7条一組で10ヶ所にある。浅黄色（2.5Y7/3）～黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、胎土には1mmほどの砂粒がわずかに含まれる。

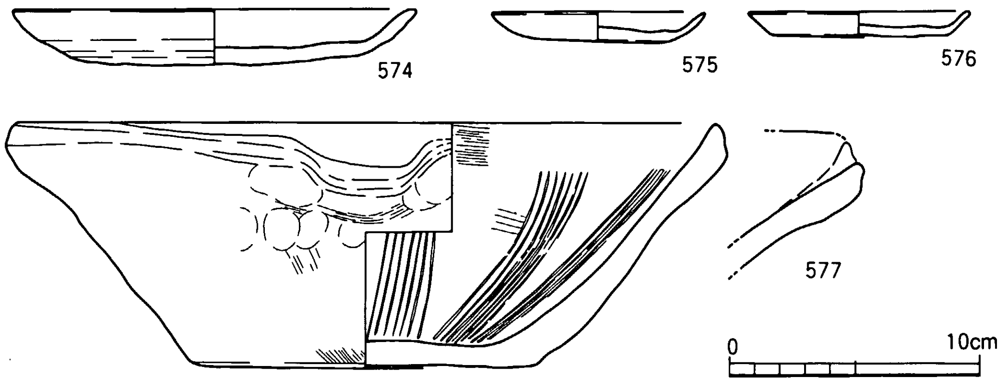


Fig.111　SK133,137,148出土遺物(S1/3)

SK137（Fig.110）　SD50の西方、調査区南西隅の段落ち付近に位置する。プランは隅丸長方形で、長径1.72m・短径1.22m・深さ0.5m、床面はフラットである。性格は不明。

SK137出土遺物（Fig.111・PL.38）

須恵器

皿（574）　574は、口径16.2cm・底径12.3cm・器高2.3cmを測る。全体的にややゆがんでおり、器表も磨滅が著しい。胎土は概ね精良で、焼きは良い。灰色（10Y6/1～5Y6/1）を呈する。

SK148（Fig.110・PL.14）　SD50の西側のSB42・43北側に位置し、SK230・231などの一群である。プランは隅丸長方形で、長径2.0m・短径0.64m・深さ0.5m、床面は中央に向かって低くなっている。性格は不明である。

SK148出土遺物（Fig.111・PL.38）

土師器

皿（575・576）　575は、口径8.6cm・器高1.2cm、黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。底部はヘラキリの後にナデ。576は、口径8.95cm・底径7.15cm・器高1.05cmの糸きり皿で、板状圧痕が残る。胎土には微砂粒・雲母・赤褐色粒をわずかに含み、黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。

SK150（Fig.110）　SB42・43の西方に位置し、単独で存在する。砂礫層まで切り込まれており、水はけはかなり悪い。今のところ、性格は不明である。プランは長大でゆがみをもった楕円形を呈し、長径8.6m・短径4.2m・深さ1.1m、床面は概ねフラットである。。

SK230（Fig.110）　SD50の西側のSB42・43北側に位置し、SA2を切っている。プランは隅丸長方形で、長径1.72m・短径0.7m・深さ0.4mである。床面には径30cmほどの浅いピットがある。性格は不明であるが形状がSK148に近似しており、関係が深いのかもしれない。

SK231（Fig.110）　SD50の西側のSB42・43北側、SK148と230の間に位置する。プランは隅丸長方形で、長径2.12m・短径0.82m・深さ0.3m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明。

SK245（Fig.110）　SB42・43の西方に位置し、単独で存在する。プランは楕円形で、長径1.2m・短径0.9m・深さ0.4m、床面はフラットである。性格は不明。

SK113（Fig.112・PL.14）　SD120の北側の空閑地に単独で所在している。プランはゆがんだ円形で、径3.45m・深さ1.25mを測る。床面は中央が窪んでいるが、概ねフラットで、壁は直立して立ち上がっている。暗茶褐色粘質土ベース＋黒色土＋黄褐色粘質土塊と泥炭土が含まれており、井戸の可能性も考えられる。ただし、確証が得られていないため、ここでは一応、土坑として扱った。

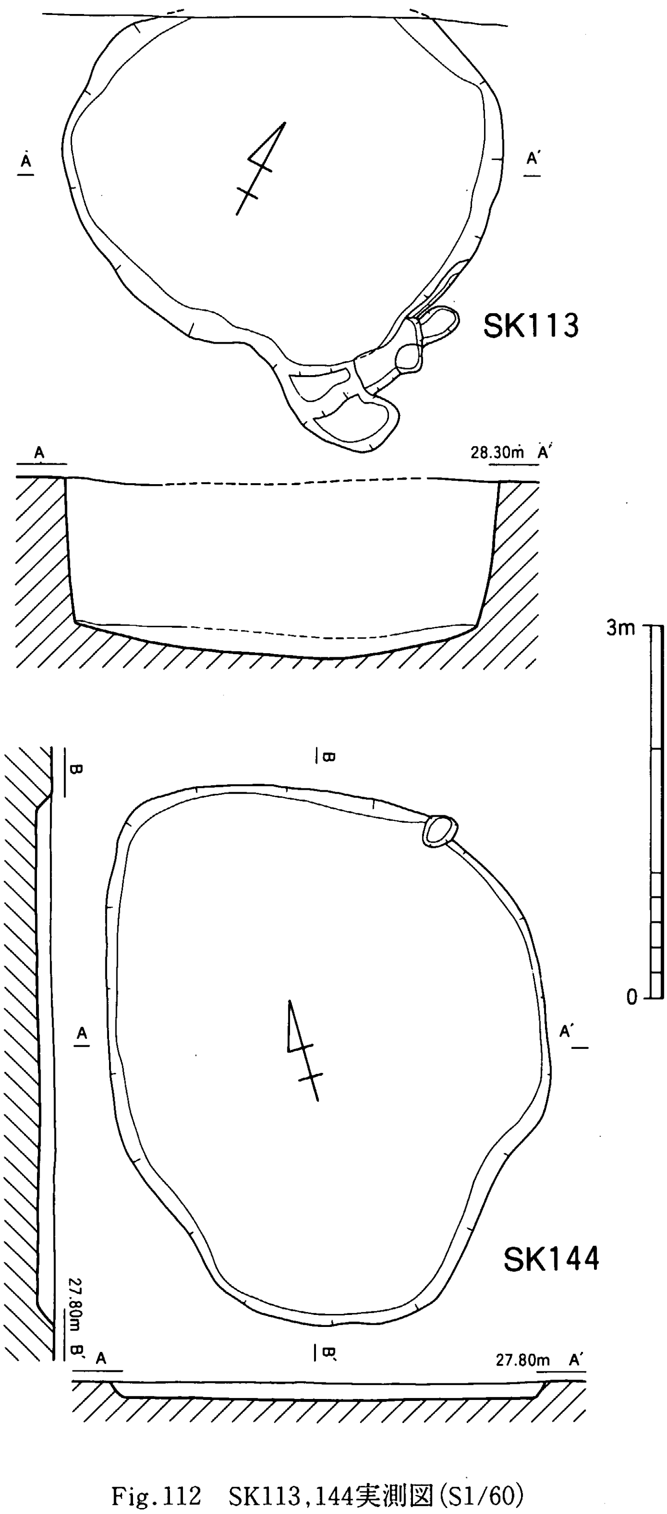


Fig.112　SK113,144実測図（S1/60）

SK113出土遺物（Fig.113・PL.38）

弥生土器

鉢（583）　破片資料である。復元口径13.0cm・底径6.1cm・器高8.2cmを測る。明黄褐色（10YR6/6）を呈し、胎土には0.5～2㎜の砂粒が含まれる。調整は、底部と内面・口縁端部にはナデ、外面はハケメの後にナデを施す。内外面に指頭圧痕が残っており、底部と体部の屈曲部には黒斑がみられる。

土師器

坏（578～582）　すべて糸きり。底部と体部の屈曲部はシャープで、体部は直線的に立ち上がる。屈曲部脇に段を有するもの（581・582）とそうでないもの（578～580）に分けられる。

581は、底部がやや上げ底ぎみになっており、復元口径13.0cm・底径9.05cm・器高3.1cmで、浅黄橙色（7.5YR8/6）～にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。胎土には、微砂粒・金雲母・角閃石・赤褐色粒が含まれている。調整はナデを施しているが、磨滅が著しい。582もほぼ同等のものである。

578は体部中位に段があるもので、口径13.15cm・底径7.9cm・器高

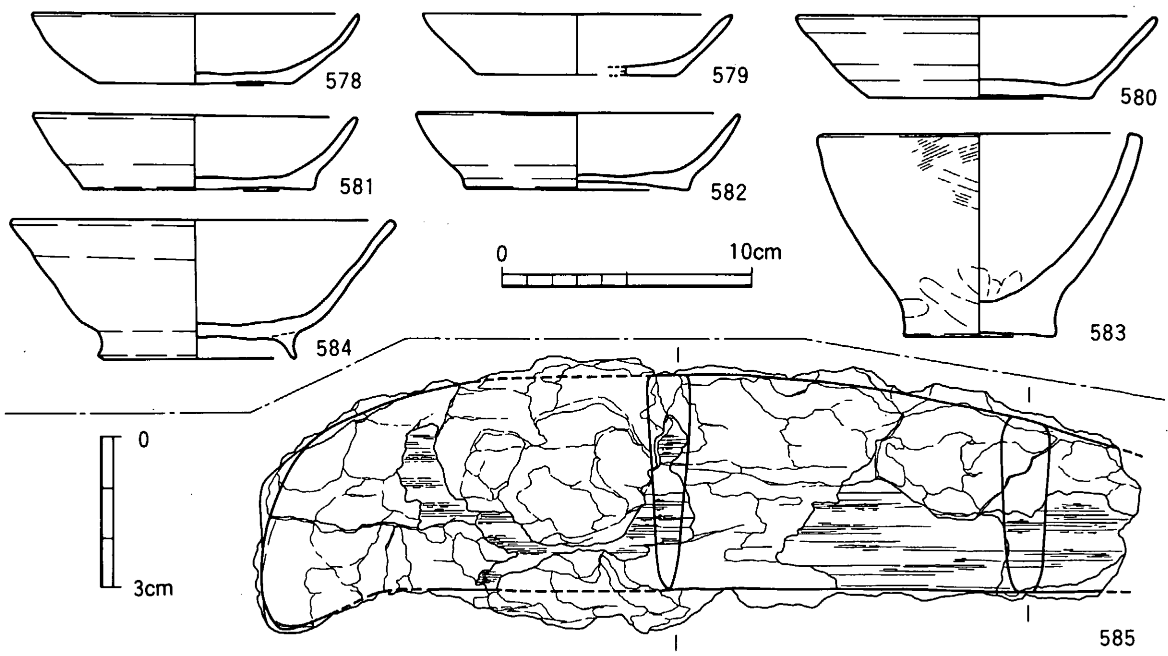


Fig.113　SK113,144出土遺物(S1/3,2/3)

2.9cmを測る。全体的にいびつで、磨滅が著しい。胎土には砂粒・金雲母が含まれており、焼成はあまい。浅黄橙色(7.5YR8/6)～にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

579は、復元口径13.0cm・復元底径8.6cm・器高2.5cm、板状圧痕が残る。体部には黒斑がみられ、焼成はあまい。灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。580は、復元口径14.45cm・底径9.0cm・器高3.35cm、にぶい黄橙色（10YR6/4）～にぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。体部と内面はナデによる最終調整を行う。

SK144（Fig.112）

SB44の西方に位置し、単独で存在する。プランは不整な円形で、長径1.2m・短径0.9m・深さ0.2m、床面はフラットである。かなり削平を受けていると推測され、遺りが悪い。性格は不明であるが、周辺の遺構の状況から推測すると中世以降の所産である可能性が高く、遺物は混入されているものと考えられる。

SK144出土遺物（Fig.113・PL.38,42）

土師器

椀（584）　直線的な体部を有し、底部と体部の屈曲部分にやや長めの高台が貼付される。体部下半には煤が付着している。復元口径15.4cm・高台径8.0cm・器高5.7cmで、胎土には細砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれる。焼成はあまく、色調は明褐色（5YR5/8）を呈する。調整はナデによる最終調整を行っており、ケズリやヘラミガキは伴わない。

鉄器

鎌（585）　先端部がやや突出ぎみで、背に丸みがあることから、手鎌と判断した。基部は欠失している。残存長15.4cm・重ね幅0.8cm・身幅（最大）4.3cmを測る。

No.	長径	短径	深さ
1	185	161	122
2	240	180	9
3	382	170	13
7	122	71	24
8	160	92	24
10	325	125	36
11	220	203	53
12	238	105	54
19	140	143	26
22	143	120	33
23	207	30＋α	10
25	218	117	48
27	323	255	115
29	226	200	29
30	159＋α	60＋α	23
31	123＋α	118	28
33	211	68	19
38	277＋α	125＋α	30
39	210	39	47
43	130	118	16
45	308	242	76
52	297	160	28
57	112	93	35
58	236	168	56
63	365	110＋α	25
64	139	80	10
69	260	233	10
77	164	136＋α	68
78	112	112	19
81	142	92＋α	22
83	68＋α	145	10
84	260＋α	66	17
85	278	270	115
86	123＋α	245	31
88	517	221	60
89	325	308	26
90	253	260	47
91	260	170	10
92	145＋α	215＋α	59
96	194	51	14
97	120＋α	135＋α	11
98	132	160＋α	14
100	93	90	106
106	358	200＋α	15
107	140	115	22
110	70＋α	80	23
111	256	155＋α	34
112	180	107＋α	13
113	346	288＋α	140
114	245	243	116
119	225	95＋α	19
121	160	166	119
122	152	91	5
128	185	130	12
129	130＋α	120＋α	32
130	151	84	29
131	140	70	13
134	170	128	31
135	123＋α	65＋α	16
136	193	90	15
138	158	89	40
142	272	161	29
144	424	345	13
145	196	185	58
146	120＋α	134	31
147	198	84＋α	19
149	132	111	30
155	302	131	36
156	263	210＋α	4
157	335	243	36
159	112＋α	125＋α	14
160	225	192	37
161	156	138	20
162	196	120	45
163	288	160	18
164	225	97	26
168	178	93＋α	9
169	225	267	5
170	191	90＋α	74
171	208	96＋α	33
172	303＋α	270	5
173	337	161	16
174	215	78	33
175	285＋α	100	16
176	115＋α	84	8
177	202	85＋α	7
178	140	82＋α	22
179	197＋α	217	113
180	263	161	32
181	277	128	8
182	562	128	88
185	204	158	4
187	178	160	21
188	495＋α	388	33
191	132＋α	75＋α	4
192	183＋α	80	6
193	160	84	5
194	180	109	5
195	183＋α	167	15
196	142＋α	87	8
197	166	83	8
198	145	113	6
199	190＋α	162	10
200	165	130＋α	17
202	138＋α	103	11
203	165	75＋α	10
204	196	150＋α	19
206	196	96＋α	12
207	170	159	23
208	84＋α	120	32
210	130	115	71
211	452	116＋α	17
212	220	185	17
213	203	77＋α	7
214	64＋α	105	4
216	180	136	25
218	245＋α	134	8
219	418	176	40
220	127＋α	140	12
222	255	205	18
223	143	108	67
228	189	71	6
229	168	89	4
232	131＋α	78	18
233	139	75＋α	15
234	177	92＋α	34
235	132	142	10
236	167	119	9
237	330	210	5
238	165＋α	135	19
239	266	263	18
240	402	412	29
241	178＋α	56＋α	23
242	157	98	8
243	100＋α	133	10
244	120＋α	90	24

単位：cm

Tab.4　その他の土坑計測表

8 墓（ST）（Fig.114～120・PL.15）

ST 1 （Fig.115・PL.15）　Bブロックの官道沿いに単独で位置している。主軸はN－37°－Eで、頭位はほぼ北向きであると考えられる。プランは隅丸長方形を呈し、長径1.32m・短径0.67m・深さ0.26m、床面はフラットである。遺物はすべて床面直上からの出土で、埋葬時の副葬品と判断できる。釘は4点出土しているが、いずれも細片であったので図示はしなかった。

また、ST1は官道の至近距離に位置しており、この時期にはすでに廃道になっていたことを示している。

ST 1 出土遺物（Fig.114・PL.38）

瓦器

皿（586～588）　やや丸みをもち口径9.7～10.15㎝・器高1.45～2.0㎝の小皿aで、3点とも完形である。胎土は砂粒などの不純物をほとんど含んでおらず精良。底部がヘラキリの後にナデ、その他にはナデを施し、板状圧痕が残っている。色調は、外面が灰色（5Y6/1）、内面が黒色（N2）～灰色（5Y6/1）を呈する。

白磁

椀（589）　太宰府のⅣ類－1・aに当たるものである。玉縁口縁を呈し、見込みに沈線が1条巡る。胎土は灰白色（10Y8/1）で1㎜程の砂粒を含んでいる。釉薬ののりは概ね良いが所々に貫入がみられ、灰白色（10Y7/1）を呈する。体部下半は露胎となす。高台は極低く逆台形状に削り出しているが、ケズリの痕跡が残っており、造りは非常に雑である。口径16.25㎝・高台径7.5㎝・器高6.5㎝を測る。

ST 2 （Fig.115・PL.15）　調査区の東端に単独で位置している。主軸はN－46°－Eで、頭位はほぼ北向きであると考えられる。プランは隅丸長方形を呈し、長径2.07m・短径0.74m・深さ0.53m、床面はフラットである。この墓からは釘が24点出土しており、長さ1.8m・幅0.5mほどの木棺を用いていたものと推測される。

ST 2 出土遺物（Fig.114・116・PL.38,43）

土師器

坏（590）　やや丸みをもった体部を有し、底部はヘラキリの後にナデ、その他にはナデが施されている。口径12.9㎝・底径8.0㎝・器高3.4㎝を測り、橙色（2.5YR6/6）～にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には微砂粒および金雲母が含まれている。床面直上からの出土ではないが、埋葬時の副葬品と考えられる。

鉄器

釘（591～614）　全体的に木質の残存状況は良い。棺材の組み合わせ方は、平行しているものが602・603・609、交差しているものが598・607である。棺材の推定厚は

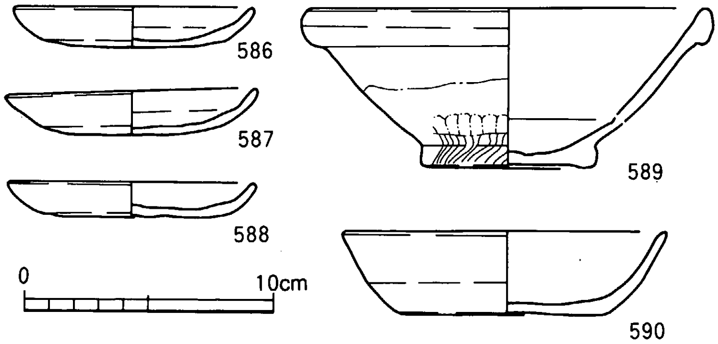


Fig.114　ST1,2出土遺物（S1/3）

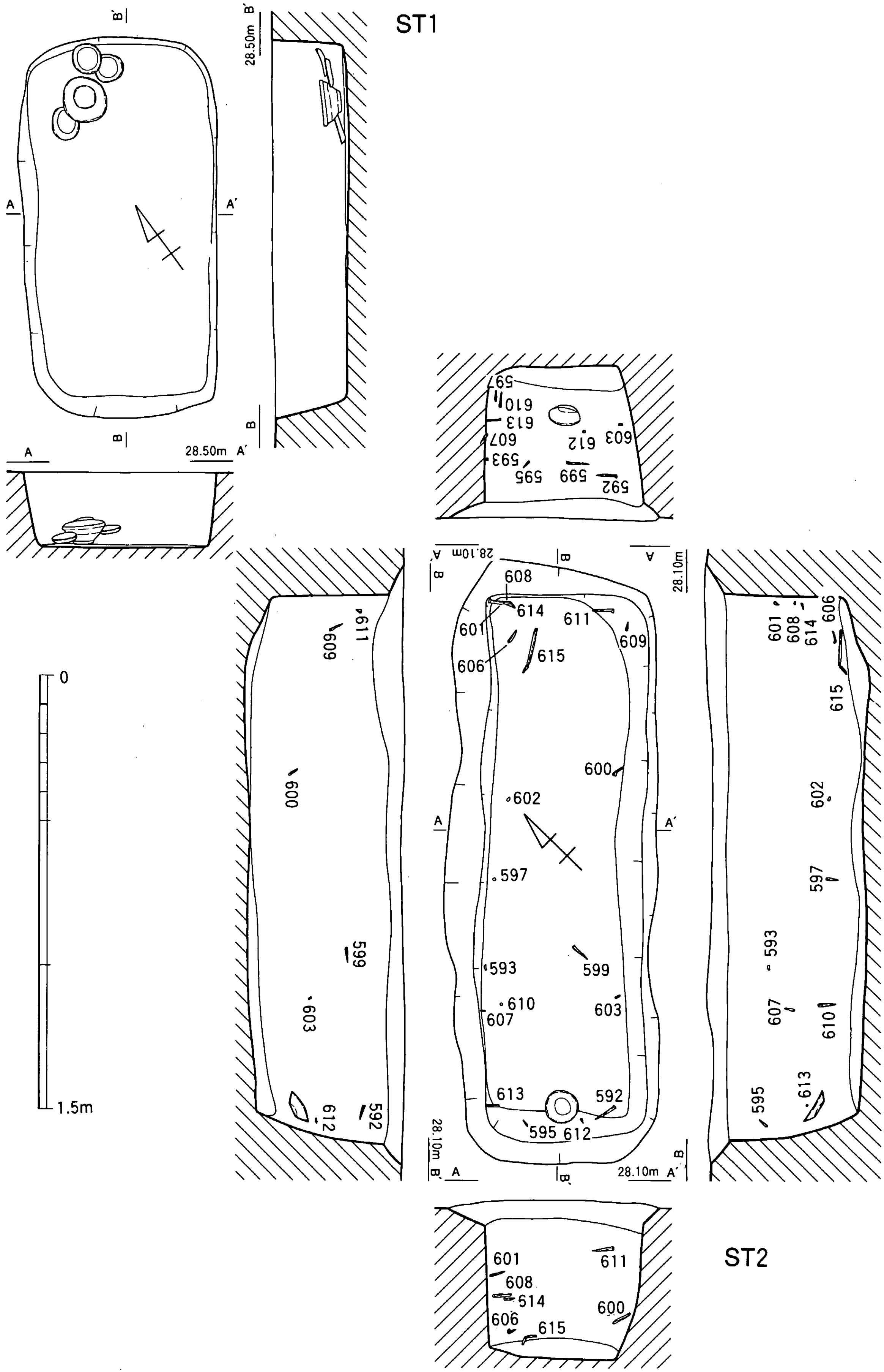


Fig.115　ST1,2実測図(S1/20)

No	残存長	径(幅)	状態	木質残存厚		
				①+②	木質①	木質②
591	3.5	0.3	欠	2.5+α	?	?
592	6.3	0.3	完	−	−	−
593	3.2	0.4~0.5	欠	0.6+α	0.6+α	−
594	4.1	0.3	欠	−	−	−
595	3.5	0.3	欠	−	−	−
596	2.8	0.3	欠	2.1+α	2.1+α	−
597	3.5	0.3~0.6	欠	2.0+α	2.0+α	−
598	4.9	0.3	欠	4.3+α	1.6	2.7+α
599	6.4	0.35	欠	−	−	−
600	5.3	0.4	完	1.6+α	1.6+α	−
601	6.4	0.35	欠	1.7	1.7	−
602	5.0	0.3	欠	5.0+α	2.9	2.1+α
603	4.4	0.3	欠	3.9+α	2.3	1.6+α
604	5.0	0.2	欠	0.8+α	0.8+α	−
605	4.2	0.3	欠	3.2	?	?
606	5.6	0.4	欠	2.6	−	2.6
607	5.3	0.4	完	4.5 +α	3.2	1.3+α
608	5.8	0.4	完	2.0	2.0	−
609	6.2	0.3	完	6.0	3.0	3.0
610	6.3	0.3~0.5	完	2.4	2.4	−
611	7.7	?	完	−	−	−
612	7.3	0.5	欠	2.25	2.25	−
613	6.9	0.3	完	3.0	−	−
614	6.6	0.4	欠	2.5	2.5	−

Tab.5　ST 2から出土した釘の計測表

3 cm前後と考えられる。また、それぞれの寸法や木質の状況などはTab. 5に示したとおりである。

不明鉄器（615）　細長い棒状を呈し、先端部のみが先細りとなる。頭部は欠失しており、残存長15.2cm・径1.1cmを測る。

ST 3（Fig.117・PL.15）　調査区の南西端の段落ち付近に位置し、単独で存在する。その立地条件から、かなり削平を受けているものと考えられ、長径1.96m・短径0.7m・深さ0.15～0.25mである。床面は落ちの方に向かって傾斜しており、その比高差は約0.15mである。主軸はN－28°－Wで、頭位はほぼ北向きであると考えられる。プランは隅丸長方形を呈する。釘が6点出土しているが、いずれも埋土上位のものであり、位置が不明確である。

ST 3 出土遺物（Fig.119・PL.38,39,44）

瓦器

皿（623・624）　2点とも口径9.55～9.6cm・器高1.9～1.95cmの範囲でほぼ同等のものである。色調は灰白色（5Y8/1）～黒色（N2/）を呈する。胎土には微砂粒が含まれており、焼きはややあまい。また遺存状況が悪いため、調整は不明確である。

白磁

椀（625・626）　625・626ともに、口縁部がくの字状に短く外反し端部が平坦で、高い高台部を削り出すもので、太宰府のⅤ類－4・aに当たものである。見込みの周縁には1条の沈線が巡っている。釉薬はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、かなり濁れた状況である。また所々に貫入がみられる。胎土は概ね精良で、灰白色（10YR8/2）である。また高台内は削りが粗くやや鯱状になっており、削りの具合もやや粗い。法量は口径17.3～17.45cm・高台径6.6～6.95cm・器高7.15～7.3cmでほぼ同等であるが、口縁付近にはゆがみがみられる。

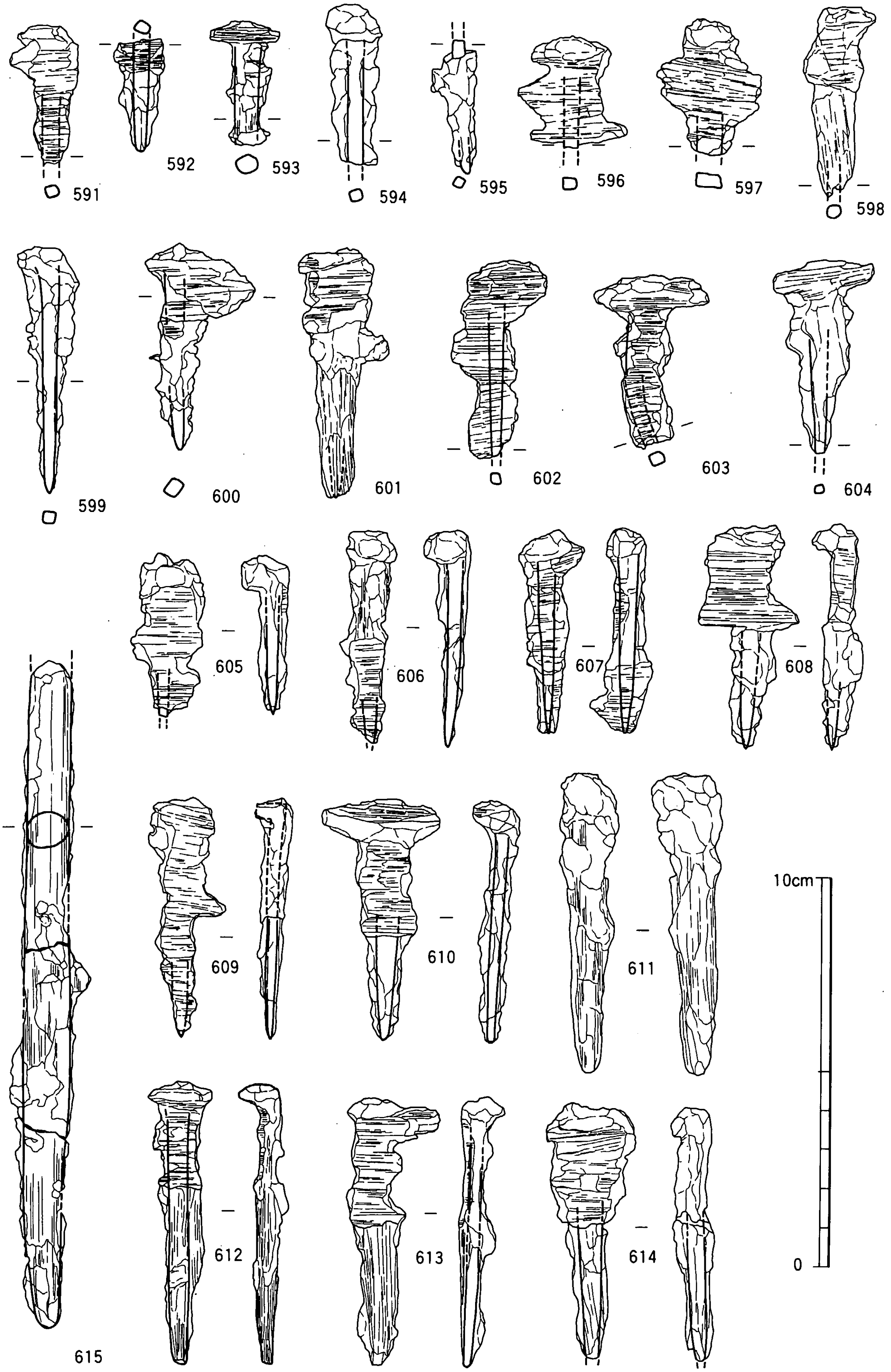


Fig.116　ST2出土遺物(S2/3)

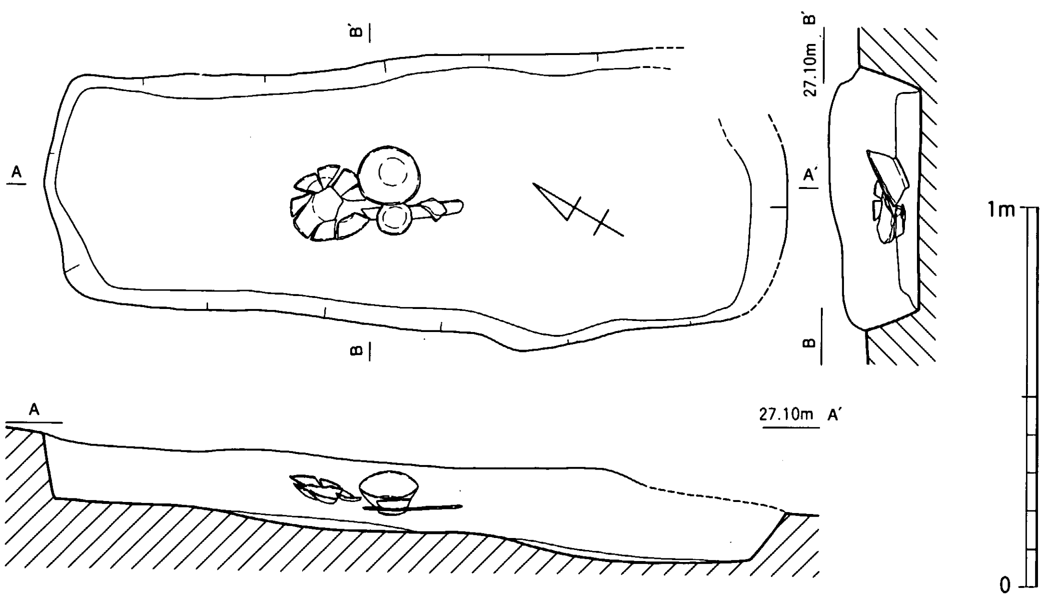


Fig.117　ST3実測図(S1/20)

鉄器

小刀（616）　ほぼ完形に近いが、鋒と基部を欠失している。残存長26.3cm（刀身部21.8cm・茎部4.5cm）・身幅3.3cm・重ね幅0.9cmを測り、平造りのものである。錆がひどく、遺存状況は悪い。

釘（617～622）　いずれも埋土上位からの出土である。埋土上層はかなり撹乱を受けていたため、出土位置ははっきりとしない。寸法や木質の状況などはTab. 6に示したとおりである。

No	残存長	径(幅)	状態	木質残存厚		
				①+②	木質①	木質②
617	5.9	0.4	欠	1.6+α	1.6+α	−
618	4.8	0.4	完	2.6+α	0.3+α	2.3
619	4.1	0.5~0.7	欠	−	−	−
620	4.1	0.3~0.5	欠	3.0+α	?	?
621	5.7	0.4	欠	1.5+α	1.5+α	−
622	6.0	0.4	欠	−	−	−

Tab.6　ST 3から出土した釘の計測表

滑石製石鍋（627）　口縁部に縦長の瘤状の把手がつくタイプのもので、孔径0.75～0.9cmの蔓取手孔が穿たれている。ケズリは比較的丁寧で、内面が横方向、外面が縦方向である。破片であったので復元して図示しており、復元口径26.2cm・残存高8.2cmを測る。この資料は埋土上位からの出土で、埋葬時に副葬されたものとは考えにくい。

ST 4～6（Fig.120）　ST 4～6は遺物が少なくかなりひどい削平を受けており、いずれも不明確な点が多いが、その寸法・形状からとりあえず墓の範疇に含めることとした。ST 4は長径1.89m・短径0.56m・深さ0.1mの隅丸長方形、ST 5は長径1.25m・短径0.6m・深さ0.15mの隅丸長方形（北側にテラスをもつ）、ST 6は長径1.97m・短径0.9m・深さ0.1～0.15mの長楕円形をそれぞれ呈する。埋土はST 4・5が明茶褐色土ベースに黒色粘質土塊と砂が多く混じるものである。ST 6は茶褐色土のなかに焼土粒が多く含まれていた。

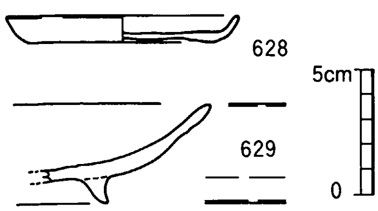


Fig.118　ST5出土遺物(S1/3)

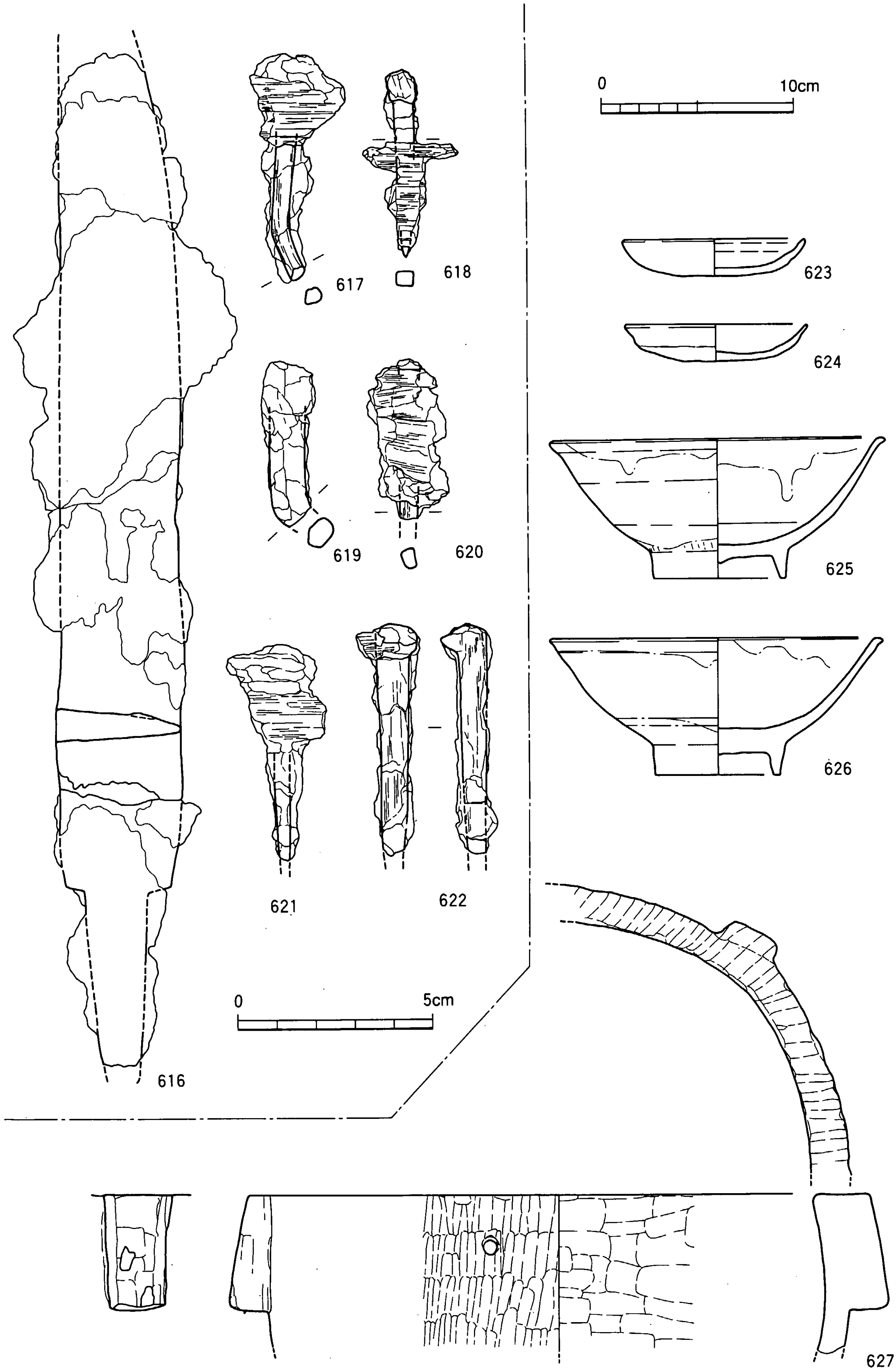


Fig.119　ST3出土遺物(S1/3,2/3)

ST 5 出土遺物（Fig.118・PL.39）

土師器

坏（629）　小片で磨滅が著しい。器高4cmで、逆三角形の高台が貼付される。褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には微砂粒と雲母がわずかに含まれている。

皿（628）　糸きりの小皿ａで、口径9.4cm・底径7.5cm・器高1.1cmを測る。板状圧痕がみられる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し、胎土には微砂粒と赤褐色粒が含まれている。

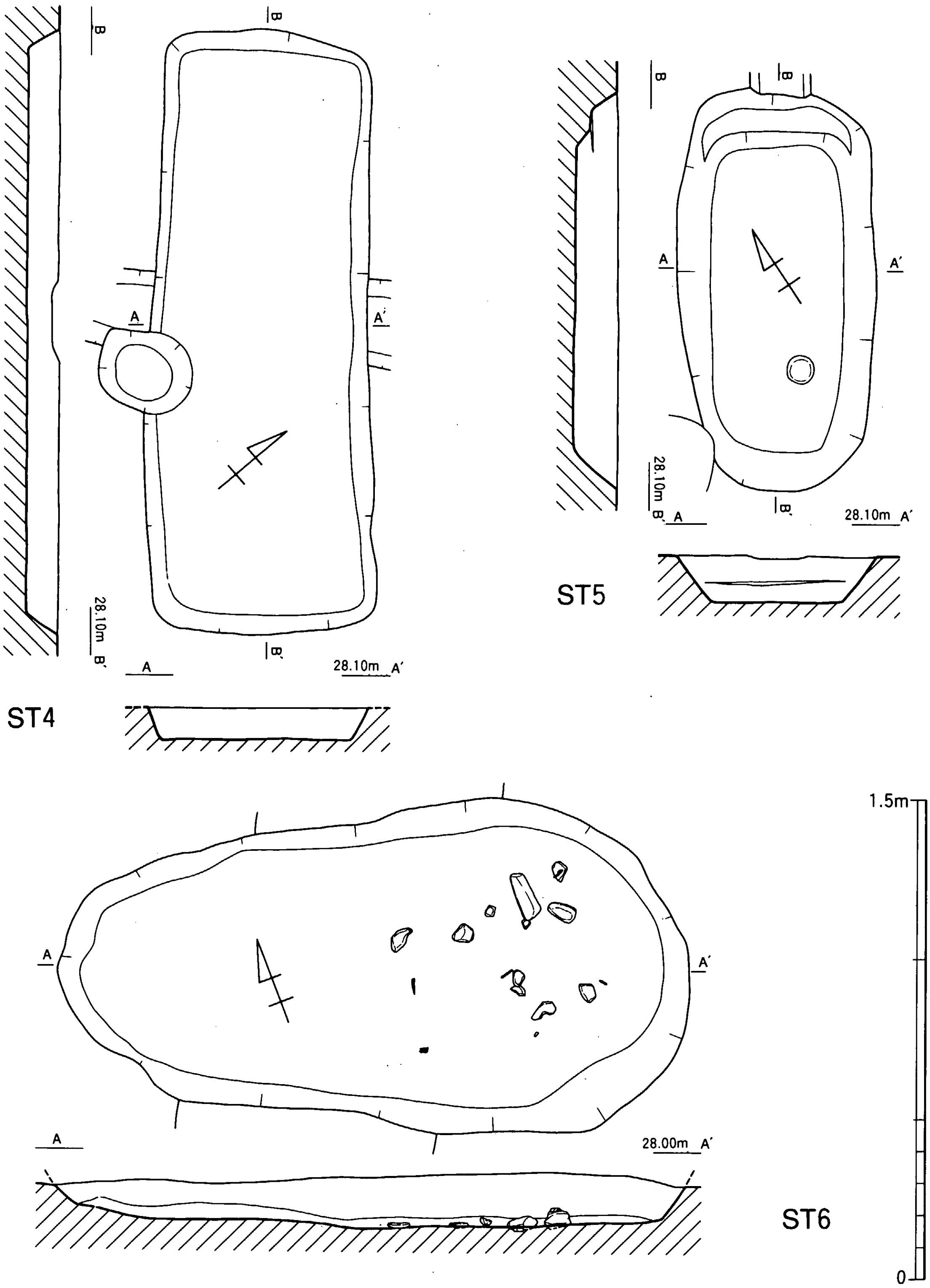


Fig.120　ST4～6実測図(S1/20)

9 性格不明遺構（SX）（Fig.121～126・PL.16）

橋梁状遺構（SX 1・2）

SX 1（Fig.121） 二段掘りを呈するSD 1の段付近に径0.5～0.9mのピットを配している。この付近は溝の肩が広くなっており官道の道路部分に硬化痕跡が確認されていることから、通行頻度が高かったことを示している。構造については不明確であるが、比較的簡便な橋が架けられていたものと推測できる。

SX 2（Fig.122） SX 1に対応するようにSD 1に設置されている。1×4間にピットが配置されているが、ややゆがみをもっている。SX 1と同じく構造については不明確であるが、その相対的な位置関係から同じような性格の構造物であったものと考えられる。ここの場合はSX 2を挟んで建物ブロックと官道の両側に波板状圧痕が確認されており、通行頻度が高かったことが推定される。

小形竪穴遺構（SX 3～11）

一辺2m弱の大きさで方形のプランを有し、4本ないしは6本の柱穴をもつものと無柱穴のものとがみられる。性格が不明であるために小形竪穴遺構として分類した。特徴的なのは、官道北側のA・Bブロックの官道に沿ったエリアでしか確認されていないことである。時期的には概ね8世紀後半代の遺物を含んでおり、官道や掘立柱建物群と同時併存していたものと推測される。

SX 3（Fig.123） Aブロックの総柱建物エリアに位置し、SB 7の前方に配置されている。掘り方のプランはややゆがんだ方形を呈し、辺2.2m×2.4m・深さ0.1mを測る（建床面積5.26m²）。床面は凹凸があり、一部窪んだように低くなっている箇所もある。遺物は確認されていない。

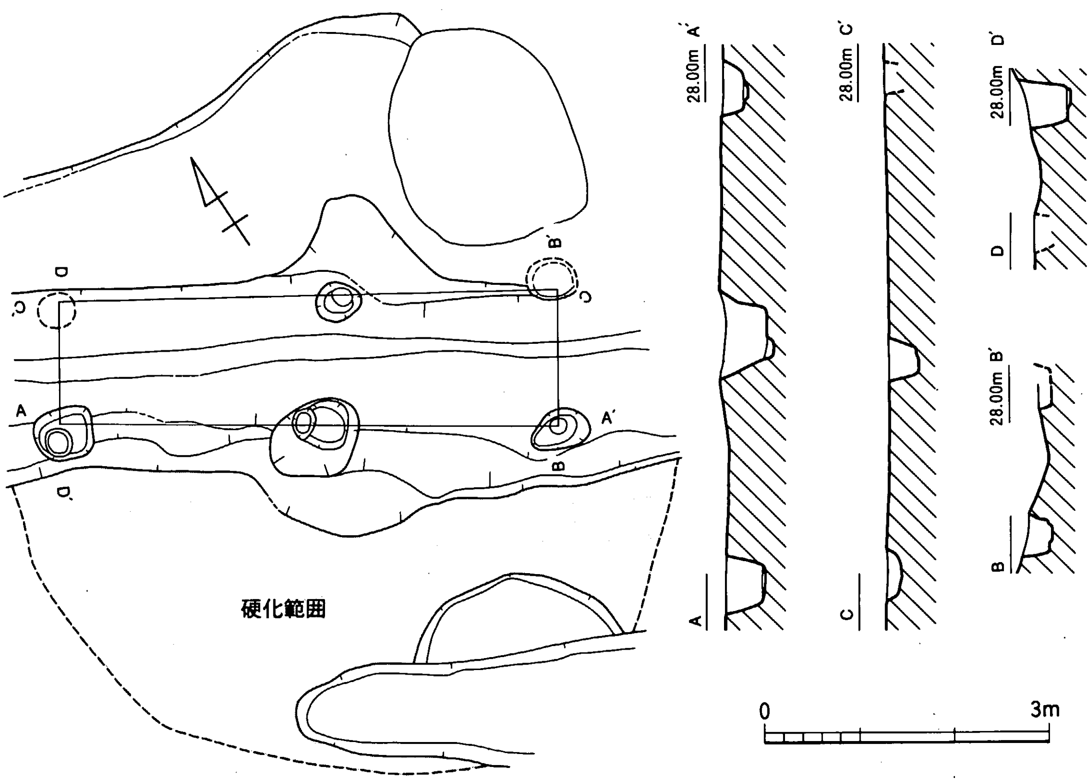


Fig.121 SX1実測図(S1/80)

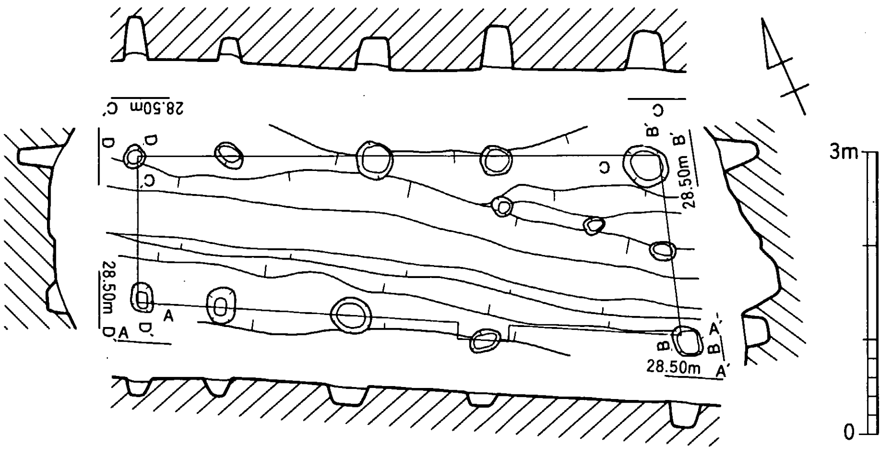


Fig.122　SX2実測図(S1/80)

SX 4（Fig.123・PL.16）　Aブロックの総柱建物エリアに位置し、SB 8 の前方に配置されている。SX 5 に切られている。掘り方は一辺2.3m四方のほぼ方形を呈し、深さは0.25～0.3mを測る（建床面積5.44㎡)。主柱穴は6本で、径0.4m・深さ0.5～0.6mである。柱径は約15cmほどと推測される。

SX 4 出土遺物（Fig.124・PL.39)

土師器

坏（630）　口径14.5cm・底径8.7cm・器高3.2cmを測る坏dである。床面直上から出土した。口唇部付近に油煙のような煤状の黒色の付着物がみられることから、灯明器である可能性が考えられる。内面は器表がはじけた状態になっており、剥落が著しい。底部から体部の外面は回転ヘラミガキによる最終調整が行われている。にぶい赤褐色（5YR5/4）～浅黄橙色（7.5YR8/3）を呈し、胎土には0.3～1㎜の砂粒・赤褐色粒が含まれている。

SX 5（Fig.126・PL.16）　Aブロックの総柱建物エリアに位置し、SB 8 の前方に配置されている。SX 4 を切っている。掘り方は一辺2.0m四方のほぼ方形を呈し、深さは0.35mを測る（建床面積4.20㎡)。SX 4 よりやや小形である。主柱穴は8本？で、径0.2m弱・深さ0.15～0.25mである。また床面の中央付近には、1.5m×1.0m・深さ0.1mほどの大きさでやや窪んだ状態である。

SX 5 出土遺物（Fig.124・PL.39,44)

土師器

甕（631）　胴部に張りがなく、口縁部の反りも弱いものと推測できる。残存高9.35cmである。調整は外面にハケメ、内面にヘラケズリが施されているが、磨滅により不明瞭。灰褐色（7.5YR5/2）～橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には1㎜以下の砂粒・雲母が含まれる。

須恵器

蓋（633）　3/4程度の残存。ゆがんだ低いボタン状の撮みを有し、かえりも痕跡のみを留める。平坦な形状で、撮み径1.85cm・残存高1.75cmを測る。胎土には0.5～1.5㎜ほどの砂粒を含み、灰色（N5/）を呈する。

坏（632）　復元口径14.2cm・底径8.6cm・器高4.0cmを測る。調整はナデによる仕上げが行われ、胎土には1～2㎜ほどの砂粒が含まれている。色調は灰色（N4/）を呈する。

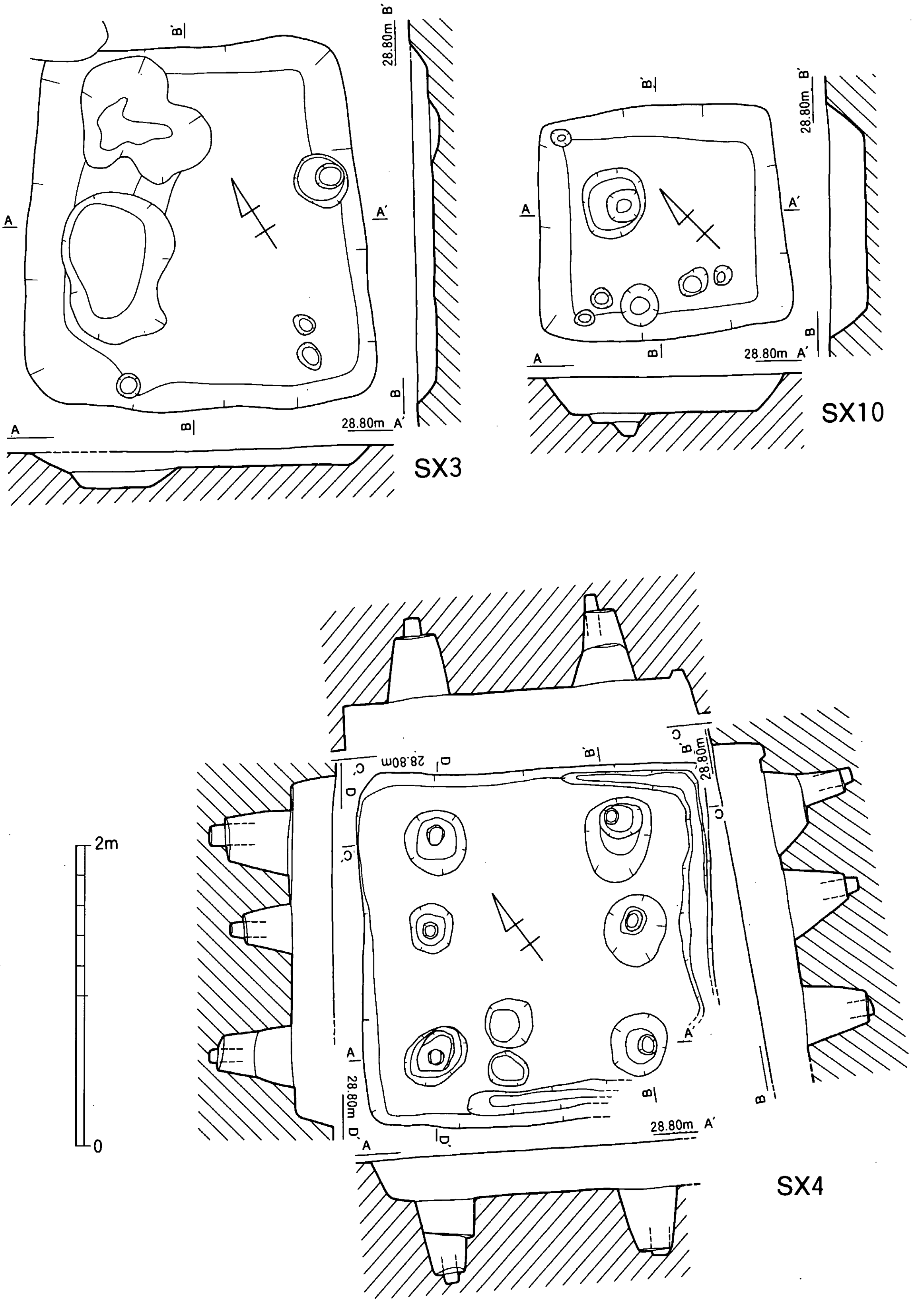


Fig.123　SX3,4,10実測図(S1/40)

鉢（634） 体部に丸みをもち口縁部を細く外反させる小鉢である。復元口径14.8㎝・残存高9.8㎝を測り、橙色（7.5YR7/6）～にぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリ外面には煤が付着。胎土には1～2㎜ほどの砂粒・雲母細片・赤褐色粒・角閃石を含む。

鉄器

釘（635） 先端部を欠失している。残存長5.8㎝・径0.3㎝を測る。断面形は方形である。

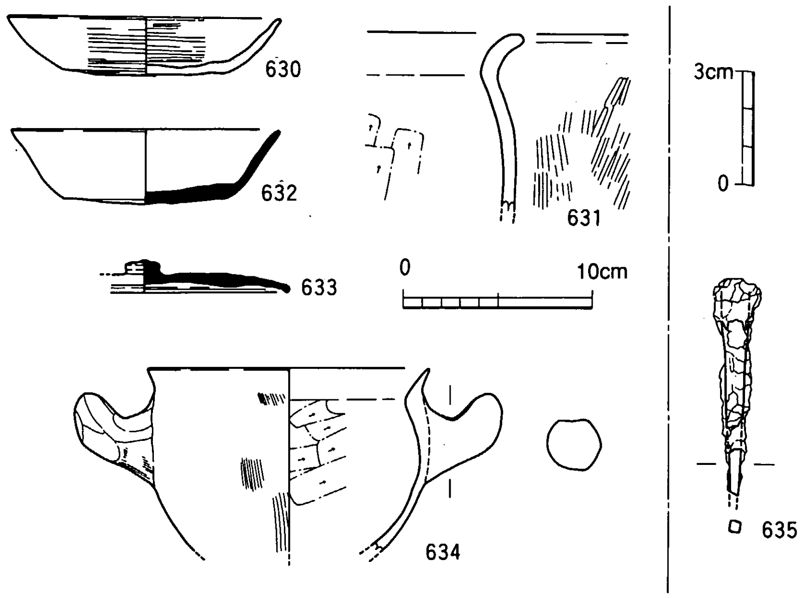


Fig.124　SX4,5出土遺物(S1/3,2/3)

SX６～９（Fig.126・PL.16） Aブロックとブロックの境界付近に位置している。SX６～９は一群のものと推測される。形状はすべて方形ないしは長方形を呈し、SX６が1.25m×1.6m（建床面積1.94㎡)、SX７が1.4m×1.9m（建床面積2.70㎡)、SX８が1.5m×1.65m（建床面積2.64㎡)、SX９が1.3m×1.4m(建床面積1.82㎡)である。深さはすべて0.1m程度で、非常に浅い。主柱穴はSX７・８が4本柱で、その他は柱穴を有さないものである。

SX10（Fig.123・PL.16） BブロックのSB12東側に位置している。プランは方形で、一辺1.6m四方、深さ0.25mを測る。建床面積は2.40㎡である。遺物は確認されていない。

SX11（Fig.125・PL.16） BブロックのSB13・14とSB15の間の空閑地に位置している。プランは方形で、1.5m×1.6m・深さ0.25mを測る。
建床面積は2.42㎡である。

柵列群（SX12）

SX12

多数のピットにより一定のブロックを形成する柵列である。今のところ、ピットどうしの配列やその構造については不明である。位置関係については第Ⅴ章－3に官道や掘立柱建物群と含めて説明を行った。遺物は細片がわずかに出土しているのみである。

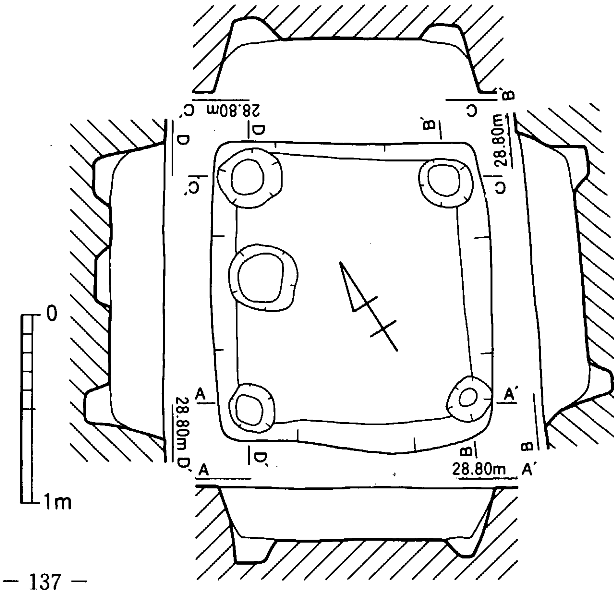


Fig.125　SX11実測図(S1/40)

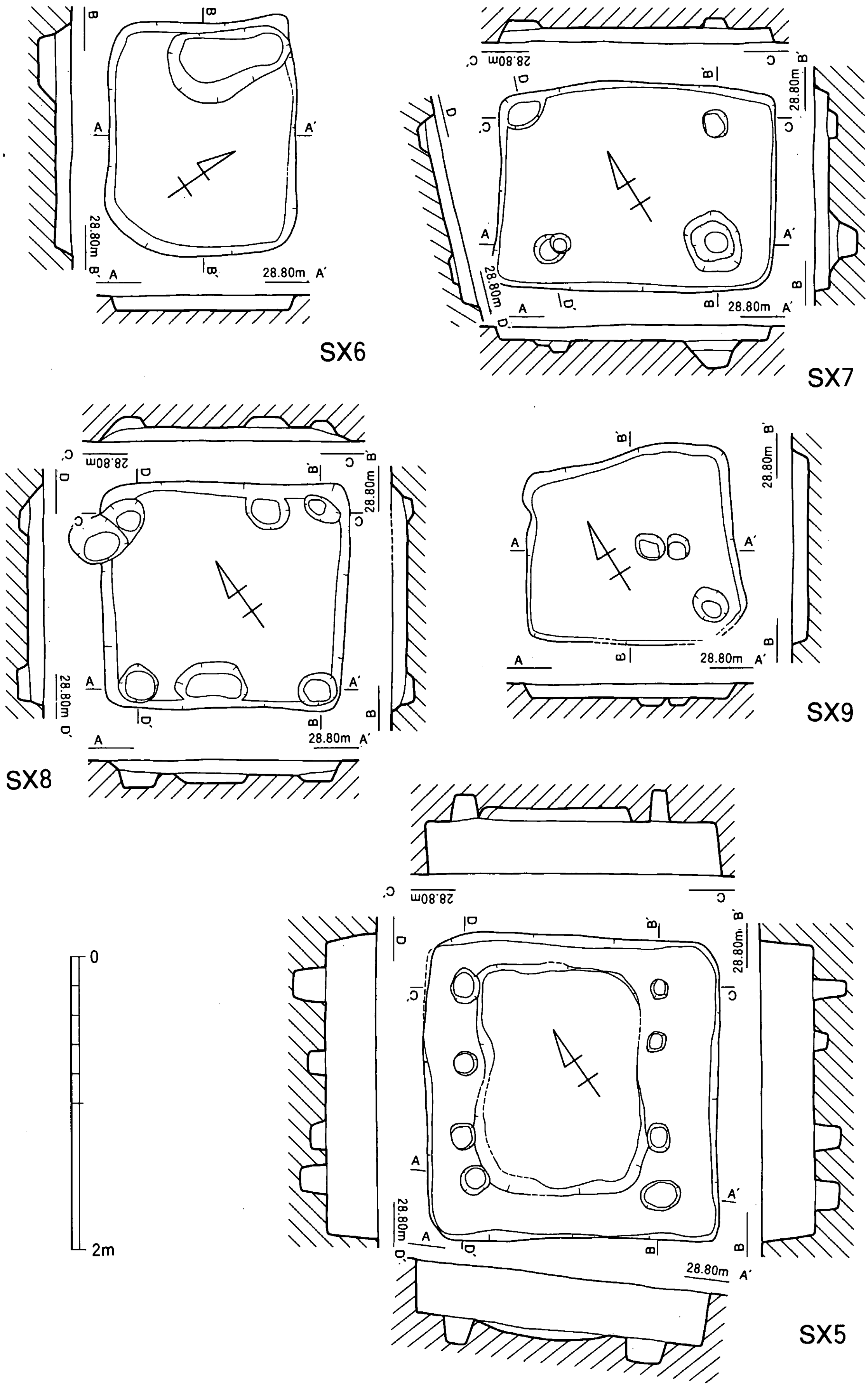


Fig.126　SX5～9実測図(S1/40)

10ピット（Pit）（Fig.127～130・PL.39, 40, 41, 44, 48）

636・637はPit552からの出土である。637は土師器の高坏bの脚部で、坏部は欠失する。裾部径13.6cm・残存高15.45cmを測る。橙色（5YR7/8）を呈し、胎土には0.5mm以下の砂粒および雲母を含む。636は、直線的に延びる体部を有し、短い高台が屈曲部付近に貼付される須恵器の坏cである。口径13.2cm・高台径7.4cm・器高4.15cmを測り、全体的にゆがみが大きい。灰色（N6）を呈し、胎土には0.5mmほどの砂粒が多く含まれている。

638～641は、Pit593からの出土である。638は土師器の甕である。胴部にはやや張りがなく、口縁部の屈曲も弱い。胴部下半を欠失しており、口径27.6cm・胴部最大径23.9cm・残存高19.0cmである。橙色（7.5YR6/8）を呈し、胎土には1～3mmほどの砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれる。調整は胴部外面が縦方向のハケメの後にナデ、内面が縦方向のヘラケズリ、口縁部にはナデを施している。また、外面には煤が付着している。

639は丸底の形態を有する土師器の坏aで、口径15.7cm・器高3.85cmを測る。器表はかなり凹凸があり、焼きもあまい。にぶい橙色（7.5YR7/4）～浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には金雲母および赤褐色粒が含まれる。底部外面はヘラキリの後にナデを施しており、板状圧痕が残っている。

640は丸みをもった形態に低い高台が貼付される瓦器椀で、復元口径17.5cm・高台径6.5cm・器高5.45cmを測る。焼成はあまく、灰黄褐色（10YR6/2）～灰色（N4/）を呈する。胎土には微砂粒・金雲母が含まれる。調整は内外面ともに、やや粗雑な手持ちヘラミガキによって仕上げられているが、磨滅が著しく不明瞭である。

641は胴部が直線的に開き、口縁部は短めに外反する土師器の鉢である。底部は欠失しており、復元口径40.0cm・残存高18.2cmである。にぶい黄褐色（10YR5/4）～明褐色（7.5YR5/8）を呈し、胎土には1～3mmの砂粒・雲母細片が含まれる。調整は内外面ともにナデによって仕上げがなされている。

642は土師器細片で磨滅しており、器種は不明である。Pit121より出土。橙色（5YR6/8）を呈し、胎土には1mmほどの砂粒および赤褐色粒を含む。焼きは良い。墨書がわずかに確認できるが、判読はできなかった。

643は製塩土器の底部である。円筒形を呈するもので、調整は外面がユビオサエ、内面はナデである。残存高4.15cmで、橙色（2.5YR6/8～7.5YR7/6）を呈する。胎土には0.5mmほどの砂粒・赤褐色粒が含まれる。

644は須恵器の坏cで、復元口径13.4cm・底径9.6cm・器高3.8cmを測る。焼きはあまく、灰白色（5Y7/2）を呈する。胎土には微砂粒と角閃石が含まれる。磨滅が著しい。Pit600より出土。

645は土師器の椀で、底部を欠失しており復元口径12.2cm・残存高5.5cmを測る。丸みをもった体部を有し、口縁部を軽く摘まんで外反させている。外面は横方向のケズリの後にナデ、内面にはナデを施しており、指頭圧痕がみられる。橙色（5YR6/8）を呈し、胎土には0.5mmほどの砂粒がわずかに含まれる。Pit1059より出土。

646・647は、Pit1071から出土した。646は、土師器の坏aである。底部は糸きりで器肉は比較的厚く、胎土にはわずかな微砂粒と金雲母が含まれる。にぶい橙色（10YR7/4）～橙色（2.5YR6/6）を呈し、復元口径16.1cm・復元底径11.3cm・器高3.2cmを測る。

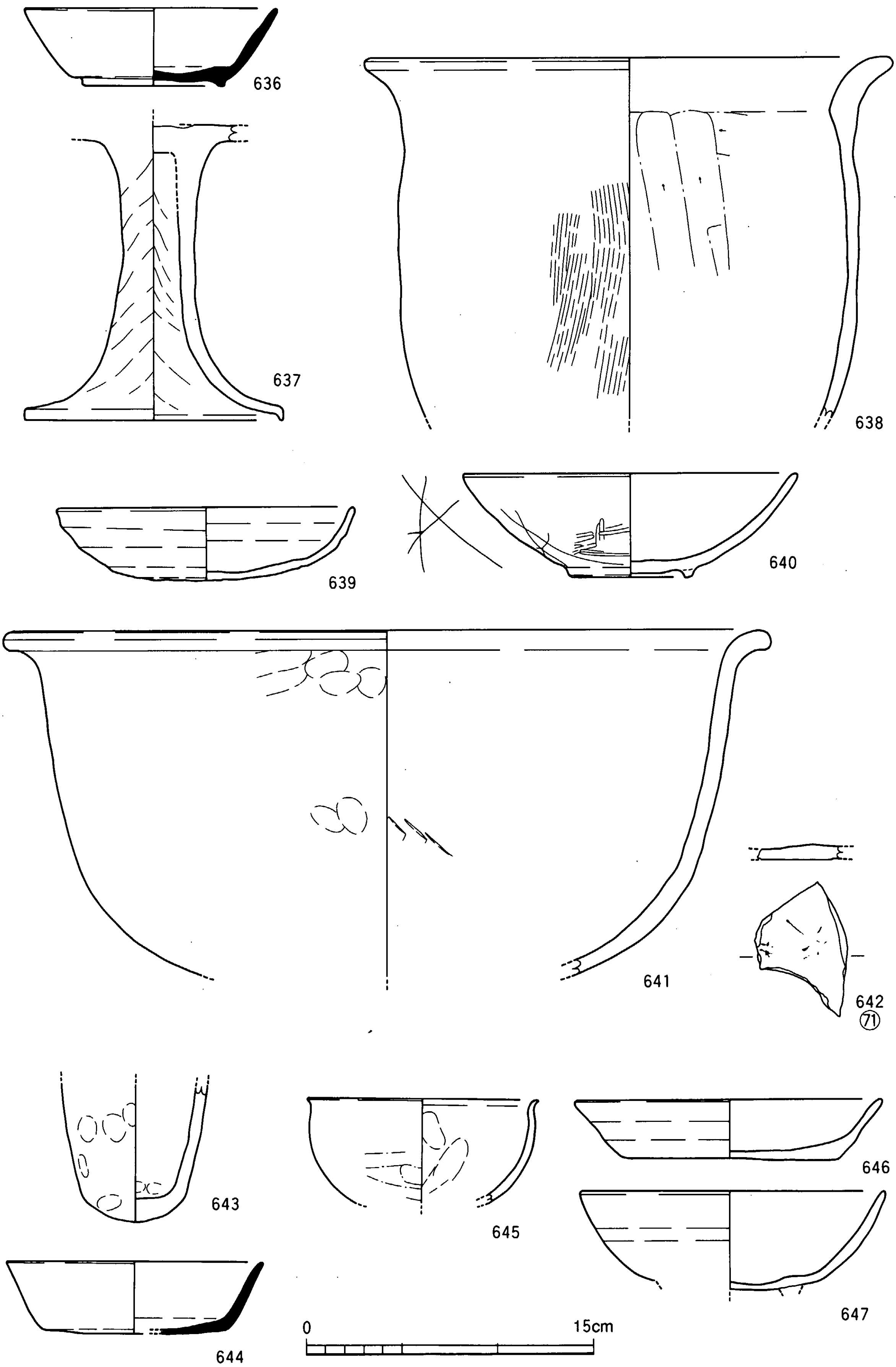


Fig.127　Pit出土遺物その1(S1/3)

647は瓦器椀である。磨滅が著しく器表はかなり荒れており、高台部を欠失する。口径16.1cm・残存高5.2cmを測り、淡黄色（2.5Y8/3）～にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土には微砂粒がわずかに含まれる。

648は須恵器の坏cである。直線的に延びる体部をもち、やや外方に張り出した短い高台を中心からずれて貼付している。底部と体部の屈曲は明瞭である。口径12.9cm・高台径8.4cm・器高3.7cmを測り、青灰色（5PB5/1）～灰色（N6/）である。胎土には微砂粒が含まれる。Pit1247より出土。

649は口径11.7cm・底径6.5cm・器高3.4cmの土師器の坏aで、底部はヘラキリの後に未調整、その他にはナデを施している。にぶい黄橙色（10YR7/3）～褐灰色（10YR5/1）を呈し、所々に黒斑がみられる。胎土には1mmほどの砂粒と赤褐色粒が含まれる。Pit1930より出土。

650は土師器の坏である。口径10.9cm・底径4.8cm・器高2.8cmを測り、口径に対して底径が非常に小さい。体部は直線的である。底部は糸きりで、その他はヨコナデが施される。にぶい橙色（7.5YR6/4）～にぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、口縁部内面付近には煤が付着しているのが確認できる。Pit2170より出土。

651は、復元口径14.6cm・復元底径8.5cm・器高3.6cmを測る土師器の坏aである。外面は明赤褐色（2.5YR5/8）、内面は明黄褐色（10YR7/6）を呈する。底部はヘラケズリの後に回転ヘラミガキ、体部外面はヨコナデの後に回転ヘラミガキ、内面はヨコナデによる最終調整が行われている。胎土は精良である。Pit1330より出土。

652は土師器の坏aである。　直線的な体部を有し、底部と体部の屈曲部も明瞭。底部にやや丸みをもっている。器表には凹凸が多い。底部の調整はヘラキリの後にナデを施し、わずかに板状圧痕が確認できる。橙色（5YR7/6）を呈し、胎土には0.3～1mmほどの砂粒と赤褐色粒が含まれる。胎土は精良で、口径13.0cm・底径8.15cm・器高3.9cmを測る。また、口縁部内面には煤（油煙？）が付着している。Pit1978より出土。

653は土師器坏aで、復元口径13.6cm・復元底径7.6cm・器高3.6cmを測る。体部中位・底部と体部の屈曲部付近に段が残る。底部はヘラキリの後にナデを施しており、板状圧痕が残っている。橙色（5YR7/6）～浅黄橙色（10YR8/4）を呈し、胎土には微砂粒・赤褐色粒・雲母が含まれる。Pit2204から出土した。

654は、Pit1308から出土した土師器の甕である。口縁部を1/2ほど欠失する。胴部には張りがあり、口縁部は弱く短く外反する小甕である。口径11.0cm・胴部最大径11.5cm・器高10.5cmを測り、橙色（5YR6/8）を呈する。胎土には1mm以下の微砂粒・雲母・角閃石が含まれる。調整は胴部外面が縦方向のハケメの後にナデ、その他にはナデを施している。胴部内面には指頭圧痕が残る。

655は土師器の椀で、直線的な体部形態を基本とし、断面長方形の縦長の高台が貼付される。器肉は比較的厚く、特に底部は1cm程度もある。調整はナデが主体をなし、ミガキはみられない。復元口径14.6cm・高台径9.0cm・器高7.1cmで、橙色（5YR7/6）を呈する。胎土には微砂粒・雲母が含まれる。Pit1988より出土。

656は土師器の坏で、口縁部を開き気味に外反させる。底部はヘラキリの後に未調整で、板状圧痕が残る。復元口径12.15cm・底径6.6cm・器高3.5cm、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。胎土には砂粒がわずかにふくまれる。器形は全体的にゆがみが大きい。Pit2304より出土。

657は土師器の椀で、丸い形態を基本とする。底部～体部にかけては横方向のヘラケズリにより

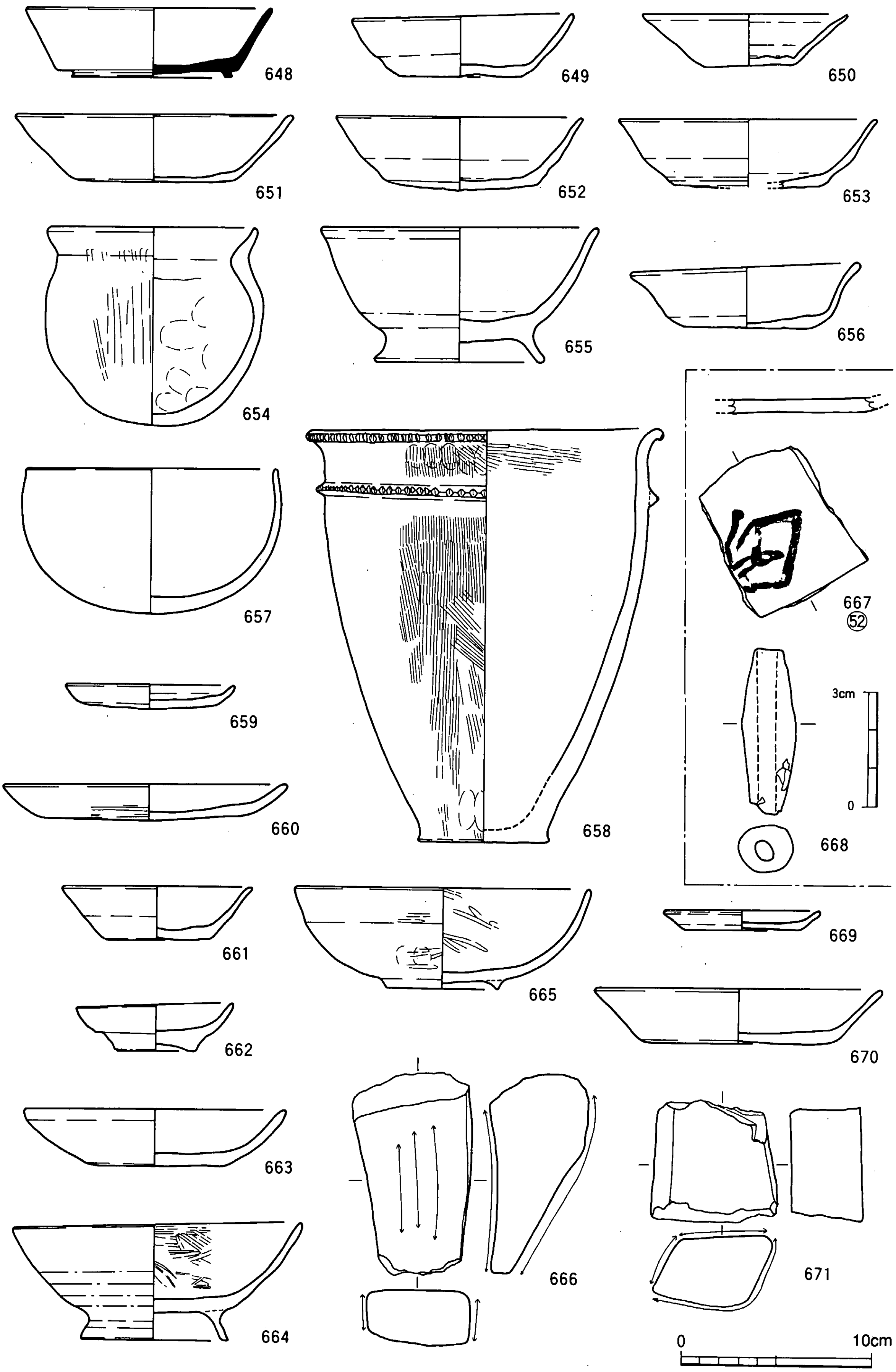


Fig.128　Pit出土遺物その2(S1/3,2/3)

器形を整えており、その他はナデが施される。色調は、外面が橙色（5YR6/8）～灰褐色（5YR5/2)、内面が明赤褐色（5YR5/8）を呈し、底部外面には黒斑がみられる。胎土にはわずかに微砂粒と雲母が含まれており、焼成は良好である。復元口径13.2cm・器高7.6cmを測る。Pit2426より出土。

658は板付Ⅱ式に相当する小形の甕で、口径17.65cm・底径6.95cm・器高21.7cmを測る。体部～底部の一部を欠失するがほぼ完形である。灰黄褐色（10YR4/2）～橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には0.5～2mmほどの砂粒・角閃石が含まれる。Pit2449からの出土である。

659は口径8.95cm・器高1.3cmの土師器の小皿aで、調整は磨滅により不明である。浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、胎土には赤褐色粒がわずかに含まれる。Pit2339より出土。

660は土師器の皿で、復元口径14.9cm・底径11.3cm・器高2.0cmを測る。底部外面はケズリの後に回転ヘラミガキ、その他はヨコナデの後に回転ヘラミガキによる最終調整がなされる。色調は黄褐色（10YR5/6）～明赤褐色（2.5YR5/8）を呈し、外面には赤彩？のような箇所が確認できる。胎土には1mm以下の微砂粒および雲母がわずかに含まれている。Pit2450より出土。

661は底部と体部の屈曲部は明瞭、体部は直線的に開く土師器の坏で、小形のものである。底部はヘラキリの後にナデを施し、板状圧痕が残る。橙色（2.5YR6/8）を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を含む。復元口径10.0cm・復元底径5.6cm・器高2.85cmを測る。Pit2603より出土。

662は、白磁の皿である。やや丸みをもちながら立ち上がる体部で、高台は分厚い。釉はベージュ（8YR7.5/2.0）で、畳付部と高台内は露胎となる。胎土は香色（4YR6.0/2.0）～鴬色（4YR4.0/2.0）を呈し、焼きはあまい。口径8.3cm・高台径4.35cm・器高2.55cmを測る。Pit2799より出土。

663は口径13.9cm・底径6.6cm・器高3.0cmの土師器の坏aで、器肉は比較的厚い。調整は磨滅により不明瞭である。橙色（5YR6/6）～淡橙色（5YR8/4）を呈し、胎土には1.5mmほどの砂粒と赤褐色粒・雲母が含まれる。Pit2913より出土。

664は、やや丸みをもった体部を有し、外方に開く高い高台が貼付される黒色土器A類の椀である。Pit2923より出土。外面の体部下半はケズリ、高台部と口縁部～体部中位はヨコナデ、内面は不定方向の手持ちヘラミガキによる調整が施されている。浅黄色（2.5Y7/4）～橙色（5YR6/8）を基調とし、胎土には0.5～1mmほどの砂粒・赤褐色粒・雲母がわずかに含まれる。口径15.1cm・高台径7.7cm・器高6.25cmである。

665は、Pit2989より出土した瓦器椀である。丸みをもった体部をもち、断面三角形の低い高台が貼付される。復元口径15.6cm・復元高台径5.9cm・器高5.4cm。焼成はあまく、灰白色（10YR8/2）を呈し、胎土には1～2mmほどの砂粒が多く含まれる。内面にはヘラミガキが確認できるが、磨滅により器表は荒れている。また、全体的にゆがみが大きい。

666は、きめの細かい粘板岩を素材にした砥石でPit1364から出土した。現存長10.5cm・幅4.5～6.0cmを測り、不整な長方形を呈する。砥面は4面で、裏面については最初の砥面は欠失しているが、その後も継続して使用している。

667は、小片のため器種は不明である。Pit2377から出土した。底部外面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

668は須恵器的な焼きの土錘で、Pit2466から出土した。長さ4.3cm・幅1.45cm・孔径0.5cm・重さ5.4gである。

669は土師器の小皿aで、底部は糸きり。Pit3134からの出土である。にぶい橙色（7.5YR7/4）を

呈し、胎土には微砂粒・雲母細片・赤褐色粒が含まれる。復元口径8.2cm・復元底径6.0cm・器高1.1cmを測る。

670は土師器の皿で、復元口径14.9cm・復元底径10.2cm・器高2.9cmを測る。Pit3194より出土。磨滅が著しく、底部は糸きりであることがわずかに確認できる。にぶい黄橙色（10YR 6/3）を呈し、0.5mm以下の微砂粒・金雲母が胎土に含まれる。

Pit遺物その3・4　671は砥石の破片である。Pit2710から出土した。現存長6.5cm・厚さ3.2cmを測り、砥面は4面。上・下端を欠失しており、本来の形状は不明である。

672・673はPit547より出土した釘である。両者ともに先端部を欠失しており、672が残存長4.8cm・径0.3～0.4cm、673が残存長6.7cm・径0.3cmを測る。錆が著しく状況は不明確である。

674・675はPit1588から出土。674はコの字状を呈する自在釘である。先端部はやや内側に折り曲げられ、わずかながら木質が残存している。径は0.3～0.4cm。675は中位以下を欠失する釘で残存長3.4cm・径0.5cmを測る。木質が残存しているが、錆が著しく状況は不明確である。

676は、Pit2481より出土した釘である。先端部を欠失しており、残存長4.8cm・径0.3～0.4cmである。錆が著しく、状況は不明確である。

677は、性格不明の鉄器である。棒状を呈し、先端部は先細る。頭部を欠失しており、残存長7.0cm・径0.5～0.7cmを測る。Pit2730から出土。

678はPit3086より出土した釘である。錆が著しく状況が不明確であるが、残存長4.3cm・径0.4～0.5cmを測る。

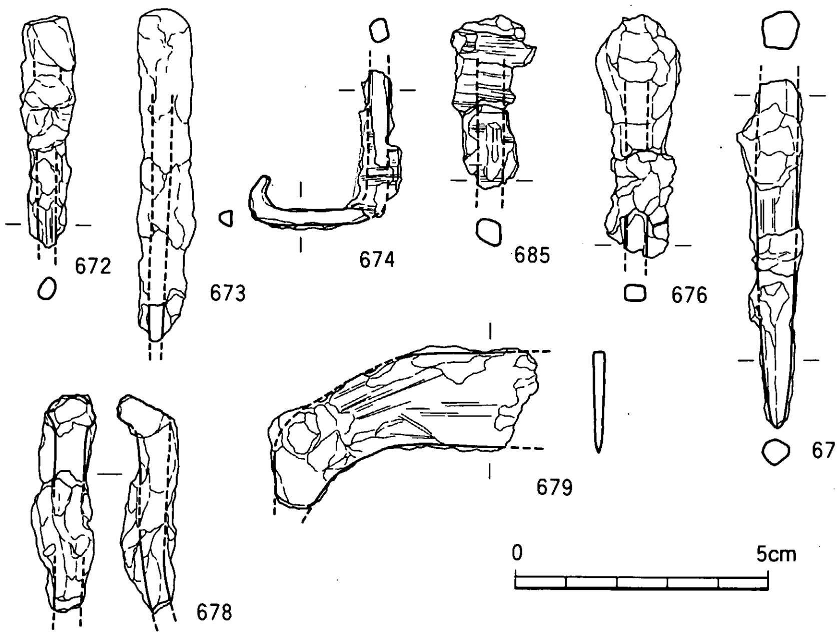


Fig.129　Pit出土遺物その3(S2/3)

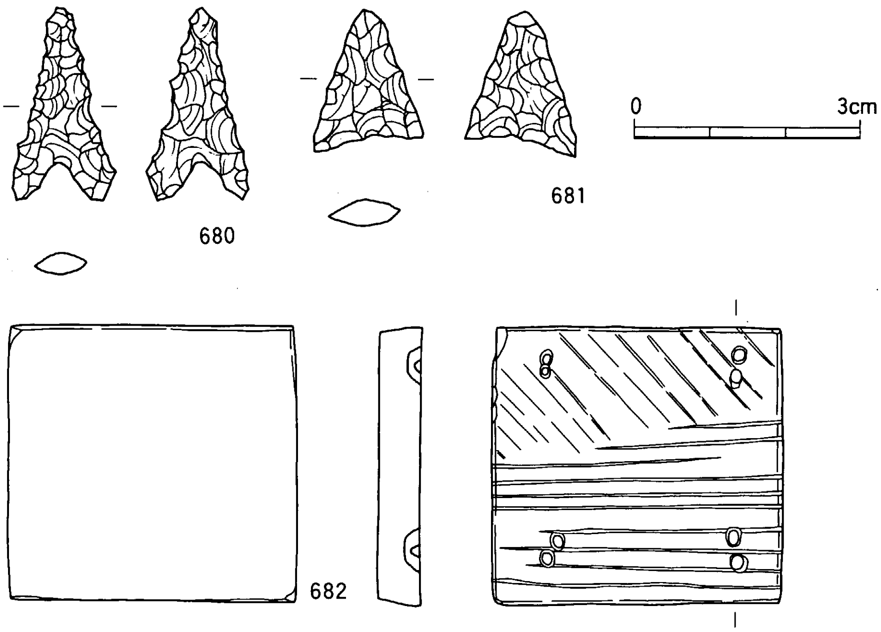


Fig.130　Pit出土遺物その4(S1/1)

679はPit671から出土した鉄器である。残存長5.8cm・身幅（現存最大）2.05cm・重ね幅0.3cmを測る。形状から推測すると手鎌の一部とも考えられるが、重ね幅がやや薄すぎるので今のところは性格は不明である。

680はPit2228から出土した鋸歯鏃である。姫島産の黒曜石を素材としている。両側辺に細かい加工を施しており、二等辺三角形を呈する。

681はサヌカイトを素材とする石鏃で、Pit3150から出土した。抉入は浅く、表・裏面ともに加工を施した普遍的なものである。先端部は欠失しており、残存長1.9cm・厚さ0.3cm・重さ0.8gである。パティナが進んでいる。

682は、石帯の巡方である。Pit3202から出土した。寸法3.7cm×3.85cm・厚さ0.55cm・重さ20.4gを測る。蛇紋岩を素材とし、表・側面を丁寧に磨き上げている。裏面は削った痕跡をそのままに残す。潜り孔は対角線上に4ヶ所穿たれている。

11整地層など（Fig.131〜133・PL.40,41,44,49）

SD50第2層（整地層） 本遺跡の周辺はかなりひどい削平を受けているものと推測されるので、整地の痕跡は基本的には官道周辺の脆弱地にみられるのみである。この層は暗茶褐色土ベースに暗茶褐色粘質土塊が含まれる非常に締まりの良いもので、他のSD50の埋土中では確認されていない。官道の通過する周辺のみに確認されることから、整地層であると判断した。遺物が少なくどの時期に行われたものなのかは釈然としないが、掘立柱建物群や柵列群が築造された時期に官道の再整備が行われていることを考えれば、官道の改良時（8世紀中頃〜後半）の所産である可能性が最も高い。

SD50第2層（整地層）出土遺物（Fig.131・PL.40,44）

土師器

坏（683） 体部は直線的で、体部と底部の境が若干丸みをもつ。口径13.4cm・底径7.3cm・器高3.9cmを測る。底部には板状圧痕が残る。橙色（5YR6/6）〜明黄褐色（10YR7/6）を呈し、胎土には1〜2㎜ほどのわずかな砂粒と赤褐色土が含まれている。

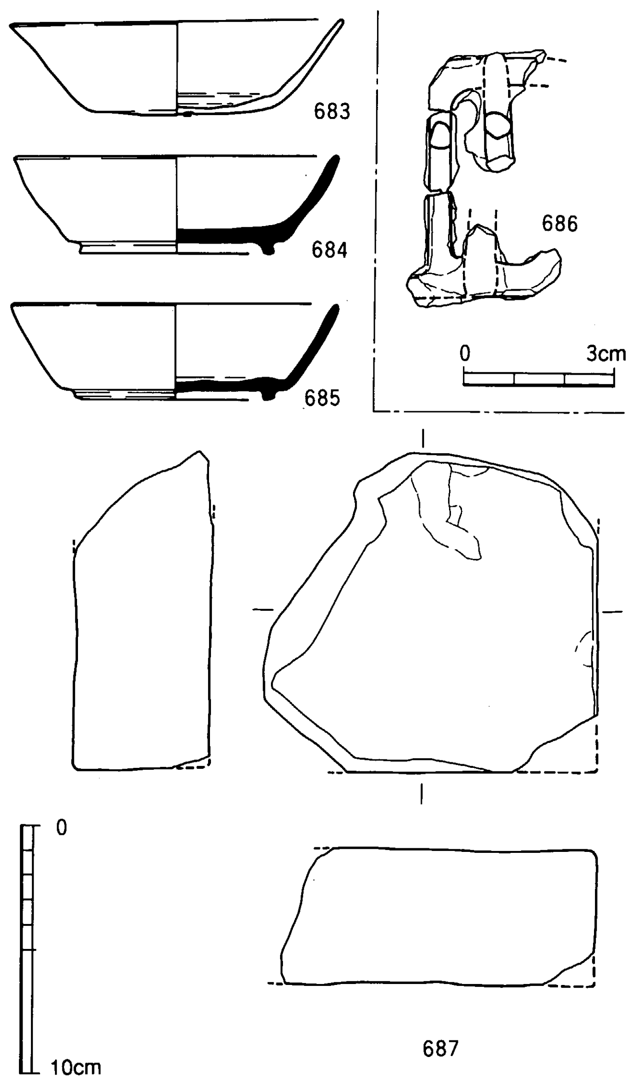


Fig.131　SD50第２層(整地層)出土遺物(S1/3,2/3)

須恵器

坏（684・685）　両者ともに体部がほぼ直線的に延び、底部と体部の屈曲部は明瞭、短い高台が貼付されるものである。底部はヘラキリの後にナデ、その他にはナデを施している。灰白色（2.5Y7/1）～黄灰色（2.5Y5/1）を呈し、胎土にはわずかに微砂粒が含まれる。復元口径13.0cm・復元高台径7.8～8.0cm・器高3.9～4.0cmを測る。

鉄器

鉸具（686）　破損が著しく、遺存状況が極めて悪く、かなりゆがんでいる。形状は丸みがなくストレートに延びて長方形を呈するもので、復元長4.8cm・復元幅2.5cmである。径0.4～0.55cmの鉄棒を用いて輪金を作っており、輪金と指金の一部を欠失する。指金径は0.55cm。轡に伴って立聞に連結されるものと推測される。

塼（687）　残存長13.4cm・残存幅12.85cm・厚さ5.6cmを測る。ローリングをかなり受けており、磨滅が著しく調整は不明である。灰白色（2.5Y8/2）を呈し、胎土には微砂粒が含まれる。また、部分的ではあるが煤が付着した箇所がみられる。

官道検出面表採遺物（Fig.132・PL.49）

Aブロックの付近で検出された資料である。剝土時に出土したものなので、その位置は不明確である。両者とも、墨書（墨痕）が確認されたので掲載した。

須恵器

坏（688・689）　688は高台部しか残存していないが、とりあえず坏の範疇で考えた。高台径11.35cm・残存高1.65cmを測り、灰白色（5Y7/2）を呈する。胎土には1～2mmの砂粒をわずかに含み、高台内には墨痕のようなものが確認できる。689も同様に高台部のみ残存する。復元高台径9.6cm・残存高1.6cmで、褐灰色（7.5YR6/1）～灰白色（2.5Y7/1）を呈する。高台内には墨書が確認できるが、判読はできなかった。

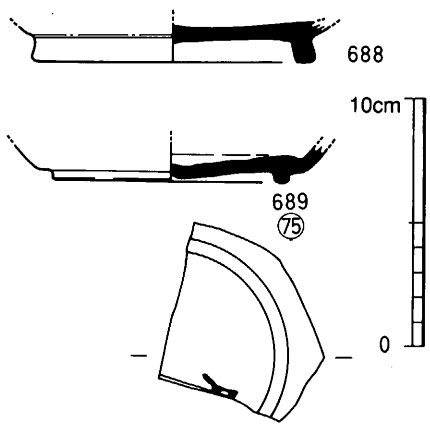


Fig.132　官道検出面表採遺物（S1/3）

拡張区西側段落ち出土遺物（Fig.133・PL.41）

A・Bブロックの北方に数ヶ所点在している溜り状の窪みのうち、SE 2の北側付近からの出土資料である。磨滅が著しく、官道周辺の至近距離まで水による影響が激しかったことを物語っている。

石器

石剣（690）　切っ先部のみ欠失しており、残存長9.4cm・厚さ0.95cmである。基部は短く、抉入は浅い。断面は菱形を呈し、両側辺には刃こぼれが多く認められるが、二次的なものかどうかは不明である。磨滅が著しい。

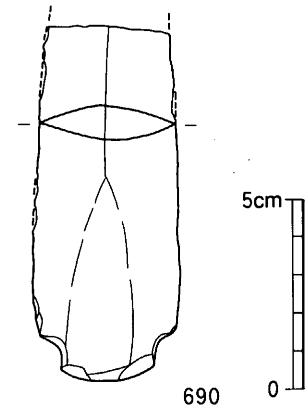


Fig.133　拡張区西側段落ち出土遺物（S1/2）

Ⅳ　分析

1 SD120床面および官道の硬化土壌の分析について

本稿は、平成7～8年度にかけて㈶九州環境管理協会に分析を委託し、結果報告を受けたもののなかから関連事項を抜粋および加筆したものである。

経緯と目的

今回の調査では、官道とそこから南方に約100mの地点より検出されたSD120の床面から、硬化した土壌が検出された。官道については路面の遺存状況が悪く、硬化した（させた？）と考えられる箇所は部分的な範囲に限定されていたが、SD120の床面については、三層構造を呈しており、見た目においては明らかに地山の上に土を被せて固化している状況が確認された。

そこで、両者のデータを定量的に評価し傾向を把握することで、古代においてどのような土木的施工が行われているのかを推定する手がかりとするために今回の分析を行った。

SD120床面採取土壌の分析

1）試　料

調査範囲内のSD120床面に任意の12ヶ所のトレンチを約3m幅で設定し、1トレンチにつき3層分をサンプルとして採取した。採取量は1サンプルにつき1kgとした。トレンチの位置関係は、Fig.134のとおりである。なお、No.11および12については中層の試料が得られなかったため、比較試料として官道の硬化土壌試料を用いた。

上層……礫を含んだ硬質土（Fig.62の第29層）

中層……淡黄褐色硬質土(きめが細かい)

（Fig.62の第31層）

下層……地山土（砂礫層）

2）粒度測定

a．方法

まず化学的な分析を行う前に、事前の基礎データを得る目的で土粒子の粒度測定を行った。方法としては、採取してきた試料を直射日光に天日干し〔7/29 (5時間)・7/30 (6時間)・7/31 (6時間)〕を行い、各サンプル毎に無作為に100gを抽出したのちに、粉砕器によって３秒間粉砕を行い得られた資料をふるいにかけることで行った。ふるいはケニス社製の実験用ふるい（直径0.4mm以上・0.2mm・0.1mm・0.1mm以下）を使用した。

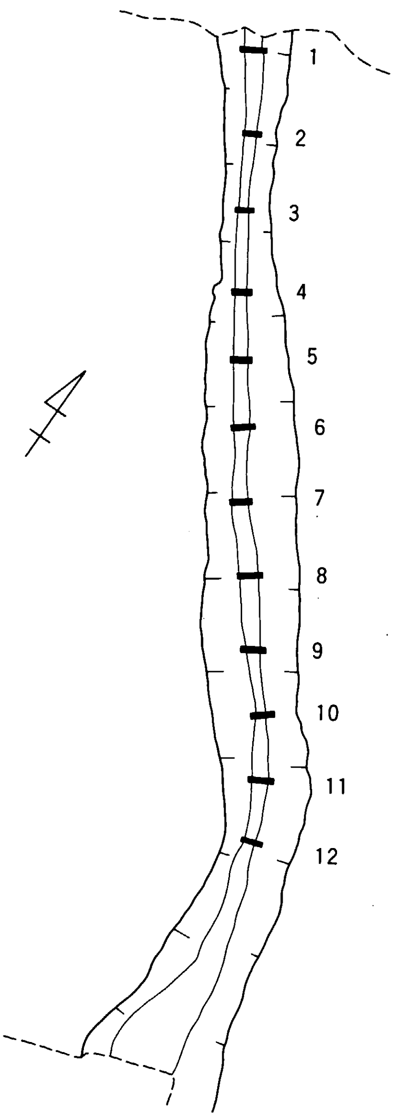


Fig.134　SD120床面土壌採取トレンチ位置図

b．結果

粒度測定の結果はFig.135に示すとおりである。項目ごとに100g中の占有率を図示した。これによると、各サンプルの示すある一定の傾向はほぼ一致しており、粒度のうえでは3つの層は異なったものであるということがいえよう。とくに上層（Fig.62本文p.66土層図でいう29層）と中層（31層）については、各サンプルともかなり近似した状況を示している。この結果、中層は他の2層と土壌粒子の粒径分布が異なることが判明した。

3）組成分析

a．方法

それぞれの試料について、次に示す項目・方法により組成分析を行った。

項目	分析方法	
	前処理法	分析方法と分析装置
Si Al	「耐煉瓦および耐モルタルの化学分析方法」JISR2212-1991に準ずる。	重量法および吸光光度法 日本分光製：340型
Fe Ti Ca Mg Na		ICP発光分光分析法 セイコー電子工業製：SPS4000型
K Lg-Loss		重量法光洋リンドバーグ：51848型

b．結果

Fig.136は組成分析の結果の一部を示す。ケイ素・アルミニウム・マグネシウムの上・中・下層における濃度（%）を示したもので、Noは採取地点を意味する。これによると中層が他の層と異なった濃度を有していることが分かる。ただし、中層と他の層の差が明瞭であるサンプルとそうでないサンプルが見られるが、サンプル採取時にきちんとした採取が行われていない場合が含まれると考えられる。

4）岩種判定

先の成分分析では、中層が他の層と異なる傾向を示す結果となった。Al・Mg（酸化物として存在する）は鉱物の風化物中に存在する物質である。このため、風化物にターゲットを絞った。

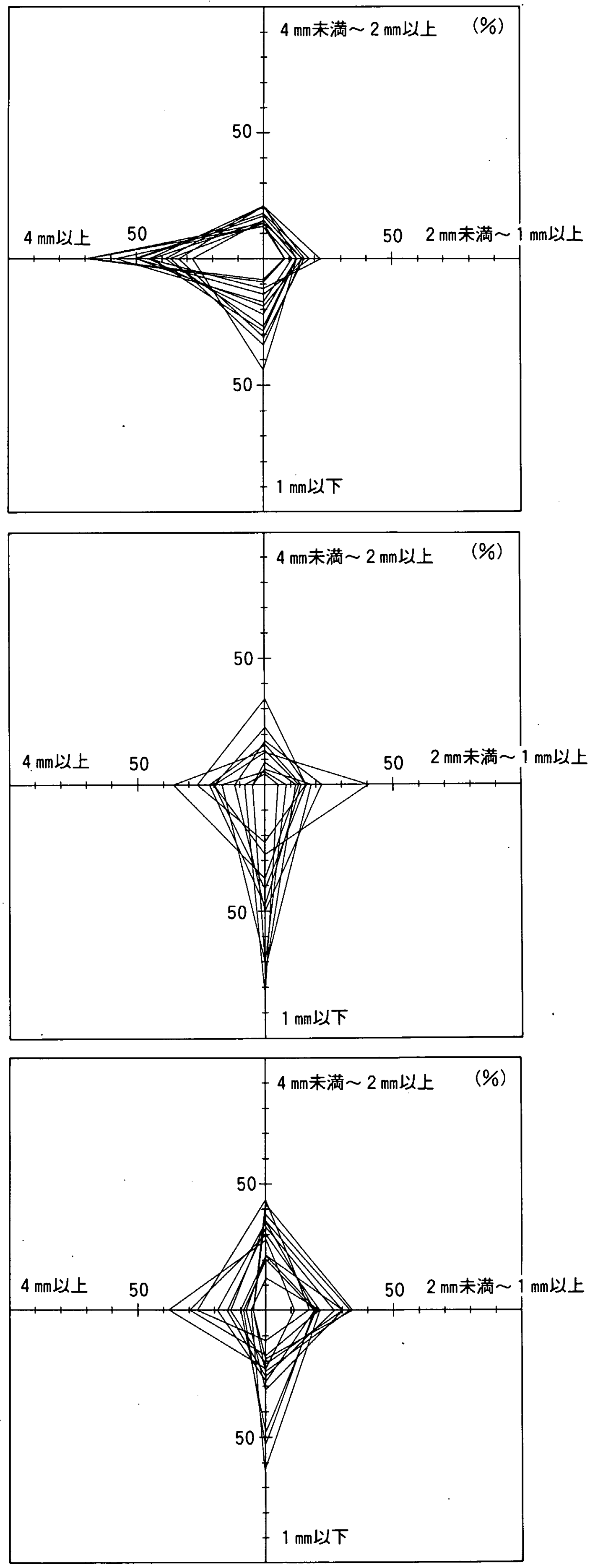


Fig.135　SD120床面採取土壌粒度測定結果

a．方法

岩種判定は、ASTMC295−79に準ずる方法で行った。なお、X線回折分析は、不定方位法と定方位法で行ったが、それぞれの概要について以下に示す。

(1) 不定方位法

不定方位法は全試料について、構成する鉱物の同定及び簡易的定量に用いた。試料のうち、上層および下層試料については礫サイズの粒子を除き細粒の砂～シルト質の部分と土壌物質が混ざった部分を分析試料とした。中層試料については土壌物質の塊をそのまま分析試料とした。No.9・10については中層試料に土壌物質が少なく、上層,下層試料と同様に細粒部分を選別して分析試料とした。これらを乳鉢で粉末にし、粉末試料をアルミ製の試料ホルダーに指圧により固定しX線回折用試料とした。分析装置として、理学電機社製RINT2100を使用した。X線回折分析の条件は以下のとおりである。

X線管の管電圧/管電流	：40kV/40mA（CuKα）
ゴニオメーター	：RINT2100広角ゴニオメーター
アタッチメント	：標準試料ホルダー
フィルタ	：使用しない
発散スリット	：1deg
散乱スリット	：1deg
走査モード	：連続
スキャンスピード	：4.0deg/min
スキャンステップ	：0.05deg
走査軸	：$2\theta/\theta$
走査範囲	：2.0～40.0
受光スリット	：0.15mm

(2) 定方位法

不定方位法による実験の結果、同定できない粘土鉱物が見られたため、その種類を決定するために、No.4・5・7の3試料を選び、水ひを行った後、定方位法により、再度X線回折を行った。前処理とX線回折の手順は以下のとおりである。

まず、100ccビーカーに試料と水を入れ超音波洗

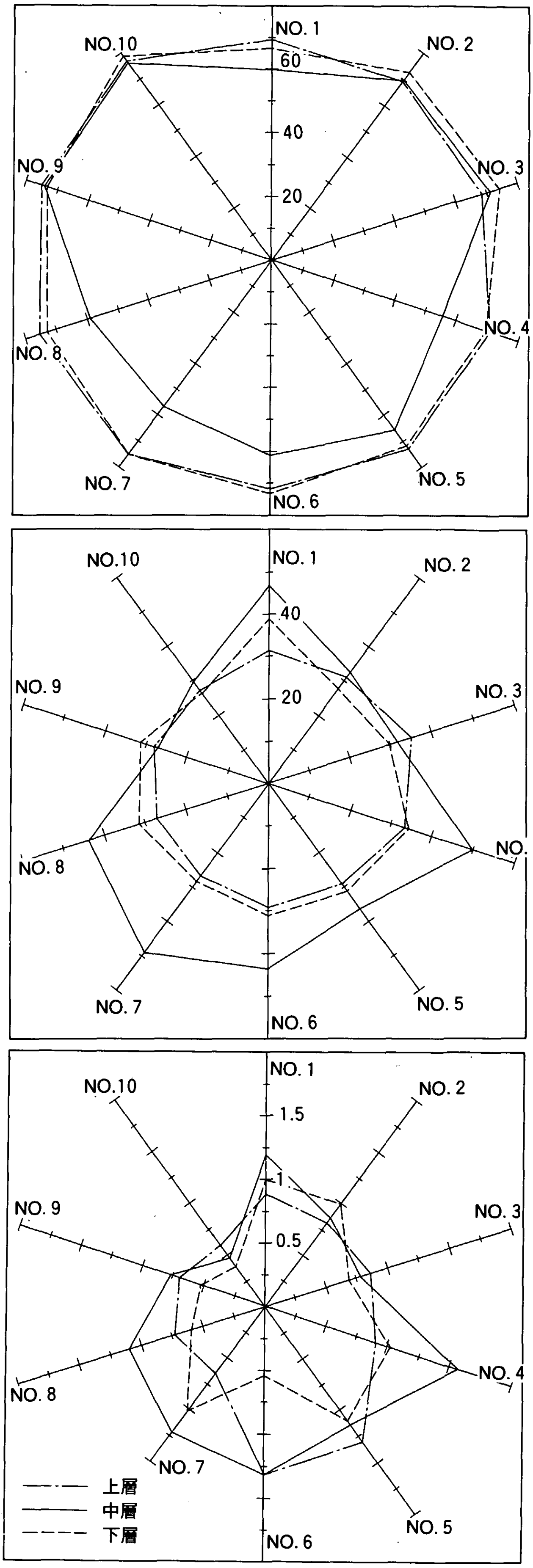


Fig.136　SD120床面採取土壌組成分析結果

浄による撹拌を行った。この後3時間静置し、沈殿物の混入のないように、2μm以下の粒子が浮遊する上部の懸濁液(ストークスの式に基づき水面より約4cmの深さまでの部分)をとり、この液を遠心分離機にかけ粘土鉱物と水とに分離した。次に粘土鉱物(水ひ試料)に極少量の水を加え撹拌し、これを駒込ピペットで吸い上げ、スライドガラス上に3,4滴垂らし一様に広げ乾燥させた。エチレングリコール処理するものについては、エチレングリコールを一滴滴下しエチレングリコールが完全に蒸発しない程度に乾燥させX線回折試料とした。塩酸処理を行うものについては、水ひ試料に6N塩酸を加え、温浴上で1時間加熱し、緑泥石・バーミキュライト・ギブサイトを分解した後、エチレングリコール処理を行った。X線回折分析の条件は以下のとおりである。

X線管の管電圧/管電流	：40kV/40mA (CuKα)	走査モード	：連続
ゴニオメーター	：RINT2100広角ゴニオメーター	スキャンスピード	：4.0deg/min
アタッチメント	：標準試料ホルダー	スキャンステップ	：0.05deg
発散スリット	：1deg	走査範囲	：2.0～40.0
散乱スリット	：1deg	受光スリット	：0.15mm

(3) 顕微鏡観察法

各試料について、粒度がおよそ0.1～1mmの部分を薄片にして顕微鏡下で観察した。試料の厚さはおよそ30ミクロンで、両面を研磨したものを用いた。

b. 結果

(1) 顕微鏡観察

◇上層および下層試料

上層および下層試料については大きな差異が認められないので、一括して検鏡下での特徴を以下のようにまとめた。

主として花崗岩礫と、花崗岩の風化により生じた砂、シルト、粘土の他、有機物などが混合したもので、優白質の礫層以外は褐色を呈する。花崗岩礫は数cm～数mm大の大きさで、不規則な形状を示す角張ったものが多く、一般に分級が悪い。

検鏡下の観察により花崗岩礫の多くは容量比30～70%の石英、10～40%のカリ長石、20%以下の斜長石、有色鉱物として容量比10%以下の褐色の黒雲母、少量の緑色角閃石および鉄鉱物のほか、ジルコン、アパタイトなどの微量の副成分鉱物、二次的に生じたカオリナイトなどの粘土鉱物などよりなる。石英は径10mm以下の他形を示し、波動消光が一般に顕著である。圧砕作用を受けて石英結晶が細粒化し、流動状に集合しているところがある。また、割れ目に沿って粘土鉱物を生じていることがある。カリ長石は径6mm以下の自形～半自形を示し、内部が汚濁していることが多い。またカリ長石にはラメラ状のパーサイト組織の他、マイクロクリン双晶が見られることがある。斜長石は径4mm以下の自形～半自形を示し、アルバイト双晶、カールスバド双晶が見られる。累帯構造は一般に見られないが、顕著なものが時折見られる。内部が変質により汚濁していることもある。カリ長石との接触部にミルメカイト組織が見られることがある。黒雲母は1mm以下の大きさの自形～半自形を示し、一部は緑泥石化している。花崗岩礫の表面に近いものは風化作用により粘土鉱物に置換されていることが多い。

花崗岩礫の表面に付着した細粒物質を鏡下で観察すると、主として微細な（0.2mm以下の大きさ）角張った石英片と、土壌を構成するシルトおよび粘土粒子や有機物から構成される。

◇中層試料

褐色～灰色を呈するシルト～粘土質の土壌物質で、砂質粒子を含む。部分的に固結してしっくい状になっているところが見られる。

鏡下では、微細な粘土粒子の中に、数10～数100ミクロン大の石英･黒雲母･斜長石･角閃石･鉄鉱物･変質鉱物などの鉱物粒子と、有機物が散在している。少量の数mm大の角張った石英片を含むことがある。鉱物粒子はいずれも円磨されておらず、また淘汰されていない。

鉱物粒子のうち、石英・斜長石・角閃石は未風化でほとんど変質していない（斜長石や角閃石の中には風化変質したものも多いと考えられるがそれらは残存していない)。黒雲母は部分的に緑泥石、バーミキュライト･カオリナイトおよびギブサイトに置換されている。バーミキュライト･カオリナイトおよびギブサイトは風化作用で生じたもので、この順序で風化が進んでいる。

緑泥石は風化作用を受けていない花崗岩礫中にも見られるので、風化作用によるものでなく、おそらく花崗岩の冷却時の熱水変質作用によるものであろう。カリ長石や斜長石の分解により生じた少量のカオリナイトなどの粘土鉱物も含まれる。

有機物として確認できるものの中には数10ミクロン大の植物片と見られるものを含む。まれに微少動物のものと思われる巣穴のような構造（全体の大きさは数ミリ大）が見られたりする。

(2) X線回折分析

X線回折分析の結果、上層・中層および下層試料の構成鉱物は石英・カリ（正）長石・斜長石・角閃石・黒雲母・バーミキュライト・ギブサイト・緑泥石・カオリナイト・黄鉄鉱などであることが分かった。Fig.138～140はX線回折の結果の一部である。X線回折では回折スペクトルが得られ、スペクトルから鉱物種の同定と量的評価を行う。Fig.138・139は横軸にギブサイト＋緑泥石（$2\theta=6.2°$)、縦軸に各初成鉱物に相当するピークのカウントをとり、Fig.139・140は横軸にバーミキュライト＋緑泥石（$2\theta=18.3°$)、縦軸に各初成鉱物に相当するピークのカウントをとり、X線回折強度(カウント/秒) の相関関係をプロットしたものである。この図からも明らかに中層サンプルが他の層と異なった鉱物組成を有することが分かる。なお、X線回折強度比は鉱物の量比に対応している。

5）考　察

分析の結果、以下のことが考察された。

(1)　組成分析の結果から上層・下層試料間には目立った違いは認められないが、これらと比べて　中層試料はかなり異なる値を示す。中層試料では上層・下層試料に比べてSiやNaが減少している。またAl・Fe・Mg・灼熱減量(Ig-Loss）は増加している。試料番号4・6・7・8においてこれらの傾向が著しい。中層試料が上層･下層試料の組成とあまり変わらないものもあるが(試料番号2・3・9・10)、これらの試料では上層･下層試料の中層試料への混入の影響が大きく、典型的な中層試料を示さないと考えられる。

(2)　検鏡下の（顕微鏡）観察により、上層・下層試料は主として花崗岩礫と、花崗岩の風化により生じた砂、シルト、粘土などより構成されていることが分かった。これらに対し中層試料は、砂質粒子を含むシルト～粘土質の土壌物質からなる。中層試料には黒雲母が比較的濃集している。また風化作用により黒雲母などを置換して生成した緑泥石･バーミキュライト、カオリナイトお

よびギブサイトが見られる。後になるほど風化がより進行していることを示す。緑泥石は風化作用を受けていない花崗岩礫中にも見られるので、風化作用によるものでなく、おそらくそれらの多くが花崗岩の冷却時の熱水変質作用によるものと推定される。カリ長石や斜長石の分解により生じた少量のカオリナイトなどの粘土鉱物も含まれる。

(3)　X線回折法による鉱物分析では、上層・中層および下層試料に含まれる鉱物の量比に比較的明瞭な差異があることがわかった。ギブサイトおよびバーミキュライト(緑泥石を含む)については中層試料では大きい強度を示すのに対し、上層および下層試料では強度が小さい。バーミキュライト(緑泥石を含む)については上層と下層試料間では強度での区別はできないのに対し、ギブサイト(緑泥石を含む)については上層と下層試料間では強度で差が見られる。上層試料におけるギブサイトの含有量は非常に小さく、しかもデータの分布がよくまとまっている。石英・斜長石・カリ(正)長石・角閃石については上層および下層試料に対し、中層試料のX線回折強度は一般に減少している。全体の試料について、ギブサイトおよびバーミキュライト(緑泥石を含む)と黒雲母の関係を見ると、弱いながらも正相関が見られる。

ギブサイトおよびバーミキュライトは緑泥石と回折ピークを共有しておりX線回折法では区別が困難であるが、検鏡下の観察と併せることにより、今回の試料ではギブサイトおよびバーミキュライトを同時に含むことが分かった。これらは主として花崗岩を構成する黒雲母の風化物と考えられる。緑泥石は比較的新鮮な花崗岩礫を検鏡下で観察しても確認できることから、花崗岩冷却時の熱水変質作用により黒雲母の一部を交代して生成したと考えられる。

ギブサイトおよびバーミキュライト(緑泥石を含む)と黒雲母が逆相関を示さないことから、中層試料は上層および下層試料の風化が進んだ部分とはいえない。しかし、構成鉱物が中層試料と上層および下層試料が同じであることから、それらの供給源は同じと考えられる。中層試料でギブサイト・バーミキュライト(緑泥石を含む)および黒雲母が上層および下層試料に比べ濃集していることは・中層試料については花崗岩がその場で風化作用により土壌化したものでなく、花崗岩の風化により微細化・粘土化した部分が選択的に別の堆積場に水や風などの物理的な営力で運搬され、堆積し、さらに土壌化したものであると推定される。その堆積場(場所は特定できない)から、おそらく人為的に現在の場所へ運搬されたと考えられる。

また、中層試料の粘土質部には固結度の高いところがある。中層試料には日干し煉瓦などに含まれ固化を促進すると考えられているギブサイトとカオリナイトが含まれている。ギブサイトやカオリナイトの固結現象は、加熱や締め固め・石灰などの混入による安定処理を必要としておらず、自然放置によって固化するという特徴がある。中層試料に見られる固結現象には、これらの風化鉱物が関与した可能性も考えられる。

これらの状況から、中層だけが締め固め易い(あるいは締め固まり易い)材料で構成されており、排水性や強度を維持するために人為的に施工されたものと解釈される。SD120床面に関しては、当時の人々が土の性質をよく熟知し、溝の施工に生かしたことが確認できる。

官道波板状圧痕4付近採取土壌の分析

1）試　料

官道の波板状圧痕4付近にトレンチを設定し、分層された8層をサンプルとして採取し、採取量は1サンプルにつき1kgとした。各層の説明は次頁のとおりである。また、トレンチの位置関係はFig.137に示した。

1……硬化砂層
2……粗砂＋茶褐色粘質土＋少量の黄褐色粘質土塊
（混ざり方にばらつき。鉄分の沈着痕あり。）
3……淡黒褐色硬質土(層位下方に鉄分の沈着痕あり。)
4……茶褐色粘質土ベースに少量の黄褐色粘質土粒
（砂を多量に含む）
5……暗茶褐色粘質土
6……黄褐色粘質土ベースに暗茶褐色粘質土（土器細片含む。波板状圧痕内の埋土）
7……暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色粘質土粒
地山……淡黄褐色粘質土

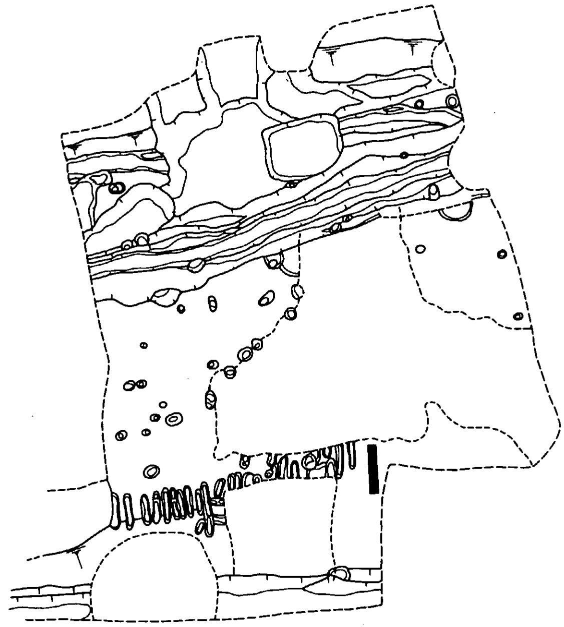


Fig.137　波板状圧痕4付近土壌採取トレンチ位置図

2）組成分析

a．方法

先述のSD120床面採取土壌の分析と同じ方法を用いた。

b．結果

組成分析の結果としては、地山の組成に近いということが確認された。結果は Tab.7 に示すとおりである。この分析では、先のSD120にみられるような特徴は確認できなかった。ただし、試料1および地山では、SiO_2が68～70％と高い含有量を示すのに対し、試料2～7では60％前後の低い値を示す。また後者が前者に比べ Al_2O_3、灼熱減量(ほとんどH_2O)が多いのは、粘土鉱物の量比が多いためと思われる。

項 目	濃度(%)	酸化物換算	
		形 態	換算含有量(%)
Si	31·7	SiO_2	67.9
Al	8.4	Al_2O_3	15.9
Fe	2.4	Fe_2O_3	3.46
Ti	0.3	TiO_2	0.46
Ca	0.3	CaO	0.71
K	0.5	K_2O	0.84
Mg	1.1	MgO	1.50
Na	2.2	Na_2O	2.63
Ig-Loss	—	Ig-Loss	5.7

Tab.7　地山組成分析結果

3）岩種判定

(1) 顕微鏡視察

a．方法

先述のSD120床面採取土壌の分析と同じ方法を用いた。

b．結果

各試料の薄片を顕微鏡観察した結果を以下に示す。

◇試料1

容量比約40％の石英粒子、約20％カリ長石粒子、約10％の斜長石粒子と約30％のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。カリ長石粒子は内部が汚濁していることもあるが、比較的新鮮なものが多い。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがあり、また内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。シルト岩礫は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスは0.2mm大で比較的新鮮である。内部に発泡が見られる。

◇試料２

容量比20％の石英粒子、約20％のカリ長石粒子、数%の斜長石粒子と約60％のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多い。カリ長石粒子は比較的新鮮なものが多いが、割れ目に沿って変質鉱物を生じていることがある。またラメラ状のパーサイト組織が見られることがある。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがある。シルト岩礫は褐色の微細な粘度鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.5mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスは0.2mm大のバブルウオール型で比較的新鮮である。

◇試料３

容量比約20％の石英粒子、約20％のカリ長石粒子、約10％の斜長石粒子と約50％のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。まれにガラス包有物を有する火山岩起源と思われる石英が見られる。カリ長石粒子は内部が汚濁していることがあるが、比較的新鮮なものが多い。劈開が発達していることがある。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがある。シルト岩礫は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.5mm大の角張った石英やカリ長石のほか、角閃石や黒雲母を含む。火山ガラスは0.5mm大で、内部に粘土鉱物が生じていることがある。

◇試料４

容量比約20％の石英粒子、約20％のカリ長石粒子、約10％の斜長石粒子と約50％のシルト岩礫よりなる。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多い。カリ長石粒子は内部が汚濁していることがあるが、比較的新鮮なものが多い。パーサイト組織が見られることがある。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがあり、また内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。シルト岩礫は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.6mm大の角張った石英やカリ長石、角閃石や黒雲母を含む。火山ガラスは0.3mm大で比較的新鮮である。

◇試料５

容量比約10％の石英粒子、約20％のカリ長石粒子、数％の斜長石粒子と約60％のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスや炭化した植物片が認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。カリ長石粒子は内部が汚濁していることがあるが、比較的新鮮なものが多い。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがあり、また内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。黒雲母は部分的にバーミキュライトに置換されている。シルト岩礫は淘汰が悪く、褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスはY字型を示し、0.2mm大で比較的新鮮である。植物片は0.2mm以下の大きさで、細胞壁を明瞭に残すものもある。

◇試料６

容量比約20％の石英粒子、約10％のカリ長石粒子、数％の斜長石粒子と約70％のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。カリ長石粒子は内部が汚濁し

ていることがあるが、比較的新鮮なものが多い。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られ、内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。シルト岩礫は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン〜0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含み、一般に淘汰が悪い。黒雲母は風化変質によりバーミキュライト化したものが見られる。

◇試料7

容量比約10%の石英粒子、約20%のカリ長石粒子、数%の斜長石粒子と約60%のシルト岩礫よりなる。少量の黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。カリ長石粒子は比較的新鮮なものが多い。斜長石粒子は内部が汚濁して粘土鉱物をて粘土鉱物を生じていることもある。黒雲母は部分的にバーミキュライトに置換されている。シルト岩礫は淘汰が悪く、褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン〜0.2mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスはY字型を示し、0.3mm大である。

◇地山

容量比約30%の石英粒子、約30%のカリ長石粒子、約10%の斜長石粒子と約30%のシルト岩礫よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、またモザイク状のものもある。カリ長石粒子はラメラ状のパーサイト組織が見られることがあり、内部が汚濁していることもある。斜長石粒子はアルバイト双晶が普通に見られ、ミルメカイト組織が認められることもある。黒雲母は部分的にバーミキュライトに置換されている。シルト岩礫は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン〜0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスは0.4mm大で比較的新鮮である。内部に発泡が見られる。

(2) X線回折分析

SD120にみられるような特徴は確認できなかった。X線回折分析の結果、試料1〜7および地山の構成鉱物は、石英斜長石,角閃石,黒雲母・バーミキュライト・黄鉄鉱などであることが分かった。

4）考察

各試料について、観察結果を試料１、試料２〜７、地山の3グループに分けて特徴を比較する。

◇試料１

容量比約40%の石英粒子、約20%のカリ長石粒子、約10%の斜長石粒子と約30%のシルト岩粒子よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、花崗岩起源と思われる。カリ長石粒子は内部が汚濁していることあるが、比較的新鮮なものが多い。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがあり、また内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。シルト岩粒子は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン〜0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスは0.2mm大で比較的新鮮である。内部に発泡が見られる。

◇試料２〜７

容量比10〜20%の石英粒子,10〜20%のカリ長石粒子,数%の斜長石粒子と50〜70%のシルト岩粒子よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに黒色の炭質物や透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多い。カリ長石粒子は比較的新鮮なものが多いが、内部が汚濁していたり割れ目に沿って変質鉱物を生じていることがある。またラメラ状のパーサイト組織が見られることがある。斜長石粒子はアルバイト双晶が見られることがあり、また内部が汚濁して粘土鉱物を生じていることもある。黒雲母粒子は部分的にバーミキュライトに置換されていることがある。シルト岩粒子は一般に淘汰が悪く、褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.6mm大の角張った石英やカリ長石、時折角閃石や黒雲母を含む。炭質物は0.2mm以下の大きさで、植物の細胞壁を明瞭に残すものもある。火山ガラスは0.2～0.6mm大のY字状や平板状を示すバブルウオール型で比較的新鮮である。

◇地山

容量比約30％の石英粒子・約30％のカリ長石粒子・約10％の斜長石粒子と約30％のシルト岩粒子よりなる。少量の角閃石粒子や黒雲母粒子も含む。まれに透明な火山ガラスが認められる。

石英粒子は波動消光を示すものが多く、またモザイク状のものもある。カリ長石粒子はラメラ状のパーサイト組織が見られることがあり、内部が汚濁していることもある。斜長石粒子はアルバイト双晶が普通に見られ、ミルメカイト組織が認められることもある。黒雲母は部分的にバーミキュライトに置換されている。シルト岩粒子は褐色の微細な粘土鉱物や石英のなかに、数10ミクロン～0.3mm大の角張った石英やカリ長石を含む。火山ガラスは0.4mm大で比較的新鮮である。内部に発泡が見られる。

試料1・試料2～7・地山の試料の顕微鏡観察結果を比較してみると、官1および地山試料では、石英試料2～7、カリ長石および斜長石の各粒子の量が試料２～７より目だって多い。これは試料１および地山では花崗岩の初期風化生成物の混入率が大きく、土壌物質が少ないことを示している。それに対し、試料2～試料7ではシルト岩粒子が多く、炭質物などを含むこともある。このシルト岩粒子は固結度が高いものではなく、比較的新しい（第四紀）堆積岩の砕屑物と思われる。

今回の官道についての結果は、（検出された現状のなかでは）先のSD120にみられたような傾向を示さなかった。しかしながら、このことは当時の官道の基礎地業に際して、その土地に適合した手法（工法）で選択的に行われたということを示唆しているとも考えられるのではないか。また、今回の分析については、調査期間などの諸般の事情もあって、乱された試料のみの分析しかできなかった。試料のサンプリングの方法が一致できなかったことなどの問題点も残された。今後のデータの蓄積に期待したい。

参考文献

土質工学会土のはなし編集グループ編『土のはなしⅠ』技報堂出版　1993年
土質工学会土のはなし編集グループ編『土のはなしⅡ』技報堂出版　1992年
渡部徹也「古道について」『古文化談叢』第33集　古文化研究会　1994年
指宿市教育委員会『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)　1992年
大宰府市教育委員会『宝満山遺跡群Ⅱ～北谷ダム建設に係わる調査報告～』太宰府市の文化財第34集　1997年

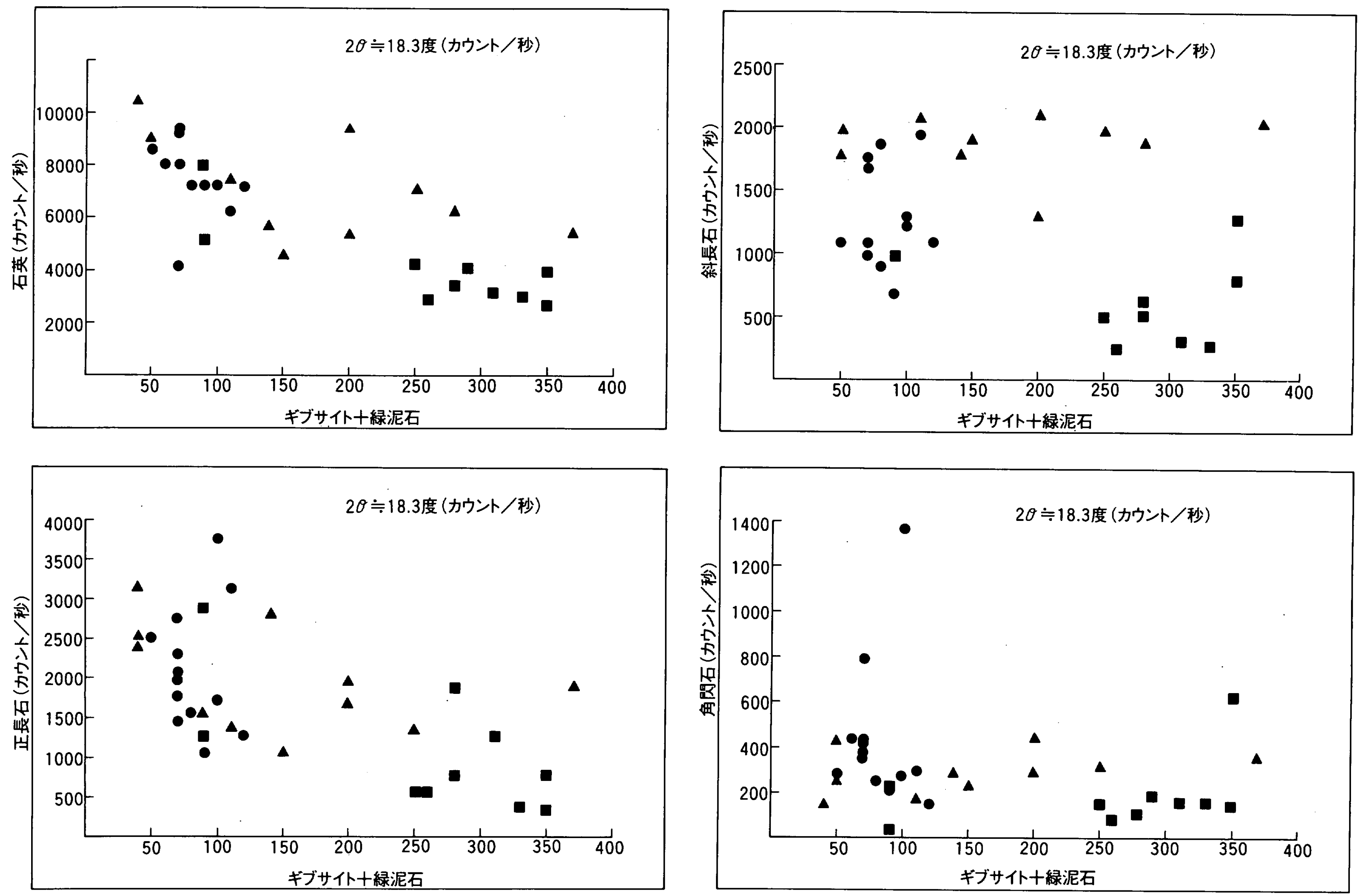


Fig.138　X線回折強度相関その1

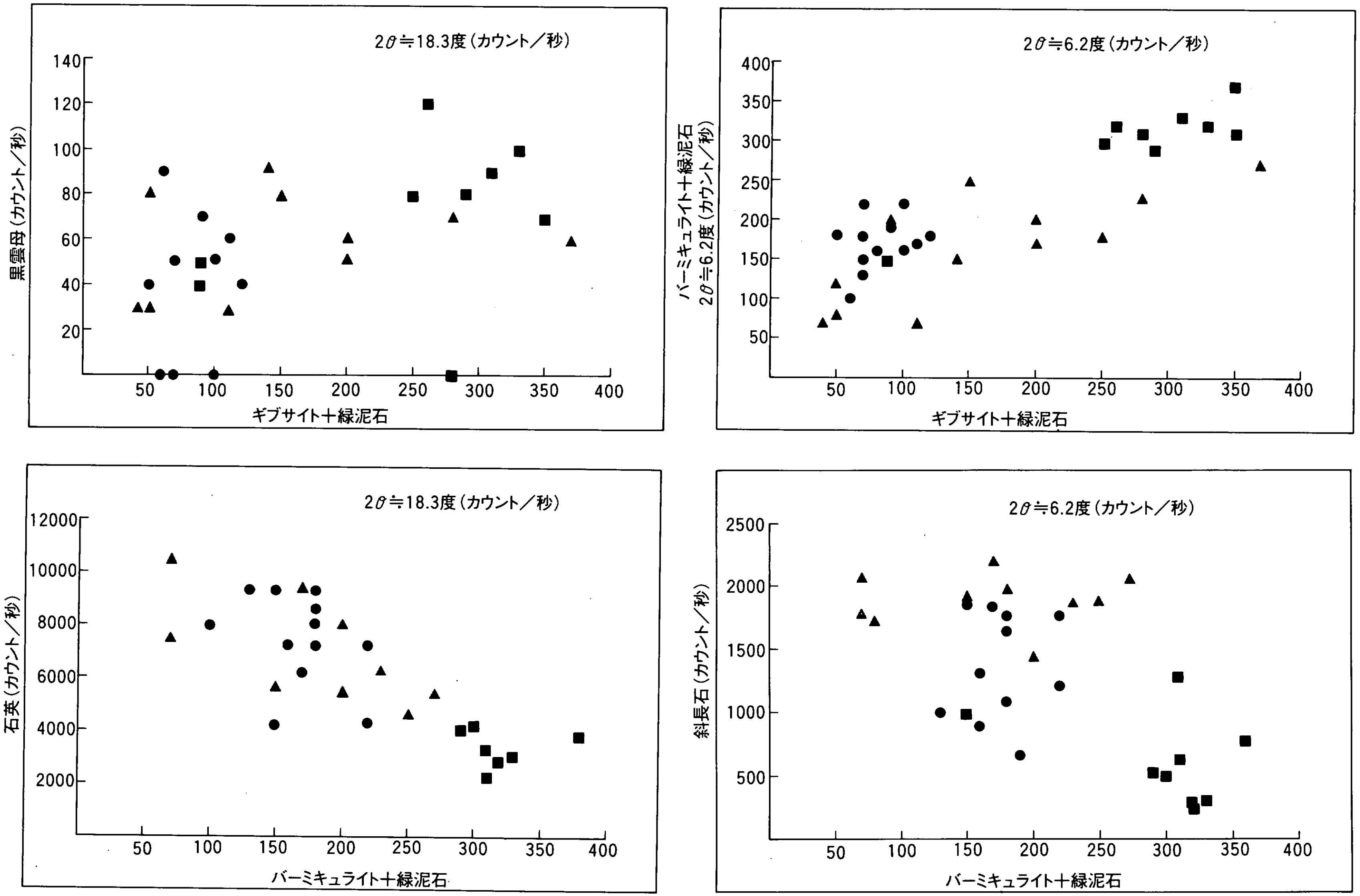


Fig.139　X線回折強度相関その2

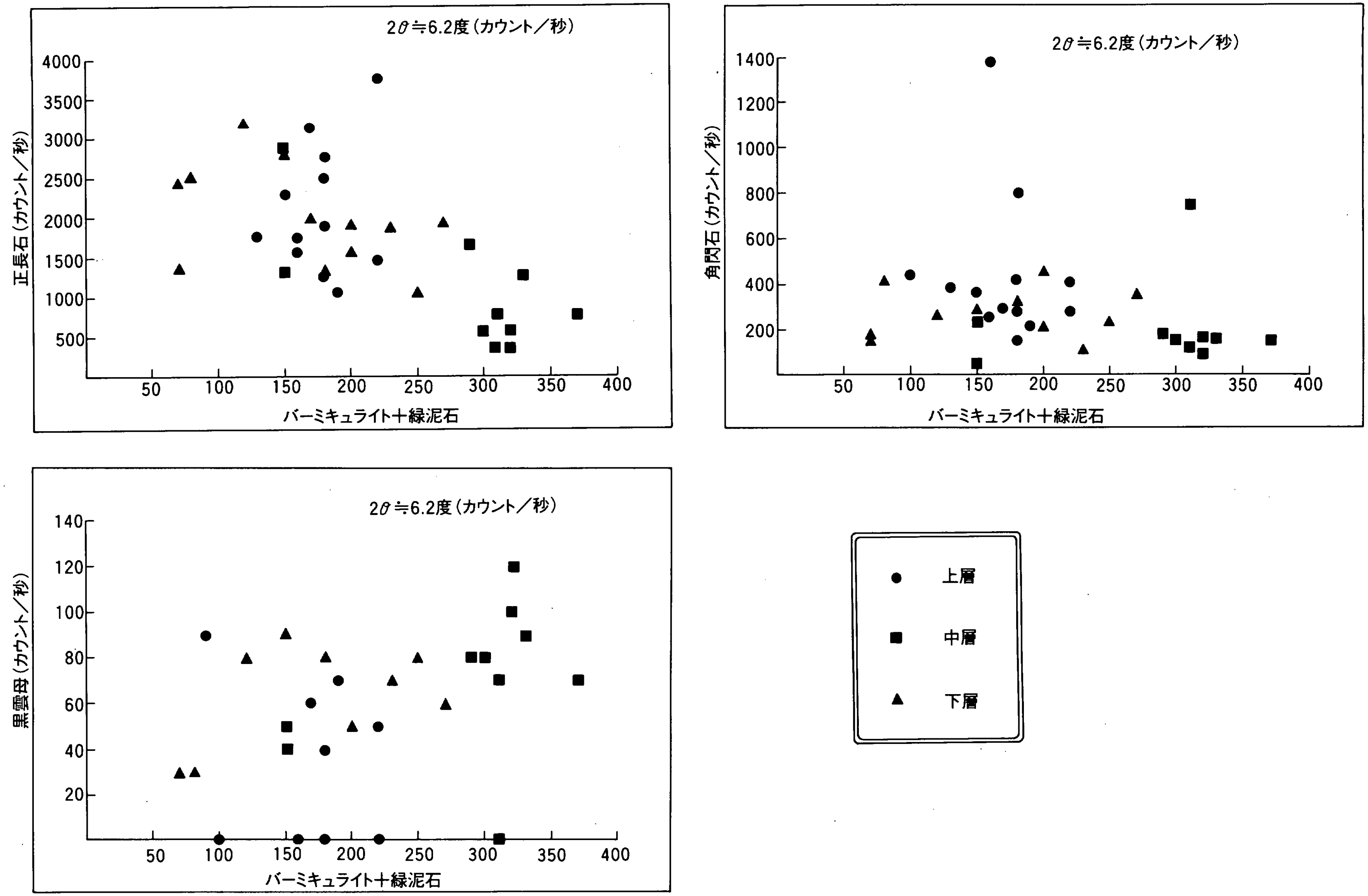


Fig.140　X線回折強度相関その3

2 土師器に付着した赤色物について

別府大学　　本田　光子

はじめに

古代の赤色物は、有機物であれば茜や紅花などの植物染料であり、無機物であれば朱やベンガラあるいは鉛丹などの鉱物顔料である。ただし、発掘調査で出土するものは長い埋蔵期間中に劣化するため色は変化する場合が多い。前者は残存すること自体が困難である。これに対して、後者の赤や、鉛丹は白色に変化するが朱やベンガラはほぼ変化しない。岡田地区出土の土師器に付着した赤色物は、上記の点から朱あるいはベンガラであることを考えて調査を行った。

試料

対象とした試料はNo.660(Fig.128)である。実体顕微鏡下で観察したところ、赤色物は土器の焼成後に付着したものであることが認められたが、その固着剤などを推察できるような状態は観察されなかった。赤色物が付着している部位が土器内面の立ち上がりに近接していて、蛍光X線分析装置の照射口に平面で接することが難しいため、赤色物をステンレス製カッターで約90mmgを採取し、検鏡と蛍光X線分析に供した。試料には胎土が含まれている。

顕微鏡観察

顕微鏡観察により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無などを観察するものである。赤色顔料としてはベンガラだけが観察された。出土ベンガラにはパイプ状、棒状、板(偏平)状、砕片状、顆粒状、不定形など様々な外観がある。本試料のベンガラには不定形な板状や破砕状のものが多く認められ、パイプ状粒子は含まれていなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。堀場製作所㈱製MESA-500を用い、15kV-440μA;50秒、50kV-20μA;50秒、真空の条件である。主成分元素としては鉄が検出された。他には珪素、アルミニウムなどが検出されたが、水銀や鉛は検出されなかった。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

まとめ

以上の結果から、土師器内面に付着した赤色物はベンガラであると考えられる。今のところ、用途は不明であるが、装飾に用いられたものではなく何らかの目的で使用するためのベンガラ容器あるいは道具(パレット)などが想定できよう。

筑紫野市内出土赤色顔料は大牟田西遺跡に次いで今回が２遺跡目である。大牟田西遺跡出土のベンガラには多量のパイプ状粒子が含まれていたが、本試料のベンガラには含まれていない。ベンガラの入手方法などを考えると、この違いは興味深いものであり、今後の類例に期待したい。

V　まとめ

1 岡田周辺の官道について

古代の官道については、その幅員が3mの倍数になることが多く、さらに直進性が高いといったように極めて規格的であったとの各遺跡の調査報告がなされている。本遺跡の場合は、9.0±0.2mの幅員を調査範囲にわたって維持していることや両側溝の規模も極めて規格的なものであること、また地業の痕跡が確認されていることなどから、まず駅路と考えて間違いないだろう。またその進路から、大宰府から長丘駅家を経由し、豊後方面に向かうルートと考えられる。大宰府から放射状に派生する官道は、総称して「西海道」と呼ばれている。このうち、大宰府から長丘駅家で分岐して豊後国に向かう官道については、「豊後道」・「豊後路」・「豊後ルート」などと仮称されている。このルート上には、『延喜式巻二十八』兵部省によると、「長丘」・「隈崎」・「広瀬」・「杷伎」・「石井」・「荒田」・「由布」・「長湯」・「高坂」の駅家名が記されており、駅馬各5疋が配置され豊後国府に至っていたことが確認できる。しかし、このルートに関する今日までの復元作業は歴史地理学的に推定がなされているものの、考古学的に具体的に検証された例はなく、今回の調査が初見となった。本遺跡の官道は、岡田地区を南東から北西方向に走っている。官道の検出された付近は、官道を境として小字境に位置している(註1)。後になって分かったことであるが、岡田地区の既存宅地は官道に沿って並んでおり、その基本的な土地の境界は現在まで生きていたことが分かる。本遺跡から東側については、SD4(南側側溝)と東遺跡のSD1とが同一のものであることが確認されているのみで、さらにその東側は土地景観が大きく改変されておりそのルートの復元は困難な状況である。また、周辺域にも駅路を想定し得る地名は確認されていない。

西側については、畦畔などの状況からOG 1点(Fig.141)付近までは確実に直進していたことが確認できる。しかしこの付近については、確認調査では黄褐色微粒砂の安定面は確認できるものの遺構は見つからなかったので、発掘調査は行っていない。このOG 1点からさらに西に向かうと、すぐに宝満川に至る。宝満川周辺は、すでに述べたとおり、氾濫原がかなり広範で付近の旧地形の復元を一層困難なものにしているが、官道が宝満川を渡った後にさらに直進したと仮定した場合に、小谷によって開析された永岡付近の舌状台地に突き当る。この付近の現地踏査を行ったところ、官道の切りとおし状の地形が確認された(Fig.141のOG 2点)。この地点は本遺跡の官道の主軸を延長したラインと0°30′の振れしかなく、官道はここに向かってほぼ直進していたと推定できる。ここで特徴的なのは、この付近がちょうど太宰府側の畦畔のラインと岡田側(夜須側)の畦畔のラインの延長とがクロスする付近に当たっていることである。このことは、岡田から直進した官道がこの付近を折れ点とし、進路を変えていたことを想定し得る。ちなみにこの付近は「永岡」という地名が残っており、これは「長丘駅家」の遺称地に当たる。また、このOG 2点を真っ直ぐに南下すると筑紫神社に至ることも極めて示唆的である。

またこの場合に、この点からさらに西進すると、「俗明院」(続命院の墾田があったと考えられる)を経由して「立明寺」に至る。「立明寺」には、「鈴倉・下鈴倉」という小字が残っており、軍事的な拠点施設と考えられている。これらの一連の検討は、日野尚志氏の研究(註2)に詳しいのでここでは触れないが、官道の沿線上にこういった拠点的な施設が想定し得るのも、あながち偶然ではなかろう。今後の周辺域の調査に期待したい。

註1　官道の南側側溝（SD 4）の付近を境に、北側が「東」、南側が「桑ノ元」となっている。

註2　日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第24号　1976年

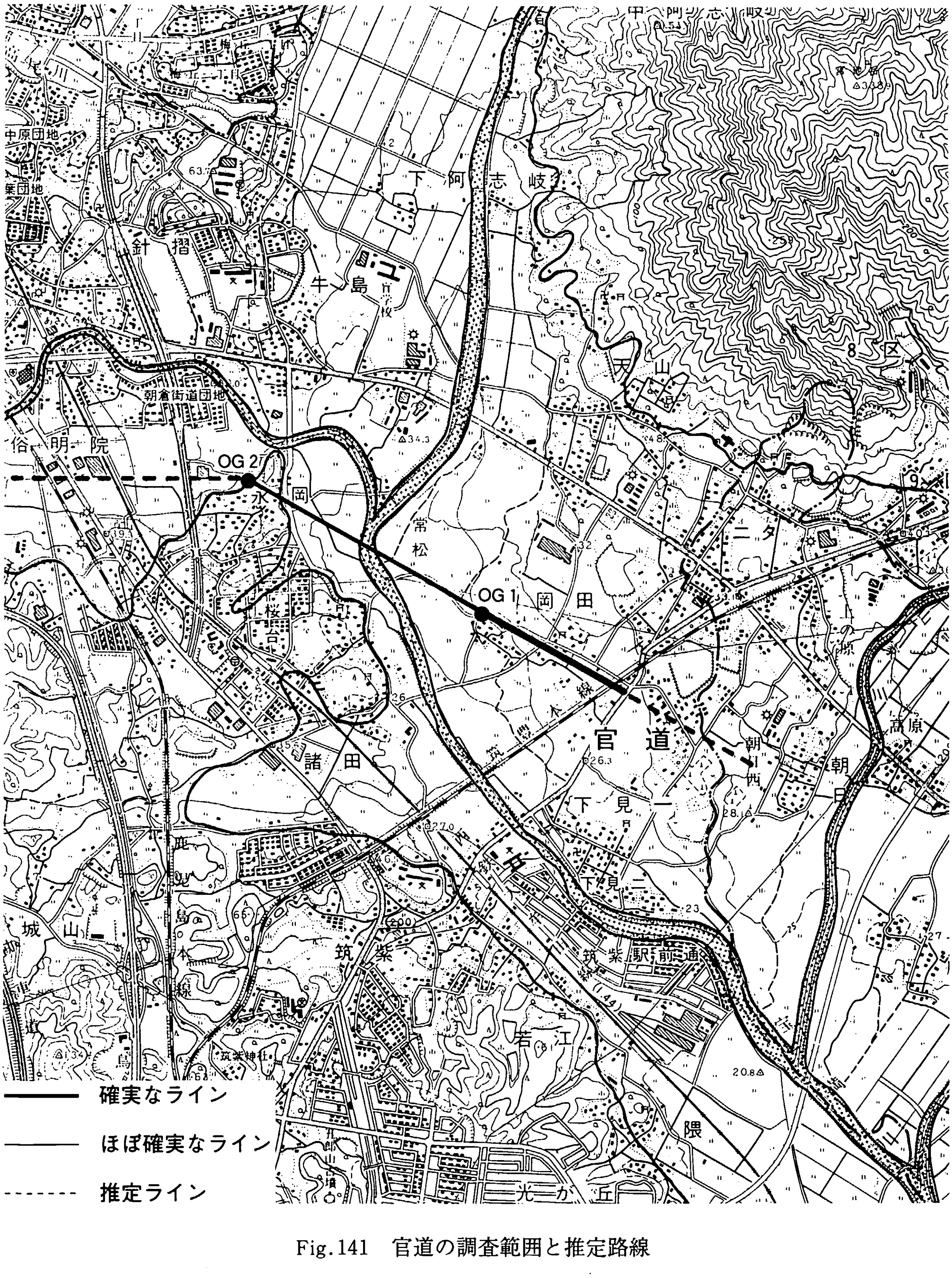


Fig.141　官道の調査範囲と推定路線

2 波板状圧痕について

私たちが造る構造物はすべて大地に支えられている。これらの構造物は二次的な崩壊を防ぎ、長い間その状態を維持していくために、さまざまな工夫が行われている。土壌は土粒子・空気・水から構成されるが、とくに水の飽和による侵食の影響が大きい。軟弱な地盤の対策は、土質工学的には以下のように分類されている。

1　軟弱地盤の機械的な改良
　　軟弱土そのものを排除し良質土と置換する方法
2　排水および締め固めなどによる密度の増大
　　排水や強制的に圧縮をかけることで地盤中の間隙比を減少させ土の強度を増す方法
3　化学的処理による固結
　　主に石灰やセメント系の化学的安定材を土に添加し、強制的に性質を改良する方法
4　補強工法
　　土中に補強材（砂・鉄・繊維など）を混入して、地盤を補強する方法

『令義解[巻六]』営繕令には「凡津橋道路、毎レ年起二九月半一、当界修理、十月使レ訖、其要路陥壊停レ水、交廃二行旅一者、不レ拘二時月一、量差二人夫一修理、非二当司能弁一者申請」とあり、改良・修理の責任がその国の国司にあること、徴発の原則が夏の洪水期の終わった9月半ばから10月にかけてであることの規定がなされており、必要に応じて改良・修理が施されていたことが看取できる。

最近では古代官道の調査が各地で行われ、その事例が盛んに発表されるようになってきており、官道の築造工法に関するデータの蓄積や検討が数多くなされてきている。先述のこれらの方法が、古代における工事に際して採用されていた可能性は充分考えられることである。

このことは、本遺跡の官道の路面にある凹凸や溝が黄褐色粘質土で人為的に埋められている状況からも推定できる。このことによって、道路の面の認識をより一層困難なものにしており、今のところ、実際にどのような場所でどのような工法を採用し、またどのような維持・管理がなされていたのかについては不明な点が多いのが現状である。

本遺跡の場合も、官道の築造から廃道になるまでの時期的な変遷については確実な面としては把握できなかった。道路の築造に関連の深い「波板状圧痕」(註1)や硬化箇所が部分的に確認されているのみである。ただし、それらは検出状況に特異な点がみられた。

①官道から建物区への進入付近や低湿地に至る直前付近・建物区内の井戸（SE 1）への通路付近などに部分的に存在する
②圧痕下に0.5～1cm大の礫を含んだ締固め痕跡がみられる
③圧痕の方向は、官道の主軸方向に対して規制を受けていない
④圧痕は棒状ものを半規則的に交差させ、交互に組み合わせたように検出される
⑤圧痕の下部に直交する溝がある場合がある、といった点である。

大宰府周辺の西海道については、山村信榮氏の一連の検討に詳しい(註2)。本遺跡の場合は、地形が西に向かって平地から緩やかな微高地に変化しており、遺跡の西端付近では、オープンカット工法が採られている。これは、氏のいうAタイプとBタイプに相当すると考えられ、官道の直線性を維持するために立地条件に応じた対応が図られたことが推察できる。

また、波板状圧痕については、飯田充晴氏による東の上遺跡（東山道）の調査成果(註3)からの検討により、「道路築造時に道路母体の路床として意図的に計画され、その上面の路面（舗装）をより永く維持させるために行った古代の土木技術の一工法である」と提起がなされ、また、硬化面の作出方法については、「丸太状の工具を用いて波板状（凹凸）に塡圧を行った後に、舗装材に相当する黒色土を締固めながら凹凸面を覆い路面を形成した」との工程復元を行っている。

これに対し早川泉氏は、国分寺市周辺の東山道の検討により、「直線を意識した官道を築造した時点でのものではなく、重量物の運搬に用いられた枕木の痕跡である」という考え方を示された(註3)。

さらに近江俊秀氏は、その両者の検討から「大きさがほぼ均一の楕円形の土坑列が一定間隔で並ぶもの（枕木の痕跡）」と「場所により凹凸の形状が異なったり、不整形のもの（基礎工事）」とに分別を行っている(註5)。

岡田地区のケースと対比してみると、①で示したように通行頻度の高いと考えられる建物ブロックへの導入部分かSD50や東遺跡(註6)SD4のような脆弱地盤に至る付近のごく一部にしか見られない点は、他の遺跡に見られる路面中央にて連続的に検出されたケースとは必ずしも一致していない。飯田氏の見解とは異なるが、東の上遺跡の場合は、圧痕内には硬化した黒色土（舗装材）が充塡されていたのに対して、本遺跡では、しまりのない淡黄褐色粘質土ブロックまじりの埋土であった。このことなどを考えれば、波板状圧痕は道路の最初の基礎地業に伴うものというよりは、8世紀中頃以降に柵列や掘立柱建物群が形成されたときの官道の改良に伴うものと考えたほうが自然であろう。③のように官道の主軸と一致していないことなども、このことの根拠として考えられる。

②については、圧痕下部の硬化土は2～3cmの厚さをもち、しっかりと固化した状態であった。これは緩やかに掘り込まれた状態で硬化しており、通行による自然固化とは考えにくい。硬化土中には0.5～1cm大の小礫が多く含まれており、突き固めて転圧をかけた時点で補強材として混入されているものと考えられる。この硬化部分は必ずといっていいほど圧痕の下部に伴って検出されており、両者は作業工程上の関係が深いものと想定できる。

また、④で示した検出状況については、古代から現代に至る工法のなかにその性格を示唆するような事例が確認できる。

1つ目は、軟弱地盤上の方法で「筏基礎」と呼ばれるものである。これは、丸太を筏状に並べてその上に土をかぶせ、基礎とするものである。地下水位が高いのと軟弱地盤のために、丸太を敷き並べることによってその浮力で荷重を軽減・分散させ、地盤に加わる力を小さくすることを目的としている。

2つ目は、「敷粗朶（しきそだ）工法」と呼ばれる方法である。軟弱地盤の上に堤防や防波堤などを築く際に行われる工法で、「粗朶（そだ）」と呼ばれる竹や木の枝などを束ねてつなぎ合わせたものを、地面や海底に沈めてその上に捨て石を乗せるといったものである。これは、地盤中への沈下の防止と荷重の分散を図るといった効用があるとされている。この方法は、すでに水城の築堤に際して採用されたことが林重徳氏によって報告されている(註7)。

これらの方法は、軟弱地盤に対する荷重の分散・軽減という観点において共通している。これを波板状圧痕と即座に結び付けることはできないが、検出された位置（①）や状況（④）から考えると、可能性としては充分考えられるものである。

また⑤については、今のところ溝の機能を推測する手がかりが確認できなかった。

これまでの一連の状況から、本遺跡の波板状圧痕は「通行頻度が高く軟弱になりやすい箇所に二次的に行われた補強痕跡」であると解釈される。さらにこの圧痕は、「枕木状の補強材」の痕跡である可能性が高いと考えられる。ただし、それぞれ遺跡の立地や土壌の種類が異なるように、地業の方法や材料によって生じた地域性を一元的に把握することは非常に困難であり、現段階ではあくまで岡田における一例として提示しておくに留めたい。

註１　道路などに伴って波板状に検出される凹凸面のことを意味しており、本義的には「波板状凹凸面」などの名称が適当なのであるが、本遺跡の場合はその下部から締固め痕跡（凹凸面）が確認されたため、混同を避けるために「波板状圧痕」と呼称することにした。

註２　山村信榮「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号　1994年

註３　飯田充晴「埼玉県所沢市東の上遺跡」『日本考古学年報』42　1989年
飯田充晴「道路築造方法について～埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして」『古代交通研究』第2号　1992年

註４　早川泉「古代道路遺構に残された圧痕～波板状凹凸面の性格について～」『東京考古』第9号　1991年
早川泉「古代道路遺構の虚像と実像～東山道武蔵路の調査を通して～」『古代交通研究』第6号　1997年

註５　近江俊秀「古代道路遺構の構造」『文化財学論集』1994年
近江俊秀「古代道路の構造（1）～考古学における道路跡の研究の展開とその成果をめぐって～」『道路』　1996年
近江俊秀「古代道路の構造（2）～発掘された七道駅路とその構造～」『道路』1996年
近江俊秀「古代道路の構造（3）～古代の道路構築方法をめぐる諸問題～」『道路』1996年
近江俊秀「古代道路遺構の形態からみたその性格」『古代交通研究』第7号　八木書店　1997年
近江俊秀「道路跡一覧」『古代交通研究』第7号　八木書店　1997年

註６　筑紫野市教育委員会『岡田地区遺跡群Ⅰ　東遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第51集　1996年

註７　林重徳「水城土塁の地盤工学的研究」『大宰府史跡』平成7年度発掘調査概報　1996年

参考文献

井尻正二・新堀正行『地学入門』築地書館　1976年
土質工学会土のはなし編集グループ編『土のはなしⅠ』技報堂出版　1993年
土質工学会土のはなし編集グループ編『土のはなしⅡ』技報堂出版　1992年
足立紀尚ほか『地盤の科学～地面の下をのぞいてみると～』講談社　1995年
軟弱地盤対策入門編集委員会『軟弱地盤対策入門』土質工学会　1985年
吉本彰『道路工学～舗装編～』学献社　1966年
能城正治・林田師照・安川郁夫『土質力学の基礎』技報堂出版　1983年
小谷昇ほか『アスファルト混合物の知識』技報堂出版　1976年
菊川滋ほか『最新アスファルト舗装技術』山海堂　1995年

3 地割の設計について

今回の調査では、すでに第Ⅲ章で述べたように、官道と掘立柱建物群を区画する柵列群(註1) などがセットで検出されている。これらの遺構どうしの関係を一定の基準で評価し、その結果から推定される地割の設計について推定する手がかりとするために座標計算を行った。

(データの抽出と条件の設定)

計算に使用する座標値は、S1/100の測量原図から抽出した。このとき、溝は上場の芯心の点、柵列群は任意に設定した中点、掘立柱建物はその四隅の数値を採ることとした。採取された座標値はTab. 8・9に、測点の位置については遺構配置図（付図1）中に丸数字で示し、説明の際に用いるそれぞれの柵列の呼称については、便宜上、凡例に示すとおりのA～G軸とした。計算については、角θは$\tan^{-1}$、距離は$a = \chi \cdot \mathrm{cosec}\,\theta$で行った。また、それぞれのブロックの面積は、柵列群によって区画されるブロックどうしの境界が不明確で計算では誤差を生じるため、その内法をプラニメーターで計測したものを比較材料とした。

今回は、建物群の詳細な変遷は把握することができていないが、立て替えが少ないことなども含めて考えると、比較的短期間に築造されたものであるということがいえる。それぞれの遺構の概要についてはここでは省略するが、官道が施工された後に、柵列群と掘立柱建物群が築造され、少なくともそれらは8世紀中頃から9世紀初頭にかけては同時に併存していたものと推定される。

それぞれの地割関連遺構の配置をみると、本遺跡の主要な計画線は、①官道の主軸（N－58°36′－W）と②SD50・SD120柵列群の主軸（N－45°33′－W）の2つに分れることが確認される。掘立柱建物群については、それらの2つの計画線に相互に影響を受けて築造され、その配置にかなりのゆがみを生じていることが確認される。この場合、建物の主軸方向によってグルーピングを行ったとしても、それは必ずしも時期差を示していないということであり、それぞれの遺構どうしの関係を非常に把握しにくくしている。このため、ここでは基準となる中軸線からの比較は行わなかった。

なお、本報告書で使用される各遺構の距離や軸方向などのデータは、ここで計算したものをそのまま掲載している。

(地割についての検討)

計算結果を整理して、ブロックの位置関係を示したものがFig. 142である。

これによると、縦軸はそれぞれの主軸方向がほぼ一致していることが分かる。距離関係について地割が最も整っているD軸のラインでみてみると、SD50～A軸間・A～B軸間がほぼ同等で、B～C軸間はそれらと異なっていることが分かる。それらは、前者が36.5～39.8m、後者が49.5mの数値を示し、約1:1.25～1.35の比率である。C軸の延長ラインは、官道の北側側溝(SD 1)に設置されたSX 1とSX 2の中点を経由してSB 1の東梁と一致しており、それに対する西梁のラインはB軸から38.5mの付近に位置している。これはSD50～A軸間・A～B軸間とほぼ同等の数値であり、縦軸については38m前後の値で割り付けられていたことが確認できる。ただし、この値はそれに平行しているF軸・SD120のラインでは異なったものとなっており、地割のゆがみがかなりみられることも考慮に入れておく必要がある。

また、縦軸のブロック間から部分的にそれと並行する柵列群が検出されていることなどを含めて考えると、幅10～11ｍの余剰帯(註2)があるものと推測できる。この場合に、SB１はそのなかにすっぽりと収まってしまう格好になる。このことは、SB１北側の現況の畦畔がちょうど幅10～11ｍで地割と一致していることなどからも看取できる。

横軸については、SD120・D軸・E軸がほぼ一致している。これらは、官道に対して斜行した分のゆがみを蛇行しながら修正しているような箇所が随所に確認でき、斜行しつつも官道の主軸方向を強く意識していたことが理解できる。ただし、官道に近いE軸のみは、初めから官道の主軸に一致させている。この状況は、ブロック内の掘立柱建物にも影響しており、官道の近くのSB4・13・14だけは官道の主軸方向に規制を受けるといった特徴がある。これは、官道の北側にのみに見られる現象であり、官道と北側ブロックの関係が深いということが考えられる。それぞれの距離関係について最もゆがみの少ないＢ軸の場合では、D－E間とE－F間・F－G間が58.0～61.2ｍとほぼ同等であり、60ｍ前後の値で割り付けられているものと推測される。このことは、官道北側のA・Bブロックのエリアが、その路面の範囲まで含んで計画されている状況を示すものと考えられ、官道北側ブロックと南側ブロックの性格の違いがうかがえる。

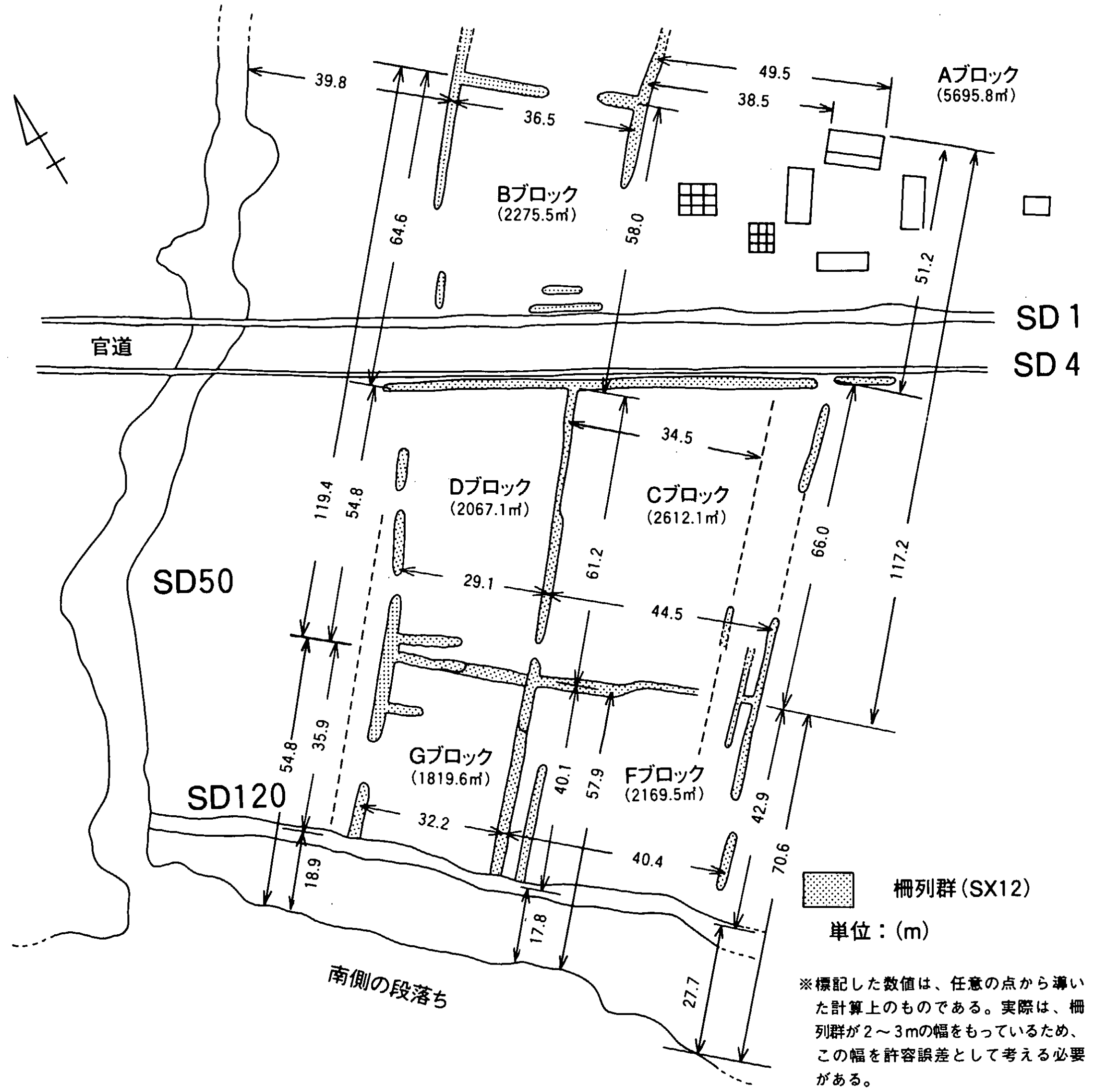


Fig.142　地割模式図

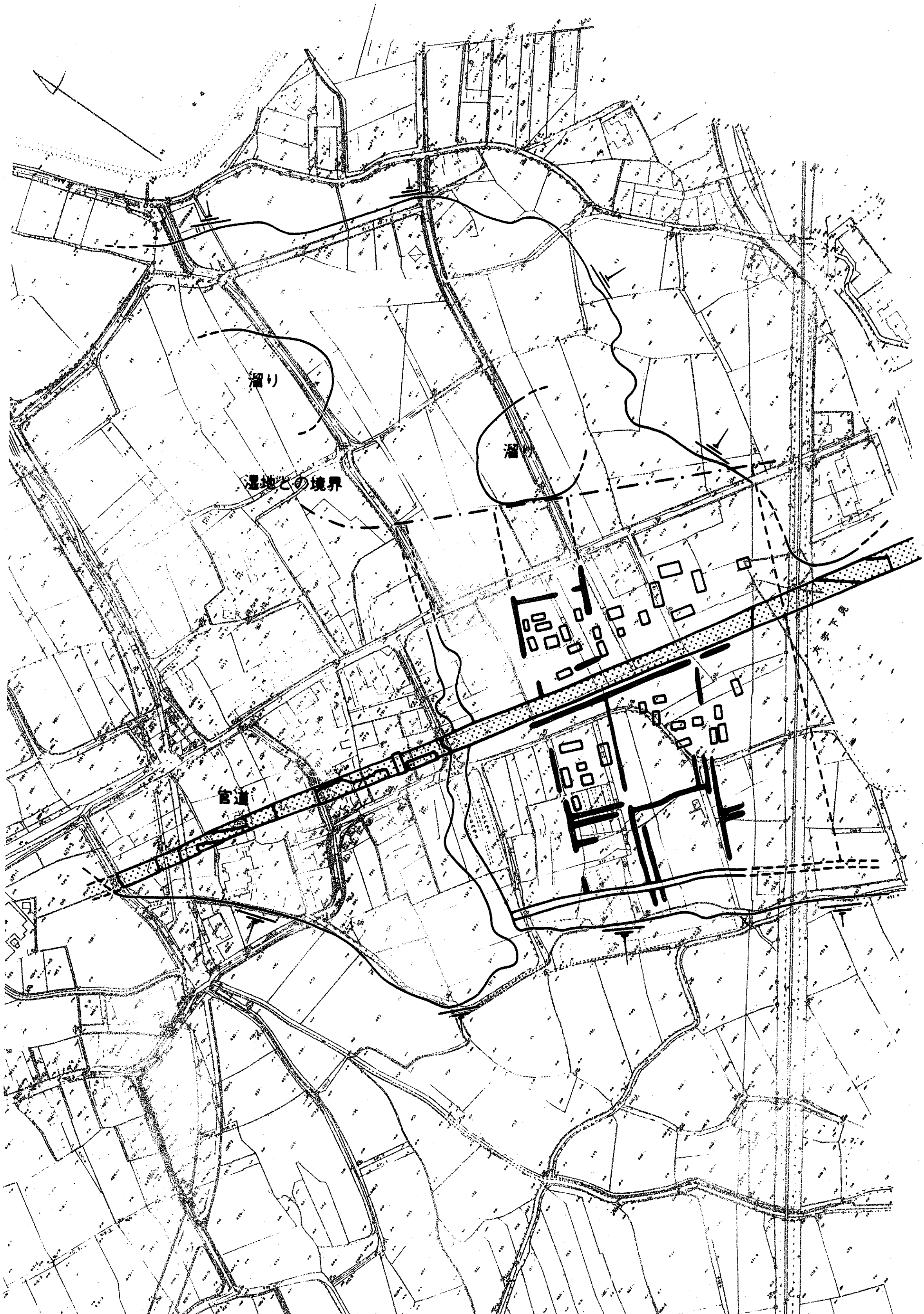


Fig.143　岡田周辺景観概念図(S1/2,000)
Fig.144　岡田地区現況測量図(平成4年)(S1/2,000)

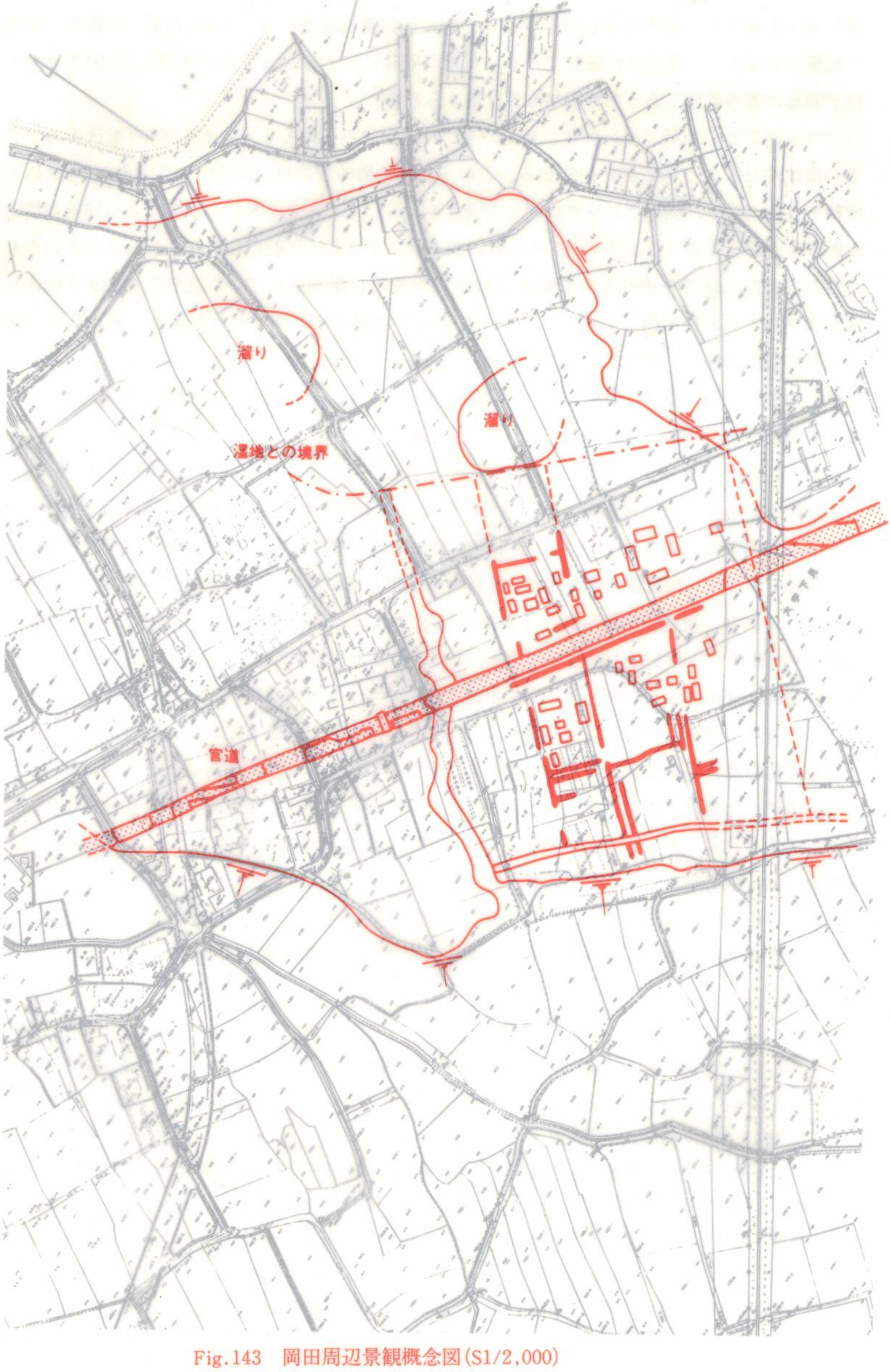


Fig.143　岡田周辺景観概念図(S1/2,000)

Fig.144　岡田地区現況測量図(平成4年)(S1/2,000)

また、今回は示していないが、D軸などにみられるような柵列群が途切れている部分・柵列群の折れ点・それぞれの建物どうしの各ブロック内での位置関係が、およそ3m(1丈)の倍数に相当して配置されるという規則性が確認できる。官道の幅員ピークも9m±0.2mであり、この1丈という単位が測地の基本単位であった可能性も充分考えられる。

ブロックごとの面積については、B・E・Fブロックにみられるような約2,000㎡前後のエリアが、その標準的なものであることが分かる。このうちで特徴的なのは、Aブロックがそれの2倍以上の面積を占めており、他のブロックに対して優位性をもっている点である。このことは建物の構造にも影響を及ぼしており、Aブロックのものは他のブロックとは比較にならないしっかりとしたものである。また、SB1を中心としてSB5とSB9が対称的に配置されている点やBブロックのA－B間をAブロック側に展開した場合にSB1の西梁付近に相当する点なども含めて考えると、SB1が地割に深く関与した建物であることが認識できる。

以上のことから、周辺の測地は、2つの軸線があることによって若干のゆがみをもちつつも、38m×60m前後のやや変形した長方形(約2,000㎡)を基本単位としておよその設計がなされているものと考えられる。

この結果をふまえて旧地形にプロットし、想定できる範囲での地割を示したものがFig.143・144である。東側の復元線はSB1を中心として展開した。この付近の旧地形は確実なデータがないため不明確であるが、JR筑豊本線が通過する付近に想定している。ここは、現在の岡田－下見の字境に当たっており、現況の地割は対する西側のSD50とほぼ並行している。また、北側の復元線は、官道沿いのE軸からSD120のすぐ南の段落ちまでの距離を展開した。この付近は、北～東側に広がる後背湿地と黄褐色粘質土を主体とする安定土壌とのちょうど境目付近に当たっている。

つまり官道の軸線に対する地割の振れは、周辺の土地景観と一致しており、何らかの測地のモデルと地形的な制約とを融合をさせた結果として形成されている可能性が高いと考えられる。ただし、これらの斜行地割が周辺域にどこまで影響を及ぼしているのかは、現況の畦畔とも一致しない点が多く、とくに北側（おもにⅡ区の範囲）については明治以降の耕地整理(註3)によりその地割が破壊されている箇所が多いため、不明確な点が多い。

またこの場合は、占有されるエリアは約二町四方ということになる。恐らくはこの周辺域でこのスペースを確保できるのはこの場所だけであろう。このことは、本遺跡の性格づけの上でも非常に興味深い点である。

註1　本報告書で使用される「柵列群」という名称は、多数のPitにより一定のブロックを形成している柵列を意味する仮称である。単体の柵ではないと考えられるので「群」とした。しかし、その具体的な構造などは不明な点が多い。

註2　神崎郡神埼町の塚原遺跡でも本遺跡と同様の柵列群が検出されている。報告では、この空間は道（通路）と位置づけられている。
神埼町教育委員会『塚原遺跡』神埼町文化財調査報告書第44集　1995年

註3　地元住民からの聞き取り調査による。
＊筑紫野市教育委員会『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集　1986年

点　名	X　軸	Y　軸	点　名	X　軸	Y　軸
1	51922.3	−40918.0	28	51894.3	−41051.0
2	52040.4	−41124.0	29	51880.7	−41056.0
3	51924.0	−40911.0	30	51871.5	−41043.0
4	52070.7	−41169.0	31	51927.9	−40953.0
5	51917.7	−40921.0	32	51916.6	−40965.0
6	52044.1	−41124.0	33	51996.8	−40984.0
7	52027.6	−40979.0	34	51955.7	−41021.0
8	52003.6	−40999.0	35	52024.1	−40981.0
9	51991.9	−41005.0	36	52012.9	−40967.0
10	51984.9	−41009.0	37	52003.8	−40957.0
11	51964.9	−41030.0	38	52000.7	−40953.0
12	51958.6	−41035.0	39	51979.1	−40989.0
13	51955.1	−41037.0	40	51973.2	−40976.0
14	51944.9	−41045.0	41	51977.6	−40996.0
15	51941.8	−41046.0	42	51969.8	−40980.0
16	51918.3	−41065.0	43	51855.2	−40995.2
17	51910.8	−41073.0	44	51854.6	−41025.2
18	51904.2	−41078.0	45	51951.7	−40948.8
19	52006.0	−40946.0	46	51943.4	−40933.4
20	51988.2	−40963.0	47	51938.9	−40918.9
21	51939.4	−41009.0	48	51932.5	−40921.1
22	51919.2	−41026.0	49	51904.1	−40989.7
23	51915.3	−41029.0	50	51890.4	−40993.2
24	51905.2	−41038.0	51	51888.8	−40996.0
25	51899.3	−41041.0	52	51881.1	−41004.1
26	51872.4	−41061.0	53	51933.3	−41050.3
27	51892.2	−41045.0	54	51924.3	−41040.3

Tab.8　検出遺構任意の点座標値 1

点　名	X　軸	Y　軸
55	51930.3	−41053.3
56	51922.8	−41044.9
57	51922.9	−41037.9
58	51918.5	−41032.4
59	51923.3	−41060.1
60	51917.9	−41053.8
61	51911.9	−41030.8
62	51891.6	−41002.7
63	51876.3	−41003.5
64	51868.7	−40993.1
65	51874.2	−40904.3
66	51867.6	−40995.3
67	51927.6	−41101.5
68	51859.7	−41032.3
69	51847.7	−41025.3
70	51990.8	−41042.9
71	51982.4	−41031.4
72	51977.9	−41026.1
73	51928.8	−40942.9
74	52014.3	−41058.9
75	52004.1	−41063.3
76	51875.6	−40853.0
77	51874.0	−40866.3
78	51971.3	−41126.6
79	51994.1	−41111.3
80	52050.4	−40094.2

※76・77は東遺跡SD1の座標値。

点　名	X　軸	Y　軸
81	52086.9	−40075.2
82	52045.8	−40058.7
83	52030.4	−40067.1
84	51909.2	−40980.4
85	51912.9	−40985.5
86	51900.2	−40987.6
87	51908.2	−40978.9
88	51899.5	−40987.5
89	51896.8	−40987.3
90	51886.8	−40974.4
91	51993.1	−41006.1
92	52051.8	−41013.3
93	51986.3	−40965.3
94	51946.1	−40895.5
95	52009.4	−41060.9
96	51963.4	−40966.4
97	51964.8	−41092.1
98	51922.4	−41022.1
99	51870.7	−40983.3
100	51987.2	−41007.0
101	52019.5	−40975.9
102	51889.6	−41090.0
103	51867.0	−41067.4
104	51834.2	−41044.0
105	51959.4	−40993.8
106	51932.6	−40949.2

Tab.9　検出遺構任意の点座標値２

4 墨書土器の文字について

岡田地区より出土した墨書土器の一覧については、Tab.12～14に示すとおりである。本遺跡においては合計69点の墨書土器が出土しており、時期的にはNo.㊽の「長」を除いては、概ね8世紀中頃から9世紀初頭に属するものと考えられる。このうちの判読が可能で特徴的なものについては、Tab.10・11に示した。同一種の字体としては「傔」・「大」・「α記号」(註1)が多い傾向にあり、またなかには「廳」や「官」などの公的なニュアンスを持つ墨書土器も含まれており、興味を引かれる。ただし本報告書では、墨書土器の検討についての具体的な検証方法を担当者が持ち合わせていないため、以下、それぞれの特徴ならびに解釈を管見の範囲内で示すことのみにとどめた。なお、以下に示す墨書土器の判読ならびに解釈・整理方法については、柴田博子・松川博一両氏の貴重なご教示によるところが大きい。

墨書文字「傔」について

「傔」という墨書については、(管見の限りでは)他遺跡からの出土例がみられない。解釈については憶測の域をでないが、古代の文献上で「傔」と連語になるものは、「傔従」・「傔人」・「傔仗」以外は確認できなかったため、これらのいずれかの略記である可能性が考えられる。

「傔人」は、『延喜式大蔵』(文献23)の遣唐使・遣新羅使・遣渤海使の組織の一員として、『続日本紀』(文献22)に示す遣渤海使の組織の一員としてその名がみられる。また『続日本紀』(文献21)にある節度使の記事には、節度使が使・判官・主典・医師・陰陽師で構成され、「使已以下傔人已上」が帯剣を許されているとみえ、使には「傔人」が従っていたことが分かる。

「傔従」については『延喜式主税』(文献25)に示されるように、大宰府では大宰帥以下史生以上、各国では守以下史生以上が部内を巡行する際の人数の規定が確認できる。国司の部内巡行については、現存する天平年間の『正税帳』にその記録が確認できる(註2)。これらにみえる「従」・「将従」の人数規定は、『延喜式主税』の「傔従」の規定と一致しており、同じ意味合いで捉えられるものと考えられる。『万葉集巻十七』(文献24)の冒頭には、大伴旅人の「傔従」が詠った歌との詞書きがある。具体的には「三野連石守」のみ姓名が確認でき、他の9首の作者は姓名が伝えられていない。「傔従」の歌は10首あり、作者が10人と仮定するならば、『延喜式主税』(文献25)規定の大宰帥の「傔従」10人と人数が一致する。また「将従」は、『正税帳』では国司の部内巡行に限らず確認することができる(註3)。「将従」を連れているのは赴任する国司・都からきた使者・隣国からの使者など多様な状況であること(註4)から、「将従」は正規の官職名ではなく(官人が)個人的に従えているものであろう。したがって「傔従」も同様に、従者を意味するものと推測される。

「傔仗」については、通説では「軍事的性格をもつ官職に任じた官人個人に給せられる護衛兵の如きものであったが、考選・事力・公廨田が史生に准ずるとされたためか、国司の一員として国衙政務にも携わったらしい」(註2)と考えられており、広義の国司の一員であったことがうかがえる。また、「仗」という字が付されていることからも明らかなように、傔仗は武官的要素が強い官であったものと認識できる。「傔仗」は大宰帥や三関国守などの官人個人に付され、推薦権(実質的決定権)を官人自身が有し、帥・守との個人的な結びつきをもとに任命されており、私的主従関係が強いものと考えられる。ちなみに史生については、守に勤務評定権はあるが推薦権・採用権はない。

史料には和銅元(708) 年に大宰帥に8人・大弐と尾張守に各4人・三関国守に各に2人を給した(後に近江守・陸奥守・出羽守・鎮守府将軍・陸奥出羽按察使を含む) のを初見(文献1) として、その後の嘉保二(1095) 年まで(文献20) は確認できる。8世紀の傔仗については、位が分かる例は残念ながら見当たらないが、『類聚符宣抄』所載の11世紀の事例(文献17～19) では、大宰帥の傔仗はみな「正六位上」の位を有している。随身は従七位下に過ぎないから、傔仗の方がはるかに位が高いといえる。10世紀末の例では肥前守が従五位下、出羽権掾が正六位上であり、いわゆる受領クラスは五位くらいである。したがって、正六位上という位は国司の目・史生よりも高いということになる。

大宰府・諸国では、武官の最上位は軍団の軍毅（郡司の一族）である。国司のなかでは守・介が軍事面も担当することになっている。大宰府や三関国などの軍事上の要地、または危険を伴う地域では、帥・守のボディーガードとしては勿論のこと、帥・守の任務のうち軍事面を充分に遂行することを目的として、それをサポートするものとして「傔仗」が給されたのではなかろうか。

本遺跡出土の墨書文字「傔」が、これまで述べた3つのうちのどれかの略記であると仮定するならば、「使」にしか付されない「傔人」よりは、国司の「傔従」あるいは帥の「傔仗」のいずれかを考えた方が自然であろう。さらに「傔」のほとんどが、掘立柱建物群の中心であるAブロックの付近から出土しているということを含めてこの遺跡に最も深く関与した文字であると仮定するならば、「傔仗」の可能性が最も高いということが指摘できる。

その他の墨書文字について

「大」と「α記号」については、「傔」とともに本遺跡の主体を占める墨書土器である。「大」は器物の大小を示しているものとも考えられるが、両者とも意味については不明である。

④については、上下の2文字は摩滅により判読はできなかったが、中の2文字は「次田」であると考えられる。『和名類聚抄』によると、古代では本遺跡が所在する御笠郡は御笠郷・長岡郷・大野郷・次田郷の4郷の記載があり、「次田」は「次田郷」を指すものであろう。ちなみに「次田」の地名は現在の筑紫野市二日市に小字として残っており、この付近が「次田郷」に想定されている。

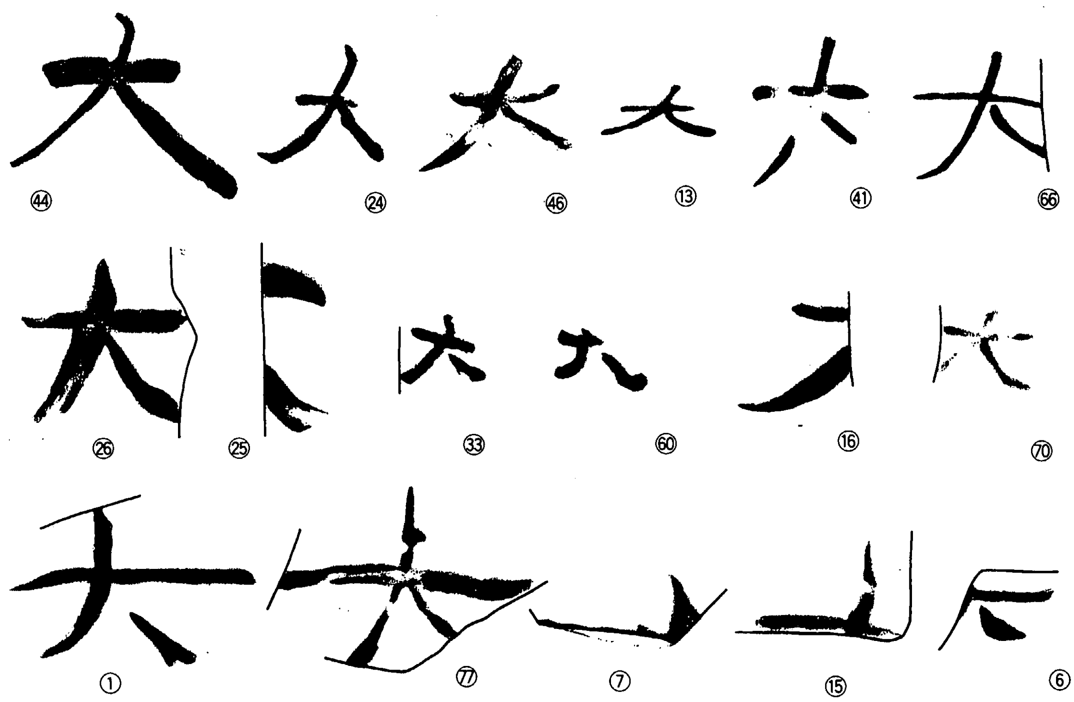
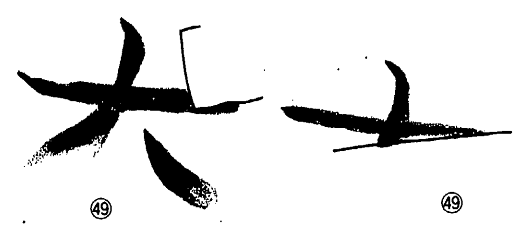
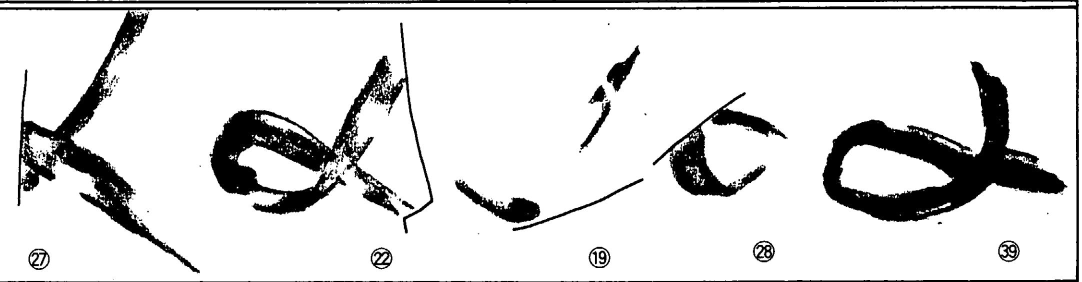
③については「廳ヵ■」と考えられる。1文字目は当初「夜」とも想定したが、「まだれ」と推測されたため「廳」と判読した。2文字目は「廳」の連語になるものが推測できなかったため、判読できなかった。この墨書土器は、Aブロックが官衙でいう政庁域に相当するものであることを示唆しているものと考えられる。この点は、遺構配置の状況からも同様の結果が看取できる。

㊼は、漢字2文字を短冊状に四角く囲むものであり、墨書の構成パターンとしては珍しい。文字については、1文字目は大宰府史跡第26次調査出土木簡（49・52号）に類例があり運筆が類似していたため、「遠」と判断した。2文字目は「家」を想定したが、器表の状態が良くないので定かではない。

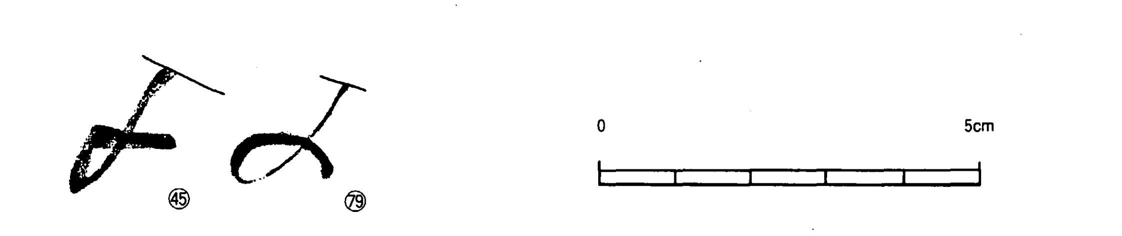
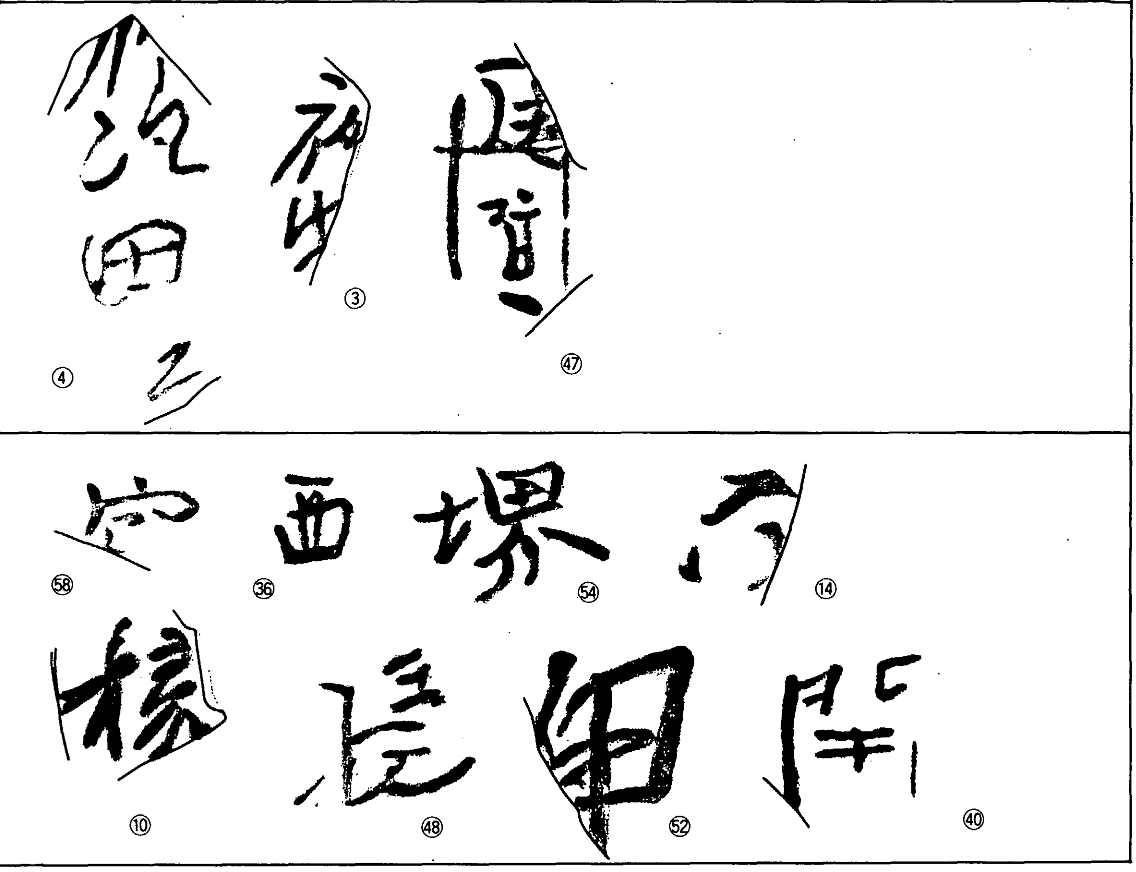
㊽は、摩滅しているため不明瞭な点が多いが、「官」の可能性があると考えられる。冠の部分のみは明瞭である。

㊱は、明瞭に「西」と判読できる。Bブロック前のSD1（官道側溝）からの出土である。1点しか確認されていないため詳細は不明であるが、これはまず方位を示すものとして良いだろう。

㊹も明瞭に「堺」と判読できる。SD50の西方(正確には北西方向) のSD1(官道側溝) から出土した。

文字	墨書文字 (S1/1)
傔	
大	
酒	
「α記号」	

Tab.10　墨書文字分類表 1 (S1/1)

文字	墨書文字 (S1/1)
「α記号」	
その他	

Tab.11　墨書文字分類表 2 (S1/1)

ややこじつけがましいかもしれないが、この付近がAブロックを中心としたエリアからみての境界として認識されていたことを示していると考えられる。当たらずしも遠からずというところであろうか。

⑩については、大宰府史跡第26次調査で出土している習書木簡（102号）と比較した結果、運筆に類似点が認められたため、「掾」と判断した。国司の三等官の「掾」を示すものであろう。

㊽については、明瞭に「長」と判読できる。現在のところ何を意味しているのかは不明である。この資料だけは9世紀中頃の所産と考えられ、やや後出的なものである。

墨書の部位による特徴

墨書の部位および方向について分類したものは、次のとおりである。頻度が高いものには下線を付した。また、括弧内はそれぞれの項目ごとの比率（小数点2位以下切り捨て）を示している。

坏・椀（不明1点は除外）

- 口縁部 5 (7.1%)
  - 外面 1(20.0%)
    - 正位 1 (100%)
    - 逆位 0 (0%)
    - 横位 0 (0%)
  - 内面 4(80.0%)
    - 正位 4 (100%)
    - 逆位 0 (0%)
    - 横位 0 (0%)
- 体部 9 (12.8%)
  - 外面 6(66.6%)
    - 正位 3 (50.0%)
    - 逆位 1 (16.6%)
    - 横位 2 (33.3%)
  - 内面 3(33.3%)
    - 正位 2 (66.6%)
    - 逆位 1 (33.3%)
    - 横位 0 (0%)
- 底部 47 (67.1%)
  - 外面(高台内を含む) 44 (93.6%)
    - 中央 25(56.8%)
      - 外向 4 (30.7%)
      - 内向 1 (7.6%)
      - 横位 8 (61.5%)
    - 周縁 13(29.5%)
    - 全体 1 (2.2%)
    - 不明 5 (11.3%)
  - 内面（見込み） 3 (6.3%)
    - 中央 2 (66.6%)
    - 屈曲部 1 (33.3%)
    - 全体 0 (0%)
    - 不明 0 (0%)

蓋

- 天井部 7 (10.0%)
  - 外面 7 (100%)
    - 外向 2 (28.5%)
    - 内向 0 (0%)
    - 横位 2 (28.5%)
    - 不明 3 (42.8%)
  - 内面 0 (0%)

高坏

- 脚部 1 (1.4%)
  - 外面 0 (0%)
  - 内面 1 (100%)
    - 正位 0 (0%)
    - 逆位 0 (0%)
    - 横位 1 (100%)

これによる本遺跡の傾向としては、坏・椀の場合は底部外面（高台内を含む）に、蓋の場合は天井部外面に書かれる可能性が高く、他遺跡の諸例とも同じような状況を示している。ただし、口縁部内面に正位で書かれるもの（⑥・⑪・㉝・㊵）が見受けられる点は注目を引く。これは、墨書をするうえでは非常に不自然な位置と方向である。文字種は「大」という文字にのみに限られているが、先に行った文字種による分類との相関はみられないため、個人の癖とも考えにくいのではないだろうか。今後の検討を要する。

出土遺構による特徴

本遺跡の墨書土器の主なものは、Fig.145に示した。特徴としては、ロの字型配置建物を有するAブロックからの出土が極めて多いという点である。先の重複になるが、他のブロックに対してAブロックが優位性をもっていることは、墨書土器の出土量比からみても明白である。

また出土遺構を細かにみてみると、墨書の種類に偏りがみられることも興味深い。SB 1の背後にあるSK 4 は、「■次田■」・「廳ヵ■」・「酒」の他に「大」4点・「α記号」5点と「α記号」が多い。

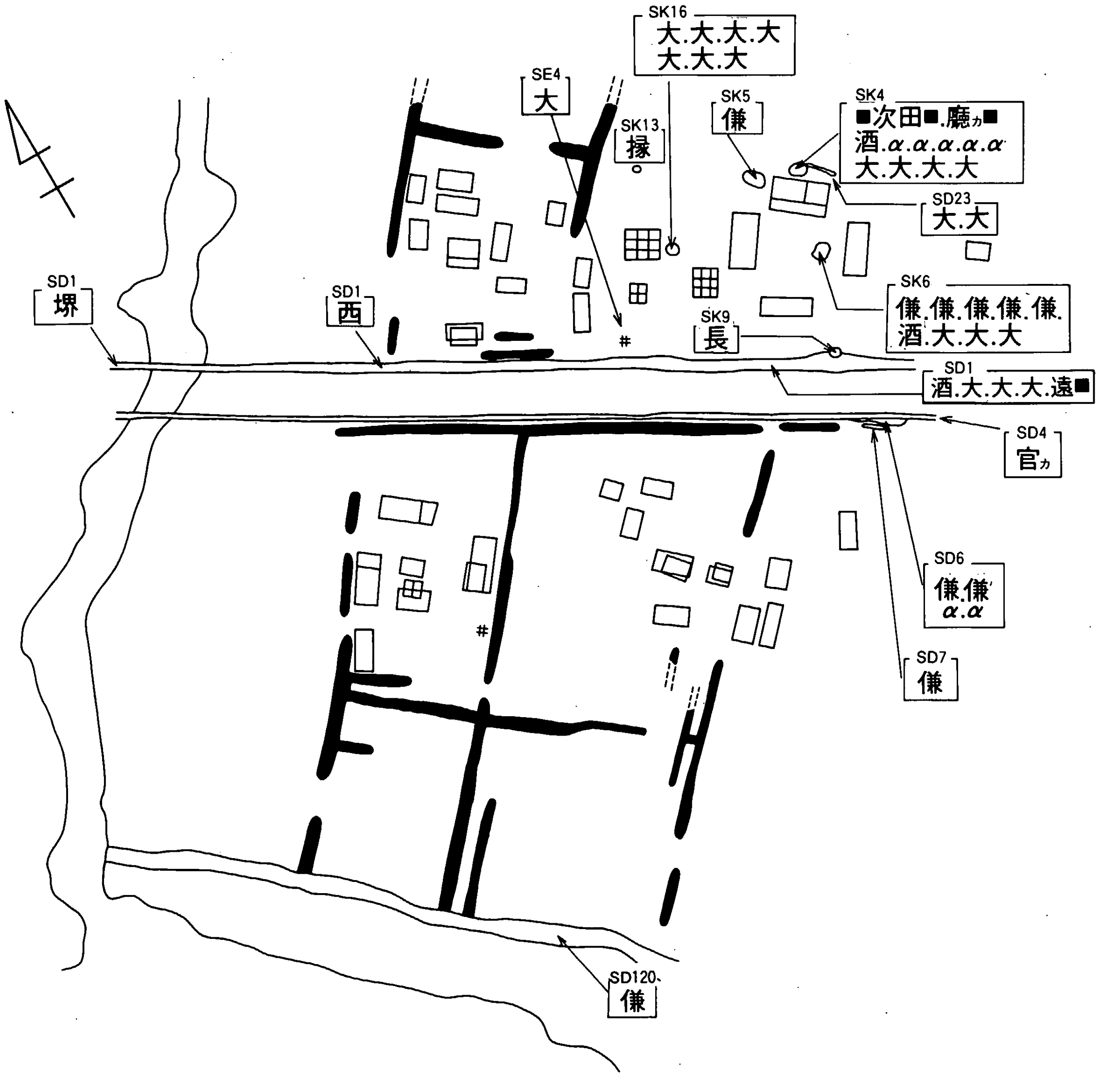


Fig.145　墨書土器出土遺構概念図

またロの字型配置の掘立柱建物(SB 1 ～ 4)に囲まれた広場的なエリアにあるSK 6 は、「酒」・「大」3 点の他は「傔」5点が出土しており、「傔」ばかりが目にとまる。さらにSB 9 の横に位置するSK16からは「大」のみが7点と「大」のオンパレードである。

現段階では墨書そのものの意味に不明点が多いので、これらの状況に対する明確な解答は持ちあわせていない。ただ、これらの一連の特徴は、Aブロックの掘立柱建物の性格を暗に示唆しているのかもしれない。

註 1　本報告書で使われる「α記号」という単語については、本遺跡で特徴的にみられる墨書「∝」について適当な名前が無かったので、便宜的につけた仮称である。

註 2　以下のとおり。

『駿河国正税帳』守1・目1・史生1・従6/守1・掾3・史生3・従12/・・

『豊後国正税帳』守1・従3/掾1・従2/史生1・従1/・・

『薩摩国正税帳』守1・従3/史生2・従2/医師1・従1/守1・目1・医師1・従6/・・

『和泉監正税帳』正1・令史1・史生2・将従7

『但馬国正税帳』目1・将従2/史生2・将従2/医師1・将従1/守1・将従3/・・

『周防国正税帳』掾1・史生1・将従3/掾1・目1・史生1・将従5/守1・目1・史生2・将従7/・・

註 3　『但馬国正税帳』によると、以下のとおり。

任所へ赴く二箇国伝使「因幡国守従五位下丹比真人家主、将従九人」

「出雲国掾従六位下県犬養宿禰黒麻呂、将従三人」

二度幣帛を奉るに依り遣わす駅使「使従七位下中臣葛連于稲、将従二人、…」

免罪赦書をもたらし来る駅使「丹後国史生正八位上桧前村主稲麻呂、将従二人、…」

註 4　青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注『続日本紀』1（岩波書店新日本古典文学体系）393頁　1989年

註 5　最近の「傔仗」に関する論文としては、次のものが発表されている。

永田英明「傔仗について」『川内古代史論集』6　1992年

春名宏昭「傔仗小考」『律令国家官制の研究』吉川弘文館　1997年

＊永田氏は、「蔭子孫・位子などの出身法上のルートとして諸トネリなどと同様の位置づけにあるもの」としている。また、断定はしていないながらも関剗などの軍事的拠点と傔仗の関係を指摘している。

＊春名氏は傔仗の補任手続きなどの再検討を行い、「傔仗は通説にいわれる大宰帥などに給った身辺警護の随身ではなく、政務繁多の官司への官員増置として設置されたものであり、官司内での位置づけとしては史生相当の雑任官であった」としている。また、「史生が令文上では民政的な文書処理を職掌とするのに対し、傔仗は国衙政務のみならず軍政面をも担当すべきもの」であったと位置づけている。

また、史料中に登場する「傔人」・「傔従」・「傔仗」の記事は、巻末に一覧を掲載した。

参考文献

井上薫「傔仗」の項『国史大辞典』第5巻吉川弘文館　1985年

諸橋徹次『大漢和辞典（修訂版）』巻一　大修館書店1984年のp.892「傔」。

法書会編輯部『五體字類（改訂新版）』1994年のp.130「廳」。

九州歴史資料館『大宰府史跡出土木簡概報（一）』　1976年

九州歴史資料館『大宰府史跡出土木簡概報（二）』　1985年

墨書No	個体No	遺構	種別	器種	時期	墨書位置	方向	判　読	備　　考
1	84	SD1	須恵器	蓋	8世紀中頃～後半	撮み脇	外向	大	
2	483	SK46	土師器	?	?	底部外面	中央	也ヵ	
3	366	SK4	土師器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	廳ヵ■	漢字2字
4	365	SK4	土師器	?	?	底部外面	中央	■次田■	漢字4字
5	371	SK4	土師器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	傣	
6	396	SK6	土師器	皿	8世紀後半	口縁部内面	正位	大	
7	130	SD23	土師器	坏?	8世紀後半	底部外面	中央	大ヵ	
8	370	SK4	土師器	坏?	8世紀後半?	底部外面	中央	?	
9	83	SD1	土師器	?	?	底部外面	中央	○	
10	428	SK13	土師器	?	?	底部外面	周縁	掾	
11	375	SK4	土師器	坏?	?	口縁部内面	正位	大ヵ	
12	100	SD1	須恵器	蓋	8世紀代?	撮み脇		酒	「酒」の異体字
13	442	SK16	土師器	?	?	体部外面	正位	大	
14	131	SD3	須恵器	坏	8世紀後半～末	内面見込み	中央	?	
15	402	SK6	土師器	皿	8世紀後半	屈曲部外面	正位	大 or α 記号	
16	93	SD1	須恵器	坏	8世紀湖後半～末	高台内	中央	大?	
17	117	SD4	須恵器	坏	8世紀中頃～後半	高台内	周縁	?	「○」と「一」を組み合わせた記号?
18	372	SK4	須恵器	蓋	?	内面見込み	中央	?	
19	374	SK4	土師器	坏?	8世紀後半?	底部外面	中央	α 記号	
21	484	SK46	土師器	?	?	底部外面	周縁	?	文字?
22	360	SK4	土師器	坏	8世紀後半	底部外面	中央	α 記号	
23	395	SK6	須恵器	坏	8世紀中頃～後半	高台内	中央	酒	「酒」の異体字
24	453	SK16	土師器	坏or皿	8世紀後半?	底部外面	中央	大	

Tab.12　墨書土器一覧表1

墨書No	個体No	遺構	種別	器種	時期	墨書位置	方向	判　読	備　　考
25	445	SK16	土師器	皿？	？	底部外面	周縁	大？	
26	444	SK16	土師器	皿	8世紀後半？	底部外面	中央	大	
27	376	SK4	土師器	皿	8世紀後半	底部外面	中央	α記号？	
28	123	SD6	須恵器	坏	8世紀後半～末	体部外面	横位	α記号？	
29	82	SD1	須恵器	皿	8世紀後半	底部外面	中央	？	
30	94	SD1	須恵器	蓋	8世紀中頃	撮み脇		月？	文字か記号か不明「月」のように見える。
31	401	SK6	須恵器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	傔	
32	392	SK6	須恵器	蓋	8世紀後半～末	撮み脇		傔	
33	443	SK16	土師器	坏	？	口縁部内面	正位	大	
34	405	SK6	土師器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	傔	
35	359	SK4	須恵器	坏	8世紀後半～末	体部外面	逆位	酒	「酒」の異体字。
36	85	SD1	須恵器	坏	8世紀後半～末	底部外面	周縁	西	Aブロックから見て「西」か？
37 38	126	SD6	土師器	坏	8世紀後半～末	体部外面 底部外面	正位 中央	傔	二ヶ所に「傔」
39	124	SD6	須恵器	坏	8世紀後半	体部外面	正位	α記号	転用硯（高台内の全面を転用）
40	393	SK6	須恵器	坏	8世紀後半～末	高台内	周縁	？	
41	373	SK4	土師器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	大	
42	451	SK16	須恵器	坏	8世紀後半～9世紀初頭？	高台内	中央	？	
43	403	SK6	土師器	坏	8世紀後半～末	底部外面	中央	傔	
44	450	SK16	須恵器	坏	8世紀後半～末	高台内	中央	大	
45	346	SK4	土師器	蓋	8世紀中頃	撮み脇		α記号	
46	440	SK16	土師器	坏	8世紀後半	外面口縁付近	正位	大	
47	102	SD1	須恵器	坏	8世紀末～9世紀初頭	高台内	中央	遠■（家ヵ）	漢字2字を短冊状に四角く囲むものと考えられる。
48	425	SK9	土師器	椀	9世紀中頃	体部外面	横位	長	

Tab.13　墨書土器一覧表2

墨書No	個体No	遺構	種別	器種	時期	墨書位置	方向	判　読	備　　考
49	347	SK4	須恵器	蓋	8世紀後半	撮み脇		大	撮みを挟んで上下に「大」2ヶ所墨書。
50	491	SK70	土師器	?	?	底部外面	中央	?	「人」偏の漢字であろう。
52	667	Pit2377	土師器	?	?	底部外面	中央	?	
53	78	SD1	土師器	坏	8世紀後半	底部外面	全体	?	複数の文字？
54	99	SD1	須恵器	坏？	?	底部外面	中央	堺	Ⅰ区の西側の段落ち付近にあたる。
56	286	SD120	須恵器	蓋	?	底部外面	周縁	?	記号？
57	397	SK6	須恵器	坏	8世紀後半	体部内面	逆位	傔	
58	118	SD4	須恵器	坏	8世紀中頃(3/4～)	高台内		官カ	
59	77	SD1	土師器	坏	8世紀後半	底部外面	中央	?	「払い」のみ確認できる。漢字
60	101	SD1	土師器	坏？	?	口縁部内面	正位	大	
65	98	SD1	土師器	坏	8世紀代	底部外面	中央	?	
66	337	SE4	須恵器	蓋	?	撮み脇		大	
67	387	SK5	土師器	高坏	8世紀代？	脚部内面	横位	傔	
69	128	SD7	土師器	坏？	8世紀代？	体部内面	正位	傔	
70	116	SD4	須恵器	坏	8世紀中頃～後半	高台内		大	
71	642	Pit121	土師器	?	?	底部外面	中央	傔？	
72	379	SK5	土師器	坏	8世紀後半	底部外面	中央	?	
73	97	SD1	土師器	坏	8世紀後半	底部外面	中央	?	
74	143	SD47	須恵器	坏	8世紀中頃(2/4～3/4)	底部外面	中央	戯画カ	
75	689	SC1付近	須恵器	坏	8世紀代？	高台内		？(傔カ)	「人」偏の漢字
76	303	SD120	須恵器	坏	8世紀中頃から後半	高台内	周縁	傔	
77	129	SD23	土師器	坏	8世紀後半	体部外面	正位	大	
79	367	SK4	須恵器？	坏？	8世紀後半？	底部外面	中央	α記号	

Tab.14　墨書土器一覧表3

5 岡田地区遺跡群を読む

これまでは、今回の調査成果をまとめてきた訳であるが、現段階の状況のみで本遺跡の性格を決定することは非常に難しい問題である。ここでは今回得られた特徴を整理し、方向性を提示することで結びに代えることとしたい。

本遺跡の特徴としては、次の点が考えられる。

① 大宰府から東南の方向に向けて、駅路が宝満川を渡河する付近が至近距離にあり、陸路・水路ともに兼ね備えた交通の拠点である。

② 遺跡の周辺域は低湿地状をなしており、柵列群により占められるエリアは約方二町四方が想定される。

③ 遺跡の東方は御笠郡－夜須郡の郡境付近と考えられる。

④ 遺跡の主体は、8世紀中頃から9世紀初頭にかけての時期である。遺跡の存続時期は比較的短期であり、古墳時代（5世紀後半代）の集落との連続性はない。

⑤ 検出された官道については、SD50付近の整地層中の遺物が掘立柱建物群の時期と一致すること、官道の側溝に時期を同じくして付属施設（SX 1・2）が設けられること、また官道の地業痕跡が建物群や付属施設を意識して行われていることなどから、掘立柱建物群が設置された段階で、再整備（改良）が行われたものと考えられる。なお、官道の施工時期については、少なくとも8世紀中頃までは溯ると考えられるが、未確認である。

⑥ 掘立柱建物は、2×4間ないしは2×5間を基本としており、そのすべての掘り方が80cm以下で柱は20cm程度と考えられる。形状は円形・不整楕円形のものが多い。また、掘立柱建物群の立て替えがほとんど行われていないことなどを考えると、常置したというよりはむしろ臨時的に設置されたものと考えられる。

⑦ 掘立柱建物群は柵列群によって仕切られており、検出範囲内では6つのブロックを形成している。柵列群は建物の時期と同時期と考えられる。その構造については不明確な点が多いが、官道（SD 4）南側に設置された柵については、斜めに打ち込んだ補助杭を持つなどの強固な構造で、他のものとは異なった状況である。

⑧ ロの字型に配置される掘立柱建物を始めとするAブロックの建物については、他のブロックのものに対して面積的にも、大きさの上でも優位性をもっている。このことは、墨書土器の出土傾向からも看取できる。また、このブロックについては、官道部分も含めた領域を占有していたことが想定される。

⑨ 墨書土器は、「傔」(10点)・「大」(19点)・「α記号」(7点）などが多くみられ、この他は「廳ヵ■」・「掾」・「■次田■」・「遠■（家ヵ)」などがある。

⑩ 出土土器のなかで、土師器の坏ｄが比較的多く確認できる。また、官道北側のA・Bブロックからは坏・皿などの供膳形態が多く、甕・甑などの煮沸形態は比較的少ない。これに対して南側のブロックからは生活空間的な様相が強い。

⑪転用硯・水滴・緑釉陶器・ベンガラが付着した土師器・石帯(巡方)などのいわゆる官衙的(？)な遺物が出土している。

本遺跡の性格を位置づけようとした場合に注目したいのは、①に示したように交通上の拠点に位置しているという点である。また、⑤,⑦,⑧,⑨,⑩,⑪についても一応は公的性格が強いものと考えられるし、また⑤に示したように建物の設置にあたって官道の再整備（改良）を行っている点などを考慮すれば、広義の官的な施設の風格は有しているものといえる。

まず④に示した時期的なものを考えた場合には、「郡家関連の施設」かまたは「郡に関係する官人の居宅」などが想定できる。これらの場合には、御笠郡家または隣郡にあたる夜須郡家に関連する施設が想定されるが、両者ともにその郡家本体の状況が確認されておらず、また第Ⅴ章−3ですでに述べているように官道（駅路）を含めた地割の設計がなされていることなどから考えると、「郡家関連」と言い切ってしまうにはやや不自然な感じを受ける。

また、一連のエリアの設計を念頭に置いた場合には、駅路とセットになっていることが極めて特徴的であり、交通に深く関与した施設であることが推察できる。交通に関わる施設として考えられるのは「駅家」である。想定し得る駅家としては、「長丘駅家」がある。「長丘駅家」の遺称地としては、岡田から宝満川を渡った西岸約1.5kmの付近にある筑紫野市大字「永岡」が当たる。高橋誠一氏は、長丘駅家の位置を文字どおり「永岡」付近に推定しながらも、永岡付近の地名に痕跡が見られないことから、周辺の岡田・鞭掛付近までを一応の候補地に含めた微妙なニュアンスで示されている(註1)。しかし、当地にも駅家を推定し得るような地名は残っておらず、また④に挙げたように、関連遺構の時期が8世紀中頃から9世紀初頭の比較的短期間であることなどを考えると、(いずれかから移転された、あるいは移転した可能性もないわけではないが）どうも「駅家」にはなじみにくい。今のところおよそ確実な駅家の調査事例は、山陽道の布勢駅家（小犬丸遺跡）(註2)と野磨駅家（落地遺跡）(註3)がある。このうち前者については『日本後紀巻13』大同元（806）年の記事にみえる「瓦葺き・粉壁」の駅館であったことが確認されているが、これはあくまで山陽道沿線の場合であって、他の駅路については駅家のイメージはほとんど分かっていないのが実態である。

さらに、⑥に示したように各々の建物の大きさを考えた場合には、計画的につくりだされた「開発集落」とも想定できる。最近の数多い発掘調査例のなかには、集落の竪穴住居からも墨書土器を始めとして石帯や硯などが出土しており、⑩で示したような官衙的な遺物が出土しているからといって官衙（あるいは官衙関連）に直結することが困難になってきているからである。

この場合、筑紫野市を中心とした大宰府条坊以南に、同時期の比較材料がみられないため即断はできないが、例えば筑後地方の集落の場合には、古墳時代から継続し8世紀中頃〜後半に廃絶されるタイプと8世紀後半から9世紀初頭にかけて営まれるタイプとの2つが認められる。この時、後者の場合には転用硯や文字資料を伴う遺跡が多いのも特徴である(註4)。この状況を端的に示す遺跡としては、久留米市の安武地区遺跡群が挙げられる。このうちの野瀬塚遺跡の場合は、約70m四方の範囲に掘立柱建物が計画的に配置され、出土遺物にも陶硯・転用硯・二彩陶器・瓦・製塩土器などがある。なかでも墨書土器には「三万大領」・「大領」・「三万少」などのものがあり、三潴郡家に深く関与した施設が想定されている。また、掘立柱建物の堀り方は一般集落などのように小さな円形のもので、これらの点は本遺跡とも類似している。しかし、岡田地区の場合は、官道と建物群とが同時に併存しており、しかもそれらは複合的に計画配置されているといった状況が考えられるので、即座に「集落」としてしまうのも問題が残る。この点は、②で示したように周辺が宝満川の氾濫原にほど近い低湿地に囲まれた島状の地勢であることからも看取できる。

このように一連の事象を考えてみると、特徴の一つ一つがバラバラで、結びつけようとすればするほどその実態がよく分からなくなってしまうといった状態である。その反面、遺構の時期などをはじめとしたそれぞれの状況は、極めて特徴的な傾向を示している。これらを有機的に結び付けるためには、本遺跡を排出した社会背景を改めて見直してみる必要性が考えられる。

遺跡の主体的な時期である8世紀中頃から9世紀初頭にかけては、律令制下における大宰府体制の政策の再構築が行われ、大きく変質していこうとしていた過渡期である。

8世紀中頃の歴史事象として特徴的なのは、天平12（740）年の大宰小弐藤原広嗣の乱である。当時の大宰府は、帥・大弐はともに欠員となっており、広嗣が実質的な主導権を掌握していた。『続日本紀』には、１万余騎の広嗣軍と大野東人を大将軍とした東海・東山・山陰・山陽・南海五道の兵１万７千の追討軍とが、北九州の板櫃河畔で激突したことを記している。広嗣の一存でこれほどの軍団兵力を動員し得たのか否かという問題は別としても、結果的にこのことにより大宰府が一時的に廃止され、鎮西府が設置されることなどを考えれば、周辺域に与えた動揺のいかに大きかったかについては異論のないところであろう。『続日本紀』天平13（741）年正月甲辰条によると、「広嗣支党」として「死罪二十人、没官（家族・使用人や財産を官に没収）五人、流罪四七人、徒罪三二人、杖罪一七七人」の処罰がなされている。広嗣は豊後国や筑後国の兵も徴発していたと考えられるので、大宰府周辺はもちろん、近隣諸国の豪族（郡司クラス）の一族にも処罰者がいたものと推測される。このため、乱の終焉後も当分の間は、在地の豪族たちの間に不穏な対立などがあっても不思議ではなかった。それゆえ8世紀後半代の時期には、西海道（とくに大宰府周辺域）の秩序の回復が急務であり、治安維持を目的とした政策が重視されたと考えることができるのである。

ここで③に関係する非常に興味深い史料がある。『令義解』軍防令置関条の注釈によると、「境界之上、臨時置レ関応ニ守固一皆是也」とあり、主要な境界上には臨時的なものも含めて「関剗」が置かれていたことは注目に値する。このことは、すでに佐藤宗諄氏に指摘されているとおりであるが、氏は国境のみでなく郡境にも臨時的な比較的簡便な施設を想定されている(註5)。これは、④・⑥に挙げた点に相当しており、本遺跡が「臨時的な関剗」である可能性も含んでいる。もし、その臨時的な関剗に不破関などの三関のような常置の関の縮小版に相当する職掌が与えられていたと仮定するならば、1）土塁に囲まれた関施設の中央を官道が横断していること、2）官道の両サイドに庁域が形成され、関の中央で道に南面して政庁域があること、3）兵士の住居と推測される竪穴住居や鍛冶工房などと推測されるエリアが中心施設から離れて形成されること、4）河川に近接した交通の要衝であること、などの類似点が見出されることもあながち偶然ではないと考えられる。(註6)

三関と他の関との違いは、軍防令置関条によれば、武器庫があることと国司の目以上が守固に当たることである。三関以外の関では、国司が常駐することは定められていないが、時には巡回をしたものと想定される。また、府の官人のなかでも最も低い位置にあって武官的な性格を持つ「傔仗」が、関に駐在した可能性も考えられる。第Ｖ章－4で詳細に述べたが、本遺跡から出土した墨書のなかには「掾」や「傔」がみられ、なかでも「傔」は、遺跡の中心であるロの字型配置の掘立柱建物周辺の廃棄土坑から多く出土している。この状況を集約すると、前述のような様相を一つの可能性として提示できるものと考えられる。

また、『令義解』職員令大国条に規定された守の職掌のうち関剗について、関は「検判之処」（通行人の検察を行う所）、剗は「塹柵之処」（柵・土塁、さらには外側に隍を巡らすこと）と記載され

ており、⑦で示した柵列群はこの剗のことを示している可能性もある。ただし本遺跡の検出状況は、外郭施設としてよりは建物を区画するものとしての性格が強いと考えられるので、この点についてはいまのところは結論がでていない。一考に値するものとして提示しておきたい。

最近の調査では「官衙風？」とか「官衙的？」といったような表現をされる遺跡は数多い。本遺跡の場合も、まさに時を同じくして同様のケースであったのだが、それらがその地域においてどのような位置で考えられるのか、またそれらの各地域ごとの関連遺跡について、その出現から消長までのメカニズムがどのようになっていたのかなど、今後立証していくべき課題は多い。いずれ、その機会を待って再検討することとしたい。

註１　高橋誠一「筑前国」『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂　1984年

註２　兵庫県教育委員会『推定布勢駅家跡・小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書47　1987年
兵庫県教育委員会『小犬丸遺跡Ⅱ』　1989年
龍野市教育委員会『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11　1994年
岸本道昭「小犬丸遺跡－布勢駅家－の礎石瓦葺建物」『古代文化』43－12　1992年
岸本道昭「古代山陽道と布勢駅家～礎石瓦葺駅館院～」『古代交通研究』創刊号　1992年
岸本道昭「兵庫県小犬丸遺跡（布勢駅家）」『季刊考古学』第46号　1994年

註３　渡辺昇・村上泰樹・久保弘幸『落地遺跡』兵庫県文化財調査報告書90　1991年
木下良「兵庫県赤穂郡上郡町落地遺跡(推定播磨国野磨駅跡)見聞記」『文化財信濃』17－4　1991年
木下良「落地遺跡（推定野磨駅跡）発掘に見る問題点」『文化財信濃』17－4　1991年
荻能幸「落地遺跡発掘調査概報」『古代交通研究』創刊号　1992年
荻能幸「兵庫県落地遺跡（初期野磨駅家推定地）」『季刊考古学』第46号　1994年

註４　松村一良「西海道の官衙と集落」『新版古代の日本④九州・沖縄』角川書店　1991年
富永直樹「野瀬塚遺跡」『久留米市史』第12巻　久留米市史編纂委員会　1994年

註５　佐藤宗諄「関と過所」および討論『古代交通研究』第3号　1994年
また同誌では、平川南氏が「番終わりて玉先の剗」という多賀城出土の木簡を例にとり、軍事的な非常措置として臨時的な関剗が設置され、こういったもののなかには文献に残っていないものもあることを指摘されている。

註６　岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会『美濃不破関』　1978年
柴田博子「鈴鹿関と不破関～壬申の乱とのかかわりをめぐって～」『日本の古代国家と城』新人物往来社　1994年
本遺跡の場合では、掘立柱建物群の具体的な性格についての性格づけが困難な状況である。また、土塁にあたる遺構は確認されていない。

註７　管見の範囲では佐賀県神埼町の塚原遺跡と肥前国府周辺に位置する大和町の久池井二本松遺跡の2遺跡で確認されている。なかでも前者の場合は、1）柵列群が西海道肥前ルートの軸に対して斜行していること、2）掘立柱建物が小規模であること、3）この付近が神崎郡の郡境付近に位置していること、など類似点が数多く確認できる。塚原遺跡の北方にある日隈山（神埼町城原）は烽の推定地とされており、付近が主要ルートの拠点であったことがうかがえる。また、官道を狭んだ対面に位置する小林遺跡においても同様の柵列群が検出されている旨の報告がある。
神埼町教育委員会『塚原遺跡』神埼町文化財調査報告書第44集　1995年
大和町教育委員会『久池井二本松遺跡・北原遺跡』大和町文化財調査報告書第32集　1995年

佐賀考古談話会『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』佐賀考古談話会　1997年度大会発表要旨資料　1997年

本書の執筆に関する文献の収集にあたっては、黒屋和孝氏（筑紫野市民図書館）にご尽力をいただいた。また、柴田博子（宮崎産業経営大学）・松川博一（財団法人　古都大宰府保存協会）両氏においては、遺跡の検討に際して多大なるご指導をいただだいた。これまでの考察のそのほとんどは、日ごろの両氏のご助言に拠るところが大きい。記して謝意を表します。

参考史料

「傔」の文字を含む史料一覧

一、傔仗

1 『続日本紀四元明』和銅元年三月乙卯、勅二大宰府帥、大弐并三関及尾張守等一、始給二傔仗一。其員、帥八人、大弐及尾張守四人、三関国守二人。其考選事力及公廨田、並准二史生一。

2 『類聚三代格五』勅、給二傔仗一者、大宰帥八人、大弐四人、其事力及料田、并考選並准二史生例一

和銅元年三月二十二日

3 『続日本紀四元明』和銅元年五月庚戌、給二近江国傔仗二人一

4 『続日本紀八元正』養老二年五月甲辰、禁三三関及大宰、陸奥等国司傔仗取二白丁一

5 『続日本紀十聖武』天平元年五月庚戌、太政官処分、准レ令諸国史生及傔仗等、式部判補、赴レ任之日、例下二省符一、符内仍偁二関司勘過一、自レ非二弁官一、不レ合二此語一、自レ今以後補任已訖、具注二交名一、申二送弁官一、更造レ符、乃下二諸国一

6 『続日本紀十一聖武』天平三年十一月癸酉、制、○中略仍給二大惣管傔仗十人、副惣管六人、鎮撫使三位随身四人、四位二人一、並負二持弓箭一、朝夕祗承、随二主願一、充令レ得レ入レ考、惣管如有二縁レ事入一レ部者、聴レ従二騎兵三十匹一

7 『類聚三代格五』太政官謹奏　定二陸奥国官員一事○中略

守傔仗二人○中略

延暦十七年六月二十八日

8 『日本紀略桓武』延暦十七年二月壬戌、停二近江守傔仗一

9 『類聚三代格五』太政官符

加二減傔仗員一事

陸奥出羽按察使四人元三人今加一人

鎮守府将軍三人減一人定二人

右被二右大臣宣一偁、奉レ勅、傔仗之数、依二件加減一

弘仁三年四月七日

10 『類聚三代格五』太政官符

応レ置二出羽守傔仗二員一事。

右陸奥・出羽、辺要之地、荒俗難レ馴、古来有レ称。而陸奥守殊給二傔仗一、出羽守独無二其員一。兵革之事、先レ声後レ実。縦有二警急一、何以威レ之、被二大納言正三位兼行右近衛大将良峯朝臣安世宣一偁、奉レ勅、宜下准二陸奥之例一補上之

天長五年四月十四日

11 『類聚三代格五』太政官符

応レ補二鎮守将軍傔仗一事

右得二式部省解一偁、補二傔仗一者、此省所レ掌、夫文武分レ職、執当殊レ貫、鎮守将軍、兵部所レ任、傔仗随則彼省可レ補。而被レ拘二式旨一、此省独補、論二之理致一、可レ謂二相違一、望請件傔仗令二兵部省補一、然則各守二其局一、不レ為二違越一、謹請二官裁一者、

大納言正三位兼行右近衛大将民部卿藤原朝臣良房宣、奉レ勅、依レ請

承和十四年閏三月二十五日

12 『類聚三代格五』太政官符

応レ停二止遙授陸奥出羽按察使大宰帥等傔仗一事、

右中納言兼右近衛大将従三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉レ勅、遙授官員、不レ赴二州府一、凡其傔仗於レ事無レ益、自レ今以後宜レ従二停止一

寛平七年十一月七日

13 『延喜式十八式部』凡大宰帥、大弐并陸奥出羽按察使及守等傔仗者、申二太政官一補レ之、不レ得三輙取二白丁一、若情願二以レ子補一之者、聴レ取二一人一、但身不レ赴レ任者不レ給レ之

14 『延喜式二十八兵部』凡鎮守将軍傔仗二人、並補二入色人一、若願レ将レ子者聴二一人一

15 『日本紀略後編三村上』天暦元年八月五日丙戌、左大臣候二御前一、俄行二除目一、出羽介平斎章、申二請傔仗二人一、任レ之

16 『朝野群載二十二諸国雑事』任二鎮守府傔仗一

太政官符陸奥国司并鎮守府

正六位上文屋真人季延　正六位上道公方行

右去四月十九日、任二鎮守府将軍従五位下源朝臣信孝傔仗一畢、国府宜二承知一、符到奉行

右中弁源朝臣保光　　左少史吉志宿祢

康保二年五月二十五日

17 『類聚符宣抄七』太政官符式部省

応レ給二傔仗捌人一事。

正六位上菅野朝臣邦随　正六位上菅乃朝臣通利　正六位上中臣朝臣延親
正六位上石作朝臣真親　正六位上多治朝臣盛文　正六位上日下部朝臣元信
正六位上文室朝臣佐親　正六位上伴朝臣盛武
右得二正三位行中納言兼大宰帥平朝臣惟仲去二月二十九日奏状一偁、依レ例所レ請如レ件者、左大臣宣、奉レ勅、依レ請者、省宜二承知依レ宣行一之、符到奉行、
右大弁藤原朝臣　　左大史小槻宿祢
長保三年五月二十九日

18 『類聚符宣抄七』太政官符式部省先以官符給式部之後、以彼省符令作任符、請内印云々
応給二傔仗八人一事一人漏此符案
正六位上藤原朝臣惟恒　正六位上平朝臣齋國　正六位上平朝臣致友
正六位上菅原朝臣友頼　正六位上藤原朝臣為成　正六位上藤原朝臣時佐
正六位上藤原朝臣如孝
右得二正三位行中納言兼大宰権帥藤原朝臣隆家去三月八日奏状一偁、傔仗依レ例、所レ請如レ件者、左大臣宣、奉レ勅、依レ請者、省宜二承知依レ宣行一之、符到奉行、
右少弁藤原朝臣　　左大史但波朝臣
長和四年四月七日

19 『類聚符宣抄七』請下被レ下二宣旨一補中任傔仗八人上状
正六位上藤原朝臣重枝　正六位上藤原朝臣行良　正六位上藤原朝臣佐高
正六位上藤原朝臣時通　正六位上橘朝臣公通　正六位上源朝臣成経
正六位上紀朝臣清澄　正六位上紀朝臣公則
右依二代々例一所レ請如レ件
長元二年六月十九日　従二位行権中納言兼宮内卿大宰権帥源朝臣道方

20 『為房卿記』嘉保二年七月二十二日乙卯、雞鳴帥卿○源経信被二進発一、○中略傔仗八人前行随身八人移馬、半夜引二、向山崎一之間、已以口之典厩所為也、帥冠直衣駕二檳榔毛一去夕自二大殿一、○藤原師実遣二御車并御牛一、娘達被レ乗レ之、巳刻著二関戸院一、件所都督領所也、主計頭道言我領所示二可レ憚之由一、帥被レ申者、故資通大弐進発之後、宿二州仲村庄一、是又同事也者

二、傔　人

21 『続日本紀十二聖武』天平四年八月壬辰、勅、○中略節度使、○中略又使已下傔人已上、並令レ佩レ剣

22 『続日本紀二十四淳仁』天平宝字七年正月庚戌、○中略賜二国王○渤海及使傔人已上禄一亦有レ差

23 『延喜式三十大蔵』入諸蕃使（職名のみ掲載した）
入唐大使、副使、判官、録事、知乗船事、訳語、請益生、主神、医師、陰陽師、画師、史生、射手、船師、音声長、新羅奄美等訳語、卜部、留学生、学問僧、傔従、雑使、音声生、玉生、鍛生、鋳生、細工生、船匠、柂師、傔人、挟杪、留学生、学問僧、還学僧、水手長、水手、柂師、挟傔、水手長及水手、其渤海新羅水手等、時当二熱序一者、停二綿襖子袴一、宜レ給二細布袴一、並使収掌、臨二入京一給、其別賜、大使、副使、判官、録事、知乗船事、訳語、学問僧、還学僧入渤海使、判官、録事、訳語、主神、医師、陰陽師、史生、船師、射手、卜部、雑使、船工、柂師、傔人、挟傔、水手入新羅使、判官、録事、大通事、史生、知乗船事、船師、医師、少通事、雑使、傔人、鍛工、卜部、柂師、水手長、挟杪、水手
右賜二入蕃使一例、宜レ依二前件一

三、傔　従

24 『万葉集巻第十七』天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿、被レ任二大納言一、兼帥如旧上レ京之時、傔従等、別取二海路一入レ京、於レ是悲二傷羇旅一、各陳二所心一作歌十首
中略
右一首三野連石守作
中略
右九首作者不レ審二姓名一

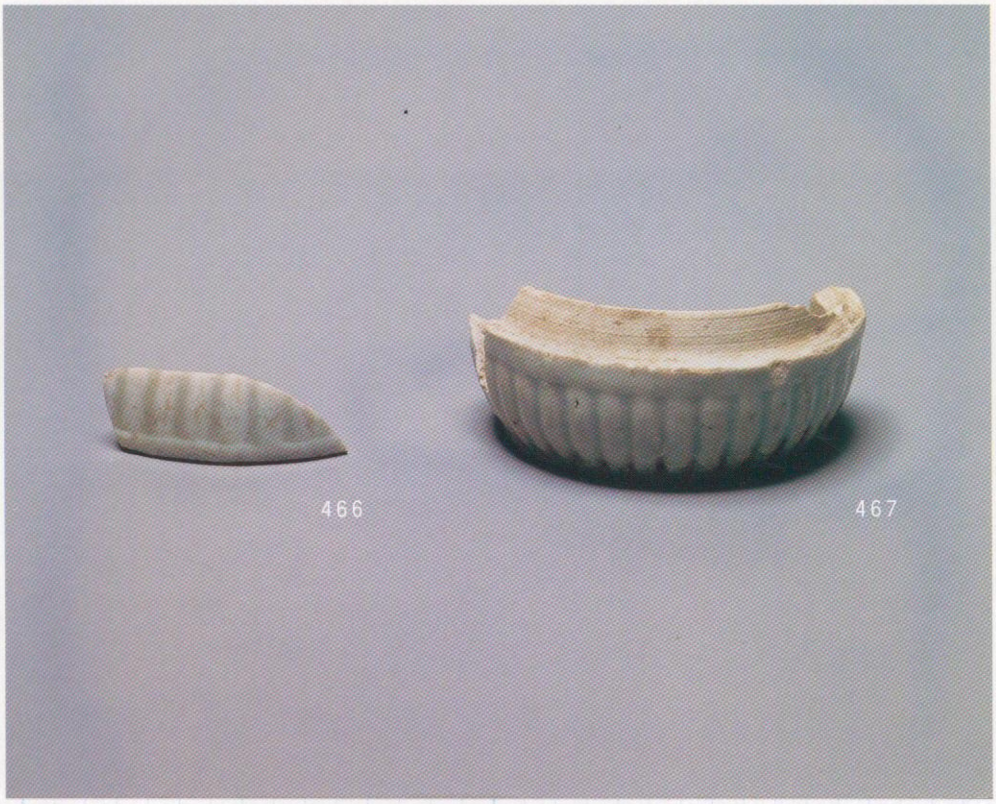
25 『延喜式二十六主税』凡大宰及国司巡二行部内一者、帥傔従十人、弐六人、監以下三人、史生一人、国介以上三人、掾以下二人、史生如レ前

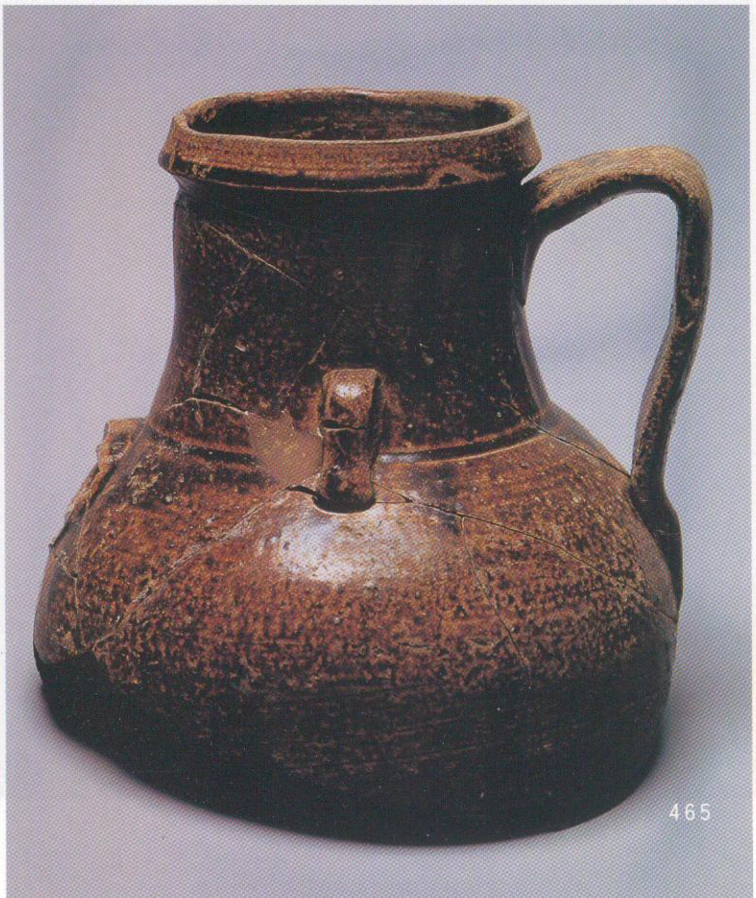
26 『延喜式三十大蔵』文献23に同じ

図　　　　版

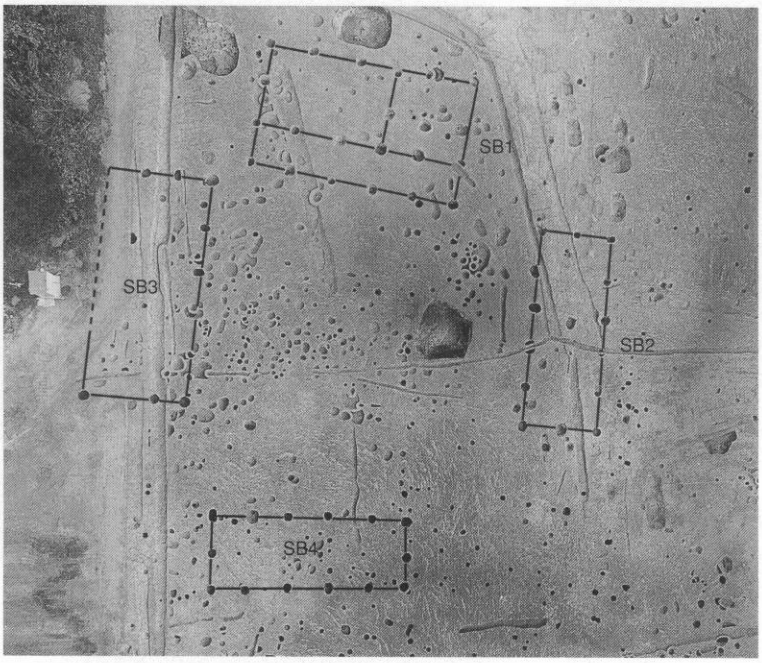
岡田周辺航空写真（撮影：大成ジオテック）平成８年１０月

PL.2



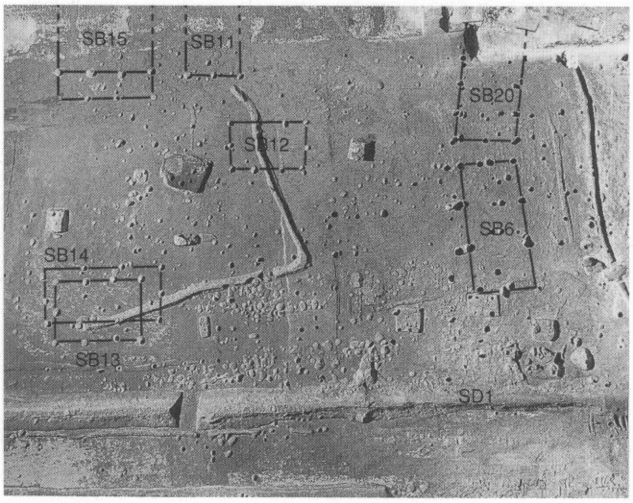


（上）白磁合子（ＳＫ28）
（下）褐釉水注（ＳＫ28）

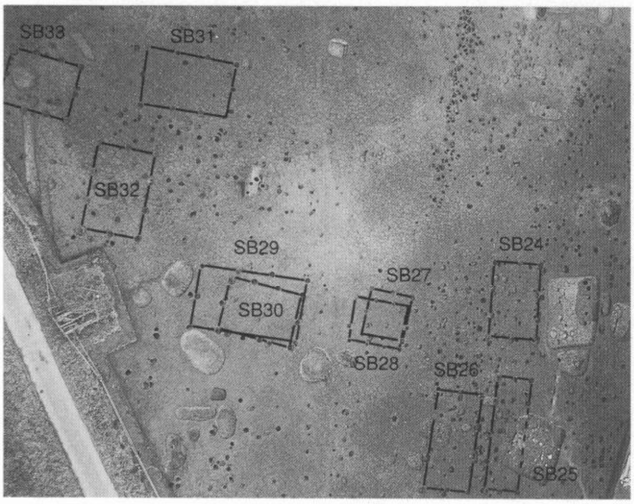


Aブロックの
ロの字型配置建物

Bブロック上空



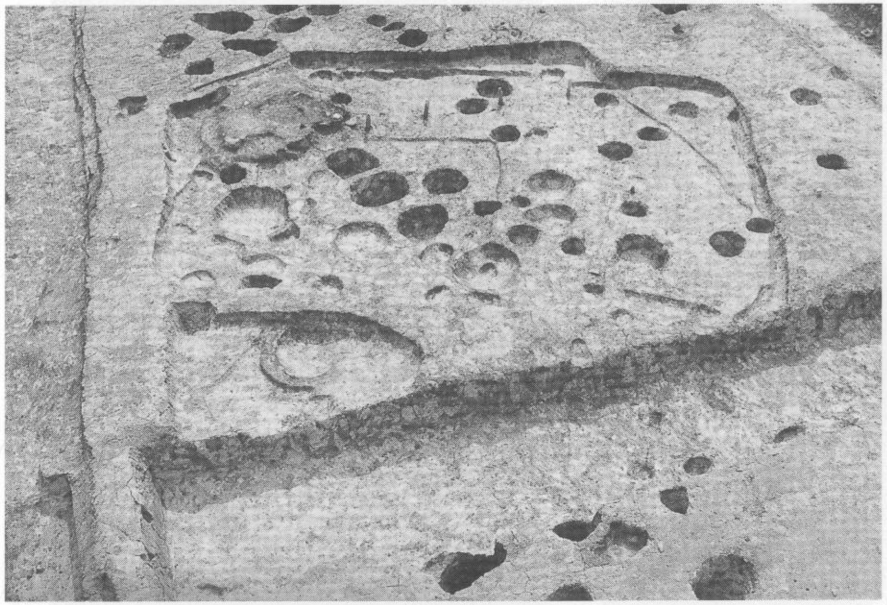
Bブロック上空



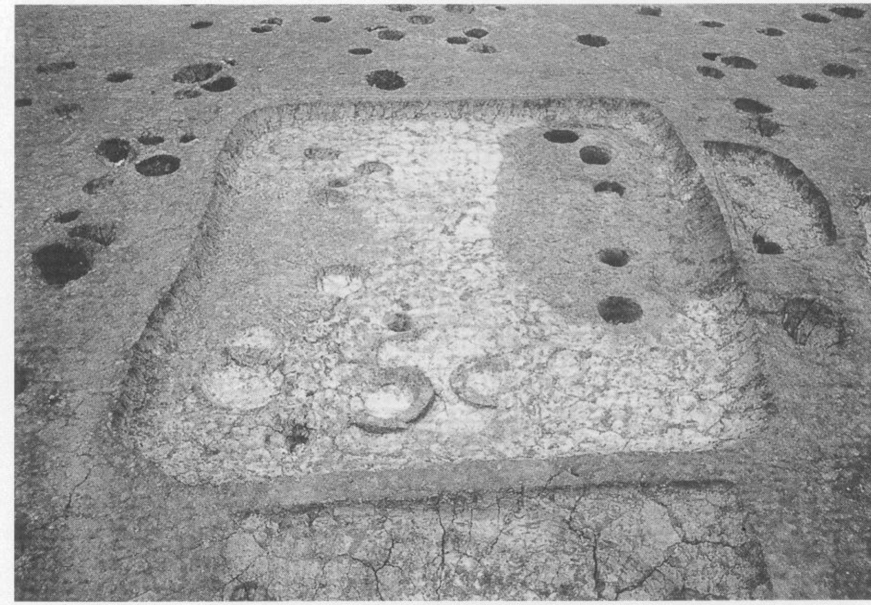
Cブロック上空

Cブロック上空

掘立柱建物（SB）群

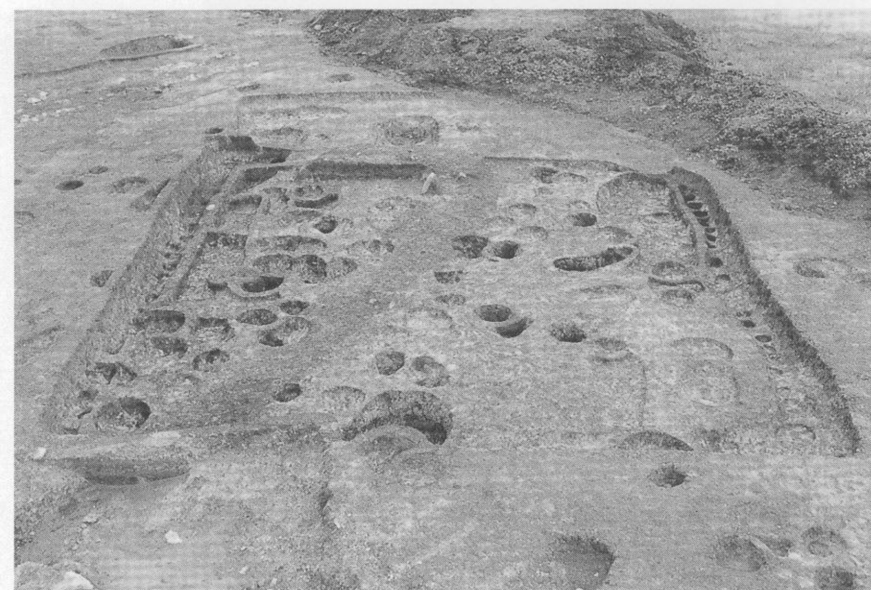


SC　1



SC　2

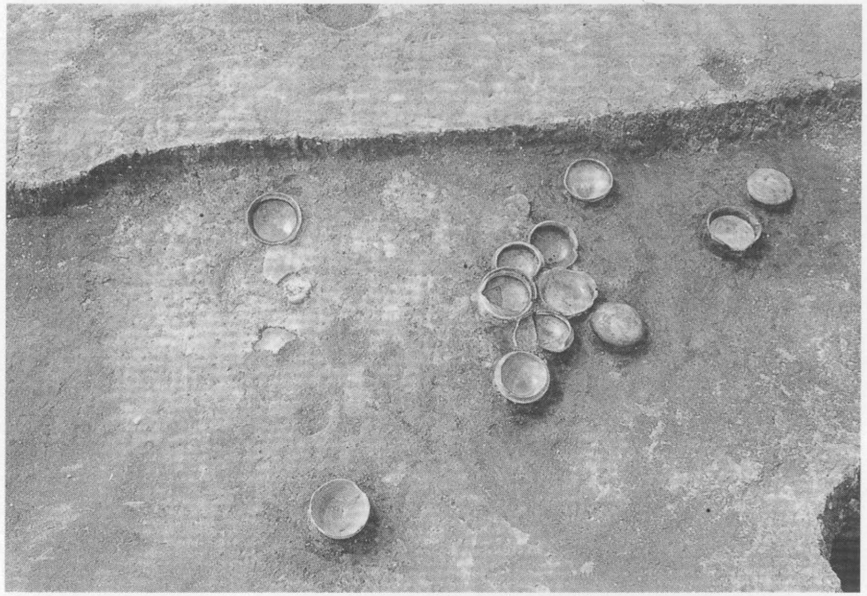
SC　3



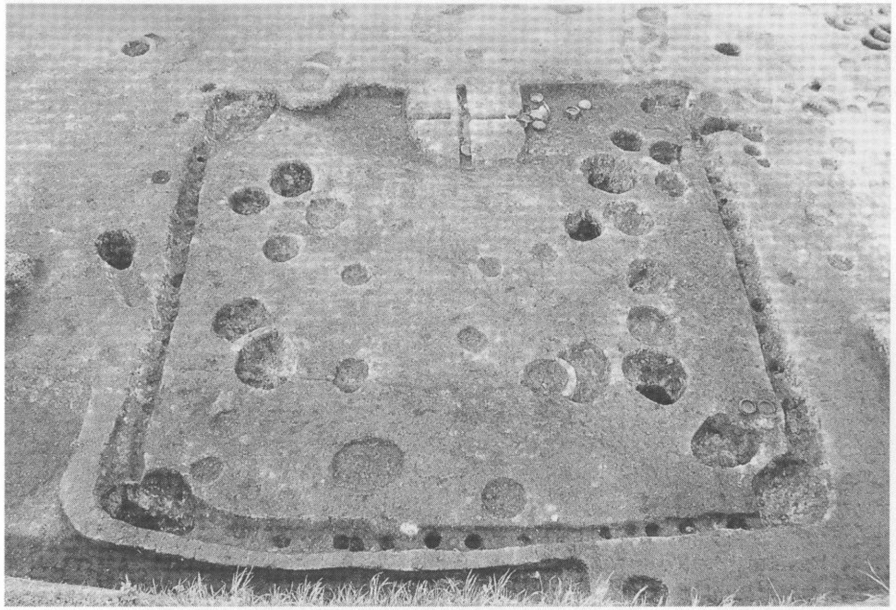
SC　4

竪穴住居（SC）

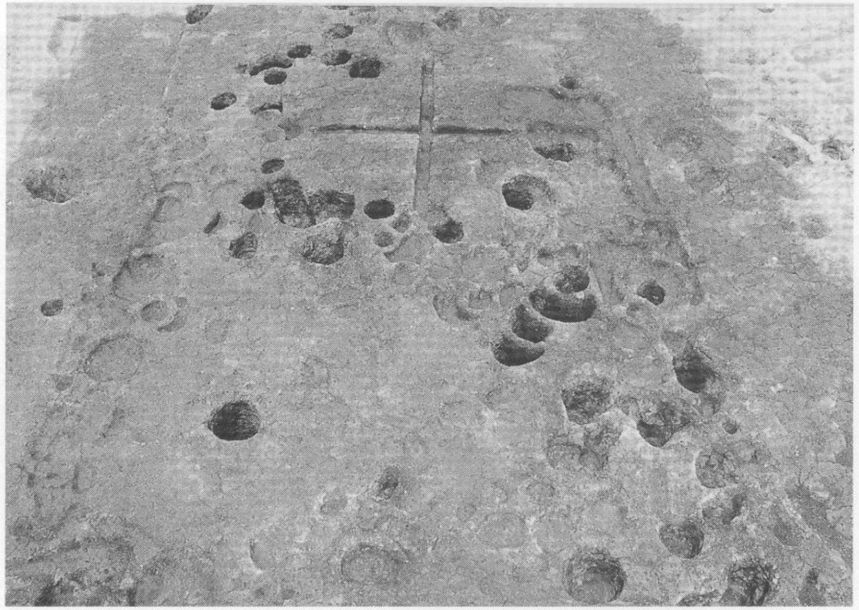
SC　4　遺物出土状況



SC　9　カマド付近　遺物出土状況



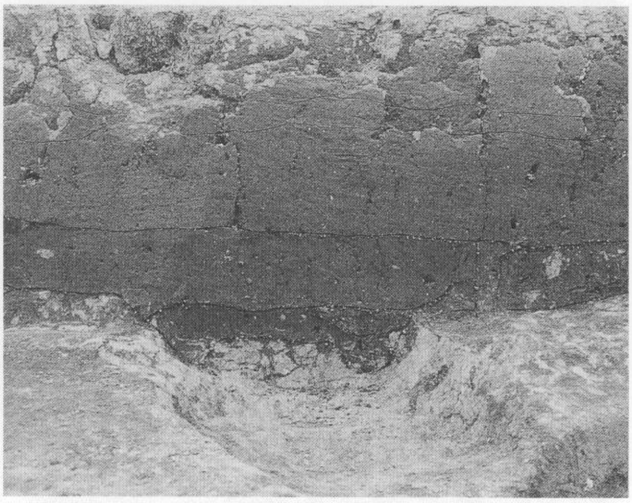
SC　9



SC　10

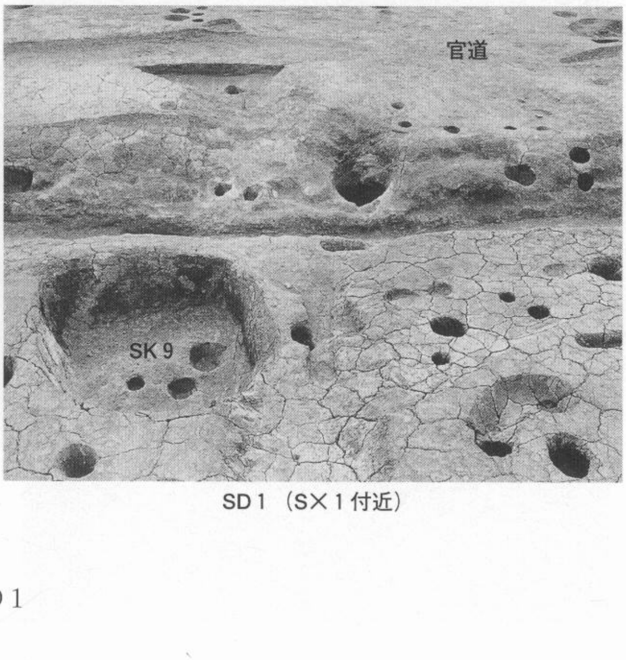
竪穴住居（SC）

SD 1　検出状況


官道の地業痕跡


SD 1（A-A′）


SD 1（S×1付近）



SD 1（S×1付近）

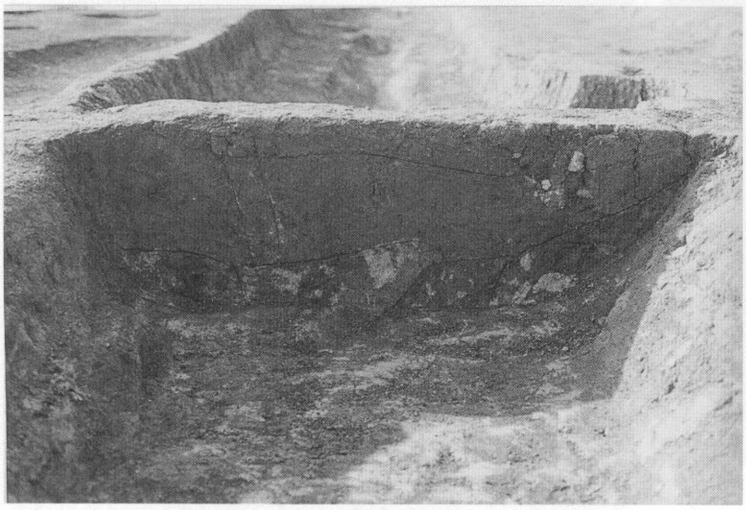
SD 1

SD 1（北側側溝）最深部（E-E′ 付近）

SD 1 の様子

SD 1 土層写真（D—D′）

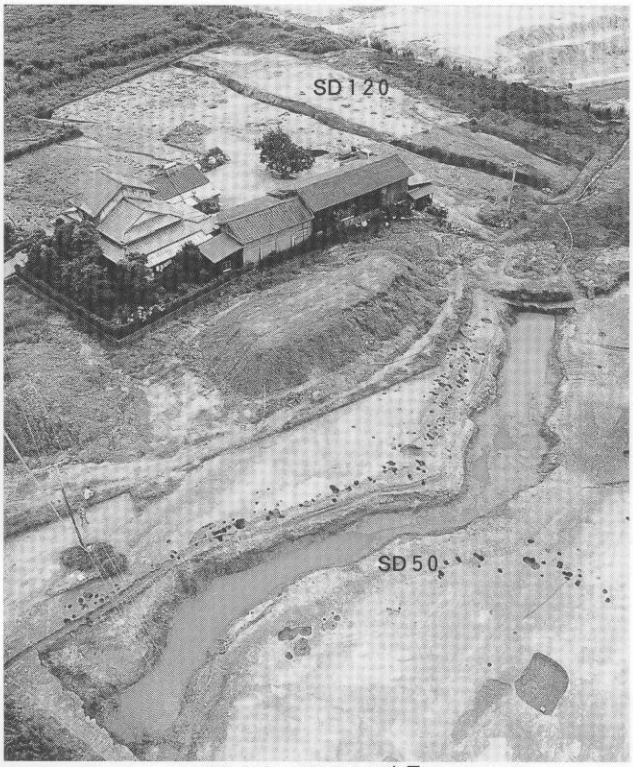
SD官道検出状況（部分）



SD 4 土層写真（F—F′）

SD50土層写真（G−G′）

SD50土層写真（H−H′）



SD50，SD120遠景

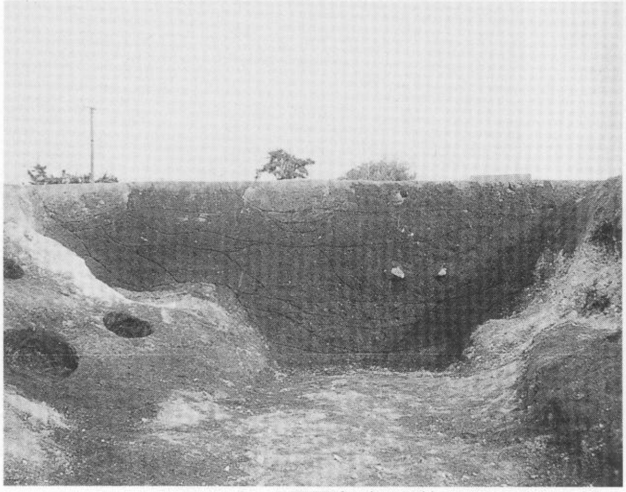
SD50遺物出土状況

SD50遺物出土状況

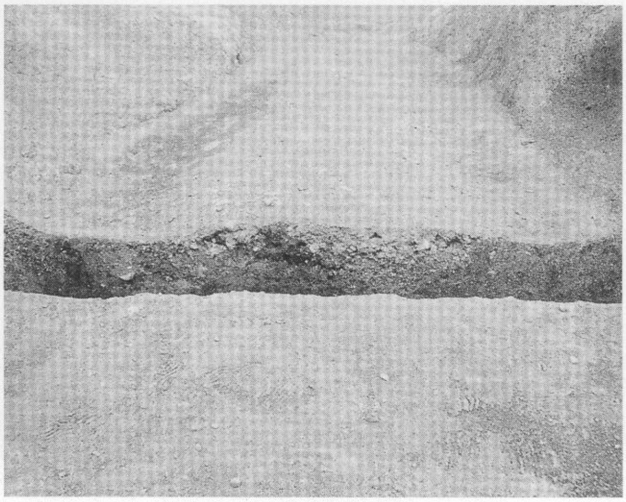
SD50

SD120

SD120

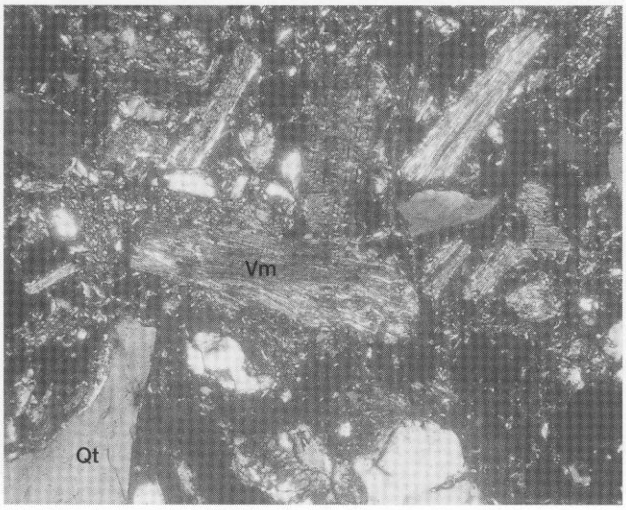


SD120土層写真（L－L′）



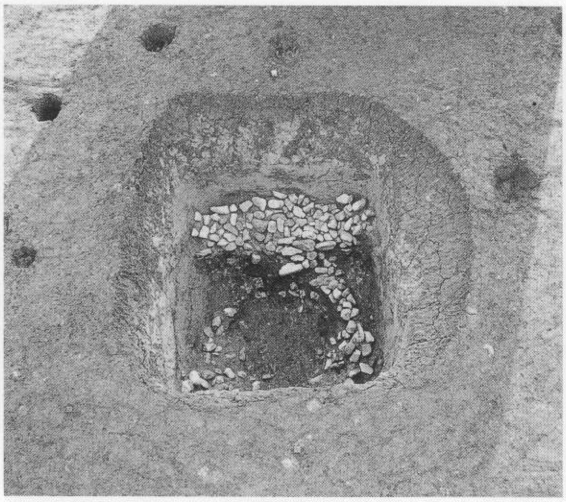
SD120床面の様子

SD120遺物出土状況



SD120床面採取土壌プレパラート写真
（No.9中層　平行ニコル　10×2.5）
Vm：バーキュライト（vermiculite）
Qt：石英（quartz）

SD120


SE 1


SE 2


SE 1裏込めの礫　検出状況


SE 3

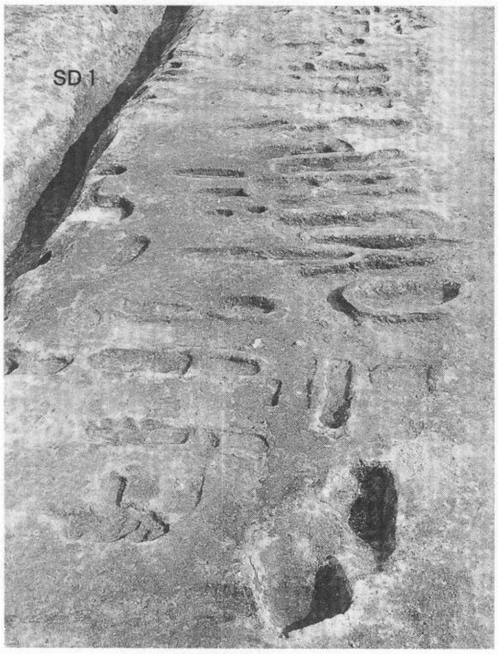

SE 1完掘状況


SE 4

井戸(SE)

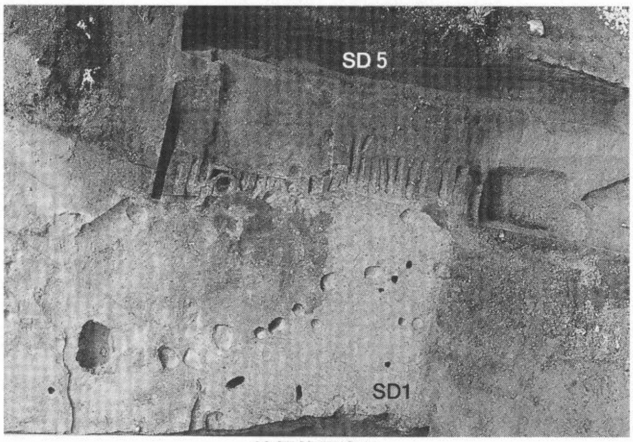
波板状圧痕 2

波板状圧痕　検出状況



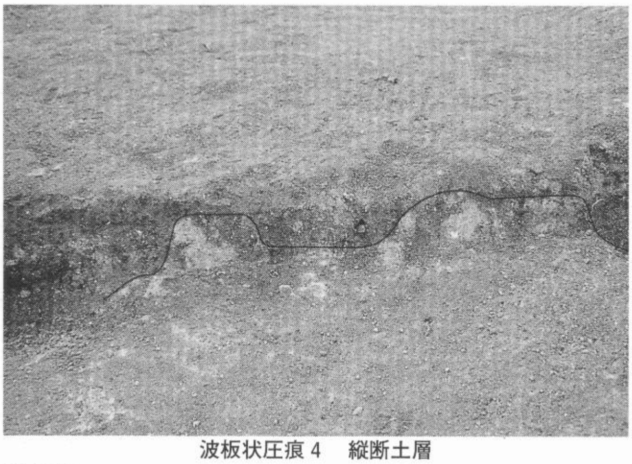
波板状圧痕 1

波板状圧痕内埋土除去後



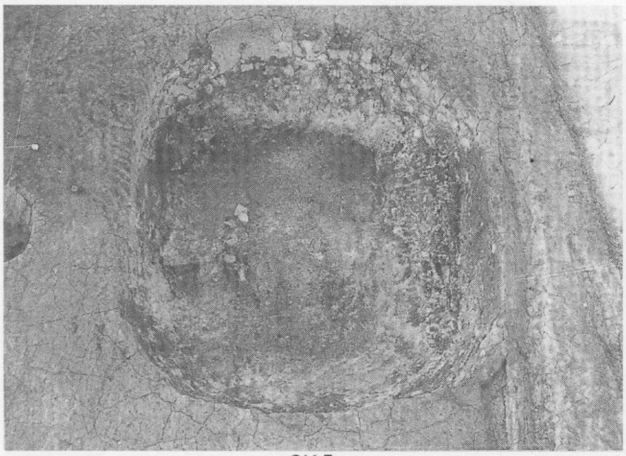
波板状圧痕 4

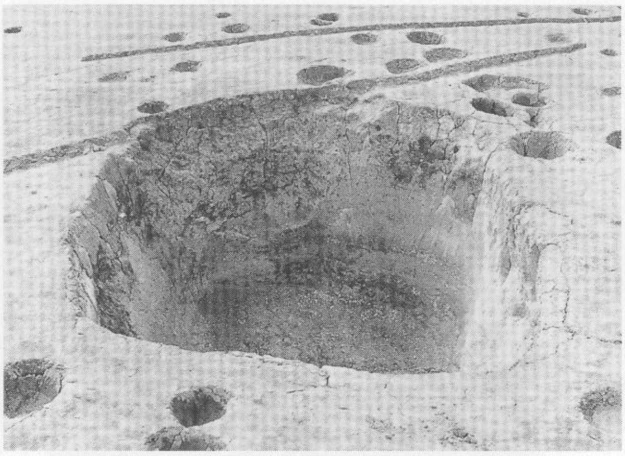
締め固めの痕跡

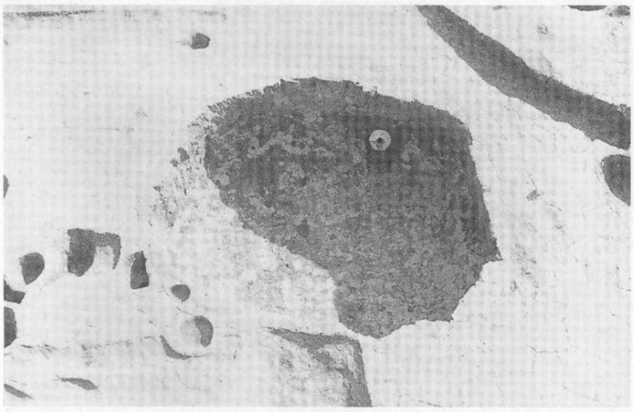


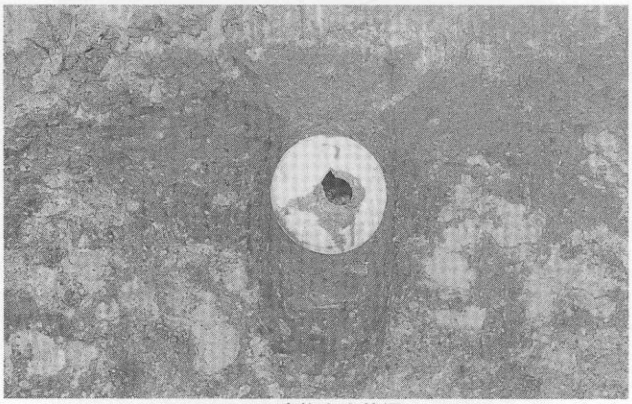
波板状圧痕 4　縦断土層

官道の地業痕跡

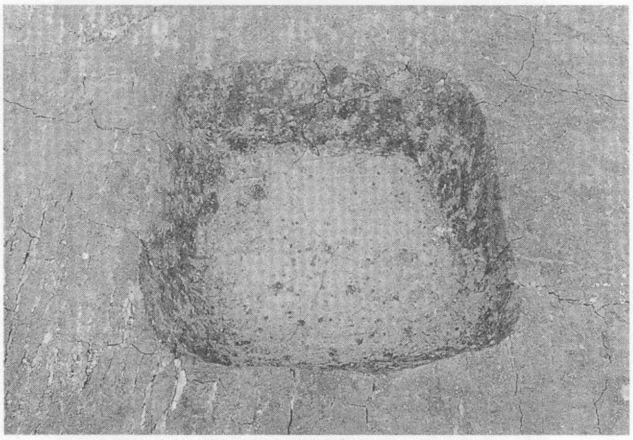

SK 5

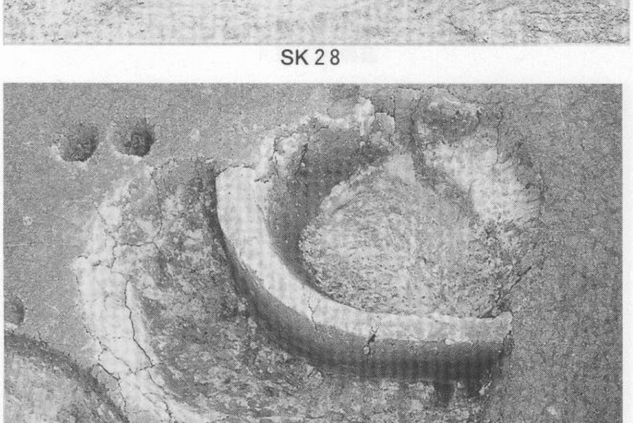

SK 6


SK 16


SK 16 遺物出土状況

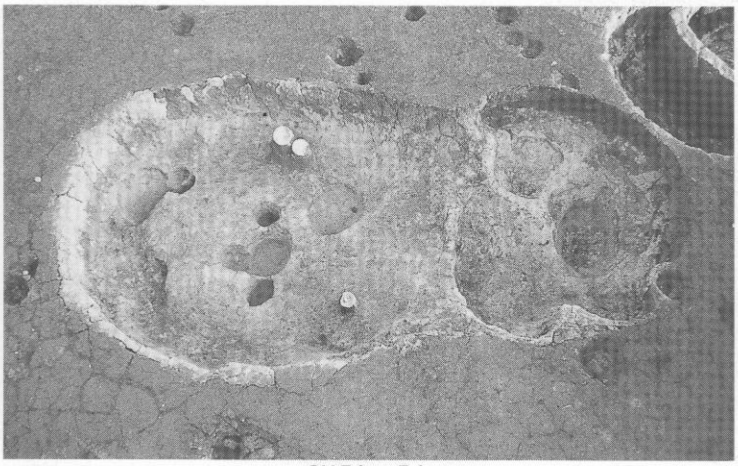

SK 28


SK 18

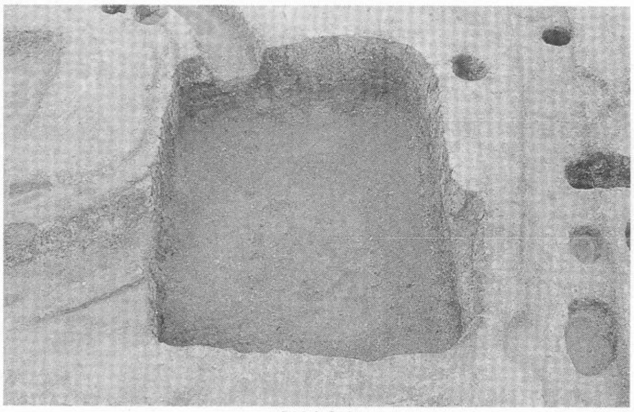

SK 69, 70


SK 62

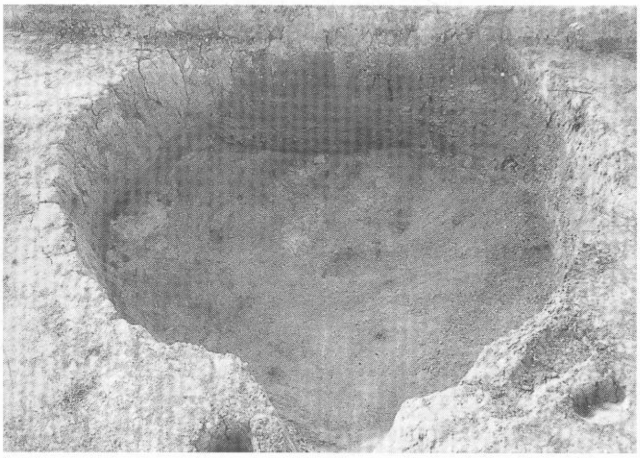
土坑（SK）



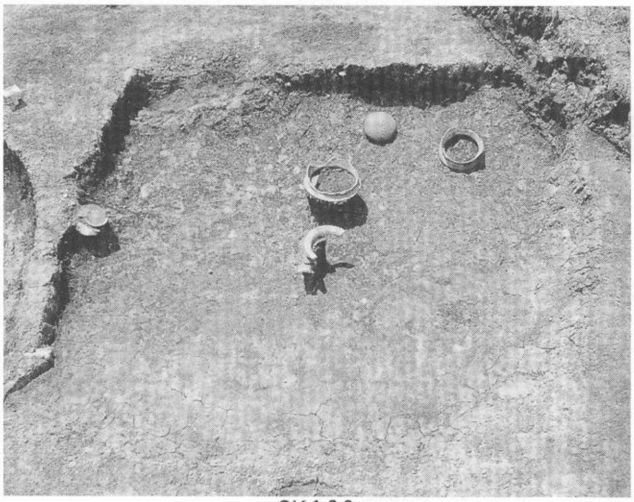
SK71～74



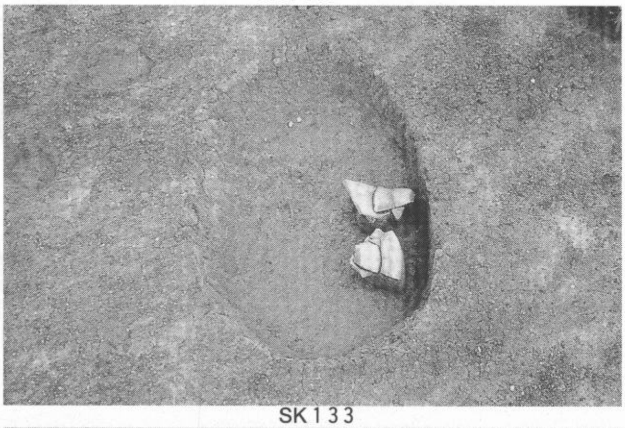
SK104



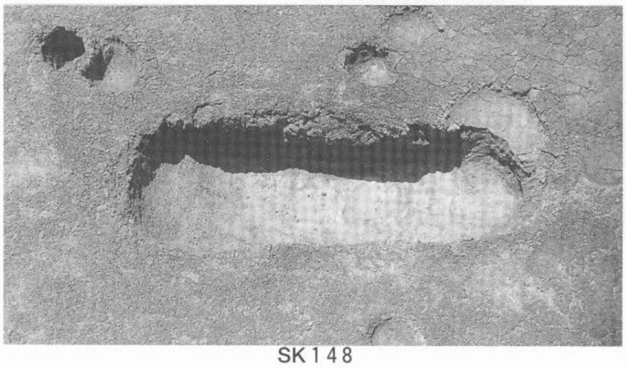
SK113



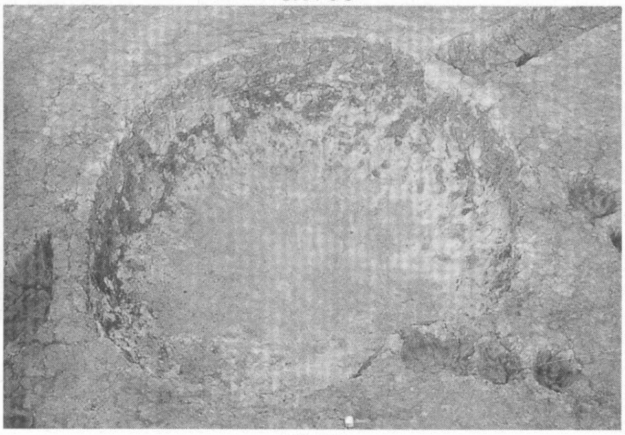
SK126



SK133

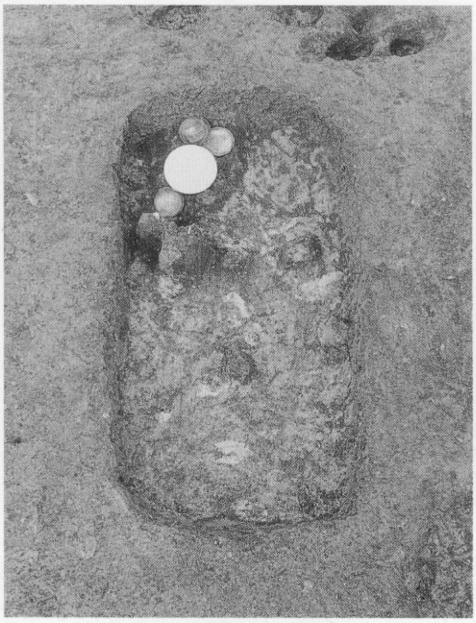


SK148



SK75

土坑（SK）

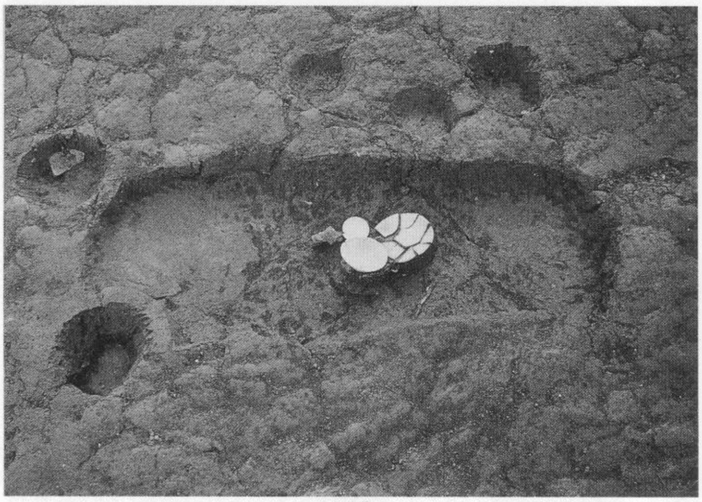


ST 1

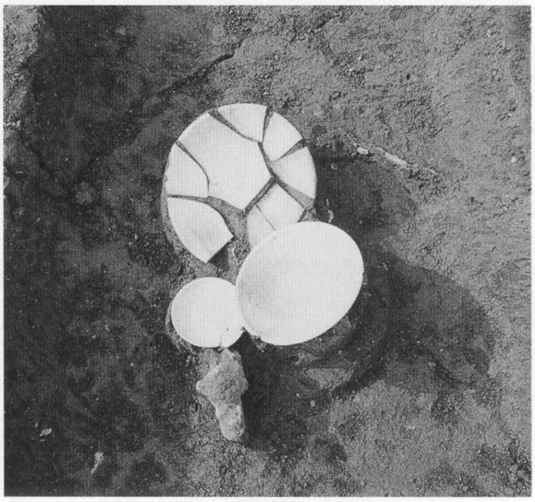
ST 1　遺物出土状況

ST 2

ST 2　釘出土状況

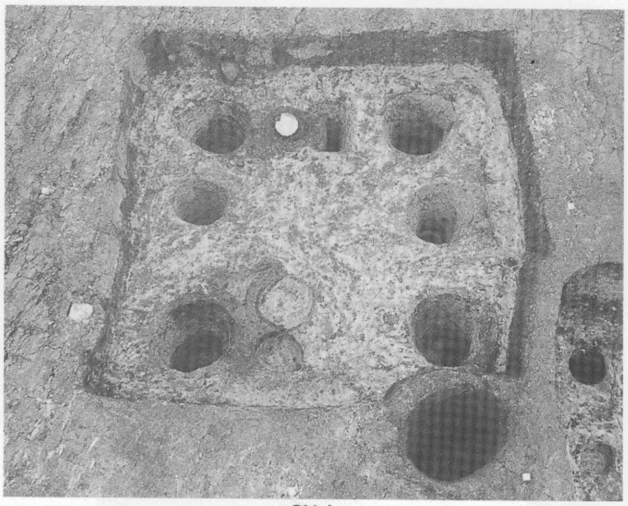


ST 3

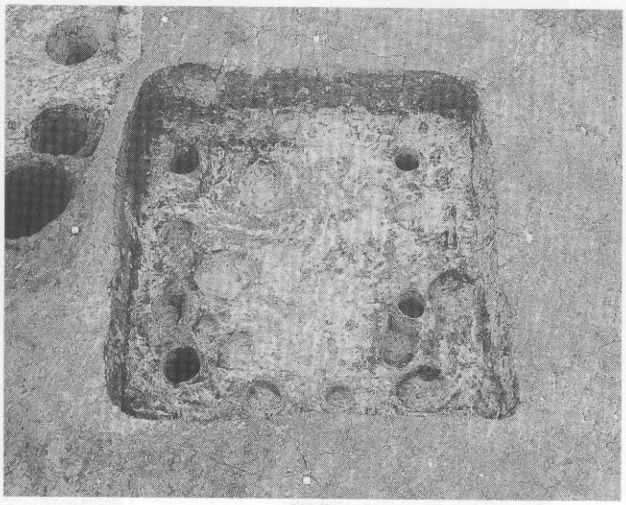


ST 3　遺物出土状況

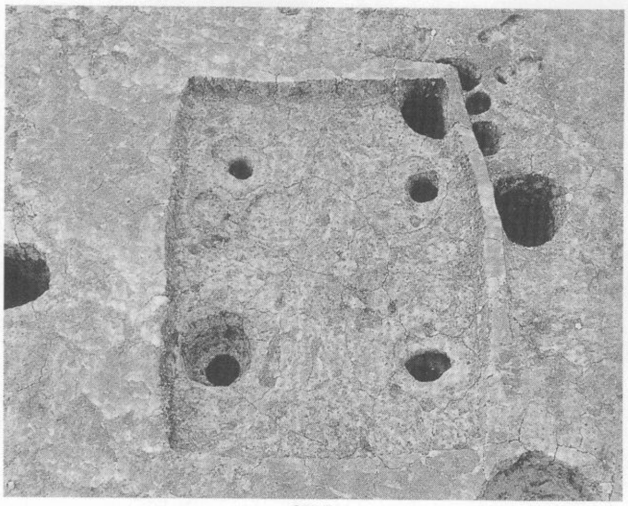
墓（ST）



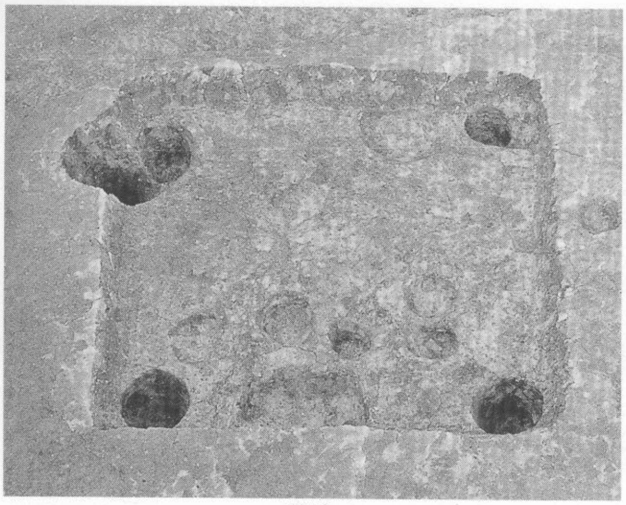
SX 4



SX 5

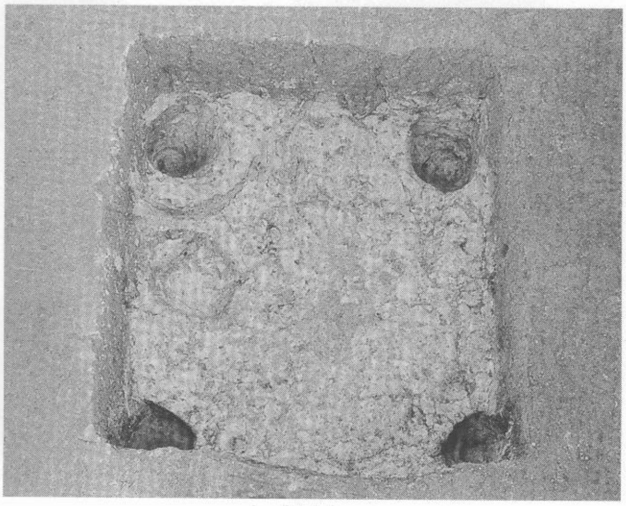


SX 7



SX 8

SX 10



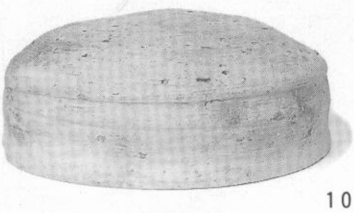
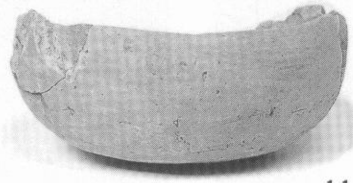
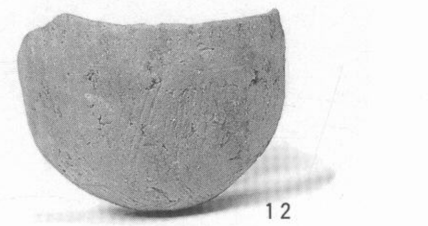
SX 11

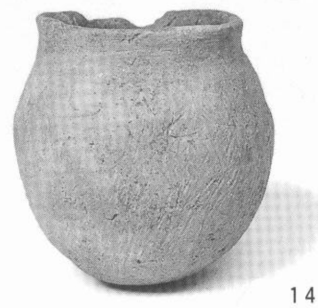
性格不明遺構（SX）


5

6

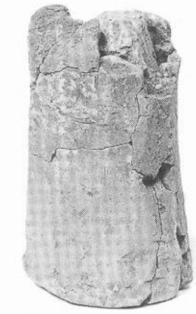
7

8

10

11

12

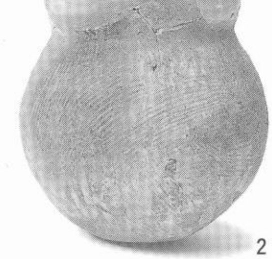
13

14

15

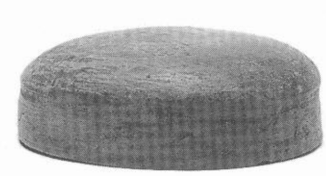
16

17

18

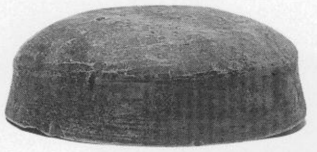
19

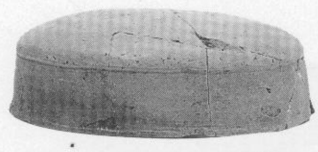
20

21

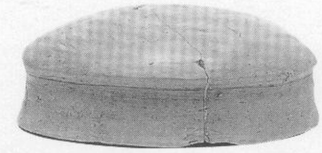
23

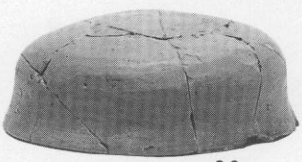
24

25

遺物写真（1）

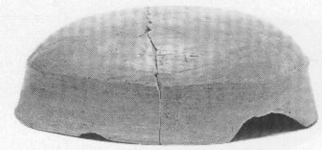

26

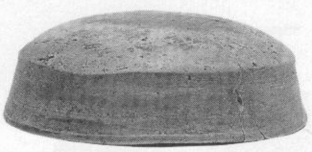

27

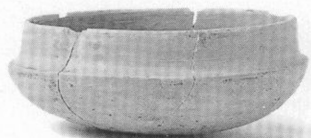

28


29


30

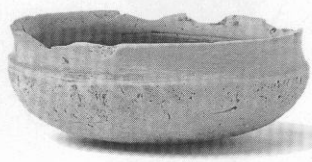

31


32


33

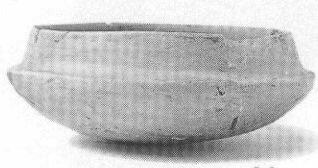

34


35

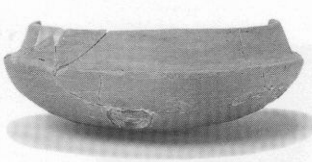

36


37

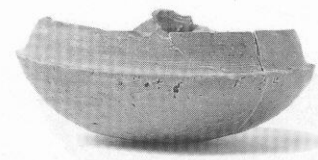

38

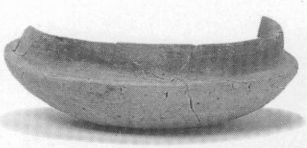

39

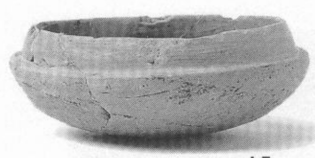

40

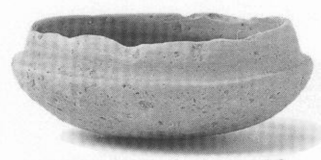

41

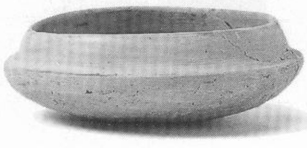

42

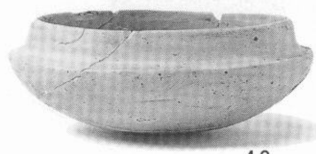

43

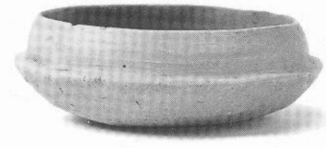

44


45


46

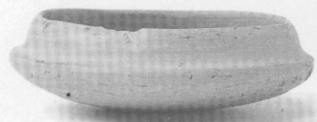

47

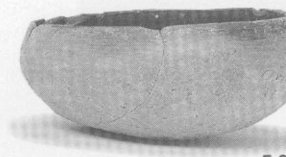

48


49

遺物写真（2）


50


51


52


53


54


55


56

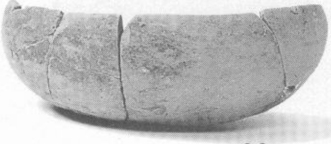

57

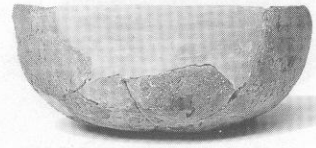

58


59

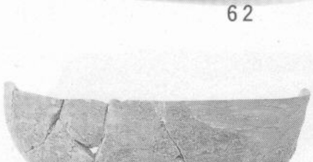

60


61


62


63


64


65


66

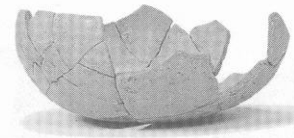

67

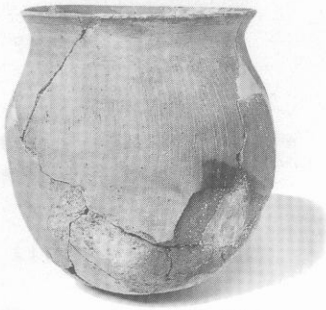

68

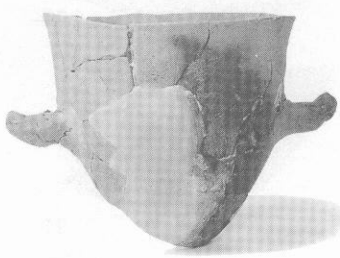
遺物写真（3）

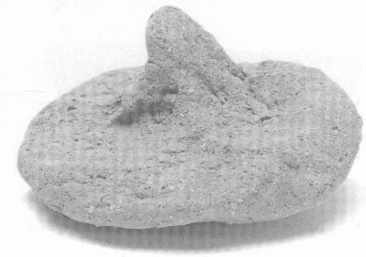

69


70

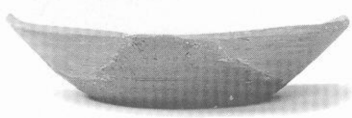

71


72


73


74


75


76

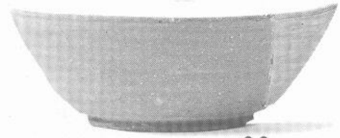

79

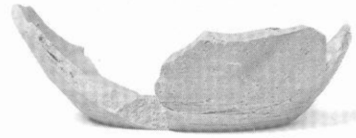

80

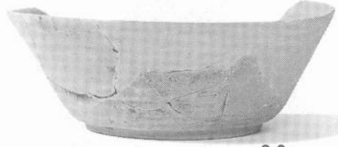

81


86

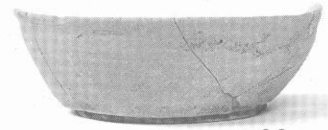

87


88


89


90


91


92

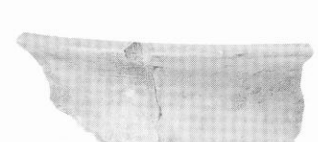

94.㉚


95

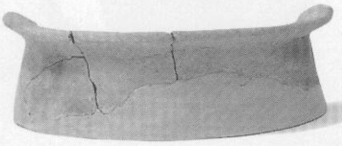

96

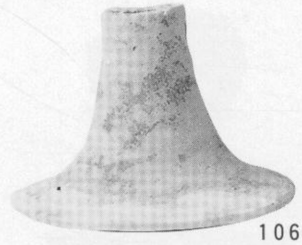

102.㊼

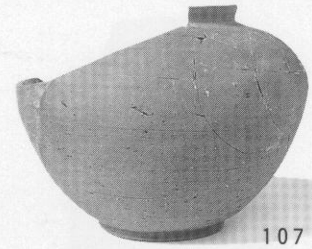

103

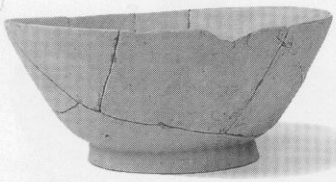

104

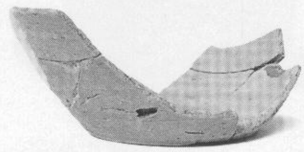
遺物写真（4）


105

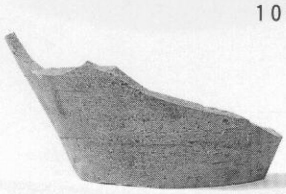

106

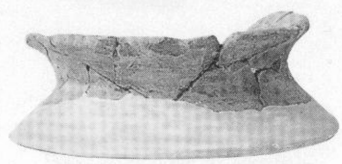

107

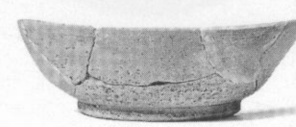

109


108

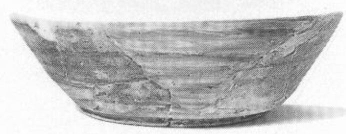

114


115


119


122


124.㊴


125

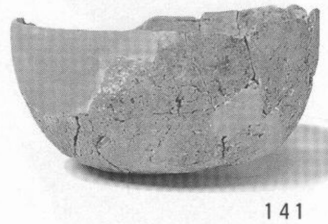

126.㊲

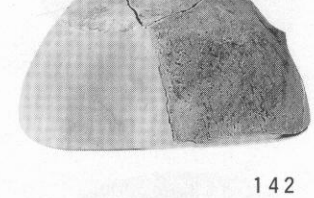

135

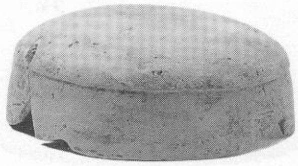

136

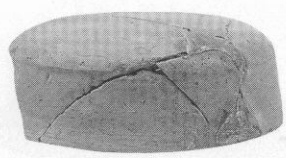

138


139

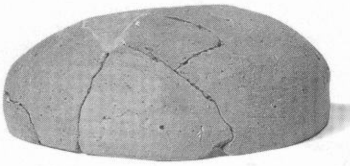

141

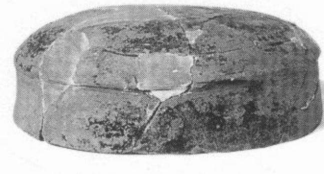

142


145

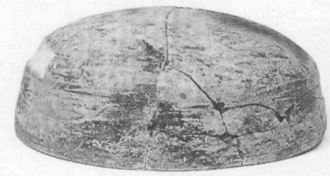

146


144

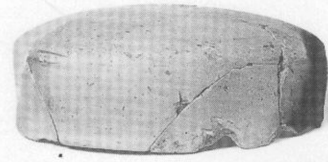

147


148

遺物写真（5）

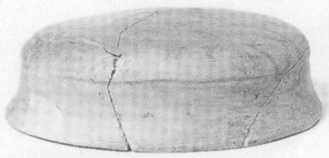


149

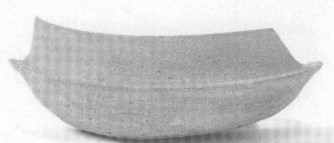


150

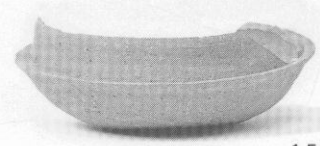
151



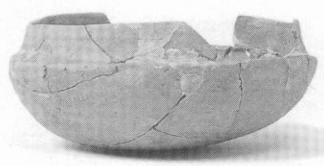
152



153

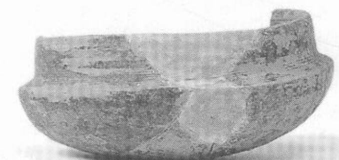


154

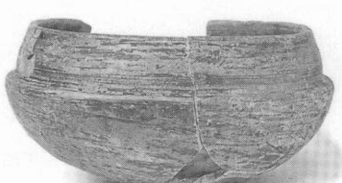


155

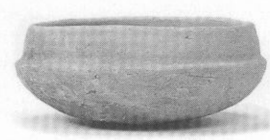
156



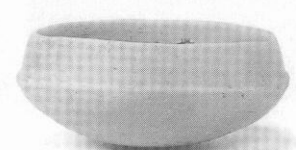
157



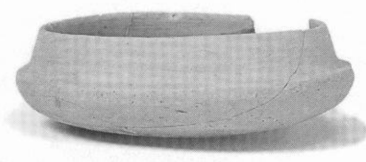
158



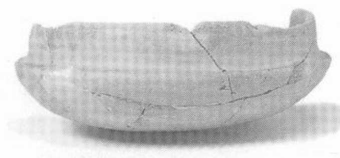
159



160



161



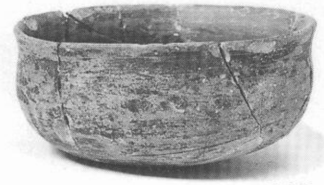
162

163

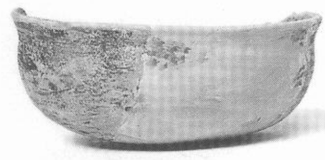
164

165

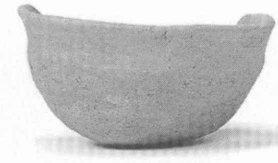
167



168

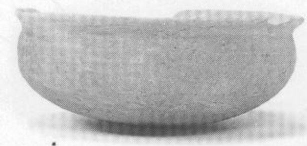
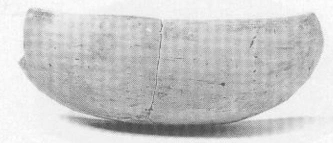
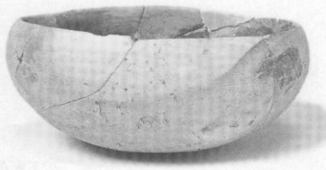
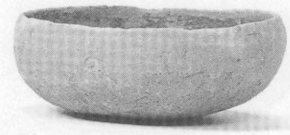


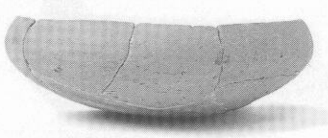
169

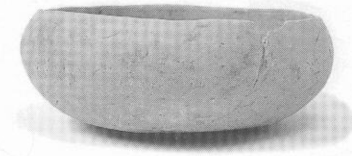
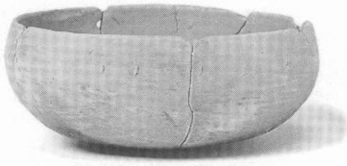
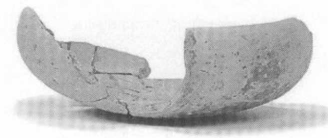
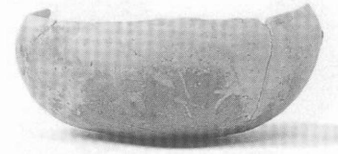
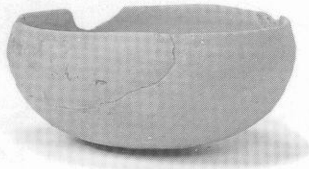
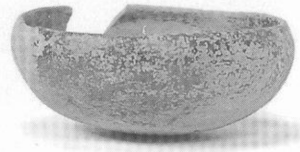
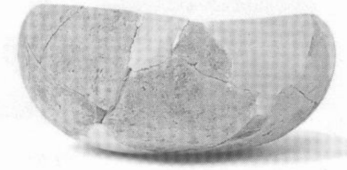
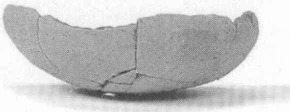
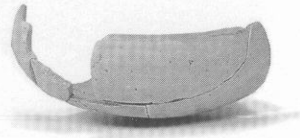


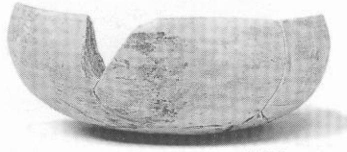
170

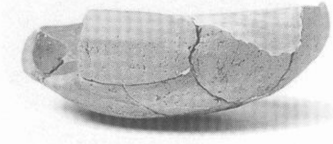
遺物写真（6）


171

172

173

174

175

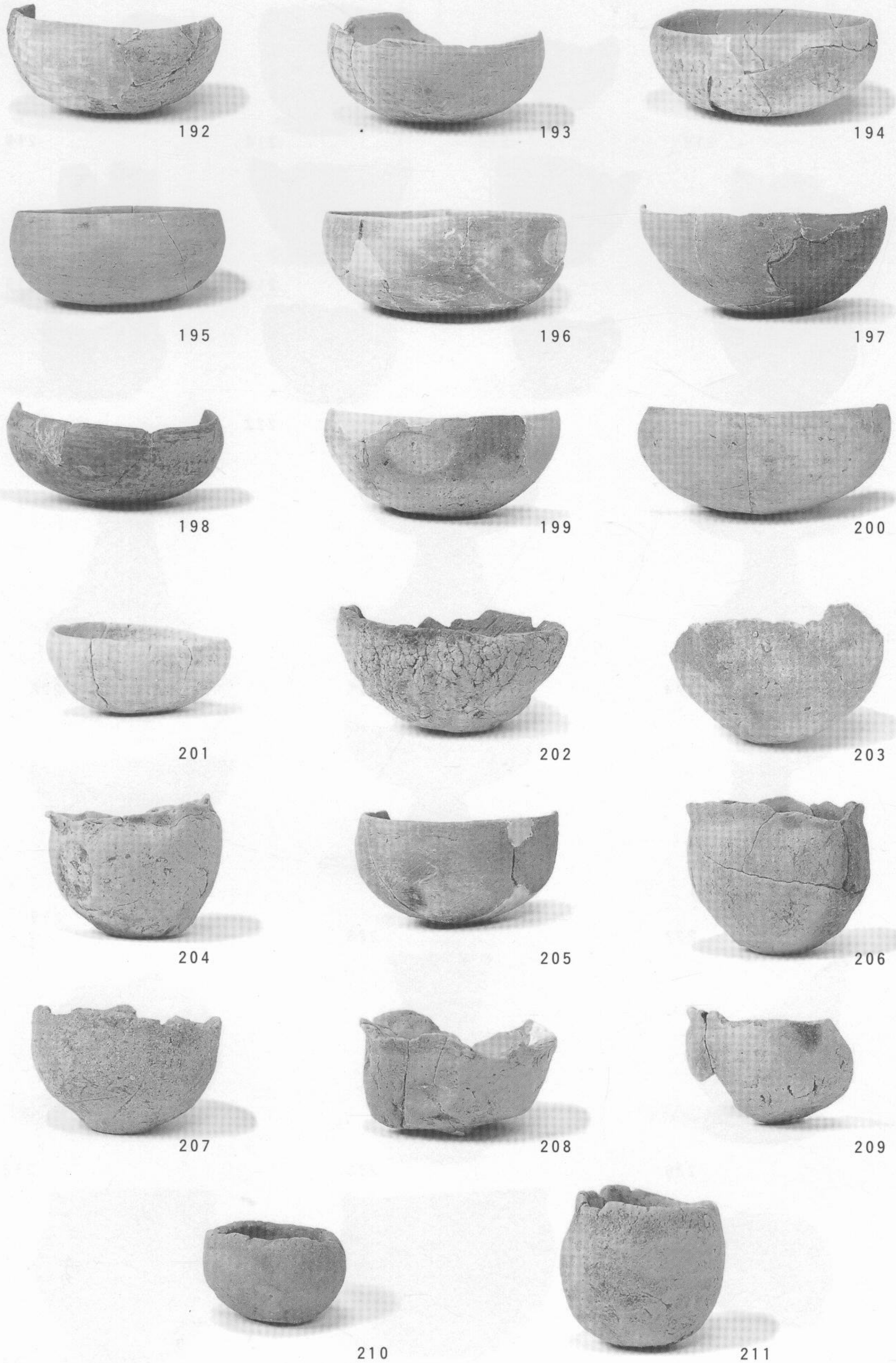
176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

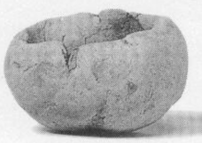
188

189

190

191

遺物写真（7）

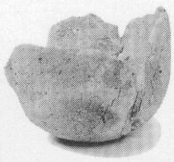
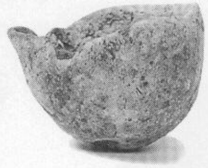

192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211

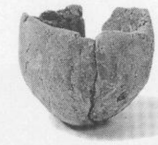
遺物写真（8）


212

213

214

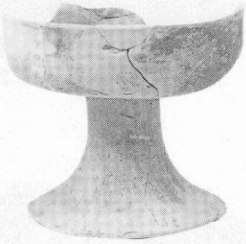
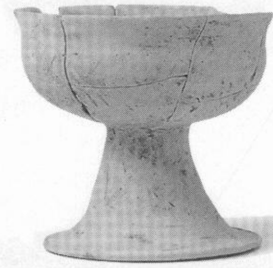
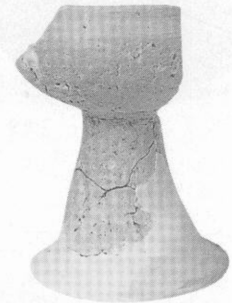
215

216

217

218

219

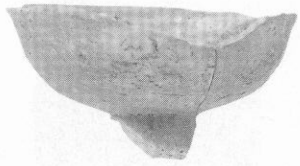
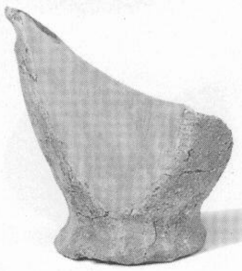
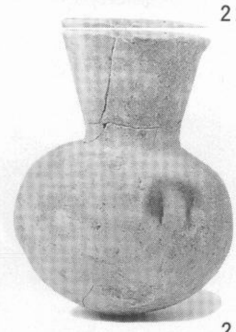
220

221

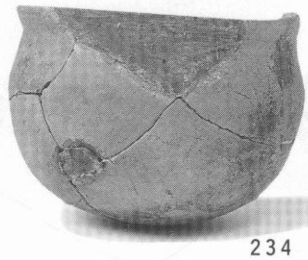
222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

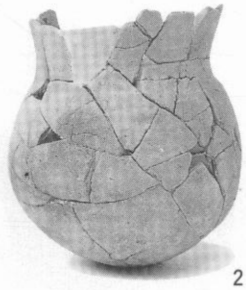
232

233

234

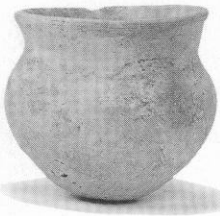
235

遺物写真（9）

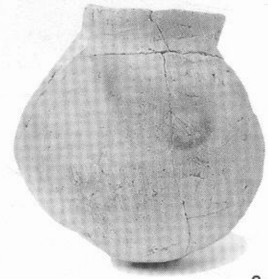

236

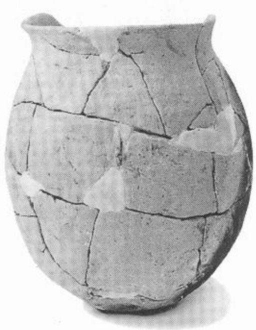

237

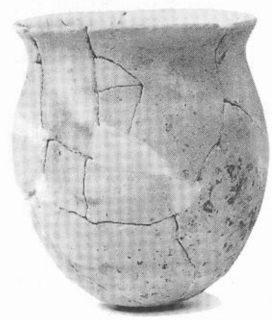

238


239

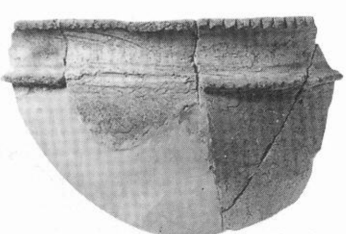

240


241


242

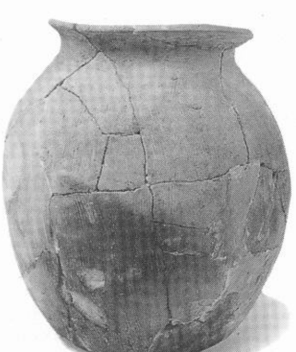

243


244


245


247

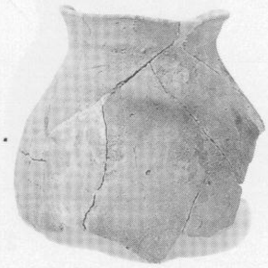

248

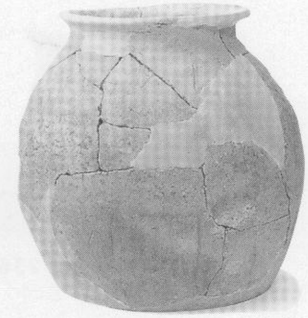

249


250

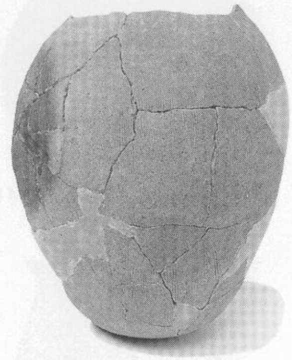

251

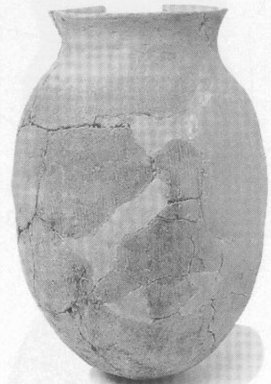

252


253

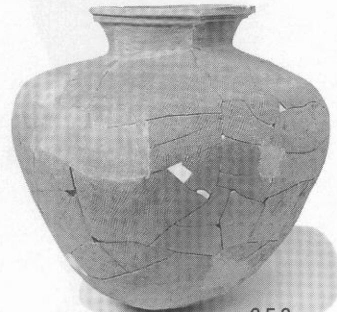

254


255


256


257


258


259


272


260


261


274


276

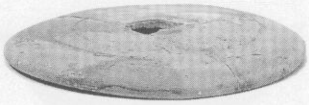

277


278

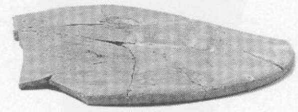

279


280

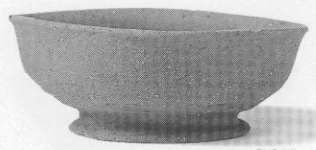

281

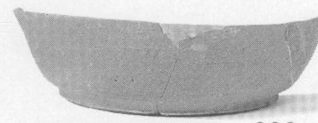

282

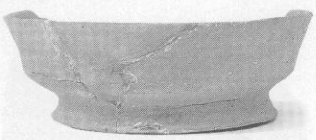

283


284

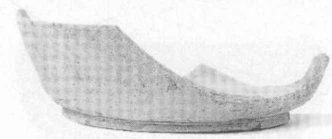

285

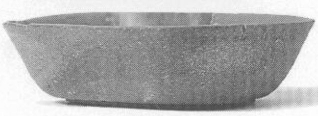

287

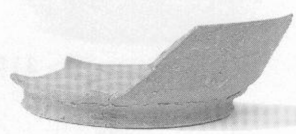

288

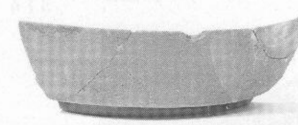

289

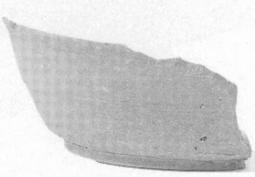

290


291


292


293


294

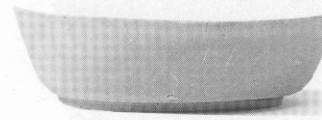

295


296


297


298


299


300


301


302


304

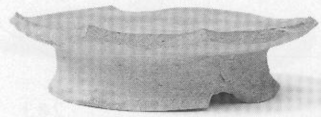
305


306

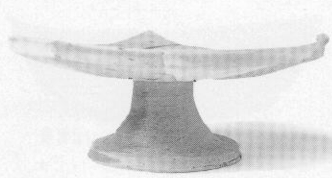

307

遺物写真（12）

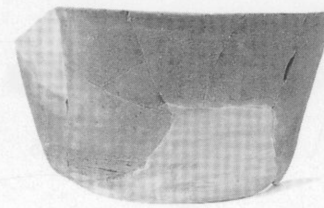

308


309


310


311

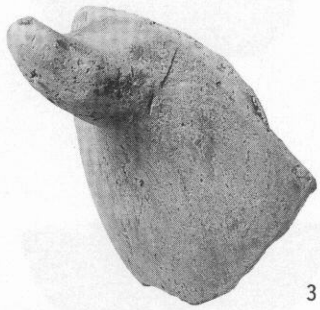

312

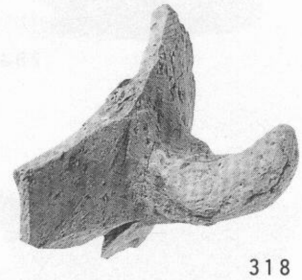

313

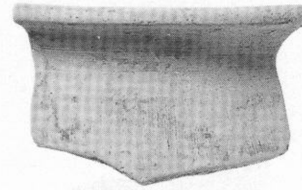

314


315

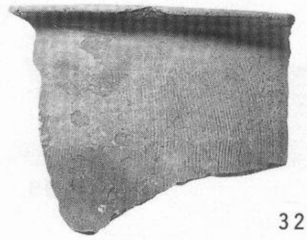

316


317

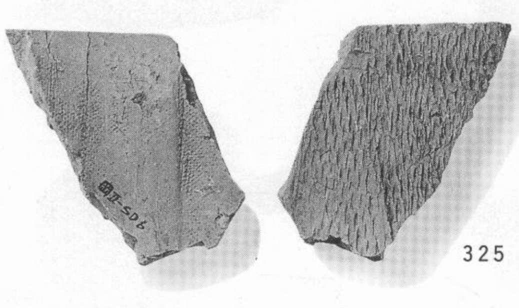

318


319


320

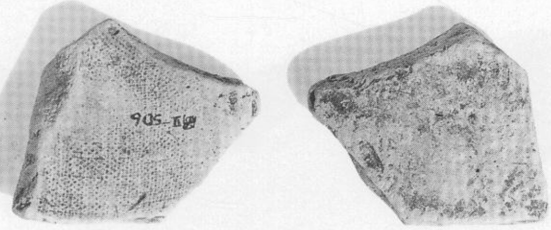

321


322

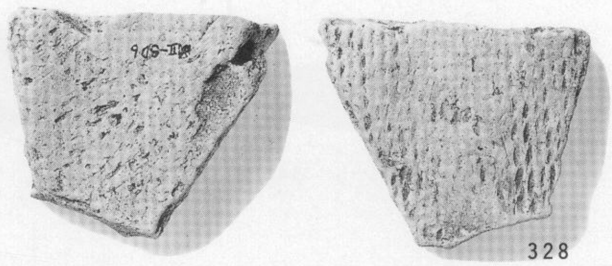

325


326

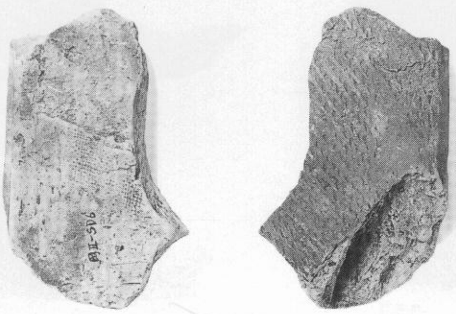
遺物写真（13）



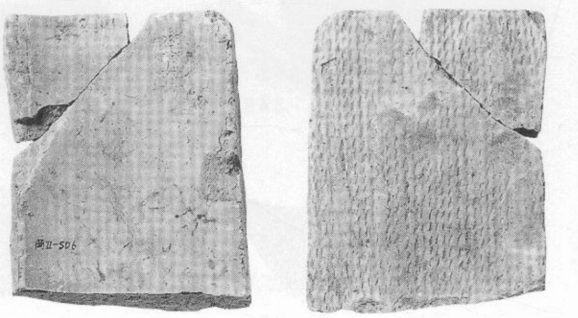
372



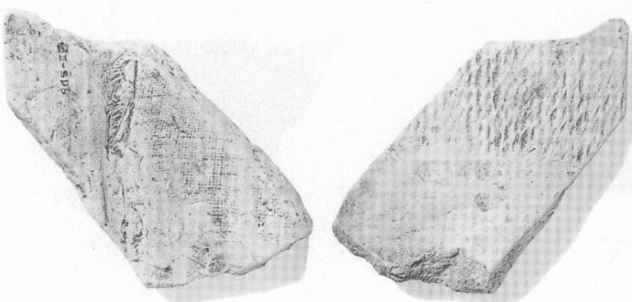
328



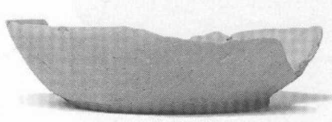
329



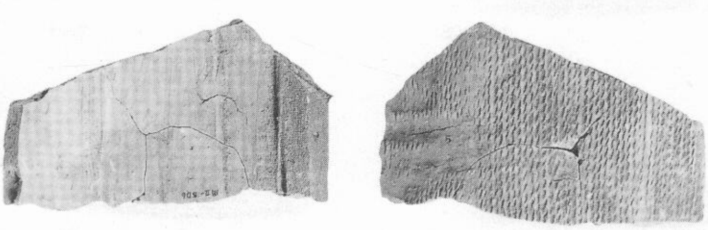
330



331



336



332

338

339

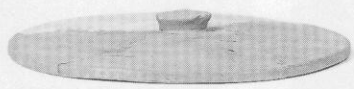
340

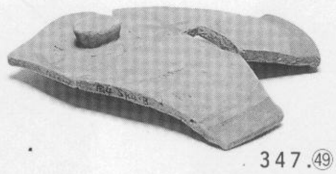
341

342

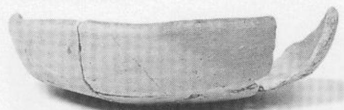
343

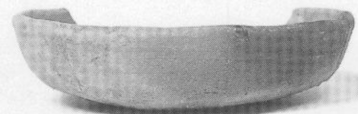
344


345


347.㊾

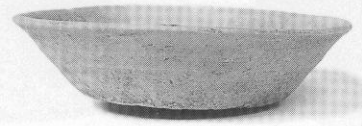

348

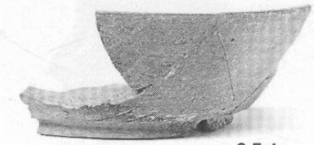

349


350

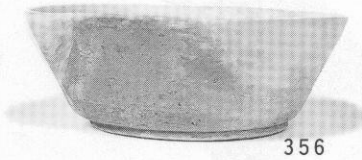

351

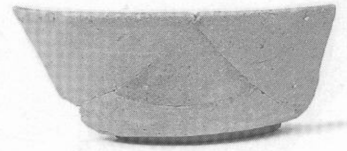

352

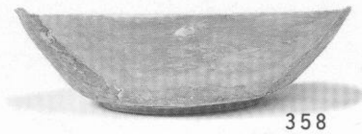

353

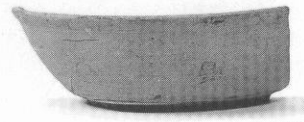

354


355


356


357


358


359.㉟


361


362


363


364


362


369

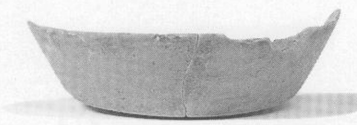

377

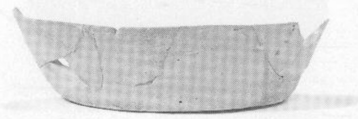

378

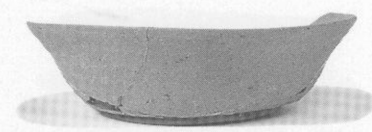

380


381

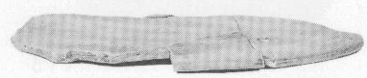
遺物写真（15）


382


383

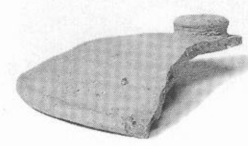

384

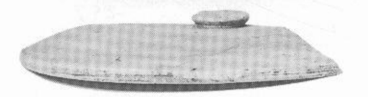

385

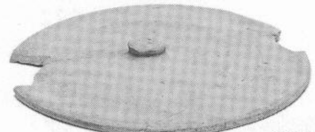

386

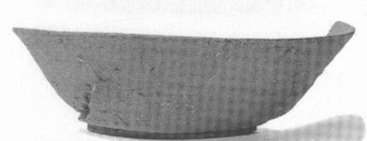

388

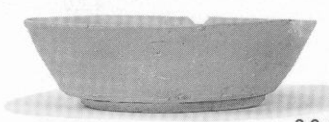

389

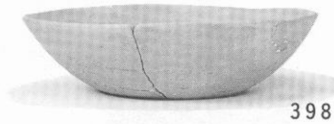

390


391


392.㉜


393.㊵


394

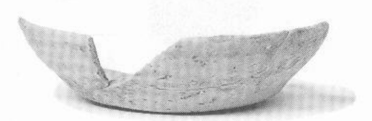

398

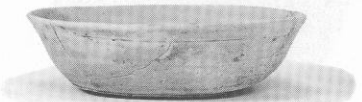

399

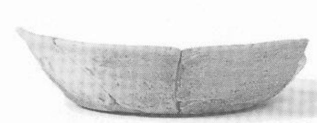

400

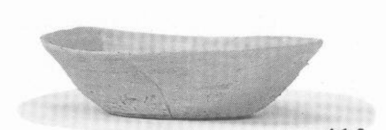

404

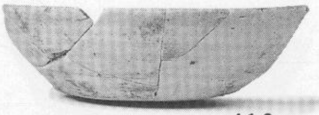

406


407

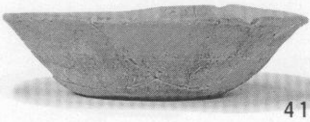

408


409

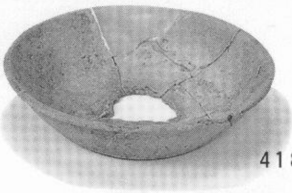
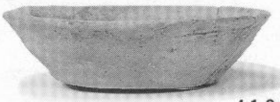
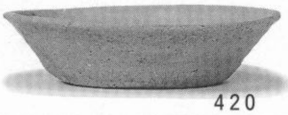

410


411

412

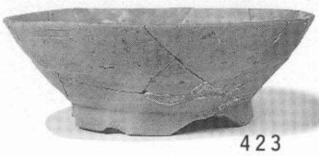
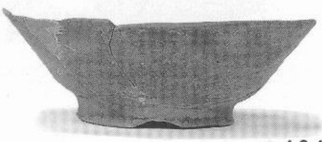
413

414

415

416

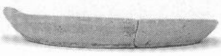
417

418

419

420

421

422

423

424

425.㊽

426

427

430

431

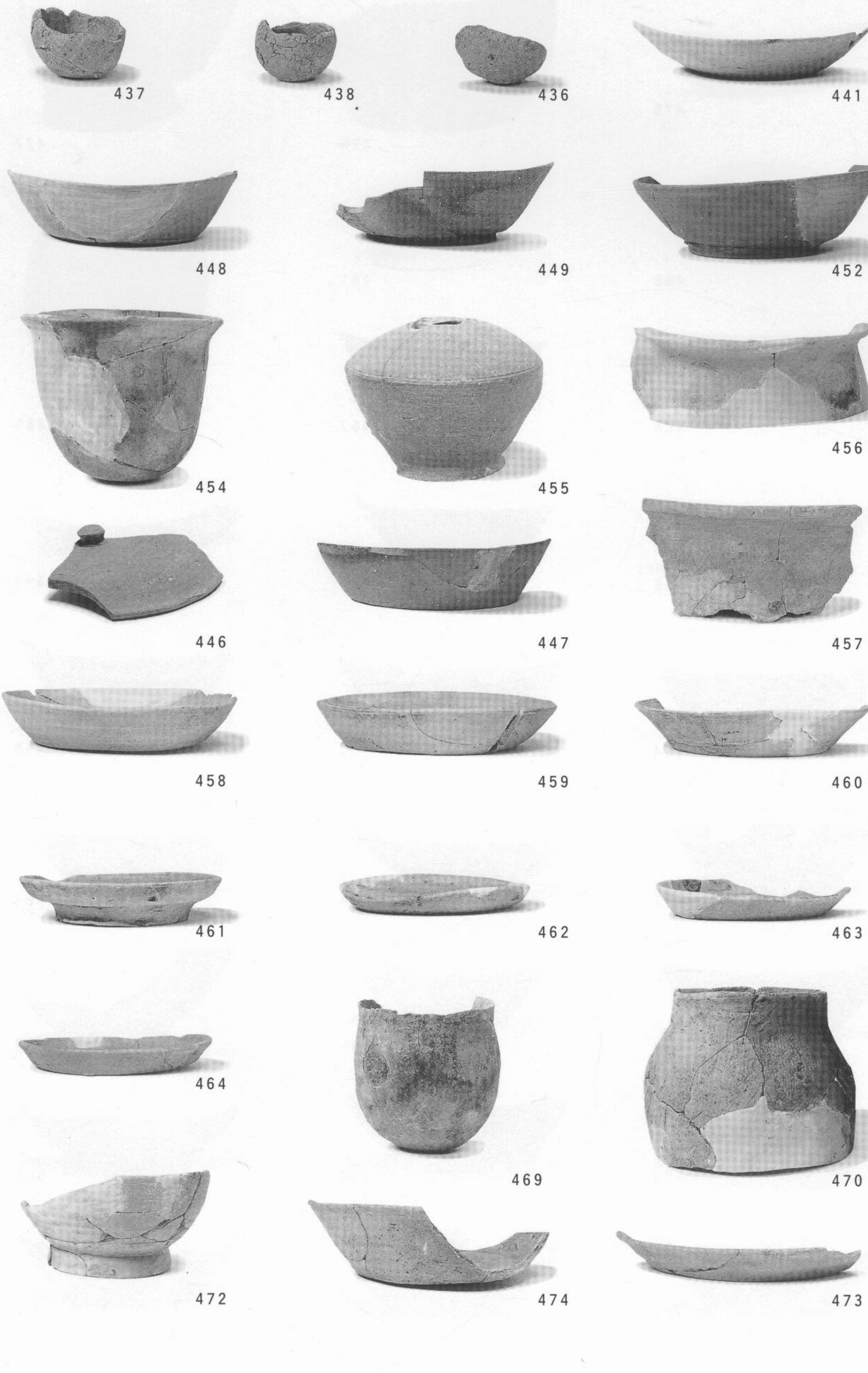
432

433

434

435

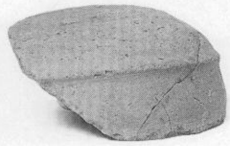
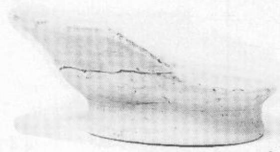
439


437
438
436
441
448
449
452
454
455
456
446
447
457
458
459
460
461
462
463
464
469
470
472
474
473

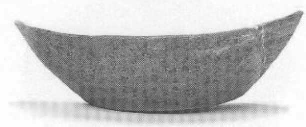
遺物写真（18）


475

476

477

480

481

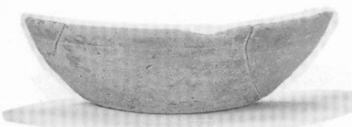
485

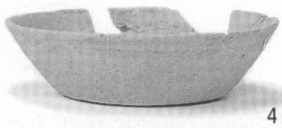
486

487

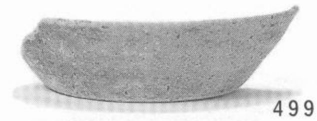
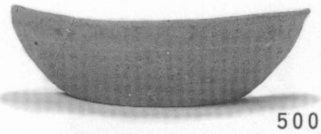
488

489

493

494

495

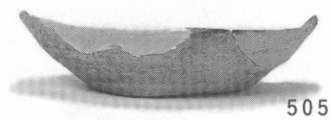
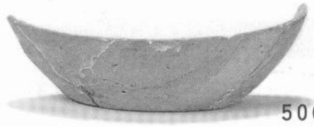
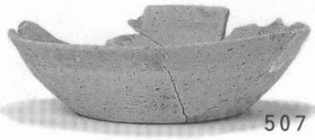
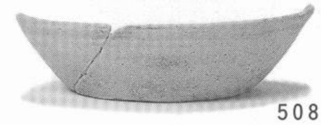
496

497

498

499

500

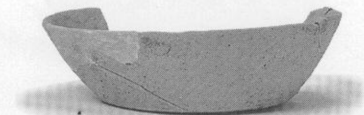
501

502

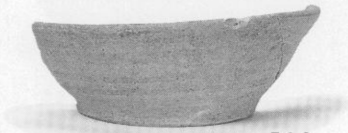
503

504

505

506

507

508


509


510


511


512


513


514


519


520


521


522


515

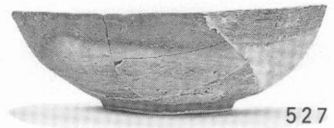

517

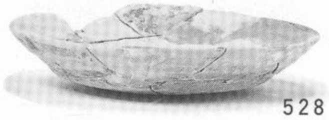

523

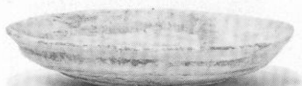

524


525


526


527


528


529


530


531

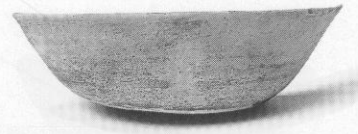

532

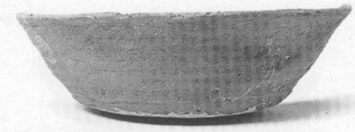

533


534

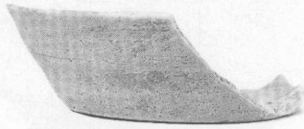
PL.37

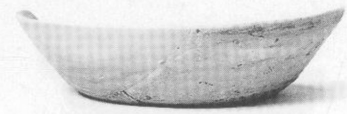

535


536


537

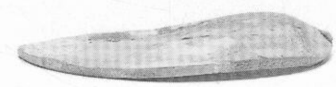

538

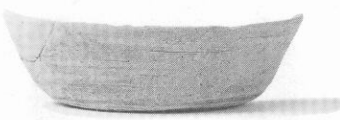

542

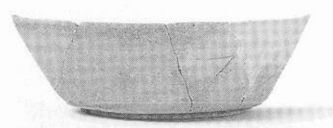

540


543

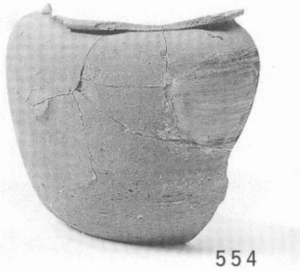

544

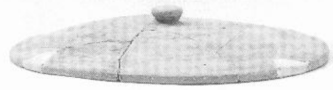

545


546

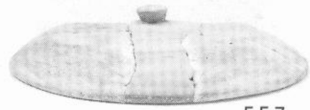

547

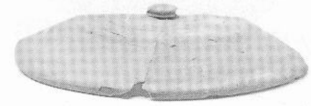

553


554


555


556


557

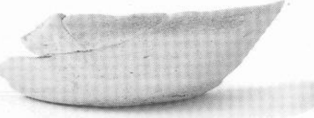

558


559


560


561


562

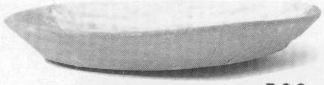

563

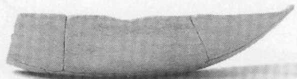

564


565


566


567

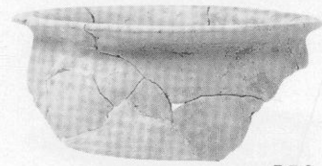

568

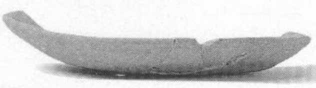

569

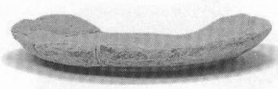

570


571


572


573


574


575


576


577


578

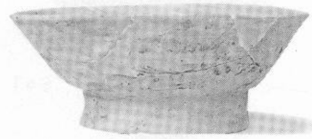

579


580


581

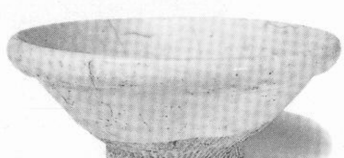

582


583


584


586


590

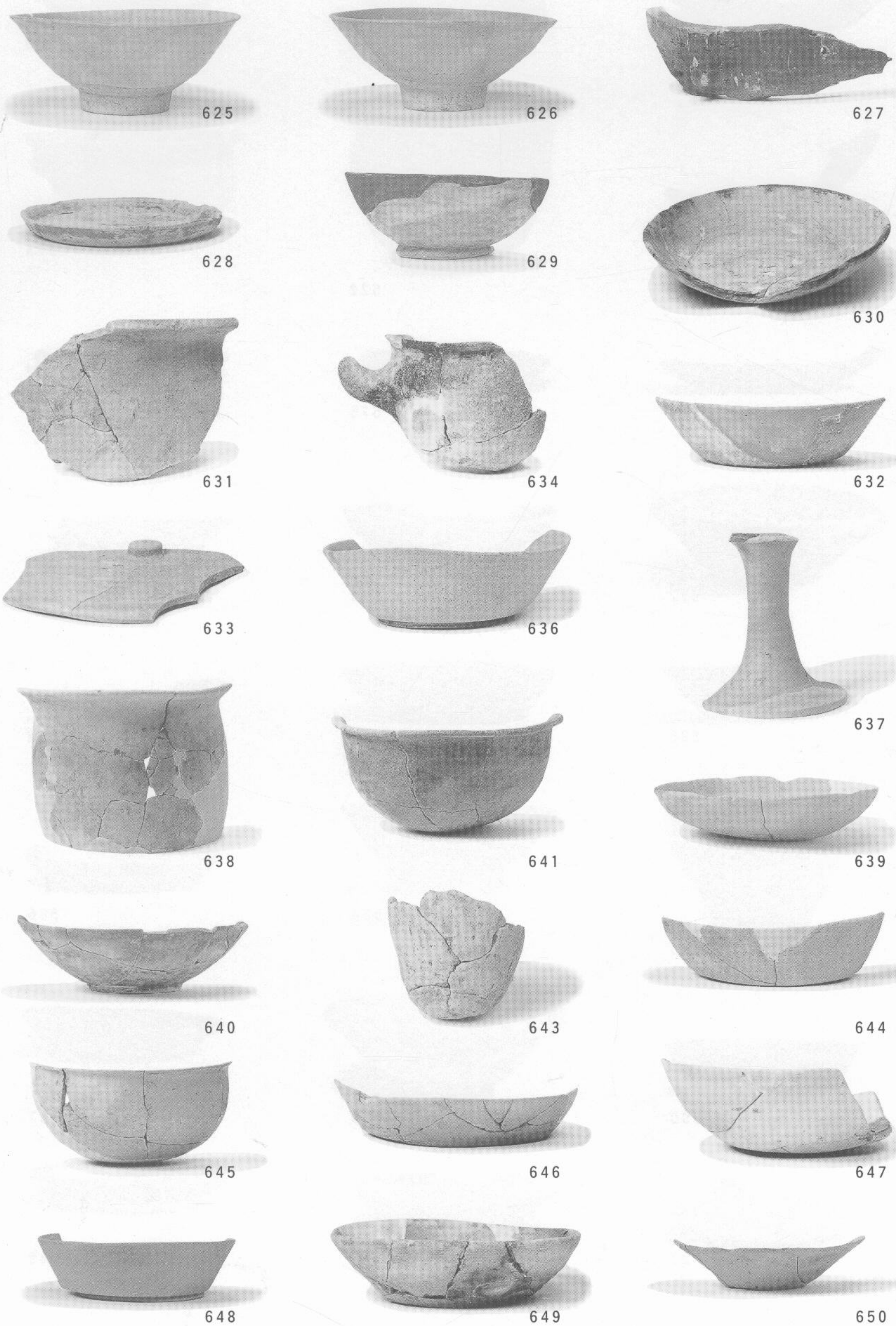

589


587

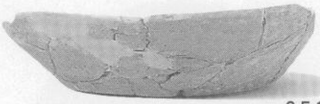

623

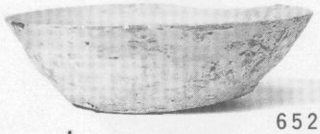

624


588



625 626 627
628 629 630
631 634 632
633 636 637
638 641 639
640 643 644
645 646 647
648 649 650


651


652


654

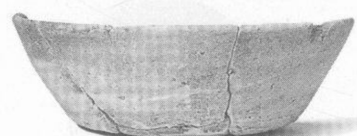

655


657


656


658


659

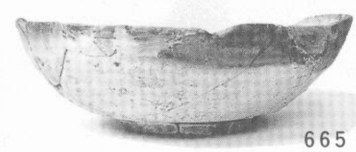

661


660


662


663


664


665


669

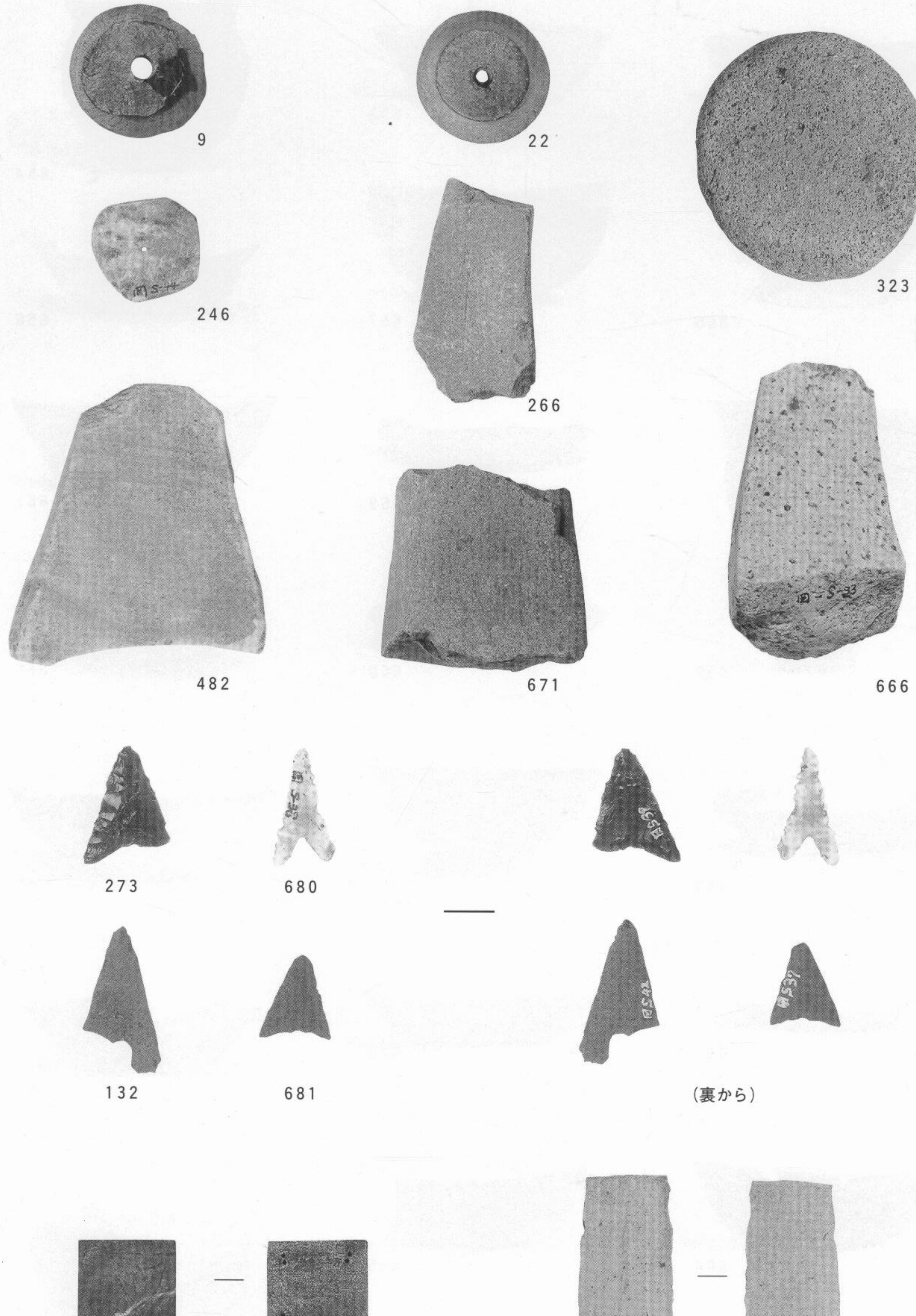

670


683

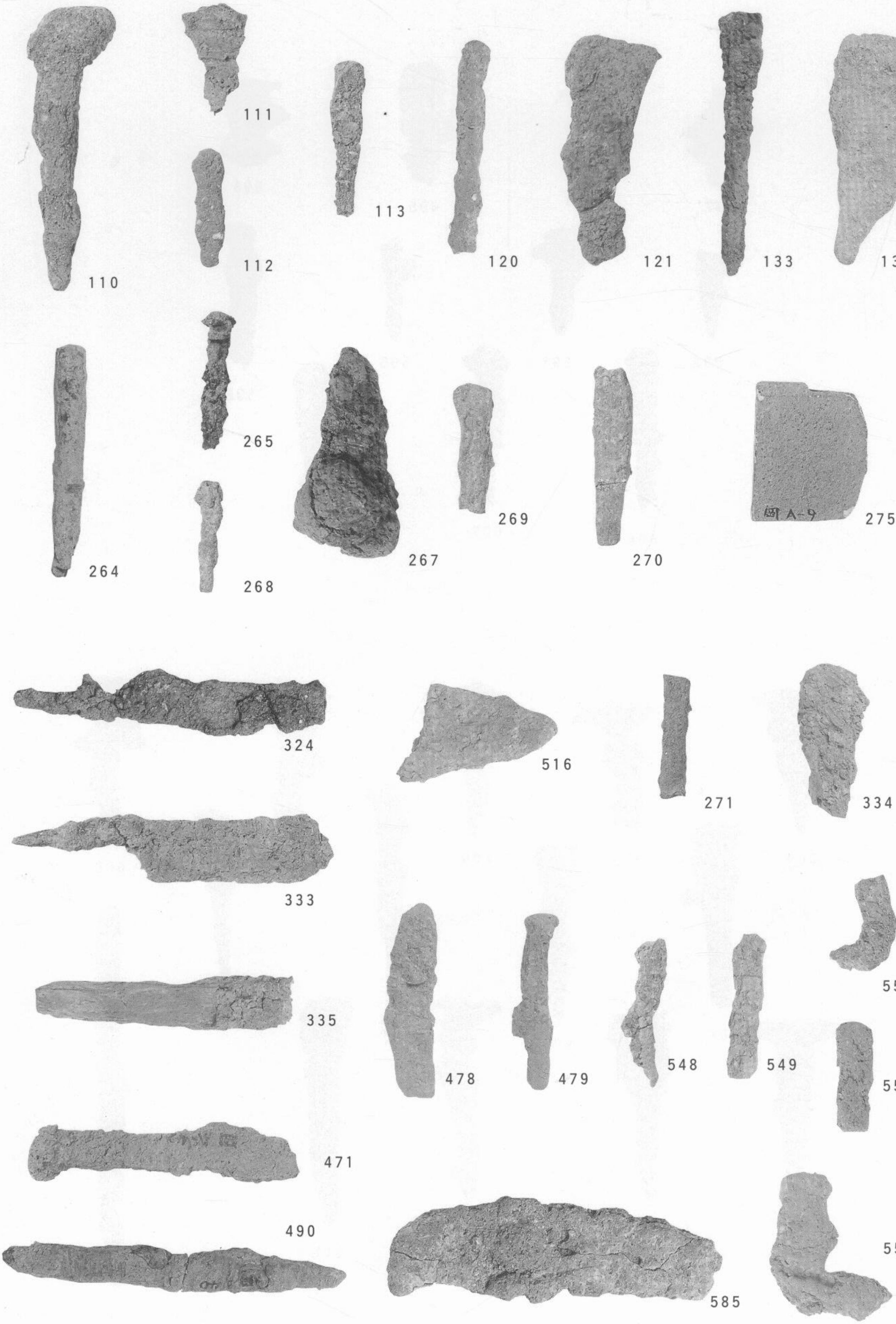

684


685

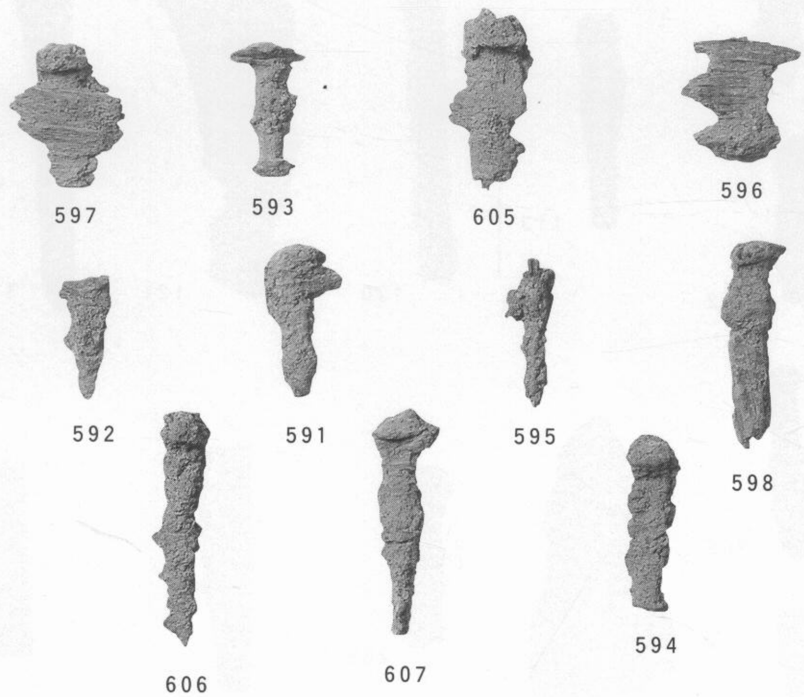

687

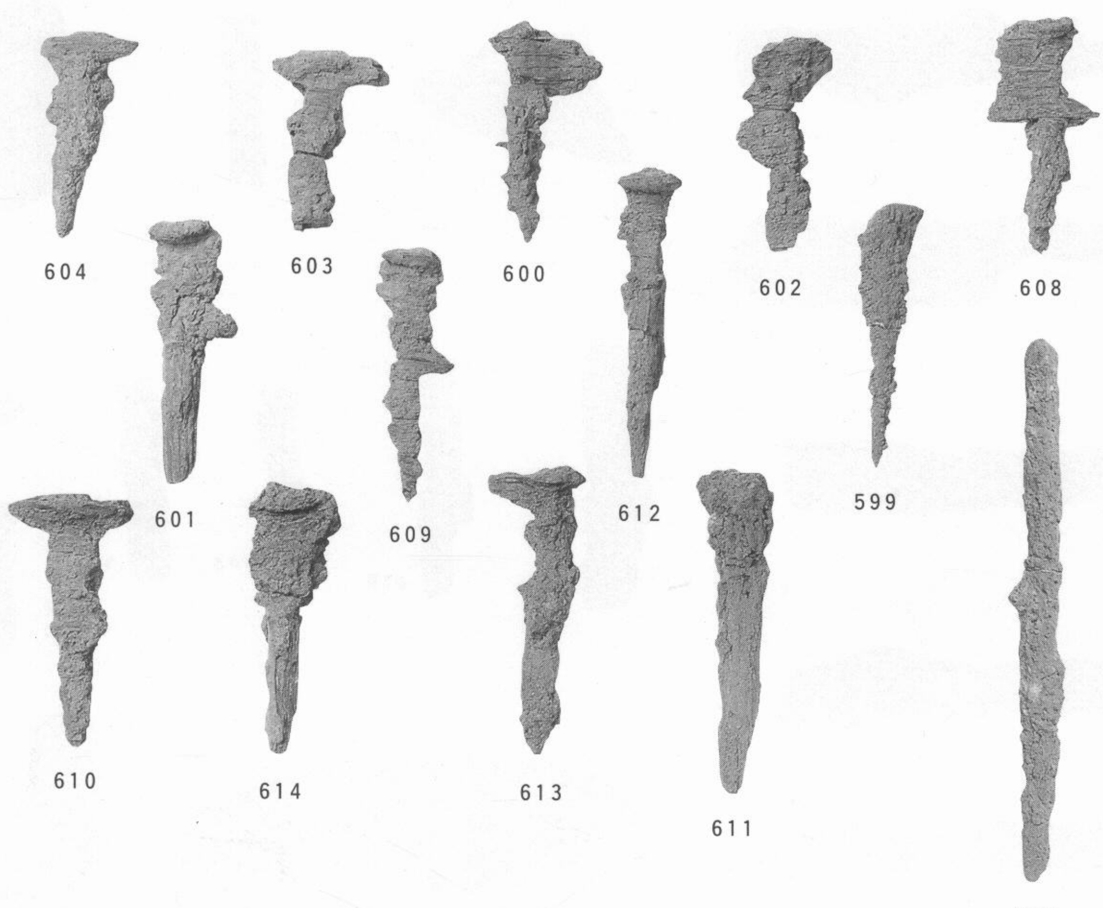


石製品写真

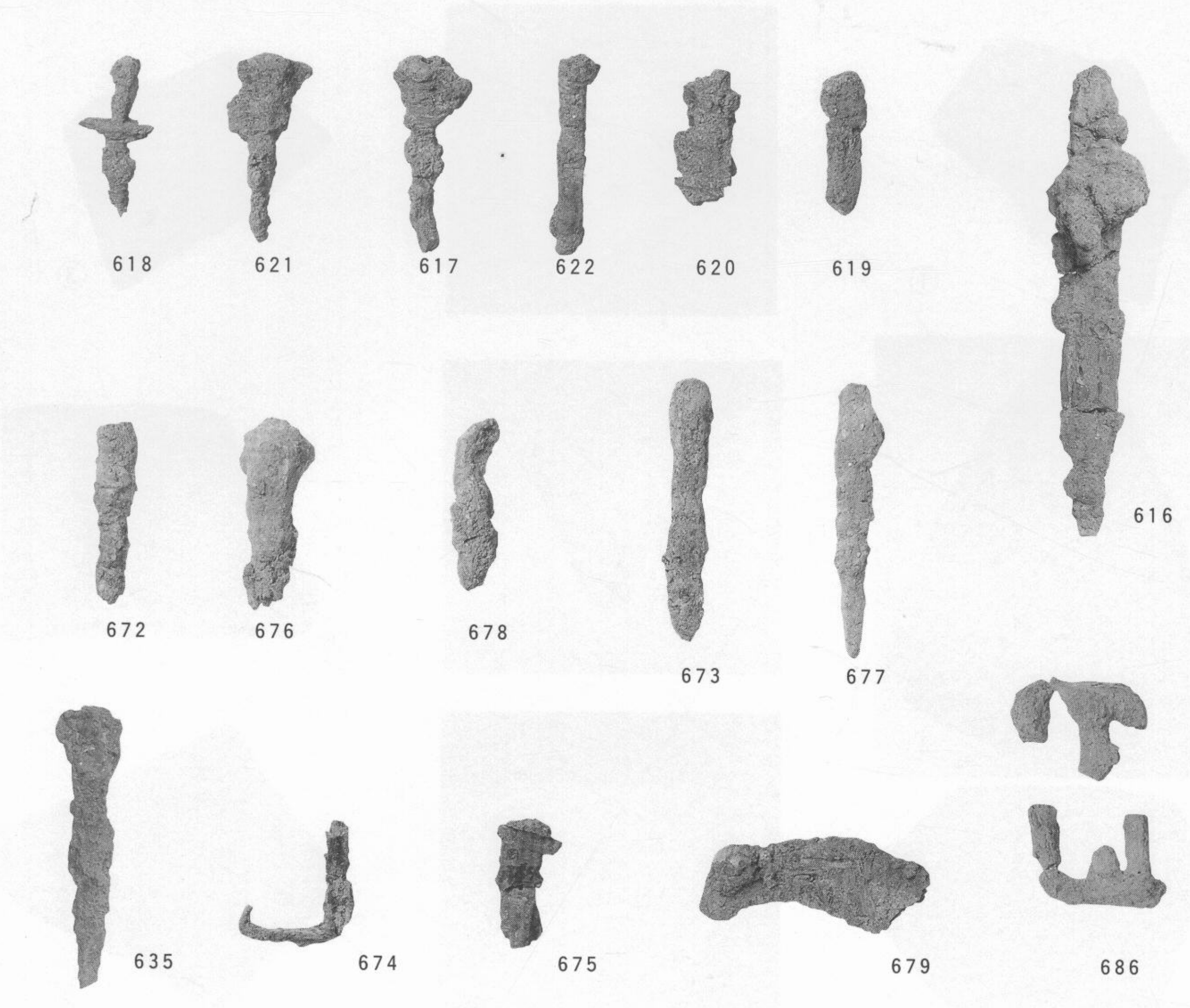

110
111
112
113
120
121
133
134
264
265
268
267
269
270
275
324
516
271
334
333
478
479
548
549
550
552
335
471
490
585
551

鉄製品写真（1）

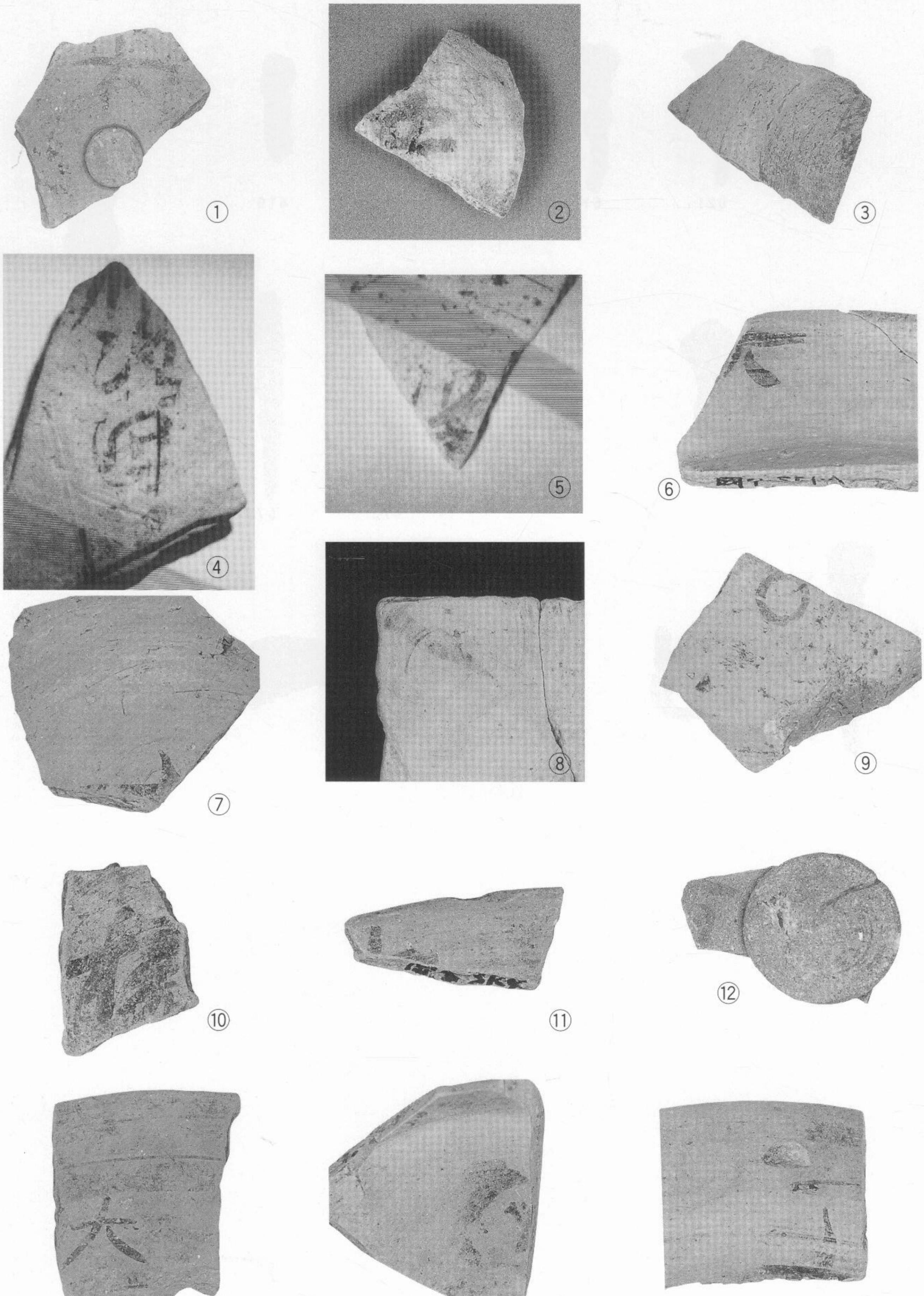

597
593
605
596
592
591
595
598
606
607
594


604
603
600
602
608
601
609
612
599
610
614
613
611
615

鉄製品写真（2）

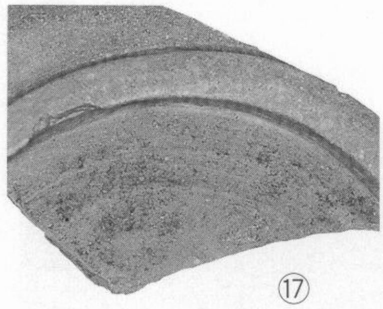

618
621
617
622
620
619
616
672
676
678
673
677
635
674
675
679
686

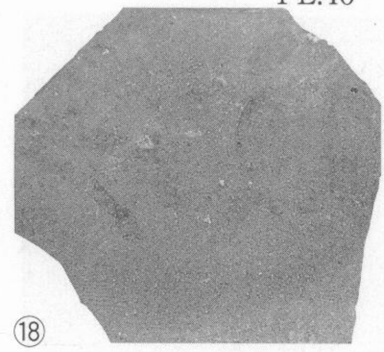
鉄製品写真（3）

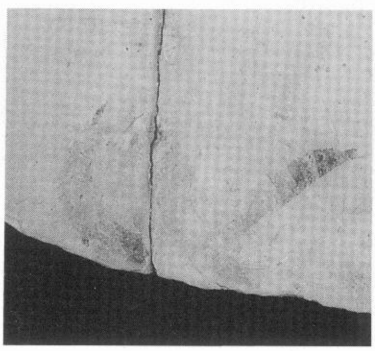


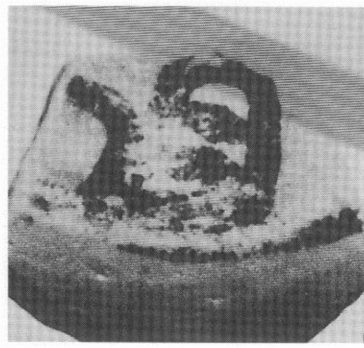
墨書文字写真（1）

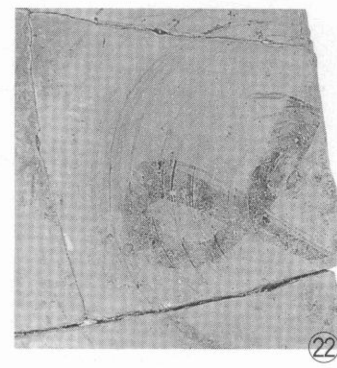

⑯


⑰

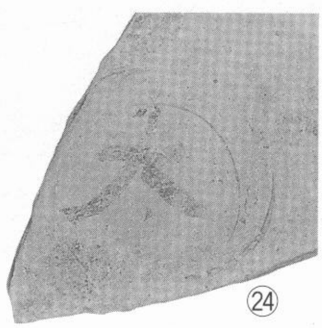

⑱

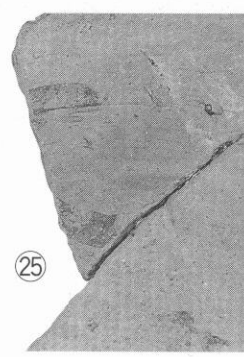

⑲

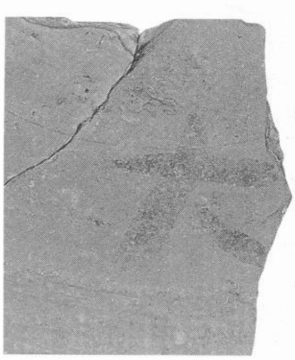

㉑

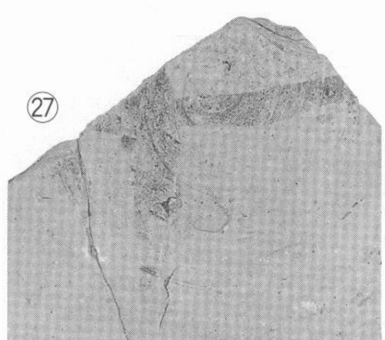

㉒

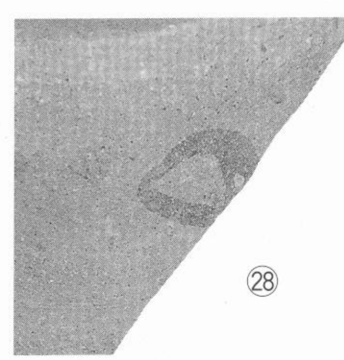

㉓

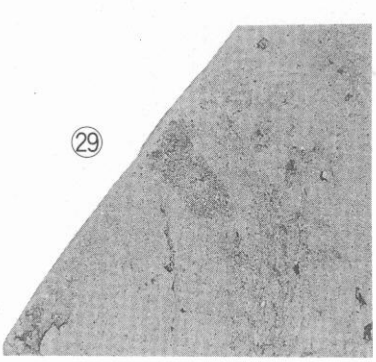

㉔

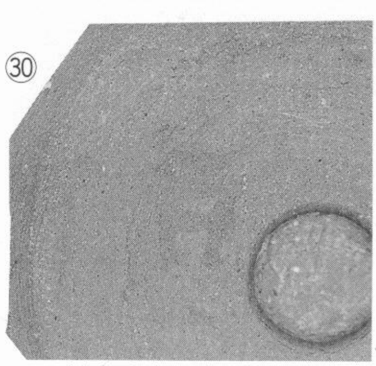

㉕

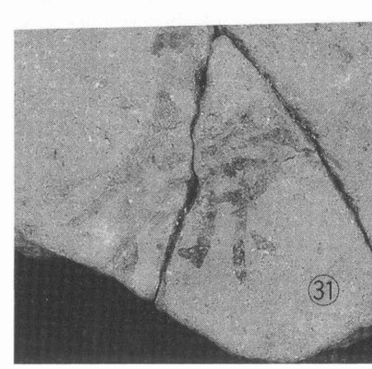

㉖


㉗

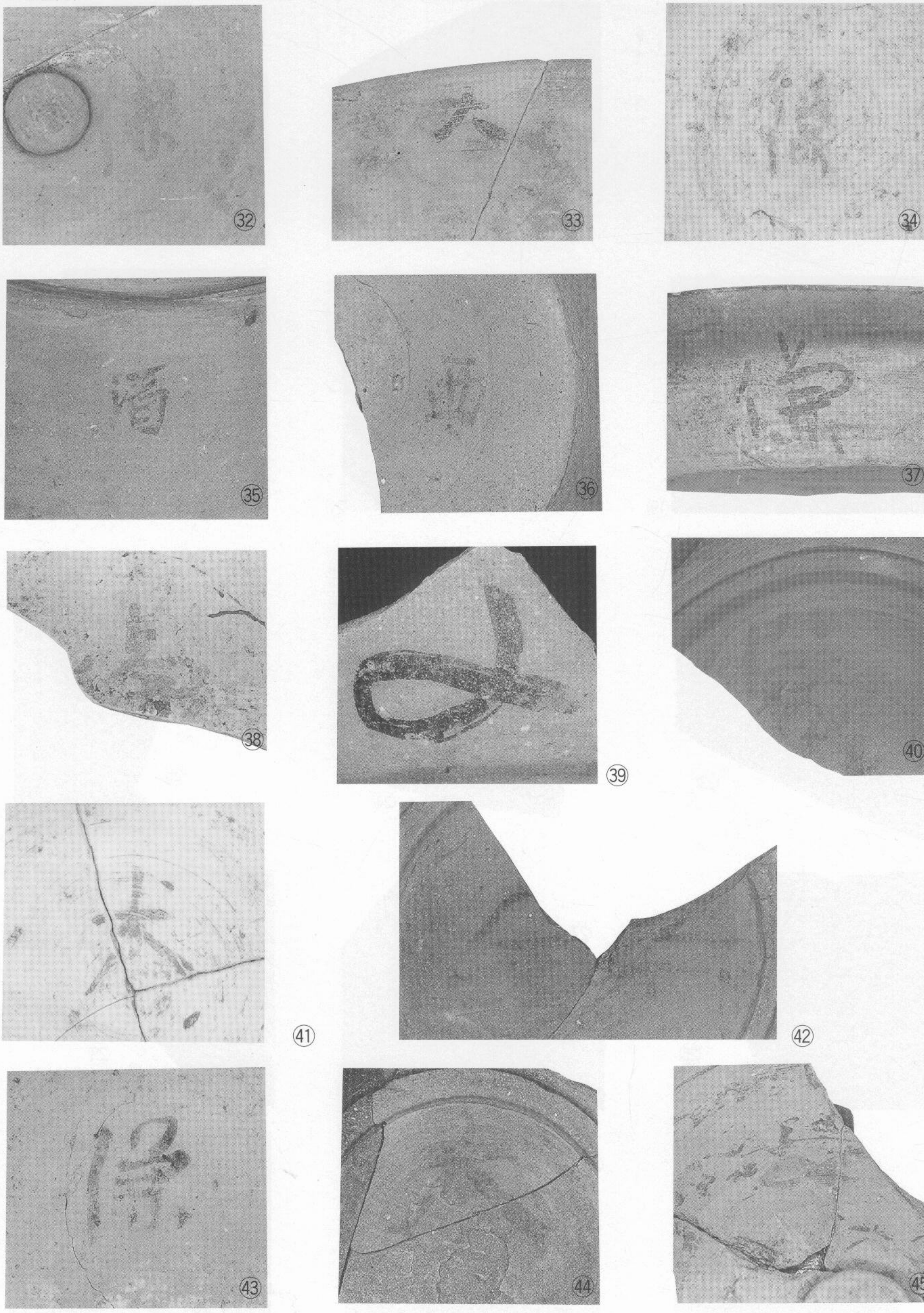

㉘


㉙


㉚

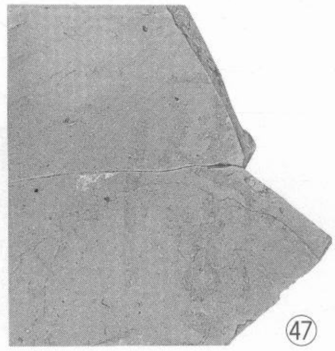

㉛

墨書文字写真（2）

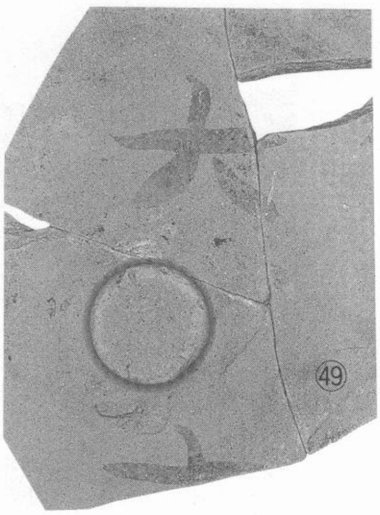


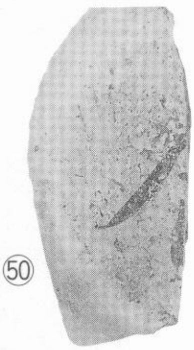
墨書文字写真（3）

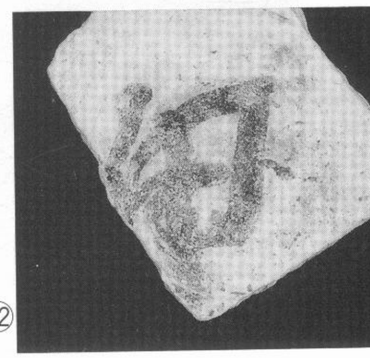

㊻


㊼

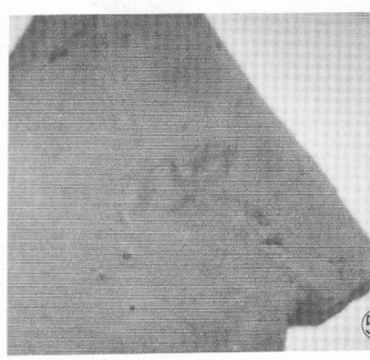

㊽

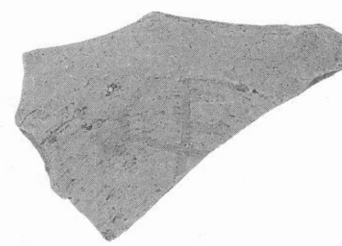

㊾

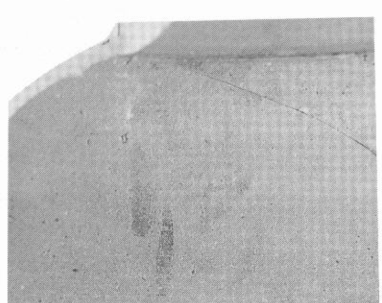

㊿

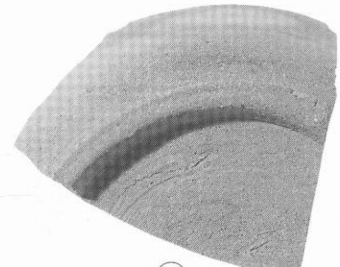

52


53

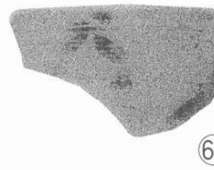

54

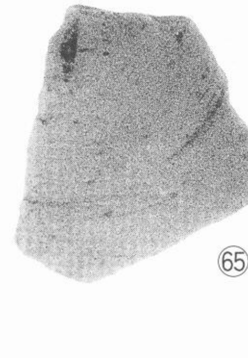

56


57

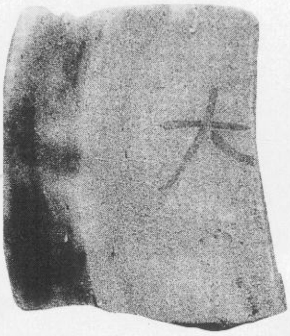

58


59

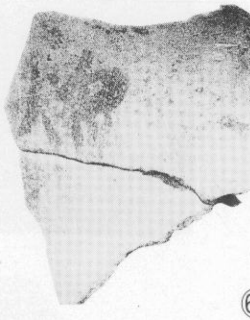

60


65

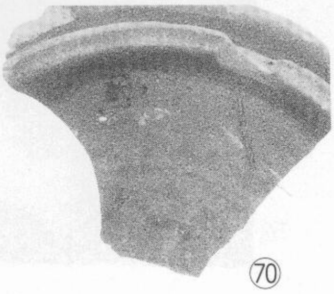
墨書文字写真（4）

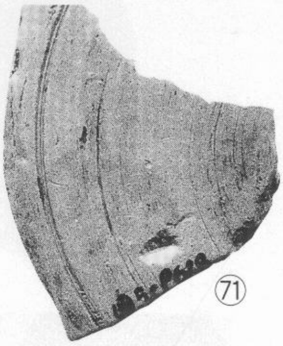


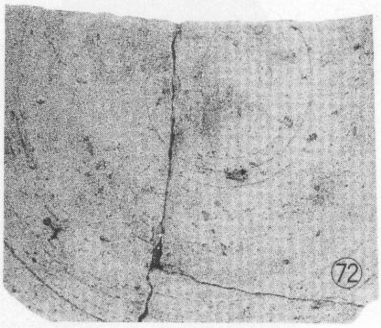
66


67

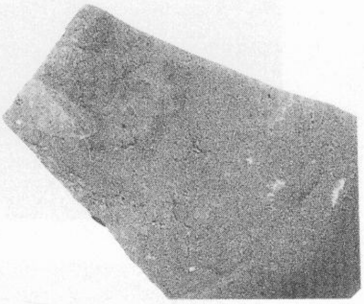

69

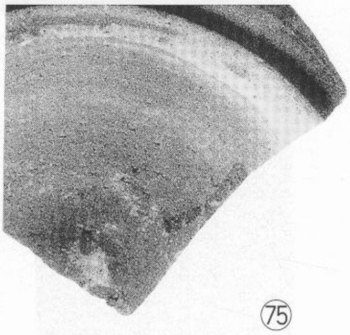

70

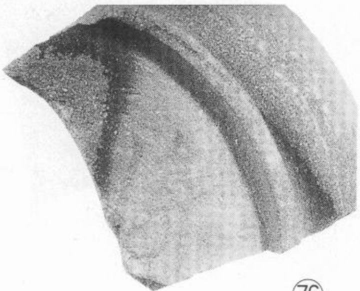

71

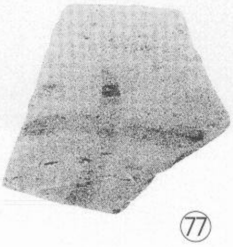

72

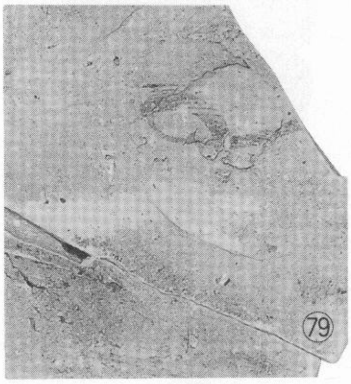

73


74


75


76


77


79

墨書文字写真（5）

報告書抄録

フリガナ	オクダチクイセキグンⅡ －Ⅰクノチョウサー
書名	岡田地区遺跡群Ⅱ －Ⅰ区の調査－
副書名	筑紫野市文化財調査報告書
巻次	第56集
シリーズ名	岡田地区遺跡群
シリーズ番号	Ⅱ
編著者名	小鹿野 亮
編集機関	筑紫野市教育委員会
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL092-923-1111(代)
発行年月日	西暦 1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (° ′ ″)	東経 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岡田地区(おかだちく)遺跡群(いせきぐん)	福岡県筑紫野市(ふくおかけんちくしのし)大字岡田(おおあざおかだ)425-2 ほか	402176	170317	33° 28′ 04″	130° 33′ 32″	19940705 ～ 19970630	約118,000	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡田地区遺跡群	道路 官衙	奈良 ～ 平安	柵 6 掘立柱建物 48 竪穴住居 12 溝 241 井戸 4 道路(西海道豊後ルート) 1 土坑 241 墓 6 性格不明遺構(その他) 12 ピット 3202	弥生土器 土師器 須恵器 緑釉陶器 黒色土器 瓦器 瓦・塼 白磁 石帯(巡方) (ベンガラが付着した土師器・墨書土器)	官道の両側に8C中～9C初の掘立柱建物群が築かれ、柵列に囲まれた6つのブロックが形成される。臨時的に設置された関剗的な施設の可能性が考えられる。

岡田地区遺跡群Ⅱ
－Ⅰ区の調査－

筑紫野市文化財調査報告書
第56集

発行 筑紫野市教育委員会
〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒810-0001 福岡市中央区天神5-4-16城戸ビル3F

付図1　遺構配置図（全体図）（S1/500）

0　20　40m

※丸数字は柵列群の座標点を示す。

付図2　遺構配置図その1（S1/200）

付図3　遺構配置図その2(S1/200)

付図4　遺構配置図その3(S1/200)

付図5　遺構配置図その4（S1/200）

付図6　遺構配置図その5（S1/200）

付図7　遺構配置図その6(拡張区)(S1/200)